

## 論題 『地域社会における日韓交流の考古学的研究』

### 目 次

#### 序 章

第1節	研究の目的	1
第2節	研究の現状と課題	1
第3節	本研究によって解決すべき問題の所在	10
第4節	研究の方法	11
第5節	用語の整理	11

#### 第1章 「弥生（系）集落」の成立と展開

第1節	（本章の課題）弥生（系）集落とは何か？	13
第2節	北部九州における弥生（系）集落の成立と展開	13
第3節	三国丘陵における弥生（系）集落の成立と展開	17

#### 第2章 弥生時代の生業と集団像

第1節	（本章の課題）弥生時代の植物利用～現状と課題～	41
第2節	三国丘陵における弥生時代の開発と森林資源	53
第3節	初期灌漑技術の発展過程	66

#### 第3章 「地域社会」とネットワーク形成

第1節	（本章の課題）「集団と地域社会」の範囲・構造とは	89
第2節	「地域社会」の形成と展開～環濠と集団～	93
第3節	弥生時代剥片石器石材の動向～北部九州を中心として～	122
第4節	今山系石斧の動向からみた地域間ネットワーク	136

## 第4章 日本列島と韓半島の交流 ～弥生時代前半期を中心として～

第1節	日韓における土器の交流をはかる	145
第2節	環有明海地域における弥生時代の日韓交流 ～交流拠点としての環有明海地域の評価～	153
第3節	金海会峴里貝塚出土甕棺の調査	165
第4節	日韓青銅斧の研究～日本青銅器時代の提唱～	175

## 第5章 「地域社会」における日韓交流

第1節	無文土器系土器と集団～三国丘陵における土器生産からみた日韓交流～	201
第2節	「渡来人」の住居～北部九州における粘土帯土器文化期の住居形態～	222

## 第6章 日韓交流モデルと弥生社会の変化

第1節	日韓交流モデルの構築	235
第2節	日韓の環濠と社会～交流拠点と拠点環濠集落へ～	251

終章	日韓交流の階梯～日韓交流から日韓交渉へ～	295
----	----------------------	-----

参考文献	初出一覧	299
------	------	-----

あとがき



# 序 章 研究の目的と方法

## 第1節 研究の目的

北部九州は朝鮮半島や中国大陸にも近く、水稻農耕の導入にあたっても重要な位置を占める。北部九州は地理的、文化的要因によって、対馬海峡を臨んで大陸文化の窓口となった玄界灘沿岸地域、その南側には九州随一の大河、筑後川流域に広がる筑紫平野を要する有明海沿岸地域、東側には現在よりも深く内湾が入り込んでいた遠賀川流域地域、さらに瀬戸内に面し中・四国との文化交流がうかがえる周防灘沿岸地域などがあり、それぞれの地域における水稻農耕の導入の姿やその後の社会の展開が窺える。

弥生時代の日韓交流は、これまで、韓半島の無文土器やその影響を受けた土器、韓半島からもたらされた金属器の日本列

島出土例から総体的に描かれてきた。しかし、それらが出土する地域は、弥生時代社会のなかでも極めて限定されることがわかり、その地域の特質を明らかにする必要がある。

まず、地域社会における弥生集落と日韓交流の具体的検討から、弥生時代における各地域での多様な日韓交流とその集団像を明らかにする。次に、日韓交流がもたらした地域社会の変化を明らかにして、日韓交流拠点形成と弥生社会の拠点集落成立の関係性や質的な相違点を導き出し、日韓交流の階梯と弥生社会発展の関係性を考察する。そこに、日韓双方向からの視点を欠いてはいけない（第1図）。

論文の中心となるフィールドは北部九州、そして三国丘陵である。三国丘陵では 1970 年代以降、大規模宅地造成により、広大な面積の発掘が行われその成果も広く知られている。蓄積された資料の再発掘を行い、新しい分析視角によって見直すことができるのかを実践する。より地域に即した、集団を可視化することのできる分析方法によって新たな日韓交流像を構築する。

縄文時代		弥 生 時 代									
		大 形 成 人 甕 棺									
					伯玄式	金海式	城ノ越式	汲田式	須玖式	立岩式	
晩期		早期		前 期			中 期				
広田式	黒川式	山ノ寺式	夜臼式	板付Ⅰ式	板付Ⅱ式			城ノ越式	須玖Ⅰ式	須玖Ⅱ式	
					A	B	C				
(漢沙里式) (突帯文)	可楽里式	休岩里式	松菊里式		水石里式			勸島式	(前半)		
早期	前期	中 期			後 期			前期			
無 文 土 器 時 代									原三国時代		
		1 期		2 期	3 期			4 期			
		朝鮮の青銅器編年									

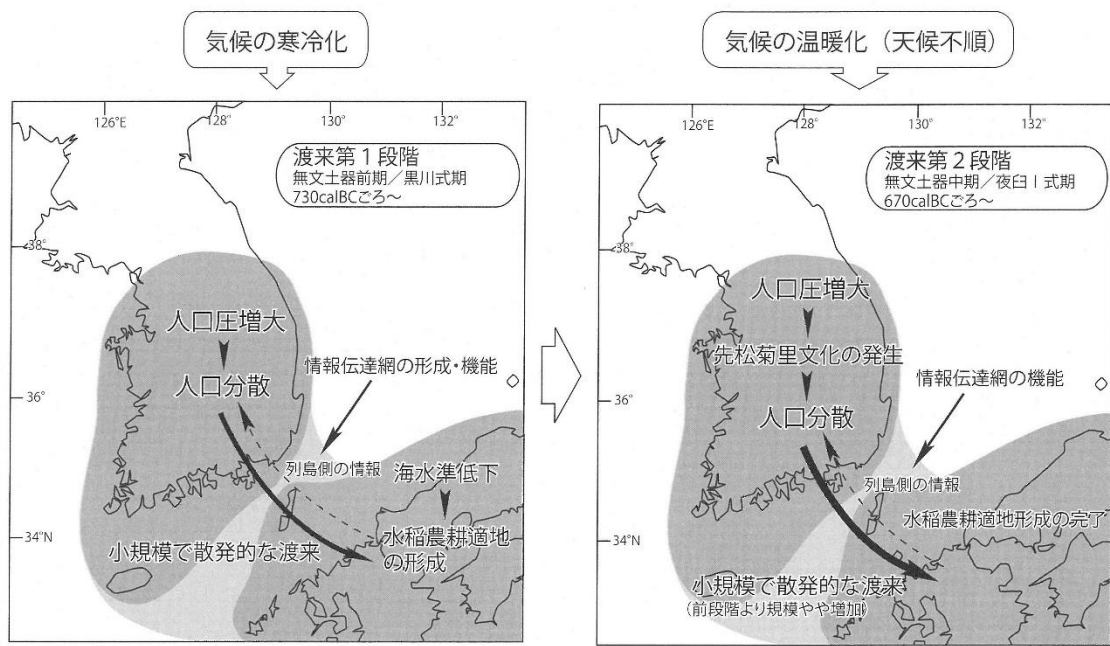
第 1 図 韓半島南部と列島の併行関係（武末 2004）

## 第2節 研究の現状と課題

### 1. 水稻農耕以前の日韓交流（旧石器時代から弥生時代早期まで）

日本列島は、旧石器時代には大陸と地続きであり、日韓両地域に旧石器時代後期の広範な剥片尖頭器の分布が認められる。1 万 3 千年前以降になると温暖化が進み対馬海峡が出現し、船を利用した交流のかたちへ変化する。

つづく縄文時代では、対馬島で韓国有文土器の分布が認められる。対馬市腰高遺跡では、韓半島由来の土器が主体であり、有文土器人の居住地があったと考えられる。その立地は湾奥の平坦地ではなく、湾口付近の狭い谷部であり、縄文人との住み分けや一時滞在が繰



第2図 渡来の第1・2段階（端野 2018）

り返された結果とみられている（武末 2008）。これらの有文土器は九州島にはほとんどなく、変容した有文系土器がみられる。西唐津式土器がその代表例で櫛目文土器の南下で押し出された嶺南地域の刺突・押引文土器の類似品である。これが九州在地の轟式土器を受け継ぎ、櫛目文土器の文様も取り込んで曽畑式土器が成立する。一方、韓国嶺南地域では東三洞貝塚で前期から中期、後期にわたる縄文土器が多く出土している。搬入品、忠実再現品はここだけで、他は変容した縄文系土器が沿岸部でみられる。したがって、東三洞貝塚は有文時代に縄文人との交流の窓口であった。有文土器文化と縄文文化の境界は大韓海峡にあり、両地域の人々は東三洞貝塚および対馬を窓口として接触し、相互対等な交流であった。縄文時代の農耕もこの交流とかわるものがあるだろう。

縄文時代から弥生時代にかけて、気候は大小の変動を繰り返して植生が変化し、人間活動が対応する。また、気候の寒冷化は列島への農耕伝播と関わりがあり（宮本 2009）、農耕への傾倒、新たな土地開発が行われ、自然環境に対して大きな影響を及ぼすようになる。

北部九州における遺跡と砂丘形成期の検証から寒冷期を推定する研究では、黒川式～夜白Ⅰ式期の砂丘上クロスナ（植物の腐食土層）の形成は寒冷化に伴う海退減少と位置づけられた（甲元 2008）。炭素 14 年代の校正曲線から窺える寒冷期と砂丘形成時期を結びつけた田中良之は、縄文晩期後葉／弥生早期（夜白Ⅰ式期）の開始年代は紀元前 700 年以降とした（田中 2011）。端野晋平は夜白Ⅰ式には糸島市新町遺跡の立地から砂丘安定期に入るので、校正曲線からうかがえる寒冷期から温暖期への変化を夜白Ⅰ式の始まり、670calBC とみた（端野 2016）。縄文時代晩期から弥生時代にかけては、こうした幾度かの寒冷期がひとつの契機となり半島南部から渡来民が北部九州へ移り水稻農耕をもたらし、文化変容が行われた（第2図）。

弥生時代における韓半島からの渡来については、1度に行われたものではなく、数段階にわたり行われてきた。端野は水稻農耕伝播における渡来について、渡来第1段階：水稻

農耕は試行的で一般化しなかったものの、孔列土器や石庖丁、赤色塗彩浅鉢などが半島南部との交流と渡来人の存在を暗示する無文土器前期後半／縄文晩期中葉（黒川式期）、渡来第2段階：水田をはじめ、農耕具、各種の工具、磨製石鏃・石剣、壺型土器、松菊里型住居、支石墓などの様々な文化要素が体系的に出現し、水稻農耕が本格化する無文土器中期前半／縄文晩期後葉（夜臼式期）に区分した（端野 2018）。韓国無文土器文化全体が体系として一気に伝わったのではなく、段階的選択的に導入されている。

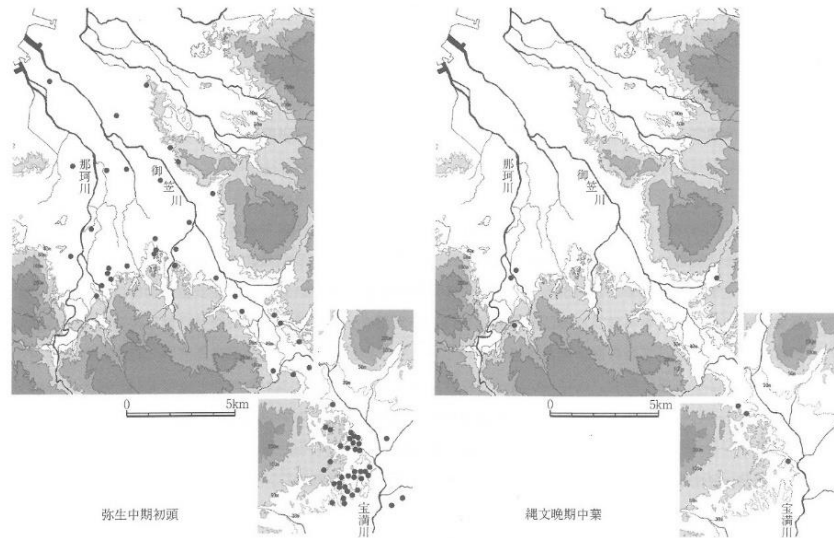
縄文土器から弥生土器への変化には韓国無文土器が大きくかかわっており、粘土帯の積み上げがそれまでの内傾接合から無文土器に見られる外形接合へと変化することからも渡来人の存在が窺える（家根 1993）。土器における外形接手法は、完成した土器の外見にはあらわれない内在的な部分であり、搬入品の模倣ではなく、実際に土器づくりに渡来人が存在していることの証左である。これは、在来文化の内傾接合と異なり、やがて受け入れられ数量的にも優勢化していくので、渡来人の数が文化的に（しかも女性）の数がノイズ的に無視されるほど少数ではなかった。しかし、これらで作られたのは黒川式や夜臼式の縄文土器であり、在来文化の規範のもとでマイナーな形で要素のみを表現したものといえる。その場合、渡来人が黒川式土器や夜臼式土器を作ったのか、在来人が成形を取り入れて製作したのかも詳細にみていくことが将来的には必要となろう。したがって、渡来人を受け入れた当初は在来伝統と規制が健在であった。渡来人が持参し、また渡来後に種々の器物を製作したのであれば、韓国の無文土器文化の規範に沿って作られるはずである。また、渡来人が大集団であったばあい、彼らだけの集落、無文土器文化の遺物・遺構のみで構成される集落があるはずである。ところが、この時期には半島の無文土器文化だけで成り立った遺跡は皆無で、各集落で渡来人と在来人が共生した。江辻遺跡の集落構造でも、数条の溝で集落を囲む集落構造や松菊里型住居といった渡来系文化要素と縄文時代的な求心構造の集落配置や在来の縄文晩期土器の使用などが融合しており、両文化の融合が認められる。

渡来人がもたらした石鏃は墓に副葬するためのものだけで、実用の磨製石鏃は伝わっていない。つまり、そこには渡来人と縄文人の緊張関係はなく、渡来が平和的に行われた。このように、在来人側との摩擦を生じずに移住しえたことは渡来人側においてはそれ以前からの交流と移住を通じて移住先の情報を蓄積していたこと、在来者側には黒川式期を通じて流入・蓄積された稲作農耕とその文化への期待・憧憬が存在した。

九州地方では縄文時代後期後葉には遺跡数が増加、大規模集落が登場するが、玄界灘沿岸でも晩期中葉の黒川式期には、これまで中九州で指摘されたような遺跡数の減少が認められる。気候の寒冷化による、小規模散在的な集落分布、低湿地型貯蔵穴の復活等の環境への対応が指摘されている（宮地 2012）。そのなかで、玄界灘沿岸地域には大陸農耕文化を体系的に知る「渡来人」が小規模・散在的に移住し、縄文人との混血、および縄文文化の連続的・漸移的变化が進む（田中 2002）。その後、稲作の受容は各地域に進み、内陸部に位置する三国丘陵では少し遅れて板付Ⅰ式併行期には稲作を開始する（第3図）。田中良之は考古学と形質人類学の研究成果を整理して、「渡来に起因する文化変容は、在来文化に取ってかわる **displacement pattern** ではなく、渡来要素を在来伝統の規制下に取り込み、外来情報が蓄積されていくにつれシステムに動揺をきたし、ついには別のシステム

(弥生文化)へと変化する、というパターンであった」とした(田中 1991)。

北部九州における混血と文化変化の過程モデルを提示し、渡来の時期は高期末から晩期前半、少なくとも黒川式期には始まり、夜臼Ⅰ式期にまで継続、あるいは増加していたとする。朝鮮半島からは成年層を中心とした世



第3図 弥生時代の人口増加(田中・小澤 2001)

代が渡り、男女同数に近い性構成であったために混血効果が高かった可能性を指摘している。一方、文化規範を取り仕切るのは縄文人の熟年・老年層であり、在来文化の規範が優先されるため、渡来人とその混血の子供たちも在来文化の規範に沿って土器や石器を作る。このような渡来が散発的、かつ何世代にもわたった結果、文化変化が起こるとともに、渡来遺伝子が再生産され渡来的弥生人の形質形成が行われる(田中 2002)。

本論文では、日本列島で水田稲作に定着した段階の新たな日韓交流のあり方を考察する。

## 2. 無文土器と擬無文土器の研究

### (1) 土器の移動と変容の概念整理～粘土帯土器を中心に～

土器移動の背景には、それを携えた人の動きや集団間の接触が考えられるが、現象面的理解(移動形態や移動量など)とそれらの集団像・集団関係の復原については分けて考える必要があり、その上で両者を結び付ける操作と作業が要請される。加えてそれらの土器の変容過程を分析することも、製作者像(集団像)の観点から重要である。

これまで粘土帯土器(後期無文土器)と弥生土器の製作技法の違いについては多くの検討が行われ、日本列島では「朝鮮系無文土器」「擬朝鮮系無文土器」といった名称で、その変容過程が考察されてきた(後藤 1979・片岡 1993 ほか)(第1表)。1974年、福岡市諸岡遺跡の発掘調査で無文土器の出土がはじめて確認され、後藤直により、出土状況や無文土器の特徴が詳細に報告された(後藤・横山 1975)。有明海沿岸地域の小城市土生遺跡でも、福岡市諸岡遺跡に続く早い段階で無文土器の出土が注目され、木下巧によって、土生第Ⅰ類・第Ⅱ類無文土器に分類され、無文土器から弥生土器との折衷にいたる変化が示された(木下 1977)。諸岡遺跡の発掘調査報告のなかで列島出土無文土器の設定が行われ、土生遺跡では無文土器と弥生土器の折衷様式が設定されたと位置づけることが出来る。

列島出土の無文土器関連資料の捉え方は、後藤によって整理された[後藤 1979・1987]。それによれば、(1)製作技法、形態が朝鮮半島南部の「後期」無文土器と同様である「朝鮮系無文土器」(2)部分的形状が無文土器に似ていたり、無文土器の形態が崩れて弥生土

第1表 無文土器に関する用語の整理

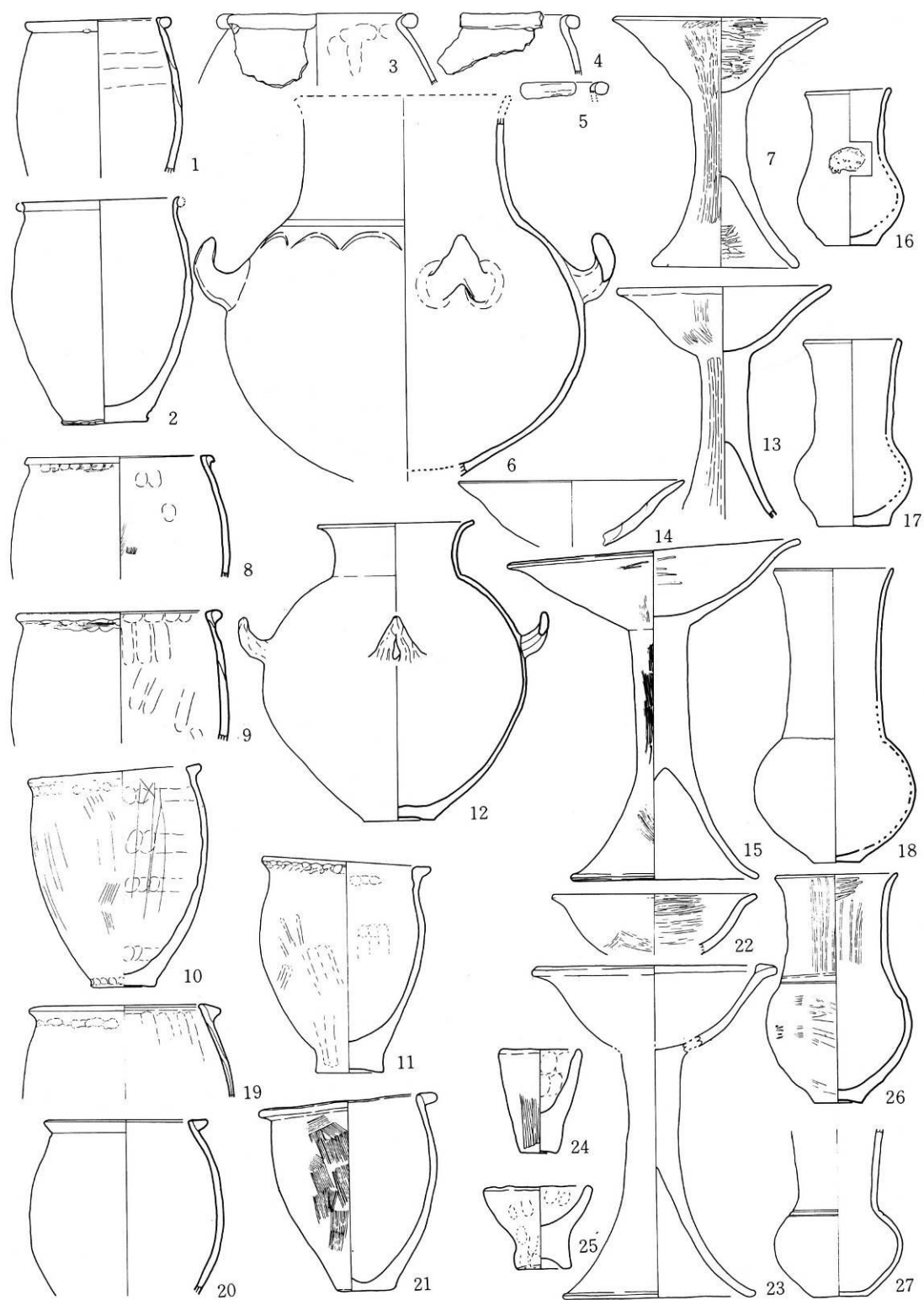
朝鮮半島南部		日本出土	
(後期)無文土器	粘土帯土器	朝鮮系無文土器	擬朝鮮系無文土器
	円形: 水石里式	(後藤1979・片岡1990)	(後藤1979・片岡1990)
	三角形: 勒島式	* 無文土器系土器(後藤1987)	
		朝鮮系無文土器・擬朝鮮系無文土器・関連性のないもの	
* 本稿では、「無文土器系土器」「無文土器」「擬無文土器」 「円形/擬円形、三角形/擬三角形 粘土帯土器」			

器に近くなったり、弥生土器とは形態が異なるが無文土器とはみなしがたいなどの「擬朝鮮系無文土器」とに区別される[後藤 1979]。その後、関連資料の増加に伴い、総体に対して「(後期)無文土器系土器」という新しい用語を用い、甕の口縁部粘土帯の取り付けを基準に分類し、(a) 無文土器直系の土器と(b) 無文土器直系土器が西日本で多少変化したり、弥生土器の要素を加えられたもの、(c) 無文土器とは無関係と考えられるものの3者に再区分を行った(後藤 1987)。

それらを踏まえ、片岡宏二は学史的意義を尊重し、「朝鮮系無文土器」と「擬朝鮮系無文土器」を理論的に再整理した(片岡 1990)。前者の「朝鮮系無文土器」を①形態的・技術的に朝鮮半島で無文土器と呼ばれる一群の土器と製作技術上差のない土器が、②搬入品として持ち込まれたり、あるいはそれを製作する技術を持った人によってその地で作られるなどして、③本来、その土器文化が主体となるべく朝鮮半島南部及びその周辺以外の場所で発見された土器と定義する。後者の「擬朝鮮系無文土器」を、①主に朝鮮系無文土器の製作者、あるいはその子孫などが多いとは思いますが、それに限らず、土器製作者によって、②朝鮮半島の無文土器、あるいは先の朝鮮系無文土器の技術的影響を受けて作られたものの、明らかに本来の無文土器とは異なった土器と定義した。これにより、「朝鮮系無文土器によく似た形態・製作技術を持ったものでも朝鮮系無文土器との接触がないもの」を、朝鮮系無文土器や擬朝鮮系無文土器から分別しようと意図する。ただし、片岡自身もこれらの定義は、「あくまでも理論上の問題であり、実際の出土土器をどれに分類するかは非常に難しい問題で、(中略)土器そのものの特徴や出土した遺跡の歴史的環境などを検討しながらじっくりと検討を重ねていかなければならない」とする。これは、すなわち、各地域における土器様式中のコンテキストから検証されるべき問題である。

各地域の土器様式中のコンテキストから朝鮮半島系土器を抽出する際の認定条件は(連続/不連続、安定/不安定、普遍/非普遍)といったキーワードをもとに武末純一により的確にまとめられた(武末 1991a)。

- A: それまでの在地の土器とは断絶した製作技術や形態を持ち、突如として出現すること。〈不連続〉
  - B: その地域の様式構造での位置は〈不安定〉で、少数・〈非普遍〉的であること。
  - C: 根源地とされる地域では土器が〈普遍〉的に存在して製作され、様式構造のなかで〈安定〉した位置を占めるとともに、製作技法や形態などが、それ以前から系統的にたどれること〈連続〉。
  - D: そのほかの遺構・遺物からも矛盾がないこと。
- しかし、これらの定義は、近畿例を検討した秋山浩三の言を借りれば、出土例の少な



第4図 佐賀平野の無文土器の弥生土器化(片岡 1993)

1～7土生Ⅰ式 8～18土生Ⅱ式 19～27土生Ⅲ式

1～13・19・22土生遺跡 14・27貴別当神社遺跡 15・21・23～25鍋島本村南遺跡  
16・17黒井遺跡 18自在遺跡 20・26切畑A遺跡(12が1/12 その他1/6)

い北部九州以外の地域では、「無文土器と無関係と考えられるもの」(後藤 1987) や「朝鮮系無文土器との接触がないもの」の峻別がより一層困難なことが多い、という厳然たる現実も存在する(秋山 2000)。

そのようななかで、片岡は土生遺跡を中心に佐賀平野出土無文土器系土器を土生Ⅰ～Ⅲ式に分類・整理し、系統的に朝鮮系無文土器の弥生土器化を整理した(片岡 1993)(第4図)。土生Ⅰ式を無文土器の系譜上にあり、もしくは日本の弥生土器の影響が入った初期の段階、土生Ⅱ式は土生遺跡で出土する擬無文土器のなかで最

も量が多く、またこの擬無文土器の製作技術が一遺跡にとどまらず周囲の遺跡に影響を与える段階、土生Ⅲ式は無文土器の製作技術が弥生土器のなかに埋没する直前の段階とした。

また、秋山氏は近畿例を中心に「無文土器系土器」の甕口縁部への粘土紐(帯)貼付方法を検討し、突帯文甕や瀬戸内型甕とは全く異なる技法原理で口縁部が作られている一群に対し、「擬朝鮮系無文土器」の可能性を指摘する方法を採り、一定の解決が図られた(秋山 2000)(第5図)。

これに加え、モーターハビット、ハビトゥスという概念を用いた勒島遺跡出土折衷土器の分析も興味深い。口縁部の接合方法、器壁の厚さや歪みなどと異なり、視覚的情報として、サイズやプロポーション、口縁部の大まかな形態などの諸属性は伝達が容易であり、また、調理方法(容量等)など機能的側面は、その集団内における規範を受けて、併せて模倣が促される事項であることが示された(中園 1993)。

さて、双方向的な土器移動・接触を考慮するならば、韓半島で出土する弥生系土器を「弥生土器」「擬弥生土器」、日本列島で出土する無文土器系土器を「無文土器」「擬無文土器」と呼称しておきたい。「擬弥生土器」「擬無文土器」は在地人が製作したもの／渡来人が製作したものという観点から細分することも可能である。

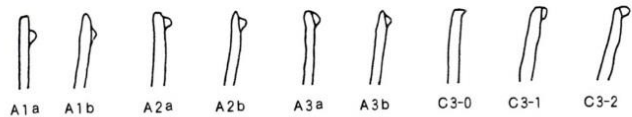
## (2) 渡来人集落の類型

かつて、片岡宏二は朝鮮系無文土器・擬無文土器が出土する集落を「島嶼分散タイプ」と「内陸集中タイプ」に分類、擬無文土器の有無や存続期間などによって内陸集中タイプを「土生タイプ」と「諸岡タイプ」に細分した(片岡 1999)。「諸岡タイプ」は渡来人の生活域が弥生集落(集団)の一角を占めるに過ぎないのに対して、「土生タイプ」はその集団だけで弥生集落内の一定の区域を占めているとした。松尾奈緒子はこれに加えて、玄界灘沿岸の遺跡状況から、明確な遺構から比較的まとまった量が出土する「内陸集中タイプ」(諸岡遺跡)、沿岸部において1点ないし2・3点が散発的に出土する「沿岸部分散タイプ」(姪浜遺跡・曲り田遺跡・久保園遺跡)、内陸において1点ないし、2・3点が散発的に出土する「内陸分散タイプ」(板付・那珂君休遺跡)に分類した。

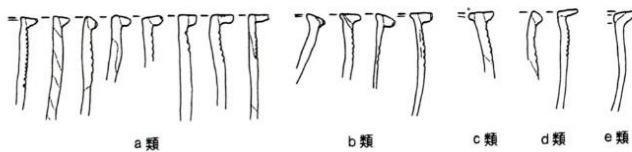
1 朝鮮系無文土器の甕口縁部の製作過程(中島 1985)



2 刻目突帯文土器の口縁部分類(家根 1991)



3 弥生時代前期瀬戸内型甕の口縁部分類(岡山県門田貝塚資料、縮尺1/4)



第5図 口縁部成形の比較(秋山 2000)



諸岡遺跡については、後藤直や松尾奈緒子による分析がある（後藤・横山1975、後藤1979、松尾2010）。後藤は遺構と土器の出土割合などから、弥生社会と一定のへだたりをもって存在して短期間に営まれた宿営地的な性格と考えた。松尾は後藤の研究以後に周辺で行われた発掘調査の成果も勘案し、円形粘土帯土器が出土する時期には、遺構群は丘陵頂部を空き地として、それを囲むように斜面部に帯状に遺構が配置されていて、遺構やその配置が韓半島の円形粘土帯土器期の集落とあり方と類似し、渡来人が本来もつ文化が現れていた可能性を指摘した（松尾2010）。

壱岐市原の辻遺跡では、粘土帯土器等の出土が遺跡の中心から離れた環濠外の丘陵北西部沖積低地に集中すること、同じ地点からは弥生土器も一緒に多量に出土することから、この地区を中心に渡来人が在来の弥生人と交流していたと考えられる（宮崎 1998・2008、片岡宏二 1999・2001b、古澤 2010）。

川上洋一は、九州地域の無文土器出土遺跡の居住域・墓域での様相を概観し、対馬・壱岐・玄界灘沿岸地域と二日市地峡以南とでは渡来の状況や在地社会との脈略が異なる点を重視し、玄界灘島嶼・沿岸類型と内陸類型にわけた。その類型をもとに韓半島の様相と比較して、両地域で外来系土器である粘土帯土器の受け入れ方が日韓で大きく異なり、日本では在地の弥生社会の一部で共存することを指摘した（川上 2012）。

また、田中良之は形質人類学と考古学の双方の立場から、縄文時代晩期後葉（弥生時代早期）の渡来規模は大規模ではなく、少数で独自のコロニーをつくることなく、在来の住人と共住していたと位置づける一方で、前期末の三国丘陵では無文土器のセットが一定量出土しコロニーと考えられる遺跡が3か所みられると考えた（田中 1991）。しかし、同時期の弥生遺跡が圧倒的に多く、すでに人口増を果たした弥生人集団に渡来人が大きな遺伝的影響を与えうるとは考えられないとしている。

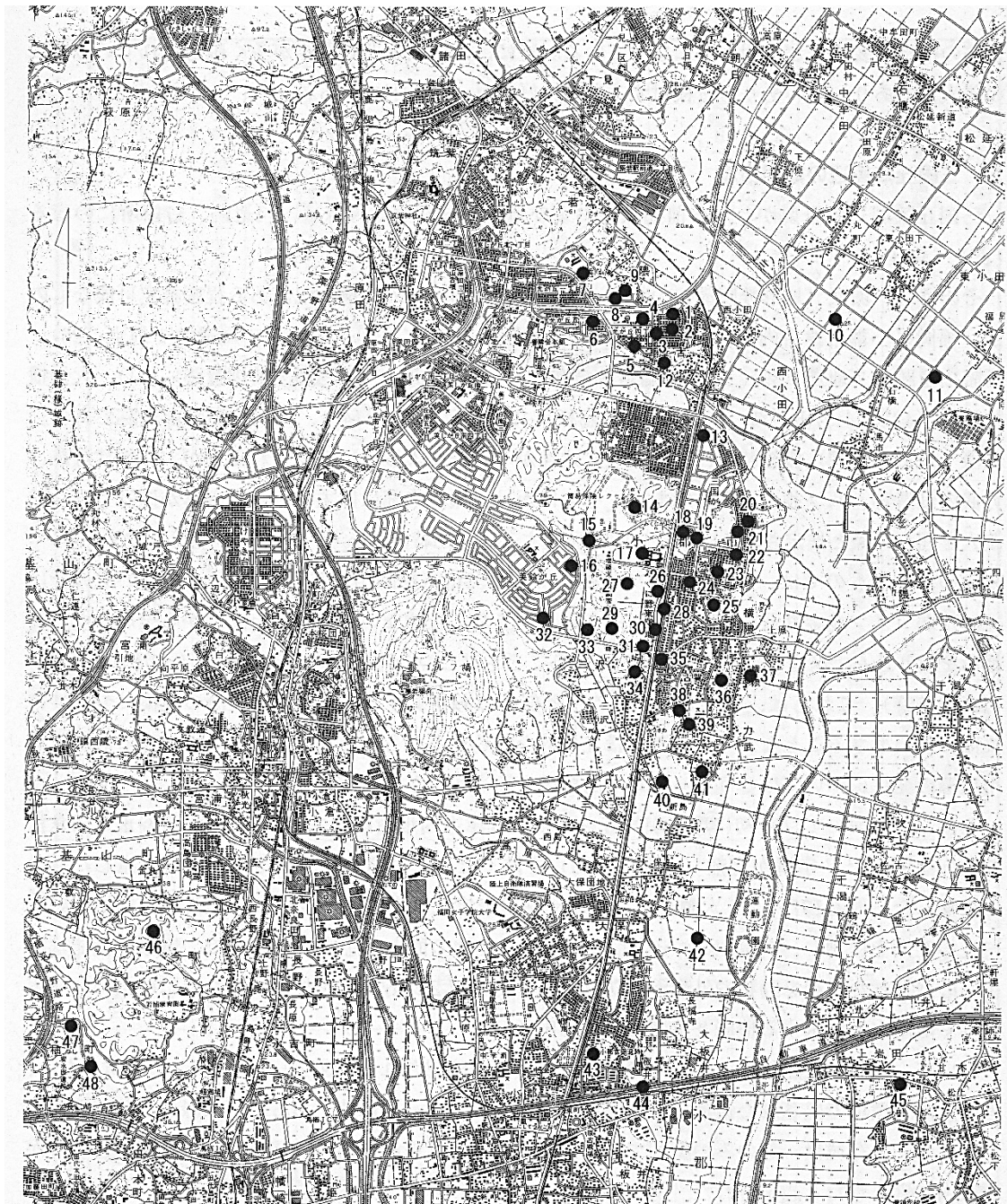
三国丘陵では、渡来人の存在がうかがえる集落の様相について、かつて無文土器が多く出土した遺跡の近隣の調査が進み、地域的な位置づけが新たに可能となっている。

### （3）三国丘陵弥生集落の研究

三国丘陵地域は、旧国の三国境（筑前・筑後・肥前）付近に位置し、現在の筑紫野市南端部から小郡市北部までの丘陵地帯を指す（第6図）。その名称は歴史学的観点からまとまりを持つ地域の名称として早くからそう呼ばれている（西谷 1971）。三国丘陵には弥生時代前期後半から中期初頭にかけての集落が多く存在し、それらを対象とした研究も数多い。調査の開始は古く、1968年にさかのぼる。津古遺跡では数十haに及ぶ大規模な宅地造成「みくにの団地」の計画が上がり、波多野皖三を団長とした調査団が組織され、開発の合間を縫って部分的な調査が進められた。その後、1969年には津古内畑遺跡の調査が始まり、5か年に及ぶ調査で弥生時代の貯蔵穴 260 基、堅穴住居 13 軒、環濠 1 条、甕棺墓 17 基、木棺墓 17 基、土壙墓 11 基などが明らかになった。特に注目されたのは弥生時代前期にさかのぼる農耕集落で、当時は環濠と集落の関係がわかり、その周囲に点在する墓地など、農耕集落の始まりの様子がうかがえる資料は少なく、日本考古学協会でもその成果が発表され広く知られた遺跡となった。その後、1970年には三沢遺跡が九州縦貫道建設の土取候補地となり、分布調査・確認調査が進められた。発見された遺跡は当時の単位集団論で理解され、1978年に県指定史跡となっている（西谷 1971）。

集落論では、橋口達也が弥生農耕社会の発展過程を扱った論考が、北部九州における弥





第6図 三国丘陵周辺の弥生時代遺跡分布図

- |                 |             |                     |             |             |
|-----------------|-------------|---------------------|-------------|-------------|
| 1 隈西小田1地点       | 2 隈西小田2地点   | 3 隈西小田3地点           | 4 隈西小田5地点   | 5 隈西小田6地点   |
| 6 隈西小田9地点       | 7 隈西小田10地点  | 8 隈西小田12地点          | 9 隈西小田13地点  | 10 東小田峯     |
| 11 七板           | 12 津古内畑     | 13 津古土取             | 14 三沢       | 15 三沢ハサコの宮  |
| 16 一ノ口I地点       | 17 三沢蓬ヶ浦    | 18 三沢京江ヶ浦           | 19 三沢東古賀    | 20 三国の鼻     |
| 21 横隈北田         | 22 横隈鍋倉     | 23 みくにの東            | 24 横隈山2地点   | 25 横隈狐塚7    |
| 26 三沢北中尾1地点     | 27 三沢北中尾2地点 | 28 三沢北中尾7地点(横隈山5地点) | 29 三沢北中尾5地点 | 30 三沢北中尾4地点 |
| 31 三沢北中尾11B地点   | 32 北松尾口     | 33 北牟田              | 34 北内畑      | 35 横隈山6・7地点 |
| 36 横隈上内畑4・5地点   | 37 横隈上内畑1地点 | 38 三沢古賀3            | 39 みくに保育所内  | 40 三沢南崎     |
| 41 力武遺跡群(内畑・前畑) | 42 大保横枕2    | 43 小郡               | 44 大板井      | 45 上岩田      |
| 46 ハツ並金丸        | 47 柚比本村     | 48 安永田              |             |             |

生時代集落論の教科書的存在であり重要である（橋口 1987）。弥生時代前期前半から中期前半までの農耕社会発展過程を論じるなかで、三国丘陵弥生時代遺跡群をモデルとして扱っている。集落の拡大を潜在的農耕地への進出と捉え、土地開発を理論化し、それによっ

て発生する争いや首長権の形成過程論は、現在多くの研究者の共通認識となっている。

田崎博之は三沢蓬ヶ浦遺跡を用い、遺跡単位での土器変遷を示し、それを基準とした同時期遺構の抽出、住居遺構群の景観と編成過程の復原を試みた。その詳細な分析、集落景観の復原は弥生時代前期の集団関係を理解する上で大変示唆的な論である。今後、三国丘陵全域を含めた同一手法の論の展開が待たれるし、引き継がれるべき視点である（田崎 1988・89・90）。速水信也は弥生時代前期後半から中期前半代の三国丘陵遺跡群における一ノ口遺跡の位置づけをまとめるなかで、当地域の弥生集落は斜面を含む丘陵上に集落が営まれ、浅い谷や集落周辺の丘陵下、傾斜面で水田が小規模に営まれている見通しを立てた（速水 1994）。また遺物的側面からは、柏原孝俊は石器組成に占める石鏃や不定形刃器の割合が極めて高いことから、弥生時代前期後半から中期前半代の三国丘陵遺跡群は狩猟のウェイトが高い生業形態を想定している（柏原 1990）。近年では、片岡宏二が 20 年以上携わってきた三国丘陵での発掘調査の集大成を行っている（片岡 2003）。長年の間、片岡は三国丘陵弥生時代遺跡群から派生する問題を考究しており、今回の論考では、三国丘陵における弥生時代前期社会の諸問題を水田農耕の定着と展開としてまとめている。食料基盤を近年調査が行われている谷水田、畠等の成果から、小規模な水田・畠とともに里山の資源を用い、相互補完的な食糧生産を行っていたと想定している。また、焼畑農耕の可能性についても論及している。

筆者らは当地への弥生文化開始を明らかにした段丘裾で生産域と居住域がセットで調査された力武内畑遺跡や、近年の三沢東土地区画整理事業に伴う発掘調査（三沢北中尾遺跡、三沢蓬ヶ浦遺跡など）による新資料を素材として三国丘陵弥生時代遺跡群の新たな評価を目指し、三国丘陵に進出する弥生時代前期集落の詳細な変遷過程、当地域における弥生文化の受容と展開を検討している（山崎・井上 2004, 山崎・杉本・井上 2005）。

### 第 3 節 本研究によって解決すべき問題の所在

#### **【課題点 1】土器の変化：土器変容の方向性を示す新しい定義**

「朝鮮系無文土器」、「擬朝鮮系無文土器」といった語句で示されてきた無文土器と弥生土器の影響を受けて変容した土器がある。これまで無文土器の弥生土器化を中心に示されてきたが（片岡 1993）、日韓の交流を検討する際には、双方向の検討が必要である。列島各地域にわたって無文土器系土器を観察・実測し、また、韓半島における弥生系土器を観察・実測するなかで、土器に与える影響は相互の関係にあることがわかってきた。日本においては、無文土器が弥生土器の影響を受けて変容する方向だけでなく、弥生土器が無文土器の影響を受けていることも分かってきた。韓半島においても同様で、弥生土器が無文土器の影響を受けて変容するだけでなく、無文土器も弥生土器の影響を受けている。

新しい定義により、土器の変容の方向性を再検討し、弥生時代の地域社会における在来人と渡来人の土器製作・土器生産から交流の度合いを測る。

#### **【課題点 2】集団像：粘土帯土器文化期の交流の諸相、変遷を示す**

渡来人はなぜやってきたのか？これは究極的な命題であるが、その命題を解くために、粘土帯土器文化期の交流の諸段階を明らかにする。



粘土帯土器文化期は円形粘土帯土器段階と三角形粘土帯土器の段階に分けられる。円形粘土帯土器段階では弥生時代前期中頃から中期初頭までの比較的長期にわたって交流が進むが、その諸相は明らかでない。具体的に渡来集団と在来集団がどのような段階で交流を果たし、馴化していくのか。移住なのか、短期滞在なのか、往来する集団なのかなど、どのような日韓交流の階梯があるのかを検討する。考古学的方法論で遺構と遺物から見た在来集団と渡来系集団の関係性を探る。

### **【課題点3】地域社会：日韓交流の地域色をあきらかにする**

これまでに、「北部九州」と「韓半島南部」といった大地域における交流を代表させて、通史的に日韓交流の姿が示されてきた。本論で主対象とする韓半島粘土帯土器文化と北部九州弥生文化の交流についても同様で、概括的な理解は広く共有されているが、地域ごとの日韓交流の姿が明らかにされているとは言えない。日本列島において粘土帯土器が多く出土する地域が認められるが、その地域の特色は何か？対馬・壱岐・玄海灘沿岸・環有明海地域・響灘から山陰の日本海沿岸など地域に即した日韓交流の姿を考古学的に検討する。

なお、本論で「地域社会」と表記したのは、「単なる空間的広がりではなくそこに居住する人々の社会生活様式、意識などが制度的に構造化されている社会」を指す現代的意味とは異なり、考古学的方法で様々な地域社会のかたちを復原することを意識したためである。考古学的に地縁的な集団関係、居住集団のまとまりを捉えることができるか、居住集団や集団を横断するソダリティーについての人類学的アプローチも必要となってくる。どのように地域社会が形成されるのか、地域社会の特徴は何か、時代によって変化する流動的でもある「地域社会」に少しでも迫りたいと思う。

## **第4節 研究の方法**

対象は弥生時代前半期、韓半島では粘土帯土器の時期を中心に扱う。弥生時代早期の渡来第1波（早期）は概説的に、第2波以降を主な研究対象とする。

空間は北部九州と韓半島南部を中心に、特に三国丘陵地域は出来るだけ詳細な検討を行い、考古学的検討から地域社会を復元するモデルケースを目指す。

私は、日韓交流を考古学的に明らかにすることを目的にしているが、交流の諸相を明らかにするためには、日本で出た韓国系の考古遺物、韓国で出土した日本（倭）系考古遺物の識別が肝要である。武末純一の定義に倣い、日本（韓国）で出土する韓国（倭）系考古遺物は①出現したときに、それまでの日本（韓国）の考古資料にはなかった形とつくりである（不連続）②出現したときには、日本（韓国）あるいはその中の地域のどこにでもあるのではなく（非普遍的）、あっても各遺跡の中での比率は一定ではない（不安定）。③逆に韓国（日本）あるいはその中の地域では各遺跡での割合は一定で（安定）、どこにでもあり（普遍的）、作り方や形もそれ以前から続く（連続）。ことを考古学的に観察し、土器については変容過程を新しく定義してその変容度合いから在来人と渡来人の交流の諸相、段階を設定する（武末 1991a）。

## 第5節 用語の整理

### ①擬無文土器／擬弥生土器

第4章で韓日の土器交流を図る新定義を提示する。学史上、「朝鮮系無文土器」「擬朝鮮系無文土器」や「無文土器」「擬無文土器」といった用語が伝統的に用いられてきた。学史的には日本における「擬朝鮮系無文土器」には私が考える無文土器の影響を受けて在来の土器が変容する「変容弥生土器」と渡来人の作る無文土器が在来の弥生土器の影響を受けて変容する「変容無文土器」の双方が含まれている。

また、「擬（する）」という言葉の持つ意味は「模倣する」という意味があり、「擬無文土器」の場合は無文土器を模倣するといった意味にも捉えかねない。また、ハングル語ではこの「擬」に置き換えられる言葉が存在しないという。日韓双方向の土器交流を示す上でその理解の妨げともなっているため本稿では、擬無文土器、擬弥生土器といった「擬」の用語を使わない。変わって、「変容（した）弥生土器」「変容（した）無文土器」の用語を用いる。

### ②集団／集落群／地域社会

第3章で三国丘陵の「地域社会」の形成を検討する。三国丘陵地域では、段丘裾に進出した地域開発の拠点集落が「母村一分村」関係を軸に、谷筋を共有しながら前期中頃から中期前半にかけて、丘陵上に変遷していく様子が窺えるが、その一連の集落遺跡のまとまりを「集落群」と呼称した（図）。三国丘陵には、このような一定のまとまりを持ちつつ変遷する「集落群」が複数存在し、弥生文化着床以降の人口増加は当初、それぞれの「集落群」領域内の人口密度を高める方向で進み、前期末～中期初頭に至っては、拡大した「集落群」領域（人口増加）によって地域社会のストレス・調整規模が増大し、中期前葉以降「集落群」領域の再編が広く行われる（山崎 2010c）。「地域社会」と「」付きで表現したのは、必ずしも現代的意味とは異なる領域や集団構造が時間軸や空間軸を異にして形成されていると想定したためで、本論では、特に弥生時代前半期における「地域社会」を射程に考古学的手法で分析する。併せて墓域の考古学的・人類学的考察はこの「地域」を復原するうえで重要であるが、今回は十分に踏み込めていない。墓地も含めた検討は今後の課題として残す。

### ③交流と交渉

日本列島と韓半島の交流は①互いに異なった文化圏を維持しながら交流する②モノや権威を得るために交易する③人が渡来居住して大きな変化が起きる、そして時代や社会とともに変化してきた。

本論文では、「交流」は日本列島におけるクニ形成以前の日韓の相互交流に用い、中期後半のクニ形成後は「交渉」を大別して用いる（第6章）。弥生時代の世界構造、「小地域社会」「大地域社会」「北部九州社会」「東アジア世界」を意識して、考古学的に捉えることのできる社会変化から「交流」から「交渉」への変化を考察する。

この時期の文化の流れは圧倒的に「韓国から日本へ」であるが、「日本から韓国へ」の流れも存在する（武末 2008）。優劣を競うために交流史を研究するのではないことは、現代の日韓交流研究者の姿勢からも明らかで、交流の意義を考えることで現代の日韓両国の理解、交流の促進も期待できる。

## 第1章 「弥生（系）集落」の成立と展開

### 第1節（本章の課題）弥生（系）集落とは何か？

北部九州における弥生時代の住居構造や集落構造については、特に集落構造を中心に古くからの調査研究の蓄積がある〔鏡山 1956～1959、高倉 1975、橋口 1985・1987、武末 1990 など〕。また、蓄積された資料から、集落研究の基礎的遺構である住居遺構についても地域単位での変遷、地域性が明らかにされつつある〔寺井 1995、小澤 2006、坂元 2006、山崎 2006a・b、山崎・沖田・廣木・柿本 2008 など〕。

北部九州における縄文／弥生移行期の土器変化は夜臼式以降、韓半島無文土器の影響を受け、漸移的な変化を示す。北部九州沿岸部の山ノ寺式段階（夜臼Ⅰ）に、韓半島南部からの移住があり、これを契機に本格的な水稻稲作が開始されるが、この時、渡来人がもたらした無文土器が型式変化をとげることによって板付Ⅰ式土器が成立する（小南 2009）。この板付Ⅰ式と夜臼Ⅱb式が共伴する段階を板付Ⅰa式、夜臼Ⅱb式が払拭され弥生土器単純組成になる段階を板付Ⅰb式として（家根 1993）、これが初期遠賀川式土器として西日本への広がりを見せる。韓半島の中期無文土器文化の先松菊里式・松菊里式と北部九州の夜臼式・板付式が対応し、その諸属性の影響を段階的に取り込みながら弥生土器が成立する（深澤・庄田 2009）。

こういった渡来集団に影響を受けた土器の変化とともに、生活面での変化がどのように進行するのか、住居、集落構造から検討する。

### 第2節 北部九州における弥生（系）集落の成立と展開

#### 1. 竪穴住居構造の変遷

北部九州では、縄文時代後期前葉から後期後葉にかけての住居平面形は、基本的に円形を呈し壁に沿うかたちで柱穴がみられるものが多い。後期前葉から中葉の豊前地域では隅丸方形プランで敷石石囲炉をもつ、瀬戸内地域以東の影響を受けた建物（椎田町山崎遺跡、大平村上唐原遺跡）もみられるものの、後期後葉になると円形プランに収斂していく。後期末以降は方形が多数となり、晩期になると方形プランで占められるように変化する。主柱穴構造ははっきりしないものも多いが、壁に沿うかたちで回るものが確認できる。縄文時代晩期後葉には松菊里型住居の流入がある。地域性や遺跡毎の特徴がみられるものの、弥生時代の住居構造は以下のように変遷する。

第1画期：松菊里型住居の流入（弥生早期～前期前半）

第2画期：松菊里型住居の変容・在地化（弥生前期前半～中期末（一部後期初頭））

第3画期：方形系住居の増加・盛行／円形住居の減少・衰退（弥生中期末～後期初頭）

第4画期：住居構造の画一化（方2柱・壁際土坑・ベット状遺構付設）（弥生後期段階）

第5画期：主柱構造の変化（方4構造の採用・流入）（弥生終末～古墳時代初頭以降）

#### 2. 集落構造の様相

集落構造は立地にもより多様となるが、ここでは、代表的な遺跡を用いて、集落内における住居配置と貯蔵・倉庫管理について着眼し弥生時代を通した変遷を確認しておく。

九州の縄文時代後晩期の大規模集落では、小規模な住居群が2群、ないしはそれ以上の群が流動的に並存し、集落を形成している（水ノ江 2002、矢野 2001）。福岡県アミダ遺跡

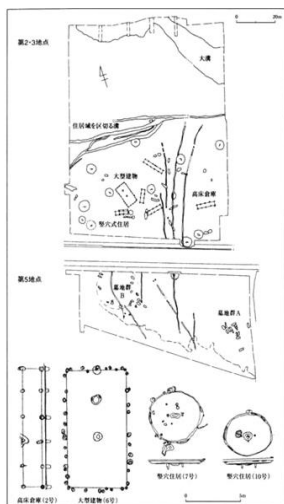
や熊本県鶴羽田遺跡、石の本遺跡のように空間地を挟んで住居群が2大群に分かれる例や熊本県中堂遺跡、宮崎県平畑遺跡、丸野第2遺跡、山城第1遺跡のように空間地を挟みながら、住居群が3群以上分布する事例もある。なお、九州では確実な環状集落の例がないが、住居群間に空間地を挟むという集落構造自体は、列島各地で確認される現象で縄文人の集落やすまい観が広く共有されている。九州の貯蔵穴は、その大部分が谷部分に立地する低湿地型貯蔵穴である。居住域はこの谷部に接した丘陵部に想定できるが、現時点でこれがセットで確認できる事例はまれである。南九州では晩期（入佐式～黒川式）の上野原遺跡第4工区や山城第1遺跡では少数の竪穴住居と数10mの距離を置いて、貯蔵穴の可能性が高い土坑群が群集する傾向があるという（林2006）。

弥生時代早期から中期前半では、貯蔵穴・倉庫の管理体系が小規模・自己完結的な小集団、それぞれの居住単位で貯蔵施設を維持する基本的な生活領域が形成される。粕屋町江辻遺跡では、弥生時代早期から前期の環状に配置された松菊里型住居群とその内包される部分に掘立柱建物、さらにそれら両者を取り巻くように溝がめぐっている（第7図）。明確な貯蔵穴は調査区内にみられず、貯蔵施設・倉庫としては掘立柱建物が該当する。当初の中央部は広場になっていて、掘立柱建物が7棟建つ。うち1棟は、梁行4間×桁行5間の平屋建物と推定され、この集落の公共的な大形建物とも考えられている。

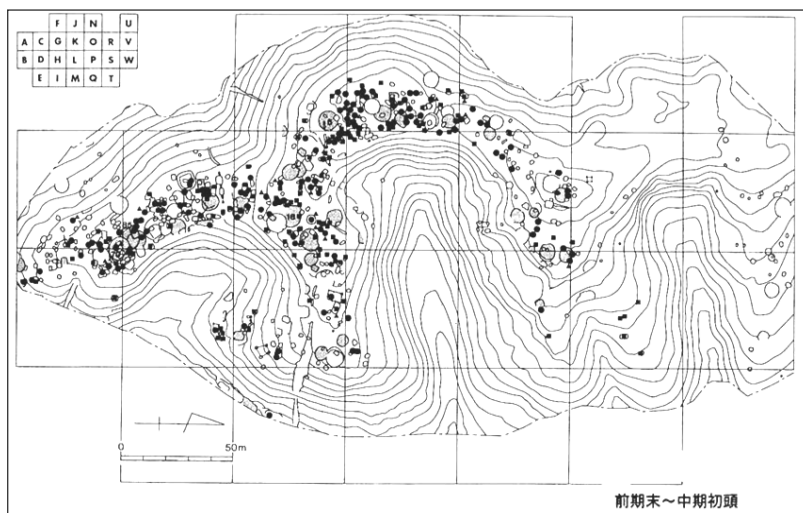
小郡市一ノ口遺跡I地点では、弥生時代前期後半から中期前半の住居跡119軒の他に、掘立柱建物4棟、貯蔵穴279基、道状遺構7条、柵列状ピット群などが検出された。全時期を通して、円形住居は径5～6mが大半を占め、7m以上のものが16軒（うち1軒は11mを超える）である。方形系住居は長辺3～5mが多く、6mを超えるものもある。円形住居は丘陵頂部、もしくは尾根部に立地し、方形系住居は円形住居に付随、もしくは斜面上に立地する傾向が強い。貯蔵穴は住居に伴うかたちで周辺に分布する（第8図）。

貯蔵穴には住居周辺につくられるものと住居から離れた場所にまとまりを持つ2者がある。その群をなすものには環濠を有するものもある。貯蔵穴専用環濠は、周辺の集団が協力して掘削したと考えられ、小集団間を超える貯蔵域の創出が行われ、管理集団の萌芽がみられる。そのようななかで、大規模集団では集落内分業の集約化が一部確認できる。

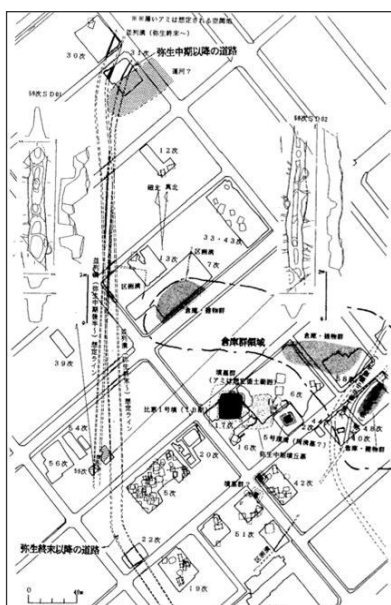
中期後半から後期では、居住単位の基本生活領域を持ちつつ、集落内における特定貯蔵域・倉庫域・生産域の明確化（集落レイアウト）が看取できる。機能集中・集住化することで集落大形化が促され、集落経営が長期的・安定的なものになる。福岡市比恵・那珂遺跡群では中期後半以降、段丘上を区画する大溝が掘削される（第9図）。大溝は集落のレイアウトの基軸で、環濠とはならない。中期末には、那珂遺跡の大溝西北側に中央に屋内棟持柱を有する5×8間の大形建物がみられる。周囲では青銅器鑄造関連遺物が多く、前面の大溝に祭祀土器群が集中し、青銅器生産と祭祀行為とが関連して執行された[久住2008]。比恵遺跡中央部では、径11m以上の大形円形住居を有する住居群ブロックがあり、周囲には径9～10mを中心とするブロックが分布する。「ブロック」は大形・中形の円形住居、7m以下の中・小形長方形住居、掘立柱建物、井戸からなる径100～200mの居住単位である。中・小形住居のみのブロックもあり、集落内での階層性を示す可能性がある。[吉留1999]。後期における比恵・那珂遺跡群は方形環溝（大形建物）を中心とする「中枢域」や比恵遺跡の中央北部における倉庫群の成立など、より機能的に再レイアウトされる。集落の再編成に伴い、新たな条溝（大溝）が各所で掘削され、比恵・那珂遺跡群の段丘上を機能的に、ブロッ



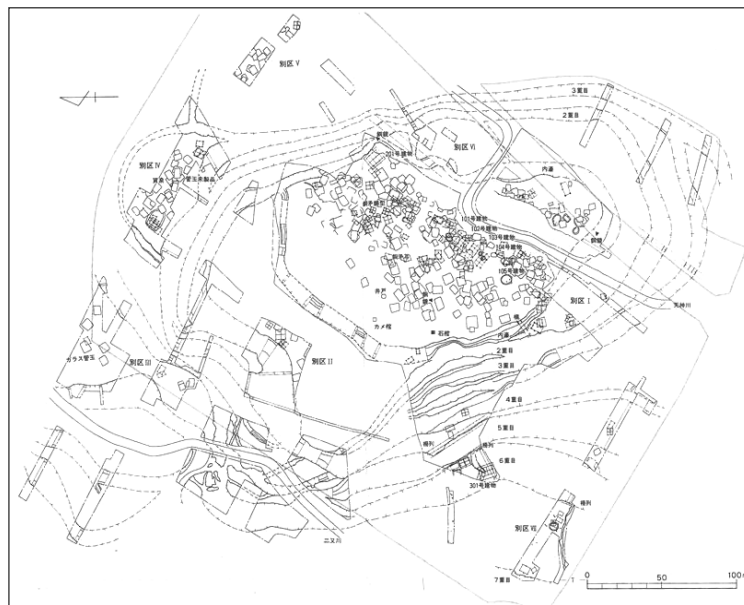
第7図 江辻遺跡遺構配置図[武末 2002]



第8図 一ノ口遺跡遺構配置図 [速水 1994]



第9図 比恵遺跡遺構配置図[久住 2000]



第10図 平塚川添遺跡遺構配置図[川端 1994]

く状に区画する。弥生時代終末期には、比恵・那珂遺跡群を南北に貫く、全長 1.5km 以上の長大な道路状遺構の成立があり、集落の新たなレイアウトをきめる基幹道路となる（久住 2008）。

平塚川添遺跡では後期後半以降、多重環濠を伴う（第 10 図）。その中心部には大形建物が並び、その周囲には環濠によって区画された別区を有する。この別区のなかには工房域や倉庫域と想定されるものがあり、集落構造での機能分化が窺える（川端 1994）。

### 3. 弥生系集落の出現

以上のように、弥生時代の住居構造、集落構造は変遷する。特に本章で検討するのは各地域に稲作農耕文化が伝わり水田稲作が定着する過程で集落構造にも変化が認められるかということである。

縄文のムラの一部に新しい弥生の要素を持った住居がつけられるのか、新しい土地に弥生のムラが進出するのか、それは地域によって異なるだろう。

A. 伝統的な（縄文時代的）集落構造を持つ集落として朝倉市畑田遺跡（第 11 図）[伊崎

編 1999] があげられる。

縄文時代晩期（刻目突帯文期）から弥生時代前期初頭までを中心とした集落跡である。丘陵先端部の緩斜面上、標高 60～66m にかけて住居 85 軒が密集して切り合い、およそ環状に検出された。それぞれの所属時期を特定する遺物の選定が難しいが、遺構検出面の違い、出土土器から、ある程度の変遷を見ることが出来る（山崎 2006a）。突帯文期Ⅰ期では、小形の方形住居や不整形の方形の住居が多くみられ、環状に分布する 3 群に分けられる。住居の支柱はいずれも判然としない。突帯文Ⅱ期では、住居形態は方形を踏襲しているが、規模が全体的に大形化している状況が看取できる。竪穴内に柱穴が多くみられるものの、支柱を特定できないものが多い。分布は環状が踏襲されているが、まとまりが 5 群程度に増加している。板付Ⅰ式併行期以降の住居群についても、基本的に方形であり大形と小形の住居の区別が可能である。ある程度は環状の分布を示すものの、その規制が崩れてきている状況が看取できる。また、調査区北部では支石墓がみられるのも特徴的である。本遺跡では縄文時代晩期以降の方形系主体の伝統が色濃く残り、板付Ⅰ式以降でも松菊里型住居の流入はみられない。墓制は支石墓を受容しているが、住居形態が変化しないことが特徴である。土器は縄文的な組成を示している。

一方で、B. 新しい（弥生時代的）集落構造を持つ集落として粕屋町江辻遺跡（第 7 図）（新宅 1996、武末 2002）が考えられる。

江辻遺跡は縄文時代晩期夜臼式期（弥生時代早期）に比定され、日本で最初に水田稲作開始期の集落様相を明確にした遺跡である。標高 10m 程度の微高地上に立地する。環状に配置された松菊里型住居群とその内包される部分に掘立柱建物、さらにそれら両者を取り巻くように溝がめぐっている。

公表されている土器や住居跡のつくりから考えると、溝に沿う住居群が早期に属し、その内側の住居は前期に下るとされる（武末 2002）。当初の中央部は広場になっていて、掘立柱建物が 7 棟建つ。7 棟のうち 6 棟は梁行 1 間×桁行 2～5 間の高床倉庫で、残りの 1 軒は、梁行 4 間×桁行 5 間の床面積 58 m<sup>2</sup> の平屋と推定され、この集落の公共的な大形建物と考えられている。このように、集落構造が環状になることが指摘されており、この環状



第 11 図 畑田遺跡遺構変遷図(S=1/1500)(山崎 2006a)



という要素は縄文的な要素でもある。土器は縄文的な組成を示している。

また、糸島市曲り田遺跡では、土器は無文土器の影響を受け、弥生時代的な組成を示しているものの、住居形態では松菊里型住居はみられず、主柱のはっきりしない方形プランのものが多く縄文時代からの延長とみることも出来る。

縄文／弥生移行期の集落は、端的に縄文／弥生に分けることはできない。縄文と弥生の諸要素が複雑に絡み合っているのが、移行期の集落の特徴である。縄文時代晩期夜臼式（弥生時代早期）にあつては、住居形態や墓などが地域によって受け入れられ方が異なっている。その後の展開として、「弥生系集落」が顕著になるのであろう。

### 第3節 三国丘陵における弥生（系）集落の成立と展開

#### 1. 弥生系集落成立前

三国丘陵では弥生時代集落が成立する前の状況は、良好な調査事例が確認できていない。調査事例がないということは大きなムラを形成せず、小規模な散村形態であつた可能性もうかがえる。

周辺地域では、縄文時代晩期黒川式期から夜臼式段階の竪穴住居が検出された遺跡には、九州横断道建設関連の発掘調査で朝倉市楠田遺跡（黒川式期から突帯文期）の方形プラン7軒、小覚原遺跡（黒川式期）方形プラン12軒、クリナラ遺跡（黒川式期）の方形プラン7期、長田遺跡（黒川式期）の不整楕円形プラン1軒、柿原Ⅰ遺跡（黒川式期）隅丸方形プラン4軒、二十谷遺跡（黒川式期）竪穴住居跡33軒などがある。縄文晩期ではいずれも方形系プランであることがわかる。

クリナラ遺跡は、高位段丘中の谷部、標高100m付近に立地する。1辺3～4mの方形住居が調査区南半で検出された。住居内に焼土がみられるものもあるが炉と断定できない。柱構造は壁に沿うものが多い。土坑2基のうち貯蔵穴かと思われる長方形土坑も1基ある。ほかに埋甕、集石遺構が検出されている。出土遺物は打製石鏃、磨石、扁平打製石斧、打ち欠き石錘が多量に出土している。

小覚原遺跡は、細長い丘陵の頂部、標高89m前後に立地する。調査区の南西部と東南部に集中して住居群が検出された。住居は1辺3m程の方形系住居である。断面袋状の貯蔵穴が2基みられ、住居群間の空間地に位置している。扁平打製石斧の出土がみられる。

集落は比較的標高の高い丘陵部に立地し、数群に分かれる住居群で構成されており、埋甕や集石遺構、貯蔵穴等もみられる。

#### 2. 三国丘陵弥生時代集落の立地と環境論

橋口達也は曲り田（古）式から板付Ⅰ式にかけては低地の水田稲作最適地の開発が中心に行われ、それでことたりたが、板付Ⅱ（古）式以後には三国丘陵のような狭隘な谷水田をひかえた低丘陵に集落が進出せざるを得ない人口増加状況が生まれたと理解し、その新たな可耕地への進出に関して、近隣集落との土地争いや水利をめぐる抗争が頻繁に起こったとした。前期末には潜在的耕地のほぼ全てとよいてよいほどに集落が広がり、遺跡の分布は飽和状態に達し、その状況が中期前半まで続いたと考えた（橋口1985・1987）。それに対し、片岡宏二は近年の発掘調査の成果を踏まえ、谷水田の生産性は低く、丘陵部の畑作（焼畑の可能性も示唆）も併用し、周辺の里山資源も最大限利用した生業体制を想定した。地形的制約もあり、そういった集約的な生産が未発達な段階にあつたため、集落が分

村を繰り返し、丘陵に進出し、やがて中期前半段階でその生産体制に限界が生じ、集落が激変したとしている（片岡 2003）。

### 3. 松菊里型住居の変容過程

#### a. 松菊里型住居の類型化

新たな住居構造である「松菊里型住居」が、どのように受け入れられ、在地社会に浸透していくのかを検討したい。

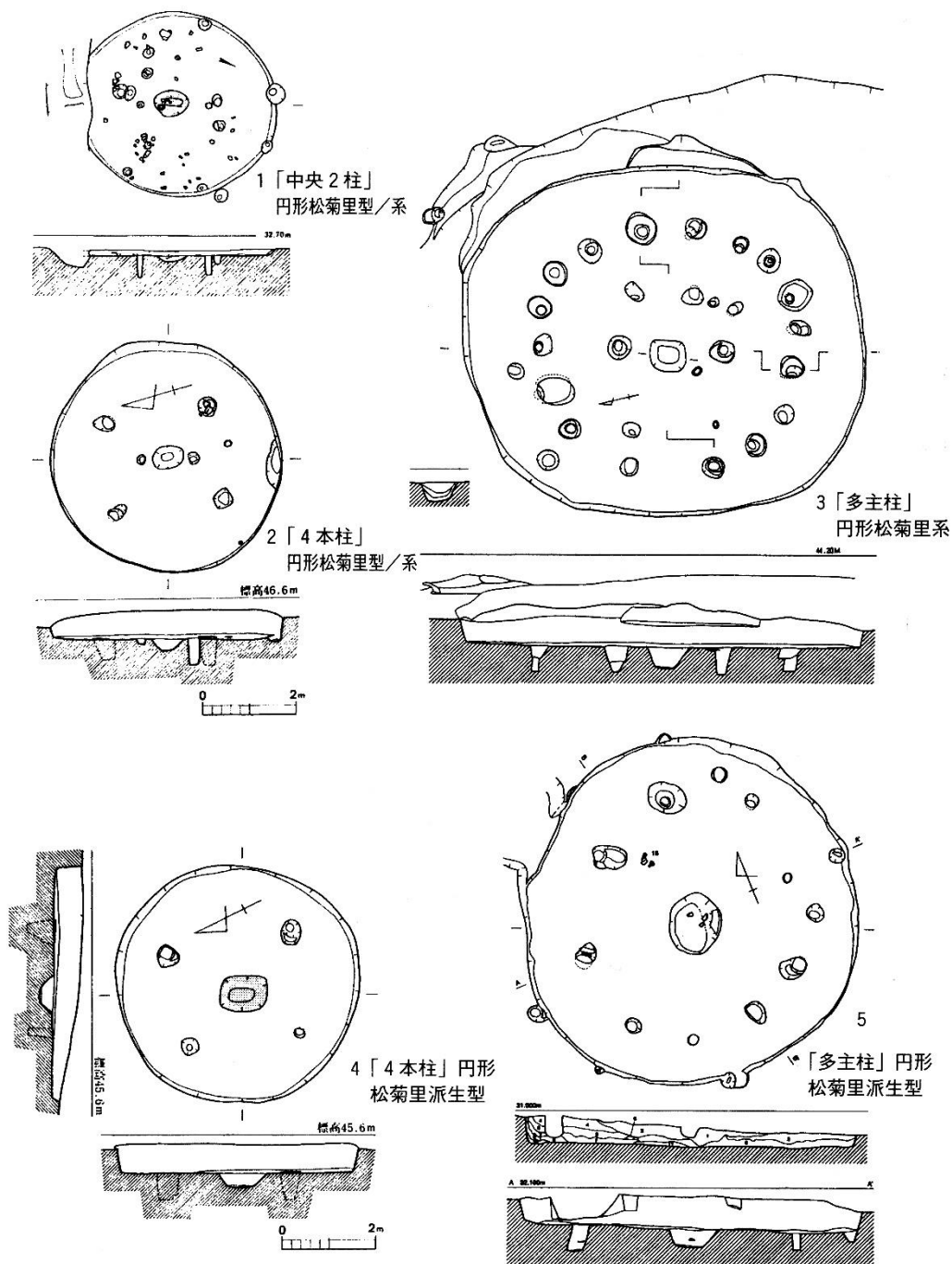
「松菊里型住居」の第一の特徴は、楕円形の中央土坑の両脇にピットを持つ住居形態である。学史的には石野博信氏による「北牟田型」「神辺型」といった区分（石野 1985）や中間研志氏による「古期」「新期」「発展型」の区分（中間 1987）、都出比呂志氏による「中央土坑二柱構造」という呼称の提言がある（都出 1998）。最近では小澤佳憲氏による筑前地域の松菊里型住居類型「江辻型」「海老ノ峯型」「合の原型」「剣塚型」「道場山型」の設定（小澤 2006）や柴尾俊介氏の中心施設による検討がある（柴尾 2006）。ここでは、三国丘陵周辺の検出事例をもとに、改めて型式設定を行う。なお、列島内で変容した「松菊里型住居」については、「松菊里系」や「派生型」の呼称を用いる<sup>（註1）</sup>。三国丘陵地域だけでなく、広域（列島内）にも対応できるように学史や研究者間の共通認識を考慮して主柱構造により、形式名を設定した。

「中央2柱」円形松菊里型／系住居としたものは、中央土坑を有し、中央2柱のみで構成される住居である（第12図—1）。粕屋町江辻遺跡では、刻目突帯文期に円形・方形ともに確認されているが、当地域では筑前町大木遺跡、小郡市力武内畑遺跡で円形のみ確認されている。大木遺跡では、同時期に中央土坑のみの建物もあり興味深い。中央土坑は深さ10 cm程度で浅いもので占められる。中央土坑の埋土状況を確認できないものが多いが、焼土が認められる炉とされるものも含まれる。直径は4～5 mの比較的小規模な建物である。中央2柱は掘方が小さく、深さのあるものが多い。夜臼Ⅱb式以降に見られ比較的短期間の消長をたどる。中間氏分類の「古期松菊里型住居」に相当する。

「4本柱」円形松菊里型／系住居としたものは、中央土坑を有し、中央2柱とその外側に4主柱を有する（第12図—2）。津古土取遺跡や一ノ口遺跡で多く確認できる住居形である。夜臼Ⅱb式期以降に「中央2柱」住居とともに出現が確認され、城ノ越式期新段階まで継続してみられる。中心となる時期は「中央2柱」に遅れ、板付Ⅱa式期新段階から増加、Ⅱc式期まで比較的にみられる住居形である。

「多主柱」円形松菊里系住居としたものは、中央土坑を有し、中央2柱とその外側に多主柱を持つものである（第12図—3）。主柱は5本からあり、多いものでは10数本とかがえられるものもある（柱の据替の可能性もある）。石野氏分類の「北牟田型」、中間氏分類の「発展型」の多くに相当し、当地域では一ノ口遺跡、三沢蓬ヶ浦遺跡、北松尾口遺跡、北牟田遺跡で多くみられる。板付Ⅱa式期古段階で初見され、板付Ⅱa式新段階からは主要な住居となり、須玖Ⅱ式まで継続している様子が見られる。

「4本柱」円形松菊里派生型住居としたものは、「4本柱」円形松菊里／系住居の中央2柱が省略された構造である（第12図—4）。板付Ⅱa式期新段階に出現が確認でき、須玖Ⅰ式期まで少なからずみられる。板付Ⅱa式期新段階に出現が確認でき、須玖Ⅰ式期まで少なからずみられる。板付Ⅱa式期新段階～板付Ⅱb式期古段階に盛行する状況である。ハサコの宮遺跡、津古土取遺跡などで確認できる。



第 12 図 松菊里型住居類型 (s=1/150) [山崎ほか 2008]

1. 大木 C3 2. 津古土取 C8 3. 三沢京江ヶ浦 C3 4. 津古土取 C5 5. 三沢蓬ヶ浦 C3

「多主柱」円形松菊里派生型住居としたものは、「多主柱」円形松菊里系住居の中央 2 柱が省略された構造である（第 12 図—5）。板付Ⅱa 式期新段階に出現が確認でき、須玖Ⅱ式期まで継続してみられる。盛行期は 2 段階あり、最初が板付Ⅱb 式期古・新段階で、次に城ノ越式期新段階～須玖Ⅰ式期にかけて多くみられる。当地域では、三沢北中尾遺跡、三沢蓬ヶ浦遺跡などで多く見られる住居形である。

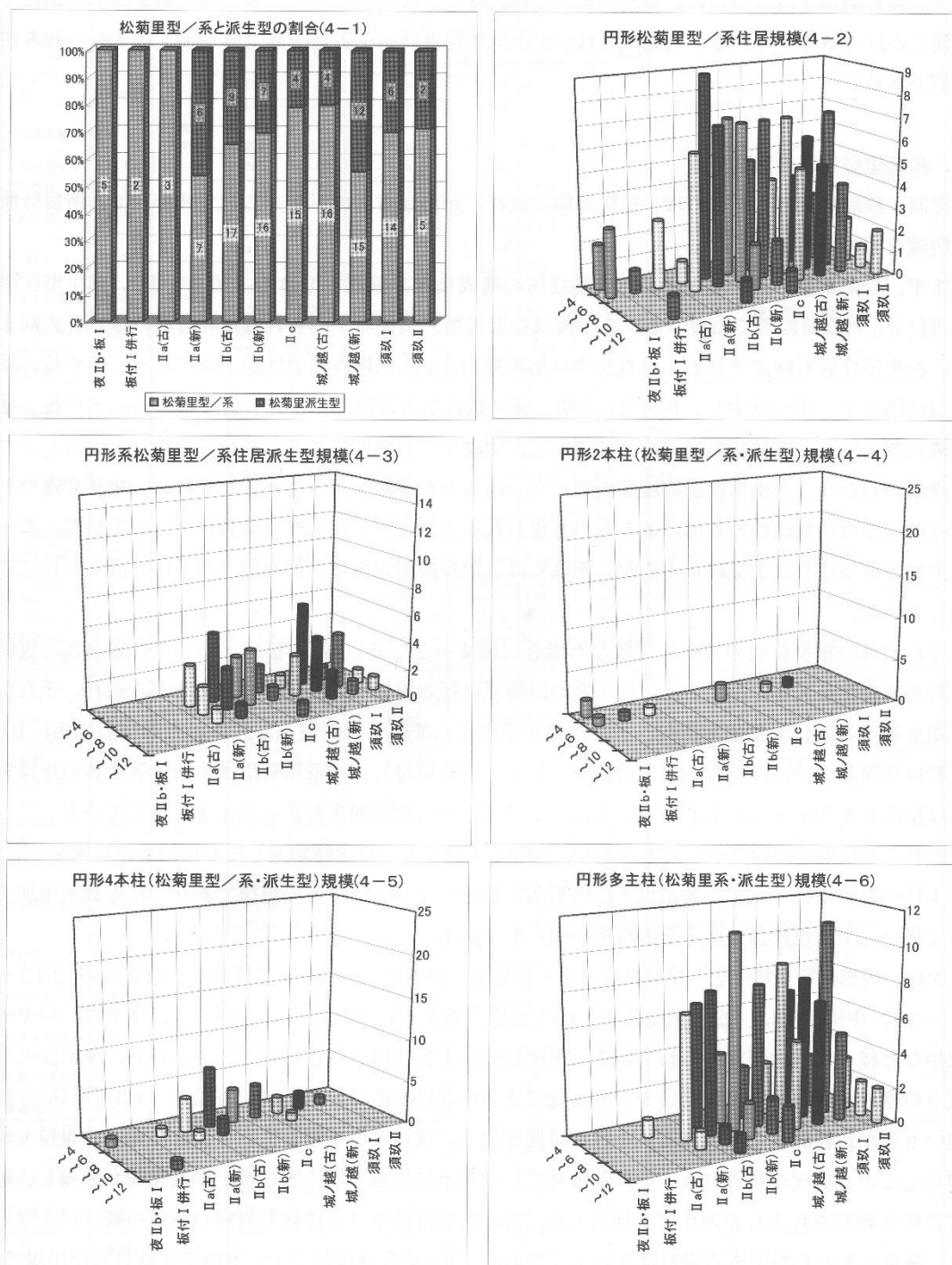
## b. 松菊里型住居の変容過程

今回検討の対象としたものは、住居規模（直径）がわかるもの（1/2以上残存）で所属時期の明確なものである（註2）。

まず、松菊里型／系住居とその派生型住居の構成比率を確認しておく（第13図1）。派生型住居は板付Ⅱa式期新段階で出現する。その後は松菊里型／系住居がみられる最終時期の須玖Ⅱ式期まで派生型住居も確認できる。構成比率は出現期のⅡa式期新段階では50:50に近く、その後派生型住居が少しずつ減少し、板付Ⅱc式期、城ノ越式期古段階では20%近くになる。その後、城ノ越式期新段階で再び40%強の割合に増加し、須玖Ⅰ・Ⅱ式期では30%前後を維持している。この2段階にわたり、派生型住居の増加のピーク→緩やかな減少がみられる背景には、集落変遷や三国丘陵内での集団差に起因するものと思われる。例えば、円形松菊里類住居（註：中央2柱の有無で分類した、松菊里型／系と松菊里派生型住居を併せて「松菊里類住居」と呼称する。学史的な意味合いの場合は「松菊里型住居」としている。）（松菊里型／系／派生型）は須玖Ⅱ式期まで残存するが、それらは三国丘陵周辺地域（標高の下がる段丘部など）に立地している。

それぞれの類型住居の規模を比較した場合（第13図2～6）、円形松菊里型／系住居全体の規模の時系列変化を大きく捉えると、出現期の段階では径6m以下で一定のまとまりがみられ、それが時期を追うごとに大型化を志向、また規模が多様化・階層化していく状況がみられる。大型化の様相はⅡb式期以降顕著で10m近いものが一定量みられる。それに対し、円形松菊里派生型住居全体の規模変化は量的な変化はみられるものの、4m以上8m以下に比較的まとまったまま推移している。

次に、円形松菊里類住居（松菊里型／系・派生型）の中央土坑の深さを検討しておきたい（第14図—1～3）。中央土坑は「松菊里型住居」の重要な属性であるがその用途については作業穴、炉や灰穴炉など様々な分析、位置づけが行われている（中間1987、大貫2001、伊藤・永井・蔭山1999、柴尾2006）。深さの検討からも、その用途について言及できる可能性がある。「松菊里型住居」の出現時期では、浅いものが特徴的に多くみられる。それが、時期を追うごとに深さを増していき、また深さの規模も多様化している。それと併せて、中央土坑周辺や埋土内に焼土や炭化物が分布し、炉の可能性が高いものの比率を検討した。Ⅱa式期古段階以前は資料不足の感拭えないが、確実に炉と判断できる資料はないようである。（註：筑前町大木遺跡の3軒は報告書内では炉と表記されているが、詳細については触れられていない。また、一ノ口遺跡例でも基本的に住居中央に見られる土坑を炉と表記することになっている。これらの場合、炉でない可能性もあることから集成表では△表記とし、グラフでは確実な例のみ抽出した）。一ノ口遺跡例では土色を参考に抽出した。Ⅱa式新段階で炉と判断できる資料が出現し、それ以降、中央土坑が炉である者は20～30%の割合で確認できる。その他のものがどのような用途で用いられたのかは、にはわかないは判断できないが、古い段階の松菊里型／系住居の中央土坑は浅いものが多く、変容していく過程で深さを増し多様化が進むことから、用途も当初の規制から離れ、かなり多様なものになっていると推定できる。中央土坑の平面形の変化については、古い段階（板付Ⅱa式期古段階まで）では、おおよそ楕円形が占める。その後長方形・方形系のものが出現し、量的にも多くみられるようになる。平面形の規制が離れるⅡa式期新段階は松菊里派生型住居が出現する段階で、ここにひとつの画期が設定できる。深さを増すことや平

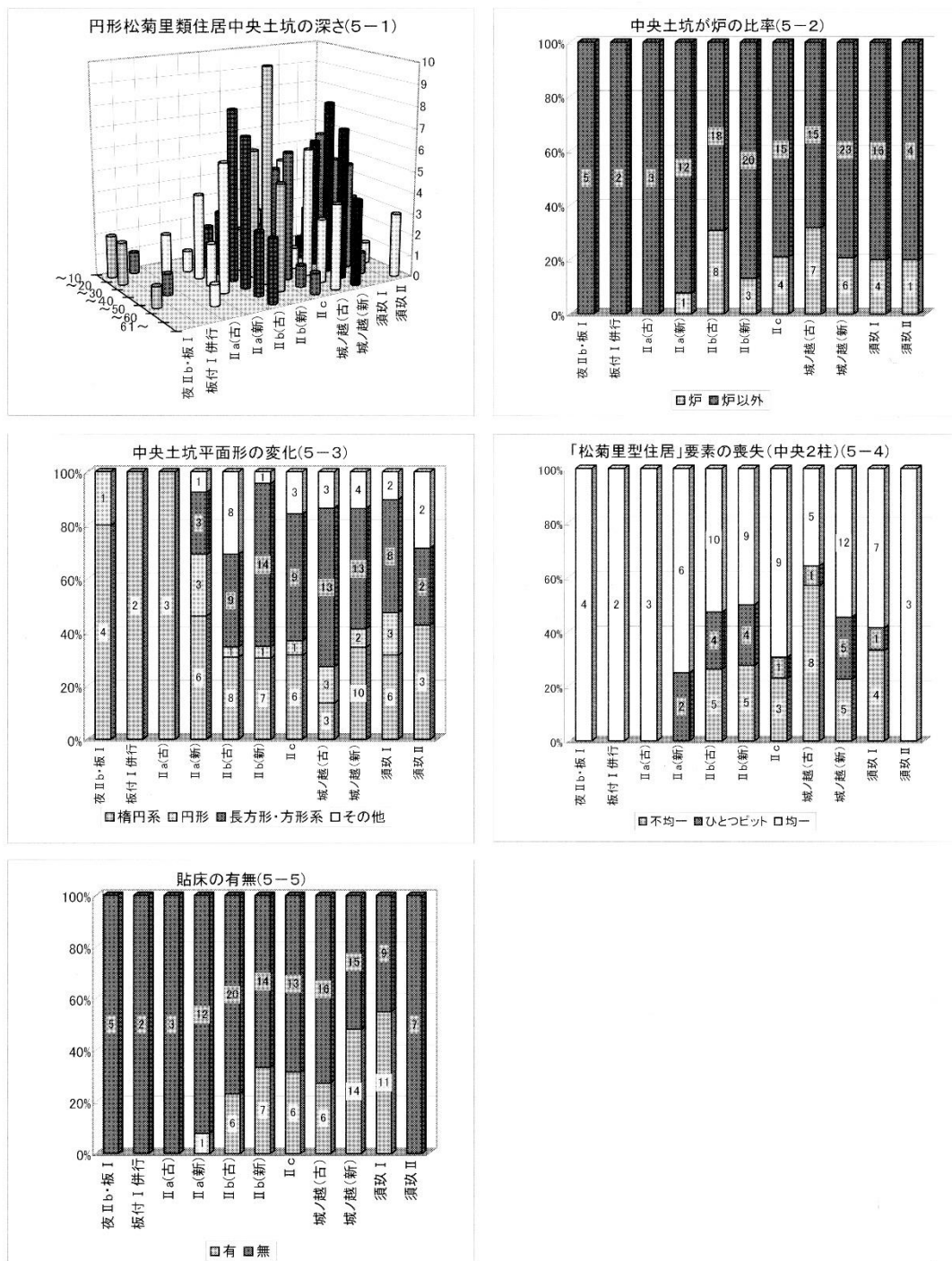


第 13 図 松菊里系住居属性分析①(山崎ほか 2008)

面形や断面形が不整形になる現象は何度か掘り直しが行われていることも想定すべきであろう。炉だけでなく作業用坑、もしくは灰穴炉など多様な用途を考えておく必要がある。

同じように「松菊里型住居」主属性の中央 2 柱についての規制緩和も確認できる(第 14 図一 4)。本来は均一な深さを持つ中央 2 柱が時期を追うに従い、片側だけピットがみられるものが出現し、中央 2 柱の深さも不均一なものが増加する傾向がみられる。

住居貼床についてグラフ化したものが第 13 図一 5 である。これが「松菊里型住居」の規



第 14 図 松菊里系住居属性分析②(山崎ほか 2008)

制とどうかかわるかは今のところ分からないが、第 1 の画期である板付Ⅱ a 式期新段階からの出現が同じように確認できる。

以上のように、様々な属性分析を試みたが、板付Ⅱ a 式期新段階から支柱構造だけでなく、「松菊里型住居」諸属性の規定がプライマリーな松菊里型住居から離れ、多種多様な住居形態が創出されるように変化するのは明らかである。

#### 4. その他の竪穴住居の様相

縄文時代晩期では方形プラン中心の住居構成で、わずかに小形円形住居が確認されてい

る（第 14 図）。住居の径が 3 ～ 4 m 程度の小規模なもので、柱が浅くてはっきりしないが多く、松菊里型住居とは区別できる。三沢栗原遺跡Ⅲ・Ⅳ区 69 号住居（板付Ⅰ式併行期）、横隈鍋倉遺跡 66 号住居（板付Ⅱc 式期）、西島遺跡Ⅰ区 32 号住居（城ノ越式期新段階）など類例は少ない。

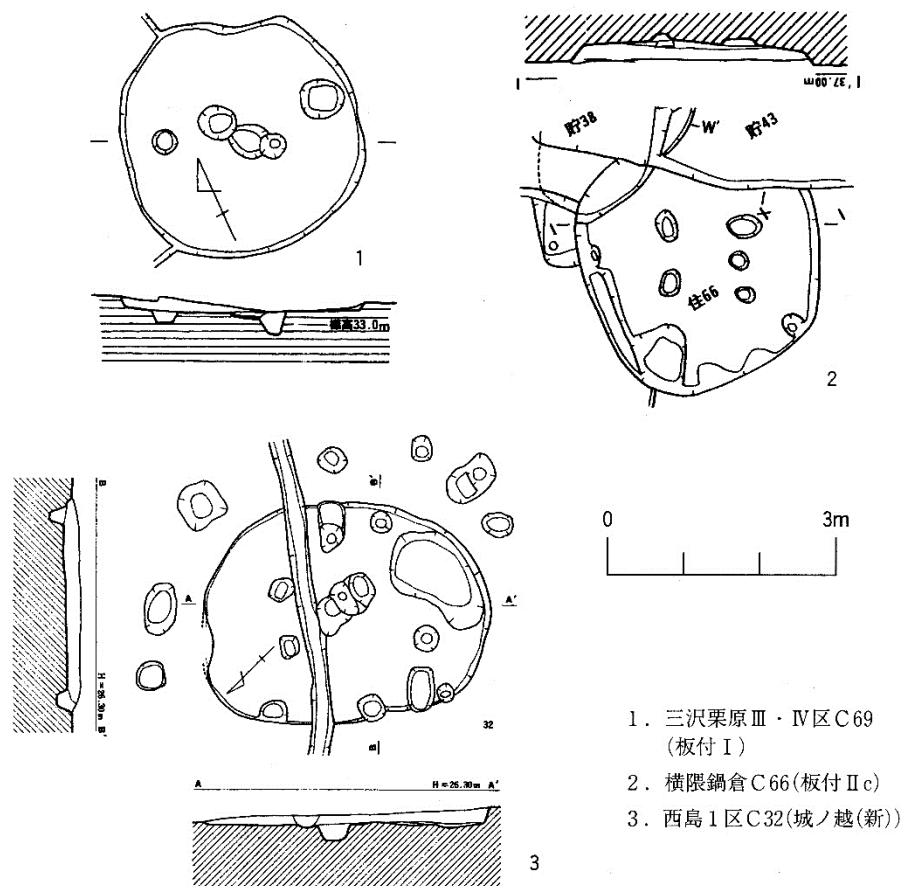
方形系住居（第 15 図）は縄文時代晩期には主流をなしていたものの、弥生時代に至るとその数は減少する。三国丘陵地域では縄文時代晩期の住居事例が少ないが、夜臼

Ⅱb・板付Ⅰ式期からⅡa 式期にかけてはわずか 5 例のみ確認できる。そのほとんどが、津古土取遺跡 20 号住居のような 1 辺 3.5m 以下の小形方形住居である。Ⅱb 式期以降、長方形住居、丘陵斜面段状型住居（第 24 図）が増加し、須玖式期に至ると主体を占めるように変化する。方形プランの支柱構造ははっきりしないものが多い。支柱構造がはっきりしてくるのは、中期後半以降で、2 支柱のものが主体を占める。

はじめは小形方形住居であったものが、Ⅱb 式以降長辺を伸ばす方向で長方形住居化が進行する。これは、丘陵の緩い斜面等に合わせた立地による変化と考えられる。長方形住居は大型化の傾向も見せる。

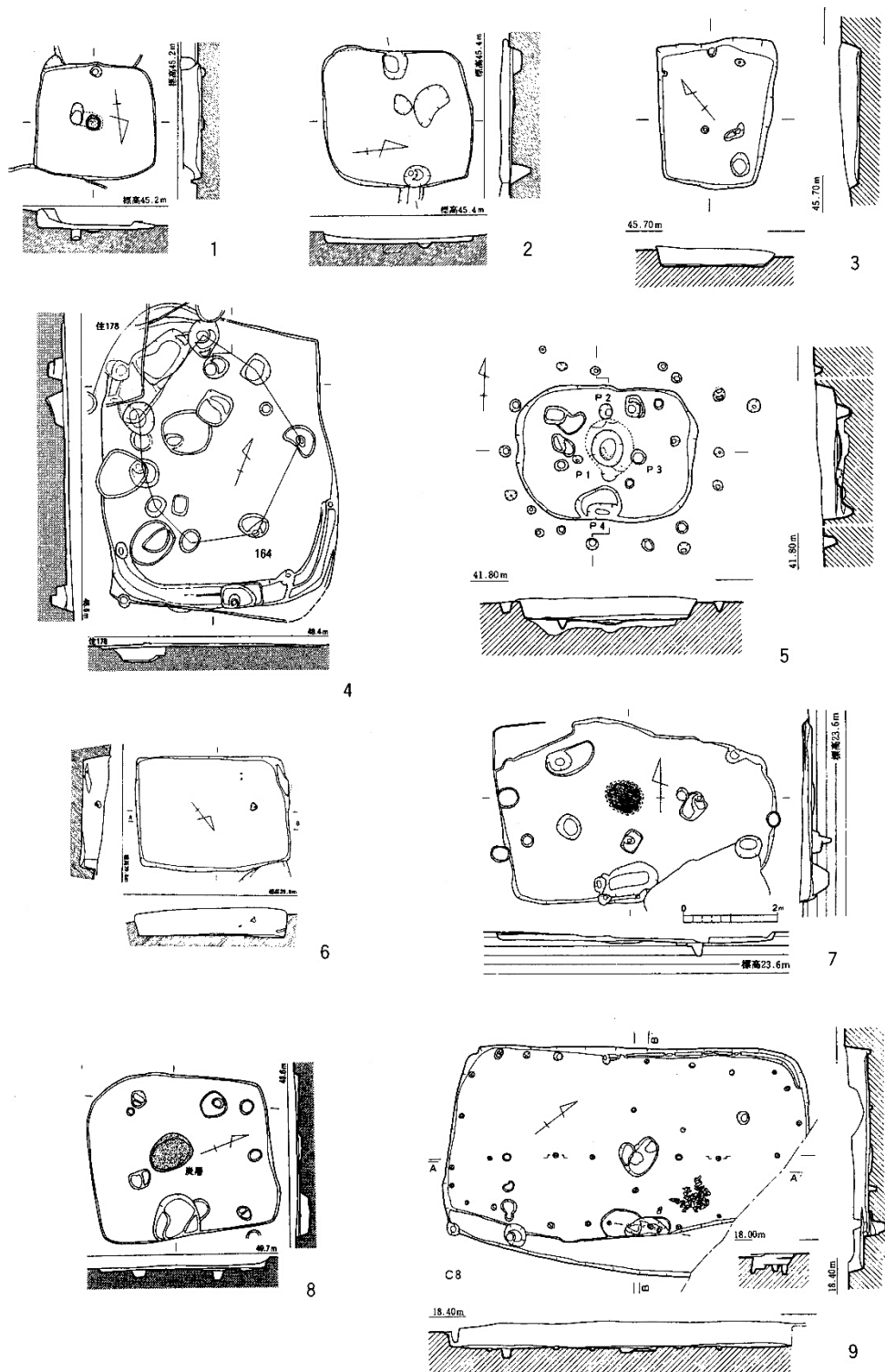
方形プランの住居の増加と相まって、「方形松菊里型類似住居」も確認される。松菊里系住居と方形住居が融合した構造のものと考えられる。

小判型住居は短辺の中央が外側に膨らみを持って張り出し、短辺自体が丸みを帯びる。小判型住居の初現時期は板付Ⅱb 式期で、大刀洗町下高橋馬屋元遺跡で 1 軒確認されている。その後、三国丘陵地域でも板付Ⅱc 式から城ノ越式期まで検出されているが、その数は少なく、分布の中心は段丘上の遺跡である。須玖Ⅰ式期になると検出数が大幅に増加し、炉も明確になる。小郡中尾遺跡Ⅱ区 9 号住居のように一定の間隔を持って壁際をめぐる小ピットが検出されることが多く（第 17 図）、ほかにも同遺跡 14 号住居や小坂井屋敷遺跡 1 号住居、小郡若山遺跡Ⅲ区 3 号住居などが類似した特徴を持つ。また、不規則ではあるが、小郡中尾遺跡Ⅱ区 13 号住居、大坂井遺跡Ⅰ区 5 号住居にも壁際に小ピットが認めら



第 15 図 小形円形住居類例 (s=1/100) (山崎ほか 2008)





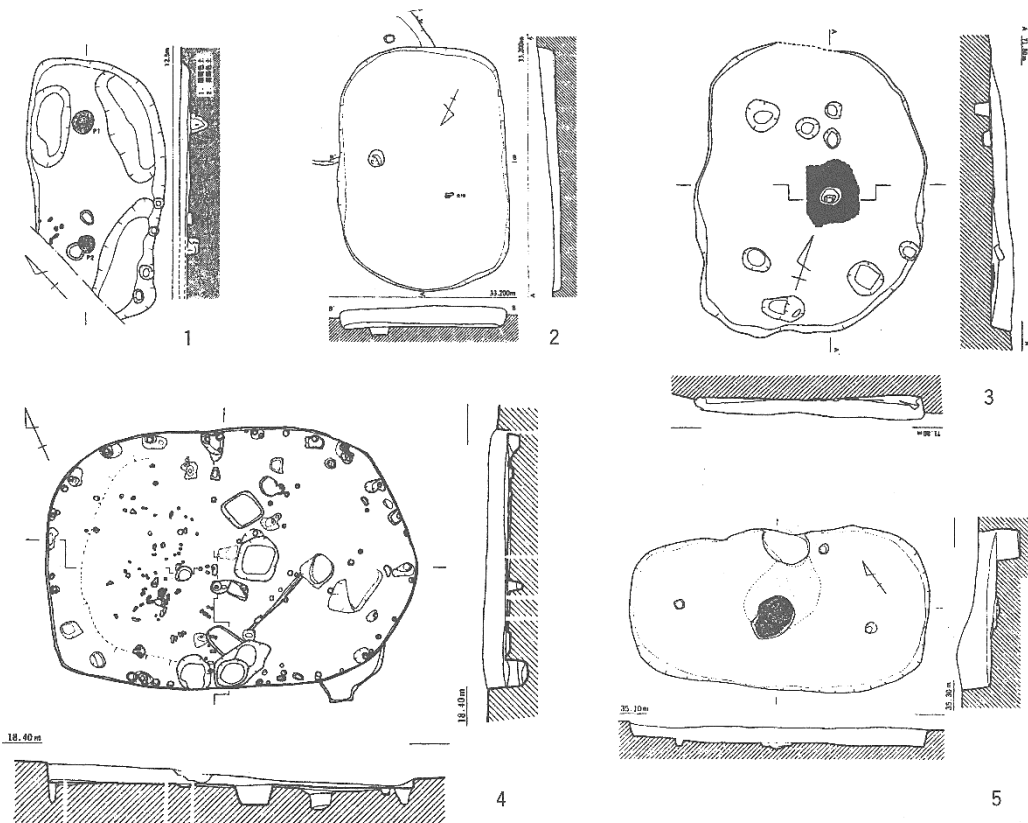
第 16 図 方形系住居類例 (s=1/150) (山崎ほか 2008)

- |                          |                        |                       |
|--------------------------|------------------------|-----------------------|
| 1. 津古土取 C20 (板付Ⅱa (新))   | 2. 津古土取 C18 (板付Ⅱb (古)) | 3. 一ノ口ⅠC32 (板付Ⅱb (新)) |
| 4. 貝元 C164 (板付Ⅱb (新))    | 5. 一ノ口ⅠC51 (板付Ⅱc)      | 6. 井の浦 C4 (城ノ越 (古))   |
| 7. 津古東宮原Ⅳ区 C16 (城ノ越 (新)) | 8. 貝元 C277 (須玖Ⅰ)       | 9. 小郡若山3区 C8 (須玖Ⅰ)    |

れる。

やや視野を広げると、春日市門田遺跡、石尺遺跡、須玖タカウタ遺跡の同時期の住居にも確認できる (小澤 2006)。丘陵斜面段状型住居とともに比較的短期間の消長をたどる特徴





第 17 図 小判型住居類例 (s=1/150) (山崎ほか 2008)

1. 下高橋馬屋元 2 区 C19 (板付 II b)    2. 三沢北中尾 1 区 C16 (板付 II c)    3. 勝負坂 J 区 C1 (城ノ越 (新))  
4. 小郡中尾 2 区 C9 (須玖 I)    5. 北松尾口 II 区 C11 (須玖 I)

的な住居形態である。

## 5. 各集落の構造—住居構成—

### ①力武内畑遺跡 (第 18 図)

力武遺跡群は三国丘陵の東南端に位置する標高 15～17m の低位段丘から沖積低地にかけての遺跡群で、弥生時代前期初頭 (板付 I 式併行期) 前後の集落が生産域・居住域セットで検出された。低地部では井堰、流路群、水田畦畔、段丘上では段丘を横断する溝、住居跡 5 軒、掘立柱建物数軒、貯蔵穴 33 基、土坑などを検出した。また、東側の段丘際には弥生時代前期初頭～前期前葉 (板付 I 式併行期～II a 式古段階) までの貯蔵穴群 (30 基程度) が密集する形で検出されている。段丘を横断する溝は力武内畑 4 区・10 区で断続的に調査されており一連の溝と判断できる。検出幅 0.8～1.4m、深さ 0.5m から 1 m を測り、断面逆台形状を呈する。推定延長約 180m で、その大溝に区画される段丘面はおよそ北西—南東方向に 135m、北東—南西方向に 180m の範囲となり、2.4 万平方メートルの広さである。遺跡は、地形の高い北側が一定の削平を受けた可能性が考えられるが、弥生時代前期の遺構群や遺物の分布は大溝を越えないので、溝は集落の北限を示すと考えられる。

板付 I 式併行期の住居構成は、主に松菊里型住居で構成される円形住居 4 軒と方形住居 1 軒である。7-3 区では、調査区外に及ぶが直径約 10m の大形竪穴建物を検出した。中央土坑とその両側に 2 本柱穴があり、その外側に 4 本主柱を持つ松菊里型住居である。それぞれの柱穴には切り合いがみられ、建て替えが行われていることがわかる。この竪穴建

物は南側に柵列や区画溝を有しており、力武弥生集落の中心となるものと推定される。

掘立柱建物は段丘上で数軒確認され、いずれも一間×一～二間の広さで6～18平方メートルのものである。

## ②津古土取遺跡

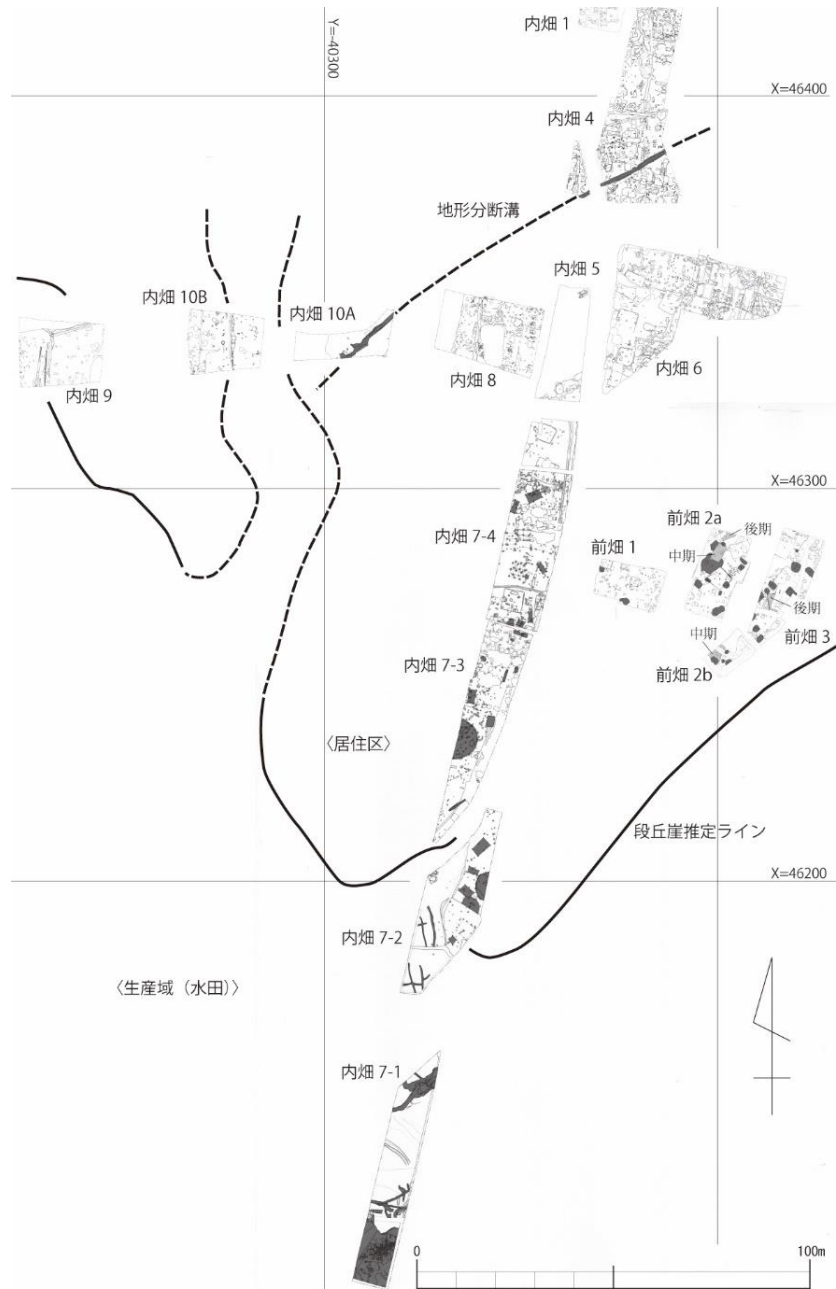
(第19図)

三国丘陵東部に位置し、北側に宝満川支流の宝珠川が流れている。標高42m～47mの独立丘陵上に前期前半から後半に属する住居跡26軒、貯蔵穴・土坑209基、甕棺墓3基、土壇墓14基が検出された。また、谷部では縄文時代晩期の包含層、丘陵部にも晩期の甕棺墓1基が確認されている。

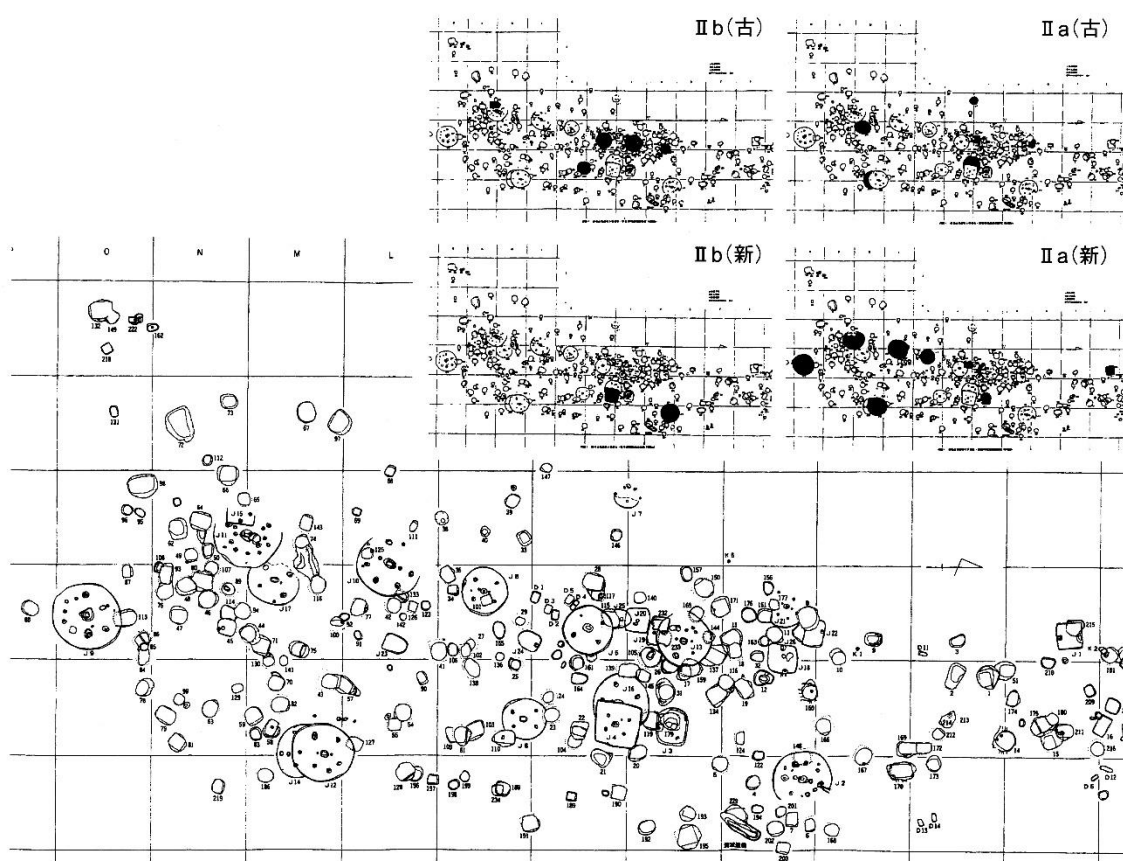
当遺跡は、限定された期間営まれた集落であり、板付Ⅰ式併行期に続く集落の様相が明らかなものとして重要である。Ⅱa式期古段階では円形住居4軒と方形住居2軒が確認できる。方形住居2軒と円形

住居1軒は小形である。丘陵頂部は空間地になっている可能性

がある。4本柱松菊里派生型住居が出現している。Ⅱa式期新段階では円形住居5軒と小形の住居（方形主体、一部橢円形有か）の立地が分かれる。この段階で多支柱松菊里系住居が出現している。この集落で最も多くの住居が確認できる時期である。Ⅱb式期古段階では円形3軒、方形2軒の構成である。円形は多支柱松菊里系、4本柱松菊里派生型住居がみられる。続くⅡb式期新段階では円形1、方形1の2軒に減少する。この時期の方形住居は円形住居と規模に近いものになっている。方形が4本柱、円形が多支柱松菊里系住居である。方形住居は4本柱松菊里派生型と同じ支柱配置で、何らかの影響が考えられる。



第18図 力武内畑遺跡遺構配置図(s=1/2000)



第 19 図 津古土取遺跡住居変遷図 (s=1/800)

なお、松菊里型土器がⅡa式期新段階の貯蔵穴から出土している（その他にも松菊里文化の影響を受けた可能性のある土器が散見される）。住居構造だけでなく、松菊里型土器の出土も含めて朝鮮半島由来の生活様式がみられる点で当遺跡は注目される。

### ③横隈鍋倉遺跡（第 20 図）

三国丘陵の東端に位置し、標高は 30～39mを測る。本遺跡の弥生時代集落は前期後半から末、後期前半を中心に営まれる。前期集落は 29 軒の住居跡と 43 基の貯蔵穴からなり、丘陵頂部付近に集落が展開する。出土遺物が少なく詳



第 20 図 横隈鍋倉遺跡遺構配置図 (s=1/1200)

細時期を絞り込めるものが少ない。この時期の住居跡は円形住居 10 軒、方形系住居 16 件などである。円形住居の規模は 4～7 m で支柱構造は 4 支柱のものが 4 軒と比較的多い。方形系住居の規模は 1 辺が 4 m 前後で、4 支柱の 1 軒を除くと、はっきりしない構造のものが多い。最も規模が大きい住居は頂部付近に位置する板付Ⅱc 式期の径 7.6 m の多支柱松菊里系住居である。

板付Ⅱb 式～Ⅱc 式期の住居跡と貯蔵穴の一部からは朝鮮系無文土器が出土し、特に南東側の斜面一角に多く見られる。

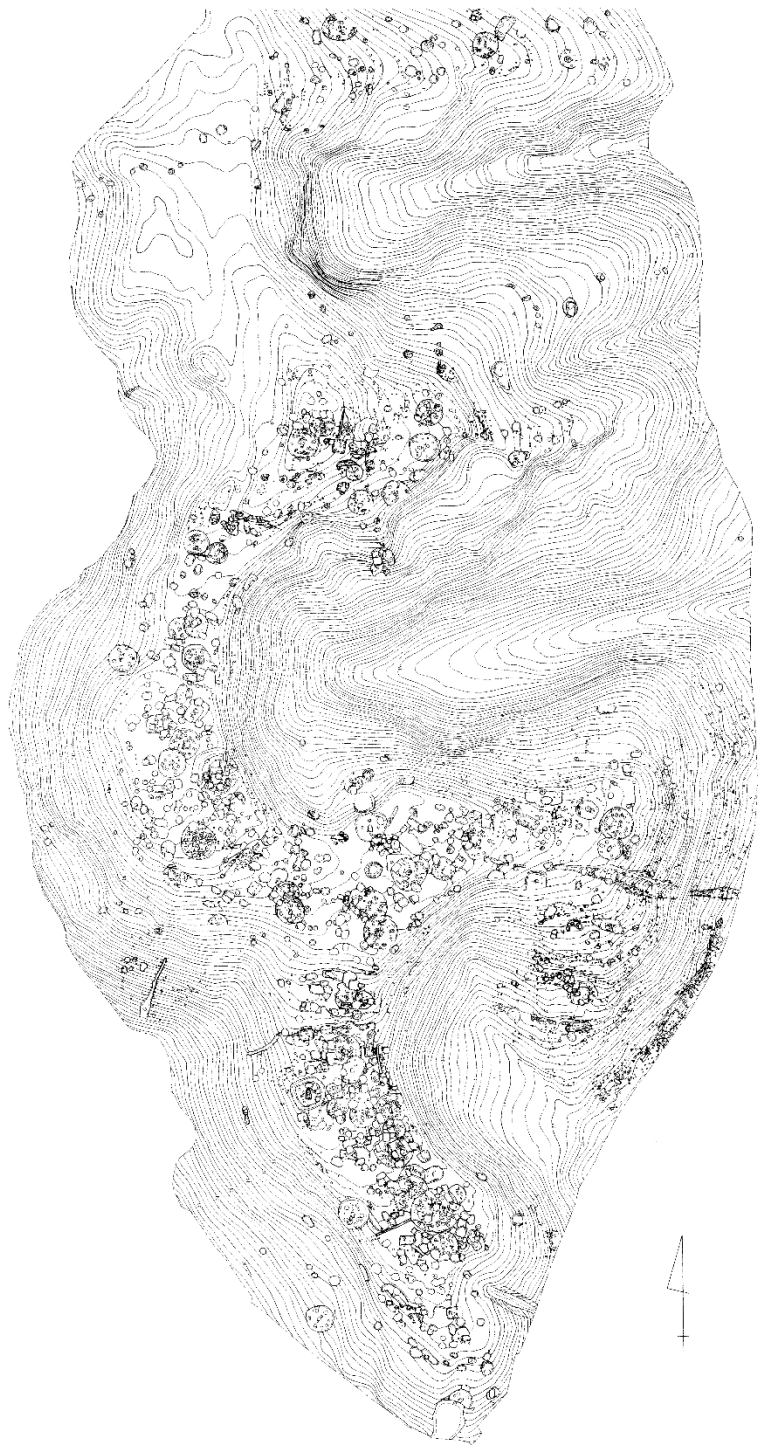
ほかにも柳葉形磨製石鏃、有柄式磨製石剣の出土がある。

無文土器の出土状況や無文土器と弥生土器の出土割合（無文土器 54：弥生前期土器 197）から、当遺跡が完結した渡来人集団であったとはいえ、既存集落の一部に渡来系集団が居住していたものと思われる。当遺跡では周辺の集落に比べて円形松菊里型住居の割合が低く、方形系住居が高い。方形系住居には斜面立地のものも多く、韓半島の集落構造とも親縁性がうかがえる。

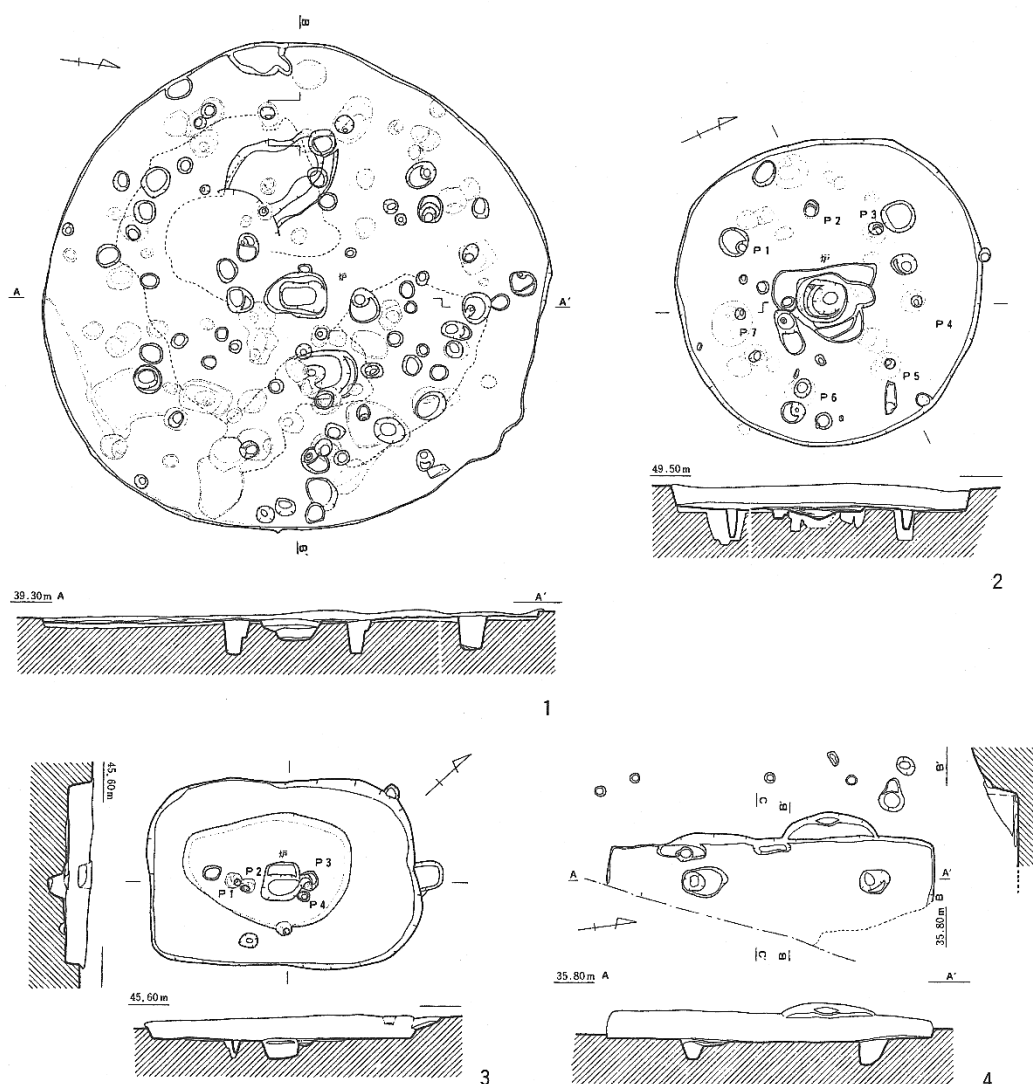
#### ④一ノ口遺跡（第 21・22 図）

三国丘陵東部に位置する。南北 450 m、東西 190 m、標高 32～49 m を測る独立丘陵に立地し、東側から 3 か所に小さな谷が入り込み、その結果 4 か所の突出部分を持つ。弥生時代前期後半から中期前半に至る集落が主体で、住居跡 119 軒のほか掘立柱建物 4 棟、貯蔵穴 279 基、道状遺構 7 条、柵列状ピット群などが検出された。中期初頭から中期前半の初期鉄器資料が確認されており、城ノ越式期の 26 号住居からは板状鉄斧が出土している。

弥生時代前期後半から中期前半までの住居跡 119 軒の内訳は円形系プランが 54%、方形系プランが 36% の割合を示す。今回は詳細時



第 21 図 一ノ口遺跡 I 地点遺構配置図 (s=1/1800)



第 22 図 一ノ口遺跡Ⅰ地点の住居 (s=1/150)

1. 円形松菊里系住居 (C61・城ノ越新)
2. 円形松菊里派生型住居 (C50・板付Ⅱb 古)
3. 松菊里型類似長方形住居 (C3・城ノ越古)
4. 丘陵斜面段状型住居 (C108・板付Ⅱc)

期が確定できる円形系住居 49 軒、方形系住居（丘陵斜面段状型住居含む）24 軒を対象とした。方形系住居は、ほとんどが長方形状を呈し、正方形のものはすくない。ほかに、須玖Ⅰ式期の小判型住居が 1 軒検出されている。

住居跡は丘陵頂部の平坦面に集中する。北松尾口遺跡Ⅱ地点に多く見られる丘陵斜面段状型住居数が少なく対照的である。板付Ⅱa 式期新段階には、直径 7 m 程の円形松菊里系住居が 2 軒確認される。板付Ⅱb 式期古段階になると、直径 4～8 m の円形松菊里型住居が 7 軒に長方形住居が 3 軒（うち 1 軒は丘陵斜面段状型住居）、板付Ⅱb 式期新段階には直径 4～8 m の円形松菊里類住居が 6 軒に長方形住居が 2 軒（うち 1 軒は丘陵斜面段状型住居）確認される。板付Ⅱc 式期には直径 11m を超えるものも検出され、円形松菊里類住居 8 軒と長方形住居が 5 軒（うち丘陵斜面段状型住居 2 軒）が確認される。この時期に方形系住居が増加する。城ノ越式期古段階では、円形松菊里類住居が 11 軒に長方形住居が 3 軒（うち丘陵斜面段状型住居 2 軒）確認される。城ノ越式期では直径 10m 近い大型円形住居が引

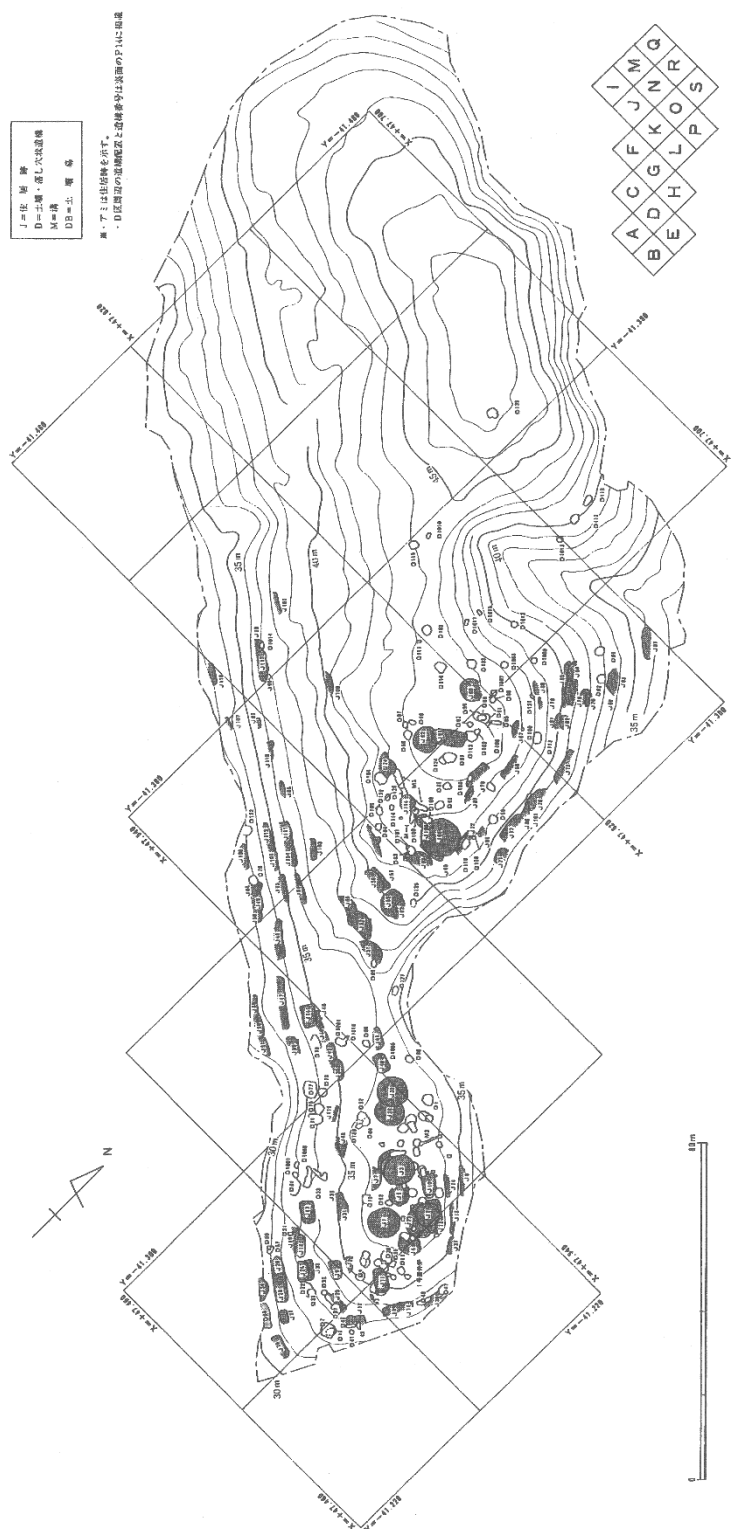
き続き確認できる。城ノ越式期新段階は円形松菊里類住居が9軒に丘陵斜面段状型住居が1軒、須玖I式期では、円形松菊里系住居が6軒に長方形住居が4軒（丘陵斜面段状型住居）みられる。大形の円形松菊里系住居の規模は7m台までやや下降する。

一ノ口遺跡は比較的長期間の集落であるが、住居形態や規模、立地（分布）において大きな変化がない。全時期を通して円形住居は径5～6mが大半を占め、7m以上のものが16軒（うち1軒は11mを超える）である。方形系住居は長辺3～5mが多く、6mを超えるものもある（図）。全時期を通して、円形住居は丘陵頂部、もしくは尾根部に立地し、方形系住居は円形住居に付随、もしくは斜面上に立地する傾向が強い。これは、列島における韓半島の松菊里文化と粘土帯土器文化が融合されたものと考えてよいだろう。

#### ⑤北松尾口Ⅱ遺跡（第23・24図）

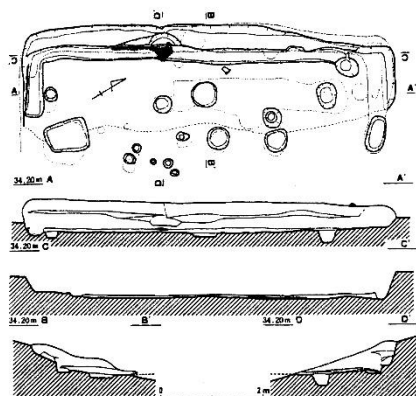
北松尾口遺跡Ⅱ地点は三国丘陵東部に位置し、北松尾口遺跡Ⅰ・Ⅲ地点及び一ノ口遺跡Ⅰ地点に挟まれた300m程の舌状に延びる標高30～47mの丘陵上に立地する。遺構は舌状丘陵の東南先端部に集中している。

弥生時代前期後半から中期の住居跡117軒、土坑125基（うち貯蔵穴66基）、溝4条、土壇墓4基等が検出された。住居形態には、円形、長方形、小判形もあるが、丘陵斜面段状型の住居が多く築かれていることが特徴である。一ノ口遺跡と同様に中期前半の初期鉄器資料が確認されている。

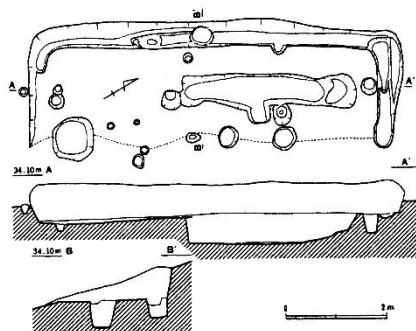


第23図 北松尾口遺跡Ⅱ地点遺構配置図(s=1/1800)

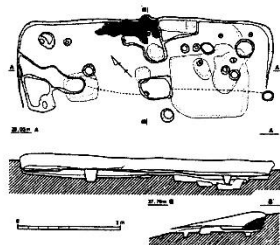




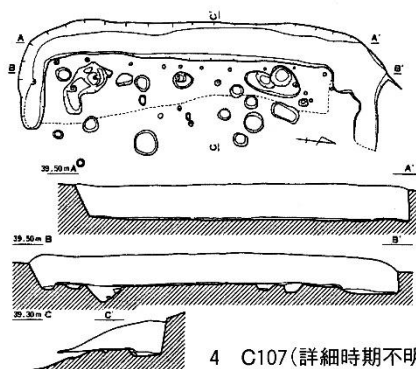
1 C8(須玖 I)



2 C16(城ノ越(新))



3 C77(須玖 I)

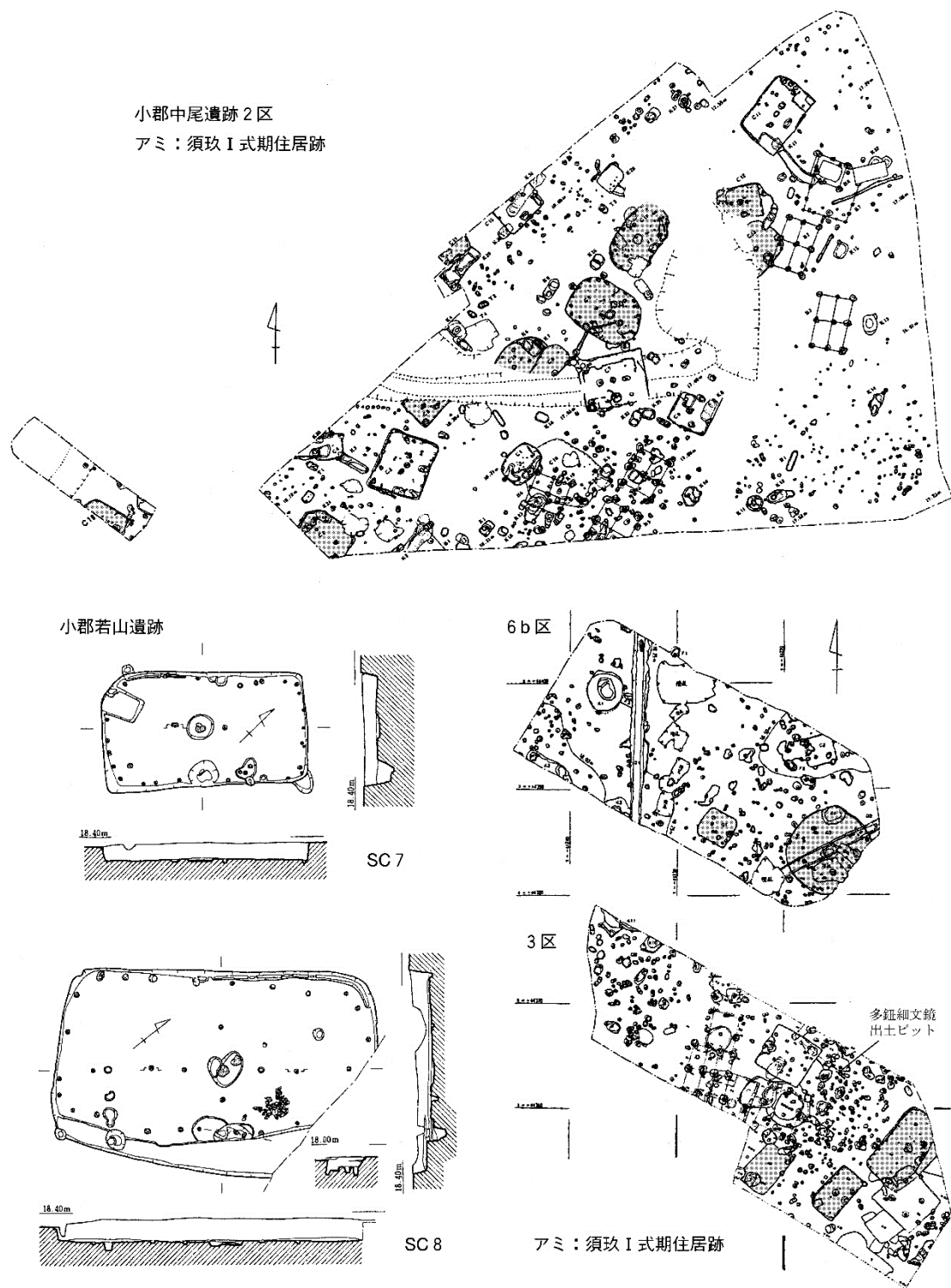


4 C107(詳細時期不明)

第 24 図 北松尾口遺跡Ⅱ地点の丘陵斜面段状型住居(s=1/150)

丘陵斜面段状型住居は長方形住居に近い形状であるが、検出時には標高の低い側の長辺が確認されず、両端および標高の高い一辺の長辺からなる。もともとは住居掘削土を丘陵斜面側に盛土して平坦面を造作して造られた住居である。ただ、分布から全てが流出によるものだと考えられない。支柱構造は2柱のもの、壁際に柱が複数並ぶものもあるが、多くの場合、支柱がはっきりしない。炉は11軒で確認され、深さは5～30 cm程度である。

今回抽出した時期・規模がわかる住居は78軒で、板付Ⅱb式期に始まり須玖Ⅰ式期において最盛期を迎える。板付Ⅱb式期古段階では、斜面に丘陵斜面段状型の住居1軒が確認されている。一番古い住居が丘陵斜面段状型で興味深い。板付Ⅱb式期新段階では丘陵頂部に円形松菊里類住居3軒および小判型住居1軒が築かれる。板付Ⅱc式期では、丘陵頂部および緩斜面に円形松菊里系住居2軒、斜面に丘陵斜面段状型住居5軒が築かれていて、城ノ越式期古段階では丘陵頂部・緩斜面に円形松菊里系住居2軒、長方形住居1軒、斜面に丘陵斜面段状型住居3軒、小判型住居1軒が築かれる。この段階までは、さほど各形式の住居数の増減はみられないものの、城ノ越式期古段階において小判型住居が出現する。城ノ越式期新段階では、丘陵頂部および緩斜面に円形松菊里系住居3軒、斜面に長方形住居3軒、丘陵斜面段状型住居8軒が築かれ、丘陵斜面段状型住居が増加している。須玖Ⅰ式期には、丘陵頂部および緩斜面に円形松菊里類住居5軒、斜面に長方形住居4軒、丘陵斜面段状型住居28軒、小判型住居4軒が築かれ、全体的に増加を見せる。また、47号住居は丘陵斜面段状型住居でも非常に規模が大きく、超時期12.96mを測る。



第 25 図 小郡中尾遺跡・小郡若山遺跡遺構配置図 (s=1/600)

各形式の住居の立地は円形松菊里類住居が丘陵頂部および緩斜面、丘陵斜面段状型住居及び長方形住居、小判型住居が斜面立地と分かれている。当遺跡で特徴的である丘陵斜面段状型住居の長軸規模は須玖 I 式期に約 13m といった大型のものが認められるものの、各時期を通じて 3.5～7.5m に集中している。特筆すべき点は、方形・長方形系の住居跡 12 軒の壁際に炭化物・焼土が塊状をなして検出されている。



## ⑥若山遺跡（第 25 図）

小郡市北部の三国丘陵は南に行くに従い緩やかに下り、小郡市中部で中位から下位の段丘面となって広がる。この段丘面では弥生時代前期後半から集落の進出が始まり、集落は中期前半から中頃になると盛行する。特に大板井遺跡や小郡間が遺跡周辺では須玖Ⅰ式期新段階で以降の分布範囲が南北 700m、東西 900m の広範囲に及ぶ。本節にあげる 2 遺跡は広義では、この小郡・大板井遺跡群に含まれる。

小郡若山遺跡は小郡官衙遺跡北西、標高 18～19m に立地する。弥生時代集落は中期前半と後期後半に営まれている。須玖Ⅰ式期では住居跡 6 軒、掘立柱建物 1 棟、土坑 22 基、祭祀土坑 3 基、溝 4 条、周溝状遺構 1 基等がみられる。なお、埋納ピット内からの多鈕細文鏡の出土は著名である。

住居跡は径 8 m を測る多支柱円形松菊里派生型住居 1 軒、1 辺 3～4 m を測る方形住居 2 軒、長軸 4.5～7.5m、短軸 3～4 m を測る隅丸長方形住居 3 軒（小判型に近い）からなる。方形住居には 2 支柱のものが 1 軒、長方形住居には小ピットを中央に規則的に配し、同規模のピットを壁際に巡らすものが 2 軒認められる。

## ⑦小郡中尾遺跡（第 25 図）

小郡中尾遺跡 2 区は小郡若山遺跡 3 区・6 区の西方約 200m に位置し、標高 18～19m を測る。遺跡の主体は弥生時代中期前半から後期中頃の集落で、住居跡 18 軒、掘立柱建物 8 棟、土坑 32 基、甕棺墓 4 基、土壇墓 1 基等で構成される。須玖Ⅰ式期に所属する住居跡は 10 軒を数える。住居跡の全容は削平により不明であるが、方形系住居 4.5 軒、小判型住居 5.6 軒程度で構成され则认为られる。規模が明らかなものでは、方形系住居は一辺約 3～4 m を測り、小判型住居は長軸が 7 m 前後、短軸は 2.5～5 m のものがある。支柱構造は不明なものが多数で、2 支柱の方形系住居が 1 軒認められた。

これらの集落において、松菊里類住居は非常に希薄であり、小郡中尾遺跡 2 区では非松菊里類住居で構成されている。これに加えて、小郡中尾遺跡では小判型住居の比率が非常に高く、他の集落に例を見ない。したがって、須玖Ⅰ式単純期の短期間に展開した小郡若山遺跡と小郡中尾遺跡の集落は、当地域でも特異な様相を呈する集落で、新出の集落と考えられる。

## 6. まとめ

以上のように各住居形態についての様相と変遷を検討し、次にそれら個別の住居形態が各集落においてどのような構成をもち、時系列で変化していくのかを確認した。

最後に、三国丘陵周辺地域の住居動態についてまとめ、今後の展望を示しておく（図 21）。

## 【縄文時代晩期（黒川式～夜臼式）】

三国丘陵地域では、住居資料が確認されていない。周辺の朝倉地域では多くの住居資料がみられ、方形プランを中心に長方形プランも確認される。支柱ははっきりしないものが、壁際に柱列が巡る構造のものもある。朝倉市楠田遺跡、小覚原遺跡、クリナラ縄文遺跡、柿原Ⅰ遺跡、二十谷遺跡、畑田遺跡で確認されている。方形・長方形プランで占められる状況であるが、朝倉市長田遺跡では小形の円形住居が 1 軒確認されている。

## 【夜臼Ⅱb式・板付Ⅰ式併行期（突帯文土器で占められる時期）】

当地域では、この段階で「松菊里型住居」の流入が確認できる。筑前町大木遺跡、小郡市上岩田遺跡でみられる。大木遺跡では方形系住居も確認できる。松菊里型住居は「中央

2 柱」と「4 本柱」構造が見られ、流入の段階ですでに両者が存在し、床面積の違いにより選択的に採用された住居形態ととらえている（柴尾 2006）。当地域においても早い段階で両者が出揃うが住居規模はいずれも径 4 ～ 6 m のもので、それほど機能分化がはっきりしていない段階である。

また、当地域ではこの時期、円形住居主体（「松菊里型住居」の流入）に移行するが、わずかながら長方形住居も確認できる。朝倉市畑田遺跡では「松菊里型住居」の流入が確認されず、伝統的な方形・長方形プランの建物が依然、主流をなしている。

#### 【板付Ⅰ式併行期】

板付Ⅰ式併行期になると、松菊里型住居は「中央 2 柱」、「4 本柱」がみられ、方形系住居も混在している。当該期を示す資料は、力武内畑遺跡で良好なセット関係がうかがえる。力武内畑遺跡では直径 10m を超える突出した規模の 4 本柱円形松菊里型住居がみられる。また、小形円形住居のみが確認される三沢栗原遺跡もある。少数であるが方形系住居も見られ、その支柱ははっきりしないものが大半である。

#### 【板付Ⅱ a 式古段階】

この時期は「松菊里型住居」にとってのひとつの画期となる。すなわち、流入当初から存在する「中央 2 柱」、「4 本柱」に加えて「多支柱」円形松菊里系住居が出現する。中央 2 柱を持つ「松菊里型住居」の特徴的構造は未だ崩れないが、柱穴が多支柱になる点が日本的な新しい変化である。円形「松菊里型住居」の支柱構造の変化は、床面積の規模と相関していくことは先に確認したとおりであるが、この段階ではまだ規模の分化が緩やかである。依然、少数ではあるが、方形系住居がみられる。当該期では津古土取遺跡で良好な資料がみられる。

#### 【板付Ⅱ a 式期新段階】

この時期は「松菊里型住居」にとって、続く第 2 の画期となる。前段階で「中央 2 柱」、「4 本柱」、「多支柱」円形松菊里型／系住居が出揃うが、この段階では中央 2 柱を持たない「松菊里派生型住居」（「4 本柱」、「多支柱」円形のもの）が出現する。また、中央 2 柱・中央土坑の属性変化が生じる段階である。「松菊里型」の規制から離れ、様々な変容形が発現する時期である。その様子は津古土取遺跡の集落（住居）変遷で明らかである。依然、少数ではあるが方形系住居が見られる。

#### 【板付Ⅱ b 式期古段階】

この時期は、円形松菊里型住居の前段階の変容傾向がさらに顕著になり、多支柱円形松菊里系住居が増加する。この段階以降、規模も多様化していく状況が確認できる。依然、少数ではあるが方形住居がみられる。当該期では、一ノ口遺跡で、円形松菊里類住居が主体（松菊里型／系住居＞派生型住居）となり、方形住居が付随する状況が確認できる。また、北松尾口遺跡Ⅱ地点において丘陵斜面段状型方形住居が初出する。

#### 【板付Ⅱ b 式期新段階】

引き続き、円形松菊里類住居については、多支柱円形松菊里系住居の割合が高い傾向がある。この時期において、中央 2 柱の松菊里型／系住居が再び散発的に出現するが、中央土坑の形態や支柱間の距離、規模などの特徴を考慮すると、プロトタイプの松菊里型住居から変容した形態のものである。

方形系住居は少ないながらも、やや増加の兆しをみせる。この時期の横隈鍋倉遺跡は松菊

里類住居の件数が他の集落に比べて極端に低く、方形系住居が多く検出されている。朝鮮系無文土器が目立って検出される集落ではあるが、松菊里類住居の割合の低さについても、横隈鍋倉遺跡を特徴付けるものとなっている。そこには、新たな集団の存在を内包している。それに対し、一ノ口遺跡は前代と同様、円形住居が方形系住居を凌駕している。円形住居は専ら松菊里系住居で占められる。それに対し、三沢蓬ヶ浦遺跡では松菊里系住居と派生型住居の割合が同等に近い。集落ごとに住居構成に違いが存在する。

#### 【板付Ⅱc式期】

引き続き、円形松菊里型住居については、多主柱円形松菊里系住居の割合が高い傾向が続く。円形住居はこの段階で大形化が顕著に進んでいる。この時期のトピックとしては、方形松菊里型類似形態の住居が見られることである。韓半島や粕屋町江辻遺跡で見られる古い段階の方形松菊里型住居からの連続した変遷が当地域では追えず、また、中央土坑、2柱の規模、距離などの変容したものである。この段階において、円形／方形の平面形を超越した主柱構造が採択されて出現したものと考えておきたい。方形系住居は平面形態が長方形を採るものが増加の兆しを見せる。主柱構造は依然、はっきりしないものが大半である。立地にも左右されようが、方形系住居は一辺の辺を大きくすることによって、床面積を増やす傾向がうかがわれる。また、丘陵斜面段状のものが多くみられるようになる。一ノ口遺跡では、この段階以降、方形系住居の割合が少しずつ増加していく。また、この段階で確実な小判型住居が出現している。

#### 【城ノ越式期古段階】

松菊里類住居の主要形態は引き続き、円形多主柱のものである。そのなかでも、極めて円形多主柱松菊里系住居の割合が高い。この段階では、4本柱方形松菊里類似住居がわずかながら出現する。前代の2柱構造からの変化がたどれる。城ノ越式古・新段階では、中央2柱が短軸方向に並ぶものも出現している。方形系住居は長方形住居への傾倒が進む。一ノ口遺跡や北松尾口遺跡では円形住居のうち、多主柱松菊里系住居がほとんどを占め、派生型住居が非常に少ない。三沢北中尾遺跡2地点では、大形円形松菊里類住居と小形方形系住居がセットになる状況が看取できる。

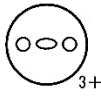
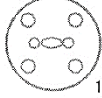
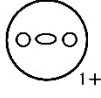
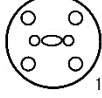

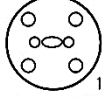


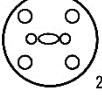
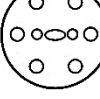

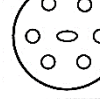

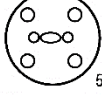
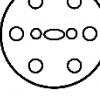
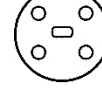
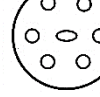
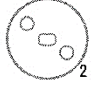
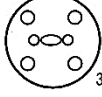
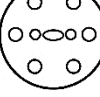
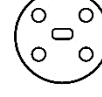
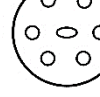
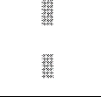










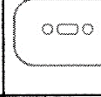


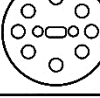

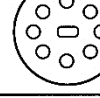
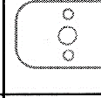

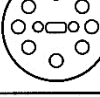

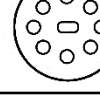
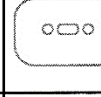

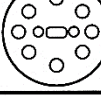

#### 【城ノ越式期新段階】

松菊里類住居の主要形態は引き続き、円形多主柱のものである。特に円形多主柱松菊里派生型住居はこの時期に最も多く確認できる。4本柱の松菊里系住居、派生型住居の割合は極端に低い。三沢蓬ヶ浦遺跡では円形住居のほとんどが多主柱派生型住居である。方形系住居は長方形住居に主体があり、規模がやや大形になる。方形系住居は長方形住居へ傾倒がさらに進む。一ノ口遺跡では集落存続全時期において、松菊里系住居が松菊里派生型住居の検出数を凌駕し続けている。一ノ口遺跡と比べ、北松尾口遺跡では丘陵斜面段状型住居が多く、方形系住居も割合が高いが、円形住居構成については、松菊里系住居で占められている。引き続き三沢北中尾遺跡2地点では、大形の円形松菊里型住居に小形の方形系住居がセットになる状況が看取できる。

#### 【須玖Ⅰ式期】
















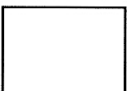
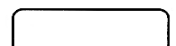




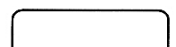






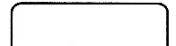
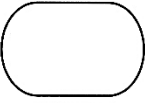

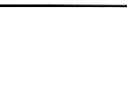
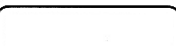
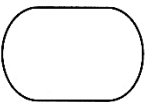

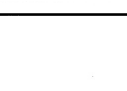

この段階は住居様式において大きな画期となる。円形住居の各形式の抽出数はさほど前時期と変化はないが、方形系住居、丘陵斜面段状型住居、小判型住居の検出数が飛躍的に増加する。この段階から円形住居から方形系住居へ主体が移行する。三沢北中尾遺跡2地

三国丘陵周辺の住居変遷図

	円形松菊里型/系			円形松菊里派生型		方形松菊里型類似
	中央2柱	4本柱	多主柱	4本柱	多主柱	
縄文時代晩期						
夜臼Ⅱb～板Ⅰ (突帯文で占められる時期)	 3+	 1				
板付Ⅰ式併行期	 1+	 1				
板付Ⅱa式(古)	 1	 1	 1			
板付Ⅱa式(新)	 1	 2	 5	 3	 3	
板付Ⅱb式(古)	 1	 5	 13	 4	 5	
板付Ⅱb式(新)	 2	 3	 12	 2	 5	
板付Ⅱc式	 1	 3	 12	 1	 3	 2
城ノ越式(古)	 1	 1	 16	 2	 2	 3  1
城ノ越式(新)		 1	 16	 1	 10	 +  1
須玖Ⅰ式			 14	 1	 5	 3  1
須玖Ⅱ式			 5		 2	

〔凡例〕※それぞれの住居型式(縦軸)のなかでの消長を示した図。右下には、2006年3月時点の集成数を表記。  
※松菊里型住居は須玖Ⅱ式まで、その他は須玖Ⅰ式までを対象。

第26図① 三国丘陵周辺の住居変遷模式図

	小形円形	方形	丘陵斜面段状	小判型
縄文時代晩期		 		
夜臼Ⅱb～板Ⅰ (突帯文で占められる時期)			 1	
板付Ⅰ式併行期	 1+	 1  +		
板付Ⅱa式(古)		 1  1		
板付Ⅱa式(新)		 1  1		
板付Ⅱb式(古)		 2  2	 2+	
板付Ⅱb式(新)		 3  4	 5+	 1
板付Ⅱc式	 1	 2+  4+	 10+	 2
城ノ越式(古)			 9+  7+	 +
城ノ越式(新)	 1		 8+  10+	 3+
須玖Ⅰ式		 5  30	 30+	 16
須玖Ⅱ式		 		

※+は、集成対象外のものから想定。

※丘陵斜面段状の数値は、一ノ口遺跡、北松尾口遺跡からの算出。

第 26 図② 三国丘陵周辺の住居変遷模式図

点でその状況が明らかである。前段階までは大形の円形松菊里類住居が主体で、小形の方形系住居がセットとなっている状況がみられたが、この段階では円形松菊里派生型住居 1 軒、方形系住居 6 軒、小判型住居 1 軒になっている。特に、方形系住居の規模が全時期に比して大きくなっている点が注目される。

円形住居では 4 本柱円形松菊里系住居が見られなくなる。また、方形系住居では再び方形の住居が確認されるようになるが、主体は長方形住居・丘陵斜面段状型住居である。方形住居に比べ、長方形住居の規模が大きい。小判型住居は検出数が大幅に増加し、この時期に壁際をめぐる小ピットが見られることもひとつの特徴である。小判型住居は小郡中尾遺跡 2 で特徴的に多くみられる。

### 【須玖Ⅱ式期】

松菊里類住居が確認される最後の時期である。既に 4 本柱松菊里派生型住居が姿を消し、この段階まで多支柱円形松菊里系住居、多支柱円形松菊里派生型住居が少なからずみられる。直径 8～12m の規模が大きいものが残存している。

この時期では狭義の三国丘陵上にはほとんど住居が確認されておらず、三国丘陵より標高の低い中位～低位段丘周辺部で多く確認できるようになる。すなわち、大きく集落の立地が動き、集落再編が行われている。方形系住居は集落立地が中位～低位段丘上に変化することもあり、丘陵斜面段状型住居は見られなくなる。引き続き、前代の方形主体の傾向が続き、この段階までで円形住居が完全に姿を消すことになる。小判型住居も引き続き確認できる。

住居形態は集団の出自と深い関わりがあることが指摘されている一領域である（松本 2002）。当地域では夜臼Ⅱb 式・板付Ⅰ式併行期の「松菊里型住居」流入にあたって、在来的要素・伝統の強い方形系住居と渡来系要素と考えられる新出の「松菊里型住居」が、集落によって違う構成を示すことである。筑前町大木遺跡では松菊里型住居と少数の方形住居が検出される一方、朝倉市畑田遺跡では縄文時代晩期から方形系主体の伝統が色濃く残り、板付Ⅰ式併行期以降でも松菊里型住居の流入はみられない。墓制は支石墓を受容しているが、住居形態が変化しない。小郡市上岩田遺跡では環濠を有し、松菊里型住居のみ（環濠外）で構成されるようである（山崎 2014a）。今後、土器や石器などの状況も加えて検討しなければならないが、藤尾慎一郎氏が福岡平野で想定する弥生開始期における集団の違いが当地域でも存在する可能性は高い（藤尾 1999）。

板付Ⅰ式併行期には三国丘陵末端部に完成した灌漑施設を持つ力武内畑遺跡が出現する。松菊里型住居主体の集落ではあるが、方形系住居も存在することが注目される。なお、松菊里型住居を切る形で長方形住居に建て替えがあることが重要である。一方では三沢栗原遺跡のように、依然小形円形住居と方形系住居で構成されと思われる小規模な在来系集落も確認される。

板付Ⅱa 式期までは、在来系／渡来系集団の住居にそれぞれの規定・伝統が強く働いていたと思われる。特に松菊里型住居での本来の諸属性が板付Ⅱa 式期古段階までは確かながら規定が存在している状況は確認したとおりである。その後、松菊里型／系住居が加速度的に主要な住居形態となり、そのなかで多様な形態（構造）が創出されていく。板付Ⅱa 式期新段階になると、松菊里型／系住居を大きく規定している中央 2 柱や中央土坑の変



質、住居規模の大型化を目指した多支柱化も顕著になる。在来系譜の方形系住居や小形円形住居も少なからず存続し、途絶えることはない。「松菊里型住居」変容の第1画期は板付Ⅱa式期新段階で先行し、在来系統と考えられる小形円形・方形系住居の変化する時期、多様化する時期が板付Ⅱb式期から進むと考えられる。ここには、新たな集団の移住（粘土帯土器文化）も影響しよう。

なお、当地域では朝鮮系無文土器の出土が多く、その観点からも渡来系集団を強く意識させられる。松菊里型土器が力武内畑遺跡、津古土取遺跡で出土している。共伴する土器は力武内畑遺跡で板付Ⅰ式併行期、津古土取遺跡で板付Ⅱa式新段階のものである。その後、引き続き、円形粘土帯土器が板付Ⅱb式期以降の集落から多く出土する。特に、出土が多い横隈鍋倉遺跡では松菊里類住居が他の集落よりも少なく、方形住居が多い。この集落の住居構成の位置づけには注意が必要である。故地において方形系住居をもつ集団の渡来も考えるべきであろう。

板付Ⅱc式期においては、各種の住居型式が出揃う。方形系松菊里類似住居も出現し、住居形態（構造）の融合が進み、新たな形態である小判型住居の出現もみられる。円形粘土帯土器の出土から、当地への渡来も幾たびかにわたり行われていたことは明らかであり、故地での住居構成の変化も同様に持ち込まれよう。この段階以降、もともとの出自・住居形式の枠組みを超えて、様々な文化要素が融合し新たな集団の創造、個性が強く表徴されていくようだ。それを端的に示すのが、各集落における住居構成の違いである。例えば、近接する丘陵上に立地する一ノ口集団と北松尾口集団の集落構成の違いである。また、小判型住居の出現も新たな集団の住居形態であろうか。特に小郡中尾遺跡など特定の集落に多い特徴があり、その可能性が考えられる。

須玖Ⅰ式以降、松菊里型住居主体の円形住居が衰退し、方形住居へ移り変わるが、ここにも大きな社会変化が影響しているものと思われる。松菊里系住居は、当地域では中期後半（須玖Ⅱ式（新））まで存続する。ただ、この段階では主体は方形住居・小判型住居（図24）に移行しており、とりわけ、大形の円形松菊里系住居が存続している特徴がみられる。中期後半代を中心とする大刀洗町下高橋馬屋元遺跡では、方形プランのもので専ら占められる。これには、地域性がみられ、筑前地域福岡平野では中期後半段階でも円形松菊里系住居が主体を占めている。また、玄界灘沿岸から豊前北部では後期段階まで円形松菊里系住居がのこるといわれる〔吉留 1995〕。福岡平野では中期後半代の比恵・那珂遺跡では、大形の円形住居があり、小形の方形住居や円形住居が付随するあり方がうかがわれるのに対し、調査地点や削平の影響なども一部にはあろうが、有田遺跡などでは専ら円形住居群で占められている（吉留 1999）。

特に、三国丘陵地域では独立丘陵という地形に制約される住居形態、丘陵頂部の円形住居、斜面上の段状型住居などがあったが、やはり立地や集住の変化などが影響し、住居形態に変化をもたらしたものと考えられる。当初は出自や伝統に規制されていた住居形態も、それらに対応していく過程で柔軟に変化していったものと思われる。それと併せて、構造的な変化も生じよう。大型円形住居が資材面や経済的に維持が難しい状況や、簡易な建て替えが可能な住居形態が生み出されるなど、それぞれの住居形態における構造上の特長についても検討する視点が今後必要になってこよう。

【註】

（１）中央２柱の有無で分類した、松菊里型／系住居と松菊里派生型住居を併せて、松菊里類住居と呼称する。学史的な意味合いで使う場合は、「松菊里型住居」としている。

（２）２００６年３月刊行報告書までの集成では、筑後地域の弥生時代早期～中期前半の竪穴建物数は９８５軒（うち円形松菊里型／系住居１７６軒、円形多主柱松菊里派生型住居１７８軒、円形４本柱松菊里派生型住居３０軒、方形松菊里類似住居１１軒）に上る。なお、三国丘陵（筑後地域部分）では、竪穴建物数５６８軒（うち円形松菊里型／系住居１０７軒、円形多主柱松菊里派生型住居８６軒、円形４本柱松菊里派生型住居２４軒、方形松菊里類似住居１０軒）になる。これらには詳細時期を考古学的に確定できないものもある。

## 第2章 弥生時代の生業と集団像

弥生時代の生業はどのようなものだったのか、それにより集団がどのように変化したのか。三国丘陵の弥生集落では水田や谷水田だけでなく、はたけも検出されており、遺構・遺物・自然科学的分析等から多角度の分析が可能である。低丘陵地帯における食料獲得と生産について、当時の集団関係や地域社会の形成と関連づけて理解する。

### 第1節 弥生時代の植物利用～現状と課題～

#### 1. はじめに

弥生時代は米作りを生業とした稲作農耕文化であり、それにより大きく社会が変化したとされる。実際、日本考古学では黎明期よりコメや水田の探索に大きな時間を費やしてきた（日本考古学協会編1961ほか）。水田遺構の発見や炭化米の発見、木製農具の変遷、石製農具の変遷等、弥生時代の水田稲作の具体的な状況が明らかになりつつある。一方で、イネ以外の栽培植物についての研究は佐賀県菜畑遺跡から出土した植物種実の同定成果（笠原1982）や寺沢氏らによる本格的な出土種実の集成研究をまたなければならなかった（寺沢・寺沢1981ほか）。近年では、自然科学的な研究（微化石や大型植物化石、土器種実圧痕のレプリカ法）も進められ、より多様で具体的な弥生時代の植生や植物利用の姿が示されつつある。弥生時代の環境や植生、それに対する人間の働きかけや関わり方、または人の関与による植生等の環境変化については狭義の考古学または自然科学の一方のみの研究では具体的に叙述することはできない。進みつつある植物資料の解明や探索とこれまで石器などの道具や土器の法量・用途などの諸属性、あるいは遺跡の立地や生産関連遺構の検出などによって検討されてきた植物栽培や農耕の発展の議論と併せて十分に検討されるべき課題である。

#### 2. 植物利用復原における各分析手法の特性と展望～

##### （1）各分析手法の特性と問題点

弥生時代を中心とした植物利用復原について、様々な方面からのアプローチが可能である。しかし、いずれも扱う資料の確実／不確実性（年代や混入の可能性の有無、具体的な機能など）の問題を抱えており、個別の分析手法のみで復原できる植物利用や人と植物との関わり合いの復原には限界性を持っている。諸成果の総合的な理解により、今後、より確かな弥生時代の植物利用の具体像が明らかにされていくものと思われる。各分析手法の特性を理解したうえで、今後の植物利用復原に向けた方向性を模索する。

##### A. 植物利用を規定・制限する気候と環境

縄文時代から弥生時代にかけて、気候は大小の変動を繰り返しており、その影響で植生が変化し、人間活動の変化が対応する。

花粉分析による九州地方の植生変化は（第1表）、氷河期時代の冷涼気候から、温暖期へと移行する紀元前8,000～6500年の時期では、落葉広葉樹が優占し、気候が温暖化した紀元前6,500～2,500年の時期では、落葉樹林に変わって照葉樹林が発達する。九州における照葉樹林の発達開始期は、北部九州で紀元前6000年と推定されており、低地では、紀元前4,000年前のいわゆる縄文海進最大期前後に落葉広葉樹がほぼ消滅し、照葉樹林がその最盛期に達したと考えられている。縄文海進期以降の減暖傾向に伴う冷涼期の紀元前2,500～紀元後500年の時期では、わずかな気温低下が生じる。九州地方以外の地域では針葉樹

や落葉広葉樹の増加が想定されているが、九州地方では照葉樹林の状態が続くと考えられている。現在と同じような植生となる紀元後 500 年以降では、照葉樹林が衰退し、人里植物や雑草、マツ属などが弥生時代中期～古墳時代にかけて急増しはじめる（畑中ほか 1998）。

気候の寒冷化は列島への農耕の伝播と関わりがあり（宮本 2009）、その後、農耕の発達に伴う土地開発が自然環境に対して大きな影響を与えるよう

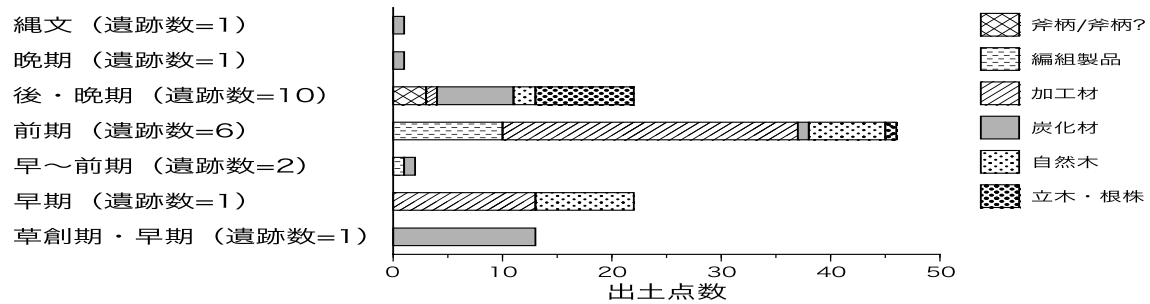
に変化する。当時の環境・植生復原は弥生時代の植物利用理解の前提となる重要なファクターであるといえるが、分析特性としてより大きなタイムスケール・範囲での環境変化を示すことに適している。すなわち、考古学での遺跡の分布論・変遷や遺跡の立地環境の変化、動態を明らかにした上で、気候、土地条件、人間活動による自然への干渉などに起因して生じる遺跡周辺の植生変化を自然科学的な手法から検討することが可能である。例えば、先に示したとおり、北部九州における遺跡と砂丘・砂堤の形成期の検証から寒冷期を推定する研究があり、黒川式～山ノ寺式の砂丘上のクロスナ（植物の腐食土層）の形成を寒冷化に伴う海退減少であると位置づけている（甲元 2008）。水月湖の粘綿堆積物の分析においても紀元前 1000 年～800 年にかけての小海退があり、寒冷期であったことが示される（福沢 1995）。こうした寒冷期が契機となって半島南部から渡来民が北部九州へ移り水稻農耕をもたらし、文化変容が行われた（註<sup>1</sup>）。また、田崎博之氏は、花粉分析やプラント・オパール分析を用いて福岡平野の初期水田と比恵・那珂遺跡群の集落遺跡の展開から、弥生時代における土地環境の利用と開発の契機を明らかにしている（田崎 1994・1998）。遺跡の消長と遺跡をとりまく環境変化は密接なかかわりを持ちつつ変遷し、また、社会変化とも組み合わさっており、こういったケーススタディの蓄積が望まれる。

## B. 植物利用研究（木材利用と出土種実の研究）

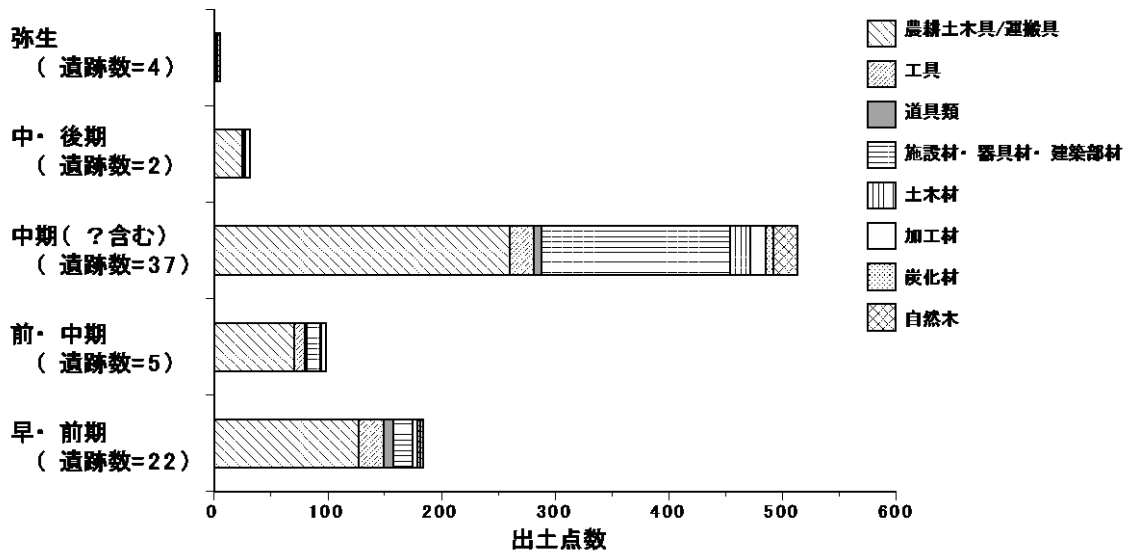
植物利用を端的に、また直接的に示すのが出土木製品から窺える森林資源利用や植物遺存体の分析である。しかし、植物遺体は遺構等との有機的関係が明白な場合や所属年代を年代測定等により押さえられる場合を除いては、対象資料は常に混入の可能性を考慮しておく必要がある。また、植物遺体資料は普遍的に出土するものではなく、一定の条件が揃う堆積環境の場合に出土するものであり、加えて調査者の目的意識がなければ、径の細かい種子等についての検出は難しい。この分野では近年レプリカ法が普及し、肉眼で確認しにくい圧痕資料の微小な種実同定が可能となり、水洗選別法やフローテーション法による土壌水洗の積極的活用とも相まって、種実遺体の抽出・同定作業が飛躍的に普及・向上している。特に、2000 年以降に悉皆的に実施されるようになったレプリカ法による土器圧痕調査によって、種実や昆虫圧痕を徹底的に調査した結果、縄文時代から弥生時代への過

第 2 表 木本花粉と草本花粉の代表種時期別変遷（畑中ほか 1998 改）

年代		木本花粉	草本花粉
紀元前 8,000 年 ～ 6,500 年		ニレ属－ケヤキ属、 クマシデ属、 エノキ属－ムクノキ属、 アカメガシワ属、 コナラ亜属	
紀元前 6,500 年 ～ 2,500 年	初期	コナラ亜属、ブナ属、 クマシデ属、 ニレ属－ケヤキ属、 エノキ属－ムクノキ属	
		アカガシ亜属、シイ属、 ヤマモモ属、マキ属	
紀元前 2,500 年 ～ 紀元後 500 年		シイ属、アカガシ亜属、 ヤマモモ属、マキ属	
紀元後 500 年 ～ 現在		マツ属、スギ属 *スギ属はこの時期から出現する	イネ科、ヨモギ属、 タネツケバナ属、 ハコベ属、スイバ属、 タデ属、ソバ属



第27図 縄文時代のアカガシ亜属材の器種別割合 (伊東・山田編2012)

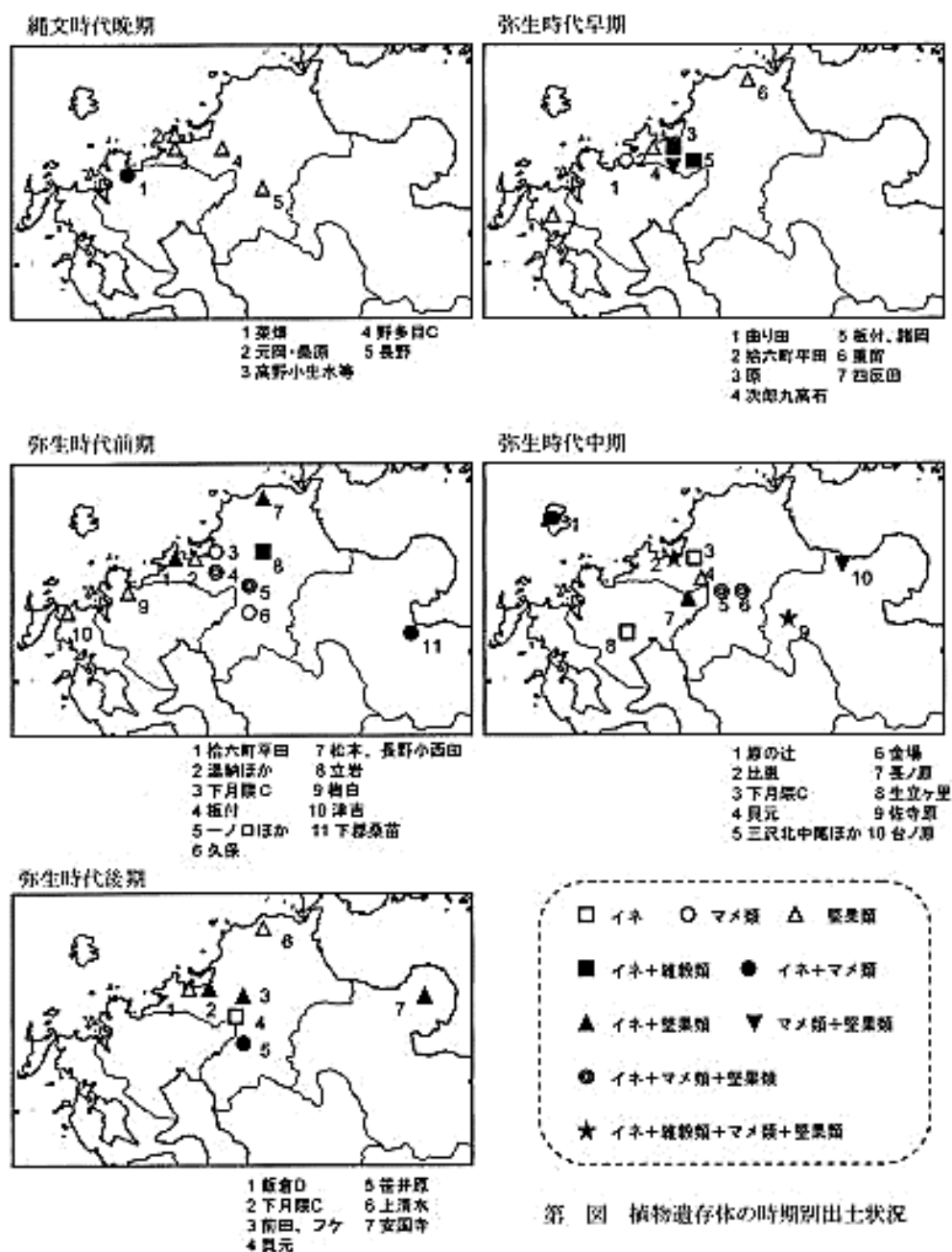


第28図 弥生時代のアカガシ亜属材の器種別割合 (伊東・山田編(2012)から作製)

渡期における栽培植物の導入や植物利用を正確な年代観のもとに捉えられるようになり、今後の成果に期待が寄せられる（小畑・真邊 2011）。

植物利用研究のなかでも種実利用の研究が進む一方、木材をはじめとする森林資源利用の研究は少ない。九州地方における植物利用は、食用となる草本植物資源の開発のみに留まっていたのか、あるいは東日本の落葉広葉樹林下でみられたようなクリやウルシの管理形態と同様な森林資源管理が行われていたのかを検討する必要がある（佐々木 2012a・b）。

九州地方の縄文時代から弥生時代において選択的な種実利用がみられるイチイガシを含むアカガシ亜属に注目して、その木材資源利用を通時的に検討した。樹種同定例そのものが少ないが、縄文時代の九州地方においては、用材にアカガシ亜属はほとんど利用されておらず、弥生時代になるとその活発な利用が窺える（第27・28図）。弥生時代になって大陸系磨製石器の普及に伴い、硬いアカガシ亜属の大径材利用が可能になり、各種製品の製作へと広がったと考えられる。照葉樹林が卓越する九州において資源管理の対象となる樹種とその周辺の2次林の構成種は木製品類と自然木とを合わせて解析すれば、資源利用の様相が少しずつ見えてくる可能性が高い。製品や加工木に対し、自然木の同定例は非常に少ない。自然木は、福岡県板付遺跡の弥生時代早・前期で3点と弥生時代中期で11点、同



第 29 図 植物遺存体の時期別出土状況

第 29 図 北部九州における植物遺存体の時期別出土分布（山崎ほか 2014）

県井相田 D 遺跡の弥生時代中期で 10 点出土しているのみであり、確認事例が極めて少ない。これは、自然木を樹種同定の対象としない調査が多いことにも起因する。そのため、弥生時代にアカガシ亜属の木材が集落のごく近くに生育していたのか、丘陵などのやや離れた場所に生育していたのかは現時点では不明である。

次に、畠作の比重が高い韓国無文土器時代農耕と相対的にその比重が低い弥生時代農耕を比較することは意味のあることである。

韓国考古学では、近年、植物遺存体の出土例が増加しており、また、これまでの出土資料の見直し作業が、安承模、李炅娥、小畑弘己、庄田慎矢らによって行われており、具体的な生業への言及が可能な土台が確立されつつある（安 2008a・b、李 2005、小畑 2008・





青銅器時代前期（無文土器時代前期）



青銅器時代中期（無文土器時代中期）



初期鉄器時代（無文土器時代後期）



原三国時代

第 30 図 韓国における植物遺存体の時期別出土分布（山崎ほか 2014）

2011、庄田 2009)。

最近では、中山氏らによる圧痕調査も進められており、新石器時代におけるアワ・キビを主体とした雑穀農耕が朝鮮半島南部の海岸部から内陸部にかけての広い範囲に広がっていた可能性が示唆された。また、青銅器時代前期～中期前葉の晋州大坪里遺跡からは、フローテーションの結果、アワ・キビに加えて、イネがセットで検出されている。このようなことから、アワ・キビは青銅器時代前期に稲作が導入された後も、重要な食料の構成要素として依然として主要な作物であることがうかがえ、水稻農耕と雑穀の畠作農耕が複合した当該期の農耕形態を裏付ける有力な手がかりとなりうるものである（中山他 2012）。それらに加えて、青銅器時代中期にはアズキやダイズが広くみられるようにな

り、原三国時代には中国から流入した果実類も認められ、より多様な食物組成への発展がみられる（安 2008b）。

列島（北部九州）では、弥生時代の大型植物遺存体を集成した寺沢薫・知子は、イネ以外の植物に着目するとともに、弥生時代の食料獲得活動が縄文時代からの伝統上で漸次的な変化を遂げたことを明らかにし、従来の認識に対し再考を迫った（寺沢・寺沢 1981）。さらに、後藤直は、近年の成果を用いて、弥生時代はイネを中心としつつ雑穀（アワ・ヒエ・キビ）とマメ類も栽培していた状況を追認している（後藤 2004a・b）。古くより資料の探索がイネ資料を対象としたものが多かったためにイネが圧倒的に多く見つかり、それに比べ畠作物の検出事例が少ない状況があったが、近年の成果を踏まえると北部九州でも畠作物・畠自体の依存度・生産性が低かったとは言えないことが分かる。

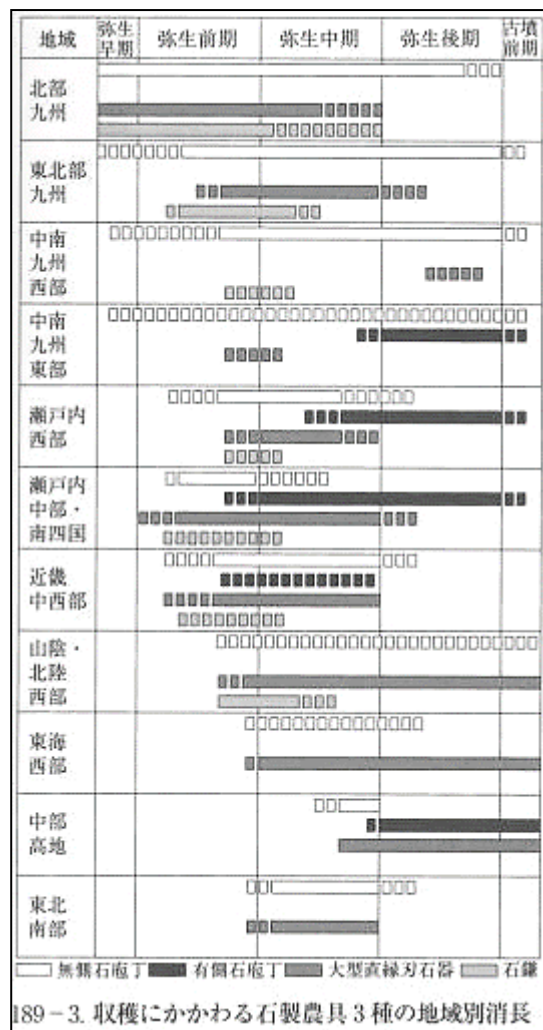
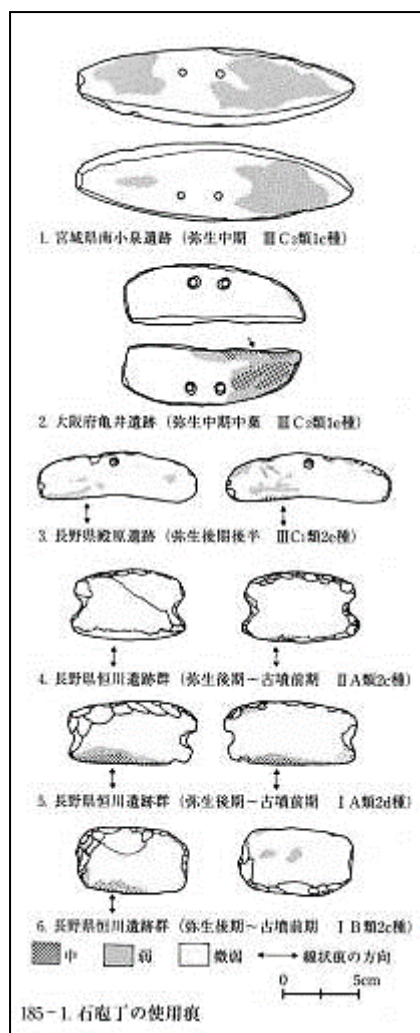
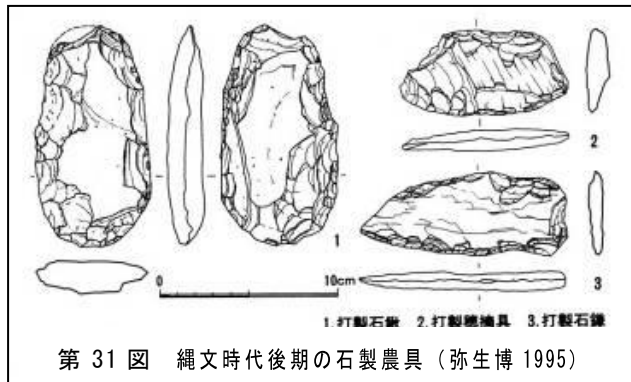
日韓それぞれの作物の組み合わせを示したが（第 29・30 図）、全体として畠作物事例も多く確認されるようになっており、特に、雑穀とマメ類とイネとは強く結びついていることが看取できる。弥生時代農耕はイネと畠作物の結びつきで成り立っていることが分かる。

### C. 道具からの推定

植物利用を間接的に示す道具類は、農具・収穫具・調理具としての石器や土器、木器類である。弥生石器研究では、古くは縄文時代から弥生時代への生業の変化、すなわち縄文農耕論を間接的に示す打製石斧や磨石、石皿等の縄文石器群の動態や水田稲作農耕に伴う大陸系磨製石器群の流入について関心が払われた（第 31・32 図）。

九州地方の縄文時代後・晩期における文化現象の大きな変革を生み出す要因として、後・晩期農耕論の提唱がある（小林 1939、坂本 1952、賀川 1966・67a・b・c）。主に、土掘り具としての打製石斧の存在、該期の石器組成から、集落規模の拡大とともに農耕の浸透が推測されてきた。

後期後半には、それまで低率であった打製石斧の急増がみられ、植物質食料への転換を示すものとして評価される。遺跡の立地では後期後半から晩期前半には火山灰台地への集落の集中と展開がみられ、農耕、特に根茎類の栽培に適した土地に立地する傾向があり、根茎類の利用は浅鉢の増加に窺える、東日本からのアケボノ技術の伝播・展開によって達成される。晩期中頃には、打製石斧の半減、磨製石斧の増加、石皿・磨石類の増加がみられ、遺跡の立地では山間部における小規模遺跡の分布がみられる。磨製石斧の増加を焼畑農耕の可能性と考え、小規模遺跡を出作り小屋的なものとする見方もあり、焼畑農耕の場合、打製石斧は除草具としての機能も考えられる。突帯文の時期は稲作農耕の開始期と目されるが、石器組成の変化では打製石斧の減少、大陸系磨製石器群の出現がある。遺跡立地は沖積地への進出が窺える。石鏃類の増加、石核の異常増加も指摘されており、狩猟活動の活発化と考えるよりも、稲作農耕文化の流入による社会変化（緊張）とも考えられている。なお、狩猟具である石鏃と植物質食料の採取具である打製石斧は量的変化が全時期を通して対称的に推移する（山崎純 1983）。近年では、土器内にみられる種実圧痕の検討が進められている。栽培植物の圧痕資料から中期には西北九州への韓半島からの焼畑農耕の伝播があり、その後、特に阿蘇山西麓に広がる火山灰台地の集落動向と併せて、後期後半以降の常畑農耕の可能性が指摘されるにいたっている（山崎純 2005）。また、後期後半以降の耕作具の打製石斧の増加、収穫具としての打製石庖丁・打製石鎌の存在からも



第 32 図 石製農具 3 種の地域別消長 (斎野 2002)

常畑農耕が推測されている (高木 1980・2007) (第 31 図)。

以上のような九州における縄文時代後・晩期における生業の変化は、東日本からの文化伝播の影響とする説 (木村・島津 1972、渡辺 1975、田中 1982) と朝鮮半島の畑作文化の影響とする説の大きく 2 者が存在する (甲元 2000、田崎 2002a、藤尾 2003、宮本 2003・05)。

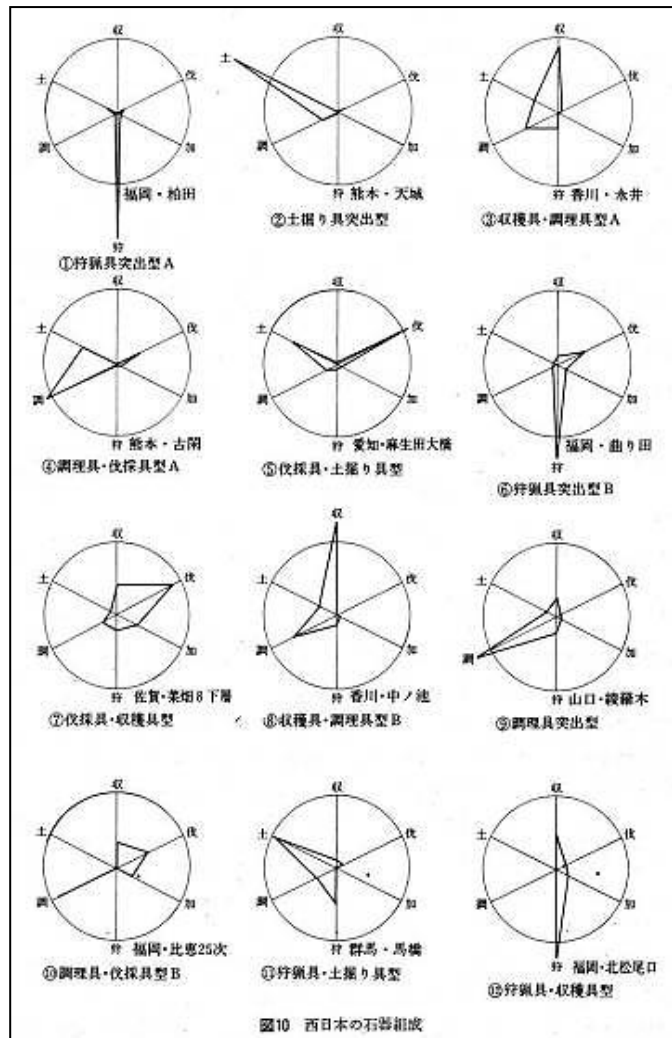
1970年代以降の佐賀県宇木汲田遺跡や菜畑遺跡、板付遺跡、曲り田遺跡などの調査成果から大陸系磨製石器群と縄文系譜の石器群に整理され、水田稲作受容期における石器様相や当時の日韓交渉の様子が示され（小田 1986、下條 1986）、それが基礎となって今日に至っている。石器研究は器種と機能の問題、時期比定の問題など解決すべき課題は多く、今後、更なる研究の進展が期待される。

石器組成研究では、縄文時代は植物質食料に大きく依拠した石器組成を示し、穀物栽培は存在しても生産基盤の中心に位置づけられることはなく、弥生時代はイネをはじめとする栽培作物が生業に組み込まれたもので、それぞれの地域で生業における稲作・畑作の有無、ひいては両者の程度を反映した組成を示す。石器組成の読み取りからは、弥生時代になると水稻栽培が特定の生業として選択され生産基盤の中心となり、縄文から弥生への転換は栽培を含む網羅的な生業体系から穀物栽培を中心とする選択的な生業体系への変化と位置づけられている（第 33 図）（藤尾 1993）。

石器組成研究は機能研究の上に成り立ち（第 32 図）、加えて集落の立地・性格、生産遺構の検討、自然科学的分野からの環境復原、植物遺体研究の成果を踏まえた形で、それらから復原されるどのような環境下において、どのような石器組成がみられるのかを再度、詳細に分析し、生業モデルを再構築する必要がある。問題点として、個体数の数え方、破損率（壊れやすさ・壊れにくさ）の考慮、コンタミネーションなどがあげられ、統計的に資料を扱ううえで留意する事項も多い。

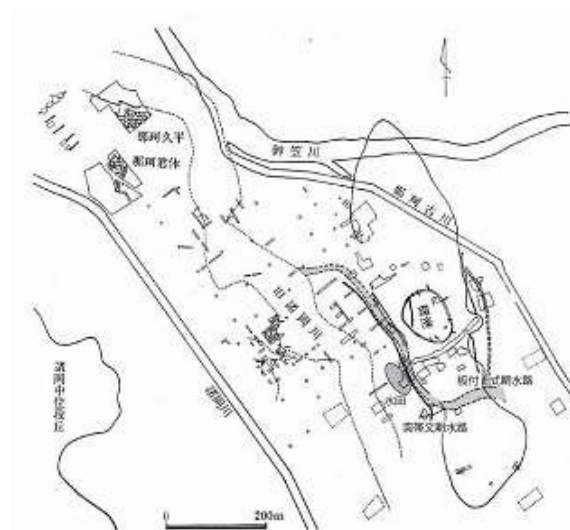
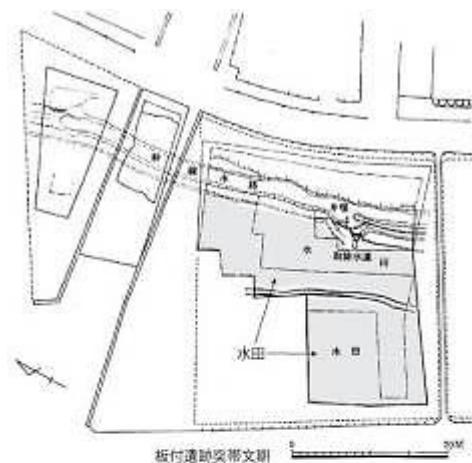
#### D. 生産関連遺構や貯蔵施設からのアプローチ

植物利用、特に栽培作物について、考古学的な証左となるのが、水田や畠等の生産関連遺構である。しかし、この種の遺構の取り扱いには慎重を要する。所属時期の問題もさることながら、水田遺構や畠遺構で何が作付されていたのかを明らかにする必要がある。水田遺構の検証にはプラント・オパール分析が有効であるし、畠遺構には植物遺体の探索により、作付植物を明らかにする手続きが必要となろう。自然科学的分析を加えることによって、遺構自体の残りが悪い場合にも、水田や畠遺構としての位置付けが可能となる。

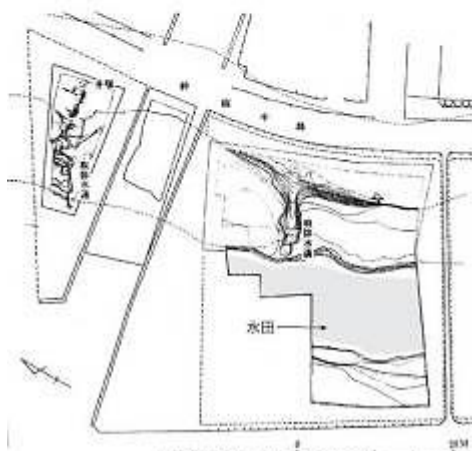


第 33 図 西日本各地域における石器組成（藤尾 1993）

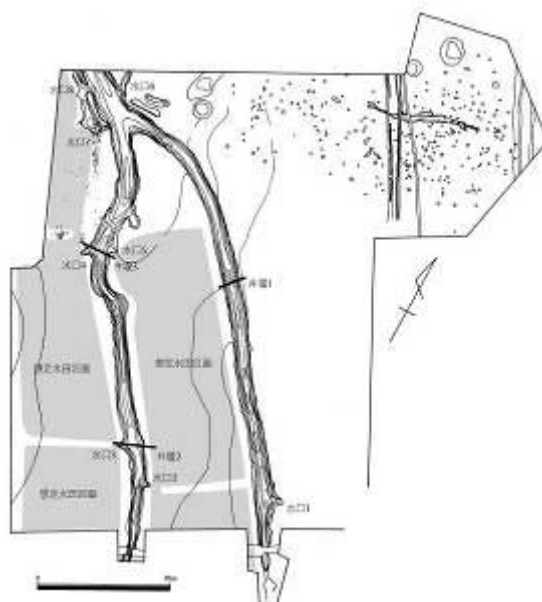




第 34 図 板付遺跡周辺の水路と水田  
(山崎純 1987 加筆)



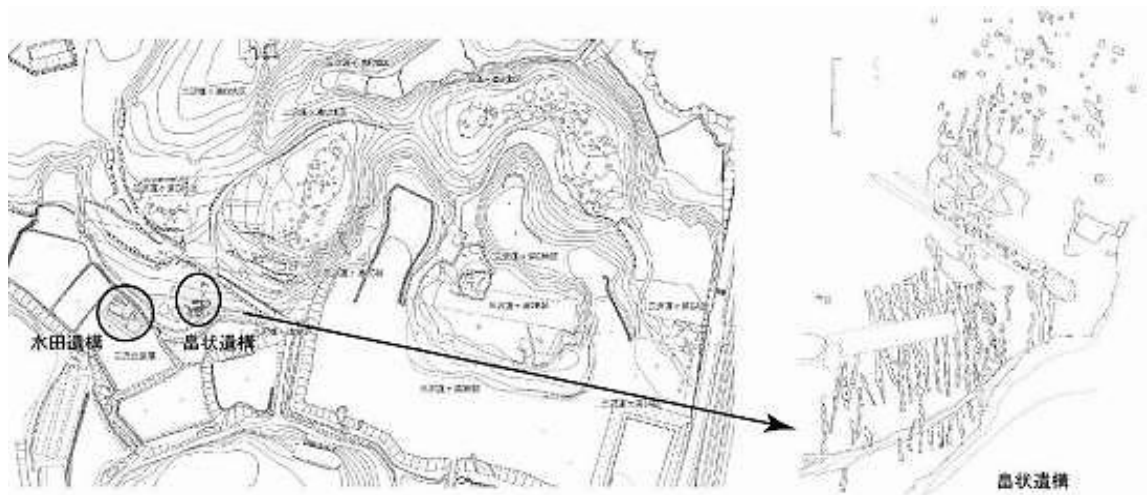
第 35 図 板付遺跡 G7 調査区の井堰  
(吉留 2004 加筆)



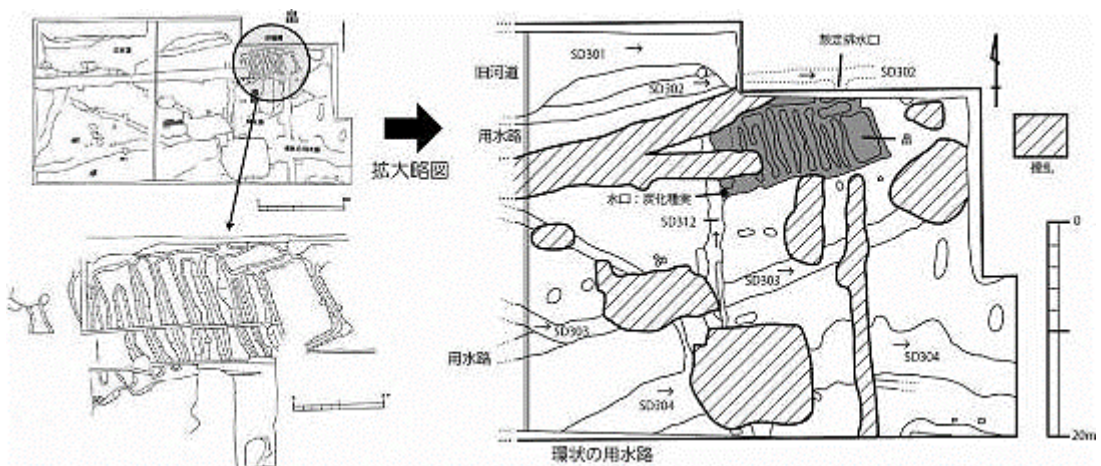
第 36 図 野多目遺跡の水田 (福岡市 1987)

北部九州においての水田稲作研究は板付や菜畑を端緒として長い歴史を持っている。調査で検出された水田も多くみられるものの、北部九州では水田面構造が良好に遺存しているものが少ないこともあって、灌漑技術についての研究が進展している（第 34～36 図）。近年では灌漑技術形態の類型化が深化しており、稲作農耕の発展過程や稲作農耕の集約化の状況も議論されるに至っている（山崎純 1987、田崎 1998・2002b、常松 2003、吉留 2004a・b、山崎頼 2005b、ほか）。

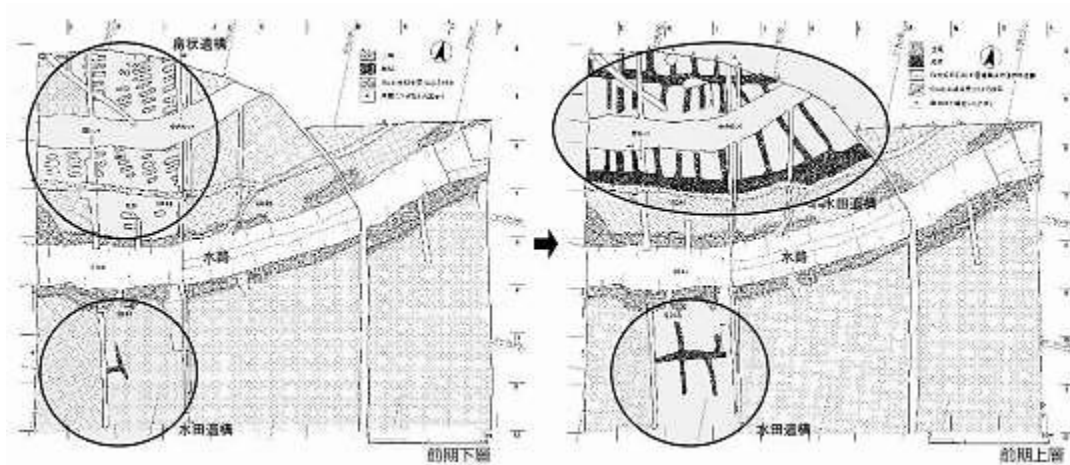
近年、弥生時代初期の畠遺構の検出例が増加しており、このなかには水田との関係を論じることのできる重要な調査事例が見られる（第 37～38 図）。福岡県三沢蓬ヶ浦遺跡では 周辺の遺構群とともに、弥生時代前期後半から中期初頭の土地利用の状況が明らかにされている（第 37 図）（小郡市 2004）。プラント・オパールの結果では、イネが検出されており、このイネは隣接の三沢公家隈遺跡の谷水田で検出されたプラント・オパールと



第 37 図 三沢蓬ヶ浦遺跡の畠（小郡市 2004 加筆）



第 38 図 庄・蔵本遺跡の畠（徳島大学 2007 加筆）



第 39 図 筋違遺跡の畠（三重県埋文 2007 加筆）

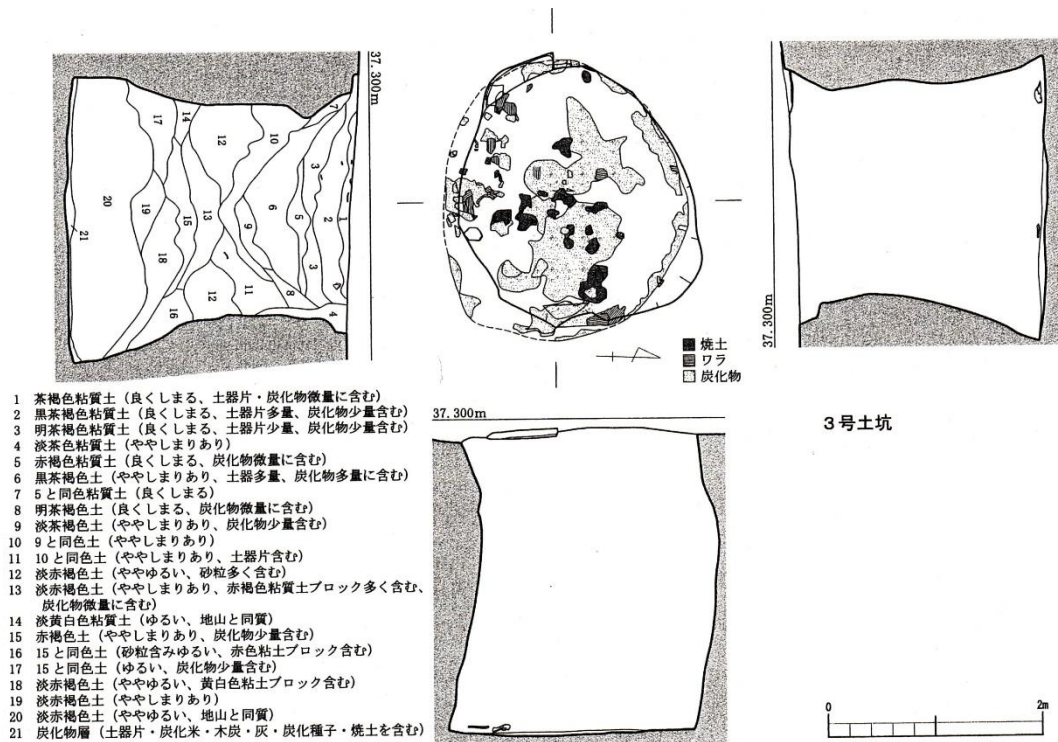


極めて似た品種であることが指摘され、炭化米やアワ・オオムギ・ササゲ属などの種実遺体も発見される。イネでは短粒かつ極小粒が 64% を占めており、以上のことから水陸両用の陸稲の可能性が指摘されている。徳島県庄・蔵本遺跡例では生育段階初期のイネ・プラントオパールが検出されており（第 38 図）（徳島大学 2007）、これらの畠が陸稲だけではなく、苗代として活用されていた可能性をも示唆している。

日本列島の気候・自然条件は水稻農耕には適しているが、継続的かつ安定的な畠作にとっては困難である。とりわけ、施肥技術が整備されていなかった弥生期の畠作には農学的な見地から克服すべき課題が多く存在していた（安藤 2002・2005・2007）。施肥技術が十分でなかった段階では、列島の自然条件は畠作の展開に向かず、逆に水田稲作の展開に適したものであった。

貯蔵施設の検討では、弥生時代には湿式貯蔵穴と乾式貯蔵穴が双方確認されている。縄文時代晩期以降、佐賀県菜畑遺跡や福岡市板付遺跡などの低台地上で稲作が開始され、この頃から前代のドングリピットとは異なる、食料を乾燥させて貯蔵・保管する乾式貯蔵穴が出現し、前期以降多く検出されるようになる。貯蔵穴内からのイネの検出例も爆発的に増加し、イネが主要な食料となったことが明らかである。貯蔵穴出土植物遺体については、

高燥地で営まれる乾式貯蔵穴は、湿式貯蔵穴と比べ、土壤中の微生物の分解作用等により植物遺体などの有機物は残存しにくい。また、使用時（貯蔵時）のままの状態ですぐに食料が貯蔵穴内に残されることは、壁面の崩落等の不慮の事故がない限り稀であり、当時の植物保管状況を詳細に観察できる例はわずかであることに注意が必要である（第 40 図）。貯蔵穴出土食用植物遺体の多くは、床面より上層の埋土中から出土しており、周辺からの流れ込みや廃棄によるものと想定され、当然のことであるが使用と廃棄を同列に取り扱うことは出来ないのである。



第 40 図 貯蔵穴に伴うイネ資料（横隈狐塚遺跡 小郡市 2010）

## （２）総合的な視座を求めて

これまでの縄文時代・弥生時代の植物利用研究の問題点としては、その解釈が不確実な資料に大きく依拠して構築されたという点やその可能性があげられる。この状況を省みて、私たちは弥生時代の植物利用を復原するにあたって、扱う資料の再検討を行い、広い視野にたった総合化が必要であるだろう。考古資料に制約があるとしても、植物学・気候学・地理学・地質学・土壌学・農学・文献史学・民俗学・民族学等の様々な学問の研究成果に目を配ることによって、東アジア全体を視野に入れたマクロ的視点から、弥生時代の植物利用を復原することができる。それはまた、考古学資料に対する他分野からの資料批判を受け入れ吟味し、解釈の妥当性を高めるという点からも重要である。現在蓄積されている考古資料をしっかりと見つめ直し、そのうえで東アジアにおける農耕技術の発展過程という全体を包括した弁証法的論理に基づく考察をすすめることが不可欠なのである。

筆者は現段階では小地域における植物利用復原のケーススタディを重ねることが有効であると考えているが、そのケーススタディを進める前に各分析手法を総合化して北部九州周辺の弥生時代の植物利用について概観しておこう。

九州地方では縄文海進期に照葉樹林が最盛期を迎え、弥生時代も引き続き照葉樹林が広がっていたことが花粉分析から想定される。縄文時代から弥生時代にかけては気候の小寒冷期を迎え、韓半島から水田稲作の列島への伝播が行われた。韓半島で行われていたイネと多種類の畠作物を栽培する農耕（ヒエ・アワ・キビ・オオムギ等の雑穀）が北部九州に出現し、その後、列島内へ広がりを見せる。縄文時代から続く伝統的な栽培植物（アズキ等）や堅果類利用のなかに、別の技術体系として朝鮮半島より新来の水田稲作とそれに伴う畠耕作が加わることが想定される。縄文時代から引き続き堅果類の積極的な利用があり、弥生時代に入ってから用材としても農耕・土木具にアカガシ亜属が積極的に利用されるようになる。堅いアカガシ亜属の用材利用は大陸系磨製石器の伝来、普及とも関連する。しかし、弥生時代にアカガシ亜属の樹木が集落のごく近くに生育していたのか、丘陵などのやや離れた場所に生育していたのかというような森林資源利用についての具体的検討は少なく、今後の課題である。

弥生時代の畠状遺構は全国で 15 例検出されているが、水田跡に比べて非常に少ない。そのうち北部九州では前期後半～中期初頭段階の三沢蓬ヶ浦遺跡があげられる。プラント・オパール分析の結果では、イネが検出されており、このイネは隣接する三沢公家隈遺跡の谷水田で検出されたプラント・オパールと極めて似た品種であることが指摘され、水陸両用の陸稲の可能性があげられる。ほかに炭化米やアワ、オオムギ、ササゲ属などの種実遺体も発見される。

韓半島から伝播した水稻+畠の複合的農耕技術は、当時の日本列島の気候・自然条件は韓半島よりも水稻農耕には適していたため、施肥技術が十分でなかった段階では畠作の発展的展開には向かず、水田稲作の展開に適したものであったのだろう（安藤 2002・2005・2007）。畠状遺構の発達には古墳時代をまたなければならない。

イネは弥生社会の主要な作物に位置づけられるようになるが、地域ごとの環境の違いや自然災害に対応しようとした結果、安定した農業生産を確保するためにイネのみに頼ることはできず、やはり畠作も併せて行い、さらには堅果類も利用する必要があった。弥生時代農耕の基本的骨子は大陸系磨製石器のような新しい生産具組成と灌漑水田を持ち、イ

ネと各種島作物が組み合わさった別個の生産体制として朝鮮半島南部から伝わるのである。朝鮮半島では稲作に適する自然環境は中南部以南で、そこでも照葉樹林帯が南海岸に限られる環境の下では島作に依存せざるを得ない割合は日本列島よりも大きい（後藤 2004a）。列島では、イネへの志向を強めるなかで、北部九州ではその貯蔵・管理施設としての乾式貯蔵穴が多くみられるようになる。北部九州の弥生時代前期の遺跡では貯蔵穴群のみがまとまって営まれる貯蔵域、また、それらを環濠で囲む地域もみられ、集団による作物管理のあり方が縄文時代と大きく変化していることが分かる。

北部九州においては、福岡県では福岡平野、三国丘陵など、佐賀県では柚比丘陵や吉野ヶ里遺跡周辺、大分県では日田地域などの小地域ごとでの集落（遺跡）変遷や生業復原のための資料、自然科学的分析事例の蓄積が行われつつある。例えば、蓄積された資料をもとにして、三国丘陵では、近年の発掘調査成果に里地・里山の民俗学的な視点を加えて、弥生集落と生業の復原に迫った片岡宏二の論もあり、傾聴するものである（片岡 2003）。それら小地域ごとに総合的な視野で植物利用を復原していくことが、非常に有効であり、その成果をもとに、広い視野で地域の特徴や性格を明らかにする研究の方向性が求められる。

#### 【註】

（１）弥生時代開始年代の議論が、2003 年以降活発に行われている。主に 3 つの説がある。

①従来の年代観とする説・・・弥生人骨を用いた AMS 年代測定 田中良之、溝口孝司、岩永省三 TOM higham（田中ほか 2004）、②紀元前 800 年を上限とする説・・・遼寧式銅剣遼西説：宮本一夫（宮本 2004）、石川日出志（石川 2003）、クロスナ説：甲元真之（2008）、③紀元前 11～10 世紀を上限とする説・・・AMS 炭素 14 年代測定 国立歴史民俗博物館（歴博 2003）、遼寧式銅剣遼東説 小林青樹、石川岳彦、春成秀爾、宮本一夫（小林ほか 2007）

## 第 2 節 三国丘陵における弥生時代の開発と森林資源

### 1. 三国丘陵の弥生時代植生復元と集落動態

三国丘陵では、古くから丘陵上の居住域と周辺谷部には水田といった集落景観が想定され（西谷 1971）、橋口達也は福岡平野や三国丘陵の集落動態をもとに、板付Ⅰ式までに低地の可耕地が飽和状態となり、板付Ⅱ式以降狭隘な谷水田を控えた低丘陵部へも集落が進出せざるを得ない状況が生まれたと考えた（橋口 1985・1987）。中期以降の低地への集落移動は自然条件の好転によって低地の可耕地がさらに拡大したと想定した。

これは、その後の研究でも「低地環境の悪化と爆発的な人口増加の相互作用・前期社会の揺動により、前期末～中期初頭に一斉に集落が丘陵上へ進出するものの、丘陵奥地では谷水田の開発のみでは集落経営が立ちゆかず、低地域が安定すると同時により広範な可耕地を求めて進出したこの地域における大規模集落は基本的に広い居住域・可耕地面積を持つ低地域への進出を待って初めて成立する（小郡・大板井遺跡群）」と追認された〔小澤 2002〕。土壌・層位学的検討からは、西日本の弥生時代遺跡では中期前半～中葉の洪水頻発、中期後半から後期は安定した立地環境が復元できるという（高橋 1995）。

次に三国丘陵の開発と森林資源についての研究事例は、武末純一による「石斧消費地としての評価」があり、そして集落間で耐久性や機能性が高い今山系石斧の分配が行われている状況が明らかにされた（武末 1985・2001）さらに、森貴教は弥生時代前期末から中期初頭に集落が沖積地から丘陵上へ進出する時期（小澤 2000b）に活発な伐採活動を想定し、今山系石斧が同時的に極めて大量に必要となり、それらの開発に伴い、今山系石斧の大量供給・大量消費が認められることを示した（森 2011）。

## 2. 検討のねらいと方法

三国丘陵は以上のように、生業や丘陵地の開発が指摘されているものの、その開発の対象となる「植生」に関しては未検討である。遺跡ごとに土壌分析が行われた例もあり、それらをパッチワーク状につなげることで弥生時代の植生変化を推定する。

集落動態を単に水田稲作可耕地との関係で考えるのではなく、森林資源（木材）の獲得と管理という観点から考察できないか。三国丘陵の生業はこれまでも狩猟や採集について多く論じられてきたので、今回は特に木材としての森林資源を考察する。しかし、丘陵地の調査が多く、木器生産を直接的に示す良好な調査事例は未だにないので、やや対象地域を広げて検討を行う。植生と弥生人の関わり、開発や植物利用を明らかにする。

検討の方法は、①植生データの分析 ②集落動態の分析 ③木器生産（遺構と遺物）の分析を行う。また、第3章において三国丘陵における伐採斧やそのうちの今山系石斧の占める割合、木工活動を示す加工斧の割合・石器組成などを地域間ネットワークのテーマで検討するが本節ともかかわりが深い。

## 3. 植生の変遷からみた土地開発

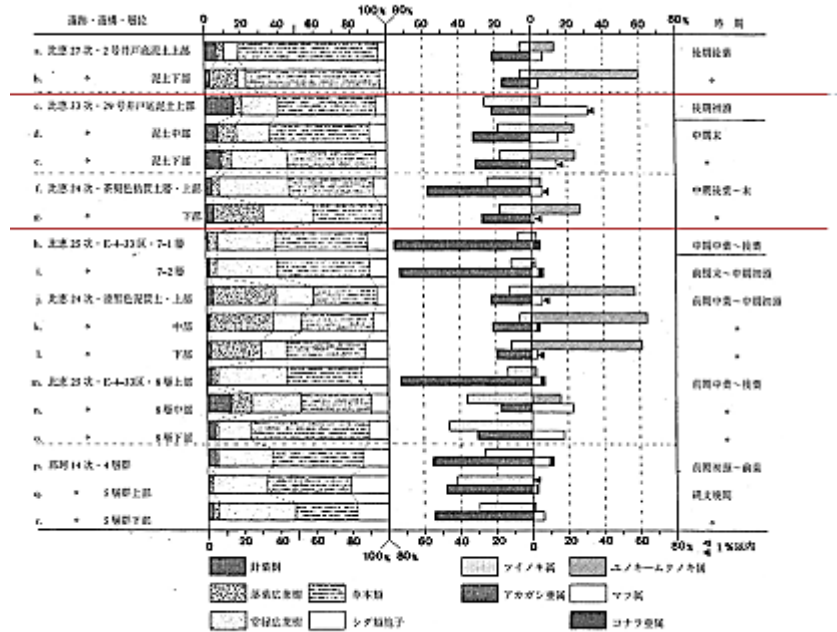
### （1）比恵・那珂遺跡群における田崎 1998 の検討事例

比恵・那珂遺跡群の集落動態と植生の変遷、周辺の堆積層の変化から段丘上での開発を考察した田崎博之の重要な論考があり、参考とする（田崎 1998）。

土壌分析結果から、比恵・那珂遺跡群が立地する段丘縁辺の湿地環境下堆積層（重層）から縄文晩期～弥生中期中葉の植生変遷が明らかにされた（畑中 1980、野井 1991・1992 など）。しかし、中期後葉以降の上層部分では花粉化石が分解しており、植生不明であったため、深度の深い、中期後葉～古墳時代初頭の井戸埋土からも検討して補った（第41図）。

その分析によると、縄文時代晩期には段丘上はシイ・カシ林、照葉樹林で覆われる。集落の進出が始まる前期初頭～前葉は、照葉樹林を切り拓き、二次林のマツが増加する。その後、シイ・カシが再び増加し植生が回復する。この時期は段丘上での『ムラ』の分布が散在的で、森林の開発は照葉樹林全体に及ばず、居住地として必要な空間を確保するための限定的な開発であった。前期末～中期初頭以降、段丘縁辺は御笠川と那珂川が運んだ土砂で急速に埋没、沖積面と段丘面の差が1 m以下となり、河川氾濫の影響を受けやすい不安定な立地へ移る。こうした沖積平野の変化は西日本各地で見られる（高橋 1989）。中期初頭以後、より高位（段丘）面への移動が顕著。居住域における遺構の密度は高くなり、段丘を横断する大溝の形成など計画的な開発が始まる。中期後葉を画期に、マツ属が恒常的に増加、カシ・シイ林も減少するが存在し（50%）、段丘全面の開発ではない。居住域ご

との個別的な開発。が示された。後期中葉以降、段丘全面にわたる大規模開発、居住域相互の境界はあいまいになる。後期後葉にはシイ・カシ林が退き、草本類が卓越。段丘の照葉樹林が大規模に開発され、オープンな景観へ。大きくまとめると、前期には居住域周辺の限定的な開発の段階があり、中期後葉以降、前期末からの環境変化に対応するだけでなく、遺跡群ごとに面的な開発が一気に進む。そして、後期後葉には、段丘上の森林植生の多くを開発する全面的な改変へと進む（田崎 1998）。



第 41 図 比恵・那珂遺跡群における花粉分析（田崎 1988）

## （２）三国丘陵における植生の復元

花粉分析は一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復元に応用され、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局所的な植生の復元も試みられている。水成堆積物では保存状態が良好であるが、乾燥的な環境下での堆積物では分解されてしまう。およその傾向を花粉分析・珪酸体分析で確認し、これを今後、種実同定・樹種同定で追認する作業を行う。用いる土壌分析事例は、津古土取遺跡 2 区（縄文時代晩期～弥生時代前期）、力武内畑遺跡 7（弥生時代前期前半～中期初頭）、三沢北中尾遺跡 10B 地点（弥生時代中期前半の前後）、三沢公家隈遺跡（弥生時代中期初頭の前後）、三沢上棚田遺跡（弥生時代中期前半～後半）、弥生時代後期後半以降、三沢南崎遺跡 4（弥生時代後期後半～古墳時代前期）である。丘陵周辺の自然堤防に立地する大保横枕遺跡の環濠資料（前期中頃から後半）も参考にする。

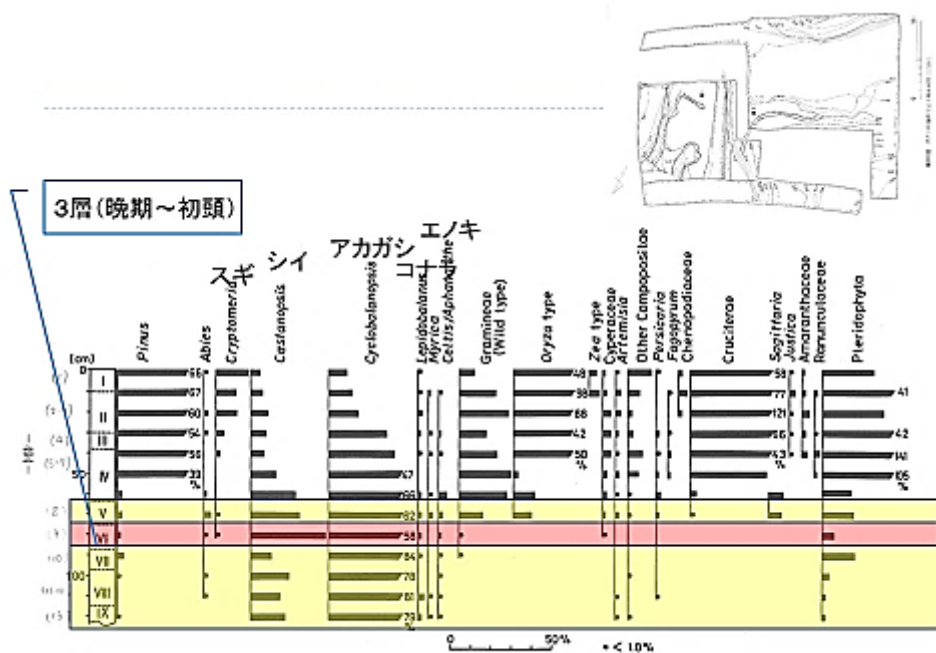
### 【津古土取遺跡（縄文時代晩期～弥生時代前期）】（第 42 図）

津古土取遺跡では、2 区 3 層資料の花粉分析が行われた（畑中 1990）。2 区 3 層は谷部の層位で時期幅を持つ資料特性がある。

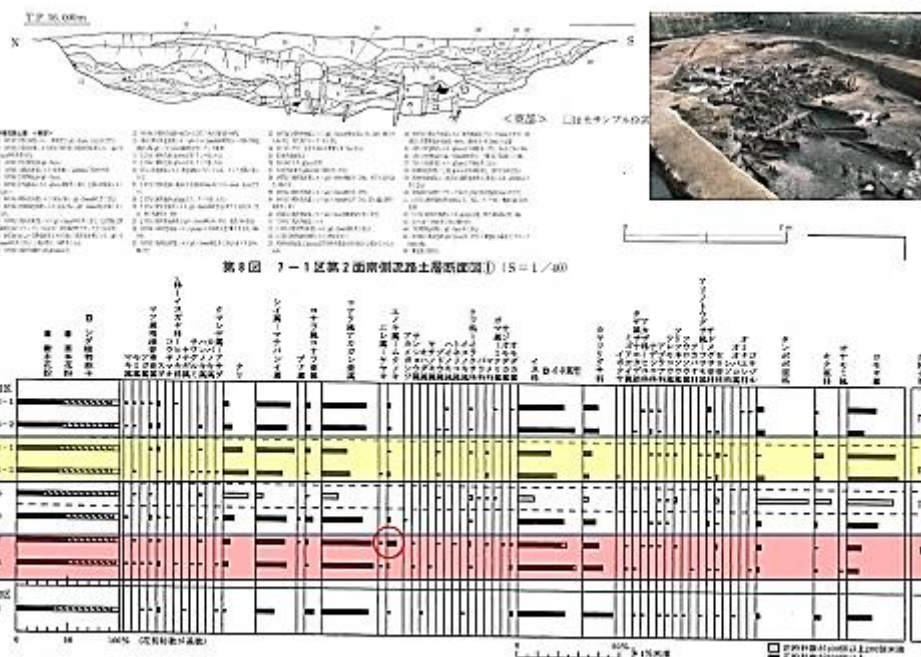
3 層は縄文時代晩期から弥生時代前期初頭の土器が比較的存在し、上下層の鍵層となっている。3 層上面の遺構では溝 1・溝 2 が認められる。3 層が縄文晩期～弥生時代前期初頭でそれを切る遺構である。溝 1 の板材にはカシ材（木村鶴雄氏鑑定）がある。

3 層以前（分析Ⅶ層（Ⅷ・Ⅸも））では、アカガシ亜属とシイノキ属の圧倒的優占、草本類の花粉は極めて低率、遺跡周辺には常緑カシ類やシイノキを主とした照葉樹林の繁茂が推定された。3 層（晩期～初頭）（分析Ⅵ層）の段階では、アカガシ減少、二次林としてのシイ（クリ）増加、コナラ出現で、3 層以後（分析Ⅴ層）の段階では、シイ属が減少傾向、栽培イネの出現、古墳時代後期と考えられる。分析Ⅳ層では、マツの大幅増、カシ・シイ林の縮小、イネ集約化が窺えた。3 層の時点では、人の手が加わっており、この地への集





第 42 図 津古土取遺跡における花粉分析（畑中 1990 を改変）



第 43 図 力武内畑遺跡 7 における花粉分析（古環境 2004 を改変）

落の進出がうかがえる。

### 【力武内畑遺跡 7（弥生時代前期前半～中期初頭）】（第 43 図）

力武内畑遺跡では弥生時代前期前半の井堰が検出された流路の土壌分析を行っている。7-1 区南側流路の資料で、流域の植生を示す資料特性がある。

分析試料は、7-1 区南側流路の最下層から中層にかけての資料で、出土する土器から弥生時代前期～中期に相当する。堆積状況から、分析した試料は試料 8 → 試料 7 →（試料 5）→ 試料 6 → 試料 4-2・1 → 試料 3-2・1 の順となる。

試料 8・7 は当初の流路の段階で考古学的に板付 I 併行と考えられる。アカガシ・シイ



の優占・周辺でイネの栽培が推定される。

試料 5・6 は流路の再掘削段階で考古学的に板付Ⅰ 併行以降の時期が考えられる。試料 5 では短期的な季節性を示している可能性があるという。アカガシ・シイの一時的減少／クリ、タンポポ・ヨモギ一時的増加が推定される。試料 6 の時期になると、アカガシの減少・コナラ出現／クリ・ヨモギの増加が見て取れる。

試料 4 は井堰設置の段階と考えられ、考古学的には前期～中期？の時期が考えられる。周辺でイネ、クリの優占、アカガシ・シイやや減、ヨモギ優占の状況が推定される。

試料 3 は流路埋没の段階で考古学的に中期以降が考えられる。周辺でイネ、クリ減少・ヨモギ減少 マツ・コナラ・エノキ出現が推定され、照葉樹林＋二次林から照葉樹林減少＋二次林増加といった傾向が窺える。

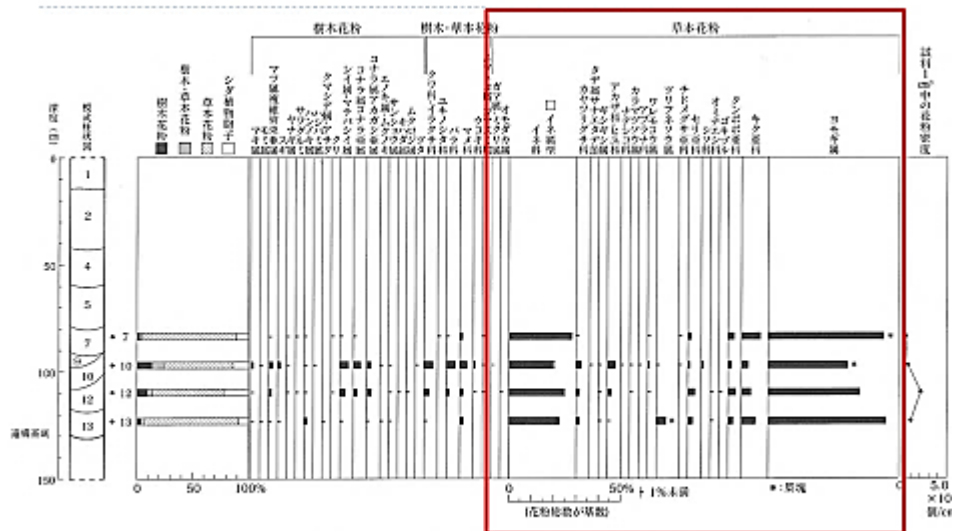
試料 5・6 の時期（板付Ⅰ 式併行以降）に（タンポポ・）ヨモギの草本類が多くなり、乾燥化して、アカガシ（・シイ）減でクリが増加する。試料 4 の時期にも同様な傾向がある。試料 4 から試料 3 の時期にはクリの減少、アカガシ（・シイ）増に転じている。二次林が多種出現するのが、試料 6 と試料 3 である。

#### 【大保横枕遺跡（弥生時代前期前半～後半）】（第 44 図）

参考資料として、三国丘陵に立地していないが、その南 2 km の自然堤防上に立地する大保横枕遺跡環濠の土壌分析事例を確認する。環濠の埋没土壌で、時期がある程度限定できる資料の特性がある。大保横枕遺跡では環濠下層試料を分析しており、考古学的には板付Ⅱ a 新～Ⅱ b 古式段階である。

自然堤防上の立地ということもあり、基本的に草本花粉が主で樹木花粉は少ない。周辺やや遠方にはシイ属・アカガシ属、コナラ、マツが低率で出現、環濠の周囲はヨモギ、イネが優占し、乾燥した環境周辺で稲作（プラントハール）が示唆される環境である。

#### 自然堤防上立地（草本主体）



第 44 図 大保横枕遺跡外環濠における花粉分析（古環境 2014 を改変）

#### 【三沢公家隈遺跡（弥生時代前期初頭前後）】（第 45 図）

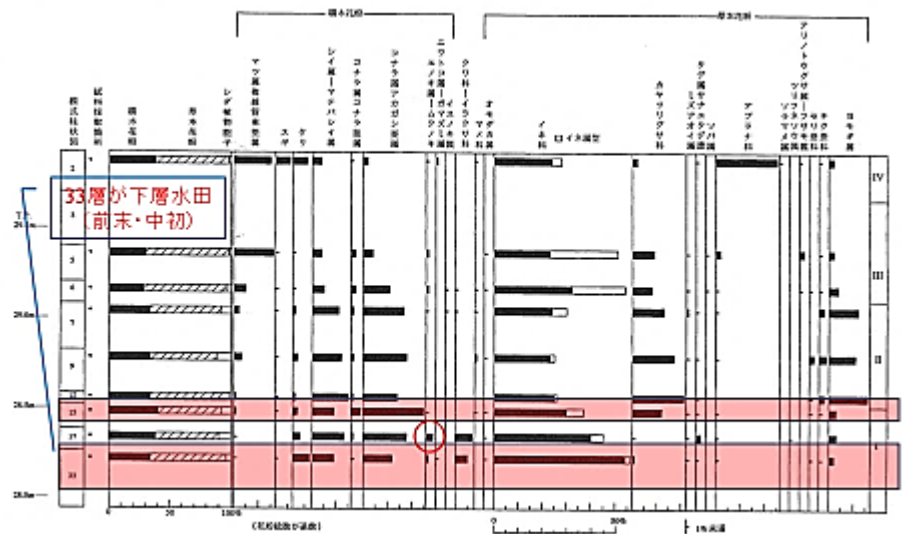
三沢公家隈遺跡では、弥生時代前期から中期にかけての谷水田が検出され注目される。谷側と丘陵側の 2 地点で土壌分析を行っている。ここでは残りの良い谷部の資料を中心に検討する。土壌分析例で時期幅を持つ試料特性がある。

下層水田（33 層）の時期は考古学的に前期末・中期初頭が考えられる。花粉分析からクリ＋シイ・カシ林＋イネ少量が推定される。この時期には、既に二次林の形成（cf. 山側の

対応層以下はクリ優占)  
下層水田と上層水田の間層(17層)があり、考古学的に中期初頭かと考えられる。分析結果ではクリ減少・コナラ・エノキ増加+シイ・アカガシ増加の傾向が窺える。

上層水田(15層)の時期は考古学的に中期初頭～前半が考えられる。シイ減・アカガシ増、コナラ増、水田雑草 + イネの傾向がある。

上層水田の直上層(12層)は考古学的に中期前半以降が相当する。シイ増・アカガシ減、ヨモギ・カヤツリグサ(水田雑草)増の傾向が窺える。



第 45 図 三沢公家隈遺跡谷部における花粉分析(古環境 2001 を改変)

#### 【三沢北中尾遺跡 10B 地点(弥生時代中期前半の前後)】(第 46・47 図)

三沢北中尾遺跡では西壁土層(谷頭の堆積層)の分析を行っている。考古学的な時期を推定できる土器の出土が少なく、11層黒色腐食土層土師器包含、11層以下には弥生土器包含、14層で須玖Ⅰ口縁部が出土している。15層下で遺構検出を行っており、周辺には弥生時代前期の集落が広がっている。谷部の分析試料でもあり、時期幅を持つ資料特性がある。

基本的に草本花粉が多い最下層でアカガシ優占、以後 14 層から 10% 程度で推移、周辺のカシ・シイ林、シダ植物も多かった。

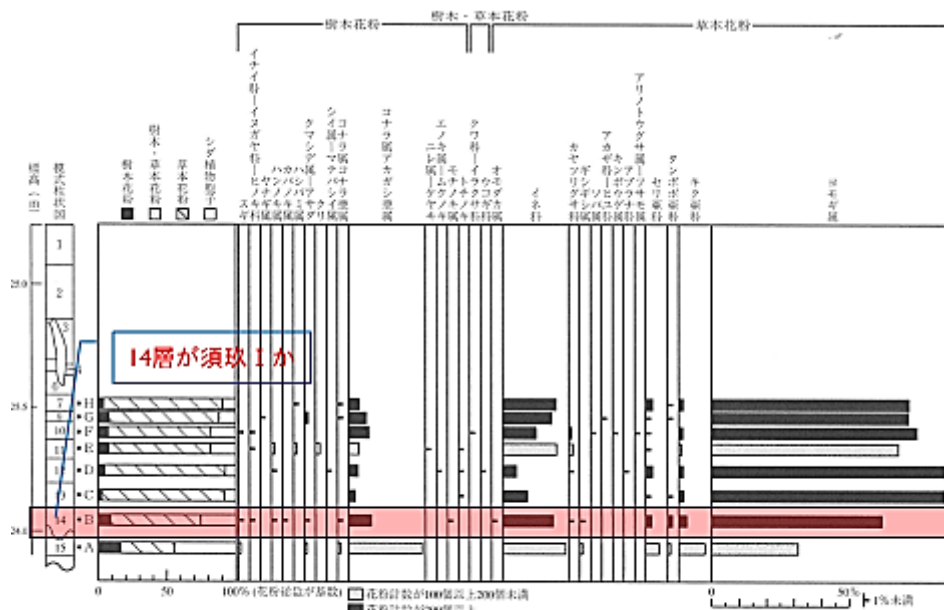
プラントマール分析では、竹笹類の分布、イネは未検出であることから、弥生時代集落の居住域は丘陵上、谷部は生産域として谷水田が想定されているが、この分析事例が示すように、すべての谷部で谷水田が開田されていないことがうかがえる。谷水田は、あっても部分的なものと思われる。

#### 【三沢上棚田遺跡(弥生中期前半～後半、後期後半)】(第 48 図)

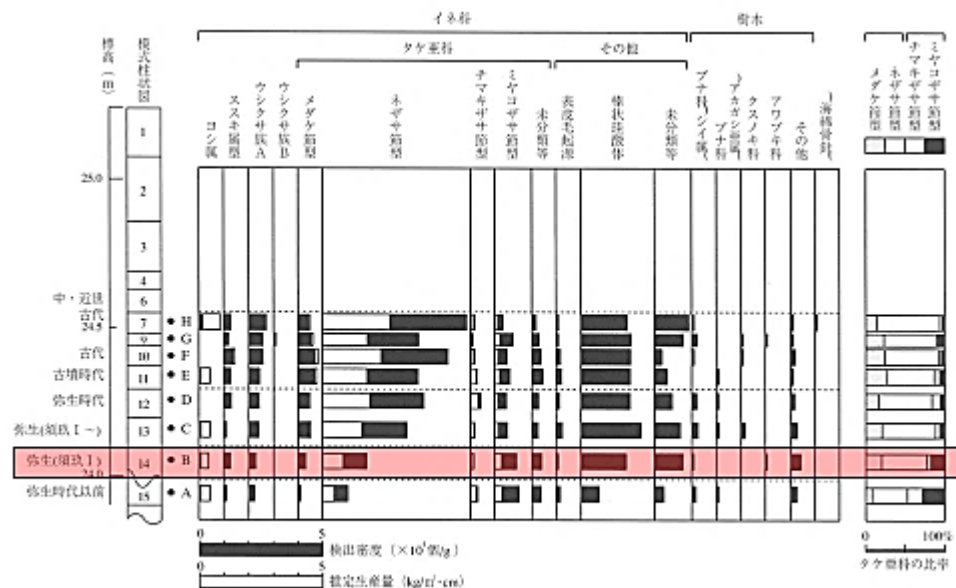
三沢上棚田遺跡では、3区2号旧河川の土壌分析が行われている。流路資料であり、流域植生を示している。

下層(7・3層)は、考古学的には中期前半以前と考えられる。アカガシやシイ属を主とする照葉樹林+コナラ林の分布がうかがえる。(c f. 下層 1・2 層で中期前半の土器掘削による流路化) 中層(4・6層)の段階は、考古学的に中期後半かと考えられる。二次林としてのシイ林(クリ)・コナラ林増加(\*クリーシイ未分化の分析)がうかがえる。

上層(9・10・11層)の段階は考古学的には、後期後半が考えられる。9層では二次林としてのシイ林(クリ)最盛期/アカガシ減少、10層ではシイ林(クリ含む)が減少、コナラ林へ移行している。



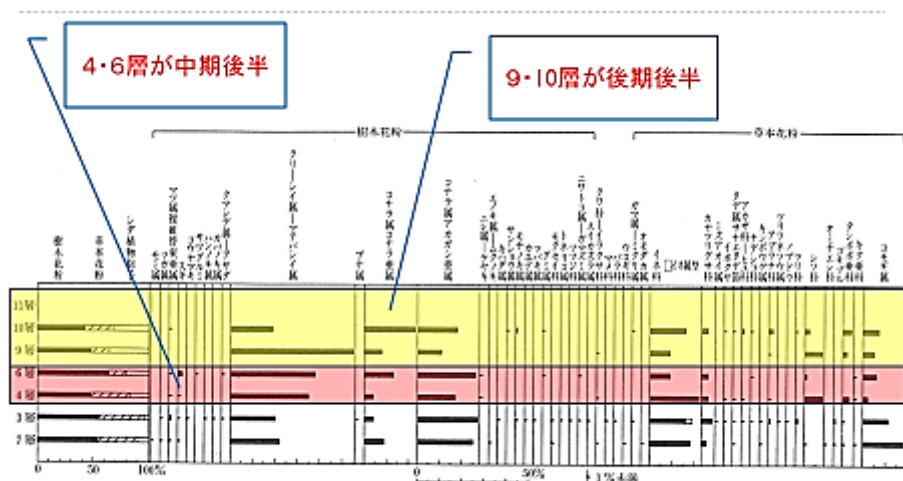
第 46 図 三沢北中尾遺跡 10B 地点における花粉分析（古環境 2006 を改変）



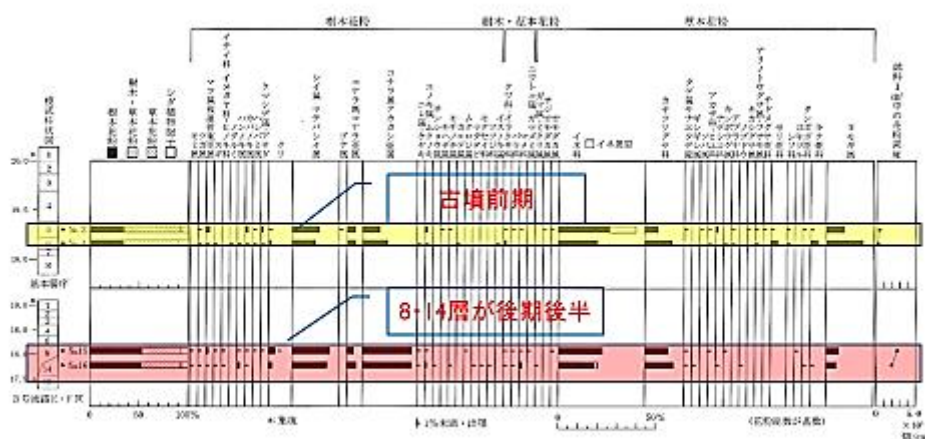
第 47 図 三沢北中尾遺跡 10B 地点における植物ケイ酸体分析（古環境 2006 を改変）

### 【三沢南崎遺跡 4（弥生後期後半～古墳前期）】（第 49 図）（古環境 2009）

三沢南崎遺跡では、調査区の土層が報告されていないため、参考資料として扱う。流路が検出されており、流路の形成前後の土壌が分析されている。流域の植生を示す資料である。私なりに整理すると、第 5 層が流路埋没してからの層 古墳時代前期以降、第 6 層が流路の面となるが、1 号流路の切込みを考えると弥生時代前期となるが⇒時期がはっきりしない。おそらく、1・2 号流路のオーバーフローの堆積から 3 号流路が切り込むので、第 6 層は～中期中頃が下限か。3 号流路 8 層・3 号流路 14 層とも 3 号流路下層は後期中頃～後半かと考古学的に想定する。試料 6 層が時期が不明であるが、中期中頃以前とした場合、その頃に水田の分布が示唆される。試料 8・14 層が弥生時代後期後半に相当し、水田



第 48 図 三沢上棚田遺跡における花粉分析（古環境 1996 を改変）



第 49 図 三沢南崎遺跡 4 における花粉分析（古環境 2009 を改変）

の分布があり、二次林が増加している。試料 5 層が古墳時代前期～古代と考えられ、水田の拡大やソバの栽培が示唆されている。

#### 4. 木器生産の検討

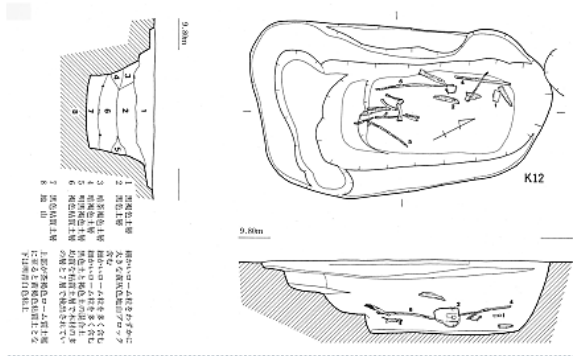
三国丘陵では、これまでに木器生産の痕跡を良好に調査したものはない。そのため、周辺も含めて、木器生産がうかがえる遺跡と遺構を抽出しておく。

三国丘陵縁辺の三沢南崎遺跡 2（1 号流路第 3 段階下層：弥生時代後期）、段丘上立地の大崎中ノ前遺跡（SK12・13・17・22：弥生時代中期後半～末）、大崎後原遺跡 2（SE02：弥生時代中期後半）、小郡川原田遺跡Ⅱ（自然流路内に杭設置、木器多数出土：弥生時代後期後半から終末）がわずかながら確認できる（第 50 図）。

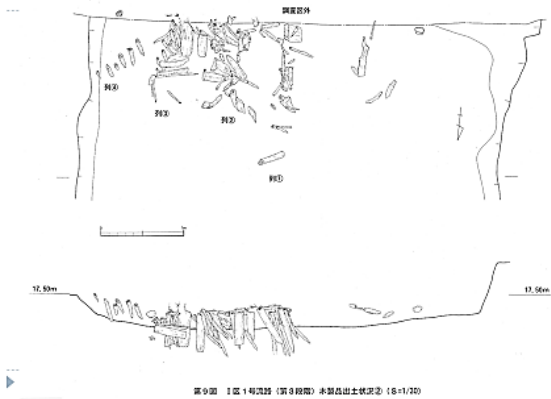
大崎中ノ前遺跡の SK12 では同定の結果、ヒノキ科、クスノキ、シイ属（ツブラジイ）、ツゲ、アカガシ亜属、コナラ属がみられた。三沢南崎遺跡、小郡川原田遺跡では、樹種同定は行っていないため、正確な樹種は不明である。



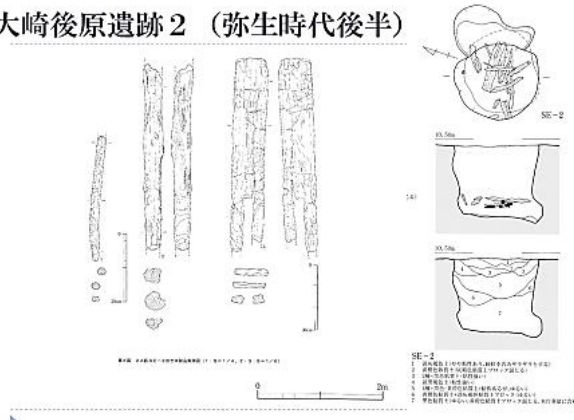
## 大崎中ノ前遺跡2（弥生中期後半～末）



## 三沢南崎遺跡2（弥生後期）



## 大崎後原遺跡2（弥生時代後半）



第 50 図 小郡市内遺跡における木器生産を示す遺構（小郡市 1998・2009・2011）

## 5. 丘陵部の集落変遷と森林資源

### 【板付Ⅰ式併行期から板付Ⅱ式古段階】

力武内畑遺跡や津古土取遺跡の分析例から、集落開始期には自然植生の照葉樹林（カシ・シイ）への人為により、カシ・シイの一時的現象、二次林の発生がみられる。集落は段丘から丘陵縁辺への動きを示している。この時期の潜在的森林資源（里山）は標高 ～50・60m（比高 40m）の範囲が想定できる。その後の集落が及ぶ範囲である。西側には標高 70～80m の高丘陵地がある。

津古土取遺跡では、開発のはじまりを示す植生の変化として、アカガシ・シイ優占→アカガシ減少・クリ増加・コナラ出現→イネ出現へと遷移する。力武内畑遺跡では、開発のはじまりを示す植生の変化として、アカガシ・シイ優占・周辺でイネ→アカガシ減少・コナラ出現、クリ・ヨモギの増加へと遷移している。

### 【板付Ⅱa式新段階から板付Ⅱb式古段階】

集落群が段丘から丘陵部へ進出する時期である。段丘付近ではイネ・クリが増加、ヨモギ増加がみられ草地化している。各独立丘陵に立地する集落の複合体、「集落群」は三国丘陵東南部域（2 km 四方の範囲）で 5～6 の「集落群」が析出されるが、この時期に潜在的森林資源（里山）へ集落群が進出している。

力武内畑遺跡ではこの時期に周辺でイネ、クリの優占、アカガシ・シイがやや減、ヨモ

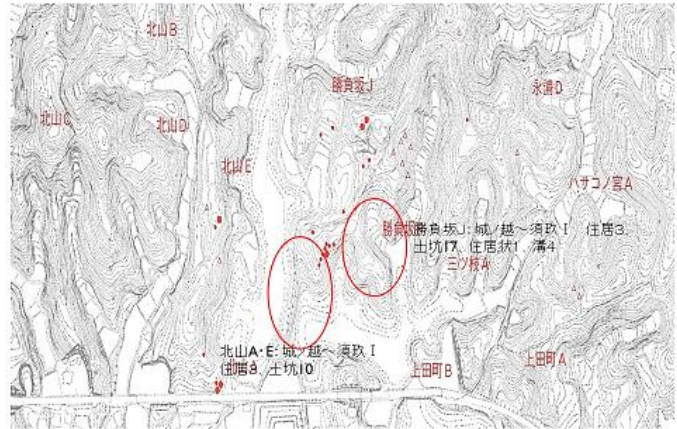
ギ優占の傾向がみられる。

#### 【板付Ⅱb式新段階から板付Ⅱc式】

この時期になると、集落も比較的高位にあり、近辺では二次林化もみられる。シイ・カシの樹林に二次林が伴う。

力武内畑遺跡ではこの時期に周辺でイネ、クリの優占、アカガシ・シイやヤブ、ヨモギ優占の傾向がみられる。

三沢公家隈遺跡では、周辺ですでに部分的に二次林が形成されることがうかがえる。



第 51 図 標高 70～80m の高い丘陵地の集落

#### 【城ノ越式から須玖Ⅰ式】

植生／気候変化を示すエノキ・ムクノキの出現があり、シイ・カシ林と二次林で構成されているものの、二次林の割合が増加傾向を示している。この時期の森林資源は西側の高丘陵地が考えられる（第 51 図）。数軒の住居が散在的にみられる。中期初頭には青銅製ヤリがけなどの小型工具、鑄造鉄斧再加工品などが流入し、金属製工具類が比較的多くみられる地域である〔比嘉 2011〕。これらの利器、工具類は「森林資源」の利用に関連して、当地域の特徴として流通・流入した可能性が大きい。

三国丘陵地域は弥生時代前期以降、今山系伐採石斧の大消費地であり〔武末 2001、森 2011〕、「森林資源」の利用は、戦略的な集落選地、変遷からも窺うことができます。

力武内畑遺跡で、クリ減少・ヨモギ減少 マツ・コナラ・エノキ出現、三沢公家隈遺跡で、既に二次林の形成（クリ）→クリ減少・コナラ・エノキ増加＋シイ・アカガシ増加、三沢北中尾遺跡 11 地点で、周辺のシイ・カシ林＋シダ植物、三沢上棚田遺跡でシイ・カシ林＋コナラ林の形成が進む

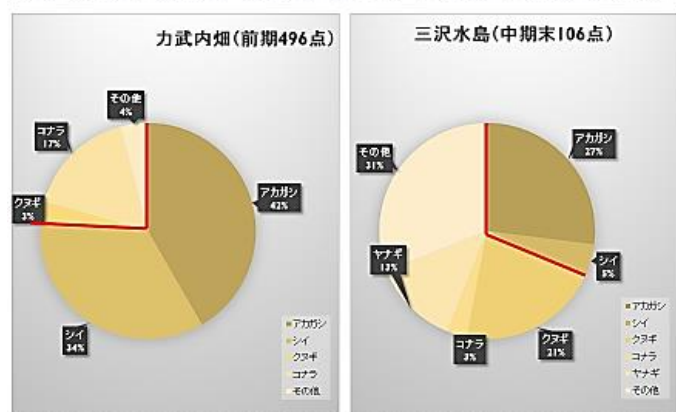
#### 【須玖Ⅱ式】

二次林が局所的に発達、特に段丘付近。集落群の解体、これまでの外縁に集落が選地する。三沢上棚田遺跡では、クリ・コナラ林が増加する。上棚田で中期後半ではコナラ林優占、中期末の水島井堰構築材は二次林優勢である（第 52 図）。

#### 【高三瀧から下大隈式】

集落群を形成するのではなく、段丘上に長期的に立地する拠点化傾向を示す。それと数軒の小規模集落が丘陵上へ進出。森林資源の獲得への動きがみられる。花粉分析からは二次林が多くみられるものとカシ・シイもあり、森林の再生も考えてよい。三沢上棚田遺跡（④地点）でクリ優占からコナラ林の形成へ、三沢南崎遺跡（⑤地点）で水田分布と二次林の増加がうかがえる。

#### Cf.井堰材の樹種の比較（二次林の増加）

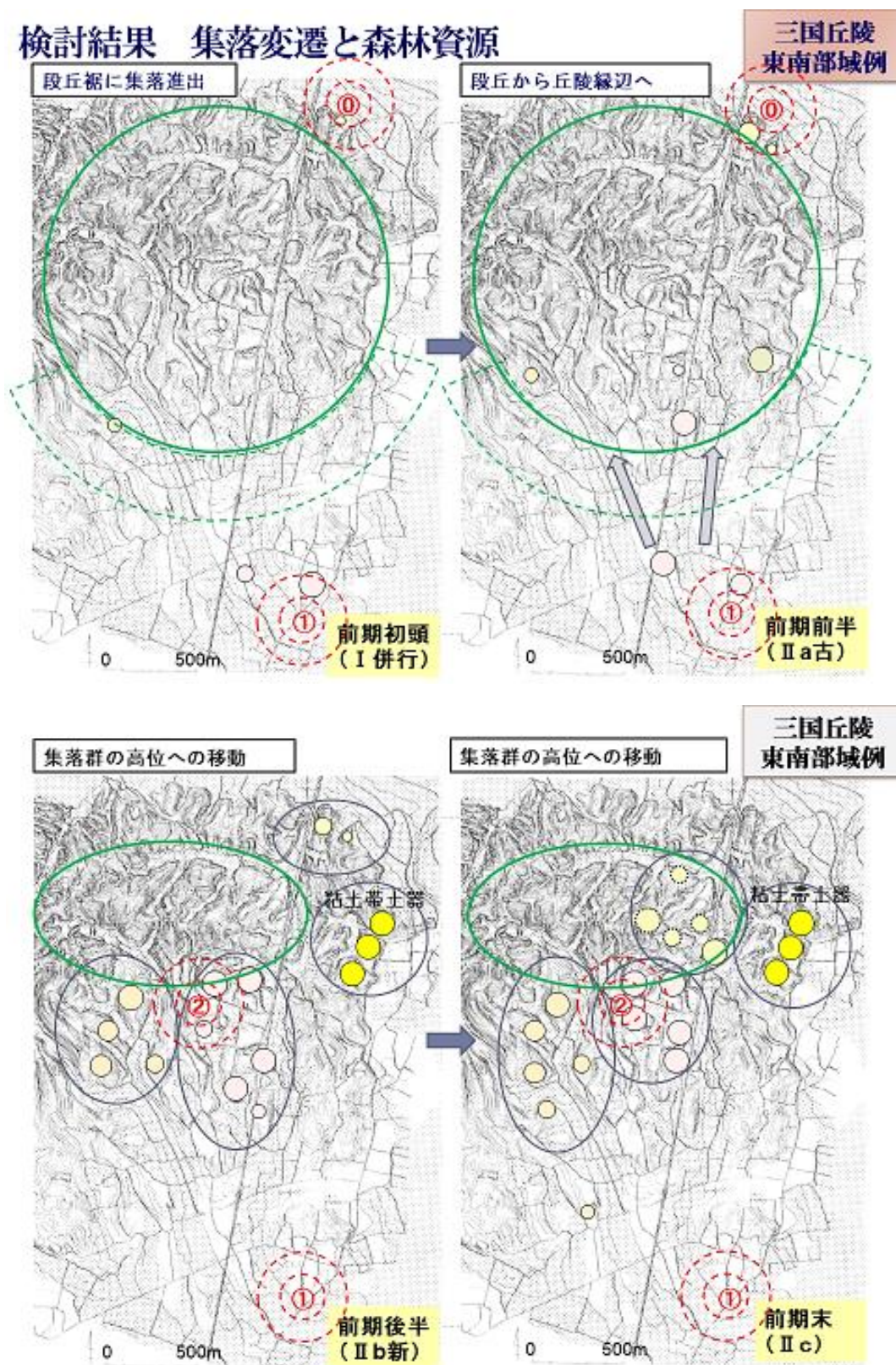


第 52 図 井堰構成材の比較（前期と中期末）

（古環境 1993 データほかから作成）



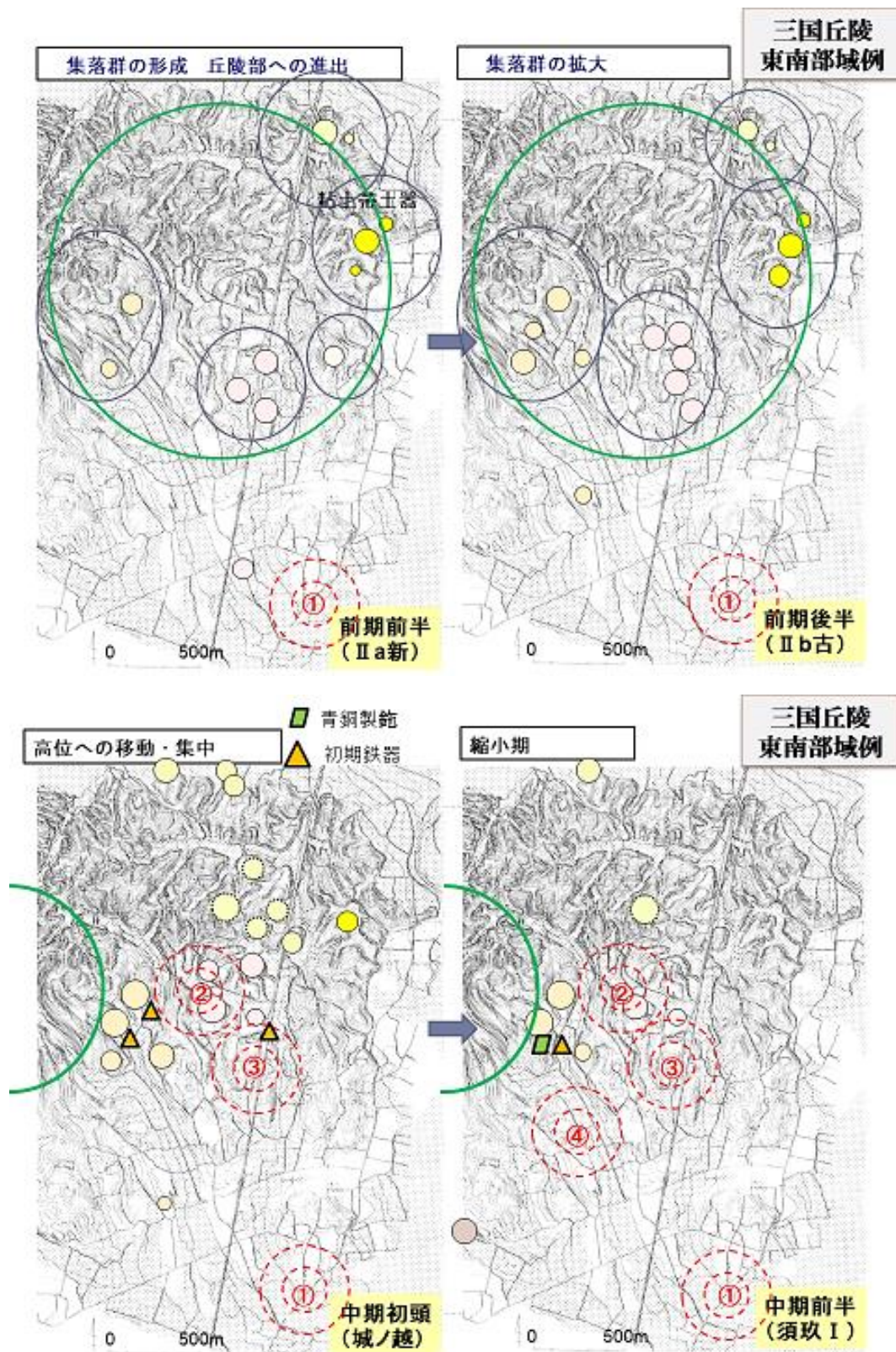
## 検討結果 集落変遷と森林資源



第 53 図① 集落変遷と森林資源 1

①津古土取遺跡 ①力武内畑遺跡 ②三沢公家隈遺跡

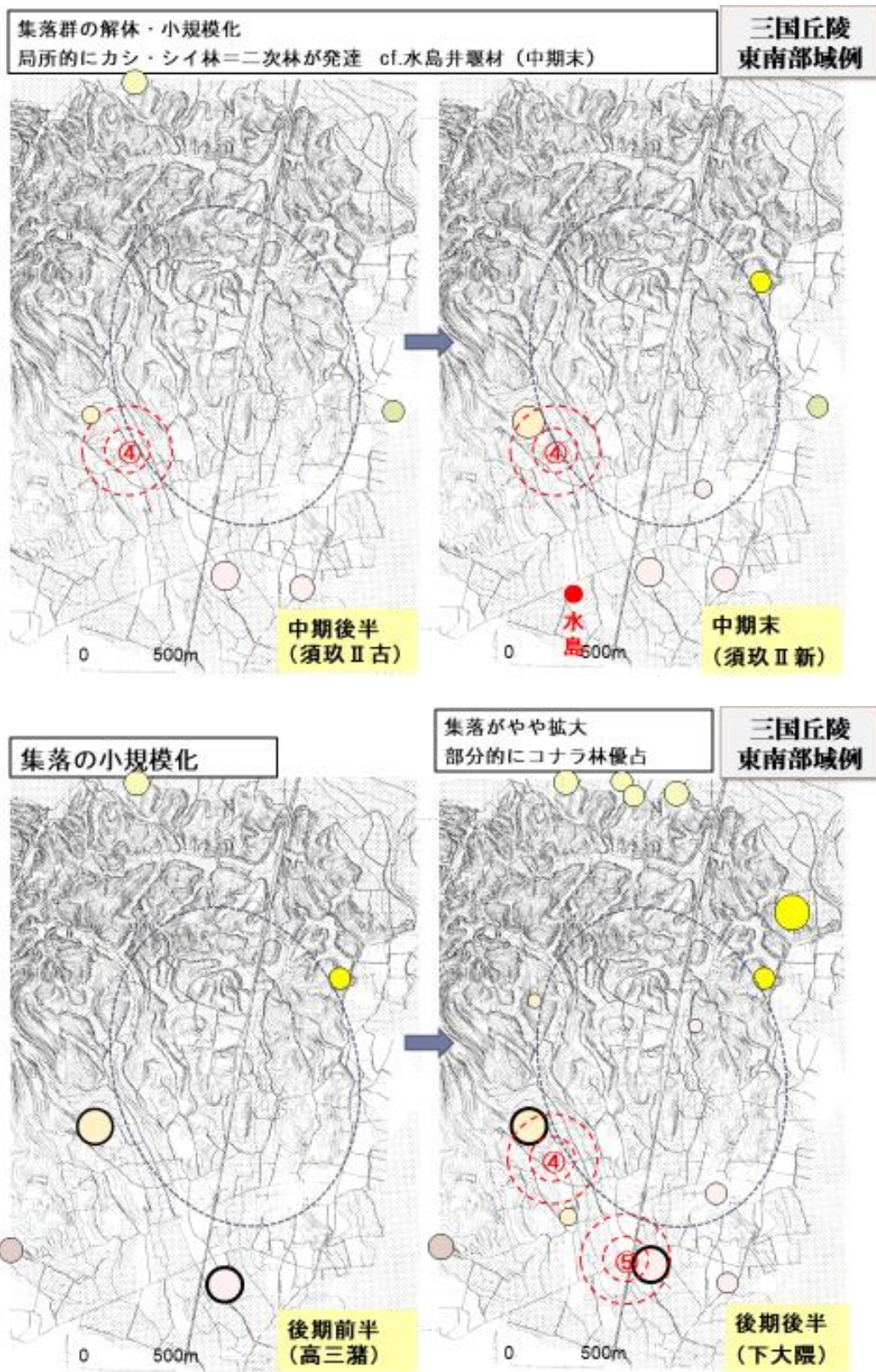




第 53 図② 集落変遷と森林資源 2

- ①津古土取遺跡 ①力武内畑遺跡 ②三沢公家隈遺跡  
③三沢北中尾遺跡 11B 地点 ④三沢上棚田遺跡





第 53 図③ 集落変遷と森林資源 3

④三沢上棚田遺跡 ⑤三沢南崎遺跡

## 6. まとめ

集落は森林資源獲得を含めた戦略的占拠が窺え、集落の丘陵地進出に伴い、植生が変化する。当然のことではあるが、丘陵地を開発して、集落が進出する時期に植生が変化している状況が関連付けられた。まとめておくと、

弥生時代前期初頭段階（開発以前から初期）では段丘裾に着床して水田を経営する。丘陵部分では、基本的にカシ・シイ林の優占で、集落周辺で二次林の萌芽がみられる。弥生時代前期中頃～末（丘陵開発期）では丘陵の開発部分がのちの集落選地となる。丘陵部ではカシ・シイ林にクリ・コナラの二次林が加わっていく。これは丘陵に進出した集落の周辺で起きる現象である。

弥生時代中期初頭～中期前半（集落固定で拡大期）では、広範な丘陵地森林資源の獲得へ動く時期である。丘陵部はカシ・シイ林＋二次林化がやや広範で行われるかと思われる。具体的にいつから、森林資源獲得へ特化していくのかは伐採石斧の動向などを併せて、第3章で検討する。

弥生時代中期後半以降（集落群の解体期）では、部分的にコナラ林が増加（50：50）、後期後半には部分的に二次林（クリ・コナラ）が優占、モザイク状に森林資源を獲得している状況がうかがえる。

弥生時代中期前半までと中期後半以降で集落動向も植生も大きく変わる。大規模生産（木材加工）の母体を失い、小規模化しているかのようである。

## 第3節 初期灌漑技術の発展過程

### 1. はじめに

井堰は水田稲作技術を如実に示す遺構の最たるもので、その構築技術や技術段階の変遷を追うことによって灌漑技術の発展過程やその構築・維持を担う集団の実像が明らかになるものと思われる。

弥生時代の水田稲作技術については、大きく2論が存在する。弥生時代の水田稲作技術段階を未発達な原初的なものとする説（八賀 1968, 黒崎 1980 など）と稲作技術は伝来当初より体系化された技術であるとする説（広瀬 1983・1988 など）である。実際、弥生時代の水田や水利施設の調査例が増えるにしたがって、多くの遺跡で井堰・水路・水田畦畔をとまなう体系化された技術がみられる。一方で、宮崎県都城市坂元A遺跡（葉畑編 2001）や岡山市津島遺跡（津島遺跡調査団 1968）のように水利施設を伴わない水田稲作も行われていることも忘れてはならない。それだけでなく、谷水田が検出された福岡県小郡市三沢公家隈遺跡では、溜井状の遺構が検出され、谷部の湧水を水路で水田に供給する状況も明らかになっており（片岡 2001）、その土地固有の地形環境に応じた様々な初期水田経営の姿が甦りつつある<sup>（註1）</sup>。

地形環境に応じた様々な水田経営が認知されつつあるが、特に灌漑技術を如実に物語る井堰（灌漑）については調査蓄積があるものの、それを体系的に扱った論考は数少ない（菅原 1980・1982, 広瀬 1983・1988, 吉留 2004）。調査蓄積により多種多様な井堰構築物が記録保存されているが、注意を喚起したいのが、井堰の存在自体を完成された灌漑技術と

早計するのではなく、調査蓄積のある今、帰納的方法によりそれぞれの井堰を再検討し、総合化する必要性があるということである。例えば、本田奈都子氏や島崎久恵氏による大阪府久宝寺遺跡の合掌型堰の検討や甲斐博幸氏の千葉県常代遺跡井堰灌漑技術的変遷の検討はケーススタディの好例であるし、井上智博氏の流路堆積物理解の提言は灌漑技術史研究の新しい方向性を示しているといえる（本田 1996, 島崎 1997, 甲斐 1998, 井上 2002）。筆者自身も先学の調査事例に導かれ、その実践を目指し、井堰構築物調査の方向性を模索したことがある（山崎頼 2004）。

本論では、まず水田稲作開始期である弥生時代前期以前の井堰構築技術の具体像、変遷過程について論じ、水田稲作開始期の特に井堰構築からみた技術段階を明らかにし、それを担う集団についても一部触れておくこととしたい。

## 2. 研究小史

### （1）灌漑技術調査黎明期（板付・菜畑遺跡発見以前）

昭和の初め、「一粒の粃」を探求していた森本六爾氏は、大和における弥生時代遺跡の立地を「低地性遺蹟」と「高地性遺蹟」に分け、「稲作りの農業は此の彌生式文化に伴って、より低い所から高い方へと擴散」したものと耕地の問題を含め、重要な見解を提示した（森本 1933）。

戦後まもなく再開された登呂遺跡の調査成果は、稲作農耕技術論の展開を促した。井関弘太郎氏は古代の耕地立地条件について、排水不良の湿地利用水田である「瓜郷型」から灌漑、排水の管理が発達、生産性が高まった「登呂型」へ、その後、洪積台地の縁辺において水田と畑作が有機的に結合した「平出型」へ発展するとした（井関 1953）。また、近藤義郎氏は灌漑・田植・耕具の技術的達成を相互に検討し、初期水稻農業を論じた。登呂遺跡等の弥生時代後期の水稻農業生産の著しい展開に関して立論したもので、その前段の前期段階の稲作技術を「自然灌漑に頼る低湿地農業」で生産性の限界があるとしている（近藤 1957）。

それらの見通しは、八賀晋氏に受け継がれ、八賀氏は古代水田の土地利用における土壌的環境を、現代の土壌類型と比較して検討した。水田開発に土壌的要因を認めた点で画期的な論である。水田開発の段階が「地下水型」（湿地）→「中間型」（半湿地）→「表面水型」（乾田）と変遷し、自然灌漑から人工灌漑への発展とも相関する見解を示した（八賀 1968）。この見解は、同時期に示された都出比呂志氏による農具鉄器化の画期とも結びついている（都出 1967）。

水田調査例の少ない時期にあつて、水田稲作の発展過程を扱った各論考は演繹的に導かれたものでもあり、その背景にはマルクス主義的な発展段階論が大きく影響していると思われる。

1970年代になると、各地で水利施設の発見が相次ぐ。著名なものを列挙すると、愛媛県古照遺跡（古照遺跡調査団 1974）の合掌型堰＜古墳時代前期＞、兵庫県長越遺跡（松下編 1978）の合掌型堰＜古墳時代初頭＞、大阪府利倉遺跡（柳本・島田 1976）の合掌型堰＜古墳時代前期＞、奈良県纏向遺跡（石野・関川 1976）の井堰、護岸施設＜古墳時代初頭＞などの調査例がある。

### （2）板付遺跡・菜畑遺跡の発見（1978年前後）

北部九州において、縄文時代晩期後半の突帯文土器を伴う水田跡が相次いで発見される。

福岡市板付遺跡では、下層水田として突帯紋単純期の水路や取排水用の堰を設けた水口、畦畔が検出され、上層水田として板付Ⅰ式の井堰などが検出され、水田稲作開始期より完成された灌漑技術が存在することが明らかとなった（山崎純 1978）。また、唐津市菜畑遺跡（中島・田島編 1982）、福岡市野多目遺跡（山崎純 1987）でも突帯文期以降の初期水田が調査され、弥生文化の定義、水田稲作技術研究は大きな方向転換をせまられることとなる。

### （３）灌漑技術研究拡大期（1980年代）

各地で初期水田、水利施設が調査され、水田稲作技術研究、初期水田評価が活発に行われる。

菅原康夫氏は古墳築造以前の土木技術を用いたという意味で「弥生系農業」と冠し、その時期の水利施設を集成、検討した。水利技術段階を、第Ⅰ技術段階＜弥生時代中期前葉から中葉＞が導・分水施設を中心とした通水システムの整備、達成、第Ⅱ技術段階＜古墳時代前期＞に河川灌漑の標識とも言うべき井堰の獲得とを果たしたと位置づける（菅原 1980）。また、板付・菜畑両遺跡の調査成果を受け、「低湿地営農にあっても、用水導入は行なわれており、流水対応の変化がみられない点で定型化した技術段階が当初から存在した」と加える（菅原 1982）。

黒崎直氏は弥生時代前・中期を用水の調節や溝の掘削、農耕具の改良など、灌漑についての経験と技術の蓄積が行なわれた段階とする。弥生時代後期に本格的な灌漑開始段階があり、農耕具鉄器化とともに、低湿地農耕を脱却する大きな原動力となったとする（黒崎 1980）。

広瀬和雄氏は古代の灌漑技術の発達と耕地の開発を有機的に論じるなかで、弥生時代の灌漑技術について積極的に評価する。すなわち旧来、「弥生時代の初期には木製工具による湿潤な低地を対象とした生産性の低い水稻農耕が行なわれていたが、中期末以降における鉄器の一定程度の普及と灌漑水田の広汎な出現が生産力の発達を促し、それが古墳時代前期になって飛躍的発展を遂げ」、それは大形古墳築造を生み出す経済的基盤になったという古墳時代大開発論が定着していることを批判し、水田稲作農耕導入当初から堰・水路・畦畔をもち、完成された技術体系を有していたと力説する（広瀬 1983・1988）。ただ、広瀬氏の言う弥生時代の「体系化された灌漑技術」も未だ河川導水を達成しておらず（灌漑規模は）未成熟な段階と位置づけている（広瀬 1983・1988）。

一方で、橋口達也氏は本格的な水田稲作農耕の前段階に縄文時代後晩期の萌芽的農耕段階が存在し、内的な技術発展にも評価が必要であるとする（橋口 1985）。

先の板付・菜畑・野多目遺跡で検出された初期水田に検討を加えた山崎純男氏は、板付遺跡・野多目遺跡などの段丘上に立地する給水型水田と菜畑遺跡などの谷部に立地する排水型水田の２種の水田構造が水田稲作開始期より存在するとした（山崎純 1987）。

以上のように、板付、菜畑、両遺跡の初期水田発見後は初期水田稲作研究の深化が行われる。

### （４）灌漑技術研究深化期（1990年代以降）

1990年代になると、各地で水田・水利施設調査が進み、その土地固有の環境に適応した多種多様な水田経営の実態が明らかにされる。

田崎博之氏は、松井健氏が土壌学的立場から示した古代水田の土壌形態＜地下水型・中

間型・表面水型>の区分を受け（松井 1987）、水田土壌環境を5類型に発展させた。それは給排水施設を有するⅠ型と水利施設を伴わない湿田的なⅡ型に大別され、前者は新たに大陸から導入された技術、後者は縄文時代以来の初期農耕技術の遺存形態として、橋口氏の見解を発展させた。Ⅰ型を開発指向型、Ⅱ型を環境利用・依存型とし、それぞれ開田地の地形環境によって様態が規定され、Ⅰ型については社会的・文化的変動をもたらす重要な要因となることを論じた（田崎 2002 a・b）。

吉留秀敏氏は玄界灘沿岸地域における水稻農耕導入期の灌漑技術について、水路と給排水構造から検討した。水源利用について、同じ分水域のものをA類、異なる分水域のものをB類とし、さらに水路と水田の接続方法を幹線水路から直接導水するものを1型、幹線水路と併行して排水用小水路を設け、水口部分で給排水調整を行なうものを2型、幹線水路から幅1 m以下の支線水路を設け、水田に接続し給排水するものを3型とした。A類1・2・3型は突帯文期から存在し、板付期以降B類の水源利用が広がる。水田面の形態には地理的条件だけでなく、給排水構造と田面形態を対応させた工夫がみられるとした（吉留 2004）。

近年では、地域的検討が進み、様々な水田経営のあり方が示されるに至る。

### 3. 弥生時代前期井堰の集成と類型化

#### (1) 集成と分類

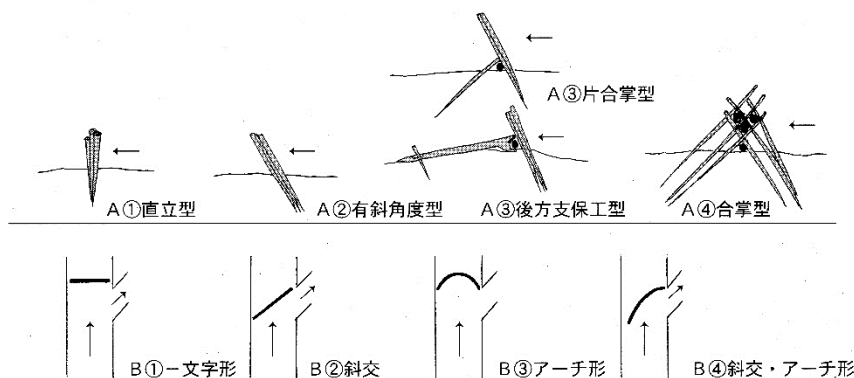
弥生時代前期以前の井堰例は管見によれば21遺跡60例に上る（第4表・第55図）。初期水田の分布状況と大きく違えない（森岡 1995）。

なお集成にあたり、時間軸の設定は弥生時代前期以前の井堰が北部九州から近畿地方までみられることから、それぞれの地域の土器編年を暫定的に用い、その併行関係は表に示した通りである（第3表）。日本列島内の併行関係については種々の論議があ

第3表 各地域の併行関係

韓半島南部		北部九州			備前		近畿	
無文土器前期	可楽里式 欣岩里式	縄文晩期		黒川式				
	無文土器中期			山ノ寺式				
休岩里式				夜臼式				
無文土器後期	松菊里式	弥生前期		板付Ⅰ式		沢田		船橋
	水石里式			板付Ⅱ式		津島Ⅰ		長原
						津島Ⅱ		前期古段階
						高尾		前期中段階
			後半					前期新段階

（韓半島南部と北部九州の併行関係は武末2004、西日本は田畑2000を参考）



第54図 井堰構造の類型化

るが田畑直彦氏の見解に概ね従っている（田畑 2000）。韓半島と北部九州の併行関係は武末純一氏の見解に従う（武末 2004）。

井堰構造の分類については、先学の成果を踏まえて類型化をおこなう（第54図）（註2）

#### 【井堰構築材（流水攻撃面・前面）】

①杭型 井堰前面の構築材として杭を専ら用いるもの。

②杭・矢板併用型 井堰前面の構築材に杭・矢板併用のもの。矢板の構成比率が杭を下回



る場合はこの類型。

③**矢板型** 井堰構築材として矢板を用いるもの。杭も併せて用いるものが多いが、矢板が井堰構成材として主要なものはこの分類にあてはまる。

## 【井堰構造】

### A. 断面形による分類

①**直立型堰** 井堰構築材（杭・矢板）が流水に対して直立して打設されるもの。横材により構造維持を図り、併せて流水の透過を抑えるものが多い。水口付近で板材を仮設し、取排水調整をするものもある。

②**有斜角度堰** 井堰構築材（杭・矢板）が流水に対して斜めに打設されるもの。オーバーフローを想定、強い流水を逃がすことが出来る。横材により構造の維持を図り、併せて流水の透過を抑えているものが多い。

③**片合掌型堰／後方支保工型堰** 堰体高を上げるための構造というよりは前面の杭・矢板列を支えるための構造となっている。横材が河床近くに存在し、前面の斜材、後方の斜材と横材の組み合わせが基本的に複数回の組み合わせになっていない点が合掌型とは異なる。後方に打たれる杭も少ない。特に支保材に大形材を用いるものは後方支保工型堰と呼称しておく。

④**合掌型堰** 断面形態が合掌形（二等辺三角形）を呈するもの。前面に打たれる杭とそれを支える横材と後方を支える杭を相互に固定強化するために打ち込み、組まれる。片合掌型堰とは異なり、前面の斜材、後方の斜材と横材の組み合わせが複数回の組み合わせによる。水圧の負けない頑丈さ・水の透過を防ぐこと・堰体高を上げることを目的として造られる。壊れることは少ないが、土砂等を全て堰き止め、堰自体が埋没して検出されることが多い。

### B. 平面形による分類（喜多村 1950，井上 2004）

幹線水路や流路に築かれる井堰の分類、小規模溝に設置されるものの分類には適さない。

#### ①一文字形配置＜井上 A タイプ（後の一文字堰に類似）＞

流れに対して直交して直線的にのびるもの

#### ②斜交配置＜井上 B タイプ（後の菱の手堰に類似）＞

流れに対して斜交するもの

#### ③アーチ形配置＜井上 C タイプ（後の袋堰に類似）＞

流れに対して直交するが下流側に膨らむ形状のもの

#### ④斜交・アーチ形配置

斜交配置とアーチ形配置が組み合わせ。

以上のように類型化を行い、本稿で用いる。表記方法は、①井堰構築材②井堰構造（断面形態）③井堰構造（平面形態）の順に記す。

## （２）各地域における弥生前期井堰と初期水田

現在までに確認されている弥生時代前期井堰及び周辺の初期水田を地域別に概観しておく。以下の通り、大別 11 地域に分かれる（註<sup>3</sup>）。

### a. 韓半島南部地域

韓半島では近年、初期水田稲作跡の調査が増加している。慶尚南道密陽市琴川里遺跡【無



文土器前期】(慶南大学校博物館・釜山大学校博物館 2015), 慶尚南道蔚山市無去洞玉峴遺跡D地区【無文土器前期】(慶南大学校博物館 2016), 同市也音洞遺跡Ⅱ地区【無文土器前期】(密陽大博・東義大博 2001), 忠清南道論山郡鍊武邑麻田里遺跡C地区【無文土器中期】(高麗大学校 2004) 等があげられる(註4)。

琴川里遺跡は密陽江と東川の合流地点で形成された氾濫原内の比較的高い自然堤防上, 及び後背湿地に立地する。水田は小区画水田で自然堤防から後背湿地に至る傾斜面に営まれ, 水路・畦畔を伴い, 灌漑施設「洑」が検出されている(第56図)。「洑」は流路方向に対し, やや傾斜を持ち設置される。確認された杭列は約10mに及び, およそ2列認められ, 弧状をなす。2列の間隔は1~2mであり, 部分的に杭が無秩序になる。この「洑」から自然堤防裾部分に掘削された水路に導水され, 各水田に給水される構造が想定されている。ただ, 「洑」と水田の関係については, 層位学的検討や同時性(所属時期)の検討が再度行われており, 詳細は正報告を待ちたい。

それに対して玉峴遺跡の水田遺構は小規模な浅谷を利用し, 丘陵裾部に沿う形で幅20mほど帯状に広がる。小区画水田で, 丘陵裾の水田域との境界に給水用水路が掘削されている(第56図)。

麻田里遺跡では, 低丘陵裾付近の浅い谷底に水田遺構が営まれ, 丘陵斜面上の貯水施設(溜井状土坑)から水路によって水田に導水される。

也音洞遺跡では, やや深く開析された谷奥部分で, 「長方形階段式水田」とよばれる水田が営まれる。水路がなく, 水利を行なわない天水田と解されるが, 地形に沿う低い段差の連続を創出し, 自然排水を可能にしたものと思われる。

#### **b. 肥前北部・筑前地域(玄界灘沿岸地域)**

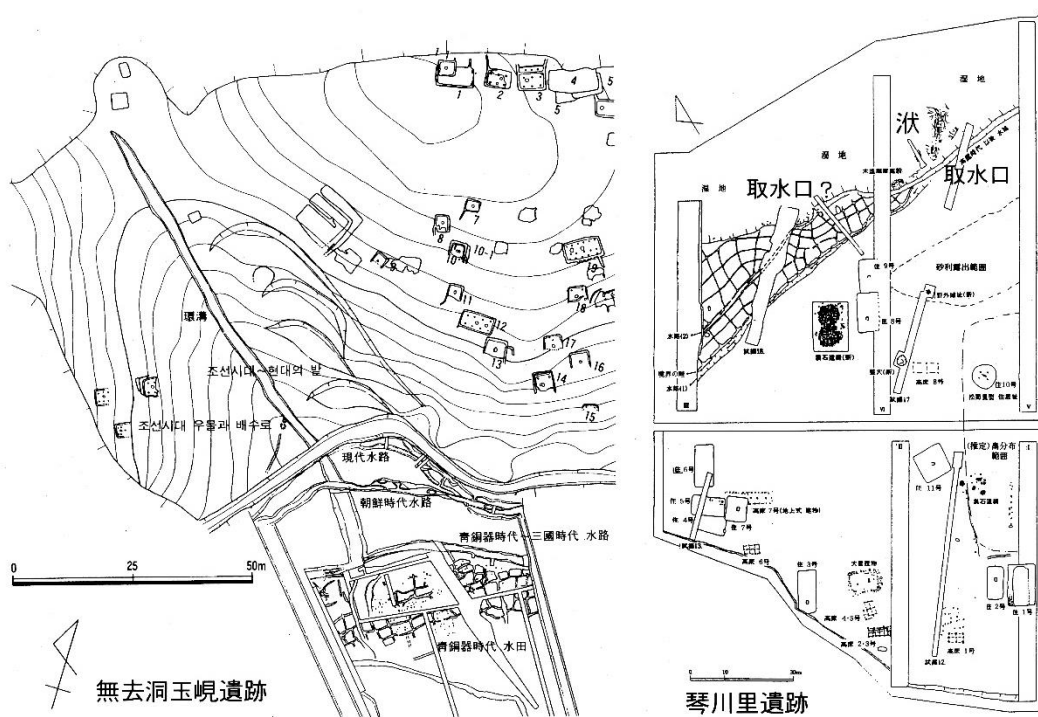
日本列島でいち早く水田稲作が開始された地域であり, 突帯文期に遡る初期水田が多く検出されている。それらの立地環境や構造は福岡市板付, 野多目遺跡に代表される段丘上に形成された給水を主目的とする水路を伴うものと, 唐津市奈畑遺跡に代表される丘陵裾の谷部に開析された, 排水を主目的とする水路を伴うものが存在する(山崎純 1987)。また, 近年の調査成果より, 福岡平野においては微高地や低位段丘上の水田開発が突帯文期から広範囲に行われていることが理解されるにいたる(吉留 2004)。

井堰の調査例も多く, 突帯文期に遡る資料もみられる。突帯文期の井堰は板付遺跡G-7a区で取排水溝内の杭・矢板・有斜角度型調整堰, 排水溝内の杭・直立型調整堰, 幹線水路に設置された堰がみられる(第57図)。幹線水路の取水堰は残存状況が悪く, 分類が困難である(山崎純 1999)。橋本一丁田遺跡2次調査では, 4基の井堰が確認されている(池田編 1998)。特に, I区矢板列004や杭列005は片合掌型を採り, 早い段階でこの形態が出現していることがわかる。矢板列004は数単位存在し, 時期差も想定できる。また, 矢板列004構成材矢板15のC14年代測定は $2920 \pm 190$ の値が出ている。

また, 4次調査Ⅲ区の調査区端で流路内に矢板・有斜角度一文字形配置堰(SX118)がみられる(池田・安部 2004)。野多目遺跡では突帯文期から板付I式段階の水口に設置された杭・直立型調整堰が2基とSD01・02内の井堰が3基みられる。SD01・1号井堰は杭・矢板直立型一文字形配置, SD02・2号井堰は, 付近に水口が存在し, 杭・直立型の取水堰である。3号井堰も付近に水口がみられ, 矢板・直立型一文字形配置の取水堰であろう(山崎純編 1987)。



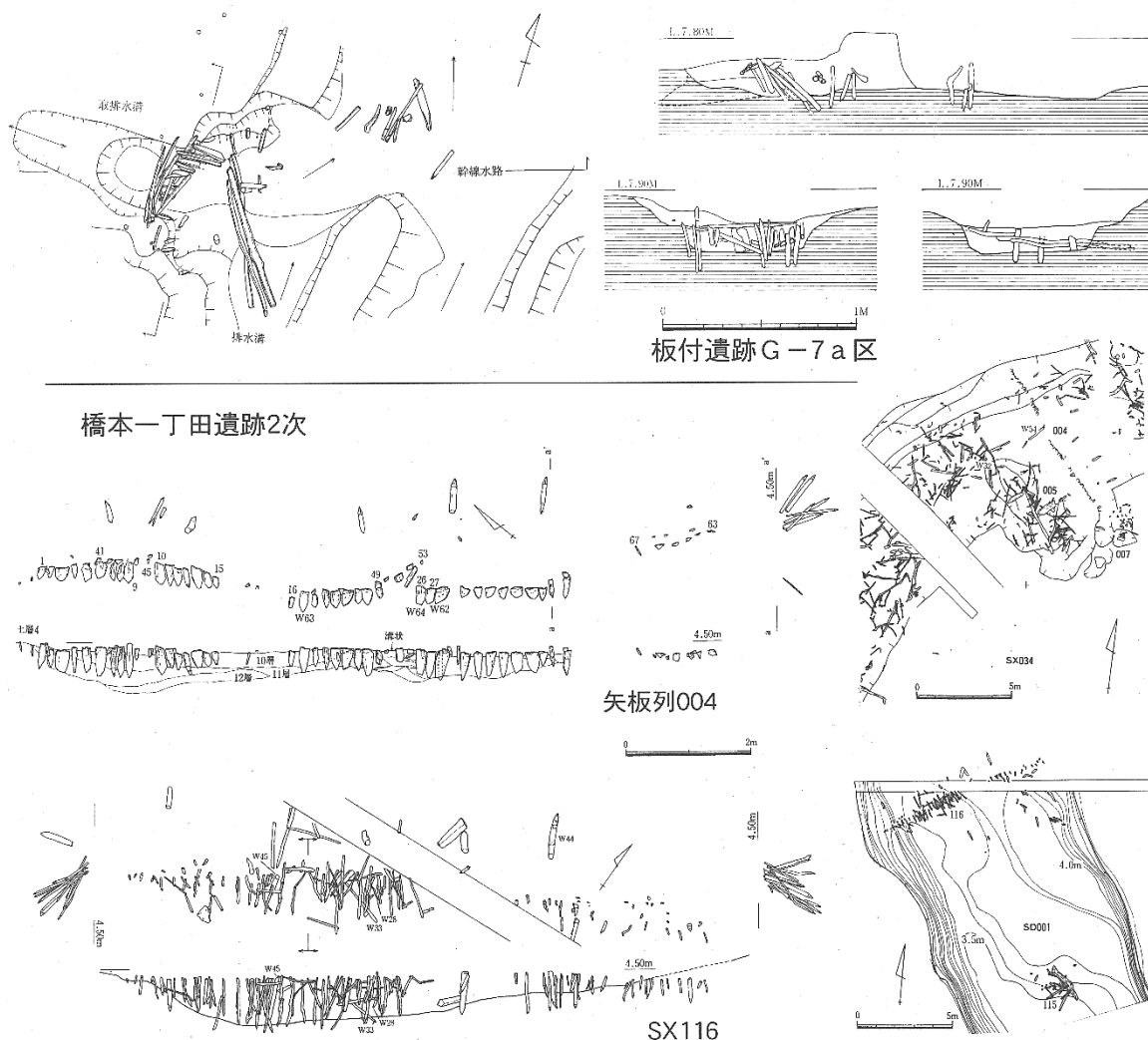
第 55 図 初期灌漑施設・井堰の分布 (S = 1 / 500,000)



第 56 図 韓半島南部の初期水田・灌漑施設 (慶南大・釜山大 2015・慶南大 2016)

第4表 弥生時代前期以前の井堰集成

No.	遺跡名	所在地	時期	遺構名	機能	類型	井堰/流路・溝	参考文献	備考
1	野川里	慶尚南道密陽市	無文土器前期	溝	溝に取水	坑・有斜角型斜交	約10m/不明	李・金2003	2列になる、補改修の可能性も
2	菜畑	佐賀県唐津市	板付1式期	堰	水口へ取水	坑・矢板・直立型一文字形	23m/23m	中島・田島1982	板付1式と考える意旨もある(山崎純男1987)
3	橋本一丁田	福岡市西区	突帯文層純期	2次第4面1区矢板列004	取水	矢板・片合掌型一文字形	8.7m/不明	山口・杉山・	複数時期の可能性、埋没過程で設置、ac. 2920±190
				2次第4面1区板列005	取水	坑・矢板・片合掌型	4.2m/不明	池田1998	河川の傍らも部分に設置
				2次第4面1区SX115	取水	坑・有斜角型一文字形	2.4m/9.7m	池田1998	河川幅と井堰幅が不整合(平面)、埋没過程で設置
				2次第4面1区SX116	取水	坑・片合掌型一文字形	9.2m/約33.5m	池田・友部2004	複数時期の可能性、河川・井堰幅不整合(平面)、埋没過程で設置
4	四箇	福岡市早良区	突帯文～板付1式期	4次Ⅲ区SX118	取水	矢板・片合掌型一文字形	6m/約9.6m	池田・友部2004	河川幅と井堰幅が不整合(平面)、埋没過程で設置
				23次1号堰裏側	分水	坑・片合掌型	5.8m/5.8m以上	古武1989	東側と西側で時期差の可能性
				23次1号堰西側	分水	坑・矢板・片合掌型	6.4m前後/6.4m以上	古武1989	東側と西側で時期差の可能性
				23次2号堰	分水	坑・片合掌型	6.4m以上/6.4m以上	古武1989	調査区端で詳細不明
5	板付	福岡市博多区	突帯文層純期	2区1・23トレンチ欄状遺構	取水	坑・直立型斜交	約3m/約6m	後藤・京1976	調査区端で詳細不明
				G-7a区井堰	取水	坑・直立型斜交	3m程か/3m	後藤・京1976	調査区端で詳細不明
				G-7a区排水溝部井堰	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	1m/0.8m	山崎純男	残存感、打設3本のみ、規模不明
				G-7a区排水溝部井堰	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	1m/0.8m	山崎純男	残存感、打設3本のみ、規模不明
6	下月隈C	福岡市博多区	板付1～IIa式期	G-7a区第1・2区・穴列	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	5m/5.5m以上	山崎純男	中央部取り外しを想定、補改修とも考えられるか
				G-7b区井堰	取水	坑・片合掌型斜交	5.6m/約0.9m	1979, 1999	中央部取り外しを想定、補改修とも考えられるか
				G-7b区調整堰	調整	坑・直立型斜交	3m程か/3m	池本編2004	調査区端で詳細不明
				第5面SX257	取水	坑・直立型斜交	5.6m以上/5.6m以上	池本編2004	調査区端で詳細不明
7	野多目	福岡市南区	突帯文～板付1式期	水口4	調整	坑・片合掌型斜交	0.9m/0.9m	山崎純男	調査区端で詳細不明
				水口7	調整	坑・直立型一文字形	0.9m/0.9m	山崎純男	調査区端で詳細不明
				1号井堰	調整	坑・直立型一文字形	2.4m/2.4m	山崎純男	調査区端で詳細不明
				2号井堰	調整	坑・直立型一文字形	2.6m/4m	山崎純男	調査区端で詳細不明
8	長行	北九州市小倉南区	板付IIc～城ノ越式期	水口へ取水	取水	坑・直立型一文字形	2.4m/3m	山崎純男	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・直立型一文字形	9m/9m	山崎純男	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・直立型一文字形	3mほど/3mほど	山崎純男	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・直立型一文字形	2.5m/2.5mほど	山崎純男	調査区端で詳細不明
9	力武内御	福岡県小都市	板付1式併行期	水口へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	2m/2mほど	山崎純男	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	2.5m/2.5mほど	山崎純男	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・直立型一文字形	0.8m/0.8m	山崎純男	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・直立型一文字形	0.8m/0.8m	山崎純男	調査区端で詳細不明
10	生糸里地区	大分市	板付IIa～IIb式期	取水	取水	坑・直立型	—	永松2004	板が数単位、3回はとやりかえ、大分市教委永松氏に指示
				溝へ取水	取水	坑・直立型	—	永松2004	板が数単位、3回はとやりかえ、大分市教委永松氏に指示
				溝へ取水	取水	坑・直立型	—	永松2004	板が数単位、3回はとやりかえ、大分市教委永松氏に指示
				溝へ取水	取水	坑・直立型	—	永松2004	板が数単位、3回はとやりかえ、大分市教委永松氏に指示
11	津島岡大	岡山市	津島1式	溝へ取水	取水	坑・直立型	—	永松2004	板が数単位、3回はとやりかえ、大分市教委永松氏に指示
				溝へ取水	取水	坑・直立型	—	永松2004	板が数単位、3回はとやりかえ、大分市教委永松氏に指示
				溝へ取水	取水	坑・直立型	—	永松2004	板が数単位、3回はとやりかえ、大分市教委永松氏に指示
				溝へ取水	取水	坑・直立型	—	永松2004	板が数単位、3回はとやりかえ、大分市教委永松氏に指示
12	吉田川原堤馬	岡山市	高尾式	溝へ取水	取水	坑・直立型	—	永松2004	板が数単位、3回はとやりかえ、大分市教委永松氏に指示
				溝へ取水	取水	坑・直立型	—	永松2004	板が数単位、3回はとやりかえ、大分市教委永松氏に指示
				溝へ取水	取水	坑・直立型	—	永松2004	板が数単位、3回はとやりかえ、大分市教委永松氏に指示
				溝へ取水	取水	坑・直立型	—	永松2004	板が数単位、3回はとやりかえ、大分市教委永松氏に指示
13	川津下樋	香川県坂出市	前期新設以降	溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	4.8m/5.6m	片桐編1996	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	4.8m/5.6m	片桐編1996	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	4.8m/5.6m	片桐編1996	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	4.8m/5.6m	片桐編1996	調査区端で詳細不明
14	東神古	兵庫県加古川市	前期新設以降	溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	1m/1.25m	石野・松下1968	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	1m/1.25m	石野・松下1968	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	1m/1.25m	石野・松下1968	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	1m/1.25m	石野・松下1968	調査区端で詳細不明
15	対中	兵庫県三田市	前期	溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	1.8m/1.8m	深井編1988	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	1.8m/1.8m	深井編1988	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	1.8m/1.8m	深井編1988	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	1.8m/1.8m	深井編1988	調査区端で詳細不明
16	岩屋	兵庫県伊丹市	前期後半	溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	1.2m/1.2m	上田2004a・b	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	1.2m/1.2m	上田2004a・b	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	1.2m/1.2m	上田2004a・b	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	1.2m/1.2m	上田2004a・b	調査区端で詳細不明
17	有礼	大阪府茨木市	前期新設以降	溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	1.9m/1.7m	宮脇1986	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	1.9m/1.7m	宮脇1986	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	1.9m/1.7m	宮脇1986	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	1.9m/1.7m	宮脇1986	調査区端で詳細不明
18	安満	大阪府高槻市	前期(景津1・1・2)	溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	6m/7.6m	宮脇1986	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	6m/7.6m	宮脇1986	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	6m/7.6m	宮脇1986	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	6m/7.6m	宮脇1986	調査区端で詳細不明
19	池島・福万寺	大阪府	前期中葉	溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	3m/約4m	森田1991	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	3m/約4m	森田1991	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	3m/約4m	森田1991	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	3m/約4m	森田1991	調査区端で詳細不明
20	池島・福万寺	大阪府	前期中葉	溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	3.6m/7mほど	佐伯編1997	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	3.6m/7mほど	佐伯編1997	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	3.6m/7mほど	佐伯編1997	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	3.6m/7mほど	佐伯編1997	調査区端で詳細不明
21	徳蔵地区	和歌山県日高郡新田町	前期後半	溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	0.6m/1.4m	国・山元	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	0.6m/1.4m	国・山元	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	0.6m/1.4m	国・山元	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	0.6m/1.4m	国・山元	調査区端で詳細不明
22	納所	和歌山県日高郡新田町	前期新設以降	溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	1.2m/0.9m	国・山元	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	1.2m/0.9m	国・山元	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	1.2m/0.9m	国・山元	調査区端で詳細不明
				溝へ取水	取水	坑・矢板・有斜角型一文字形	1.2m/0.9m	国・山元	調査区端で詳細不明

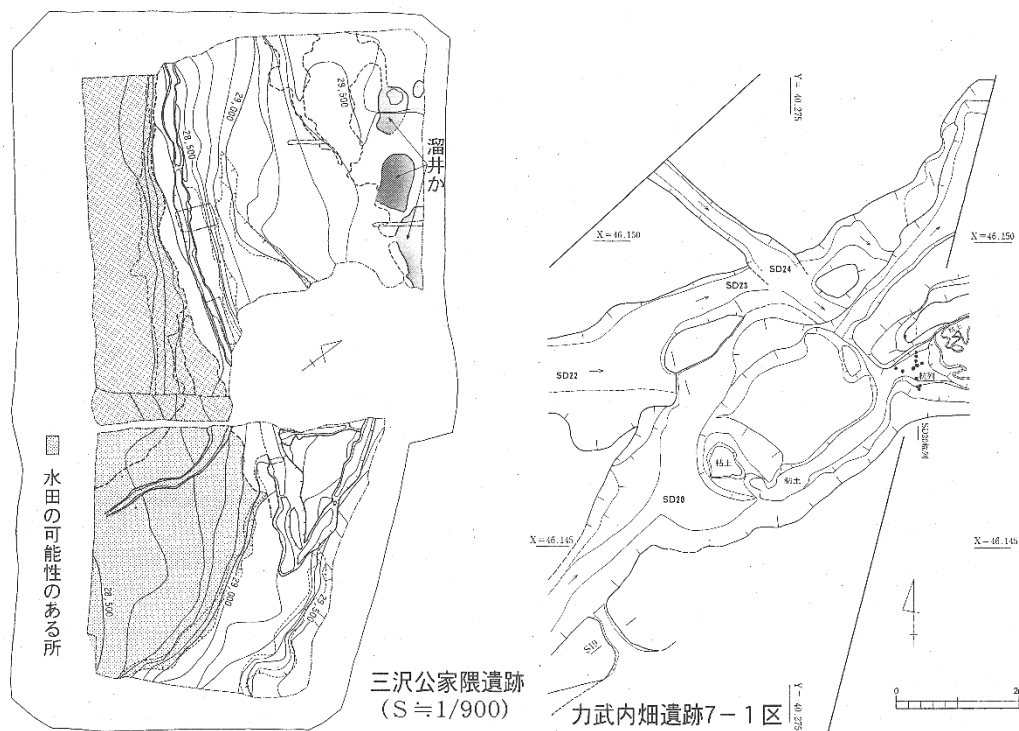


第 57 図 突帯文期の井堰（山崎純 1999・池田 1998）

板付Ⅰ式期では、菜畑遺跡で幅 2.3m の護岸された水路内に杭・矢板直立型一文字形配置取水堰や続く板付Ⅱ式の同様の堰がある（中島・田島編 1982）【註 5】。板付遺跡では、2 区 J 23 トレンチで水路の埋没過程で設置された杭・有斜角度（斜交）堰、G-7a 区の取排水溝の調整堰や G-7b 区の幹線水路内の杭・合掌型一文字配置取水堰がみられ（後藤・沢編 1976、山崎純編 1999）、下月隈 C 遺跡では杭直立型斜交配置の堰がみられる（瀧本編 2004）。板付Ⅱb 式では四箇遺跡で杭・片合掌型堰が 3 基みられる。調査区端で検出のため、河川方向等が判然としないが、土層観察からは 5 段階の河道変遷が想定され、その変遷に伴い設置された幅 6～7 m の堰がみられる（吉武編 1989）。

### c. 筑後地域

近年は玄界灘沿岸地域のみならず、内陸部での稲作受容の姿が明らかになりつつある。水田が検出された（山崎頼 2004）。また、三沢公家隈遺跡では板付Ⅱc～城ノ越式期とされる丘陵裾の径 1～2 m 前後の溜井状遺構から水路を介して給水される浅谷部の谷水田が検出されている（片岡 2001）（第 58 図）。溜井状遺構は力武内畑遺跡 7 区でも検出される。小郡市力武内畑遺跡 7 区で段丘裾部において、板付Ⅰ式併行期の水路・井堰・畦畔



第 58 図 筑後地域の弥生時代前期溜井状遺構(片岡 2001a 他)

を伴う。

それは水路中にあり、一旦流水の勢いを止め、貯水し水温を調整する機能を持っている。溜井状遺構の出口部分には杭列が存在し、流水をコントロールできる(第 58 図)。また、有明海沿岸の筑後市津島九反坪遺跡でも板付Ⅱb～Ⅱc 式の大形溜井状遺構が検出されている。遺跡は矢部川が形成した後背湿地上に立地する。道路幅の調査であり、全容は明らかでないが、溜井状遺構の規模は長軸 23m 以上×短軸 4.5m 以上となる(立石編 2002)。井堰は力武内畑遺跡 7 区で自然流路の埋没過程で設置された、取水・調整機能を併せ持つ大別 4 期の井堰がみられる(山崎頼 2004)【註 6】。

#### d. 豊前北部地域

豊前北部地域では、北九州市石田遺跡(梅崎編 1990)、長行遺跡(宇野編 1983)が初期水田跡として知られる。

石田遺跡は段丘裾付近に立地し、縄文晩期末から弥生初頭相当層(7 層)＜夜臼Ⅱ式から板付Ⅰ式＞以下より、護岸杭列と考えられる杭の配置や等高線から幅 4～5 m の流路が想定される。7 層からは少量のプラントオパールが検出されている。畦畔等は明らかでない。長行遺跡では丘陵間の浅谷部分に立地し、遺跡中央部には旧長行川が流れる。前期末に開田時期を迎え、調査者により 3 期の水田遺構が想定される。板付Ⅱc 式から城ノ越式の井堰を伴い、流路から取水する杭・直立型一文字配置である【註 7】。畦畔等は明らかでない。

#### e. 豊後地域

最近、豊後地域において重要な調査成果があげられた。大分市玉沢条里跡第 7 次調査区において板付Ⅱa～Ⅱb 式にかけての幅 3～4 m の溝 2 条とそれに伴う井堰が 2 基検出された(永松 2004)【註 8】。井堰 SX090 は矢板直立型のもので 3 列みられ、調査者は 3 回の補改修

を想定する。井堰 SX115 は同じく矢板直立型で、こちらは一系列のみの検出である。詳細については正報告を待ちたい。今後、周辺遺跡を含めた初期水田具体像追究が期待される地域である。

#### **f. 備讃瀬戸地域** (註9)

備讃瀬戸地域では初期水田・前期井堰の調査蓄積が多くある。特に 1968～69 年に調査された岡山市津島遺跡の水田遺構は古くから周知されてきた（津島遺跡調査団 1968）。

初期水田は、備前地域では旭川流域沖積微高地周辺で検出される。岡山市津島江道遺跡（埋文研究会編 1991）では突帯文期の水田遺構が、津島岡大遺跡（吉留ほか 1986 等）、百間川原尾島遺跡（正岡編 1984）、百間川沢田遺跡（柳瀬・宇垣 1987）では前期の水田遺構が確認されている。そのうち、津島遺跡では原初的な水利施設を持たない湿田が想定される。讃岐地域では、丸亀平野東部大束川東岸の沖積地に立地する川津下樋遺跡（片桐編 1996）や高松平野の扇状地内谷状くぼ地部分に立地する高松市浴・長池遺跡（埋文研究会編 1991）で初期水田が見られる。

井堰は、備前地域百間川原尾島遺跡 2 で自然流路が流路方向を変え、埋没する過程で堰が設置される。津島岡大遺跡では同じく自然流路の埋没過程で取水堰がみられる。讃岐地域川津下樋遺跡では前期中頃以降の杭・直立型一文字形配置、杭・矢板・有斜角度型一文字配置、杭・合掌型一文字形配置の各種分水堰がみられる。

#### **g. 播磨地域**

播磨地域では、初期水田については加古川市美乃里遺跡（埋文研究会編 1991）、神戸市西区玉津田中遺跡（甲斐編 1996）、淡路島雨流遺跡などが知られる（兵庫県教委 1990）。明石川下流域の沖積地から段丘上に立地する玉津田中遺跡では前期の集落構造は微高地上に居住域、段丘上に墓域、居住域周辺に水田が営まれる。

前期井堰は加古川市東神吉遺跡で杭列痕のみ確認されている。小規模な井堰で溝幅に設置された杭・直立型斜交配置堰と考えられる（石野・松下 1968）。

#### **h. 摂津地域**

摂津地域では三田市対中遺跡（深井編 1988）、伊丹市岩屋遺跡（上田 2004a・b、兵庫県教委 2002・03）、茨木市牟礼遺跡（宮脇 1986）、高槻市安満遺跡（埋文研究会編 1991）で前期井堰が確認される。初期水田も神戸市須磨区戎町遺跡（山本編 1989）、東灘区北青木遺跡（山下編 1986）などで散見される。

牟礼遺跡は三島平野の安威川流域氾濫原に立地する。発見当初、近畿における突帯文期大形水利施設と評価がされたが、近年、前期新段階に下げて考えられている。井堰構造は川幅に沿って粘土を台形上に築き、その両面に丸太材を斜めに隙間なく打ち込み、さらにその上に 30～40cm 間隔で矢板を斜めに打ち込むと報告される（宮脇 1986）。合掌型に近い構造か。

安満遺跡は同じく三島平野の東端部に位置し、桧尾川が形成した小規模な扇状地の中央部から先端部に立地する。井堰は同じ水路の底とかなり埋まった上層部分に設置される 2 時期が存在する。下層の井堰は残存が悪く、杭が確認されるのみで、上層の井堰は矢板・片合掌型一文字形配置分水堰である。

三田市対中遺跡は三田盆地に所在し、河岸段丘から沖積地に立地する。前期遺構面で溝 5 条とそれに付設された井堰 2 基が検出された。井堰は幅 1.8m の流路に設置された杭・矢

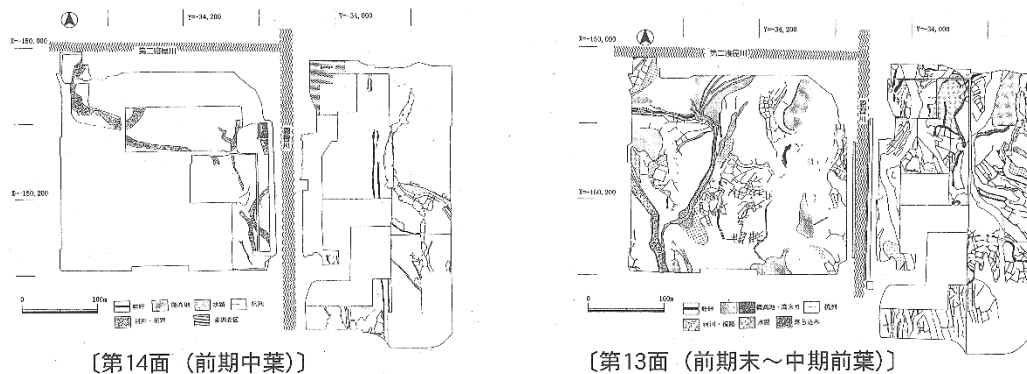


板・直立型一文字形配置の分水堰で、杭・矢板が数条みられるため、補改修や時期差の可能性はある。他に杭・直立型一文字形配置の堰がみられる。

#### i. 河内地域

河内地域では弥生時代前期には河内潟から河内湖へ変遷しており<sup>(註 10)</sup>、旧大和川支流が網の目状に北流し、沖積作用が顕著に見られる地域に初期水田が多く立地する。近畿自動車道建設に伴う調査で発見された若江北遺跡、山賀遺跡、友井東遺跡、美園遺跡の中河内遺跡群(埋文研究会編 1991)や前期中頃以降前期の時間内で複数の水田面が把握されている池島・福万寺遺跡(第 59 図)(井上編 2002 ほか)、志紀・田井中遺跡などがある。

井堰については、池島・福万寺遺跡で前期中葉の 96-2 区第 13-1 面杭列 7、前期末から中期前葉になると、福万寺 I 区第 13a 面で合掌型堰 20 が出現する。13a 面では他にも、片合掌型堰 21・22、護岸杭列、木樋がみられ、前期中葉に開始した水田経営が前期末～中期前葉にかけて広範囲に及び、一つの達成段階を迎える(図 7)。また、志紀遺跡では周辺田面の残存状態が悪く、水利構造が判然としないが導水管が良好な形で検出された。前期後半代の導水管は、杭列が 2 条(杭列間約 60 cm)平行に走り、それに直交する形で割り貫いた丸太材が設置される。杭列配置からは畦畔の存在も考えられるが、この種の杭列遺構を考える上で参考になる。



第 59 図 池島・福万寺遺跡の前期水田(井上編 2002)

#### j. 紀伊地域

紀伊地域では近年、弥生文化到来・伝播経路を考える上で重要な遺跡が調査されている。紀伊南部御坊市堅田遺跡では前期後半代の環濠集落が発見された(川崎編 2002)。環濠内外には松菊里型住居や前期段階のヤリガンナの鋳型や溶炉遺構が検出された。それに加えて、日高郡南部町徳蔵地区遺跡では前期新段階の矢板・後方支保工型斜交配置の大形井堰が検出されている(立岡 2002)。

前期の集落や水利施設の発見が相次ぎ、加えて初期水田の発見が待たれる地域である。

#### k. 伊勢地域

伊勢地域では、一志郡嬉野町筋違遺跡(東・川崎・瀬野 2004)で初期水田がみられる。特に、筋違遺跡では弥生時代前期の水田稲作および畑作の状況が明らかになっており、水路を介して水田や畑が有機的に結合する。幹線水路からの取水溝接続部分などが調査されるが、井堰の遺存が確認されるに至っていない。調査は継続されており、井堰を含めた水利システムの解明が待たれる。井堰は嬉野町納所遺跡で前期新段階のものがみられる(伊藤 1980)。残存状況が悪いが、杭列が 2 列にわたって確認され、双方角度をもって設置さ

れている。合掌型堰の可能性が考えられる。

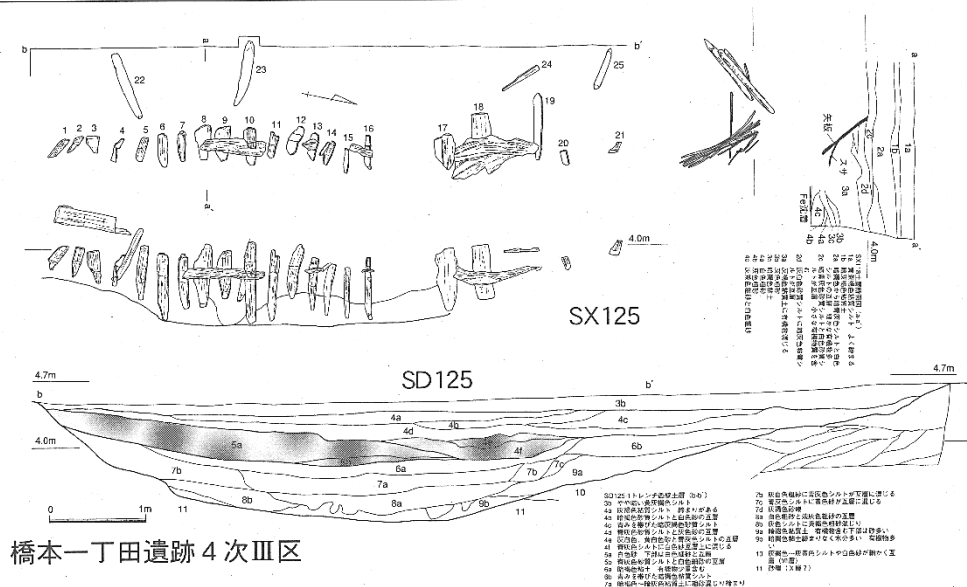
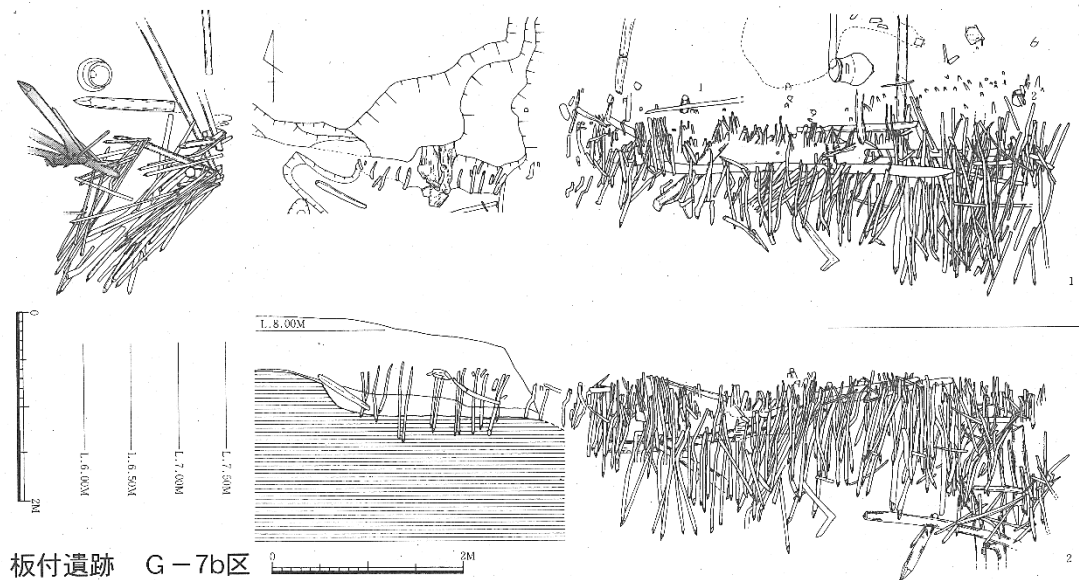
#### 4. 井堰構造の個別具体的検討

先に概観した井堰のうち、特に遺存状態がよく構造がわかる井堰について取上げる。それらをもとに井堰構築技術変遷を示すことにしたい。

##### a. 福岡市板付遺跡 G-7b 区井堰（第 60 図）[山崎純 1999]

板付遺跡 G-7b 区井堰は調査区内で約 6.5m 幅を確認し、現状で約 2 m の高さを有している。幹線水路内に築かれ、取水溝に導水する。

構築方法について詳細に報告されており、確認しておく。まず、径 20 cm 前後、長さ 2.6 m 以上の上部が二又になった杭を打ち込み、その杭に径 20 cm 前後で、長さ 3 m 以上の横木を渡す。二又杭は調査区内で 3 本確認される。次に横木に沿って径 5～6 cm、長さ 3 m 前後の杭を打ち込み、堰の基礎部分を造る。さらに水位を上げる必要性から、上部に同様



第 60 図 板付遺跡・橋本一丁田遺跡の検討（山崎純 1999、池田・阿部 1998）

の方法で堰のかさ上げを行う。堰の西半部では径 25 cm 前後、長さ 2.5 m 前後の二又杭を 2 本打ち込み、それに径 25 cm、約 7 m の横木を渡し、横木に沿って径 5 ～ 10 cm、長さ 4 m 前後の杭を幾重にも打ち込んでいる。水路の西側では 1 段の構築になるが中央に近づき、2 段築成になる。中央部の構造は一段目の基礎、川岸に近い部分の 2 段目構築の強度を利用しながら、横木を渡しこみ、それを基礎に杭を打ち込んでいると考えられている。打設された杭幅は約 1 m に達するが、これだけでは貯水した水の圧力を支えるのに限界があり、随所に堰を北側（下流）から支えるために径 25 cm 前後の支え材が斜めに固定される。水田への給水はさらにあと一段の井堰構築が必要との見解が示される（山崎純 1999）。

筆者はこの井堰構造について、別の見解を示しておきたい。まず、2 段築成については時期差と考えたい。井堰付近での流路土層断面図がないものの、井堰構築材の断面図から判断して、2 段目築成の際には一段目井堰が埋没していないと、杭が土壌中に打設出来ない状況が生じることから明らかであろう。図 7 中の横木に注目して検討すると、一段目の横木は東側にあるのに対し、2 段目の横木は西側に存在する。東側の状況が調査区外に及ぶため、不明ではあるものの、もともと東側を流れていた流路が西側に変遷していく過程で、井堰も設置し直されたものと考えられる。流路が埋没、流路方向が変化していく過程で、井堰設営に関しても補・改修が行われたものと理解したい。また、堰全面の斜め杭は、二又基礎杭、横木と組み合わせた強固なものであるから、築造当初よりある程度傾斜を持たせて造られているものと考えたい。

以上のことから、板付遺跡 G-7b 区井堰は流路が埋没、変遷する過程で補改修が行われており、その構造は、杭・片合掌型一文字形配置の取水堰である。一段目井堰に伴う土器が板付 I 式の土器であるので、2 段目の井堰についてはそれ以降のものと考えられる。

#### **b. 福岡市橋本一丁田遺跡 4 SX118（第 60 図）** [池田・安部 2004]

橋本一丁田遺跡 4 次調査で検出された SX118 は突帯文期から板付 I 式期の SD125（河川）内に設置された矢板・片合掌型一文字形配置の井堰である。SD125 に設定されたトレンチ内で検出され、その堆積状況も明らかである。矢板は幅 5 ～ 24 cm を測り、10 cm 前後のものが多く、長いもので 85 cm 遺存している。標高 3.6 m 前後にスサが堆積する。スサは 6 層上面にあたり、5 または 4 層部分に流れがあった時期に SX118 が設置されたと報告されている。また、矢板は東側に 60° 前後傾斜して打設され、その後方には径 8 cm 前後の杭が 45° 前後の角度で西側に打たれている状況が確認できる。

報告では重要な見解が示されている。平面的には約 9.6 m 幅の SD125 に 6 m 弱の SX118 が見られるが、SX118 は SD125 上層の時期に対応して設置されていると報告される。こういった流路幅に対応しない井堰が多く図示されるが、実際、流路機能時を判断する必要があることを示唆している。

#### **c. 福岡県小郡市力武内畑遺跡 7-1 区井堰群（第 61 図）** [山崎頼 2004]

力武内畑遺跡 7-1 区井堰は、自然流路が西から東側に流路方向が変遷していく過程に築かれる。自然流路の検出幅は約 8 m であるが、実際、一時期に流水があったのは土層断面や井堰規模からみて 2 ～ 2.5 m 程であった。井堰は自然流路本流部分に取水堰、導水路部分に調整堰が築かれており、双方が有機的関連性を持つ一連の施設と考えられる。自然流路の変遷は護岸杭列からも想定でき、それに伴う井堰変遷は大きく 4 段階に分けられる。

### 【第 1 段階】（第 61 図左上）

第 1 杭列・井堰 F・井堰 A①の時期である。ただ、井堰 A①は下層に自然木が存在し、それを埋積させた黒色粘質土から杭の打ち込みが始まるので、当初調整堰は設けられていなかった可能性がある。流路幅は、井堰 F の規模が目安になり 2.5m 程である。井堰 F と井堰 A①は 95° の角度をもって開き、水をせき止め、一時滞水させ、東に取水する一連の機能を持っている。第 1 杭列に突き刺さる屈曲甕が板付 I 式併行期の所産であるので、その時期が与えられる。

### 【第 2 段階】（第 61 図右上）

第 2 杭列 a・井堰 E・井堰 A②の時期である。第 1 段階からやや東に流路西肩が移り、井堰 E の規模から考えると流路幅も 2 m 前後と規模が若干縮小する時期である。井堰 E と井堰 A②は 98° の角度をもって開いている。井堰 E は断面観察から補改修が 1 回行われた可能性がある。井堰 A は本流部分とは逆に後退する変遷をとる。この復原の根拠は、井堰 A は水流・水位を調整するためのもので、堰前面に一定の空間を必要とすること、また、埋没が進むたびにレベル的に高い方へと堰の再構築を行い、一時滞水する空間を維持したものと判断したことによる。

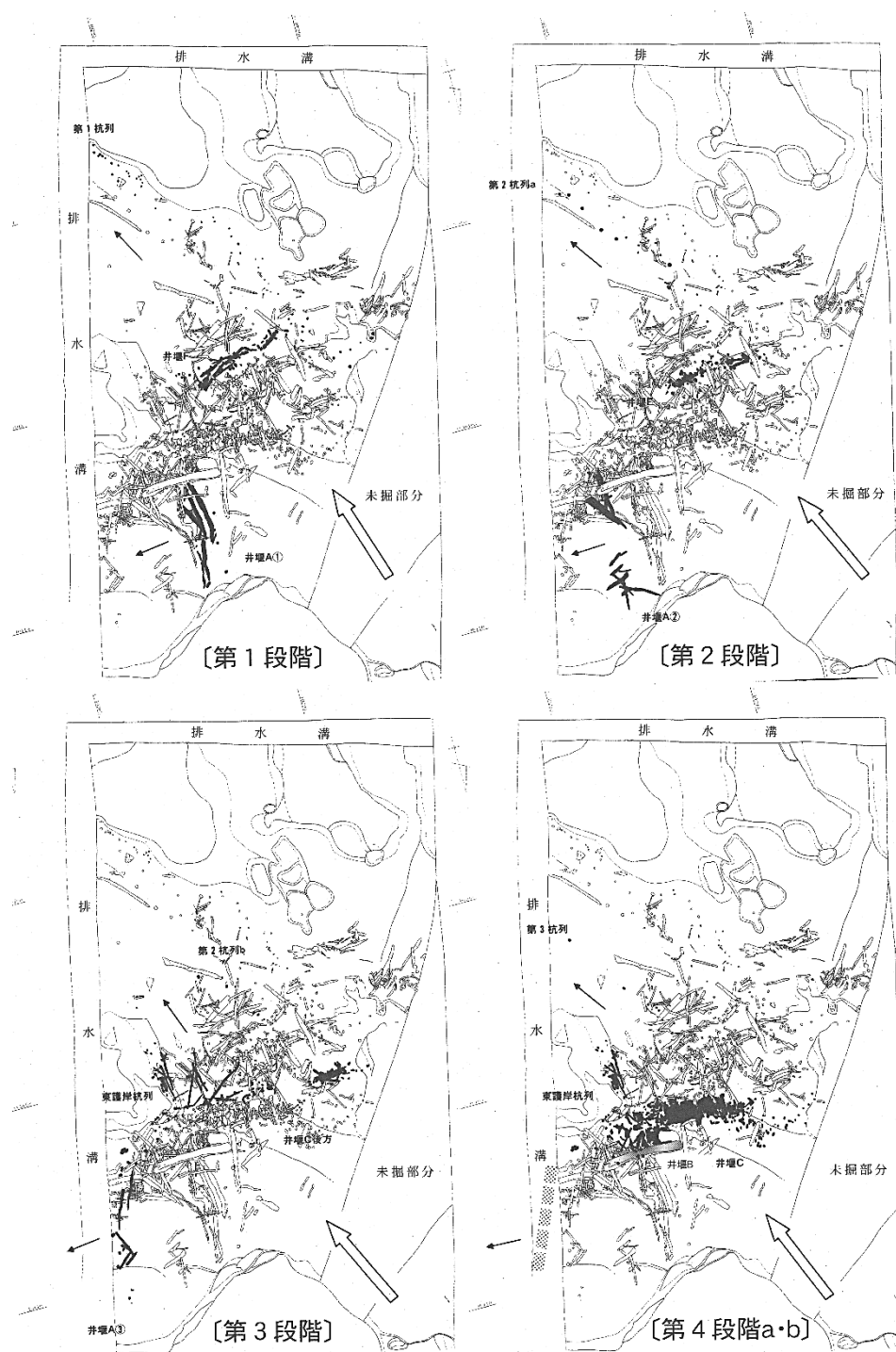
### 【第 3 段階】（第 61 図左下）

第 2 杭列 b・井堰 C 後方・井堰 A③・東護岸

杭列の時期である。第 2 杭列 b はあまり判然としないが、第 2 杭列 a よりやや東にふっている。井堰 C 後方は西側で 0.7m ほど開口する部分を持つ。この部分の解釈としては、井堰相当部分は東側のみで、西側は流路西肩の流水攻撃面を堅固にするための施設とすることができようか。次段階もそうであるが流路西肩部分にも多く杭が打たれている状況がみられる。井堰部分の後方ではある程度流水の勢いが抑えられており、定まった流道を確認するためには杭列を付設することで対応できたが、流水攻撃面では西肩維持のため、より強固な施設が必要であったと思われる。そのように解釈すると、井堰 C 後方は規模 2.5m ほどで、井堰 A③と 120° の角度をもって開いている。本流部分の規模も 2.5m 程であったことがわかる。第 1・2 段階では、井堰 E・F が未だ東護岸杭列に接していないが、この段階になると接するので、井堰 C 後方が構築された時期に東護岸杭列は付設されたものと思われる。東護岸杭列は次段階でも引き続き機能している。東側では、前面の矢板を後方で支えるような構造が確認できる。また、井堰 C 後方部分を中心に粘土塊が多く確認でき、堰構築材として併せて用いられたものと思われる。井堰 C 総体で断面観察から補改修が 4 回以上、井堰 B を含めると 5 回以上行われた可能性がある。

### 【第 4 段階 a・b】（第 61 図右下）

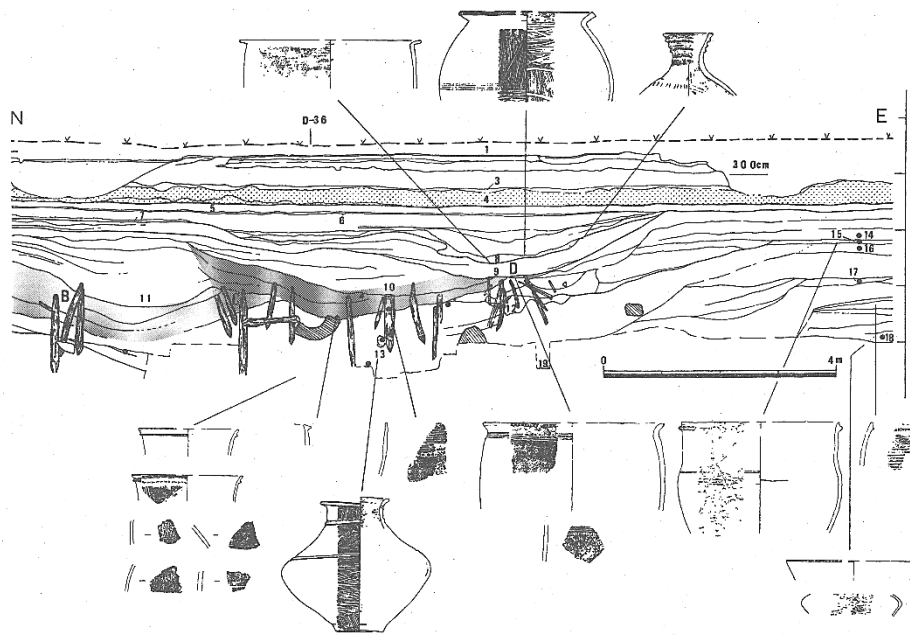
第 4 段階は井堰 B の在否で a・b の 2 段階に小別できる。第 4 段階 a は第 3 杭列・井堰 C・東護岸杭列の時期である。調整堰に対応するものがないが、前段階までの取水堰と調整堰の角度を考慮すると、調査区外に調整堰が存在するものと思われる。井堰 C はやや弧を描く平面形状で流水を包み込む形をとっている。流路西肩相当部にも杭が比較的打設されている。堰本体の規模は 2.5m で堰 C 後方時と変わらない。井堰 C の東端で、水流の勢いで井堰の一部が崩壊しており、この段階ではかなり流道が東に変化していることがわかる。また、第 4 段階 b ではそれを補修するために井堰 B が築かれている（第 3 杭列・井堰 C・



第 61 図 力武内畑遺跡 7 区の遺跡変遷 ( $s \approx 1/180$ ) (山崎 2004)

東護岸杭列・井堰 B)。先述の通り，井堰 C 総体で断面観察から補改修が 4 回以上，井堰 B を含めると 5 回以上行われた可能性がある。井堰 C の中央断面 1 層から出土した土器があり，板付 I 式併行期の所産であるので，この段階もその時期とみることが出来る。

以上のように，力武内畑遺跡では流路変遷に伴い，井堰構築も変遷することがよくわかる。さらには，井堰の補・改修が看取され，発掘調査で検出される井堰構築物は補・改修の集合体であることが改めてわかる好例である。



第 62 図 百間川原尾島遺跡 2 次遺跡 1 の検討 (正岡編 1984)

**c. 岡山市百間川原尾島遺跡 2 堰 1 (第 62 図) [正岡編 1984]**

百間川原尾島遺跡 2 次調査堰 1 は最大幅約 15m、深さ約 1 m の溝 158 内に築かれる。溝 158 底には二筋の流路が考えられており、その両者にまたがる形で流路に直交して全長約 10m の井堰が付設されたと報告される。

筆者はこの全長約 10m に及ぶ井堰を複数時期に及ぶものと考えたい。井堰部分は調査区端で検出されており、溝 158 の断面観察が行なわれる。報告でも触れられる通り、流路は埋没過程で方向を変える。まず、13 層内に詳細不明ながら、大形の樋状施設と思われる木材が見られる。13 層段階にも何らかの水利が行なわれていた可能性がある。その 13 層が堆積した段階で、第 11 層を中心とした部分に流路が変遷する。この流路内には杭が流路肩部分に多くみられ、護岸杭列と考えられる。次に、その 11 層が堆積した段階で、10 層部分に流路が変遷する。その流路の東肩部分には多く杭が打設されており、東肩は護岸されていると思われる。この流路には流路幅全域に杭が打設されることから、井堰の存在が推測される。前期末の所産で杭・直立型一文字形配置の堰である。

以上のように、検出された杭には時期差がある可能性があり、それは流路変遷と密接に関わっている。そういった例は普遍的なもので、同じく岡山市津島岡大遺跡では幅 30m に及ぶ河道の中ほどに島状に約 10m 幅の杭列が存在している (高田編 2001)。これについても、同様の視点で井堰と流路変遷を捉える必要がある。

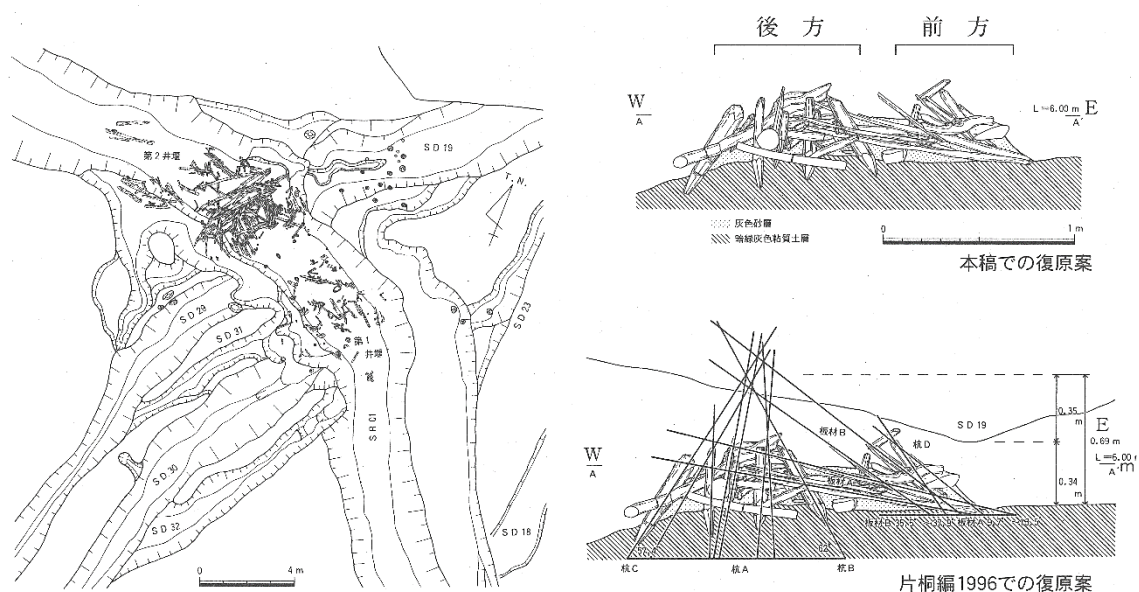
**d. 香川県坂出市川津下樋遺跡第 2 井堰 (第 63 図) [片桐編 1996]**

川津下樋遺跡では SR01 内に付設された 2 基の井堰が検出された。その状況については詳細に報告されているので確認しておく。

SR01 は上層 (弥生時代後期)、中層上部 (弥生中期)、中層下部 (弥生前期)、下層 (弥生前期)、最下層 (縄文時代晩期) に分けられ、その下層のうち、上部層 (淡白茶色砂層) に井堰 2 が、下部層 (灰白色砂層) に井堰 1 が築かれる。

第 1 井堰は第 2 井堰の上流に設置されたる。損傷が激しいが、残存した杭はほとんどが





第 63 図 川津下樋遺跡第 1・2 井堰の検討（片桐編 1996）

直立しており，SD29～32 からの排水と SR01 の流水を SD23 へ導水する。第 1 井堰と下部層（灰白色砂層）から出土した土器から，所属時期は前期中段階とされる。

SR01 は第 2 井堰が設置された付近では，天幅 4.3m，底幅 3.1m の規模を持つ。井堰は流路に直交し，幅約 3.6m，基底部で上下流幅約 2 m を測る。井堰の構造は流路に直交して長さ約 3～3.5m，太さ 10cm 程度の横木が検出され，その横木に直行する形で板材が確認できる。また，断面観察からは土手状の高まりに垂直に打った杭 A と上流方向への杭 B と下流方向への杭 C で横木を固定している。杭 A は太さ 5～7 cm で，断面観察部分では 2 列になる。杭 B・C は太さ 8～9 cm で，杭 B が 62°，杭 C が 57° の傾きを持つ。杭 D は上流側の板材を固定したもので径 4～5 cm とやや細めである。また，横木と杭 A～C に絡めるように上流方向だけに傾斜をつけた板材を組む。この板材は長さ 1.2m 前後，幅 5～10cm，厚さ 3 cm 程，9.7°～13.5° の角度をもつ板材 A と 35.5°～37.9° の角度をもつ板材 B の 2 種類がある。これらをもって，報告者は合掌型堰を想定する。また，第 2 井堰の推定復原高は SR01 底面より約 0.8m 前後が考えられ，取水溝までの高さ 0.5m を十分に満たすとしている。第 2 井堰内部から出土する土器は前期新段階のものである。

以上の見解と筆者の見解とは若干は異なる。

まず，第 1 井堰は上下流約 5 m 内に 6 条の単位が確認できることから，全てが一つの井堰ではなく時期幅が考えられる。それは，SD29 から 32 の排水溝の変遷とも対応しよう。

次に第 2 井堰については，土手状の高まりに築かれるとされるが，筆者はその土手状の高まり内にも第 2 井堰の構成材が多く含まれているので，高まりは井堰設置後の堆積と考えたい。

断面図からは，第 2 井堰は標高 5.5m 付近の暗緑灰色粘質土層をベースに築かれたと解されるが，後方の杭は 20cm 前後ベース層に達するが，前方の杭は全くベース層に達しない。後方の杭打設時のベース層についても横木のレベルまで上げて考えた方が良さだろう。この現象は前方杭前方と後方で時期差が生じると考えれば問題なく，後方の杭内でも，深

度の浅いものがあり、補修を行なったことが看取できる。

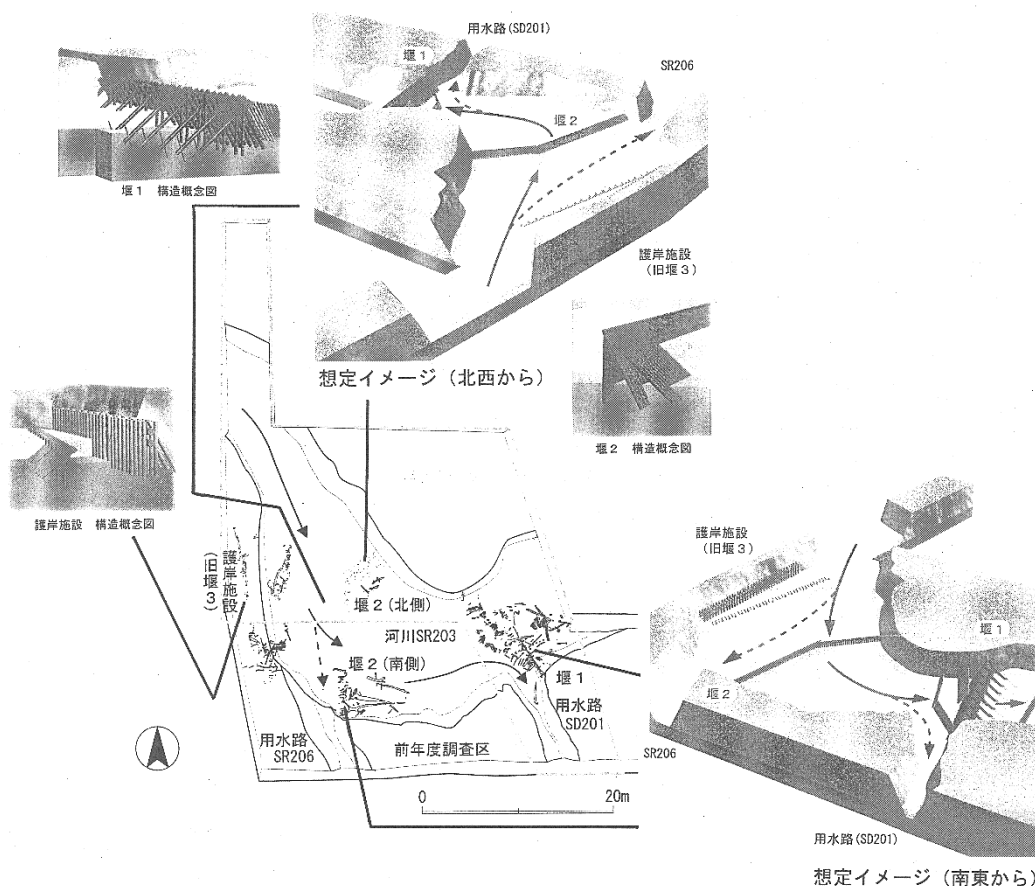
よって、第2井堰は下層最上層堆積後、中層が堆積する間での設置を考えたい。また、補改修についても想定でき、第2井堰後方がまず築かれ、次の段階で第2井堰の補修が行われ、後方ならびに前方にも杭・矢板が新設される。構造は合掌型堰の初現的な構造で、杭・矢板片合掌型一文字形配置である。前方に補改修を行う場合も、後方の既設井堰を利用した片合掌型堰となる。横木のレベルもかなり低く、低い位置で杭を支える構造であると思われる。

● 兵庫県伊丹市岩屋遺跡井堰群（第64図）[上田 2004a・b, 兵庫県教委 2003・2004]

岩屋遺跡は兵庫県教育委員会による平成 15・16 年度調査で北西から南東方向へ流れる幅 8～17m、深さ 0.8～1.4m の自然流路内に井堰が 2 基築かれ、それぞれの導水路施設の状況も明らかにされた（註 11）。

堰 1 は SR203 の川幅 12m 部分に河川全幅にわたって構築される。横木を渡した本体部分と斜めに杭を打ち込んだ付属施設からなる。横木は 8 m に及び、後方から支保する Y 字材のほか、北側の丸太材からも支保される。両者とも下流側端部にほぞ穴をあけ、杭を打設することで固定する。横木に斜め 42°～52° に立てかけた状態で杭を打ち込み、そこで水流を受け、SD201 に導水する。

堰 2 は平面形がくの字を呈し、屈曲部を境に河川の北岸側と南岸側にわかれる。北岸側の杭にはみかん割り材が多用され、およそ 2 列になっている。南岸側は中央部で攪乱を受



第 64 図 岩屋遺跡堰 1・2 の検討（上田 2004a・b）

けるが、杭が乱杭状に打ち込まれる。SR203 の幅 17m 部分に設置された総延長 19m の規模を持つ。

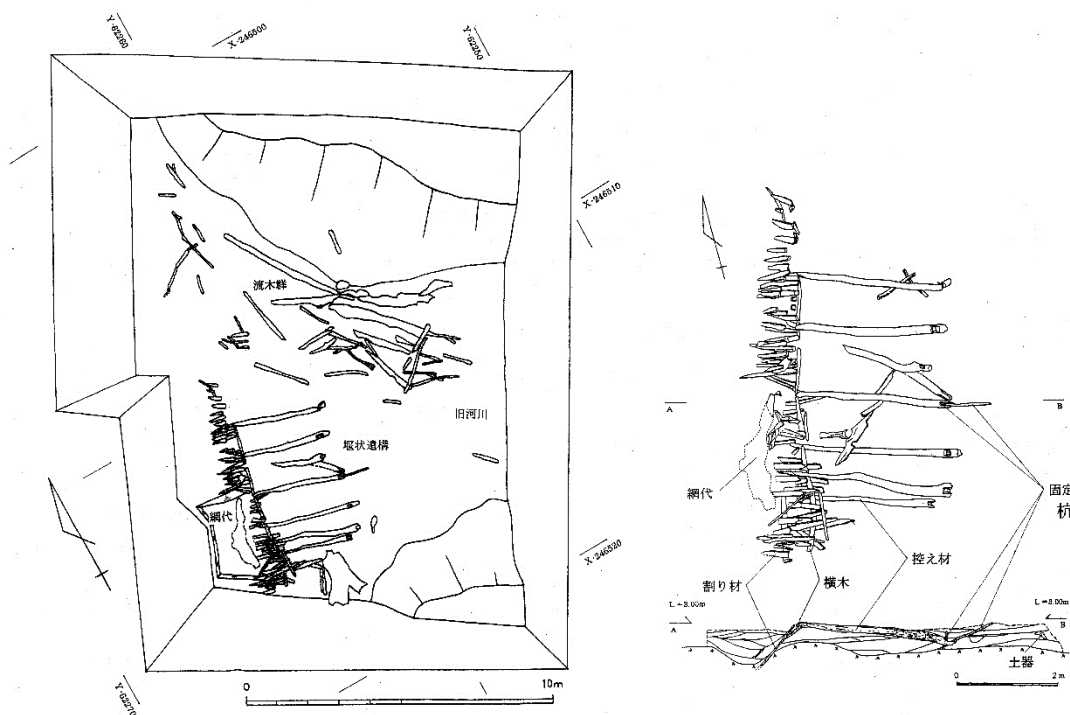
また、堰 2 付近の南岸には護岸施設が 2 列 (A・B 列) 確認できる。A 列は長さ 16m で、横木を東西両側の直立杭によって固定し、岸側から支保材で支える。河川側直立杭前面には草本束で間隙を遮断する。一方 B 列は長さ 14m で、横木に河川内側へ約 30° 傾けた杭を打設する。

以上のように、比較的規模の大きい水利施設が多く見られる。ただ、自然流路についてはその全てが 1 時期に流れていたものとは考えにくい。特に堰 2 付近の状況については流路変遷とそれに対応した護岸施設変遷、井堰変遷を読み取る必要があると思われる。堰 1 についても、補改修と考えることも可能であろうか。その評価については正報告を待って検討したい。

#### f. 和歌山県日高郡南部町徳蔵地区遺跡 (第 65 図) [立岡 2002]

徳蔵地区遺跡は和歌山県文化財センターが平成 13 年度に調査を行なった<sup>(註 12)</sup>。堰状遺構は旧河川 3 内に設置される検出幅 7 m、長さ 5 m に及ぶ大形施設である。構造は河川の水流を受ける前面に矢板を間隙なく打ち込み、背後を横木で支え、横木は 8 本の控え材で支えられる。控え材は基端にほぞ穴があり、それを杭によって固定する。前面の矢板はおよそ 60° の角度をもって打設され、横木は長さ 5 m 前後、径 5 cm 程である。控え材は Y 字状の材で、先端二又部に横木をはさみ固定する。井堰埋没時は旧河川 3 の下層上面となるが、この時期には井堰前面に土が盛られ、人為的に貼られた網代が検出された。網代は 1 × 2.4m の範囲で残存する。旧河川 3 下層下部の粘土と砂礫の互層中から前期中・新段階の土器が多く出土したことから、堰状遺構は前期新段階の所産とされる。

徳蔵地区遺跡例は調査範囲が狭く、自然流路の状況が判然とせず、井堰機能の推定が難



第 65 図 徳蔵地区遺跡堰状遺構の検討 (立岡 2002)

しい。井堰構造を考えた際には、支保材下部が井堰設置時のベース面となるので、前面の矢板列はかなり上部が破壊されているものと理解出来る。よって、この構造は低い部分に横木を固定し、その横木を支保材によって強固にしている。詳細については後日正報告をまわって再検討したい。

## 5. 初期灌漑施設の技術段階とその変遷

前章で検討してきたように、井堰は流路変遷と密接に関わっており、流路固定にも苦慮している状況が窺われる。特に、流路は検出時には最終形態を示すに過ぎないことと、井堰構築物は補改修が繰り返され、その最終的な集合体が検出されることを繰り返してきた。

ここに、井堰構築の技術段階の本質が隠されている。河川や流路に設置される構築物はその流路変遷や埋没過程を追わないと、その所属時期、ならびに流路規模や灌漑規模を大きく誤認する可能性が含まれている。

以上の視点をふまえ、弥生時代前期以前の初期灌漑施設、特に井堰についての技術段階とその変遷案を示したい。

現時点での突帯文期井堰資料は北部九州地域に限られている。近年、韓半島でも無文土器時代前期の井堰資料が確認されており、今後の資料蓄積が期待される。それらは板付遺跡、橋本一丁田遺跡、野多目遺跡の北部九州でも玄界灘沿岸に限られる。突帯文期の井堰構造は直立型堰のみでなく、有斜角度型堰や片合掌型堰が存在し、構成材についても杭・矢板双方見られ、既に様々な形態が存在する。井堰規模は補改修を差し引いて考えなければならないが、流路に設置される場合、大規模なものでも5、6 m程度で導水可能な流水規模の自然流路を選択して用いているものと思われる。

続いて弥生時代前期初頭段階では、北部九州で内陸部を含めた範囲まで井堰分布が拡大し、備前地域でも一部その広がりが確認できる。井堰構造は直立型堰、有斜角度堰、後方支保工型堰、片合掌型堰とバラエティに富む。

弥生時代前期前半には、さらに分布が広がり、近畿地方にも分布が確認できる。池島・福万寺遺跡では杭・有斜角度堰や杭・直立型堰が確認され、規模は最大で3.6mのものがみられる。九州では豊後地域に分布の拡大が見られる。

弥生時代前期後半になると、分布が伊勢地域まで東進し、各地で井堰規模が大型化の兆しをみせる。北部九州では四箇遺跡で比較的規模が大きい片合掌型堰が見られる。規模は5.8～6.4m以上のものが3基見られる。近畿地方においても、大型化が顕著であり、特に岩屋遺跡、徳蔵地区遺跡の井堰はこの段階の到達点的位置を占めるものである。岩屋遺跡の井堰については、補改修・時期差が考えられるが、横木の単位を参考にすれば、最低8mの杭・後方支保工型堰がみられる。徳蔵地区遺跡では約7m規模の矢板・後方支保工型堰がみられ、両井堰は後方の支保材が大型化しており、頭が二又に分かれる支保材を用い、基端のほぞ穴を杭で固定する状況も非常に似通っている。また、池島・福万寺遺跡の前期末～中期前葉の第13a面において約10m規模の片合掌堰や約12m規模の合掌型堰が出現している。この段階において初期灌漑技術は成熟期を迎えている。

以上のように、時期を追うごとに井堰規模は大きくなるものの、井堰構造は水田稲作技術伝来当初からそれ程、変化していないことがわかる。分布の拡大については、突帯文期に玄界灘沿岸地域に着床し、一部内陸部に伝播する動きと沿岸部、特に瀬戸内を介した地

域に分布が広がる動きが看取できる。

## 6. まとめにかえて ―初期灌漑技術段階からみたその集団像―

井堰を中心に弥生時代前期以前の初期灌漑技術について述べてきた。ここで初期灌漑技術の担い手（集団）について触れ、擱筆としたい。

前章までに示してきたように、初期灌漑技術・井堰構造は水田稲作伝来当初より弥生時代前期後半までに大きく変化しない。この事実は、種々の形態差が技術レベルの差を示すというよりも、それぞれの流路環境、流水規模に規定されるものと考えられる。井堰資料からうかがえる初期灌漑技術は伝来当初より、完成されたもので、体系化していることを改めて首肯できる（広瀬 1983・1988）。ただ、井堰規模については、一見、大規模施設と捉えがちな大形井堰も流路変遷に対応した補改修の有無に注意して評価する必要がある。

初期灌漑技術・井堰構造における画期は、前期後半以降にみられる井堰構築材の大型化と合掌型堰の出現である。双方とも、より大きな流路規模、流水規模について対応できる構造であり、前期後半段階において、各地域で利水の拡大化の動きが看取できる。また、井堰規模自体の大型化も前期後半以降、顕著である。利水量の増加は広範な水田開発のためであり、それは何よりも集団の拡大を明示している。

集落動態では福岡県筑紫野市・小郡市に所在する三国丘陵遺跡群が前期社会発展過程のモデル地域として重要な位置を占めており、参考になる（橋口 1987, 片岡 2003, 山崎・杉本・井上 2005 ほか）。近年の調査成果からは段丘裾部に着床した弥生系集団（松菊里型住居、井堰、水田をもつ）が時期を追うごとに集団を派生させ、複数の集団がある一定の領域にまとまりつつ、集落形成の契機として3環濠を順に掘削し、丘陵上へ進出していく姿が見て取れる（山崎・杉本・井上 2005）。その集団も前期末から中期初頭にかけて最も隆盛し、その後は集住することなく、小規模散在的な分布を示すようになる。その立地的限界性もあり、中期社会に向けての再編が行なわれたものと理解出来る。生産面では、弥生時代前期の期間内で複数面の広大な水田域が調査されている大阪府池島・福万寺遺跡でも、前期末段階に画期が見出せる。前期中頃に水田造成を開始し、その段階では所与の自然環境に対し、積極的な改変を加えずとも開発できる可耕地を利用し、水田造成箇所が局所的配置をとる。しかし、この段階でも可耕地間を結ぶ大溝が掘削されており、その技術は高い。その後の前期末から中期前葉面は、従前の集落や生産域を破壊しつつした「前期洪水砂層」の堆積を積極的に活用し、大規模で広域な水田造成を達成した段階と評価される（秋山 2002）。

以上は異なる地域の事例ではあるが、実際、各地で段階差を持ちつつも、前期後半段階において弥生化を果たした集団の関係が成熟期を迎えているとの評価は一般的である（後藤 1986, 藤田 1982 ほか）。また、前期社会の成熟過程において、灌漑システム維持の共同労働監督や利水の利害調整を行なう首長層が輩出され、前期末から中期初頭段階には各地で首長墓が成立する（橋口 1987, 広瀬 2004）。そういった社会変化と井堰構築技術変遷は密接に関係しており、構築技術は弥生前期集団の発展に伴い、変遷するものと理解したい。

各地域において段階差をもちつつも、前期末に前期社会は一つの成熟段階を迎え、中期社会を形成する母体が生まれる。近年、近畿地方を中心として、それらの集団が複数単位構成をとる形で中期大形集落が形成されたものと理解する動きがある（若林 1999・2001 ほか, 秋山 2002・2004 ほか）。そういったなかで、水田経営の実態（生産動態）、集落動



態、首長権の消長とはそれぞれが有機的に関連づいた三位一体の動態を示すものと思われる。今後はそれらの総合的な動態を含めた形で検討を進めていく必要がある。また、灌漑施設の技術変遷についても、前期以降の資料を追究していく必要があろう。その際には、再三にわたり述べてきたように、流路変遷を理解した上で、井堰構築を把握し、その補改修の有無を明らかにする姿勢が必要である。そこから灌漑規模の本質が見えてこよう。

#### 【註】

(1) 初期水田という語は弥生時代前期以前の水田を示すものとして本論で扱っている。初期灌漑施設も同様の意味である。

(2) 菅原氏の乱杭型／合掌型や広瀬氏の直立型／合掌型の分類があり、平面形態からは喜多村俊夫氏の分類（袋堰／一文字堰／蓑の手堰）を弥生時代井堰形状に当てはめた井上氏の分類などがある（菅原 1980，広瀬 1988，喜多村 1950，井上 2002）。

(3) 調査者により溝・水路・流路・自然流路・河川等と呼称されるが、特に統一せず、報告に基づき使用している。

(4) 琴川里遺跡の調査成果について、武末純一先生に資料の提供を受け、内容については能登原孝道氏のご教示を受けた。

(5) 菜畑遺跡の井堰の時期比定については、水田面の重層的土層堆積と水路の時期を再検討した山崎純男氏は報告された時期よりも下げて考えている（山崎純 1987）。

(6) 力武内畑遺跡 7 の報告書では井堰機能を分水堰としていたが、自然流路から導水路へ取水するための堰であり、取水堰と訂正する。力武内畑遺跡例は自然流路が 2.5m ほどで導水路もほぼ同様の規模を持っている。なお、第 2 表の井堰機能欄の表記については、調査区が狭小で水利システムが判然としない場合は、同規模・同種遺構同士の場合は分水としている。

(7) 長行遺跡の水利施設については北側・南側に 2 つの井堰が存在するとされるが、北側分のみ、流路内に直交した形で杭列がみられ、その延長上には導水溝と考えられる溝が存在するので井堰と認定した。その南側には流路南肩に沿う形で杭列が存在し、護岸施設と考えられる。護岸杭列の外側には流路が一部広がっている箇所があり、板材がほぼ水平に並ぶ。これが南側の井堰とされたもので、その下層には大型の礫が多く堆積している。杭・板材の打ち込みが現時点では確認できないので、井堰とするよりも仮設道的な施設の可能性が考えられる。

(8) 2003 年度大分市教育委員会調査。報告書作成中であるが、大分市教育委員会永松正大氏に資料の提供、ご教示を得た。

(9) 将来的には個別地域として設定が可能であろうが、現状で上記のように地域設定を行う。

(10) 河内地域における弥生時代開始期は従来「河内潟」の段階とされてきたが、近年の堆積学検討からは「河内湖」の段階であることが指摘されている（地学団体研究会大阪支部 1999『大地の生い立ち』）

(11) 筆者も平成 15 年度調査の際には現地を訪れる機会を得た。井堰調査はその一部を持って性格を捉えることは至難の業で、平成 15・16 年度調査により、弥生時代前期水利構造を明らかにする情報を多く提示することになった。弥生時代開始期を代表する水利施設調査例となろう。岩屋遺跡の調査成果については兵庫県教育委員会上田健太郎氏より多くのご教示を得た。

(12) 報告については未刊行、和歌山県文化財センター土井孝之氏に資料の提供を受けた。

### 第3章 「地域社会」とネットワーク形成

弥生時代前期から中期にかけての集団関係や地域社会の形成、その変化や地域社会間の関係性について検討する。日韓交流の下地となるであろう地域間交流や石材の流通網（交通網）を明らかにしておく。

#### 第1節（本章の課題）「集団と地域社会」その範囲・構造とは

##### 1. 三沢遺跡における単位集団論、地域社会

三沢遺跡は三国丘陵で保存されたわずかな遺跡である。その指定要件は、「当該遺跡は、未だ全貌を解明するまでに発掘調査されていないが、その一部調査において、無土器時代～古墳時代に及ぶ遺跡地であることが確認され、その主要遺構（弥生時代中期初頭農耕集落遺跡）は、弥生時代集落構造・初期農耕村落の生活様式を具体的に解明する貴重遺構である。」とされた。

三沢遺跡の主題は、弥生時代中期初頭の農耕集落遺跡であり、その集落構造を明らかにできる点である（第66図）。報告書では、以下のようにまとめられている（西谷 1971）。「主脈をなす最大の丘をA丘、そこから北と東へ派生する丘をそれぞれB丘、C丘とする。そしてさらに、C丘から東へ派生する最小の丘をD丘として説明したい。

まず、A丘には、竪穴式住居と袋状竪穴式食糧貯蔵穴と防禦用溝がある。「竪穴式住居」は、おそらく「家族」の住まいの場であろう。（中略）A丘には、こうした住居と貯蔵穴を一セットとした「家族」が、十数個以上ある。個々の「竪穴式住居」には、食糧の貯蔵穴が付属するので、一つの「竪穴式住居」が消費の単位であることが推測される（都出氏の小経営単位論）。これらの「竪穴式住居」が同一の丘に占地しているという点で、一つのまとまりとして「単位集団」を形成し、それが水田経営とか狩猟、漁労などにおける再生産の単位（共同体）となったことであろう。

さらに、A丘の中央部には、大型の竪穴式住居があり、中央部という位置や大形であるという規模において異なり、「単位集団」（間（集合体の））共通の住居、いわば、集会所ではなかったろうか。とすると、この住居の東に隣接したところでは、遺構や遺物のみられない空間があり、集会所に対応した広場と考えられる。A丘の先端付近には、幅数メートルの溝が走っており、防禦的な性格を考える。B丘と、C丘西半の北西斜面には、A丘でみたような、竪穴式住居と貯蔵穴の組み合ったものが十数個はあり、ここにも、「単位集団」がそれぞれ存在した。面積が最小のD丘では、住居と貯蔵穴の一セットを全掘したが、ここにも数個の「家族」からなる「単位集団」があったろう。

こうして、種畜場遺跡には、少なくとも四つの「単位集団」があり、もともと一つの丘陵に立地し、相互に近接しているという地理的条件



第66図 三沢遺跡の集落構造(アミ部は谷水田)  
(山崎 2012)

からみて、それらがまた、より大きなまとまりである「単位集団の結合体（集合体）」を形成し、一つの共同組織をなしたことが想定される。つまり、「単位集団」の枠をこえた（*共同体祭祀*）農業祭祀、生産用具や農耕地の共同開発などの種々の条件を紐帯として結合されたことが予測される（*共同体*）。とすると、A丘の集会所と広場もまた、A丘だけにとどまらず、「単位集団の結合体」全体のもので解される。四つの山丘の間に介在する谷間や、それらがさらに北へ出ると、より大きな一つの東西方向の谷間に出て、そこに経済的基盤である水田地区が、そして、周辺の山並みには豊かな狩猟地区が推定される。さらに、南の谷間を隔てて、甕棺を主とする墳墓地区が考えられる。

（中略）日本を代表する弥生時代集落遺跡として有名な福岡市比恵遺跡や宝台遺跡が消失したことにちそれらより古い種畜場遺跡の稀少性もまた一層高まるのである。弥生時代中期初頭という時期は、弥生時代前期末における外的条件を契機として達成された技術革新や生活様式の変革をふまえて、「単位集団の結合体」がいくつか集まって、一つの「国家」の形成へと大きく時代が揺動するときである。」＊（ ）内は筆者加筆。

以上は、予備調査から得られた一つの仮説である。調査担当者である西谷正が述懐しているように、当時示された近藤義郎氏の単位集団論が大きく影響している内容となっている（「平成23年7月4日、小郡市での講演内容」）。

今回追加指定された独立丘陵（E丘）が加わり、5つの独立丘陵上の集団が弥生時代中期初頭の同時期に関連性をもって存在したことになる（第66図）。なお、三沢遺跡の予備調査で出土した土器を確認した。城ノ越式段階の土器が多数を占めるが、板付Ⅱb式新段階やⅡc式の土器も確認できる。遺跡はやや時期幅を持って検討しなければならない。

## 2. 単位集団論

近藤義郎は、数棟の住居と1～2棟の掘立柱建物、および屋外炉跡の共同炊飯施設からなるまとまりを抽出して経営・消費の基本的単位となる「単位集団」と定義した（近藤1959）。これが、弥生社会集団の基礎的な構成単位「単位集団」となり、これらが水稻農耕における協業を軸として複数結合し、あるときは大集落を形成するとして、これを「集合体」と呼び、生産単位集団と位置付けた。さらに、マルクス主義社会論的な立場から、「単位集団」は経営・消費の単位で、「大家族的な親族集団＝世帯共同体」と考えた。一方、「共同体」は単位集団同士が土地開発と治水事業を通して地域的統一集団を形成したもので、「農業共同体」と位置付ける。これらは遅くとも弥生時代中期までには出現する見解を示した。そして、弥生時代中期を通じて用水権や土地開発権などをめぐっての争いを通じて農業共同体間相互の系列化が進行し、弥生後期には個々の地域的統一集団にとっての直接的な外延の条件が失われて系列化における矛盾が顕在化し、古墳時代に至って支配—被支配関係へと変質すると理解した（近藤1962）。近藤が、「単位集団」を構成する竪穴住居個々の独立性に否定的で、数棟の住居が集まって初めて、単位として自立すると考えたが、都出比呂志は個々の竪穴住居それぞれが、一つの生活・消費単位として独立していたと理解する（都出1970・1989）。これらの住居数棟のまとまりを、都出は、たがいに近親関係にある複数の世帯からなる「世帯共同体」とする。弥生時代当初はこれらが分村を軸とした血縁関係により相互に結びついていたが、次第に水利や鉄器入手などを通じて再編成され、土地と水利を基軸とする地縁的編成としての「農業共同体」が形成されたと考える。さらに、弥生時代においては、まとまりのなかに一つの住居がしばしば特別に大きい例がみられる。これについては、共同作業所も兼ねたリーダー（長老あるいは「家長」）の居所である可能

性を指摘している。

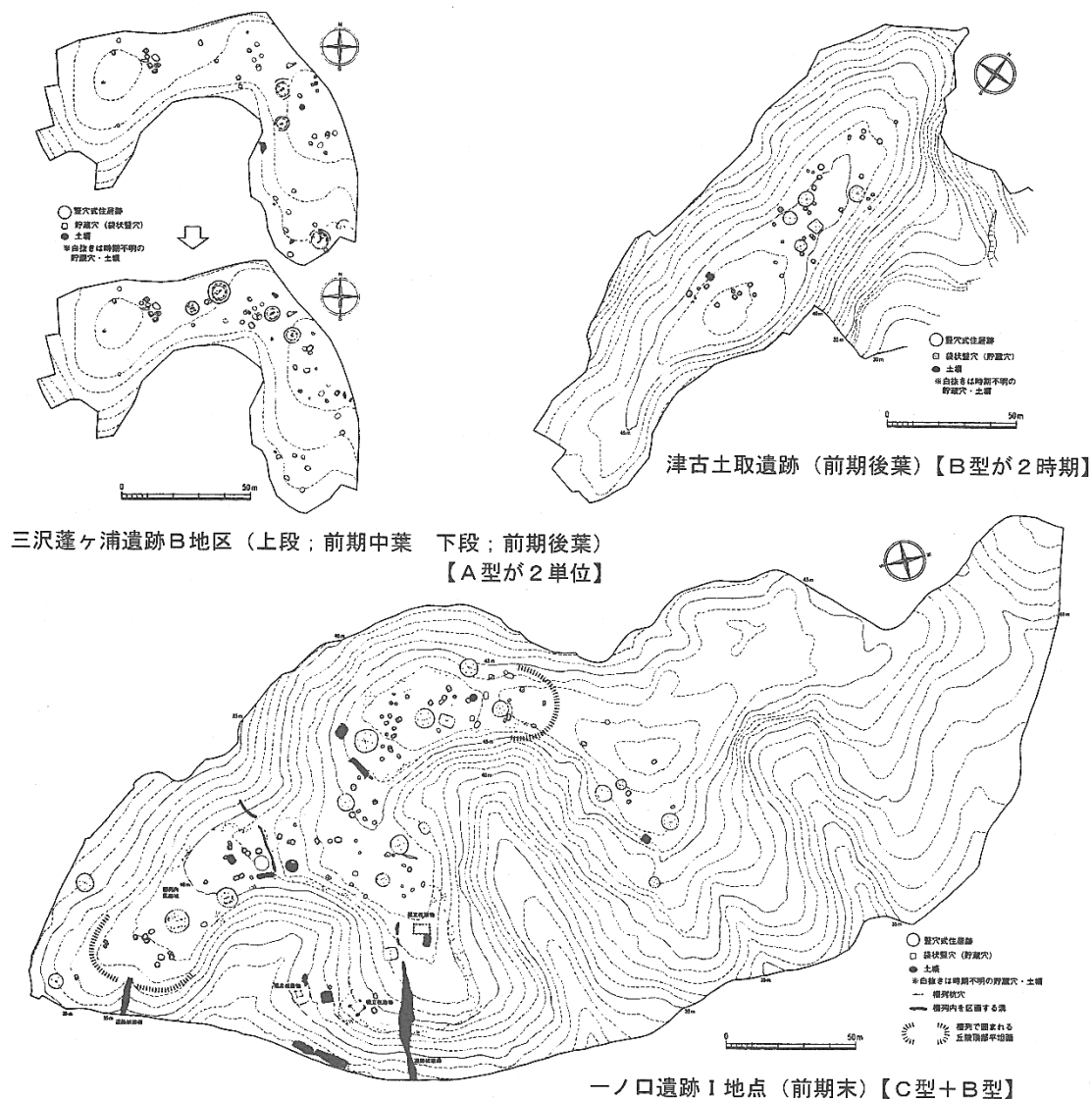
近藤の単位集団論は、農業共同体間の系列化が進行する以前の個々の共同体と、系列化が進行しての共同体群全体が、同じ「農業共同体」という用語で示されており、問題を内包していた。高倉はこの問題点を整理し、平野単位での統合を「地域的統一集団」、その内部における集落群を地域集団として、近藤「共同体」概念を深化させた（高倉 1973）。弥生時代前期には単独の血縁集団で集落が構成されていたが、水稻農耕における協業などを通じて、これらが地縁的に結合して地域集団を形成し、さらに水利権の調整をめぐって近隣の地域集団同士が結合して地域的統一集団が形成されたとする（高倉 1975）。このような、単位（家族）集団—共同体（地域集団）—地域統一集団という階層的な集団関係の把握はこれまでの弥生社会構造復原の主流となっている。

### 3. 三沢遺跡と周辺の遺跡

三沢遺跡の予備調査で示された集団論は、単位集団論に導かれたものであるが、その単位集団論自体の限界性も読み取ることができる。

三沢遺跡は単位集団論で用いられた岡山県沼遺跡と同様の丘陵立地で周辺の谷地には谷水田が想定されている。それぞれの独立丘陵上に立地する「単位集団」は、それぞれが経営単位となり、また同時に生産単位である自己完結的な集落となり、近隣の小規模な谷水田を営む姿が想定されるわけである。「単位集団の集合体」（集合体）としての三沢遺跡の評価は、平野部における（当時単位集団論で想定された）比恵遺跡のあり方とも一致するわけで、その生産様式の理解や紐帯に別の説明が必要となろう。近年、単位集団論の基礎となった比恵遺跡の環溝集落は、再発掘により「環溝住居址群」の同時併存が否定されたこともあり（武末 1990）、新たな枠組みの必要性も生じている。

さて、三国丘陵の弥生時代前期集落を検討した田崎博之は、一時期の住居群の有り様から以下のように3類型化した（第67図）。A類型は1棟あるいは大小2棟の単位、B型は相対的に大形の住居跡を含む3棟までの単位で構成され、ともに、住居跡が分布する範囲は径50mほどに収まり、住居跡の周辺に貯蔵穴が10数基営まれる。径50m前後の範囲を占有する住居群からやや離れた箇所に貯蔵穴のみが営まれることもあり、これらの貯蔵施設は集落構成の最小単位である1～3棟の住居を単位として確保されていると想定した。C類型は単なるA・B類型の集合体ではなく、径50m前後の範囲を超え、全体を一つの単位と捉えられる住居群とする。例えば、前期末の一ノ口遺跡I地点は、南北200m、幅30～40mの丘陵平坦面を圍繞する柵列内に、集落出入り口付近の施設群、一時期5～6棟のC型住居群、柵列内をさらに区画した一時期2～3棟のB型住居群で構成される。C型住居群は生産と供給の集約化を図るため近親者関係を再編・拡大させた、遺跡群内で中心的な役割を担っていたものと推定する。また、この柵列を大規模環濠と読み替えた場合、福岡市板付遺跡や同那珂遺跡37次調査の環濠も同規模であり、同様の内部構造を持つ可能性を類推し、前期～中期初頭における大規模環濠を中核とする遺跡群の様相を示した（田崎 2004・2008）。また、近年蓄積のみられる発掘調査成果および遺跡分布の分析から「遺跡群（集落または村落）—集落遺跡（小村またはムラ）—住居群」の空間構成を整理した（田崎 2008）。筆者はこれらの住居群が数単位確認される独立丘陵、「集落遺跡」がまとまって変遷することを明らかにし、「集落群」と仮称した（山崎 2010c）。すなわち、当地域では段丘裾に進出した地域開発の拠点集落が「母村—分村」関係を軸に、谷筋を共有しな



第 66 図 弥生時代前期集落遺跡の類型(田崎 2008)

がら前期中頃から中期前半にかけて、丘陵上に変遷していく。三国丘陵には、このような一定のまとまりを持ちつつ変遷する「集落群」が複数存在し、弥生文化着床以降の人口増加は当初、それぞれの「集落群」領域内の人口密度を高める方向で進み、前期末～中期初頭に至っては、拡大した「集落群」領域（人口増加）によって地域社会のストレス・調整規模が増大し、中期前葉以降「集落群」領域の再編が広く行われる（山崎 2010c）。三沢遺跡で先に示された近隣丘陵間で結合する姿は実はこの近年の成果を基礎とした集落動態と同じくするものである。

三国丘陵におけるこの「集落群」変遷のありようは、単位集団論との関係では、「拠点一周辺集落関係は母村一分村関係を根拠として形成され、それが安定的である」という仮説は三国丘陵では見出しがたいことになる。確かに力武内畑遺跡は地域開発の拠点となった集落であるが、継続せず、拠点一周辺集落の関係性が現れてこない。母村一分村関係を持ちつつ、集落群は変遷・変化を繰り返すが、その関係が拠点一周辺の関係に固定化されるのではなく、等質的な集団関係が維持されているように思う。これについては、第2節で検討するが、弥生時代前期には周辺集落が共同で農耕にあたり、その生産物を共同で管理



するあり方で、貯蔵穴管理用環濠はその具体像を端的に示すものと位置付けた（山崎 2010c）。

次に三国丘陵立地弥生時代集落の水田耕作地については、近年の成果をもとに復原してみよう。遺構として明らかな弥生水田は、三沢公家隈遺跡の弥生時代前期中頃～中期初頭の谷水田、力武内畑遺跡の段丘裾部付近の弥生時代前期井堰・水路・水田、弥生時代中期前半の津古大林遺跡の水田、水路弥生時代後期の三沢蓮輪遺跡の水田・水路等があげられる。その他、三沢蓬ヶ浦遺跡の畠状遺構もみられる。いずれも、小規模な水田で、沖積地に位置する力武内畑遺跡の水田も井堰の構造理解から大きく広がらないと考えている。また、谷水田については、全ての谷部が水田化されるのではないことが、三沢北中尾遺跡 11 地点の調査、および自然科学的分析により明らかである。

これまでの調査成果から、三国丘陵における水田や畑の生産地はいずれも小規模・分散的な姿を示している。一部には井堰を伴う小規模な灌漑水田の経営も確認されるが、大規模集約的な水田経営ではない。ただ、単位集団論当时に想定されていた谷水田の構造と、現在明らかになってきた谷水田や初期水田の構造理解は異なるものであろう。当時は「水稻栽培の初期における低位な段階」で、谷水田や初期の水田は「自然灌漑というよりも自然の状態において湿潤な土地に、稲を栽培した」段階と考えられていた（近藤 1962）。実際の姿は、小規模ながらも、水路・畦畔・井堰を伴うもので、また谷水田では水路や溜め井、畦畔、杭列など、天水田利用ではなく、完成されたシステムのなかで営まれたものである。少数の集団での開発や経営は難しいものと思われる。

三国丘陵の弥生時代前期の地域社会を集落動向から推定すると、各独立丘陵に立地する周辺集落が共同で農耕にあたり、その生産物を共同で管理するあり方が看取される。特に貯蔵穴管理用環濠はその具体像を端的に示すものであろう。今後、単位集団論を超えて、議論が深化されるべきである。

## 第2節 「地域社会」の形成と展開～環濠と集団～

### 1. はじめに

弥生時代の環濠については、その機能や掘削行為をめぐって、様々な考え方が提示されている。「方形環溝」の成立以前の環濠について、これまでの見解を整理すると、区画施設に対しての評価と掘削行為に関しての評価に大きく2分できよう<sup>註1)</sup>（第5表）。

環濠の機能を考えるにあたってはそれぞれの立地は言うまでもなく、その内部や周辺施設の解明が重要な要素である。誤解を恐れず端的に言えば、内部に居住域が存在すれば防禦施設・区画施設の可能性、貯蔵穴のみであれば「貯蔵穴専用環濠」と考えられ、防水・防湿、対害獣施設の可能性が第一に推定される。ただ、一定の削平を受けたと考えられる遺跡の場合、内部施設が削平により消失していることを想定する必要があり、機能推定は非常に難しい側面を持っている。

特に、「貯蔵穴専用環濠」の是非をめぐっては、元来、深さのある遺構（環濠・貯蔵穴）が残り、深くない遺構（堅穴建物）は後世に削平・消失したことが考えられるので、意見が分かれるところである（武末 1990・2006b、石川 2009 ほか）。

昨今では、環濠の初機能については様々な意見が提示されており、それぞれの環濠においても、その掘削経緯や機能が異なる可能性も考えられる（第5表）。また、環濠や堀、土塁、柵等の囲郭施設には当初より、物理的な障害によって外部からの侵入を妨げる対外的な「防御的機能」とそれによって内部の拡散を妨げ求心性を高める「内部凝集的機能」の二面性を併せ持った構造物であることの認識も必要である[久世 2004]。本論では、より限定的な時空間における一地域社会のなかで環濠がどのように掘削され、どのような機能を有していたのか、どのように意識されていたのか、等について、筑紫平野北部三国丘陵周辺の事例をもって検討したい（註2）。

第5表 環濠機能の概念化（方形環濠出現以前）

対象	環濠内	想定される機能
区画	居住施設	A 視覚的・物理的結界・区別（抗争抑制装置（緩衝帯）にも働く）
		B 防衛・防禦
		C 防水害・利水
		その他
	貯蔵穴	A 視覚的・物理的結界・区別（抗争抑制装置にも働く）
		B 対害獣
		C 乾燥（防水・防湿）
		その他
	空間 （遺構の空白部）	A 視覚的・物理的結界・区別
		B 防衛・防禦（避難空間）
		C 防水害・乾燥（避難空間）
		D 非日常的行為の場（祭祀等）/日常的（定期的）行為の場（作業や市）
その他（家畜飼育施設等）		
掘削行為	象徴的施設（モニュメント） 集落維持装置 共/協同性の体现	など

\*区画施設に関する評価は上位概念として、区別概念・意識が考えられる。

## 1. 三国丘陵周辺の前期環濠の様相

### A. 三国丘陵周辺の前期環濠

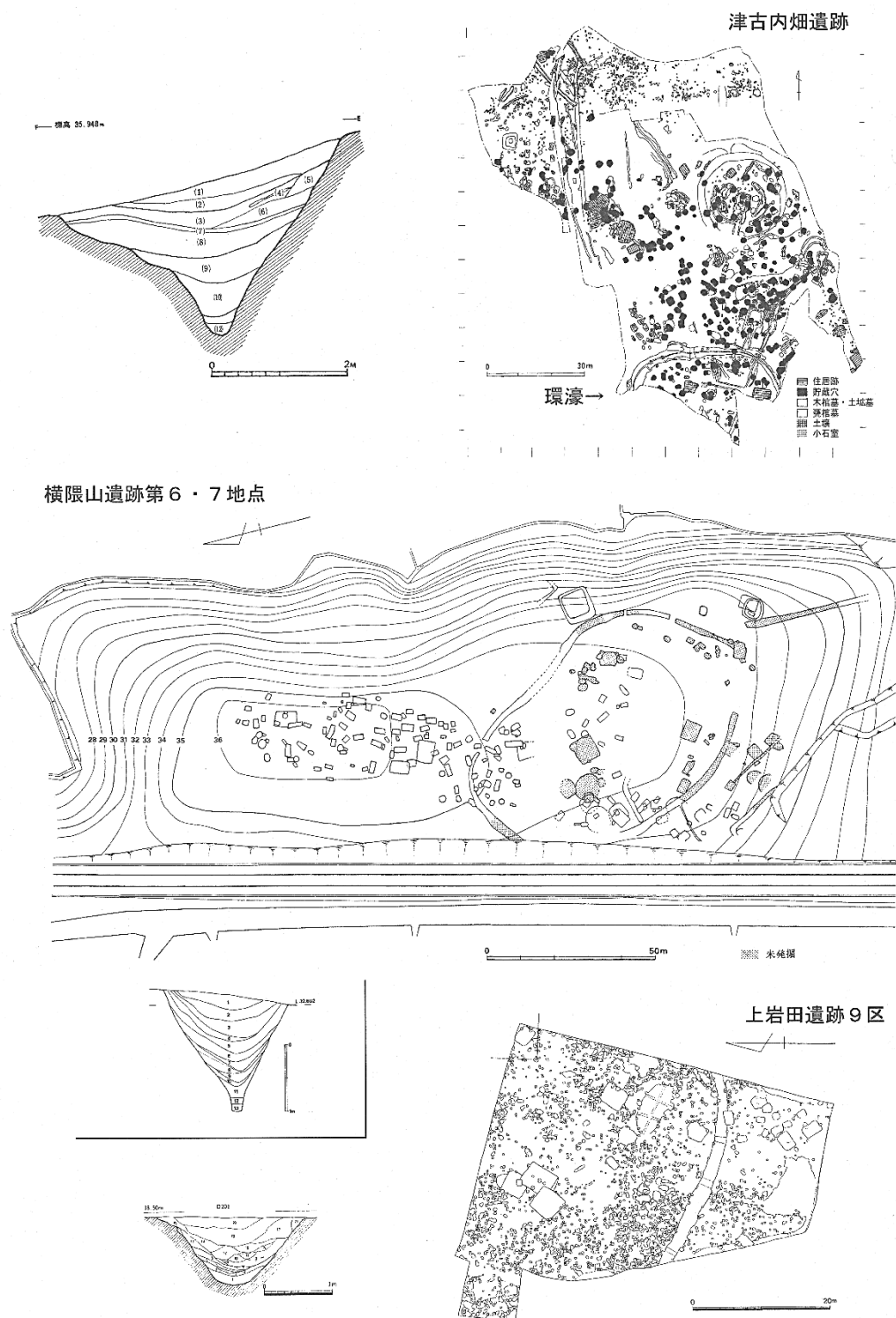
三国丘陵周辺で概要がわかる前期環濠および地形を分断する大溝は、14 遺跡、17 箇所にのぼる（第6表・序章第6図）。

そのうち、環濠（地形分断溝）の状況、及び周辺の同時期の遺構状況がある程度推定可能なものが、福岡県小郡市津古内畑遺跡（第6図12）、横隈北田遺跡（21）、三沢北中尾遺跡1地点（26）、横隈山遺跡7地点（35）、三沢南崎遺跡（40）、力武遺跡群<力武内畑・前畑遺跡>（41）、大保横枕遺跡（42）、上岩田遺跡（45）、佐賀県鳥栖市八ツ並金丸遺跡（46）、佐賀県三養基郡町南遺跡である。環濠（地形分断溝）機能時に、内部に堅穴建物が（調査によって）確認される例が大保横枕遺跡、力武内畑遺跡、八ツ並金丸遺跡である（註3）。そのほかは、環濠内部には主に貯蔵穴のみが確認され、貯蔵穴を囲む環濠と推定される。独立丘陵が発達する立地的特徴もあり、比較的小規模な環濠が多い。規模のわかるものでは、大きいものでも長径 87m×55m（横隈山遺跡）、小さいものでは径 30m 弱（八ツ並金丸遺跡）のものがみられる。また、丘陵ないしは段丘上立地から全周せずに、地形を取り込んで区画するものが多くみられることもひとつの特徴といえるだろう（三沢南崎遺跡・力武遺跡群）。これらは、北部九州地域の平野部でのありようとは異なり、環濠の規模については集団の規模もさることながら、一部には立地的な制約があるものと判断できる。後述する貯蔵穴専用環濠の発生についてはこういった地形的要因からも想定されるべきである。

三国丘陵において、最初に環濠が調査されたのは津古内畑遺跡である（第68図）。西谷正は食糧貯蔵穴を囲んだV字溝が害敵（人間・動物）を防ぐために設備され、また、排水も考慮したものと指摘した[西谷 1970]。2次調査において、柳田康雄は津古内畑遺跡のV字溝は丘尾切断状に一定の空間を区画し、（環状に）一周しないことを立地の面から想定したうえで、環濠の機能は第1に貯蔵された食糧を動物や外敵から防御する目的、第2

第6表 三国丘陵周辺の前期環濠

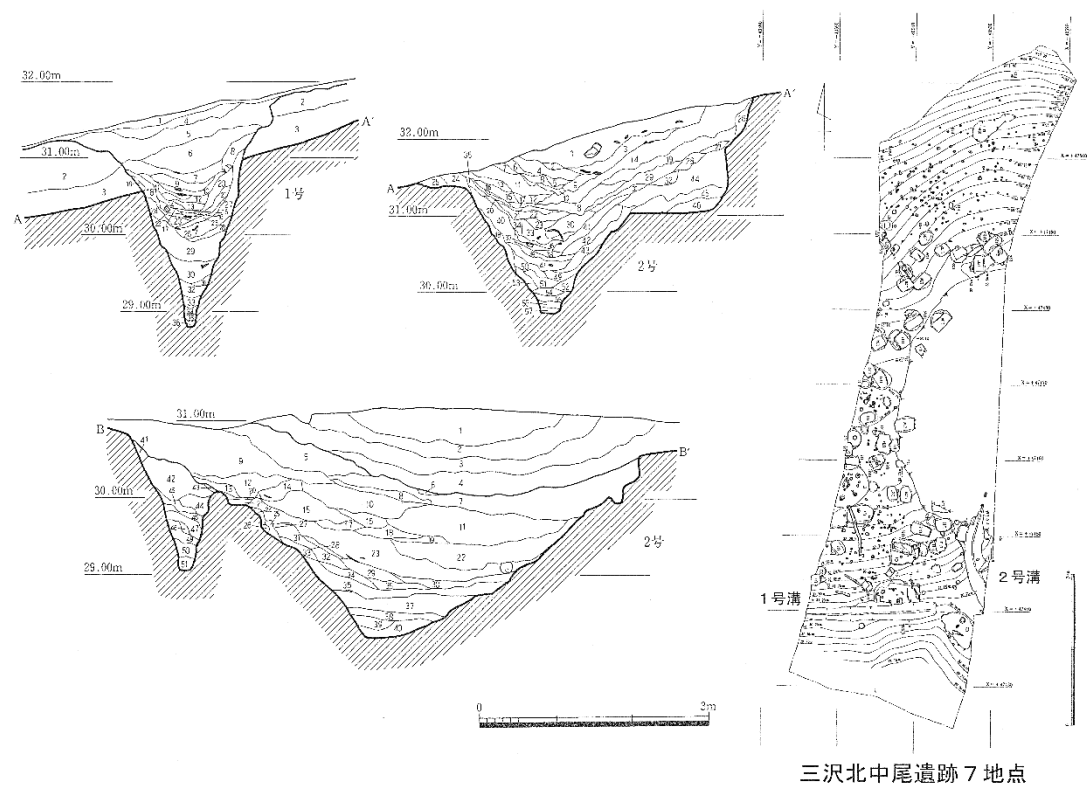
遺跡名	所在地	時期	立地	規模 (平面は最深部間距離)	断面形	備考
1 津占内畑	小郡市	板付Ⅱa新か～Ⅱb新・Ⅱc	丘陵南斜面	43m以上×12m以上(検出部分)、幅2～4m、深さ1.4～3m	V字	
2 横隈山7	小郡市	(板付Ⅱa古・新～Ⅱb新)	丘陵頂部～南緩斜面	約87m×55m、幅0.8m～2.6m、深さ0.9m～1.8m	V字	
3 横隈北田	小郡市	板付Ⅱa新～Ⅱb新・Ⅱc	丘陵頂部	68m以上×44m以上(検出部分)、幅2～4m、深さ1.7～2.2m	V字	地形を利用、全周せず、掘り直しのズレ有か
4 三沢南崎1	小郡市	板付Ⅱa古・新	段丘上(東に谷筋)	検出長約18m(径約50mか)、幅約2m、深さ約1.8m	V字	0.5m～1m弱は削平か
5 三沢南崎3	小郡市	板付Ⅱaか	段丘上	検出長約38m、幅1.8～2.0m、深さ0.9～1.2m	やや緩いV字	周囲には後世の削平(0.5m～1m弱)を受けた弥生時代中期後半～古墳時代初頭の密に切り合う住居群が存在。上層にはその時期の土器が多く入る。
6 三沢北中尾1	小郡市	板付Ⅱb古～Ⅱc	(東に張り出す)丘陵頂部	73m以上×72m、幅1.6～7m、深さ1.1～4.2m、	V字	「環濠の西端中央部は完全に消えている部分が長さ7mにわたっているのと、(その箇所は)高さ1m以上削られていると考えられる」
7 三沢北中尾7(1号環濠)	小郡市	板付Ⅱa新～Ⅱb古	丘陵南斜面横断	検出長約17m、幅1.4～2.4m、深さ2.1～3m	V字	大きく削平、2号溝より先出、上層土器はⅡb古まで一旦途切れて連続する場合、検出長25m程。
8 三沢北中尾7(2号環濠)	小郡市	板付Ⅱa新～Ⅱb新	(東南に張り出す)丘陵頂部～南緩斜面	径約48m、幅2.2～3m、深さ約3m	V字	横隈山5地点につながる、1号溝より後出、削平をまねがれた箇所で「径約48m」を測る
9 大保横枕2(A・B区)	小郡市	板付Ⅱbか～	段丘上(北～東に谷部)	140m以上×80m以上、幅50～130cm程度、深さ50～70cm	U字	小規模溝、二重環濠の外溝の埋没過程で掘削報告書作成中
10 大保横枕2(A区)	小郡市	外：板付Ⅱa～Ⅱb新 内：板付Ⅱa～Ⅱb新	段丘上(北～東に谷部、南に浅谷部)	外：77m×76m、幅3.4m、深さ1.65m 内：52m×50m、幅4.12m、深さ1.96m	V字	報告書作成中
11 力武内畑4・10	小郡市	板付Ⅰ併行～板付Ⅱa古	段丘上	検出長約100m、幅0.8～1.4m、深さ0.5～1m	逆台形	全体的に削平を受ける(0.5m～1m弱か)
12 三沢北中尾11B	小郡市	前期か	丘陵西斜面横断	検出長13.5m、幅1.2m、深さ1.1m	V字	フラスコ貯蔵穴がさる、旧表土残存
13 上岩田	小郡市	突帯文期～板付Ⅰ併行	段丘南緩斜面	検出長29m、幅2m、深さ1.5m	ゆるいV字	削平(小児棺が一部破壊される程度)
14 三沢	小郡市	(前期～中期初頭)	丘陵北東斜面横断		-	確認調査による大溝
15 みくにの東	小郡市	前期後半か	(北東に張り出す)丘陵頂部～斜面	70m以上×?m(検出部分)、幅、深さ等不明	V字	未報告
16 ハツ並金丸	烏帽子	板付Ⅱa(新)～Ⅱcか	丘陵頂部～南東緩斜面	径28×26m、幅2.7～3.3m、深さ約2.3～2.7m	V字	南西に陸橋、内部に貯蔵穴群と住居4軒(前期末～中期初頭中心?)、貯蔵穴群の方が古い
17 幸津	烏帽子	Ⅱb(新)～城ノ越	段丘上(東に谷筋)	検出長23m、幅3.3～3.6m、深さ1.6～1.8m	逆台形	地形改変を受ける
18 町南	三養基郡	Ⅱb～城ノ越	段丘上(東に谷筋)	検出長86m、幅約1.1m、深さ2.7～3.0m	V字	宅地跡地、一部削平。地形から全周せずか。



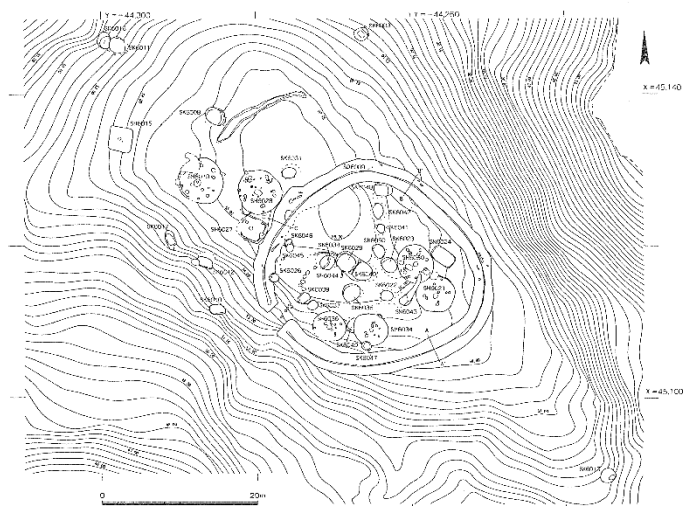
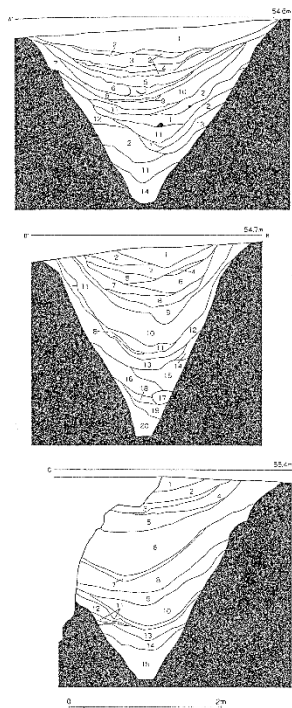
第 68 図 三国丘陵周辺の前期環濠1 (山崎 2010c)

に貯蔵穴を保護するために尾根線から流れる雨水を排水する機能と追認した〔柳田 1971〕(註 4)。

続いて、横隈山遺跡第 5・7 地点でそれぞれ環濠が確認される(第 68 図)〔浜田 1974〕。開発側との攻防のなか、過酷な調査環境で残された最低限の記録は、現在ではより一層価



三沢北中尾遺跡 7 地点



八ツ並金丸遺跡

第 69 図 三国丘陵周辺の前期環濠 2 (山崎 2010c)

値がある。一部緑地として保存されており、保存域は一部未掘であるが、調査当時は環濠以前の袋状竖穴、同時期の住居跡が環濠内に営まれたと想定された。

その後、横隈北田遺跡で良好なかたちで環濠と貯蔵穴が調査された(第 74 図)。環濠内部には、古墳時代後期の住居 10 数軒と環濠と同時期の貯蔵穴・土坑 50 数基が確認され、

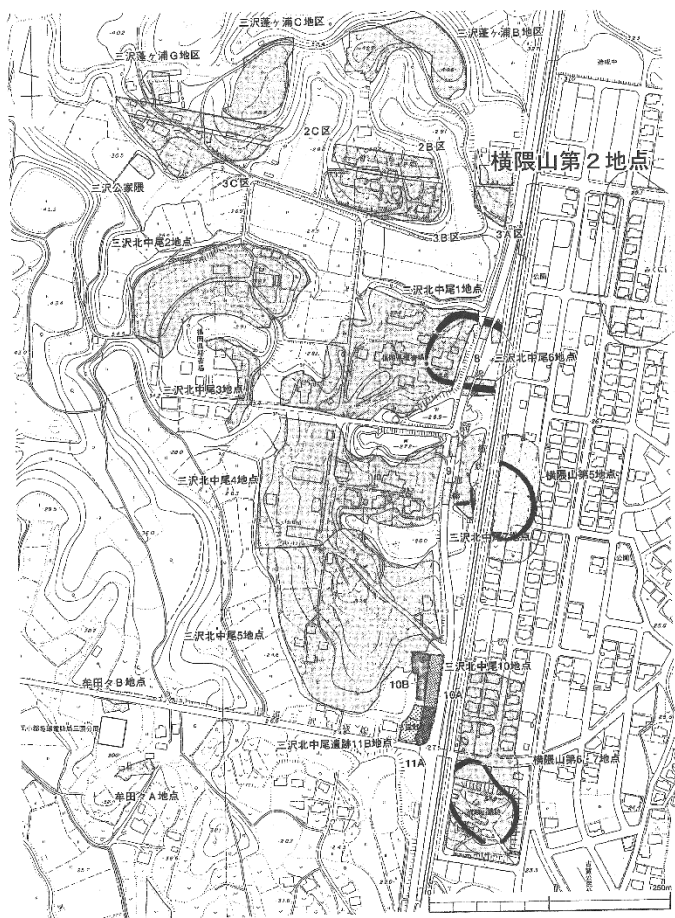


貯蔵穴を囲む環濠であることが明らかとなり、片岡宏二は環濠内の貯蔵穴を使用したのは隣接した丘陵に立地する遺跡（横隈鍋倉遺跡など）であると想定した（片岡 1988）。また、環濠近辺に居住せず、貯蔵穴のみを営む丘陵地には、対害獣用の環濠を掘削する必要があることを説いた。横隈北田遺跡の調査はそれまでに確認されつつあった荻田町葛川遺跡（酒井・副島 1984）や宗像市光岡長尾遺跡で確認された貯蔵穴のみを囲む環濠（宗像市教委 1982 年調査）の存在を確定的にしたものと位置づけられよう。

それらの環濠の評価については、都出比呂志が環濠集落の成立と解体を検討するなかで、環濠機能の地域性として北部九州における「環濠貯蔵区画」を指摘し先鞭をつけた（都出 1989）。山崎純男は福岡市板付遺跡環濠をもとに、弦状弧部分の貯蔵穴が独立して貯蔵穴を囲む環濠へと進化したと位置づけ（山崎純男 1990）、禰宜田佳男は環濠規模の検討を行い、前期前半に成立する福岡市板付遺跡や同有田遺跡のような数千～数万㎡の大規模環濠と前期中葉以降に出現する三国丘陵などでみられる中・小規模の環濠を区別し、後者を「貯蔵穴専用環濠」と分類した（禰宜田 1990）。また、高倉洋彰は詳細に環濠の内部遺構を検討し、貯蔵穴の管理を目的とした施設である「貯蔵穴管理用環濠」をもつ集落の姿を示した（高倉 1991）。同様の検討から、その存在を一部認めつつ慎重的な意見も提示されている（武末 1990・2006a）。さらに近年、三沢北中尾遺跡 1 地点で環濠内外に貯蔵穴や住居跡が多く検出され、環濠機能時には内部に貯蔵穴のみが営まれ、環濠埋没段階から内部に住居跡が営まれる状況が明らかにされた（杉本 2002）。それらの成果を受け、地域によっては貯蔵穴を主に囲む環濠があることが認知されつつある（佐原 2002、武末 2002）（註 5）。

また、筆者らは三国丘陵東南部域集落の検討のなかで、それまで同時期に掘削されたと考えられていた横隈山遺跡 7 地点、横隈山遺跡 5 地点、三沢北中尾 1 地点の 3 環濠（図 4）の時期差を指摘し、集落変遷に伴い順を追って環濠が掘削される状況を明らかにした。これにより、当地域における環濠掘削は一時的な社会緊張関係を反映したものではないとも併せて理解できるようになった（山崎・杉本・井上 2005）。

以上のように、貯蔵穴を囲む環濠の位置づけをめぐっては、当三国丘陵周辺の動向が果たした役割が大きいことがわかる。



第 68 図 三沢北中尾遺跡周辺の 3 環濠位置図  
(山崎 2010c)

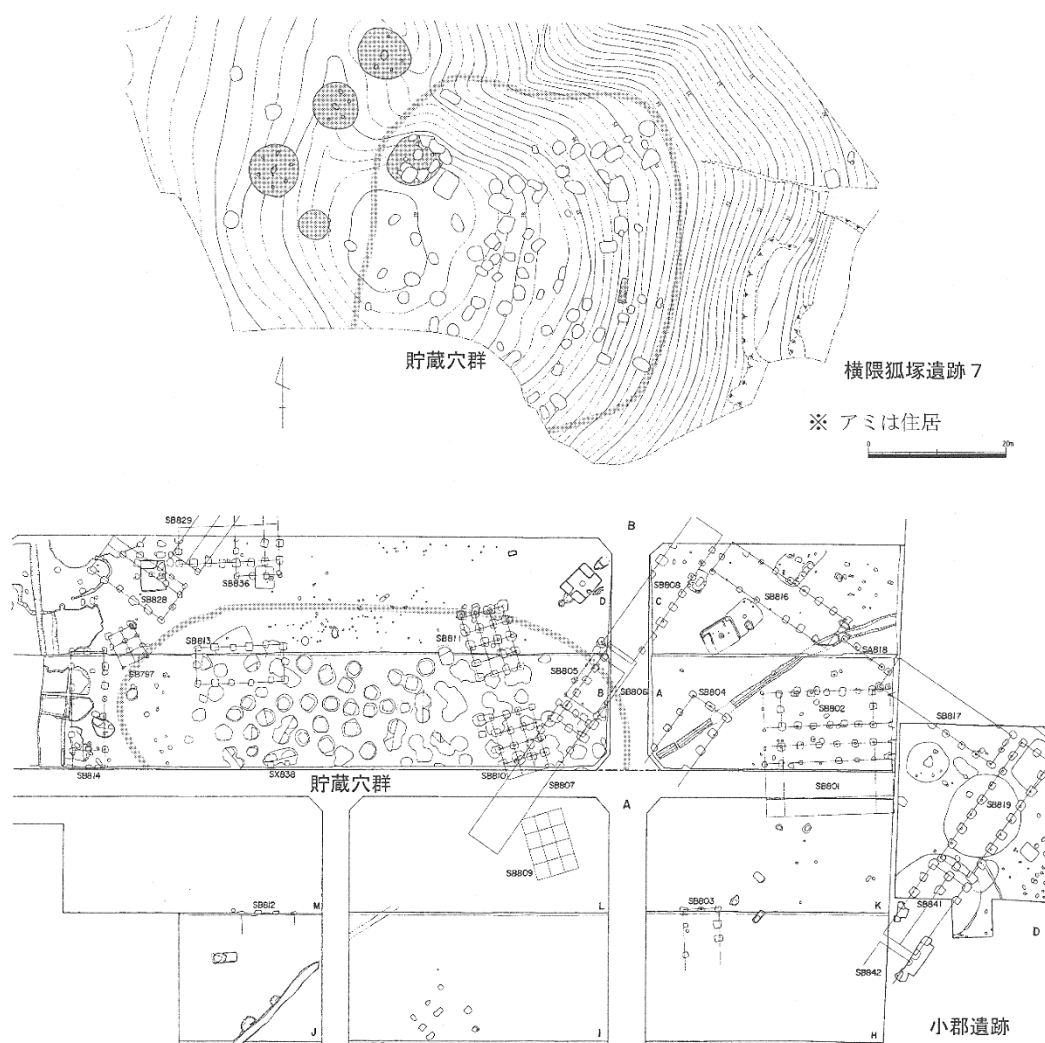
## 2. 三国丘陵周辺の弥生前期集落と環濠機能

弥生時代前期集落遺跡は住居とそれに付随する生活遺構（貯蔵穴や土坑）といった基本的な組み合わせを有する。このような住居群を基本とした集落構成単位のまとまりに、環濠という属性が付加される。次に、その付加属性をもとに、当地域でみられる集落遺跡構造を確認しておこう。

### A. 環濠を有しない集落遺跡

環濠を有しない集落遺跡構造は津古土取遺跡（第6図-13）、三沢蓬ヶ浦遺跡（17）、横隈狐塚遺跡7地点（25）、小郡遺跡（43）等で見ることができる。それらの集落遺跡構造を住居と貯蔵穴の関係で捉えたとき、貯蔵穴には住居周辺につくられるものと住居から離れた場所に群としてつくられるものの大きく2者があることがわかる。貯蔵穴が弥生集落の一画に群集する例は西日本各地で古くから知られており[石野 1967]、また、縄文集落でも同様の例がみられる[坂口 2003]。

横隈狐塚遺跡 7 地点は三国丘陵東端部、宝満川の氾濫原を臨む低丘陵部に立地し、標高 29m～39mを測る。遺構の残りが非常に良好で、住居跡で深さ 90m、貯蔵穴では深さ 3 m 以上のものが含まれる。板付Ⅱa 式段階を中心とした竪穴住居 8 軒、貯蔵穴・土坑 110 基



第 71 図 環濠を有しない集落遺跡(貯蔵穴群集落( $s=1/1000$ )) (山崎 2010c)

等が検出された。

住居跡は丘陵頂部北部から北西部に分布し、周囲には貯蔵穴を数基伴う状況が確認できる（第 71 図）。標高 34m～39m の東から東南部にかけての斜面中腹から上位を中心に貯蔵穴が群集している状況が顕著である。貯蔵穴群集の範囲は南北方向に 45m 以上、東西方向に 40m 程である。丘陵頂部の円形住居群とは別に、貯蔵穴が群集する範囲の斜面下位部分に、小形方形竪穴建物が 1 軒確認されている。

そのほかにも、小郡遺跡では、遺跡南部の高所から緩斜面にかけて総数 80 基以上の前期後半までに掘削された貯蔵穴が非常に密集するかたちで検出されている（第 71 図）。これらの遺構群付近は 0.5～1 m 弱の削平が想定されており、検出面からの貯蔵穴の深さは 1～1.7m である。貯蔵穴群はほとんど重複することなく掘削されており、その南側が大きく削平を受けているが、東西 60m、南北 20m 以上に密に分布している。周辺の前期住居跡は削平を受けた可能性もあるが、密集度合いからして別の箇所に想定するのが妥当である。ちなみに、その貯蔵穴群から東に 50m 付近で中期の大形住居を含む遺構群がみられる。なお、小郡官衙遺跡として指定を受けた部分と重複し、保存されているため、弥生時代遺構も一部の掘削に留めている。

今後、住居周辺の貯蔵施設と住居から離れて群集する貯蔵穴群の違いについて遺構的側面・遺物的側面から検討する必要があるだろう。

## **B. 環濠を有する集落遺跡**

### **（ア） 居住域を囲む環濠（A 型環濠）**

居住域を囲む環濠については、後世の削平の影響を勘案したうえで、判断する必要がある。ここでは、環濠内部に住居遺構が遺存し、環濠との共時性が想定される例を挙げ、環濠機能時の内部利用について検討しておく。

三国丘陵周辺で内部空間に住居跡が検出されている環濠（地形分断の溝）は、力武遺跡群<力武内畑・前畑遺跡>（第 6 図－41）、大保横枕遺跡（A・B 区）（42）、鳥栖市八ツ並金丸遺跡（46）のほか、内部空間に住居の可能性が示唆されている遺構が存在する上岩田遺跡（45）、状況証拠から居住域を囲む溝と想定される三沢南崎遺跡（40）がある（図 8）。

力武遺跡群は三国丘陵の東南端に位置し、標高 15m～17m を測る。10 次にわたる調査が行われ、低位段丘から沖積低地にかけて板付Ⅰ式併行期前後の集落が生産域・居住域セットで検出された。低地部では井堰、流路群、水田畦畔、段丘上では段丘を横断する溝、住居跡 5 軒、掘立柱建物数軒、貯蔵穴 33 基、土坑等を検出した。また、東側の段丘際には板付Ⅰ式併行期～Ⅱa 式古段階までの貯蔵穴群（30 基程度）が密集する形で検出されている。また、西の谷部を介して視認できる三沢南崎遺跡では、貯蔵穴を囲んだと推定される環濠が力武遺跡群からやや遅れた時期に掘削される。段丘を横断する溝は断続的に調査されているが一連の溝と判断できる。推定延長約 180m で、その大溝に区画される段丘面はおおよそ北西－南東方向に 135m、北東－南西方向に 180m の範囲となり、

2.4 万 m<sup>2</sup> である（第 72 図）。検出幅 0.8～1.4m、深さ 0.5m から 1 m を測り、断面逆台形状を呈する。上部は削平を受け、上部に向かい V 字に開く可能性も考えられる。溝からは板付Ⅰ式併行期の土器が出土している。遺跡は地形の高い北側は一定の削平が考えられるが、弥生時代前期の遺構群や遺物の分布は大溝を超えることはないので、集落北限の溝と考えられる。



力武遺跡群 (力武内畑遺跡・力武前畑遺跡)

第 72 図 居住域を囲む環濠(大溝)1(s=1/2000) (山崎 2010c)

大保横枕遺跡は居住域を囲む環濠と貯蔵穴を主に囲む環濠（二重環濠）の 2 者の環濠が確認されている。宝満川から西へ約 500m の低位段丘から沖積低地付近に位置し、現況の標高は 14.9m 前後である。貯蔵穴を囲む二重環濠外濠の埋没過程で居住域を囲む溝が掘削されている状況が切り合いから判断できる。居住域を囲む環濠が二重環濠を取り込んでいたわけではなく時期差があり、継続した地区設定ではなく新たな計画により掘削されたものと考えられる。板付Ⅱb 式期を中心とした居住域を囲む環濠は、平面規模 140m 以上×80m で幅 0.5～1.3m、深さ 0.5～0.7m の U 字形を呈する小規模な溝である。環濠内部では、

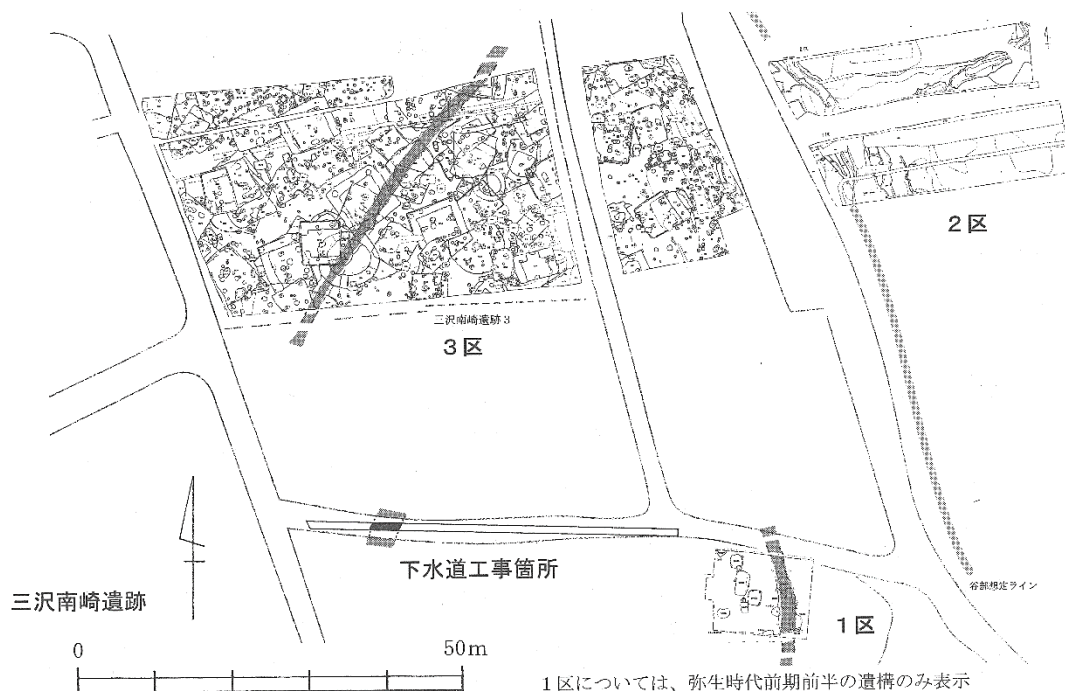
住居・竪穴建物 6 軒、土坑・貯蔵穴 50 数基が確認されている（現在報告書作成中）。一部の区画は隣接調査区から 1 m 以上の大きな削平を受けているので、深度の浅い住居や土坑はさらに存在していたであろう。

八ツ並金丸遺跡は、鳥栖市北部の脊振山東部から派生する丘陵部に所在する。柚比遺跡群の北端に位置し、遺跡は北側に東西にのびる丘陵とこの丘陵から南側にのびる 2 本の丘陵から構成される（第 69 図）。弥生時代前期から中期後半にかけての遺構群の変遷が追え、特に南西丘陵頂部、標高 56m 前後には弥生時代前期～中期初頭にかけて遺構群（環濠、住居跡 8 棟、貯蔵穴 23 基、土坑 8 基等）が検出された。この丘陵頂部には古墳が重複して存在しており、その際に弥生時代遺構は大きく削平を受けている。環濠は 28×26m の平面規模で、幅 2.7～3.3m、深さ約 2.3～2.7m の断面 V 字形を呈する。周辺の同時期の環濠と比べて、その平面規模はかなり小さい。南西部には幅約 2 m 程の陸橋部が存在する。下層から板付Ⅱa 式期、上層から板付Ⅱc 式期の土器が出土しており、少なくとも前期後半にはある程度埋没し始めていると考えられ、土層の観察から環濠の掘り直しはみられないとされる。環濠機能時（板付Ⅱa 式新段階以前）の内部空間の状況は、貯蔵穴 2 基とそれに切られる住居 1 軒、外側に貯蔵穴 1 基が想定される。また、環濠がある程度埋没し始める時期である板付Ⅱb 式期では環濠内部に貯蔵穴 3 基、土坑 1 基、住居 1 基、外側に貯蔵穴 1 基が想定される。そのほかの遺構については、時期不詳のものも含めて前期末～中期初頭の所産と考えられている。いずれにしても、環濠が機能、もしくは埋没過程の過程で最大 1 軒の住居と少なくとも 2～3 基の貯蔵穴が営まれている状況が復原され、調査担当者は「生活の場として作られた空間ではなく、貯蔵のための空間」と位置づけている[佐賀県 2003]。丘陵頂部に分布する遺構群を考えた際には、南側に貯蔵穴が密に分布する状況がうかがえるので、そうした貯蔵穴を中心に囲んでいるものとも考えられるが、周辺事例と異なり、内部空間が極端に狭いので、その位置づけについても特殊例として個別に考える必要があらう。また、環濠機能時の住居跡は貯蔵穴との切り合いによる判断なので、環濠掘削以前のものである可能性も十分考えられる。

上岩田遺跡は、小郡市中部の宝満川左岸低位段丘上に立地する（第 68 図）。上岩田遺跡は古代官衙跡として著名であるが、その確認調査として遺構検出と最低限の掘削のみ行われている。検出された大溝は検出長 29m でやや弧状を描く。緩やかな断面 V 字形で、検出幅 2 m、深さ 1.5m を測る。出土土器から突帯文単純期の様相が窺える。調査区は北から南へ傾斜する旧地形をもっており、北側は削平を多く受けている。調査区では、大溝内側の同時期遺構として長軸 2.38m×短軸 1.89m の周囲に細いテラス部分がめぐる長方形土坑と土器棺墓があげられるのみである。この土坑は竪穴建物の可能性も言及されている。やや北方になるが、上岩田遺跡 6 区において前期初頭の松菊里型住居 2 軒を検出している。大溝が環状に巡る場合は環濠外側に位置すると考えられる。現在報告書作成中であるが、周辺には貯蔵穴等の遺構はなく、散在して土器棺墓がみられる状況である。この環濠は、内部空間での小児棺の存在や密度が高く分布する貯蔵穴の不在などから、居住域を囲む環濠と考えることもできる。遺構の検出のみで詳細は不明であるが、削平されて柱穴のみが残った円形住居の可能性を数か所で指摘できる。

三沢南崎遺跡は、力武遺跡群と谷を挟んだ西側対岸の段丘上に立地し、標高は 20m 程度である（第 73 図）。低位段丘から沖積低地にかけて 4 次の調査が行われ、大きく弥生時代





第 73 図 居住域を囲む環濠(大溝)2(s=1/1000) (山崎 2010c)

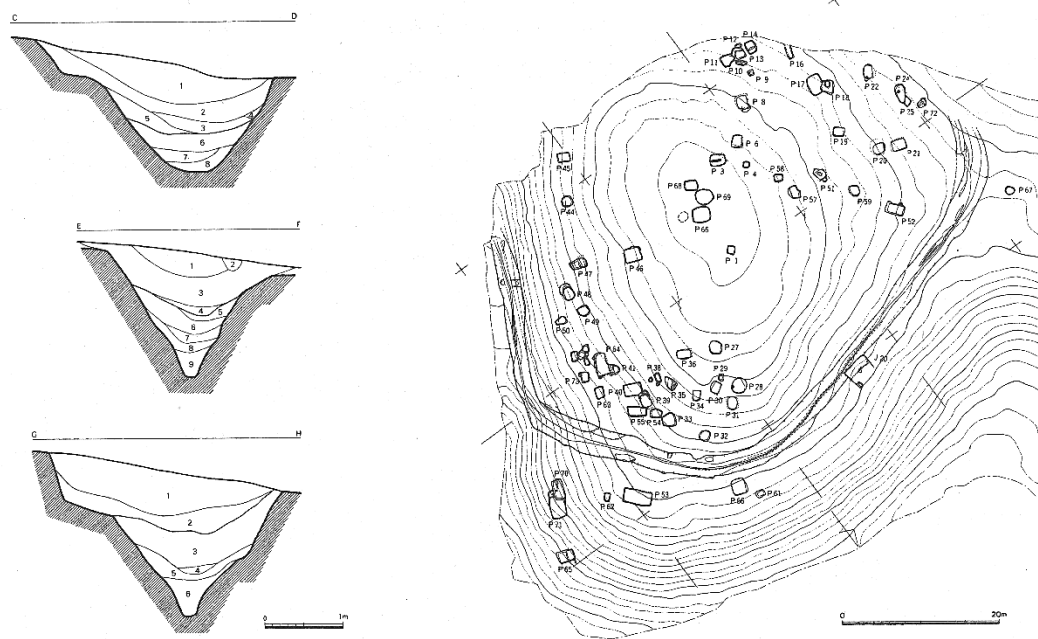
前期前半代の集落と中期後半～古墳時代初頭の集落が検出された。当遺跡では前期の環濠および地形分断の溝が確認されている。環濠は断面V字形を呈し、検出長約 10m、幅 2 m、深さ 1.8mであるが、西側の下水道工事の際に同規模のV字溝を確認し、東西幅 50mの環濠と推定できる。出土土器から板付Ⅱa 式古段階から新段階に掘削されたと考えられる。環濠内部には貯蔵穴群が分布しているようだ。

地形分断の溝は、環濠に比べてやや開きのある V 字形をなす。検出長は 38mで南西－北東方向にのび、段丘を切断するものと思われる。周辺調査や旧地形を勘案すると、南西へ 45m前後で 4 次調査において確認された旧流路の延長付近にあたり、北東方向へ 30m程度で現在も確認できる段丘崖にあたり、総延長推定 115m程度かと思われる。検出幅は 1.8～2.0m、深さ 0.9～1.2mを測る。所属時期については、下層出土の土器が非常に少なく、また上層では、周囲に弥生時代中期後半～後期全般にわたる住居跡が密に切り合うかたちで検出されており、それに影響される土器が多く出土するため判断が難しいが、下層から上層にわたり混入が少ない地区の土器相から判断して板付Ⅱa 式段階に掘削・機能していたものと判断される。また、掘り直しも明瞭に観察できる<sup>(註6)</sup>。区画内部では、調査区内で確実な同時期の住居はみられず、土坑等も希薄である。南東部の調査区では環濠および貯蔵穴が多く検出されている。同時期の居住遺構は環濠付近から南側と想定される。

#### (イ) 貯蔵域を囲む環濠 (B 型環濠)

三国丘陵周辺では、津古内畑遺跡(第 6 図-12)で早くから貯蔵穴を囲む環濠の存在が示唆され、横隈北田遺跡(21)で環濠全域の調査が行われ、その姿が明らかになった。また、近年の成果では環濠周辺の遺構変遷をもとに環濠の内部構造を検討できる三沢北中尾遺跡 1 地点(26)の調査例があげられる(第 74 図)。

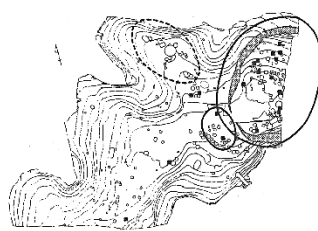
三沢北中尾遺跡 1 地点は三国丘陵東南部に位置し、標高 32～35mを測る。横隈山遺跡第



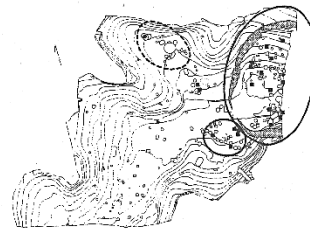
横隈北田遺跡



〈板付Ⅱa式段階〉



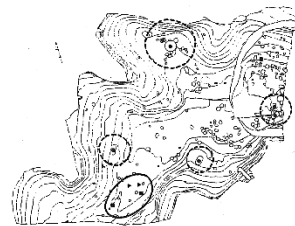
〈板付Ⅱb式段階〉



〈板付Ⅱc式段階〉



〈板付Ⅱd式段階〉



〈板付Ⅱe式段階〉

実線範囲は貯蔵穴群  
破線範囲は住居群

三沢北中尾遺跡 1 地点集落変遷模式図

第 74 図 貯蔵域を囲む環濠 (山崎 2010c)

5 地点・三沢北中尾遺跡 4・7 地点と谷を隔てて北側の東西にのびる丘陵に位置する。丘陵上には、昭和 10 年代以降福岡県種畜場が営まれていたこともあり、一定の削平を受けている。

板付Ⅱb式～城ノ越式期にかけての集落跡で、竪穴住居跡 20 軒、貯蔵穴 137 基、土坑 29 基、丘陵先端部に築かれた環濠が検出された。環濠は東端が確認できていないが、東西に長い楕円形状（隅丸方形状）を呈する。外縁の南北長は 76m を測る。西辺の中央部に埋め戻しによる陸橋部を設ける。断面は V 字形で最深部が狭くなり直に下がる部分が多くみられ、内側の法面は外側に比べてやや傾斜が緩やかである。基本的にレンズ状堆積を示し、何度か掘り直し（及び溝さらえ）を行っている。幅は最大 7 m、深さ最大 4.2m を測る。陸

橋部造成時に使用された厚い明橙色粘土の下から、多くの土器が検出されており、この土器群が廃棄された後に、陸橋部が作られたことになる。時期的には板付Ⅱb式古相段階から新段階が考えられる。環濠から出土した土器から板付Ⅱb式古相段階に掘削され、板付Ⅱc式期の段階で、環濠はほぼ埋没してしまったと考えられる。

杉本岳史氏によれば、環濠が機能している板付Ⅱb式からⅡc式段階では、環濠外の住居域と付随する貯蔵穴、その他環濠内外の貯蔵穴が一定区域からほとんど変化せずに維持され、環濠埋没後、その遺構群が規制から離れ、拡散する状況が明白となる。集落内の貯蔵穴の分布には一定期間の計画的配置などがうかがわれ、それは集落の盛衰と密接に関連している〔杉本 2002〕。

同様に、平面規模や周辺遺構の内容、立地などを比較検討すると、津古内畑遺跡、横隈山第5地点、三沢南崎遺跡（1次調査）なども貯蔵穴を主に対象とした環濠であることが考えられる。

### 3. 集落動態と環濠～三国丘陵東南部域でのケーススタディ～

三国丘陵東南部域の谷筋を共有する集落変遷過程では、これまで5箇所の環濠（もしくは地形分断大溝）が確認されており、周辺集落の動向も明らかにされつつある。先稿で大枠を示した通り、弥生時代の初期に丘陵最南端の段丘裾に着床した集落が、谷筋に沿って丘陵上に変遷していく様相や各独立丘陵上に立地する集落遺跡が一定のまとまりを持ちつつ、変遷する様相がみられる。以降、この一連の変遷が迫える集落のまとまりを「集落群」と呼称する<sup>（註7）</sup>。また、環濠自体も集落動向と密接につながっており、集落変遷に対応して、環濠群は時期を違えて掘削されることが明らかになっている。当地域における環濠掘削は、そういった意味からも一時的な地域社会での緊張関係を反映したものではないとも併せて理解できる〔山崎・杉本・井上 2005〕。その後、新たな知見が加わり、特に板付Ⅰ式併行期～板付Ⅱa式期の状況がより具体的なものとなっている。

ここでは、環濠をめぐる事象を中心に詳述し、環濠と争いの関係についても、併せて検討の対象にする。当地域における環濠の掘削時期と体内遺存の可能性のある武器切先片や武器切先嵌入人骨等が出土する犠牲者の墓がみられる時期は異なる様相を示している。厳密には三国丘陵東南部域での集落変遷と別系統となるグループのものも含まれる可能性があるが、参考事例として周辺の事例も広く取り扱う。なお、犠牲者の墓については、その判断が難しい側面があるが、体内遺存／副葬の両可能性があるものについても、その旨を示したうえで触れることにする<sup>（註8）</sup>（第75－1・2）。

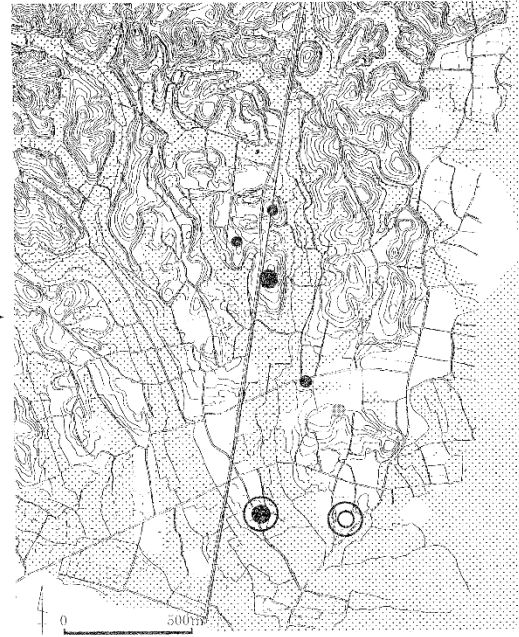
#### <板付Ⅰ式併行期段階まで>（第75・77図）

力武遺跡群（力武内畑遺跡・前畑遺跡）で集落が営まれる。三国丘陵にこれまでみられなかった本格的な農耕集落である。力武遺跡群は三国丘陵の東南部に位置し、その西側で北方へ谷が大きく入る、丘陵部からなだらかに続く段丘の最南端部に立地する。その段丘面を大きく分断するかたちで北東－南西方向の大溝が推定延長約180m掘削されており、その大溝に区画される段丘面はおおよそ北西－南東方向に135m、北東－南西方向に180mの範囲で、おおよそ2.4万㎡である。大溝は集落北限の溝となる。標高17m前後の低位段丘面に居住域が所在し、段丘直下には井堰<sup>（註9）</sup>、水路、水田畦畔が検出されており、生産域として利用されている。力武遺跡群は、三国丘陵周辺で確認される初期の弥生集落であるが、その初期段階で丘陵を分断する大溝を有する点からみて、周辺に同時期またはそれ以



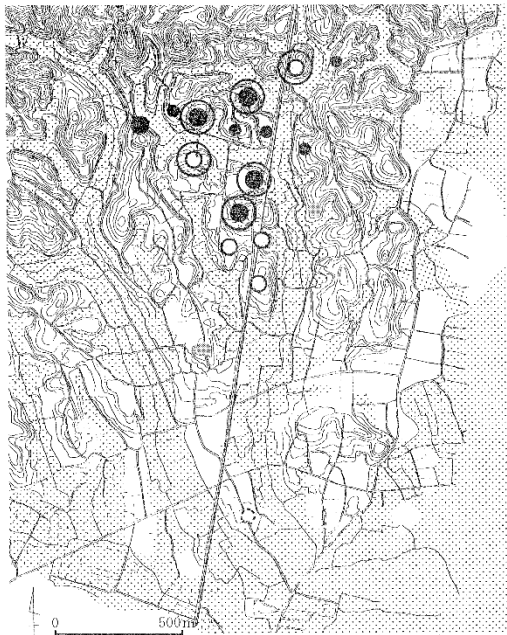
〈様相Ⅱ（板付Ⅰ式併行期）〉

- \*南部域段丘最南端で集落出現
- \*弥生系集落の段丘上進出開始
- \*力武遺跡群環濠掘削
- \*三国の鼻遺跡、横隈上内畑遺跡で武器出土墓出現



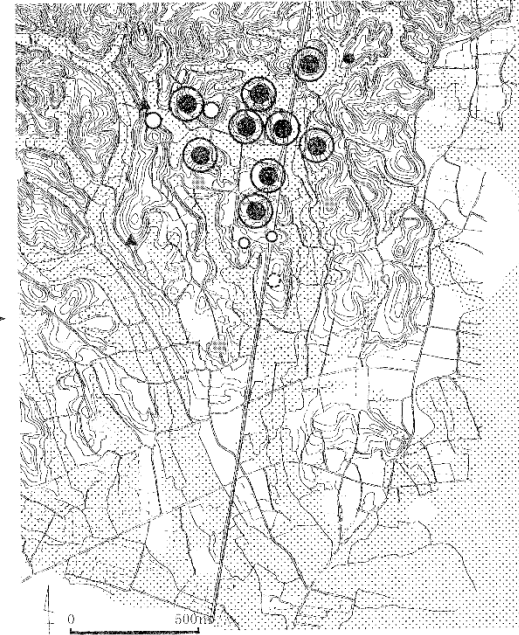
〈様相Ⅲ（板付Ⅱa式期古相）〉

- \*集落移動〈南部域～中央部域へ（2段階）〉
- \*三沢南崎遺跡環濠掘削（先）
- \*横隈山遺跡7環濠掘削（後）



〈様相Ⅳ（板付Ⅱb式期新相）〉

- \*中央部域集落衰退期→北部域集落の盛行へ
- \*横隈山遺跡5環濠埋没（先）
- \*横隈山遺跡7環濠埋没（後）



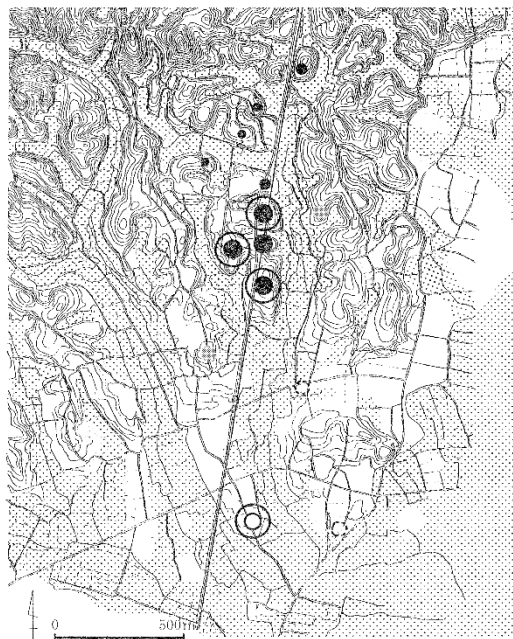
〈様相Ⅴ（板付Ⅱc式期）〉

- \*北部域集落盛期①
- \*北中尾遺跡1環濠埋没
- \*ハサコの宮遺跡、北牟田遺跡で犠牲者の墓ほか

第75図① 三国丘陵南東部域弥生時代「集落群」変遷と環濠と犠牲者の墓（山崎 2010c）

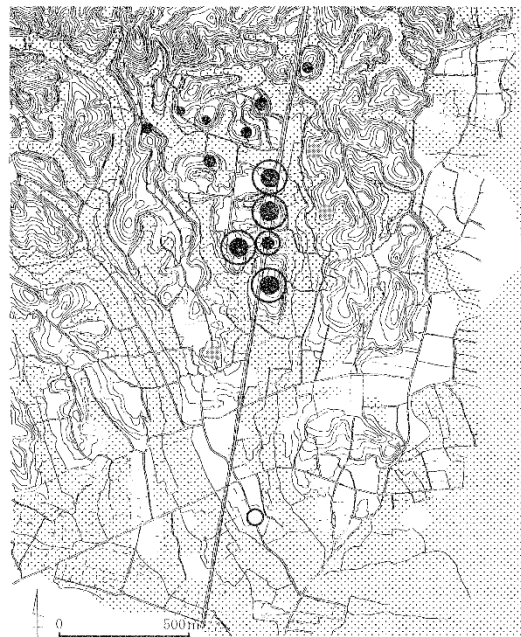
前の小規模集落が散在している状況についても想定しておくべきであろう。また、谷を挟んで西側の段丘先端部に三沢南崎遺跡の存在が一部確認されている。力武遺跡群からの分村・分出過程<sup>（註10）</sup>が考えられる。

この時期、武器出土の墓は横隈上内畑遺跡5次S R 12で木棺墓棺内床面、推定被葬者腹



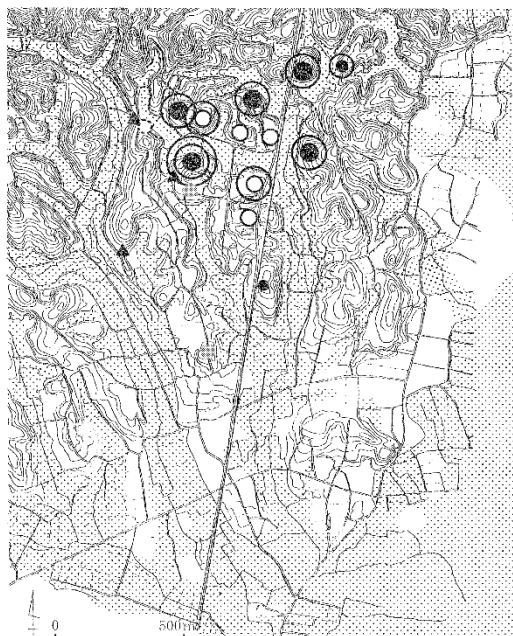
〈様相Ⅳ（板付Ⅱa式期新相）〉

- \*中央部域集落盛行期① 北部域への小規模移動①
- \*横隈山遺跡5環濠掘削
- \*三沢南崎遺跡環濠埋没



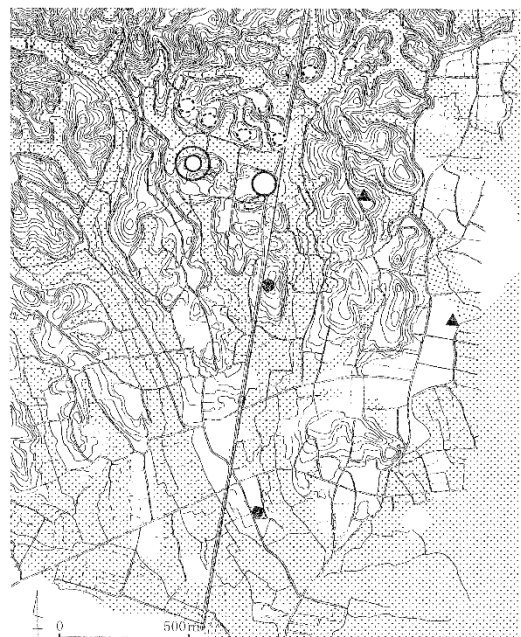
〈様相Ⅴ（板付Ⅱb式期古相）〉

- \*中央部域集落盛行期② 北部域への小規模移動②
- \*三沢北中尾遺跡1環濠掘削



〈様相Ⅶ（城ノ越式期）〉

- \*北部域集落盛行期②
- \*北中尾遺跡2、ハサコの宮遺跡、北牟田遺跡で犠牲者の墓ほか



〈様相Ⅷ（須玖Ⅰ式期）〉

- \*集落拡散・衰退期
- \*横隈狐塚遺跡7、横隈上内畑遺跡で犠牲者の墓ほか

【凡例】 ●（着床） ●（定着） ●（盛行） ○（やや盛行） ○（衰退） ○（廃絶） ■ 詳細時期不明 △ 犠牲者の墓ほか

## 第75図② 三国丘陵南東部域弥生時代「集落群」変遷と環濠と犠牲者の墓（山崎 2010c）

部付近から打製石鏃6点がまとまって出土したほか、横隈上内畑遺跡4次SR21で木棺墓棺内から鋒部を欠く有柄式磨製石剣が出土している。墓出土武器の取り扱いが難しく、体内遺存例／副葬例かについて、出土状況を綿密に検討しなければならない[山崎 2009b]。前者は双方の可能性、後者は副葬例であるが、いずれにせよ新たな副葬習俗である武器副



葬には社会変化が読み取れる。当地域の安定した段丘上に弥生系集団が進出する過程で、既存の集団との小規模な軋轢が生じたのであろうか。

#### ＜板付Ⅱa式古相段階＞（第75・78図）

集落域の移動・拡散現象が顕著になる。この拡散現象については、現在の土器編年では区分できないが、現象面からみると、その変遷については2段階程度に分けて理解することが可能である。すなわち、力武遺跡群・三沢南崎遺跡から三沢古賀遺跡周辺への変遷過程と横隈山遺跡6・7地点を足がかりとした北側への変遷過程である（註11）。

この時期、三沢南崎遺跡では地形分断の溝や環濠の掘削を伴い集落活動が活発化している。地形分断の溝は少量の遺物から明確な時期を判断できないため、地形分断溝と環濠の厳密な同時併存、もしくは掘削時期差はわからないが、大略一時期の併存は認めてよいであろう。三沢南崎遺跡は力武遺跡群の立地と集落構造ともに非常に似通っている。地形分断溝のありかたをはじめ、力武遺跡群でみられる居住域の東方あるいは東南方向に沖積低地を臨む緩斜面上の貯蔵穴群に、三沢南崎遺跡では環濠が付加されたかたちであり、加えて環濠規模や周辺遺構の状況を勘案しても貯蔵穴を囲むものと想定できよう（逆に力武遺跡群に未発見の貯蔵穴を囲む環濠の可能性も少なからず想定できる）。集落レイアウトや環濠掘削にあたっては、三沢南崎遺跡の分出元集落の力武遺跡群が大きく関与していることが想定でき、力武遺跡群から眺望できる地点に環濠とその内部施設が設けられることも重要である。

また、力武遺跡群より北北東へ480m、西側に大きく谷が入る標高22.5m付近に三沢古賀遺跡が出現しており、さらに小谷を介してその南東150m、標高25m付近に、みくに保育所内遺跡等が存在している。これらの集落遺跡は遺構密度が希薄で規模も小さく、比較的短期間に営まれた集落である可能性があるが、周辺は古くから宅地化が進んでおり、点的な調査で集落の広がりなど、未だ不明点が多い。力武遺跡群・三沢南崎遺跡からの分村・分出過程が考えられる。

次の段階で営まれる集落が中央部に属する横隈山遺跡第6・7地点、三沢北中尾遺跡5地点、三沢北中尾遺跡7地点（横隈山遺跡第5地点）である。南部領域の力武遺跡群や三沢南崎遺跡が立地する段丘先端部から約900m谷筋を上った丘陵地に立地する。三沢古賀遺跡から北北西へ400mの地点が横隈山遺跡第6・7地点である。

横隈山第6・7地点は、標高32～36mの南北に長い独立丘陵に位置し、北半が6地点、南半が7地点である。7地点では板付Ⅱa式古相段階～板付Ⅱb式新相段階（中心は板付Ⅱa式新相段階～Ⅱb式古相段階）までの環濠をはじめ、城ノ越式～須玖Ⅰ式期の竪穴建物10数軒、板付Ⅱa式古相段階～板付Ⅱb式新相段階を中心に、一部城ノ越期までの貯蔵穴数十基が確認されている。

環濠の平面形は楕円形、または隅丸の長方形で長軸約85m、短軸約53mである。環濠が掘削されていない部分が4箇所確認でき、陸橋部としての性格が考えられる（図3）。環濠の断面はV字形で、最深部近くになると狭くなり直に下がる。内側の法面は外側に比べてやや傾斜が緩やかであり、連続したレンズ状堆積を示している。貯蔵穴は検出プランが長方形のものと円形から楕円形のものが多い。また、長方形のものには長軸3.5mを超える大形のものが比較的にみられる。住居跡は円形・方形・長方形が確認できる。正報告が未刊行であるが、小郡市所蔵の資料を実見したところ、環濠内に存在する住居跡出土土器（SC2・

3・4) は前期後半から末頃の土器も存在するが中期に入る土器が全てに存在する。環濠内には同時期の住居跡がない（もしくは少ない）可能性が高いものと思われる。環濠は貯蔵穴群を主に圍繞した可能性についても併せて考えておく必要がある。

7 地点北側の 6 地点では、住居跡と貯蔵穴 75 基が確認されている。丘陵頂部に密集して貯蔵穴がみられ、重複する住居跡 3 軒は全て方形プランである。詳細時期不明であるが、7 地点と連動した消長をたどるものと思われる。6 地点が丘陵の頂部にあたり、7 地点の環濠はやや南側へ傾斜をもった地点に配置されている。この時期横隈山遺跡第 6・7 地点を中心とした集落の広がりが見取できる。横隈山遺跡 7 地点環濠の掘削にあたっては、周辺で未発見の集落を含め、三沢南崎遺跡や三沢古賀遺跡など、谷部を共有し、横隈山遺跡を眺望することができる周辺集落の関与を想定する。

#### <板付Ⅱa 式新相段階> (第 75・79 図)

「集落群」の中心は中部域に移り、横隈山遺跡第 7 地点環濠が継続機能し、三沢北中尾遺跡 7 地点（横隈山遺跡第 5 地点）環濠が新たに掘削される段階である。三沢南崎遺跡の環濠はこの段階ではある程度埋没が進んでいる。

三沢北中尾遺跡 7 地点では板付Ⅱa 式新相段階から板付Ⅱb 式古相段階を主体とした遺構群、環濠・条溝が 2 条、貯蔵穴 41 基、竪穴住居跡 4 軒、土坑 6 基が検出されている（図 3）。1 号環濠（条溝）は丘陵南部の斜面上標高 30.5m の等高線に沿う形で、調査区を東西 17m にわたって直線状に検出された。調査区の途中で途切れ、検出幅 1.5m～2.5m、深さは残りの良い調査区西壁で約 3m、断面は V 字形で最深部は狭く直に下がり、レンズ状堆積を示す。出土土器は下層では板付Ⅱa 式新相段階、上層では板付Ⅱb 式古相段階に属する。2 号環濠は調査区東南端に位置し、15m 程が検出された。横隈山遺跡 5 地点で検出された環濠と同一のものである。横隈山遺跡 5 地点では、環濠の断面が西鉄線路際の調査区壁面に 2ヶ所確認され、その間の距離は 48m を測り、推定標高 33～30m、丘陵中央部から同東斜面中腹を通り、丘陵南斜面へと巡るものと推定される。断面 V 字形を呈し、検出面で幅約 4.5m、深さは残りの良い部分で約 3m を測る。最深部は狭く直に下がり、堆積状況は人為的に埋められる個所や掘り直しが多少認められるが基本的には自然堆積によるものである。2 号環濠は板付Ⅱa 式新相段階以前に掘削が行われたと考えられ、埋没した時期は板付Ⅱb 式古相段階主体、一部新段階に入る時期であったと考える。2 号溝に切られ、溝内に存在する V 字状掘り込みがあり、断面形が非常に 1 号溝に似ていること、平面的にも溝状遺構と捉える事が可能なので、

積極的に理解して 1 号溝が一旦途切れて北東側に延長する可能性があるものとして本稿では捉えておきたい。この理解により、2 号溝より 1 号溝が先行して掘削され、7 地点の貯蔵穴群や住居の一部はこの 1 号溝内部に区画されていることになる。

小規模な集落の進出も見取でき、北側の地点（北中尾 1・2 地点）でも遺構が若干確認できる。また三沢蓬ヶ浦遺跡 B 地区でも、わずかながらこの時期の遺構が散見される。北部域への新たな進出・土地開発については、順次進めていったことがうかがえる。この段階設定についても、北中尾 7 環濠（条溝）の動態から、2 段階程度に細分することが可能であろう。

#### <板付Ⅱb 式古相段階> (第 75・79 図)

中部域で集落活動が継続・活発化する一方で、当地に弥生文化の着床をもたらせた南部域

の遺跡群は姿を消す。前段階に小数ながら生活遺構がみられた三沢北中尾遺跡 1 地点に集落の進出が進み、環濠が掘削される。

三沢北中尾遺跡 1 地点は標高 32 から 35m を測る、横隈山遺跡第 5 地点・三沢北中尾遺跡 4・7 地点と谷を隔てて北側の東西にのびる丘陵に位置する。板付Ⅱ b 式～城の越式期にかけての集落遺跡で、竪穴住居跡 20 軒、貯蔵穴 137 基、土坑 29 基、丘陵先端部に築かれた環濠が検出された。環濠については、先に詳述した通りで、東端が確認できていないが、東西に長い楕円形状（隅丸形状）を呈し、外縁の南北長は 76m を測る。環濠から出土した土器から板付Ⅱ b 式古相段階以前に掘削され、板付Ⅱ c 式期の段階でほぼ埋没してしまったと考えられる。環濠機能時には環濠内に貯蔵穴のみが掘削されていたことが明らかになっている（図 6）[杉本 2002]。

三沢北中尾遺跡 7 地点（横隈山遺跡第 5 地点）の環濠についてはこの時期の最終段階に埋没する。三沢北中尾遺跡 2 地点、三沢蓬ヶ浦遺跡 B 地区でも引き続き小数ながら遺構が確認でき、E 地区・2B・3B 区ではわずかではあるが当該期の遺構が認められる。

#### ＜板付Ⅱ b 式新相段階＞（第 75 図）

既存の集落域での衰退・居住地廃絶が見られる一方、新たな独立丘陵に集落域が移動する段階である。中部域に初期に出現し隆盛した集落遺跡が姿を消す。すなわち、横隈山遺跡第 7 地点環濠が埋没し、三沢北中尾遺跡 5 地点もこの段階で遺構が見られなくなる。新出の集落は北部領域の三沢蓬ヶ浦遺跡 2A・3A 区、C・G 地区・2C・3C 区である。横隈山遺跡第 2 地点についても連動した動きを想定したい。三沢北中尾遺跡 1 地点と谷を挟んで北側に所在するのが蓬ヶ浦遺跡であるが、中部域の集落衰退との呼応関係が看取できるので南側からの働きかけが大きいものと思われる。

#### ＜板付Ⅱ c 式段階＞（第 75 図）

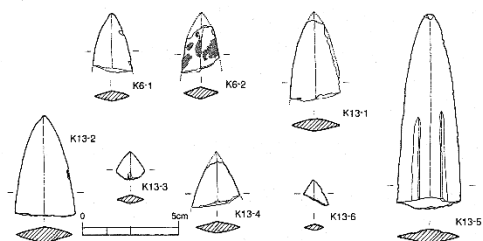
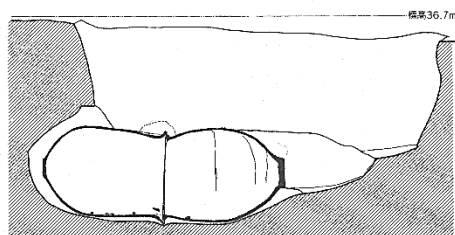
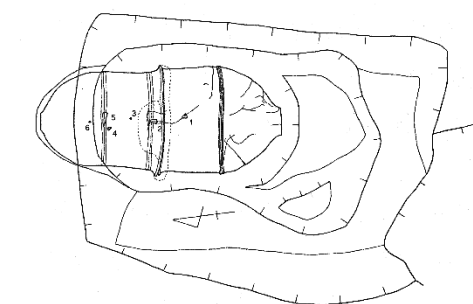
引き続き既存集落域での衰退・居住地廃絶が見られ、新たな集落域の出現、また「集落群」域の中心が移動する時期である。

三沢北中尾遺跡 1 地点では環濠が埋没し、この時期に当丘陵上の環濠は全てが埋没し、機能している環濠はなくなる。三沢北中尾遺跡 2 地点では、直径 8m 程の大形円形住居を中心として、それに付随するかたちで中・小形の方形住居の配置がみられる。それらの配置は、いくつかのグループに分かれるようであり、板付Ⅱ c 段階から城ノ越式期にかけて盛行する。この時期になると、三沢蓬ヶ浦遺跡、北中尾遺跡 1・2 地点付近（北部領域）に集落の中心が移動していることがわかる。蓬ヶ浦遺跡の各地点でも、板付Ⅱ c 式段階から城の越式段階の遺構が最も多く見られる。

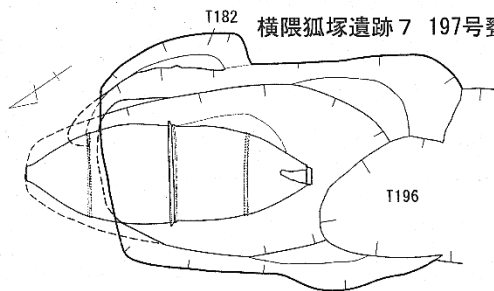
前期末以降、武器切先出土の墓が継続してみられるようになる（第 76 図）。北牟田遺跡 K15 で甕棺墓内から凹基式打製石鏃（切先欠損）、切り合いから前期末～中期初頭と考えられる D48 で木棺墓棺内床面から石剣片 3 点（図化 2 点の残存長 10.1cm、13.7cm）が出土した。他に前期末～中期初頭の D12 で木口付近棺外の墓壇底面から細形銅剣切先片（残存長 5.1cm）が出土している。K15 は、甕棺自体が削平により壊されており、打製石鏃は原位置を保っていない可能性があり、D48 についても切先副葬の可能性、D12 も棺外副葬と考えられるので、明確な犠牲者の墓とはいえない。

ハサコの宮遺跡 2 次調査では、詳細不明ながら土壇墓・木棺墓より磨製石鏃 1、磨製石剣切先片 2 点出土し、3 次 D16 で石剣基部、D17 で石剣切先片が出土した。D16 は木棺

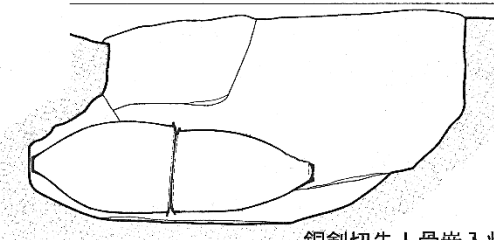
ハサコの宮遺跡Ⅲ 13号甕棺墓



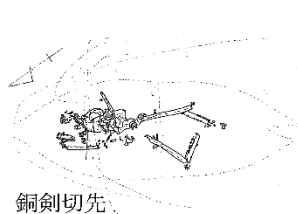
横隈狐塚遺跡Ⅶ 197号甕棺墓



37.900m



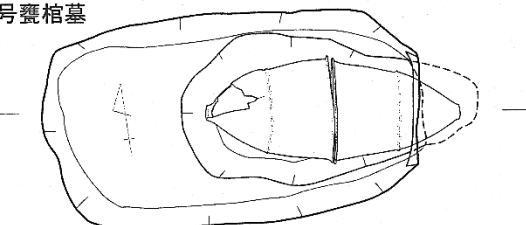
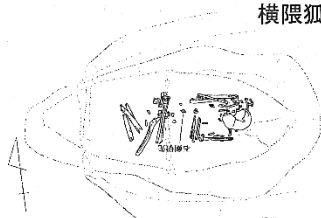
銅剣切先人骨嵌入状態



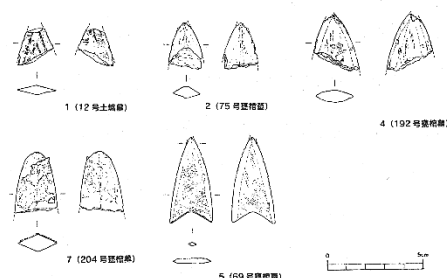
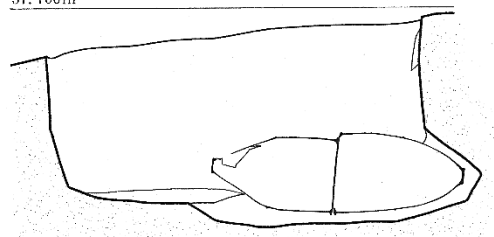
銅剣切先



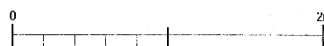
横隈狐塚遺跡Ⅶ 75号甕棺墓



37.700m



横隈狐塚遺跡Ⅶ 墓出土武器切先ほか（7は銅剣、他は石鏃・石剣）



第 76 図 三国丘陵南東部域周辺の犠牲者の墓（山崎 2010c）

墓棺内、おそらく被葬者右腕部付近に鋒先を足元に向けた状態で出土し、D17 は木棺墓棺内のほぼ中央部で出土している。切先の残存長は 5.5cm で先端を一部欠損する。3 次 D16 は副葬、D17 は体内遺存の可能性があるものと思われる。2 次調査土壇墓・木棺墓出土の石剣切先は残存が 2.9cm、3.4cm で数片に割れており、出土状況は不明ながら体内遺存の

可能性も考慮できる。ハサコの宮遺跡Ⅲ地点では、18号木棺墓で、2次墓壙上面で検出された花崗岩の下から銅剣切先片（残存長 1.9cm）が出土した。出土状況から体内遺存の可能性は低い。

横隈狐塚遺跡7地点12号土壙墓からは推定被葬者胸部中央付近の床面から5cm浮いた状態で磨製石剣切先片が出土した。切先は水平状態で頭位へ向け、残存長は2.0cmで先端部を欠損する。25号土壙墓からは推定被葬者腹部中央付近、床面から10cm浮いた状態で磨製石剣切先片が出土した。切先は水平状態でやや斜めに頭位へ向いており、残存長は12.55cmで切先を欠損する。後者については、体内遺存の可能性が低い。両者とも切り合い関係から前期末～中期初頭の所産と推定される。

#### ＜城ノ越式段階＞（第75図）

新たな丘陵地への進出がなく、前時期からの継続した集落経営が行われる。北部域でまとまりがみられる。三沢蓬ヶ浦遺跡2A・3A区、2B・3B区が衰退するが、三沢蓬ヶ浦遺跡の他地点、三沢北中尾遺跡1・2地点では集落活動が活発にみられる。また、横隈山遺跡第7地点ではこの時期の土器が少数みられ小規模ながら集落の再進出がうかがえる。

この時期の最大の特徴は環濠がみられないということである。環濠も前段階までに埋没し、この段階で新たに掘削されることもない。周辺に視野をひろげて、環濠が存在したとしても埋没期にあたるもののみで、前期末から中期初頭に掘削され、機能している環濠は少ないといえる。

武器出土の墓として、ハサコの宮遺跡Ⅲ地点6号甕棺、13号甕棺がみられる。6号甕棺上甕には黒色顔料で塗られた格子文様が確認され、内部には人骨が遺存している。埋置角度は－6度、仰臥位で、上肢は体側に沿って下に伸ばし、下肢は膝関節をほぼ90度に助けて左に倒している。石剣切先（残存長 3.1cm）が胸部中央で一点出土した。もう一点（残存長 2.45cm）は取り上げた人骨中に混入していたもので、位置は不明である。被葬者は成年男性と判断された。体内遺存の可能性が高い。13号甕棺は、棺内底付近に磨製石剣切先が6点出土した（図11）。人骨は遺存しないが、埋置角度はほぼ水平で被葬者の推定上半身～腰部を中心に切先が出土している。切先片は残存長 1.4cm～10.2cmである。体内遺存の可能性が高い。

三沢北中尾遺跡2地点7号甕棺墓からは棺内底付近から細形銅剣切先（残存長 11.9cm）が出土した。甕棺の保存状態は良いが、内部に人骨は遺存していない。甕棺の傾斜角度は4度であり、銅剣は原位置を保っていた可能性がある。おそらく、頭位側に切先を向け、推定被葬者胸～腹部付近にあったと考えられる。体内遺存／切先副葬の双方の可能性を考えておくべきであろう。

#### ＜須玖Ⅰ式段階＞（第75図）

三国丘陵南東部集落群の全体規模が縮小する時期である。今回のグループ内ではないが谷を挟んで東側に位置する一ノ口遺跡Ⅰ地点、北松尾口遺跡、北牟田遺跡周辺でこの時期集落活動が活発化している。グループ毎に集落の消長が存在するであろうが、この時期以降、前期から継続した既存の集団関係が崩壊・再編されていることがうかがえる。三沢蓬ヶ浦遺跡付近の居住地が廃絶され、その時期の遺構・遺物は全く確認されない。三沢北中尾遺跡1・2地点・横隈山遺跡第6・7地点で残るのみとなっている。三沢北中尾遺跡1・2地点では引き続き活発な集落経営がうかがえ、1地点で6軒、2地点で4軒以上の住居

跡が確認されている。段丘上の三沢南崎遺跡でも、再びこの時期に住居跡が確認されている。当「集落群」を構成する集落の一部は他の「集落群」と統合・再編され、当地域においては経営が小規模分散化へ進む現象がよくわかる。環濠の掘削は行われない。

武器出土の墓として、須玖Ⅰ式古段階で横隈狐塚遺跡7地点204号甕棺がみられる。204号甕棺は埋置角度5度、上甕の棺内から上肢骨片が、下甕の棺内から下肢骨がまとまった状態で出土した。そのうち寛骨に嵌入した形で銅剣の切先（残存3.2cm）が出土している。須玖Ⅰ新段階では69・75・192・197号甕棺がみられる。197号甕棺は、人骨が遺存しており、埋置角度は-2度で、北東を頭位にした仰臥屈葬であると推定される（図11）。胸椎2点が正位置から左にずれて捻転しており、当該部分に銅剣が嵌入し、その重みで骨化後に捻転し関節状態を失ったと推定される。その他、69号甕棺では下肢骨付近で磨製石鏃（切先欠損：残存4.5cm）、75号甕棺では右寛骨付近で磨製石剣切先（先端部欠損：残存2.45cm）、192号甕棺内、推定胸部付近から磨製石剣切先（3.0cm：表面にタール状付着物）が出土しており、いずれも体内遺存の可能性が考えられる（第76図）。

横隈上内畑遺跡1地点では、7号甕棺墓から石剣切先片、左尺骨に切創・頭蓋骨離断の可能性のある人骨が出土している。石剣切先は、推定腹部と大腿部付近から、人骨とともに検出された。殺傷人骨の可能性が高い。

なお、須玖Ⅱ式段階でも引き続き、横隈狐塚遺跡や横隈上内畑遺跡で武器（切先）や切傷のある人骨が出土する墓がみられる。

三国丘陵全域を含めても中期前半までは、継続して盛行している遺跡がみられる一方で、集落の拡散・小規模化のグループがみられる時期でもある。東南部域「集落群」ではそれまでの盛行に比べると「集落群」の衰退・拡散・小規模化傾向が顕著に現われてくる。これについては、丘陵を下った低台地上の拠点集落である大板井遺跡群や鳥栖の柚比丘陵遺跡群、三国丘陵北部の隈・西小田遺跡群の一部、筑前町西部（旧夜須町周辺）などで中期中葉以降、「集落群」が大規模化し、宝満川中下流域での「集落群」再編が行われる時期の先だった動態を意識させるものである。

#### 4. 集団と環濠

先に示した三国丘陵東南部域「集落群」および環濠の変遷を踏まえて、環濠を掘削した集団、および内部空間を主に使用した集団像を考えてみたい。特に三国丘陵周辺で多くみられる貯蔵穴を囲む環濠を主な対象として論を進めることにする。なお、ここでは未発見集落遺跡の可能性についても、環濠掘削集団を考える上で重要な要素と判断するので、試掘調査等で得た知見等を参考に一部加味することにする。

##### A. 貯蔵穴専用環濠の選地と集落レイアウト

三国丘陵東南部域「集落群」の変遷でも確認できたが、環濠の掘削は新たな土地に進出するにあたって、比較的初期段階に掘削されていることがわかる。環濠掘削以前にも小規模な進出・活動は確認できるが、その箇所への本格的集落造営、およびその集落遺跡の盛行時期は環濠掘削以後となる。はたして、集落における諸機能施設のレイアウトや集落造営計画には、どのような意識が作用しているのだろうか。

まず、前述の三国丘陵東南部域「集落群」の変遷初期段階で集落遺跡立地および集落遺跡レイアウトの類似性がうかがえる例がある。すなわち、弥生時代前期初頭～前葉段階の力武遺跡群と三沢南崎遺跡との関係である。双方とも丘陵部からなだらかに続く段丘先端



部に立地する。

力武遺跡群では、その段丘面を大きく分断するかたちで北東－南西方向の集落北限の大溝が掘削されており、居住域 2.4 万 m<sup>2</sup>を取り囲む。三国丘陵で見られる初期段階の農耕集落であるが、この大溝を有する状況からみて、周辺の低地中の微高地などに同時期またはそれ以前の小規模集落が散在しており、それらが周辺開発の核となる力武遺跡群を造営したことも想定しておくべきであろう<sup>(註 12)</sup>。段丘面は標高 17m 前後を測り、段丘直下に小規模な水田を経営している。居住域は南側の段丘先端部から北側で段丘面が広がりを持ち始める部分を中心に広がり、居住域の北東側に貯蔵施設が密に分布する箇所がみられる。その箇所は、段丘先端部から北東 120m の段丘崖が東に出っ張りを持つ部分で、東から南方向に開けた部分に位置する。

三沢南崎遺跡では、点的な調査で未だ不明点が多いが、段丘を大きく分断するかたちで北東－南西方向の大溝が掘削されており、切断された段丘先端部は推定 1.5 万 m<sup>2</sup>である。段丘先端から北北東 90m の段丘崖付近に貯蔵穴群がみられ、同じ箇所に径約 50m の環濠があり、貯蔵施設を圍繞するものと推定される。環濠（貯蔵穴専用環濠と推定）が立地するのは、東から東南側に開けた箇所であり、東南には力武遺跡群が臨める。居住域については、環濠より後出する時期のものが環濠北西部に一部確認されている。地形的な状況から居住域の中心は、環濠の西から南にかけての段丘面かと想定する。両遺跡とも、居住域の中心部から北東乃至東側に貯蔵穴群が分布し、その箇所は東から南側に開けた箇所である。三沢南崎遺跡の状況から、力武遺跡群についても、貯蔵穴を囲む環濠を有していた可能性を想定しておくべきかもしれない。今後の調査に注意を要する。

次に環濠が掘削される横隈山第 7 地点（板付Ⅱa 式新段階掘削）では、環濠は谷の本筋にむかって大きく独立して張り出す南北丘陵の南側、頂部付近から南斜面上位に立地する。環濠と同時期の居住域の状況が不明な部分も多いが、住居跡（掘削された数軒は出土土器から城ノ越式から須玖Ⅰ式の時期と判断）が丘陵鞍部の西側にやや偏り、丘陵頂部から南の斜面に多く確認される。環濠と同時期の住居跡についても、環濠の北西から南西にかけて分布する可能性を想定しておきたい。

板付Ⅱb 式古段階に掘削されたと考えられる横隈山遺跡 5 地点の環濠は、同じく谷の本筋にむけ、舌状に張り出した丘陵先端部、頂部から南斜面を中心にめぐる。丘陵先端部は北・東・南に谷部を持ち、独立性が高い。同時期の居住域は環濠の西側の丘陵上に広がる。

東南部域「集落群」で、最後に掘削される環濠となる三沢北中尾遺跡 1 地点（板付Ⅱb 式新段階）では、横隈山遺跡 5 地点と谷を挟んで北側の丘陵先端部の頂部を大きく囲むように環濠は掘削される。谷の本筋に対して、同じく舌状に張り出す丘陵の北・東・南側に谷部を持ち、独立性が高い。同時期の集落は環濠西側の丘陵部に分布する。

周辺の遺跡をみても、貯蔵穴群は丘陵頂部から斜面上、特に東から南にかけての日当たりの良い斜面を選んで掘削されている傾向があり、貯蔵穴専用環濠はその要件を第一に満たす立地に計画される。貯蔵穴専用環濠の場合、内部施設の貯蔵穴群に規定されて、その立地には大きな計画性が働く。また、集落進出の初期に環濠が掘削されることを考慮すると、貯蔵穴専用環濠の立地、選地については集落進出・レイアウトにおける重要で優先される要素であったことがうかがえるのである。環濠の選地計画がまず行われ、それに付帯して居住遺構が付属する状況も想定すべきであろう。

## B. 貯蔵穴専用環濠を掘削・使用する集団像

さらに踏み込んで、貯蔵穴専用環濠を掘削する集団、ならびに主に使用した集団像を想定したい。

当地域の環濠を労働力供与から考察した片岡宏二氏によれば、横隈北田遺跡では、その周囲に控えるⅡb式期の横隈鍋倉遺跡や三国の鼻遺跡、三沢東古賀遺跡、三沢京江ヶ浦遺跡などの同時期の集落の共同作業により環濠が掘削され、それらの集落の母村としてⅠ期（板付Ⅰ式）から始まる三国の鼻遺跡がそれらを束ねてひとつの同族組織を形成していることを論じた。津古内畑遺跡についても同様に、津古土取遺跡などの宝珠川流域に点在する集落の共同作業による掘削を前提としている。前項で詳しくその変遷を示した東南部域集落群についても、力武遺跡群を母村とした集団の労働力供与をもとに、Ⅱa式期に相次いで横隈山遺跡7地点・5地点、三沢北中尾1地点の3環濠を掘削したと考えた<sup>(註13)</sup>。環濠掘削の主体者は環濠近辺にも環濠隣接地にもいない母村集団であったと位置付けた（片岡2003）。

環濠の掘削については、周辺集落の共同関与が必要であるのは誰もが認めるところである。これらの見解に導かれながら、先にふれた三国丘陵東南部域「集落群」の変遷のなかで環濠を掘削し、主に使用した集団を改めて想定、提示してみたい。

当地域の弥生開始期における母村的かつ地域開発の拠点となる力武遺跡群成立（板付Ⅰ式併行期）以前には、小規模なパイオニア的集団が低地部の可耕地に近接した不安定な場所への進出を既に果たしていた可能性が想定される。こういった小規模集落が地域開発の拠点となる安定した段丘上の土地を選択して、新たな集落を造営する。力武内畑遺跡の段丘を分断する大溝は、それらの小規模集落の協業によるものであり、計画的に集落造営が進められた。

次の板付Ⅱa式古～新段階において、三沢南崎遺跡付近の集落造営は低地部の小規模集落を含めて、その中核となる力武遺跡群からの分村・分出過程によるものである。三沢南崎遺跡では段丘を分断する大溝、およびその内部に貯蔵穴を囲む環濠が掘削されている。先に示した通り、貯蔵穴にはその機能上、立地に選択性が伴うが、それに加えて、三沢南崎遺跡での貯蔵穴専用環濠は分出元集落である力武遺跡群から視認できる立地をもっている。貯蔵穴を環濠で囲むという意識・行為には、それまでに発展した農耕集落として、食料備蓄施設に対するエラボレーション度合いの高さがうかがえるのである。環濠造営にあたった周辺集落の大切な備蓄食料を環濠で囲むことによって、「共／協同性」の体現が行われる。三沢南崎遺跡は準母村的な集落となり、次の分出元集落となる。

その後、三沢南崎遺跡から視認できる谷の対岸（三沢古賀遺跡・みくに保育所内遺跡付近）へ集団が分出し、その次の段階では、横隈山遺跡7地点で環濠の掘削が行われる（板付Ⅱa式新段階）。環濠は土器型式にして2～3小期のうちに埋没し、その間、数回程度の掘り直し、溝さらえが行われる。環濠埋没後も周辺の居住域が継続している状況がみられる。

横隈山遺跡7地点は次段階（板付Ⅱa式新段階以降）の母村的集落（分出元集落）となる。立地にしても谷筋の中央部分に位置し重要である。その箇所は力武遺跡群や三沢南崎遺跡、その分出先であるみくに保育所内遺跡などから広範に視認できる場所である。これ



〈板付Ⅰ式併行期及びその前段階〉 ＊力武遺跡群の環濠掘削（機能当初）  
 [●：詳細不明ながら、試掘で遺跡を確認した低地部、及び地図上から推定される低地中の微高地]

第 77 図 板付Ⅰ式併行期における環濠と集団像（山崎 2010c）

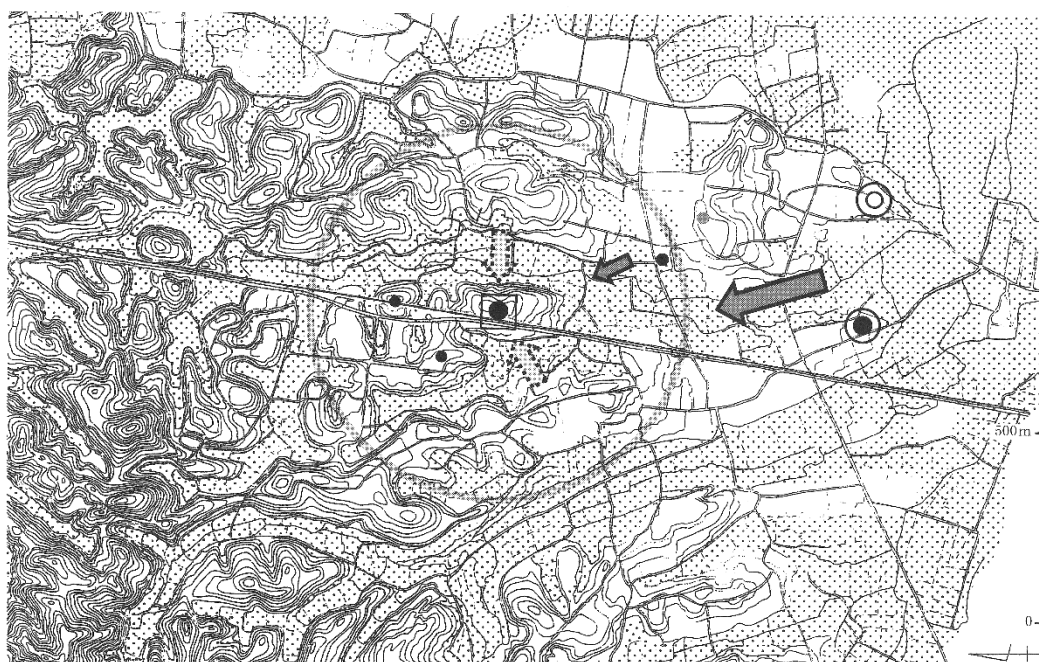
らのほかにも、周辺集落の多くが横隈山遺跡 7 地点の環濠造営に着手したと考えられる。環濠造営に関与した未発見集落の可能性としては、横隈山第 6・7 地点の谷を挟んで東に位置する独立丘陵（一部宅地化、旧地形一部残存）や谷を挟んで南に位置する北内畑遺跡が該当しよう。周辺集落共同の事業によって、自分達の備蓄食料を良好な立地に配置することに大きな意味があったことが追認される。生きていくために重要な種モミや備蓄食料を管理する環濠を掘削すること、管理することを通して、周辺集落の「共・協同性」の実現に媒介された結び付き（集落群としてのまとまり）はさらに強化されたであろう。

横隈山遺跡 7 の環濠掘削の後（板付Ⅱb 式古・新段階）、それぞれの段階に近接して環濠が 2 箇所掘削されるが、同様の過程が想起される。これらは、一部共存する時期がうかがえ、大切な備蓄食料を分散所有することには危険を回避する意味もあるだろう。やはり、周辺集落から視認でき、貯蔵機能としても好立地箇所に貯蔵穴管理用の環濠は掘削される。

弥生時代前期には周辺集落が共同で農耕にあたり、その生産物を共同で管理するあり方が看取され、貯蔵穴管理用環濠はその具体像を端的に示すものと位置付けることができる。環濠・およびその内包施設は特定の有力集団が所有するものではなく、周辺集落が共同掘削、共同管理に当たる状況（等質的な集団関係の構築・維持）が弥生前期社会と位置付けることが可能である。掘削行為には、共同の生産物を守る目的から掘削にあたった周辺集落がより強い「共・協同性」への意識高揚があり、環濠掘削後の機能にはそれに加え、共同貯蔵穴群の境界としての表徴、外敵防止の機能、湿気ぬきの機能等、必ずしもひとつの機能に収斂するわけではなく、様々な意味合いや機能を有している。集落群の全体的な規模も拡大し、それらを維持する食糧管理の必要も増してきたのであろう。板付Ⅱb 式期に至っては 2 環濠が機能し、新たな環濠の掘削も進められている。この時期は、三国丘陵に



〈板付Ⅱa式期古相①〉 ＊三沢南崎遺跡の環濠掘削（機能当初）  
 [低地中の遺跡は、三沢南崎遺跡への可視範囲を考慮して想定]

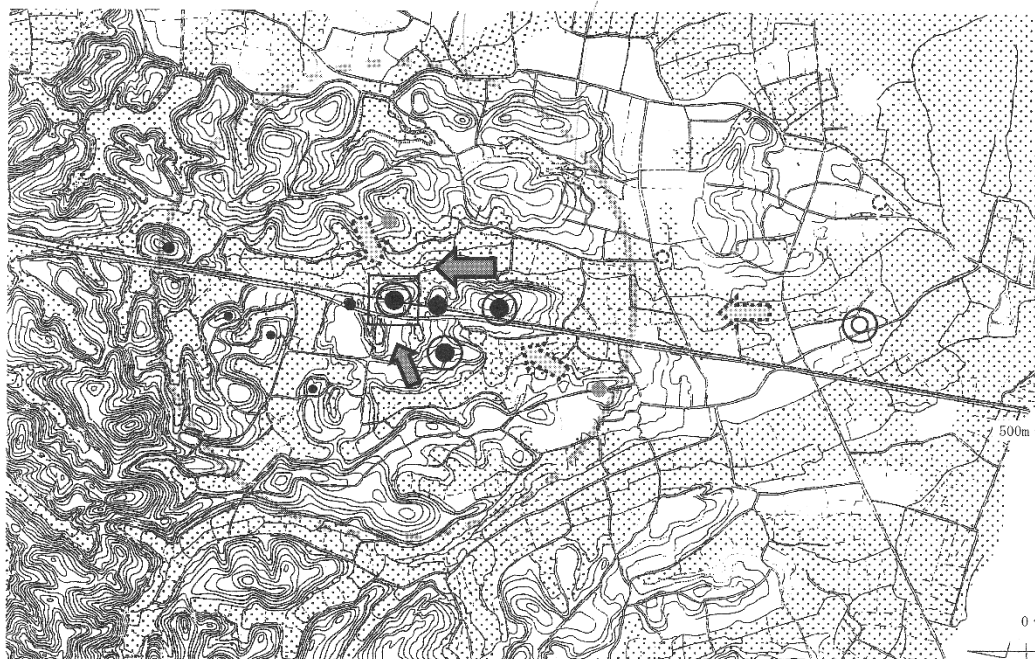


〈板付Ⅱa式期古相②〉 ＊横隈山遺跡7の環濠掘削（機能当初）

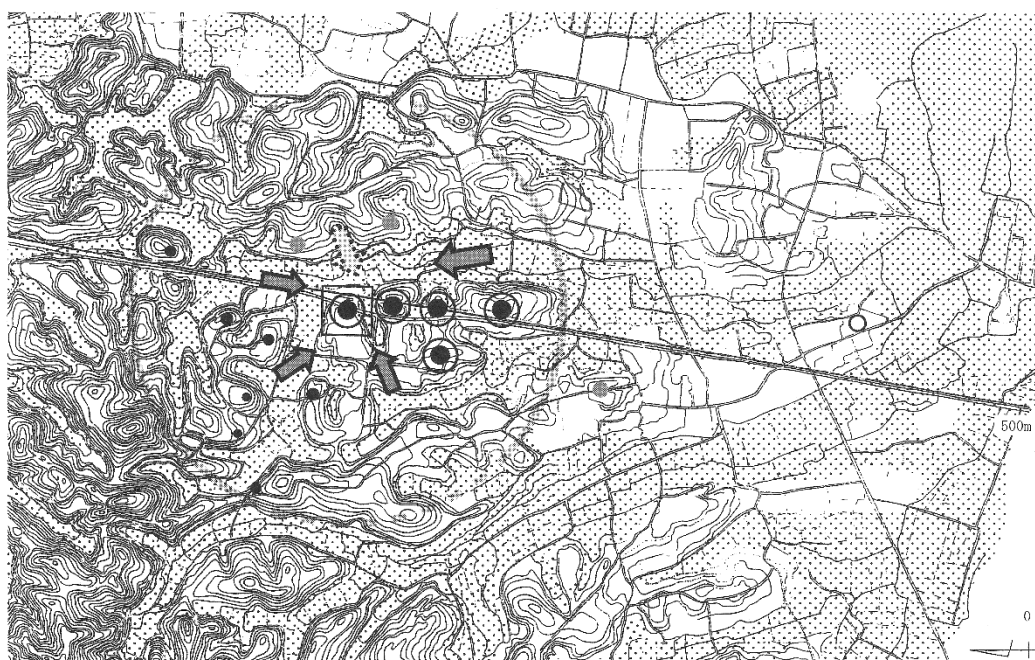
第 78 図 板付Ⅱa式古相段階における環濠と集団像（山崎 2010c）

における集落群のそれぞれが盛行した時期である。

その後、弥生時代前期的な地域社会は変化し、貯蔵穴専用環濠（の掘削）を必要としなくなった。それが、前期末にいたっての環濠の埋没期（環濠の放棄）にあたる。前期末には周辺の墓域で犠牲者の墓などが散見され、小規模な争いが起こっていることがわかる。貯蔵穴に至ってもこの時期には群集するというよりも、住居周辺や住居近接地での管理とな



〈板付Ⅱa式期新相〉 \*横隈山遺跡5（三沢北中尾遺跡7）の環濠掘削（機能当初）



〈板付Ⅱb式期古相〉 \*三沢北中尾遺跡1の環濠掘削（機能当初）

〔凡例〕 ●(着床) ●(定着) ●(盛行) ◎ (やや盛行) ○(衰退) ○(廃絶) 詳細時期不明 □ 掘削環濠

図14 板付Ⅱa式期新相段階・板付Ⅱb式期古相段階における環濠と集団像

第 79 図 板付Ⅱa式期新相段階・板付Ⅱb式期古相段階における環濠と集団像（山崎 2010c）

り貯蔵域として明確でなくなり、居住域内に取り込まれるようになる。共同性の具現としての貯蔵穴群(それを囲む環濠が付随する場合がある)は明確に認定できない状況にある。この段階に至っては三国丘陵地域において、数か所の段丘裾付近に着床し、各谷筋を上ってきたそれぞれの「集落群」域が近接する状況となる。周辺の里山の資源や丘陵上の可耕対象地、初期投資の少ない水田開墾適地には未開のものが少なくなり、新たな可耕地はそれぞれの「集落群」領域に接し、その土地を扱うには様々な軋轢を生じるようになった。これ以上周辺には良好な未開拓地がなくなり、新たな集落を造営するためには、これまで進出・変遷してきた箇所に戻るか、別の新たな良地を求めて大規模に移動するかとなり、ここで様々な軋轢が生じた。弥生時代前期末・中期初頭は、それぞれの集落群を超えて、より上位の枠組みが必要になった時期といえ、集落の再編や統合も行われたと考えられる。当初から三国丘陵における弥生前期集落の丘陵進出現象には、限界性を内包していたといえる。前期末～中期初頭においての他「集落群」(他集団)との軋轢および調整の必要が生じ、犠牲者の墓の出現や柵列で圍繞する集落(一ノ口遺跡やその後の横隈山遺跡6・7地点)の発生、集落変遷のUターン傾向に顕著に表れる。

発展し、増加した人口はそれぞれのブロックでは許容できない段階、それぞれの「集落群」のテリトリーだけで可耕地を増やし、生産性を向上させ、安定的な収量を求める時代が終わりをつげ、新たな軋轢・調整を必要とする社会へと変貌する。また、良好な可耕地不足から常に自然災害への脅威を感じることに伴い、地域社会(小規模社会)は緊張化へ向かう。それでは、人口圧はどのようにして解消するのであろうか。この人口圧を許容できる低台地部への再編や気候が安定していれば微高地上の新集落造営などが考えられ、異なる立地への進出が必要となる。「母村一分村」の関係によって、それぞれの「集落群(一連の消長がうかがえる集落のまとまり)」が互いに干渉を必要としない範囲(自己完結可能な範囲)では三国丘陵の前期社会は一定の発展をみたが、「集落群」の変遷により、それぞれの「集落群」が近接し、それぞれの「集落群」で自由に扱える土地がなくなる段階で集団の共同性を具現化した前期的環濠が終焉を迎え、時代は集団の再編を必要とした。

三国丘陵地域前期社会の繁栄は環濠の放棄というトピックによって終焉を迎え、新たな中期的社会への模索が進められるのである。中期的な集団関係の具体像については、墓地の様相や集落内における大形建物などさまざまな視点で検討が進められている[溝口 1995・1997・2008a・b、小沢 2008・2009、久住 2003、ほか]。当地域においても、集団と墓地構成を併せた検討を進めることで、より詳細な集団像・社会像を提示することが出来よう。これについては、今後、検討を進めていきたい。

## 5. まとめにかえて

以上のように、三国丘陵周辺の環濠、およびその掘削を行い使用した集団像について述べてきた。

環濠の機能を考えるにあたっては、複合的に考える必要があるだろうし、その地域に即した考察が必要である。今回の整理により、第一に、三国丘陵周辺では集落を圍繞する環濠(大溝)と貯蔵穴を圍繞する小規模環濠が双方みられることが明らかとなった。

当地域周辺では集落を圍繞する環濠、もしくは地形を分断する大溝によって集落を区画する行為は刻目突帯文単純期以降の上岩田遺跡からみられる可能性があり、板付Ⅰ式併行期の力武遺跡群、板付Ⅱb式を中心とした時期の大保横枕遺跡まで継続してみられるよう



である。環濠内部に同時期の住居跡が一部存在する可能性も考えられる八ツ並金丸遺跡や横隈山遺跡の位置づけについても、今後、大保横枕遺跡の整理・報告書作成を通して、継続して検討したい。

貯蔵穴を囲む環濠の発生は弥生時代前期中頃（板付Ⅱa 式古・新段階）にみられ、前期後半（板付Ⅱb 式古段階）で新たな掘削は行われなくなり、前期末～中期初頭には全ての貯蔵穴を囲む環濠がほぼ埋没している。よって、貯蔵穴を囲む環濠は前期社会の象徴的産物と換言できよう。環濠は周辺集落の共同事業として掘削され、特に、貯蔵穴を囲む環濠は貯蔵穴の機能的立地とともに、周辺集落から目視できる特徴的な立地を計画的に選択し、集団の備蓄食料を共同管理する。「集落群」の「共・協同性」形成を促すもののひとつと位置付けられよう。

三国丘陵では、弥生時代前期初頭に段丘裾付近に進出した地域開発の拠点集落が「母村一分村」関係を軸に中期にかけて丘陵上に変遷していく。「母村」において人口が増加した氏族の一部構成員が他の氏族構成員とともに、新たな土地の開発を行い移住するといったプロセスの連続が看取でき、Ⅱb 式期以降はそのプロセスがより複雑化していることがうかがえる。

前期末に至っては、同様に丘陵上に進出してきた周辺の「集落群」と「集落群」領域が近接し、互いの干渉が頻繁に必要な状況が生じた。前期後半段階までは、周辺の「集落群」との新たな土地をめぐる干渉は少なく、谷筋を共有する一つの「集落群」のテリトリー内で開発は進められ収まっていたが、前期末以降は、周辺地区の「集落群」のそれぞれと接する領域にも進出する必要性が生じ、様々な軋轢を生じるようになった。この段階においては、一定の緊張関係が窺えるようになる。ここでいう一定の緊張関係はそれぞれの「集落群」領域の接触・重なり起因する程度のものである。現象面では犠牲者の墓の出現があり、次に一ノ口遺跡等でみられる、集落を柵列で囲む現象が看取される。これと軌を一にして、（貯蔵穴専用）環濠は造営されなくなる。貯蔵穴専用環濠は「集落群」が造営・管理し、その造営・管理には共通の備蓄食料を守る行為に周辺集落の「共／協同性」の実現を通した複次的な同族意識（地縁的な結合）の高揚、集落および「集落群」を構成する（出自）集団の等質化などの要素が付加される。

貯蔵穴専用環濠が築かれる地縁的（複次的）に結合した等質的な集団関係の崩壊は、地域社会にとって大きな画期であり、前期社会から中期社会への大きな変化、すなわち部族的な社会から首長制社会への胎動を示すものと考えられる[サーヴィス 1971、ジョンソン・アール 1987]。三国丘陵地域では、弥生文化着床以降の人口増加は当初、それぞれの「集落群」領域内の人口密度を高める方向で進み、前期末～中期初頭に至っては、拡大した「集落群」領域（人口増加）によって地域社会内のストレス・調整規模が増大し、「集落群」領域の再編が行われるのである。

なお小論では、小地域における環濠をとりまく集団関係の把握・想定に終始した。弥生時代前期社会から中期社会への変化については、第6章で検討する。

## 【註】

(1) 区画施設に関する評価のうち、観念的な区別の表徴[鑑山 1956～59、武末 1990、菅 1999 ほか]はそれぞれの上位概念として捉える事ができよう。居住域圍繞の防衛・防禦施設とする考えには、森・岡崎 1960、都出 1983、佐原 1987、春成 1990、高倉 1991 などがあり、防水施設とする考えは多重環濠の説明によく用いられる[赤木 1992、赤塚 2007]。貯蔵穴を圍繞する環濠は北部九州から山陰地域、松山平野に分布し、「環濠貯蔵区画」(都出 1989)や A 型環濠(居住域圍繞環濠)に対し B 型環濠(貯蔵穴専用環濠)とも呼称され(吉留 1994)、乾燥を目的として掘削されたとする考え(西谷 1970、柳田 1971、都出 1989 など)や対害獣目的とする考え(片岡 2003 など)がある。空閑地を囲む環濠は鳥取県妻木晩田遺跡にみられ、丘陵頂部のわずかな遺構、建物を囲む島根県田和山遺跡などは内部空間に観念的なものを想定したり、環濠を含めたそのものがシンボリックな構造物とする見解もある[松木 2002]。また、小規模環濠の内部空間は家畜の飼育の場でないかとする意見もある(細川 2007)。掘削行為自体に重点をおいた考え方では、集落の維持装置としての環濠(掘削)とするもの(豆谷 2003)や象徴的な施設とするなどがある[吉留 1994]。

(2) 三国丘陵弥生時代集落を対象とした集落論ほかには、(西谷 1971、橋口 1987、田崎 1988. 89. 90. 2009、小田 1990、柏原 1990、2002、片岡 1990. 2003. 2006 a・b. 田中 1991、速水 1994、小澤 2002. 2009、山崎・杉本・井上 2005、山崎・沖田・廣木・柿本 2008) などがある。

(3) 横隈山遺跡 7 地点では円形・方形住居が環濠内に見られる。掘削を実施した円形住居からは中期初頭の土器が出土するが、検出のみの住居もあり詳細は判断できない。上岩田遺跡についても、住居跡の可能性も指摘されている大形方形土坑が環濠内に確認されている。

(4) 遡ること 10 年、板付遺跡環濠調査では、防湿、用水、防禦などの機能のなかで「集落址の存在したと考えられる地域を弧状にとりまいている形からして、防禦用とする考えが一番強い」と報告される[森・岡崎 1960]。

(5) 貯蔵穴を取り囲む環濠の存在について肯定的な言及があるもの、及びその存在を一部認めるものに、酒井・副島 1984、原口 1986、片岡 1988、都出 1989、武末 2002. 2006、山崎純男 1990、禰宜田 1990、高倉 1991、吉留 1994、原・白木・秋成 2000、山崎 2006a・b、濱田 2009 などがある。

(6) 三沢南崎遺跡 3 報告書に掲載された地形分断溝(SD09)出土土器は、上層出土の後期土器である[上田 2009]。今回、未掲載資料をもとに判断した部分が多く、改めて資料公表の機会を持ち、地形分断溝の時期、環濠との同時性／時期差について再検討したい。また、地形分断溝(Ⅲ区 SD09)が湾曲し、別調査区の溝(Ⅰ区 SD05)へつながるという見解もあるが、遺構形状、出土遺物から時期差のあるものと本稿では捉えている。

(7) 三国丘陵(宝珠川以南)では、このような一連の変遷が追える「集落群」の存在が 5 箇所程度確認できる。田崎氏の「遺跡群」に近い捉え方かと思われる[田崎 2008]。三国丘陵総体における弥生時代前期から中期にかけての「集落群」動態については、集団の発展過程を考える上で重要である。稿を改めて、検討したい。

(8) 犠牲者の墓についての認定は難しい側面があることは、先稿で述べたとおりである[山崎 2009b]。また、仮に犠牲者の墓と認定できても、その要因が集団間の争いによるものか、個人的な争いによるものか、儀礼によるものか等の判断はさらに難しくなる。先稿では弥生時代開始期の墓から出土する武器について、その出土状況から、副葬とするもの／体内遺存の可能性が考えられるものを峻別し、その副葬習俗について検討した。弥生時代開始期以後のそれぞれの墓出土武器の詳細な検討は稿を別に改めることにする。

(9) 力武内畑遺跡 7 区井堰構成材の放射性炭素年代測定を行った結果、前期前葉としている考古年代と異なり、炭素 14 年代では前期後半～中期前半という結果が得られている(藤尾・今村・山崎 2009)。年代測定は継続して行われる予定で、最終的な考古年代と炭素 14 年代とのすり合わせについては今後の検討課題である。

(10) 人類学的成果から、拡大した母村からの分村はクランごとの分節化であり、母村において人口が増加したクランの一部成員が他のクラン成員とともに、あるいは単独で土地開発を行い、移住するといったプロセスが想定される(田中 2002)。

(11) 力武遺跡群では、これまで発見されている住居群の時期(板付Ⅰ式併行期)とは異なり、群集する貯蔵穴の時期はⅡa 式古段階のものが多くみられるので、この時期の未発見住居跡が存在する可能性が高い。また、集落経営の基軸となる地形分断の大溝についても、削平を受け、下部のみが検出されているので、板付Ⅰ式併行期段階から、埋没は始まっているが、Ⅱa 式古段階にも一部機能していたものと考えられる。よって、先稿 2005 を一部変更し、この段階においても一定の集落盛行を考慮する。

(12) 玄界灘沿岸地域の弥生前半期集落動態を検討した小沢佳憲氏によれば、玄界灘沿岸の平野域では刻目突帯文期には稲作農耕を生業とするパイオニア的小集落(小規模で不安定な遺跡、タイプⅠ集落)が低地中の微高地に進出し、その後、刻目突帯文期後半から前期末にかけて拠点的な集落(中規模～大規模のタイプⅡ集落)が平野中央部の安定した立地(台地や段丘上)に進出する様相を呈し、拠点的な集落には環濠を有するといった特徴がある(小沢 2000)。三国丘陵周辺地域では、その集落規模や固有地形などに違いはあるが、弥生系集団の進出戦略としては、玄界灘沿岸地域と同様な動きを想定できる。

(13) 先述の通り、筆者らはそれぞれの環濠掘削の時期差を認める点で見解が異なる[山崎・杉本・井上 2005]。

### 第 3 節 弥生時代剥片石器石材の動向～北部九州を中心として～

#### 1. はじめに

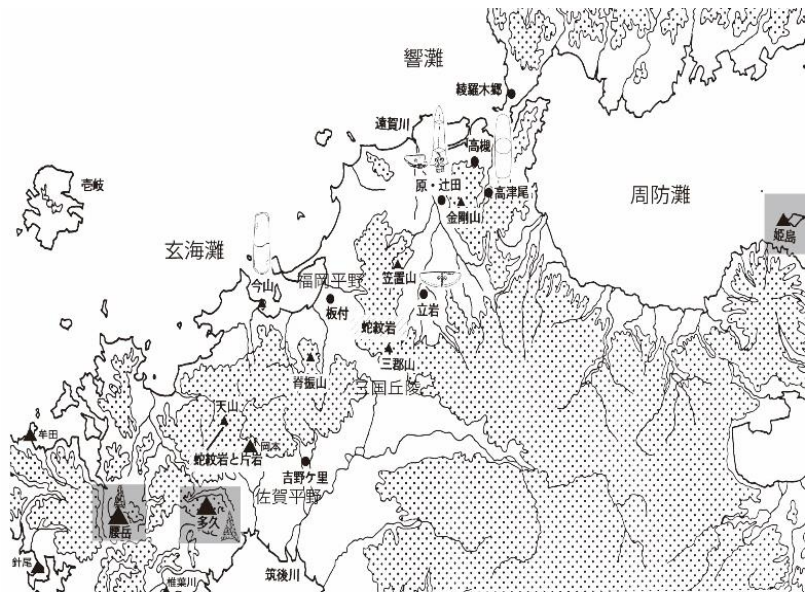
弥生時代の石器研究は当初から大陸系磨製石器に重きが置かれた。弥生文化の成立や大陸や韓半島との交流に大きく関わるからである。縄文時代以来の剥片石器類は主要利器が金属器に変化するまで長く使用され、弥生時代は剥片剥離技術の終焉期であるが、その研究は少ない。

筆者はこれまで、発掘調査の整理段階から剥片石器石材の流通動態を明らかにしようと考え、剥片石器とそのフレイク・チップ等を含めた全点の数量データ化を行い、報告書に掲載するように努めた(山崎 2003, 2004, 2005, 2007a・b など)。その後、筆者は三国丘陵遺跡群の剥片石器石材利用の動向と集落動態を併せて検討した(山崎 2012・2013)。しかし、これらは筆者らの肉眼観察による産地推定であり、大まかな動向を示したに過ぎず、自然科学分析による産地同定を課題としていた。今回、蛍光 X 線分析による産地同定を踏まえ、改めて、考古学的成果との突合せを行いたい。

## 2. 問題の所在

### (1) これまでの研究

北部九州には多くの剥片石器石材産出地があり、旧石器時代から（一部は縄文時代からの利用）弥生時代まで大分県東国東郡姫島と佐賀県伊万里市腰岳の黒曜石と多久市鬼ノ鼻山の安山岩（サヌカイト）の産出地が良質な石材産出地として古くから知られている（第 80 図）。これ以外にも長崎県星鹿半島や佐世保市針尾島産の黒曜石が存在するが、北部九州への供給は縄文時代早～前期を経て急激に減少する（吉留 1993）。



第 80 図 北部九州の弥生時代主要石材産出地（山崎 2012）

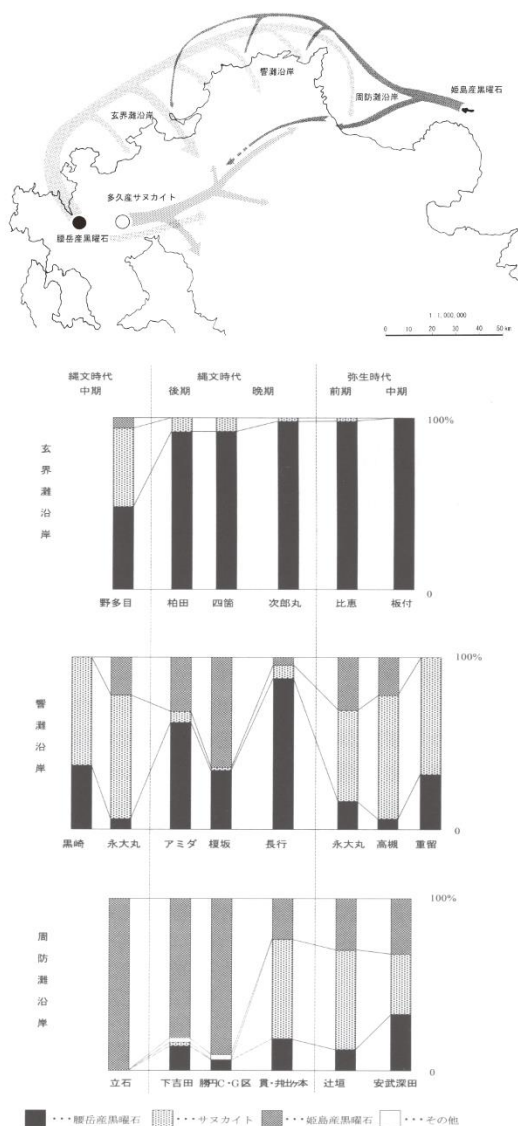
縄文時代の黒曜石利用については、腰岳産黒曜石による剥片剥離技術「鈴桶型刃器技法」の提唱とその検討を始め、古くから蓄積があるが（隈 1960, 杉原ほか 1965）、弥生時代の剥片石器や石材流通に関する研究は少ない。近年、研究が深化している弥生時代磨製石器の石材供給論に比べて後進的である（能登原ほか 2007, 渡部ほか 2011 等）。弥生時代を中心とした剥片石器石材の利用のあり方については、これまで坂本 1997, 吉留 2002b・2004a, 児玉 2005 らの研究からその概要が示されてきた。特に、近年の吉留氏の一連の研究（吉留 1993, 2002a・b, 2004a・b, 2012 ほか）は、縄文時代から弥生時代までを対象とした剥片石器類の技術的側面や原材料入手に始まる供給システムの動向を探るものとして評価されよう。

### (2) 北部九州における剥片石器石材研究の動向

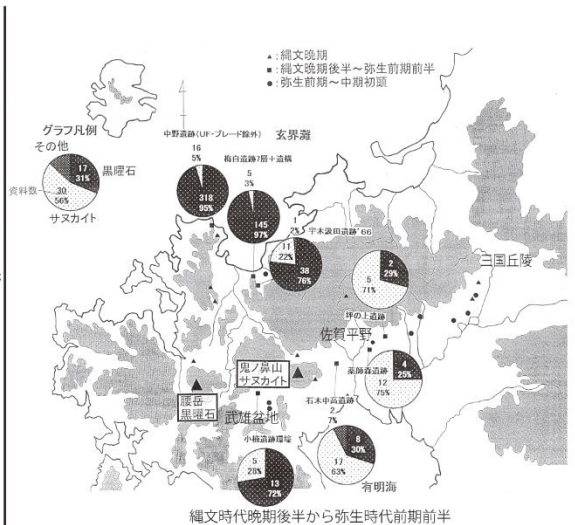
玄界灘沿岸では、縄文時代後期以降、腰岳産黒曜石が第 1 石材として用いられ、弥生時代に至っては、腰岳産黒曜石利用に傾倒を強め、第 2 石材である多久地域産サヌカイトは数%しかない（第 81 図）<sup>（註 1）</sup>。海路を通じた西北九州からの石材の供給システムが予測され、この供給システムは原産地集団による直接的な交易ではなく、海浜部集団が原産地周辺集団と交渉により石材を確保し各地域の集団へ二次的に供給すると位置づけられている（吉留 1998）。

響灘沿岸では、縄文時代後期にかけて姫島産黒曜石の利用が顕在化するが、晩期には衰退し、腰岳産黒曜石が第 1 石材となる（第 81 図）。弥生時代に至っては、腰岳産黒曜石が急減し、サヌカイトが第 1 石材となり、次いで姫島産黒曜石の利用が増えるというように多様な石材利用がうかがえる地域である（吉留 2002b）。

周防灘沿岸から伊予灘沿岸は姫島原産地に近く、縄文時代後期に姫島産黒曜石が 8 ～ 9



第 81 図 北部九州沿岸域における剥片  
石器石材流通(吉留 2002b 改変)



第 82 図 佐賀県域における剥片  
石器石材流通(児玉 2005 改変)

割を占め、主体となっている（第 81 図）。晩期以降は周防灘沿岸南部から伊予灘沿岸は姫島産黒曜石が第 1 石材となっているが、周防灘沿岸北部ではサヌカイトが第 1 石材で 6 割程度を占め、腰岳産黒曜石の利用も 2 割程度見られる。国東半島では姫島産黒曜石が 3 / 4 以上を占めているが、原産地から離れるにしたがって、姫島産黒曜石の割合が減少する。弥生時代になると、サヌカイトの割合が増加し、姫島産黒曜石の割合が減じている。中期になると姫島産黒曜石の利用が再び増加する（吉留 2002b、志賀 2013）。響灘沿岸・周防灘沿岸域・伊予灘沿岸地域での縄文時代晩期以降のサヌカイトの流入は、金山産サヌカイトの割合が高いものと思われる。

佐賀平野では、平野西部にサヌカイトの原産地を有する（第 82 図）。原産地に近い遺跡では、多久地域産サヌカイトが第 1 石材で 3 / 4 以上を占める例もあるが、第 2 石材である腰岳産黒曜石の利用も時期を通して積極的に行われ 1 / 4 前後を占める特徴がある。一方で、唐津地域では腰岳産黒曜石が第 1 石材である。縄文時代晩期後半から弥生時代前期

前半にかけて、腰岳産黒曜石の占める割合が特に高くなり、第2石材である多久地域産サヌカイトは数%となる。また、武雄盆地では、縄文時代晩期後半から弥生時代前期にかけて黒曜石が第1石材で7・8割を占め、第2石材が多久地域産サヌカイトとなっている（児玉 2005）。黒曜石には嬉野（椎葉川）産が含まれている可能性がある。

多久地域産サヌカイト系石材については、佐賀平野を東進するルートが主要なものであり、腰岳産黒曜石については、伊万里湾からの海上ルートや松浦川を北上するルートが想定される（吉留 2003・2004、児玉 2005）。また、武雄盆地や佐賀平野での一定量の腰岳産黒曜石の出土から、佐賀平野を東にぬける腰岳産黒曜石のルートも存在するようだ（児玉 2005）。

三国丘陵地域においては、地理的条件や流通勾配から佐賀平野東部で確認される石材構成（第1石材＝多久地域産サヌカイト3／4前後、第2石材＝西北九州産黒曜石1／4前後）が弥生時代前期の基本構成値（点数で見た場合）と想定できる。加えて、姫島産黒曜石の剥片・碎片類もわずかに存在する。中期には腰岳産黒曜石が第1石材に変化するなど、佐賀平野、福岡平野の動向を受けて時期ごとに石材量や産地が変動する（山崎 2012・2013）。

筑後南部地域（八女地域）では、第1石材が多久地域産サヌカイト、第2石材が腰岳産黒曜石で、これ以外にチャート類と姫島産黒曜石が少量含まれる。サヌカイトが前期～中期中頃を通じて8割前後を腰岳産黒曜石が2割以下を推移する。中期中頃から剥片石器石材量が減少し、中期後半にはサヌカイトが7割に減少し黒曜石が3割に増加する（吉留 2012）。

そして、北部九州において、弥生時代剥片石器類は中期中葉には急激に減少し、中期後葉には、若干の地域差を持ちつつ消滅する（吉留 2002a）。

### （3）問題の所在

以上のように、北部九州の剥片石器石材の動向が明らかになりつつある。しかし、これまでの発掘調査報告書ではこうした剥片石器類、特に石器製作過程で生じた碎片類までを扱ったものは少なく、数量などの客観的なデータを基にした検討を困難にしている。

さらには、これらは基本的に報告者の肉眼観察による石材推定をもとにした、いわば考古学的仮説であり、自然科学分析による検証・裏付けが必要である。

近年、自然科学分析による産地同定も進歩しており分析精度が高くなっている。これまでは多くの場合、エネルギー分散型蛍光X線分析装置（EDS）を用いたものであったが、近年、波長分散型蛍光X線分析装置（WDS）を用いた分析が開発されている。WDSの特徴はエネルギー（波長）分解能が高いこと、微量濃度の元素が検出できるなどの特長を持っている。岩石に含まれる微量元素（Nb, Zr, Sr, Rb, Fe など）から精度の高い産地同定が進められている。

九州島の黒曜石やサヌカイトの産地同定を進めている角縁進によれば、微量元素 Nb, Zr, Sr, Rb 及び Fe により九州内の黒曜石（産地）は区分できる。サヌカイトの場合、産地が多岐にわたり同定が難しいが、Nb, Zr, Sr, Rb などの微量元素成分の違いで大まかな同定は可能で、主成分元素組成（SiO<sub>2</sub> など）に大きな違いが認められることが多く、今後は微量元素組成に主成分元素組成も含めた多元的な同定の必要があるという（角縁 2011）。精度の高い産地同定と考古学的事象と照らし合わせることで、対象とする時期の人間活動の一端が明らかになり、地域間交流や地域間関係について議論を深化させることが



できる。

### 3. 分析方法と対象資料

#### (1) 対象地域と資料

対象地域の三国丘陵付近は福岡平野から二日市地狭帯を通じて、筑後川流域や佐賀平野・有明海沿岸地域に連なり、地勢的に交通や物流の要所にあたる（第 80 図）。三郡山地と背振山地に挟まれた二日市地狭帯付近は結節点として物財・人・情報の集積が進行しやすい地域特性を有している（溝口 2008）。三国丘陵は筑後川にそそぐ宝満川西岸の標高 30～50m の低丘陵地帯で、開析により独立丘陵が発達している。その独立丘陵に立地する弥生集落群出土剥片石器が本検討の対象である。剥片石器の出土は各集落単位で一定量の剥片・チップの出土も見られ、剥片石器石材の集中的管理・剥片石器生産専門化の様相は今のところ見いだせない。先の検討（山崎 2012）では、「母村一分村」関係を軸とした一つの「集落群」（山崎 2010）を構成する力武遺跡群、三沢北中尾遺跡各地点、三沢南崎遺跡の剥片・碎片類の数量データを含む黒曜石 2,946 点、サヌカイト 2,413 点、重量にして黒曜石 8,563.4 g、サヌカイト 15,778.2 g（弥生時代分に限る）を分析対象とした。

今回行った自然科学的分析では、今後の考古学的分析と自然科学的分析の指標とするべく、石核類を主な産地同定分析対象とした（表 1）<sup>（註 2）</sup>。時期ごとにみられる主な石材と少数石材を産地同定資料とした。石核（原石）類は原材の供給システムを考える上で重要な資料であり、石材の特長が捉えやすく、今後の肉眼観察による産地推定の標本資料としても有効である。これらの石材が実際の石器完成品でどの程度みられるかはまた別の問題である。

#### (2) 分析方法

筆者が行った考古学的分析による仮説（山崎 2012・2013）を、自然科学的分析結果を踏まえて検証・再検討する。

考古学的分析では、石材の判別は筆者の肉眼観察によった。なお、主要石材産地の腰岳産黒曜石と多久地域産サヌカイトとは異なる特徴を持つ姫島産黒曜石や多久市周辺以外のサヌカイトなど少数石材については、計測は行ったが産地不明のため、集計から除外した。遺構出土剥片石器類を共伴土器から所属時期を推定し、時期毎の石材割合の変化を数・量ともに検討した。

蛍光 X 線分析は角縁進氏が佐賀大学の波長分散型蛍光 X 線分析装置（リガク ZSX-Primus II）を用い、元素分析を行なった（角縁 2014）。測定はサンプルスピン off、測定資料はφ10mm の Y 型マスクでサンプルホルダーに固定し、X 線ビーム径を 10mm に絞りなるべく資料の平坦面を選び真空中で行った。資料が 10mm 以下のものについてはφ5mm の Y 型マスクを使用し、ビーム径を 1mm で測定した。管球は Rh 管球を用い、管電圧-管電流は測定元素に応じて 50kV-60mA から 30kV-100mA の範囲で行った。

X 線強度から元素組成の計算にはファンダメンタルパラメーター法（FP 法）を用いた。FP 法は蛍光 X 線発生 の原理に基づき、測定条件とファンダメンタルパラメーター（物理定数）を用いて蛍光 X 線強度を理論的に計算し、この理論強度を利用して測定強度から組成を求める方法である。FP 法による定量分析では分析精度を高めるために標準試料を用いて元素感度係数を求めてから未知試料の定量分析を行うことが必要であり、腰岳の黒曜石と多久地域のサヌカイトを FP 法計算のマッチングライブラリーに登録して計

算を行った。

#### 4. 分析

##### (1) 考古学的仮説 (山崎 2012・2013)

考古学的分析では、当該期の黒曜石原産地は佐賀県伊万里市腰岳産黒曜石、姫島産黒曜石にほぼ絞られ、肉眼観察でも比較的判別が容易であるという前提条件があった。安山岩(サヌカイト)系石材は佐賀県多久市鬼の鼻山麓や老松山等の背振山南麓一帯に産出し、北部九州を中心に広域に供給されている。それらを多久地域産安山岩(サヌカイト)として一括して取り扱い、様相を提示した。

##### 縄文時代晩期 (第 83 図)

三国丘陵周辺および筑後川上流域は、縄文時代晩期前半まで腰岳産黒曜石が第 1 石材となっており、鈴桶型技法の隆盛による腰岳産黒曜石の供給量の拡大が窺える<sup>(註 3)</sup>。晩期中頃以降、突帯文期にかけては、鈴桶型技法の衰退や剥片剥離技術の後退等、目的剥片の生産量低下がみられ、不要な碎片や残核類の増加がみられる。それとあいまって、多久地域産サヌカイトが第 1 石材へと推移していく。姫島産黒曜石は縄文時代晩期を通じて、各遺跡で数点の出土が確認される程度である。

##### 弥生時代前期から中期 (第 84・85 図)

黒曜石と安山岩(サヌカイト)は素材の特性上、製品では黒曜石が石鏃などの小型品が多く、サヌカイトは石鏃からスクレイパーなどの中型品まで用いられている。器種による石材選択は縄文時代晩期でも同様の傾向がある。剥片についても黒曜石よりもサヌカイトのものが大きく、重量がある。点数と量のグラフから 1 点当たりの重量が黒曜石よりもサヌカイトが重いことを示している。

まず、時期ごとに全体の剥片石器量の変動が窺える。これは、未発見集落も考慮すべきではあるが、対象とする「集落群」の動態と密接に関連している(図 4)。板付Ⅰ式期に段丘裾に集落が出現し、その後中央域に集落群が移動、板付Ⅱa 期新段階で盛行期を迎える。板付Ⅱb 期新段階にはその中央域集落群がやや衰退し北部域に移動、板付Ⅱc 式～城ノ越式期にかけてその北部域集落群が盛行し、須玖Ⅰ式期以降には集落が拡散・衰退する。石材量のピークが 2 回認められるが、板付Ⅱa 式期新段階からⅡb 式古段階のピークは、中央部域集落の盛行期に相当し、板付Ⅱc 式～城ノ越式のピークは北部域集落の盛行期に相当する。それぞれの土器編年の 1 時期の年代幅を考慮する必要があるが、それを見積もっても、須玖Ⅰ式以降は剥片石器自体の減少が著しく、当地域では須玖Ⅱ式期前半まで剥片石器は姿を消すようである。

次に、時期別の石材種の動態であるが、板付Ⅰ式期では腰岳産黒曜石 31 点(55.4%)・139.8 g(36.1%)、多久地域産サヌカイト 25 点(44.6%)・247.3 g(63.9%)となる。後続する時期に比べて腰岳産黒曜石の割合が高く、点数では黒曜石がサヌカイトを上回る<sup>(註 4)</sup>。板付Ⅱa 式期古段階では腰岳産黒曜石 12 点(52.2%)・25.6 g(6%)、多久地域産サヌカイト 11 点(47.8%)・383.4 g(94%)となる。

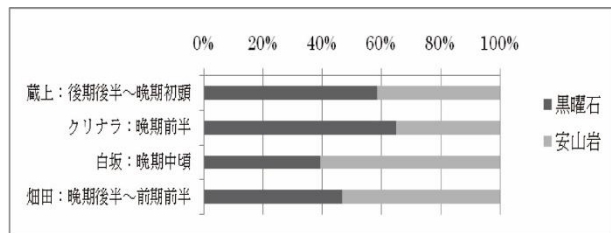
板付Ⅰ式～Ⅱa 式期にかけては、定型石器類は腰岳産黒曜石製石鏃、多久地域産サヌカイト製石鏃・石鏃未成品・スクレイパーが数点見られるが、不定形剥片・碎片、小石核が多くを占めている。石器製作は窺えるものの、資料数が少なく、具体的様相が不明である。

板付Ⅱa式期新段階では、腰岳産黒曜石 92 点 (23.6%)・327.4 g (9%)，多久地域産サヌカイト 298 点 (76.4%)・3,155.1 g (91%) となる。サヌカイトの石材量は 3 kg を超え，全体に占める割合も点数で 3/4 以上、重量で 9 割を超え，豊富な流通が看取できる。黒曜石製石鏃 7 点・石匙 1 点，多久地域産サヌカイト製石鏃 39 点，石匙 1 点，石錐 1 点，スクレイパー 33 点等がみられるが、ほとんどが不定形剥片・碎片類である。少数石材では姫島産黒曜石製石鏃や剥片がわずかにみられ，この時期以降，ハリ質安山岩製石錐や石鏃・剥片類が顕著に確認できるようになる。

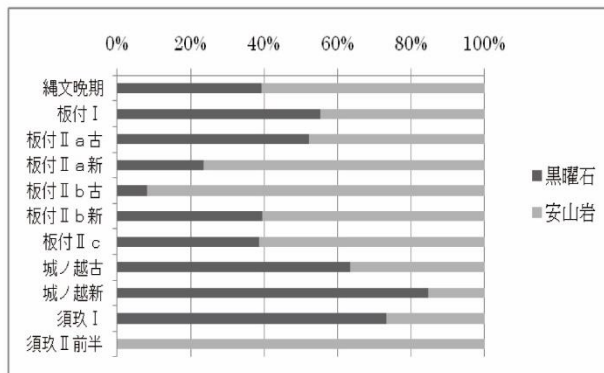
板付Ⅱb式期古段階では，腰岳産黒曜石 63 点 (8%)・178.9 g (6%)，多久地域産サヌカイト 717 点 (92%)・3017.3 g (94%) となる。この時期，多久地域産サヌカイトが点数，重量とも 9 割を超え，流通量・利用割合が高くなっている。腰岳産黒曜石製石鏃 4 点，多久地域産サヌカイト製石鏃 15 点・石匙 2 点・石錐 2 点・スクレイパー 21 点等がみられるが、ほとんどが不定形剥片・碎片類である。姫島産黒曜石製石鏃 1 点確認できる。

板付Ⅱc式期新段階では，腰岳産黒曜石 83 点 (40%)・227.1 g (21%)，多久地域産サヌカイト 127 点 (60%)・853.5 g (79%) となる。この時期には，多久地域産サヌカイト量の減少により，剥片石器石材全体量の減少を引き起こし，乗じて腰岳産黒曜石の割合が高くなっている。腰岳産黒曜石製石鏃 4 点，多久地域産サヌカイト製石鏃 11 点・石匙 2 点・石錐 4 点・スクレイパー 4 点等がみられるが，ほとんどが不定形剥片・碎片類である。腰岳産黒曜石は石鏃生産に専ら用いられる傾向があるが，わずかな量である。

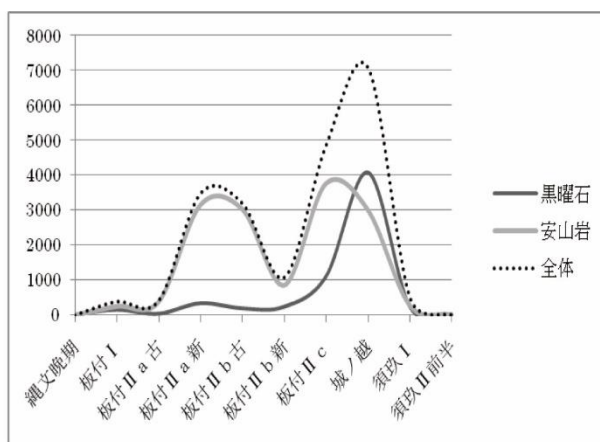
板付Ⅱc式期では，腰岳産黒曜石 481 点 (38.5%)・1,104.3 g (23%)，多久地域産サヌ



第 83 図 縄文晩期の剥片石器石材の変化 (点数)



第 84 図 三国丘陵の剥片石器石材の変化 (上: 点数 下: 重量)



第 85 図 三国丘陵の剥片石器石材量の変化

カイト 767 点 (61.5%)・3,762.7 g (77%) となる。この時期に、全体の流通量がピークを迎える。前時期との割合変化はほとんどない。腰岳産黒曜石製石鏃 12 点・石錐 2 点、多久地域産サヌカイト製石鏃 23 点・石匙 5 点・石錐 5 点・スクレイパー 37 点等がみられるが、ほとんどが不定形剥片・碎片類や小石核である。姫島産黒曜石製石鏃 2 点・碎片少数がみられる。

城ノ越式期古段階では腰岳産黒曜石 230 点 (63%)・477.3 g (25%)、多久地域産サヌカイト 133 点 (37%)・1,404.1 g (75%) となる。多久地域産サヌカイト石鏃 5 点、石匙 2 点、石錐 2 点、スクレイパー 15 点等がみられるが、ほとんどは不定形剥片、碎片類や小石核である。特に腰岳産黒曜石は、剥片・碎片、小石核のみの確認であった。城ノ越式期新段階では腰岳産黒曜石 438 点 (85%)・1,329.1 g (72%)、多久地域産サヌカイト 80 点 (15%)・521.8 g (28%) となる。腰岳産黒曜石製石鏃 5 点・石錐 1 点、多久地域産サヌカイト製石鏃 5 点・石匙 1 点・スクレイパー 1 点等がみられるが、ほとんどが不定形剥片・碎片類や小石核である。城ノ越式期を細分した場合、城ノ越式期の新段階において、腰岳産黒曜石が点数・重量ともに第 1 石材となる<sup>(註 5)</sup>。

須玖 I 式期では、腰岳産黒曜石 112 点 (73%)・216.9 g (44%)、多久地域産サヌカイト 41 点 (27%)・276.8 g (56%) で全体量の減少が著しい。この減少傾向は集落群の衰退期とも関連する。腰岳産黒曜石製石鏃 1・石錐 1、多久産サヌカイト製石鏃 2・スクレイパー 1 などが少数みられる程度となり、ほとんどは石核・剥片類である。

須玖 II 式古段階（前半）で、多久地域産サヌカイト 1 点 (100%)・4 g (100%) のみとなる。碎片のみの出土であり、定型石器は確認できていない。

全時期を通して、いずれの石材であっても不定形剥片や碎片類・小石核などが多数を占めており、定型石器類は 1 割程度である。

## (2) 自然科学的分析結果

黒曜石の SiO<sub>2</sub>% は 71.3～77.1% で、主成分元素では番号 17 が CaO=1.36% と他に比べて特に高い値を有し、番号 7 も CaO=1.00% とその次に高い値である。逆に番号 18 は CaO=0.46% と低い値を示す。これら 3 資料は微量元素組成でも異なった特徴を有し、番号 7 は Sr=140ppm, Zr=117ppm と非常に高い値を示し、番号 17 と 18 では Rb に乏しく Zr に富む値を有する。Rb-Sr-Zr の含有量で百分率を取り、三角図にプロットした（第 86 図）。同図には近隣の産地黒曜石の化学組成領域を同時にプロットしてある。この図からわかるように、番号 7 は熊本県小国産黒曜石の組成に近く小国産であると推定される。また番号 17 は大分県姫島産黒曜石、番号 18 は佐賀県嬉野産（椎葉川）黒曜石である。その他の黒曜石は 1 資料（番号 28）がやや Rb が高い傾向があるが、すべて佐賀県腰岳産黒曜石であることが化学組成から同定できる。

今回測定した安山岩の SiO<sub>2</sub>% は 65.7～72.3% であり、デイサイトから流紋岩の間の幅広い化学組成である。主成分元素組成では、番号 31 や 34 の CaO 含有量が高く、それぞれ CaO=4.49%, CaO=4.24% である。また番号 32 は MgO に乏しい (0.38%)。微量元素組成では、番号 31 が Rb=63ppm と Rb の含有量が低く、Zr=9ppm と Zr 含有量が極端に低い。Rb-Sr-Zr の含有量で百分率を取り、三角図にプロットすると（第 87 図）、佐賀県多久（鬼ノ鼻山）の領域にプロットされるのが番号 16, 19, 37, 45, 46 の 5 資料であり、佐賀県岡本（老松山）の領域にプロットされるのが、番号 3, 9, 11, 12, 20, 29, 31, 35,

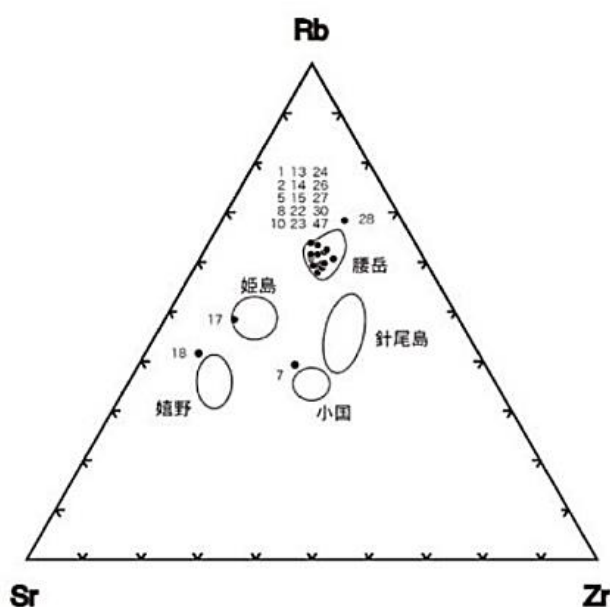
36, 38, 40, 41, 43, 44 の 14 資料である。番号 31 は阿蘇山の溶結凝灰岩である。その他の安山岩はこれまで報告のあるサヌカイトの化学組成とはいずれも一致せず化学組成から産地同定を行うことが出来なかった。

以上のように、三国丘陵地域では黒曜石では腰岳産、大分県姫島産、熊本県小国産、佐賀県嬉野産（椎葉川）、安山岩（サヌカイト）では佐賀県多久産（鬼ノ鼻山）、佐賀県岡本産（老松山）がみられる。また、阿蘇山の溶結凝灰岩も含まれていた（角縁 2014）。

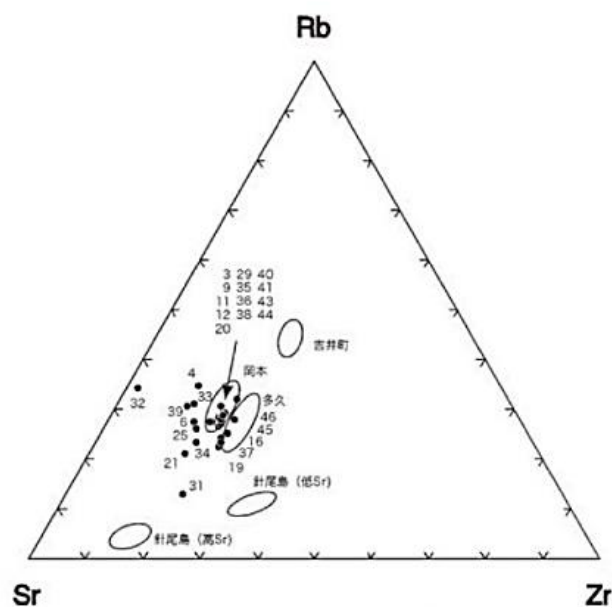
### （3）考古学的分析の検証・課題

肉眼観察で推定した腰岳産黒曜石と多久地域産サヌカイトについては自然科学分析結果と齟齬はほとんどない。腰岳産黒曜石は漆黒色で見分けが付きやすいため、肉眼観察でも比較的容易に判断できる。腰岳産とは異なる黒曜石の少数石材は小国産、嬉野産と同定された。小国産黒曜石は漆黒色であるが、白色の球顆を多く含む。フィッシャーの入り方が腰岳産黒曜石とは異なる特徴がある。嬉野産黒曜石（椎葉川）は半透明色で乳白色～灰白色、縞状を呈している。三国丘陵で確認されたものは礫面がかなりローリングを受けている。その他にも、今回の分析では確認されなかったが、肉眼観察では腰岳産と似た特徴を持つ長崎県星鹿半島牟田産黒曜石や青灰色～暗灰色を呈する長崎県伊万里市市針尾島産黒曜石にも注意が必要である。これらの少数石材の石器（未成品・完成品）はにわかには抽出できないものの、わずかながら製品化された可能性はあると思われ、今後、注意して探索しなければならない。

安山岩（サヌカイト）については、蛍光 X 線分析でも現在は同定されていないものも存在する。また、肉眼観察では多久地域産サヌカイトと異なる玻璃質玻璃質の安山岩についても、分析では多久産と同定された。多久地域においても、複数地点の産出地がうかがえよう。さらに現在の蛍光 X 線分析では、多久地域産サヌカイトは多久と岡本の近隣産出地間での区別が出来る。将来的には、そのなかでもさらに細かい石材利用の復原が可能となる。考古学側でも背振山系南麓一帯には旧石器時代の岡本遺跡・老松山遺跡（小城市三日



第 86 図 黒曜石の Rb-Sr-Zr 図



第 87 図 安山岩の Rb-Sr-Zr 図

第7表 蛍光X線分析資料

番号	遺跡名	出土遺構	種別	器種	法量 (cm)				遺構時期	備考
					長さ	幅	厚さ	重さ		
1	三沢	旧表土	黒曜石	剥片(小)	2.40	3.80	0.80	6.10	中期初頭か	一部自然面
2	三沢	旧表土	黒曜石	剥片(小)	2.30	2.10	0.70	3.30	中期初頭か	一部自然面
3	三沢北中尾1	1号溝 2～3区間ベルト下層	安山岩(サヌカイト)	石核(剥片)	3.50	4.25	1.70	22.70	前期後半	一部自然面
4	三沢北中尾1	1号溝 C区 上層	安山岩(サヌカイト)	石核(剥片)	5.24	4.36	1.70	44.90	前期末～中期初頭	一部自然面 風化
5	三沢北中尾1	1号溝 D区 上層	黒曜石	石核(礫)	4.90	3.17	2.61	50.00	前期末中心	一部自然面
6	三沢北中尾1	1号溝 D区 上層	ハリ質安山岩	石核(剥片)	5.18	3.59	1.25	25.10	前期末中心	
7	三沢北中尾1	1号溝 D区 上層	黒曜石	石核(礫)	3.89	2.82	1.25	13.30	前期末中心	一部自然面
8	三沢北中尾1	1号溝 D区 上層	黒曜石	石核(礫)	3.50	2.47	2.55	18.70	前期末中心	一部自然面
9	三沢北中尾1	1号溝 D区 上層	安山岩(サヌカイト)	石核(剥片)	5.06	3.94	2.84	50.00	前期末中心	一部自然面
10	三沢北中尾1	1号溝 F区 上層	黒曜石	石核(礫)	4.63	3.87	2.57	62.20	中期前半中心	一部自然面
11	三沢北中尾1	1号溝 F区 上層	安山岩(サヌカイト)	石核(素材剥片)	6.70	9.40	2.80	169.90	中期前半中心	風化
12	三沢北中尾1	1号溝 F区 下層	安山岩(サヌカイト)	石核(剥片)	5.37	4.11	2.88	61.70	前期後半	一部自然面
13	三沢北中尾2b	1号溝 B区	黒曜石	石核(礫)	7.61	4.84	2.87	80.10	中期初頭～前半	
14	三沢北中尾2b	1号溝 B区	黒曜石	石核(礫)	5.82	4.77	4.12	67.40	中期初頭～前半	
15	三沢北中尾2b	119号土坑	黒曜石	石核(礫)	7.56	4.79	3.15	108.30	前期末～中期初頭	一部自然面
16	三沢北中尾2b	203号土坑	安山岩(サヌカイト)	石核(素材剥片)	7.00	4.70	4.60	180.00	前期後半	一部自然面
17	三沢北中尾2b	323号土坑	黒曜石(姫島産)	打製石鏃凹基式	2.60	1.50	0.40	1.00	縄文	
18	三沢北中尾4e	10号土坑	黒曜石	石核(礫)	6.80	3.80	4.60	81.70	前期中頃	一部自然面
19	三沢北中尾4e	63号土坑	ハリ質安山岩	石核(礫)	5.70	4.10	2.80	75.90	前期後半	一部自然面
20	三沢北中尾4e	131号土坑	安山岩(サヌカイト)	石核(剥片)	8.79	6.22	1.99	98.90	前期中頃	風化
21	三沢北中尾7	20号貯蔵穴 下層	安山岩(サヌカイト)	石核(素材剥片)	9.82	4.35	2.28	125.20	前期中頃	
22	三沢蓬ヶ浦3c	33号貯蔵穴	黒曜石	石核(礫)	4.11	2.70	2.50	25.90	中期初頭	一部自然面
23	三沢蓬ヶ浦3c	24号貯蔵穴	黒曜石	石核(礫)	4.32	3.10	2.43	39.00	前期末	一部自然面
24	三沢蓬ヶ浦3c	11号貯蔵穴	黒曜石	石核(礫)	4.08	2.18	1.88	19.40	前期末	一部自然面
25	一ノ口 I	D83	安山岩(サヌカイト)	石核(素材剥片)	7.06	5.85	3.84	192.80	前期中頃	一部自然面
26	一ノ口 I	D143覆土	黒曜石	原石(小礫)	5.83	3.59	1.90	50.30	中期初頭	
27	一ノ口 I	D143覆土	黒曜石	原石(小礫)	5.93	4.10	3.53	48.40	中期初頭	
28	一ノ口 I	D143覆土	黒曜石	石核(礫)	5.86	4.21	2.45	57.40	中期初頭	
29	一ノ口 I	D340	安山岩(サヌカイト)	石核(素材剥片)	8.32	5.57	2.81	97.20	前期末	一部自然面
30	一ノ口 I	D340	黒曜石	石核(礫)	3.82	2.98	2.18	17.50	前期末	一部自然面
31	一ノ口 I	D364	安山岩(サヌカイト)	石核(素材剥片)	9.37	5.84	4.37	221.30	前期後半	一部自然面
32	一ノ口 I	D433	安山岩(サヌカイト)	石核(礫)	5.74	4.06	3.27	69.80	～中期初頭	一部自然面
33	力武内畑7	1号住居 上層	安山岩(サヌカイト)	石核(礫)	4.96	4.59	2.76	50.90	前期前半	一部自然面
34	力武内畑7	1号住居 南半下層	安山岩(サヌカイト)	石核(剥片)	6.43	3.39	1.71	34.70	前期前半	一部自然面
35	力武内畑7	1号住居内 104号土坑	安山岩(サヌカイト)	石核(剥片)	6.73	4.45	2.78	102.30	前期前半	一部自然面 風化
36	力武内畑7	1号住居内 104号土坑	安山岩(サヌカイト)	石核(剥片)	4.30	4.20	1.89	43.10	前期前半	一部自然面
37	大保模枕2A-1	1号住居 上層セクションベルト内	安山岩(サヌカイト)	石核(礫状)	5.06	4.22	4.35	103.10	前期中頃	一部自然面
38	大保模枕2A-1	1号住居 下層南東部	安山岩(サヌカイト)	石核(素材剥片)	7.37	6.73	2.36	119.40	前期中頃	一部自然面
39	大保模枕2A-3	3号溝 C区中層	安山岩(サヌカイト)	石核(礫)	4.20	5.20	3.16	63.10	前期後半	一部自然面
40	大保模枕2A-3	3号溝 C区中層	安山岩(サヌカイト)	石核(礫)	3.90	4.30	3.50	54.90	前期後半	一部自然面
41	大保模枕2A-3	3号溝 D-Eベルト上層	安山岩(サヌカイト)	石核(剥片)	5.70	5.50	2.60	70.30	前期中頃	一部自然面
42	大保模枕2A-3	3号溝 E-Fベルト上層	チャート	石核(剥片)	6.50	6.70	2.18	85.80	前期後半	
43	大保模枕2A-4	3号溝 A区最下層	安山岩(サヌカイト)	石核(剥片)	4.40	4.90	3.31	86.60	前期中頃	
44	大保模枕2A-4	1号住居 貼床内	安山岩(サヌカイト)	石核(素材剥片)	10.50	8.20	3.07	170.00	前期末	
45	大保模枕2A-4	2号住居	安山岩(サヌカイト)	石核(素材剥片)	10.13	8.36	2.45	228.90	前期前半	
46	大保模枕2B	1号住居 上層	安山岩(サヌカイト)	石核(礫)	5.80	4.40	3.90	90.50	前期前半	一部自然面
47	小板井屋敷5B	1号祭祀土坑	黒曜石	石核(礫)	7.86	4.40	3.38	137.10	中期前半	
[凡例] 板付Ⅰ式:弥生時代前期初頭 板付Ⅱa式:前期前半 板付Ⅱb式:前期後半 板付Ⅱc式:前期末 城/越式:中期初頭 須玖Ⅰ式:中期前半 須玖Ⅱ式:中期後半										



についてはまだ研究が進んでいないが、細かい産地推定が可能となりつつあり、少数石材も含めた分析を考古学側でも準備しておく必要がある。

以上のように、特に安山岩（サヌカイト）については今後も自然科学と考古学の共同研究、原産地の探索・研究が進められるべきである。肉眼観察においては、しばらくは厳密な意味での区別を避け、多久と岡本を含めた名称：多久地域といった呼称が望ましい。

さて、先の考古学的分析・仮説では少数石材には触れるのみであったので、今回、少数石材にあらためて着目しグラフを作成した（第 88 図）。

第 1・第 2 石材は腰岳産黒曜石と多久地域産サヌカイトがある。少数石材は姫島産黒曜石、ハリ質安山岩が主要な

もので、これに小国産黒曜石や嬉野産黒曜石がわずかながら確認される。ハリ質安山岩は多久地域産という同定結果があるが、肉眼観察で区分が出来るため、将来的な展望を含めて、少数石材として検討する。グラフでは第 3・4 石材を含めて他石材としている。

第 3・4 石材は時期を通じてわずかながら認められ、微増する時期にはハリ質安山岩の割合が増加している傾向が窺える。

微増する時期は板付Ⅱa 式新段階と城ノ越式期以降で板付Ⅱa 式新段階では少数石材のほとんどがハリ質安山岩であり、姫島産黒曜石製石鏃 1（0.6 g）、碎片 1（0.3 g）がわずかに存在する。ハリ質安山岩は石鏃・スクレイパーなどで確認できる（図 11）。この時期は多久地域からのサヌカイト流入量が増加する時期であり、ハリ質安山岩は多久地域の異なる産出地からその流通網にのって入ってきた可能性も考えられる。城ノ越式期でも、第 3 石材がハリ質安山岩で、第 4 石材が姫島産黒曜石であることに変わりはない。姫島産黒曜石製石鏃未成品 1・石鏃数点 4、ハリ質安山岩製石錐・石鏃・スクレイパーなどが確認できる（第 88 図）。

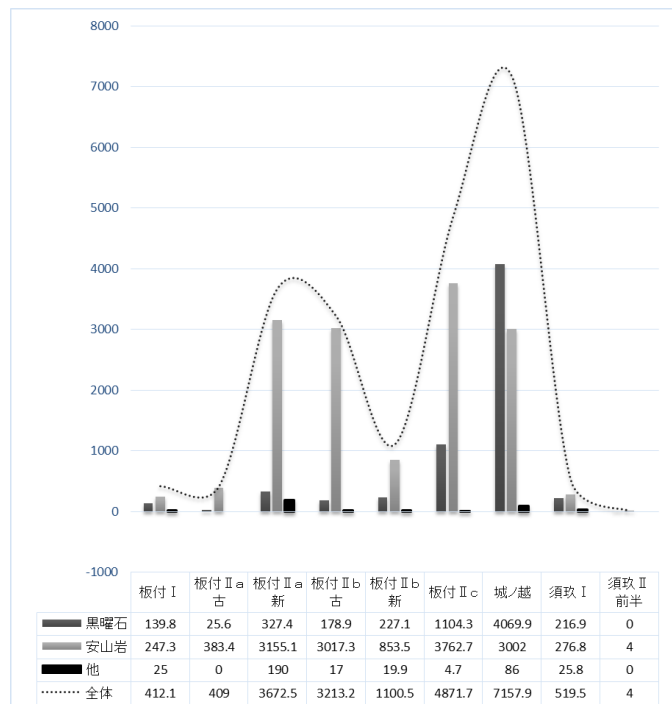
また、全体の剥片石器石材流通量が落ち込み、集落移動期には第 3 石材も同様に減少していることから、これらの石材が主要石材の補完的石材として用いられたことを必ずしも示していない。全体の流通量と同様の推移を示す。

今後も、ハリ質安山岩の同定例を増やす必要があるが、仮に多久地域における複数産出地の開発が行われていたとすると、産出地付近集落や消費地集落における動向など、より細かい人間活動の一端や社会変化を知ることができる可能性を多く持っている。

#### IV. 考察

##### （1）自然科学的分析結果からみた三国丘陵の剥片石器石材の動向

三国丘陵付近の剥片石器石材は地勢的特徴からも窺えるように、腰岳産黒曜石、多久地域



第 88 図 三国丘陵の剥片石器石材（少数石材）の推移

産サヌカイト、嬉野産黒曜石、姫島産黒曜石、小国産黒曜石の石材など多様な様相を示している。安山岩（サヌカイト）については、現在知られる産出地では同定できないものもあるので、さらに多様な利用石材種が存在すると思われる。三国丘陵周辺での縄文時代晩期前半までの腰岳産黒曜石利用の主体性は、鈴桶型技法の成立とともに高まった腰岳産黒曜石石材利用に起因するものあり、晩期後半以降の多久地域産サヌカイト系石材の割合増加は技法の低下やそれに起因した腰岳産黒曜石石材の流通量低下による（図5）。弥生時代が始まる段階では、腰岳産黒曜石の割合が若干増加するが、これについては、周辺や後続の状況から福岡平野側からの働きかけによるものと考えられる（図6・7）。本地域における弥生文化の到来の具体像にも関連しよう。その後、多久地域産サヌカイトが第1石材で推移し、板付Ⅱb式古段階では数量ともに9割を超えるようになるものの、板付Ⅱb式新段階では多久地域産サヌカイト量のみが急減し、剥片石器石材量の全体量の低下がおきる（第85図）。この変化については「集落群」の一時的な衰退期にもあたり（山崎 2010）、この時期の佐賀平野との関係性にも注意が必要である。その後、板付Ⅱc期には回復し基本構成値に近くなるが、城ノ越式期においては第1石材が腰岳産黒曜石に移る大きな変化がみられる。城ノ越期における腰岳産黒曜石量の増加は、福岡平野からの影響が大きく、福岡平野では中期以降、剥片石器の利用が急速に落ちるので、腰岳産黒曜石の供給システム・経路は保持された状態での流通余剰品の発生があり、二日市地狭帯付近、三国丘陵地域に集積される姿が考えられる。

## （2）弥生時代中期における剥片石器の終焉

### ～余剰品としての黒曜石石材の流通と技術的背景～

北部九州では、縄文時代後期中葉以降、鈴桶型技法の成立とともに、腰岳産黒曜石の需要・供給が高まり、規格性の高い剥片剥離技術が発達し、剥片鏃や縦長剥片を利用した石器類やつまみ形石器が増加する。後期後半には技術の後退とともに流通量の減少や流通範囲の縮小がみられ、晩期に至っては技法の衰退、新たな不定形剥片を生産する剥離技術に推移する（吉留 1993、神川 2008）。当地域周辺でも、鈴桶型技法とそれと関連する腰岳産黒曜石の流通の影響の推移が窺える。

三国丘陵の弥生時代前期～中期の「集落群」では多久地域産サヌカイトの板状素材や剥離初段階の石核が出土している。板状素材は1辺が10 cm前後、平面形が方形～多角形で厚さが3～5 cm前後である。なお、サヌカイト製石器で最も大きい搔器、削器は1辺8 cm前後の方形～多角形で厚さ3 cm以下の板状をなしている。中・小型剥片を目的とする剥片も同様の大きさであり、こうした板状素材を中心として原材を入手していた可能性がうかがえる。

黒曜石は石核や自然面の形態からみて、1辺3～5 cmの角礫状の原石が用いられている。縄文時代晩期前半までは同じ腰岳産黒曜石でも一辺6～7 cm以上の大きい原石が用いられ、晩期後半以降、小形の原石に変化している（吉留 2002）。弥生時代における石材利用はこうした延長にあたる。

弥生時代の剥片剥離技術は、黒曜石とサヌカイトでそれぞれ異なるが、連続的な定形剥片を獲得する剥離技術は認められない。黒曜石は多面体石核や分割礫から打面調整を伴わず、不定形剥片を連続して剥離する。サヌカイトは板状素材を直接、もしくは石核を不定形切

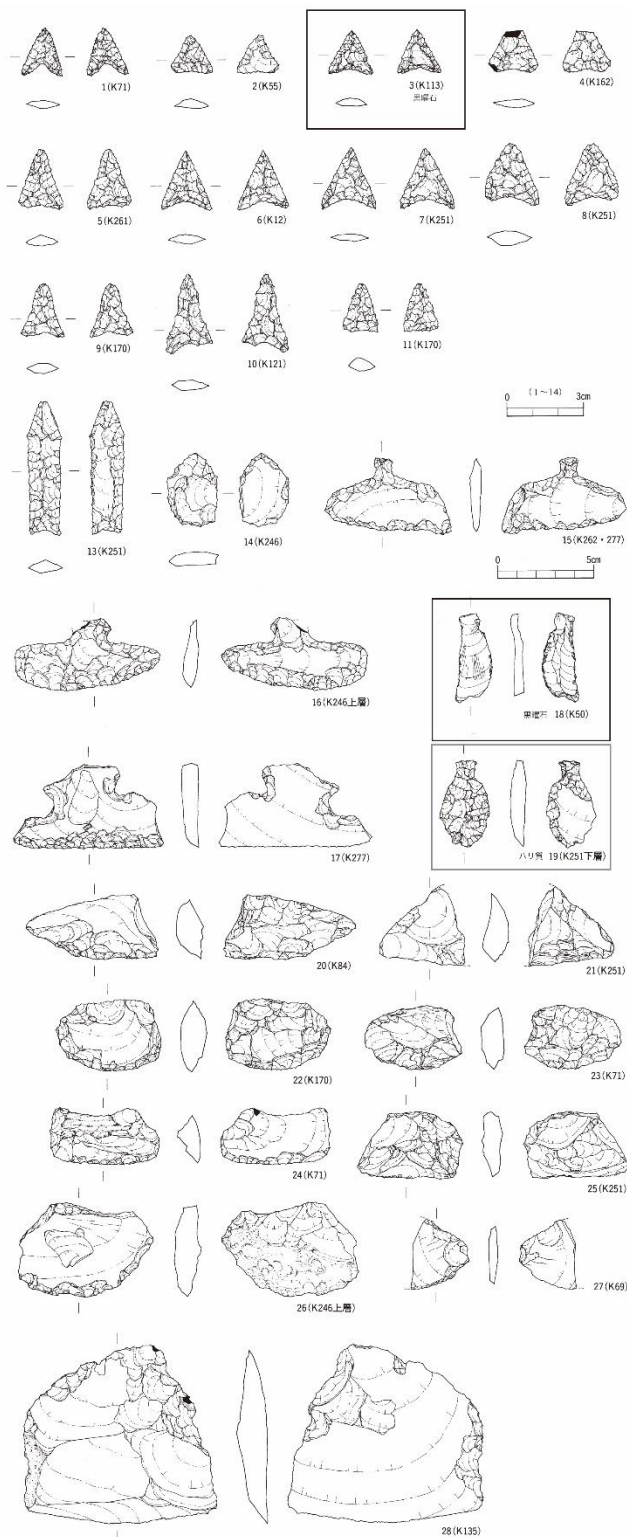
削器に利用するものがあり、厚いものが多い。大きめの剥片を素材とし、縁辺から石理を利用し横長の剥片を創出するものがみられる。

なお、前期を通じて剥片石器とその生産に関わる石核・破片・碎片の比率に変動は少ないが、中期に至って黒曜石素材流入量が増加するものの、製品の量は大きくは変わらない。

三國丘陵地域には石材流入量のピークが大きく2回伺えた。最初のピーク板付Ⅱa式新段階では佐久地域産安山岩の流入が増加することによるピークである。第2のピークは玄界灘沿岸から流入した黒曜石石材の増加によるピークである。福岡平野では先に剥片剥離技術の衰退・剥片石器自体の減少が起っており（吉留 2008）、その余剰品が二日市地峡帯をこえて、当地域にもたらされたと考えられる。

図面で示したのは、前半の板付Ⅱa式新段階からⅡb式古段階における貯蔵穴出土資料である（第89図）。腰岳産黒曜石は石鏃・石匙で確認でき、同器種群中小型の類に属している。これは獲得できる原石、剥片など石材の特徴にも規定されるものである。また、玻璃質安山岩製石匙も確認できる。そのほか、多久産石材の安定した利用が確認できる。

次に城ノ越式段階の定形剥片石器をみてみよう（第90図）。腰岳産黒曜石は石鏃・石鏃未成品・石錐であり、いずれもサヌカイト製の同器種よりも小型となっている。サヌカイトではハリ質安山岩の利用も確認できる。搔・削器では小型化が進んでいる。原材となる大型の剥片



第89図 三國丘陵の剥片石器1（板付Ⅱa新段階～Ⅱb古段階）

自体が少なくなっていることが窺える。黒曜石石材流通量は増えているにも関わらず、実質の製品量はそこまで増加傾向を伴っていないことから、黒曜石石材は福岡平野での余剰品が二日市地峡帯を超えて多く流入することになったが、当地域においても技術的衰退とも相まって余剰している状況がうかがえるのである。城ノ越式期以降、特に須玖式におい

ても、黒曜石石材は見られるが、その製品は確認されない。剥片石器の終焉は剥片剥離技術の衰退であり、原材は最後まで残るが、製品化が行われない状況が想定できる。

## おわりに

### ～自然科学的分析と融合した剥片石器石材研究の必要性和その可能性～

これまでに、北部九州における弥生時代剥片石器石材の利用についての検討が少なからず蓄積され、考古学的観察のみでも大枠の動向は捉えることが可能である。しかし、当時のより

具体的な人間活動を復元するためには、肉眼観察で進められた石材産地の推定を出来るだけ多くの地域で蛍光 X 線分析による科学的裏付けを行い、少数石材の動向にも着目したに剥片石器石材流通の復元が必要である。

将来的展望としては、特に弥生時代だけに限ったことではないが、原産地および周辺の集落遺跡と消費地遺跡の様相をそれぞれ明らかにした上で、剥片石器石材供給体制論が成り立つと考える。現在、石器原産地研究会が自然科学と考古学を併せた活動を行ない、対象とする時代を超えた薄片石器研究が進みつつある。弥生時代は薄片石器技術の終焉期にあたり、利器が石器から鉄器へ大きく変わる時代であるという位置づけの上で、剥片剥離技術総体の研究が望まれる。

## 【註】

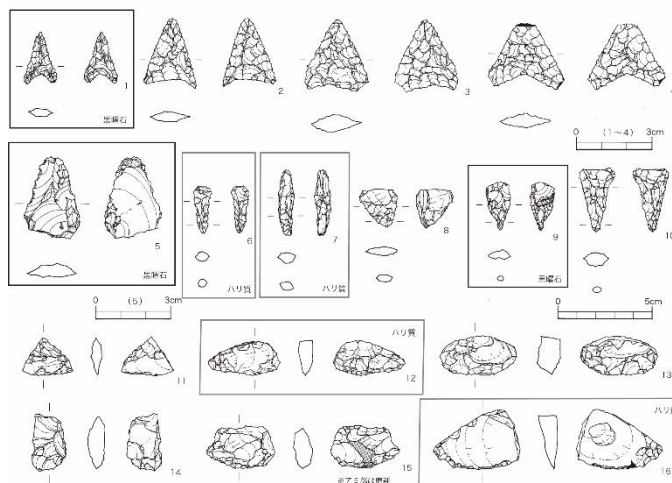
(1) 組成中で最も多い石材を「第 1 石材」、二番目に多い石材を「第 2 石材」と呼称する。

(2) 先の検討遺跡に加えて三沢、一ノ口遺跡、大保横枕遺跡 2、小板井屋敷遺跡 5 の出土資料を追加した。

(3) 佐賀県鳥栖市蔵上遺跡の縄文時代後期後半～晩期初頭の資料 (565 点)、福岡県朝倉市杷木町クリナラ遺跡の縄文時代晩期前半資料 (177 点)、佐賀県基山町白坂遺跡の縄文時代晩期中頃資料 (51 点)、福岡県朝倉市杷木町畑田遺跡縄文時代晩期後半～弥生時代前期前半資料 (122 点) から剥片石器石材構成を分析した。報告書からのデータ抽出であるので、必ずしも全点データではない。白坂遺跡は広義の三国丘陵に立地、蔵上遺跡は三国丘陵周辺の扇状地立地、クリナラ遺跡、畑田遺跡は筑後川上・中流域の丘陵立地である。

(4) 黒曜石とサヌカイトは、石材の持つ特徴から対象石器への明確な使い分けがみられ、製作工程で生じる残砕においても、その大きさにおのずと違いが生じる。重量比と点数比を分析する場合、その点に留意する必要がある。

(5) 城ノ越式期は 2 時期に細分が可能であるが、細分できない資料が、黒曜石 2273.5 g、サヌカイト 1076.1 g に上る。石材量の変動グラフについては、傾向を示すために細分せずに示した。



第 90 図 三国丘陵の剥片石器 2 (城ノ越式段階)



## 第4節 今山系石斧の動向からみた地域間ネットワーク

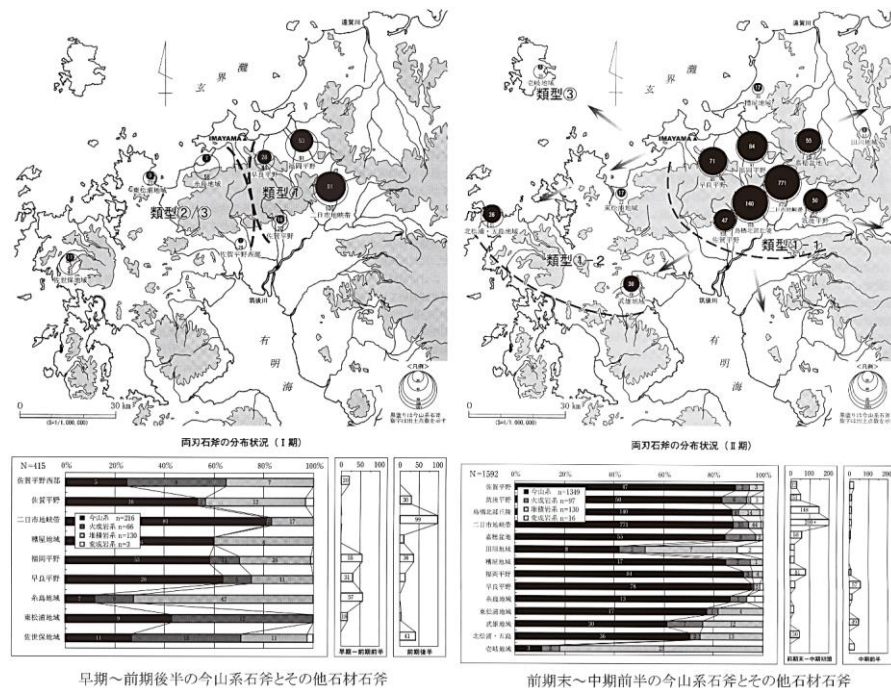
### はじめに（これまでの研究と課題）

三国丘陵地域の弥生時代前期から中期の土地開発、特に丘陵への進出過程で、森林資源獲得を想起させる今山系石斧（註<sup>1</sup>）の当地域への集積現象がある（森 2011）（第 91 図）。

三国丘陵の開発と森林資源に関する研究は、武末純一による「石斧消費地としての評価」があり（武末 1985）、筑紫野市隈・西小田遺跡群では有力な地区で今山系

石斧の比率が高く、劣位の地区は比率が低いという現象から集団間の「階層差」の萌芽をみている（武末 1985・2001）。梅崎恵司は石斧の生産と流通を検討するなかで、北部九州のなかで二日市地狭帯へ今山系石斧が集中して供給されていることを指摘した（梅崎 2000）。柏原孝俊はそれらの研究を受けて、小郡市津古・三沢遺跡群を中心にその石材比率や入手状況进行分析した（柏原 2002）。まず中核的な一ノ口遺跡が今山系石斧を入手し、一ノ口遺跡周辺と遺跡北東部の津古土取遺跡に分配、さらに周辺へ再分配される状況を想定した。一方で、福岡平野の板付遺跡や比恵・那珂遺跡群では遺跡群ごとに異なる伐採斧の生産と供給システムがあり、弥生時代前期の今山系石斧は小地域ごとに集落動態と関係する二相の供給システムが存在するとした。森貴教は弥生時代前期末から中期初頭に集落が沖積地から丘陵上へ進出する時期（小澤 2000）に活発な伐採活動を想定し、今山系石斧が同時的に極めて大量に必要となり、それらの開発に伴い、今山系石斧の大量供給・大量消費が認められることを示した（第 91 図）（森 2011）。また、この時期、木工具としての鑄造鉄器片が内陸部へ集中する現象も指摘されている（比嘉 2011）。

筆者は三国丘陵地域で「集落群」（註<sup>2</sup>）が丘陵に進出し、次の段階ではその集落を放棄し、より高位へと移動を続ける現象を明らかにしたが、この動態自体についての説明がうまくできずにいた（山崎ほか 2005）。この現象を理解するためには、三国丘陵の特徴でもある今山系石斧や鑄造鉄器片の集中からうかがえる森林の伐採活動や木工活動に着目し、位置づけてみたい。集落変遷では丘陵先端部の開発（力武遺跡・津古土取遺跡）から丘陵部の開発（三沢北中尾遺跡・一ノ口遺跡）へ移行する段階があり、伐採石斧の動向もここに画期がみられる可能性が高い。

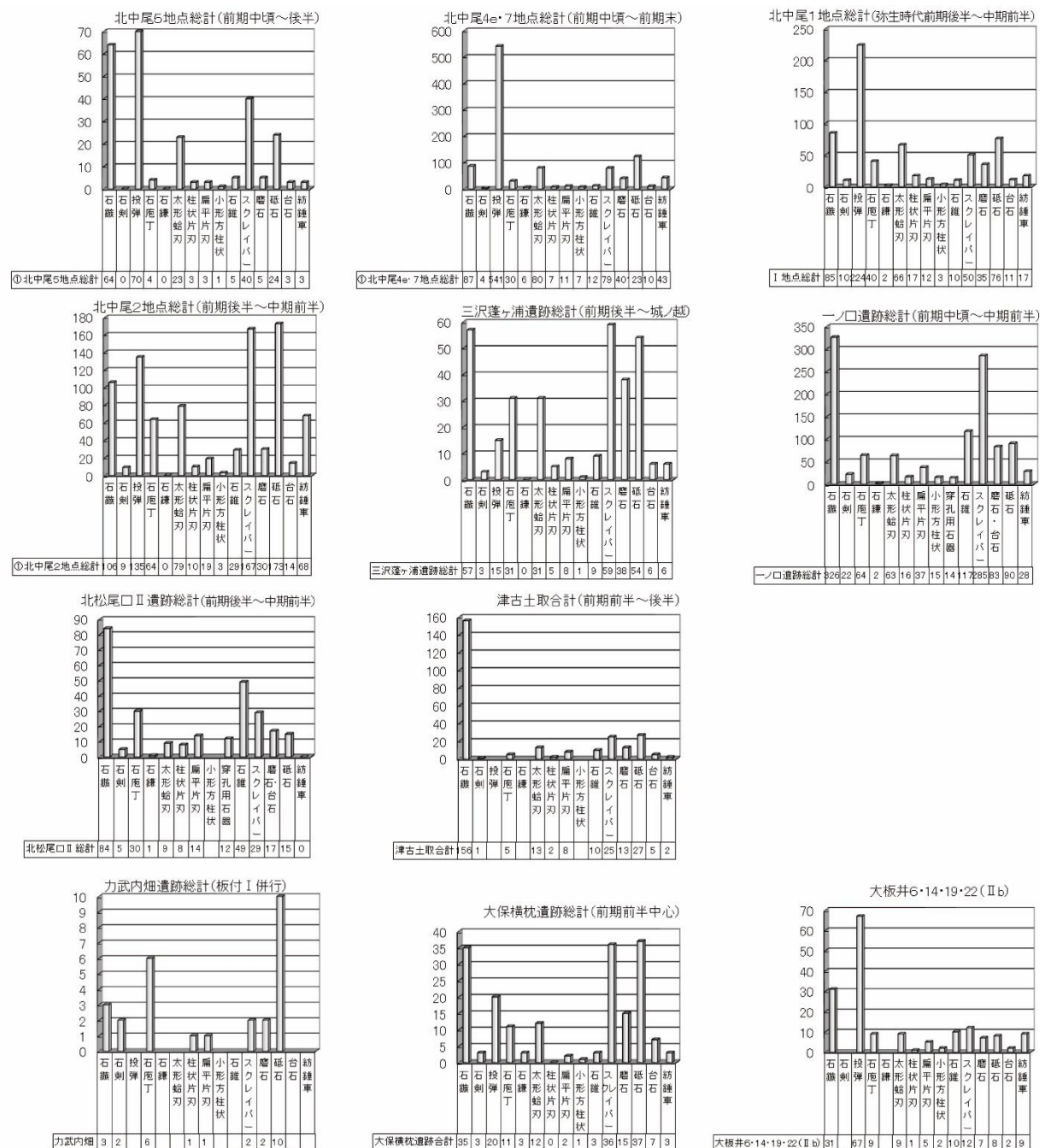


第 91 図 今山系石斧の供給と消費（森 2011）

## 1. 各遺跡の石器組成

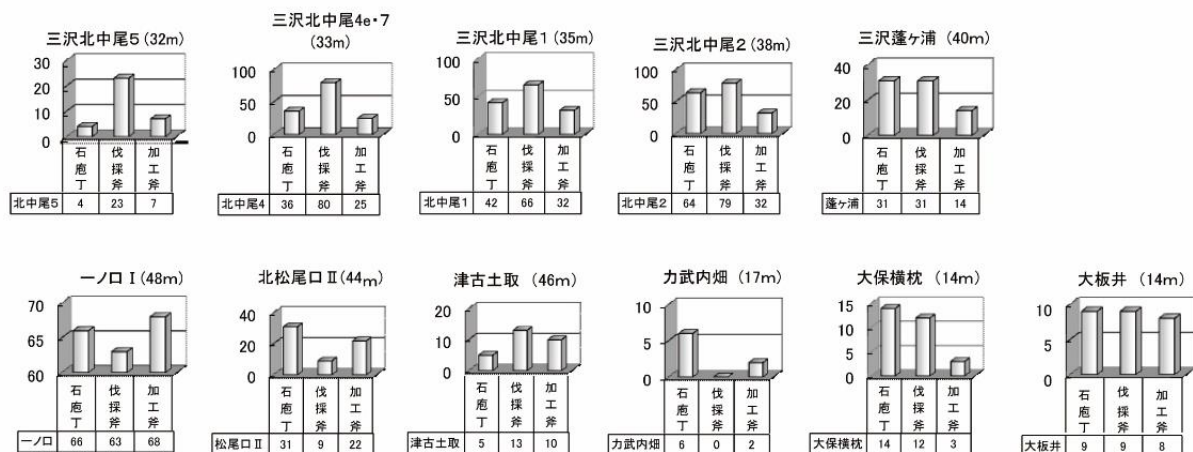
丘陵立地集落と段丘・自然堤防上立地集落の石器組成を比較して、立地による生業の違いを分析する。

標高 30～50m の独立丘陵上に立地する集落のうち、三沢北中尾遺跡は 5 地点から 4・7 地点、1 地点、2 地点、そして三沢蓬ヶ浦遺跡へと順に標高の高い丘陵地へ進出していくが(第 96 図)、伐採石斧と石庖丁の量比をみたとき、時期を追うごとに石庖丁の割合が徐々に増加している(註 3)(第 92 図上)。新しい土地を開拓し、その後、農耕地も併せて拡大させていることがうかがえる。ただ、伐採石斧の割合がどの時期も比較的高く、周辺の森林資源の獲得も生業としているのだろう。一方で、今山系石斧が多く出土する一ノ口遺跡で



第 92 図 各遺跡の石器組成





第 93 図 各遺跡の石庖丁/伐採斧・加工斧の比率

は必ずしも伐採斧の割合が高いわけではない。一ノ口遺跡の特徴は、伐採石斧だけでなく、加工石斧の割合が他の遺跡に比べて高いことである（第 93 図）。一ノ口遺跡に隣接する北松尾口遺跡でも加工石斧の割合が高く、「集落群」で同様の傾向が指摘できる（第 93 図）。伐採活動とともに、木材の加工を顕著に行っていることがわかる。加工石斧の比率の高さが木工活動の優勢を示す現象といえる。これらの遺跡では鑄造鉄斧片も出土する。

標高 10～15m 前後に立地する段丘や自然堤防上の集落（力武内畑遺跡・大保横枕遺跡・大板井遺跡）では、伐採斧はほとんど出土しないが、全く出土しないわけではない。これは、低地の集落でも集落周辺の樹木伐採・管理が少なからず生じていることがわかる。また、石庖丁の割合が総じて高く、稲作への傾倒がうかがえる。なお、低地に面する丘陵端の津古土取遺跡では伐採斧の比率が高く、丘陵立地集落と同様の傾向を示している。

## 2. 集落変遷と今山系石斧の保有率の変化

これまで、今山系石斧の分配が三国丘陵の地域社会で行われたと位置づけられている（柏原 2002）。資料的な制約もあるが、それぞれの集落が時期幅を持つなかで、（中心）時期の異なる集落間の分配を想定した点で問題が生じているだろう。今山系石斧の各遺跡での出土割合・時期による変化を再検討し、今山系石斧の地域における動向や流通の画期を明らかにする。

まず、三国丘陵（東南部域の丘陵部）全体での伐採斧（小片は除外：総数 341 点）における今山系石斧の割合変化を示す（第 94 図）。当地域における今山系石斧の初現は板付Ⅱa 式新段階以降である。この段階まで伐採石斧自体もほとんど出土していない。板付Ⅱa 式新段階以後、集落の丘陵進出が顕著になり（第 96 図①）、それに対応して伐採石斧（太形蛤刃石斧）自体の出土量が飛躍的に多くなっている。この段階では、今山系石斧は 50% を少し切っている（第 94 図）。伐採石斧（太形蛤刃石斧）はその後城ノ越式段階まで右肩上がりなお、縄文系譜の両刃石斧は確実に遺構に伴うものか慎重に判断しなければならないが、板付Ⅱb 式まで、わずかながら確認できる。一部は城ノ越式段階まで遺存している可能性も残される（第 95 図）。集落の消長とともに、須玖Ⅰ式では出土数は激減するものの、今山系石斧の割合は 80% を超えている。

次に集落変遷を中心とした伐採石斧（太形蛤刃石斧）の動向を示す（第 96 図）。

### <板付Ⅰ併行～Ⅱa 古段階>

段丘裾に集落（力武内畑遺跡・津古土取遺跡・三沢南崎遺跡・三沢栗原遺跡）が進出した段階では伐採石斧の出土が確認されていない。水田稲作の最適地であり、樹木の伐採の必要が少ない土地への進出であることが肯ける。

#### ＜板付Ⅱa式新段階＞

周辺の集落がまとまりをもち「集落群」が形成され始め、丘陵部への進出が始まる。伐採石斧が各集落群で確認される。三沢北中尾遺跡周辺に最も伐採石斧が集中して、総数で29点の出土があり、今山系石斧よりもその他石材が上回っている。この段階では、今山系石斧が入手されるものの、比率が低い。縄文系譜の薄い石斧も残存している。

#### ＜板付Ⅱb式古段階＞

集落群がこれまで進出した範囲内で、拡大する時期である。今山系石斧の比率が高くなる。最も伐採石斧が多い三沢北中尾遺跡周辺では、[今山系石斧 14]:[その他石材石斧 14.3]でほぼ同じ比率である。一ノ口遺跡周辺では、[今山系石斧 7.3]:[その他石材石斧 1.6]と今山系石斧が優占する。三沢北中尾遺跡の集落群から一ノ口遺跡の集落群へ、質の良い今山系石斧を優先的に集めている可能性がある。その他の集落群では、今山系石斧とその他石材石斧の割合が同等である。山よりの集落群で石斧量が多く、宝満川に近い丘陵部では石斧量が少ない。三沢北中尾遺跡の銅斧片は韓半島からもたらされたものであり、小形利器として木工に用いられた可能性がうかがえる（山崎 2015）。伐採石斧の多さや小形金属利器の出土からも、三沢北中尾遺跡の集落群が森林資源獲得活動の求心的な集落群である。

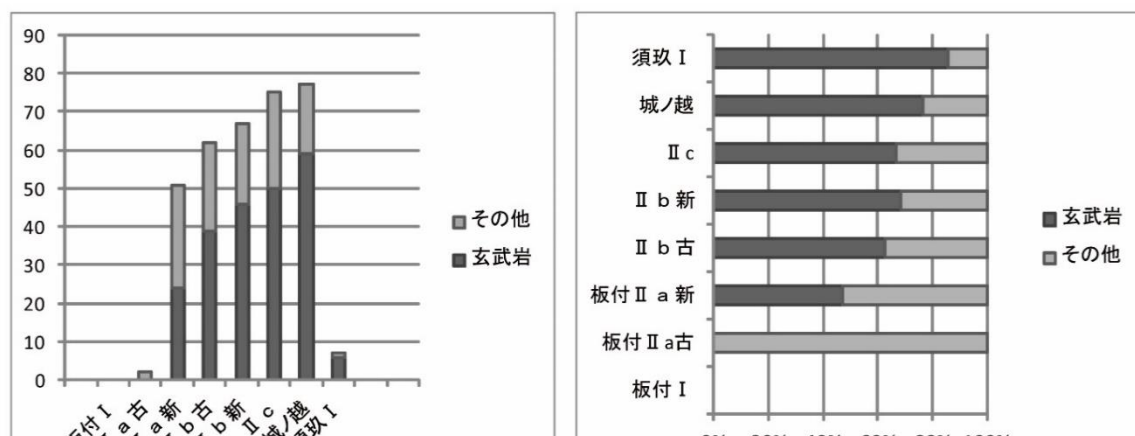
#### ＜板付Ⅱb式新～Ⅱc式段階＞

集落群が高位へと移動する時期である。顕著な移動活動がみられる一ノ口遺跡・三沢北中尾遺跡周辺では伐採石斧自体の総数と今山系石斧の比率が上昇する。特に、一ノ口遺跡の集落群では全時期からおおよそ3倍の伐採石斧量へ増加し、さらに、板付Ⅱb式新段階で、[今山系石斧 20.3]:[その他石材石斧 4.6]、板付Ⅱc式段階で、[今山系石斧 21.3]:[その他石材石斧 6.6]と今山系石斧が伐採石斧総数の8割程度を占めている。この段階でも、伐採石斧の総数は三沢北中尾遺跡が一ノ口遺跡を上回っているが、今山系石斧の割合は6割5分程度で、今山系石斧の保有率が高いことが一ノ口遺跡の特徴である。逆に宝満川周辺の津古土取遺跡・横隈鍋倉遺跡周辺では伐採石斧量自体が変わらず少数で、今山系石斧とその他石材石斧の割合が同等である。

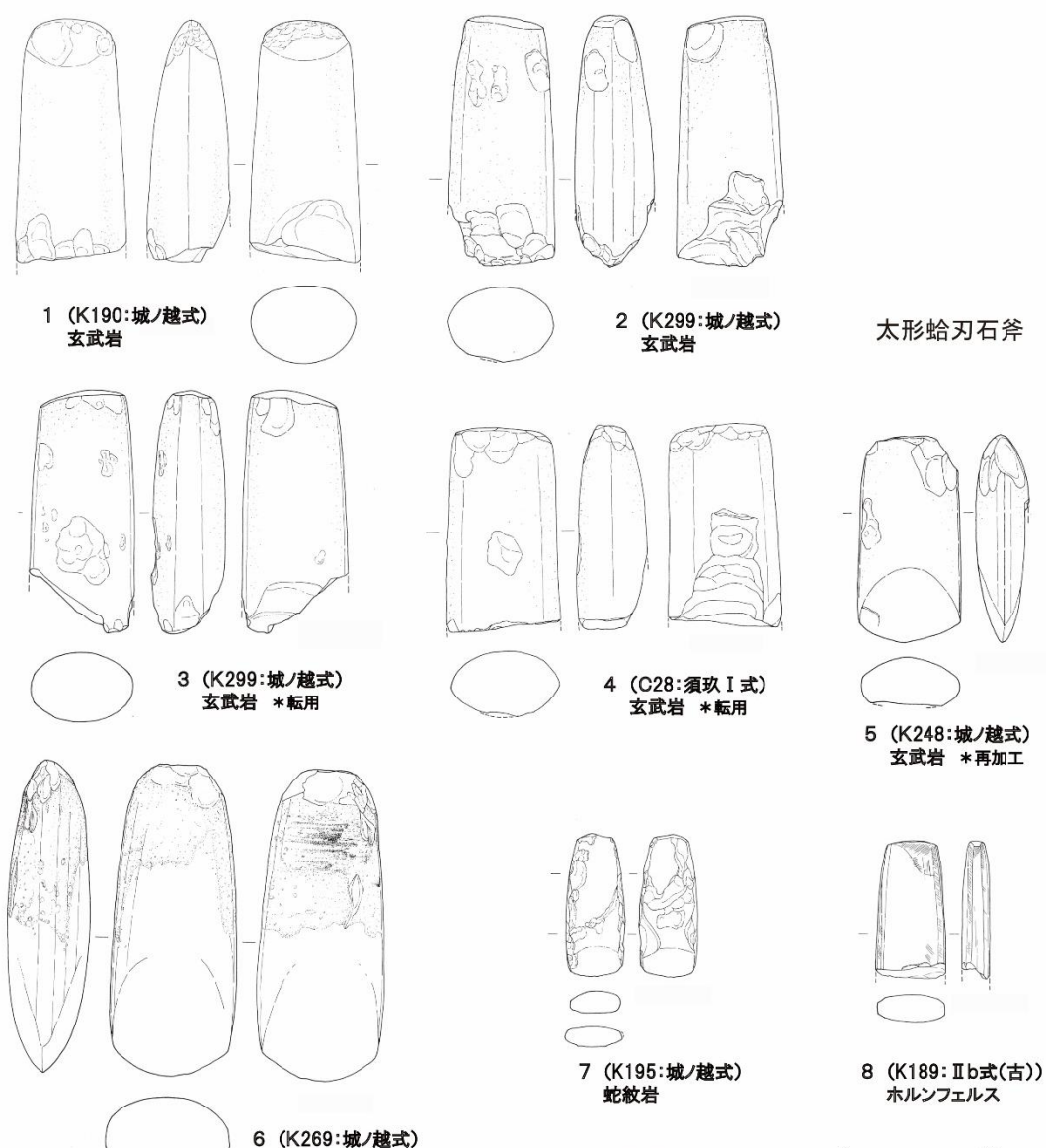
#### ＜城ノ越式段階＞

東部の宝満川に面した集落群が衰退し、集落の再編が行われる。集落群がより高位へ集中し、集落群間の密度が高まっている。森林獲得活動への傾倒が立地・伐採石斧量から顕著である。一ノ口遺跡周辺では、[今山系石斧 17:その他石材石斧 4]、三沢北中尾遺跡周辺では[今山系石斧 39]:[その他石材 12]となっている。これらの両集落群が三国丘陵の森林資源獲得の中心的な集落群で、一ノ口遺跡により質の高い今山系石斧や小形利器としての鉄器、加工斧が集中しており、伐採から木工までの一連の活動を凝集させて特化しているだろう。

森貴教は、二日市地狭帯や鳥栖北部丘陵では破損した石斧を再加工することなく廃棄することが一般的であった一方で、集中地域以外の玄界灘沿岸地域（東松浦地域・北松浦地域・五島地域）では石斧が使い込まれる傾向があるという（森 2011）。三沢北中尾遺跡2地点のK248出土今山系石斧は、再加工品で、破損品を再研磨している（第95図5）。ほかに



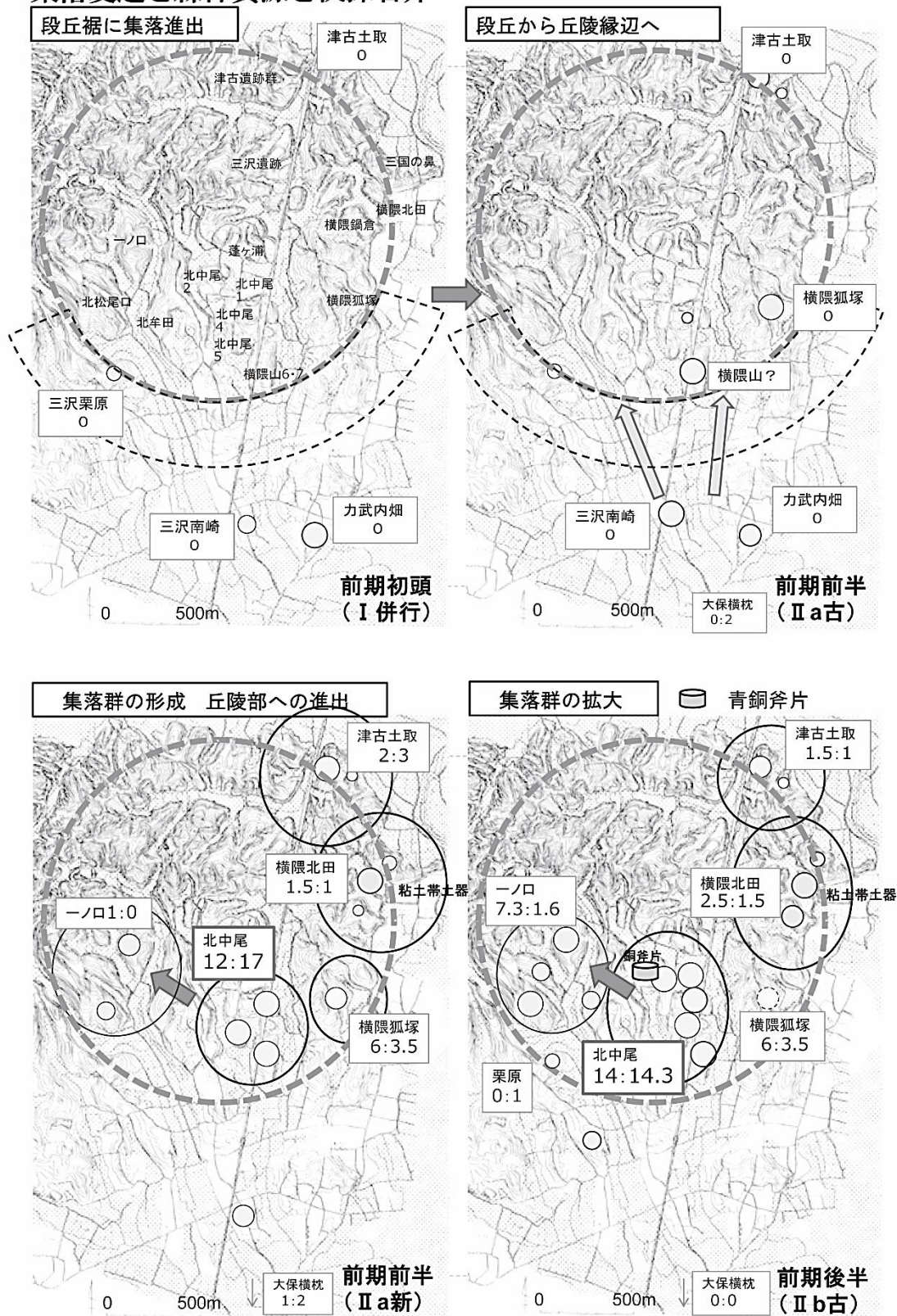
第 94 図 三国丘陵における太形蛤刃石斧（今山系石斧（玄武岩製）とその他石材石斧）の割合



第 95 図 三沢北中尾遺跡 2 地点出土太形蛤刃石斧と両刃石斧 (s = 1 / 4)



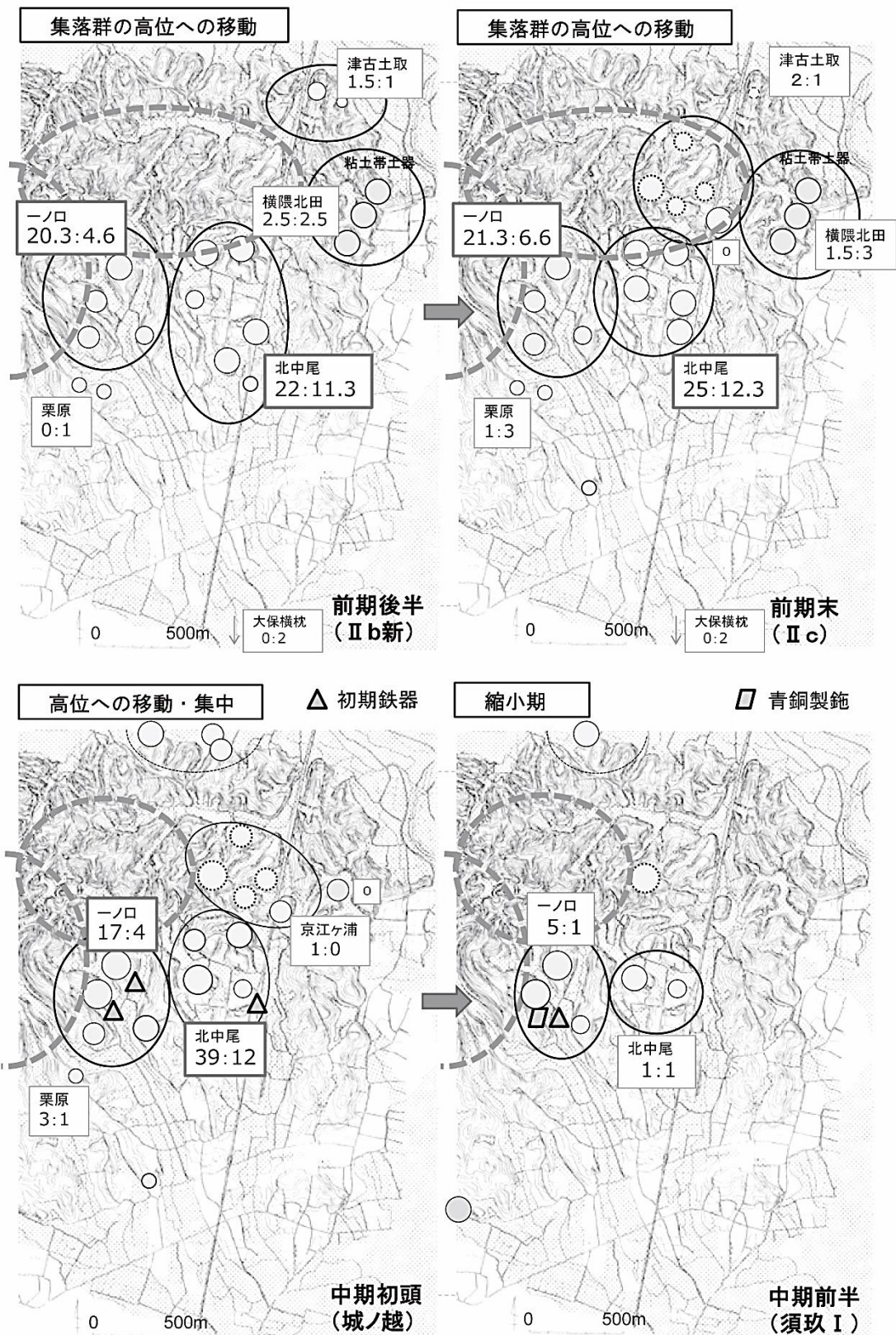
## 集落変遷と森林資源と伐採石斧



第 96 図① 集落変遷と伐採石斧の出土数（今山系：その他石材）

\* 詳細時期が不明確なものは按分 \* 点線は潜在的森林資源





第 96 図② 集落変遷と伐採石斧の出土数（今山系：その他石材）

\* 詳細時期が不明確なものは按分 \* 点線は潜在的森林資源

も、たたき石に転用される例も比較的存在する（第 95 図 3・4）。一方で、一ノ口遺跡では再加工はわずかに確認できるが、転用品はほぼない。小地域内でも、消費形態に違いが表れている。

#### <須玖 I 式段階>

集落群の衰退・分散期にあたる。石斧量自体が極端に減少している。青銅器・鉄器の小形利器出土もみられるものの、三国丘陵の森林資源獲得活動は以後、低調となる。この時期、花粉分析からは、植生の変化を示すエノキ・ムクノキの出現、

シイ・カシ林の減少、二次林の増加がうかがえる（古環境 1996）。森林植生や環境の変化、そしてより大きな北部九州社会の変化が集落群の衰退や石斧流通量の変化の要因となっているだろう。

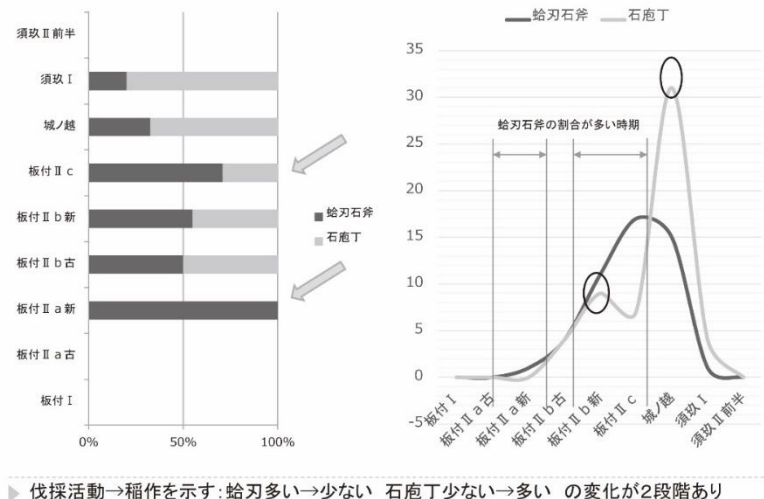
#### 4. 三国丘陵における森林資源獲得と伐採石斧

以上のように、石器組成では、丘陵上の集落が伐採石斧や加工石斧の割合が高く森林地の開発・資源獲得を進め、時期を追って農耕地の開発がすすめられて石庖丁の割合が高くなる。低地に近い集落では、石庖丁の割合が高く、集落周辺に広がる最適な可耕地での水田稲作がうかがえ、生業の違いが看取できる。

たとえば、剥片石器石材は北部九州全体のなかで、地理的環境によって三国丘陵に近い原産地から、多久産サヌカイトと腰岳産黒曜石の双方を獲得しており、時期によってその割合に変化が生じている（山崎 2012・2016）。一方で、伐採石斧は、地域特性にあった太形蛤刃石斧の入手から消費までが行われている（第 91 図）。三国丘陵では、伐採斧は板付 II a 式新段階で急激に増加しており、ここで丘陵の開発が本格的に始まった（第 94 図）。その後、増加を続け須玖 I 式段階で急激に減少する。今山系以外の石材は時期を通じて一定の量が認められ、全体の石斧数の増加は、今山系石斧自体の増加が影響している（第 94 図）。

これまで指摘されてきた今山系石斧の一ノ口遺跡への集中は確かに認められる（柏原 2002）。しかし、時期的な変遷からみれば、三沢北中尾遺跡周辺で、今山系石斧以外の石材石斧も用いた伐採活動が先行して進められており、そこから派生して、森林獲得により特化した集団が一ノ口遺跡であると位置づけられる（第 97 図）。一ノ口遺跡における太形蛤刃石斧と石庖丁の割合変化をみたとき、蛤刃石斧が 2 段階にわたって増加する。特に板付 II c 式の増加は石庖丁の減少と蛤刃石斧の増加が同時期にあり、生業の中心が大きく変わっていることを示す。三沢北中尾遺跡の石材割合は、一定の割合でその他石材石斧が存在するものの、伐採石斧の全体量は丘陵内で一番多い。一ノ口遺跡は三沢北中尾遺跡に次ぐ伐採石斧量であるが、今山系石斧の占める割合が 8 割を超えている点で特殊である。森林資源に近く、大径木の獲得などを質の高い石斧で進めていたことも想像できる（第 97 図）。

三国丘陵の弥生時代遺跡群は、単体というよりも全体で一つの単位で、小地域社会を形



第 97 図 一ノ口遺跡出土太形蛤刃石斧と石庖丁の割合変化



成し、立地によって構成集落群の生業や特徴が異なるといえよう。例えば、河川交通・港に近い対外交流窓口としての横隈鍋倉遺跡や三国の鼻遺跡の集落群、森林資源が豊富に担保されている、山よりの森林資源獲得集団としての一ノ口遺跡・三沢北中尾遺跡の集落群などが想定される。

### おわりに

三国丘陵の集落群を対象に検討し、丘陵部の遺跡と段丘や自然堤防上立地集落では、石器組成にみる生業の違いや稲作への傾倒度合いの違いが看取された。

これまで、三国丘陵では一ノ口遺跡が中心的に伐採石斧の入手と分配を行うモデルが提示されていたが（柏原 2002）、新しい発掘調査資料や詳細な時期変遷を検討することで、異なるモデルが考えられた。すなわち、

三沢北中尾遺跡の集落群が先行して三国丘陵の森林開発を主導し、そこから派生して、さらに森林資源獲得に特化した（させた）集団が一ノ口遺跡の集落群で、三国丘陵の集落群全体が質の高い今山系石斧をより森林資源に近い好立地の一ノ口遺跡周辺に集中させている様相がうかがえる。加工斧の割合も高く、伐採から加工までの一連の活動を担う集団であった。伐採石斧の総量は三沢北中尾遺跡の保有率が高く、次いで一ノ口遺跡が高い。一ノ口遺跡では今山系石斧の割合が最も高く、三沢北中尾遺跡を上回っている。

剥片石器石材は各遺跡で普遍的に確認され、石材の入手・製作が規模の大小はあるものの、それぞれの集落で行われている。それとは異なり、今山系石斧の入手には偏りがあり、三国丘陵でも山よりの集落群に偏って保有される。地域構造では三沢北中尾遺跡も含めた一ノ口遺跡周辺が、三国丘陵における森林開発を主に担っていたと考えられる。大地域構造では、その入手にあたって北部九州の地域間ネットワークの整備に関わっていると考えられる。伐採石斧の流通は土地開発や木器製作ともかかわる事象で、剥片石器とは性質的に大きく異なる。特に今山系石斧の流通は質の高い石斧の流通であり、その集中には平野では入手できない大径木獲得の要請など外部からのインパクトも想定できる。縄文時代以来の剥片石器石材利用の流れと比較して、新しく整備された今山系石斧の需要と供給は（その裏返しの木材の需要と供給も）北部九州弥生社会の交換システムの表徴として考えられる。

### 【註】

（１）福岡市今山遺跡もしくは周辺でつくられた玄武岩製の太形蛤刃石斧を「今山系石斧」と呼称する。三国丘陵地域では太形蛤刃石斧石材に、その他、細粒砂岩、ホルンフェルス、安山岩質凝灰岩などがみられる。

（２）三国丘陵では弥生時代の初期に丘陵最南端の段丘裾に着床した集落が、谷筋に沿って丘陵上に進出し、独立丘陵上に立地する集落遺跡が一定のまとまりを持ちつつ変遷する（山崎ほか 2005, 山崎 2010）。この一連の変遷が追える集落のまとまりを「集落群」と呼称する。三国丘陵（宝珠川以南）では、5箇所程度の「集落群」の存在が確認できる。

（３）今回は太形蛤刃石斧を主対象に分析しており、「伐採（石）斧」とした場合は、主に太形蛤刃石斧を指す。縄文系譜の小形で薄い両刃石斧をカウントしていないが、どの時期まで残るのかも検討すべき課題である。

## 第4章 日本列島と韓半島の交流 ～弥生時代前半期を中心として～

本章の課題設定は「交流の諸相／時間的推移をどのようにとらえるか」である。土器の移動と変容の概念整理は序章で示した通りで、土器移動の背景には、それを携えた人の動きや集団間の接触が考えられるが、現象面的理解（移動形態や移動量など）とそれらの集団像・集団関係の復原については分けて考える必要があり、その上で両者を結び付ける操作と作業が要請される。加えてそれらの土器の変容過程を分析することも、製作者像（集団像）の観点から重要である。

無文土器と弥生土器の接触度合いを新たに概念整理し、これまで発掘報告された資料の見直しによる新しい研究の成果を提示する。それとともにもたらされた青銅武器流入以前の工具類についても検討し、日韓の併行関係を考察する。

### 第1節 日韓における土器の交流をはかる

#### 1. 日本列島における無文土器系土器～「擬」からの脱却～

日本における「朝鮮系無文土器」の研究は、後藤 1979 による定義が嚆矢で、「朝鮮系無文土器」：製作技法・形態が朝鮮半島南部の「後期」無文土器と同じもの、その製作地が朝鮮半島南部か北部九州（山口県西部も含む）か判別できず、また、それらが弥生社会の中にあって朝鮮半島南部無文土器社会におけるのと異なる性格を持つことから、この名称とした。「擬朝鮮系無文土器」は、①部分的形状が無文土器に似ているもの ②弥生土器とは異なるが無文土器とはみなしがたいもの ③無文土器の形態が崩れて弥生土器に近くなったもの と定義された。

その後、後藤 1987 による分類では、総称として『（後期）無文土器系土器』を用い、これを細分する。「擬」を使用せずに再定義された。①②が該当。

①無文土器直系の土器＜典型的Ⅰa類、典型的Ⅱ類＞

②無文土器直系土器が西日本で多少変化したり弥生土器の要素を加えられたもの

\*「類無文土器」という表現もあり。

＜非典型的Ⅰa類、Ⅰb類、Ⅳ類、非典型的Ⅱ類、Ⅲb類＞が「無文土器直系の土器が西日本で多少変化したり弥生土器の要素を加えられた」「類無文土器」

③無文土器とは無関係と考えられるもの＜Ⅴ類・Ⅵ類＞

後藤の研究を受けた片岡 1990 による定義では、「朝鮮系無文土器」①形態的・技術的に朝鮮半島で無文土器と呼ばれる一群の土器と製作技術上差のない土器が、②搬入品として持ち込まれたり、あるいはそれを製作する技術を持った人によってその地で作られるなどして、③本来、その土器文化が主体となるべく朝鮮半島及びその周辺以外で発見された土器と定義した。「擬朝鮮系無文土器」は、①主に朝鮮系無文土器の製作者、あるいはその子孫などが多いとは思いますが、それに限らず土器製作者によって、②朝鮮半島の無文土器あるいは先の朝鮮系無文土器の技術的影響を受けて作られたもの、明らかに本来の無文土器と異なった土器。→ここに列島における「擬弥生土器」が含まれる。そして、朝鮮系無文土器によく似た形態・製作技術をもったものでも、朝鮮系無文土器との接触がないものは当然それに含むべきではないとした。

また、片岡による「無文土器の弥生土器化」を検討した論考では、土生遺跡を中心に佐

賀平野出土無文土器系土器を土生Ⅰ～Ⅲ式に分類・整理し、系統的に朝鮮系無文土器の弥生土器化を整理した（片岡 1993）（P6 第4図）。

これまでの研究・用語については序章でもふれたが、近年その定義では扱えない資料も出てきた（註1）。

後藤は、最新の資料も含めてあらためて朝鮮半島系土器の総論を行い、再び「擬朝鮮系無文土器」の名称が登場する（後藤 2011）。そして、新しく「原の辻無文系弥生土器（仮称）」の語が現れる。片岡は原の辻遺跡では三角形粘土帯土器段階にも擬朝鮮系無文土器がみられるとして、その変容度合いを整理した（片岡 2001）。後藤はこれに対し、弥生土器の範疇に属し、擬無文土器ではない一群を指摘した。すなわち、「無文土器が弥生土器の影響を受けて変容したのではなく、弥生土器が無文土器の粘土帯を強く押さえない、しっかりナデつけないなどの口縁処理を模すなど、弥生土器とは多少異なる処理方法を採用し、弥生土器の範囲内にあり弥生土器が無文土器との接触によって多少変容したものと位置付けた（後藤 2011）。無文土器の要素・影響はわずかなこれらの土器を「無文系弥生土器」、「原の辻無文系弥生土器」と仮称した。また、朝鮮半島の「擬弥生土器」は弥生時代前期末から中期初め以降弥生土器が継続して持ち込まれ、中期前葉からは擬弥生土器が作られるが、無文土器からの影響は微少で規範からはずれた弥生土器と言うほうが良い。まれに「弥生土器風無文土器」も現れるとしている。土器変容のあり方についても、「移動先では相手方土器の影響で変容が進みやがて消えていくといったこれまでの単線的变化観を吟味し直さねばならないだろう」と重要な提言がなされた（後藤 2011）。

## 2. 韓半島における弥生系土器

韓半島出土弥生系土器を検討した芮ジウンは、弥生系土器を弥生土器と「類似弥生土器」に分け、弥生土器は日本で作られた搬入品ないしはその区別が難しい忠実再現品で、「類似弥生土器」は弥生土器に似るが、製作技法と土器の器形および型で違いがある土器としている（芮 2011）。しかし、その弥生系土器がどのように変化するかを検討した研究は未だ少ないだろう。

申敬澈・河仁秀が『日韓交渉の考古学』のなかで、土器生産の主体についてその考えを示している（申・河 1991）。弥生系土器は「無文土器人達が弥生土器の影響を受けて萊城の弥生系土器を自ら製作したというよりは、当時萊城遺跡一帯で交易あるいは対外交渉のために居住していた弥生系人達が製作したとみなす方が良い」と考えた。その理由として、萊城遺跡では勒島遺跡と同様に弥生土器の影響で在地人が作ったと考えられる類似弥生系土器が全く出土しなかっただけでなく、萊城遺跡出土の弥生系土器が遺跡全体の出土土器中に占める比率が94%にもものぼる点が、これをよく傍証してくれるからである。一方、弥生土器の影響で製作された類似弥生系土器は出土例がそれほど多くないが、勒島2号住居出土の壺型土器・甕形土器（第98図5・6）などは好例である（これを無文土器人が弥生土器を（一部）模倣したものと考えている）。

これらが、弥生土器の属性の一部を受容したことは明らかだが、弥生土器が勒島式土器に及ぼした影響力や在地人の受容の程度は極めて微々たるものであった。それは、2号住居のこうした類似弥生系土器がごく一部の要素、すなわち口縁部の形態においてのみ弥生土器の属性が認定され、そのほかは在地の無文土器の特徴を示していることからこのことが理解できる。しかしながら、安在皓・徐姪男 1990 は勒島式土器に見られる「ハケ目」調整を弥生土器からの影響と考え、勒島Ⅰ式にはじめてあらわれ、勒島Ⅱ式に定型化

するとみている（申・河 1991）。

武末純一は韓半島出土弥生系土器の在り方について、靑島遺跡や亀山洞遺跡出土品を対象に弥生土器（搬入品または忠実再現品）と擬弥生土器（変容品）に大別し、擬弥生土器はさらに、弥生土器によく似るが一部に無文土器の要素がみられる a 類、ほとんど無文土器だが一部に弥生土器の要素がみられる b 類に細別した。両者は併存し、それぞれが弥生人と無文土器人の対応を想定した（武末 2006・2010）。韓半島の擬弥生土器では、北部九州の城ノ越式や須玖 I 式と比較すると、器壁の厚さに対して口縁部が薄かったり、小さくなったりした独自の変容（縮約化）を指摘している。

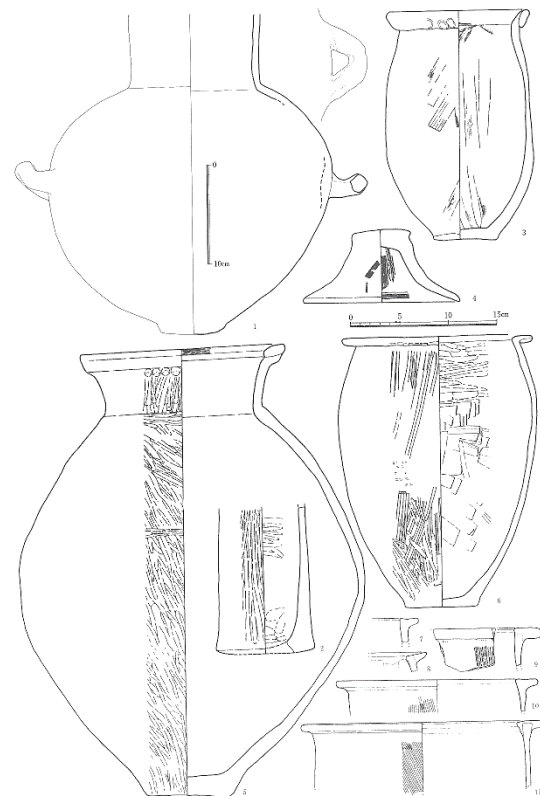
李昌熙は製作主体と模倣対象によって厳密な区分を示した（第 99 図）（李 2009）。

「擬朝鮮系無文土器とは朝鮮系無文土器（粘土帯土器）を模倣して作った土器である。したがって、在来人が渡来人の技術的影響を受けるか、あるいは渡来土器を模倣して作った土器とみることができる。逆に渡来人が日本

列島で弥生土器を模倣して作った土器は擬弥生土器であるし、粘土帯土器人が韓半島において持ち込まれた弥生土器を模倣して作った土器も擬弥生土器になる。この場合、以下の二つの事例を除き、擬朝鮮系無文土器と擬弥生土器を区別できない。まず、渡来集団が長期間滞留したことが確実な居住地域で発見された模倣土器は、渡来人が直接作った土器であるから擬弥生土器である可能性が非常に高い。次に在来人の居住地域で出土した少数の模倣土器は擬朝鮮系無文土器である可能性が非常に高い。」と考えた。

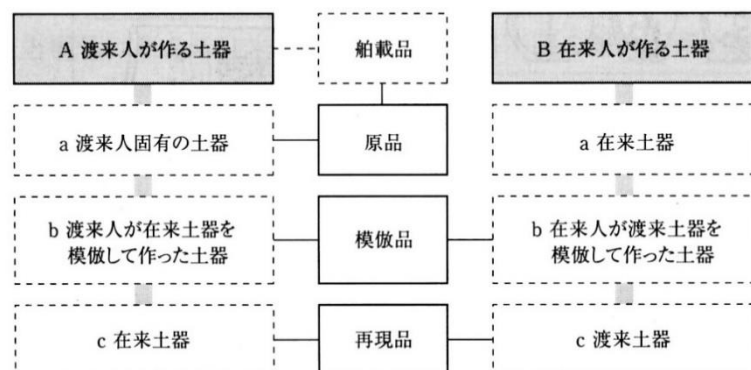
李昌熙が示すように本来、「擬」が持つ意味は模倣するという意味があり、「擬〇〇土器」は模倣した土器を指すことになる。日本における「擬朝鮮系無文土器」には弥生人と渡来人のどちらが製作したかを厳密に区別をしておらず、ここに問題が生じている。

これらに加え、モーターハビット、ハビトウスという概念を用いた靑島遺跡出土折衷土器の分析例もあり



第 98 図 水石里遺跡・靑島遺跡出土土器  
1～4 無文土器 5～11 弥生土器系土器（7～11 弥生土器） [1 水石里遺跡 2～11 靑島遺跡]

第 98 図 水石里遺跡・靑島遺跡出土土器  
（申・河 1991）



第 99 図 土器からいえること（李 2009）

「製作者」を推定するうえで重要である(中園 1993)。中園聡氏は口縁部の接合方法、器壁の厚さや歪みなどと異なり、視覚的情報として、サイズやプロポーション、口縁部の大まかな形態などの諸属性は伝達が容易であり、また、調理方法(容量等)など機能的側面は、その集団内における規範を受けて、併せて模倣が促される事項であることを示した。石丸はその研究を受けて、韓半島の弥生系土器の法量を分析し、擬弥生土器だけでなく、搬入品の弥生土器も小形の類に入ることを指摘して、長距離の移動に適したものが採用されたか、半島にわたった弥生土器製作技術を持った人物が、サイズだけを在地の生活様式に合わせて製作したかを考えた(石丸 2011)。半島出土弥生系土器が原の辻遺跡でみられるよりも小型甕が多く、壺の出土もわずかであることから、長期に及ぶ滞在ではないと推定している。

### 3. 問題の所在

以上のことから、日本での「擬」と韓国での「擬」を置き換えて「類似」とした用語は混乱を生じている。日本での「擬朝鮮系無文土器」、「擬無文土器」、韓国での「擬(類似)弥生土器」は全く逆の意味となる場合も生じてこよう。『「擬」無文土器』をはじめに用いたのは、後藤直である(後藤 1979)。例えば、語義に忠実な李昌熙は、「擬」無文土器の場合、無文土器を対象に、模倣して作った土器とした(李 2009)。しかし、現在、日本で使われている『「擬」無文土器』は無文土器人が弥生土器の影響をうけて作った土器を主に指し、逆の意味になっている。現在では、「擬朝鮮系無文土器」に「無文土器が弥生土器の影響を受けたもの」と「弥生土器が無文土器の影響を受けたもの」の両者が含まれている場合が生じる。日本における「擬無文土器」には弥生土器の影響を受けた「擬無文土器」と無文土器の影響を受けた土器の「擬弥生土器」の双方が含まれていることに気づかなければならない。

「朝鮮系無文土器」、「擬朝鮮系無文土器」といった語句で示されてきた無文土器と弥生土器が接触して変容した土器があり、これまで無文土器の弥生土器化を中心に示されてきた。しかし、この検討だけでは片手落ちである。日韓の交流を検討する際には、双方向の検討が必要である。日本においては、無文土器が弥生土器の影響を受けて変容する方向だけでなく、弥生土器が無文土器の影響を受けている。韓半島においても同様で、弥生土器が無文土器の影響を受けるだけでなく、無文土器が弥生土器の影響を受けている。

近年、後藤直も言及しているように、「移動先では相手方土器の影響で変容が進みやがて消えていくといったこれまでの単線的変化観を吟味し直さねばならない」だろう(後藤 2011)。無文土器社会では無文土器の規範が強く、弥生社会では弥生土器の規範が強いといった前提が深層心理にあって、日本における無文土器に接触した際の弥生土器の変化、韓国における弥生土器に接触した際の無文土器の変化はなおざりにされてきた。資料一点一点を確認すると、現在の定義では当てはまらない土器群が実は多く、新しい定義が必要となっている。今後の日韓交流の研究の進展のためにも用語の厳密な区別を提案する。「系統」での理解を図り、弥生土器の系統変化/無文土器の系統変化で考えることにする。

### 4. 日韓における土器交流の実態の検討に向けての用語の整理

以下のとおり、整理して、定義する。



## 【現状での「擬」を用いた場合の系統変化】

無文土器系土器

### 日本における「無文土器」系統の変化

無文土器 → 擬無文土器〈1段階〉(弥生土器の影響を受けた無文土器)

→「擬無文土器〈2段階〉(弥生土器化が進行)」→「弥生土器(忠実再現品)」

### 日本における「弥生土器」系統の変化

弥生土器 → 擬弥生土器〈1段階〉(一部無文土器の要素を持つ弥生土器)

(→擬弥生土器〈2段階〉(無文土器化が進行)→無文土器(忠実再現品))

弥生系土器

### 韓国における「弥生土器」系統の変化

弥生土器 → 擬弥生土器〈1段階〉(無文土器の影響を受けた弥生土器)〈擬弥生土器 a 類〉

→「擬弥生土器〈2段階〉(無文土器化が進行)」→「無文土器(忠実再現品)」

### 韓国における「無文土器」系統の変化

無文土器 → 擬無文土器〈1段階〉(一部弥生土器の要素を持つ無文土器)〈擬弥生土器 b 類〉

(→擬無文土器〈2段階〉(弥生土器化が進行)→弥生土器(忠実再現品))

## 【新しい「変容」を用いた表現の系統変化】

無文土器系土器

### 日本における「無文土器」系統の変化

無文土器



「変容無文土器〈1段階〉」

(弥生土器の影響を受けた無文土器)



「変容無文土器〈2段階〉」

(弥生土器化が進行)

↓ → \* 別の形式が設定できる可能性もある

弥生土器(忠実再現品)

### 日本における「弥生土器」系統の変化

弥生土器



「変容弥生土器〈1段階〉」

(一部無文土器の要素を持つ弥生土器)



弥生系土器

### 韓国における「弥生土器」系統の変化

弥生土器



「変容弥生土器〈1段階〉」

(無文土器の影響を受けた弥生土器)



「(変容弥生土器〈2段階〉)」

(無文土器化が進行)

↓ \* 韓半島では変容が進行しないか

(無文土器(忠実再現品))

### 韓国における「無文土器」系統の変化

無文土器



「変容無文土器〈1段階〉」

(一部弥生土器の要素を持つ無文土器)



## 5. 日本における「擬」弥生土器、韓国における「擬」無文土器の指摘

これまで、日本において「擬朝鮮系無文土器」、「擬無文土器」は、暗黙のうちに、渡来した無文土器が在地の弥生土器の規範を受けて変化する方向性が考えられてきた。日本における「擬弥生土器」、本稿で新しく定義する「変容弥生土器」の例を示しておく。

同様に、韓国において「弥生系土器」としてひとくくりにされてきたなかにも、無文土器が変化した「変容無文土器」、弥生土器が変化した「変容弥生土器」の両者が含まれている。韓国における「変容無文土器」の例も比較材料として示す（第98図5・6）。

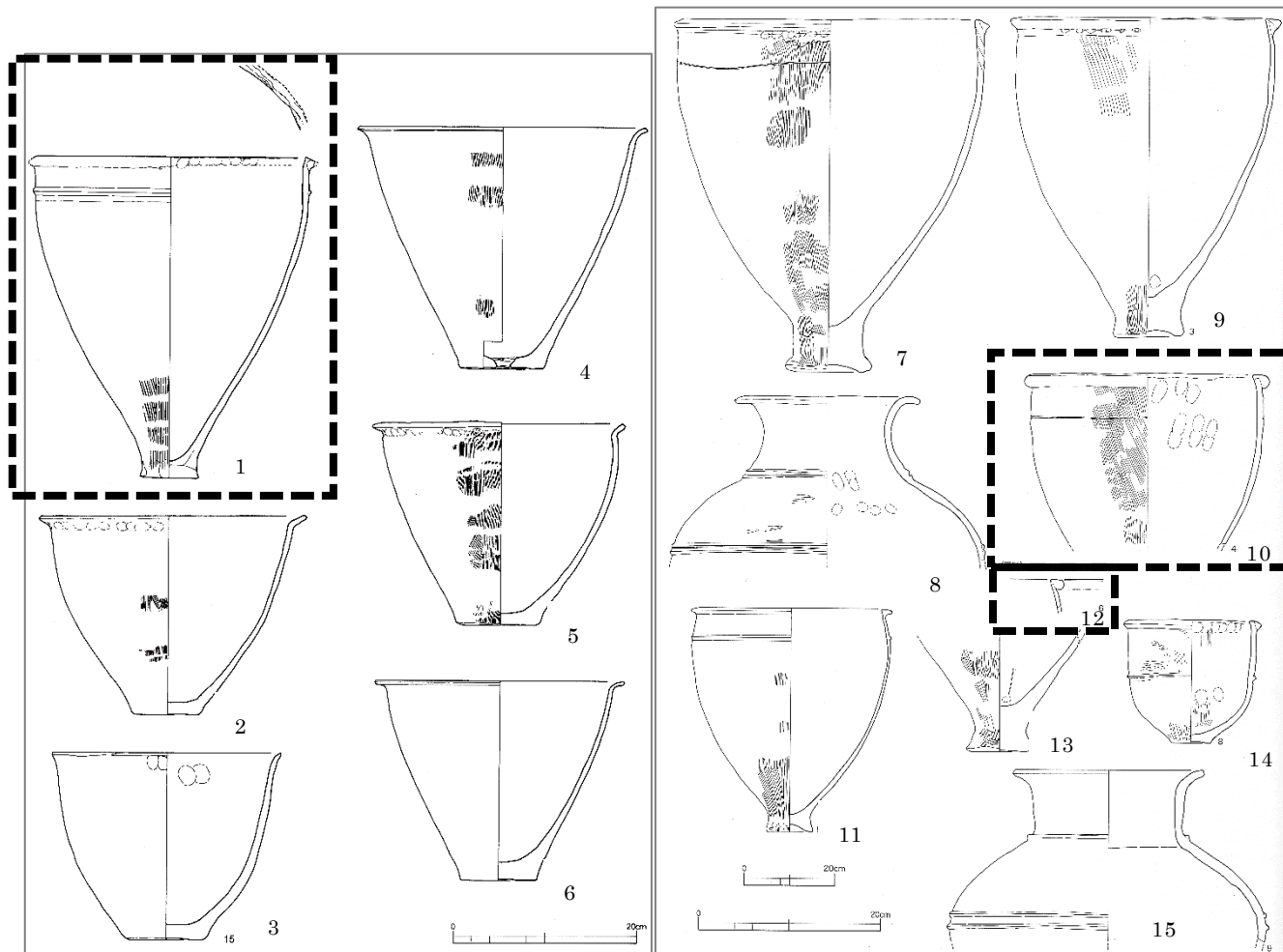
### （1）日本における変容弥生土器例（\*これまでの日本における「擬弥生土器」）

#### ・三沢北中尾遺跡1地点環濠 C区上層 第100図1 板付Ⅱc式

亀ノ甲式甕の系譜で粘土帯貼り付けによる断面三角形の口縁部を持ち、底部の厚さも2cmとやや厚みがある。口縁部下位約4cmに突帯を1条施す。口縁部の貼り付けは少し巻き込み気味で口縁部には指押さえ痕を良く残す。端部の仕上げが粗い状態で留まっている。全体のプロポーシオンや厚さなどは弥生土器である。

#### ・三沢北中尾遺跡2b地点 238号貯蔵穴 第100図10・12 城ノ越式

10は完形の甕で底部は上げ底で胴部上半に最大径がある。全体の形状は、城ノ越式の弥生土器甕で、胴部上半には沈線もみられる。口縁部下端を連続する指押さえを行う。外見上は口縁部に無文土器の影響が見受けられる。口縁下端粘土貼り付け部が撫



第100図 三沢北中尾遺跡出土土器（s = 1/8）（左：1地点環濠C区上層 右2b地点238号貯蔵穴）

で付けを行っていない。口縁部の貼り付けは、上から粘土帯をかぶせるタイプで、城ノ越式以降須玖式に至ってもこの系譜の貼り付けが確認できる。

また、12 は一見円形粘土帯土器に近い特徴を持っているが、擬口縁が粘土帯を巻き込む成形に至っていないので、無文土器そのものではない。口縁部のみで全体形状が不明で判断できないが、変容無文土器もしくは変容弥生土器である。口縁下端の粘土貼り付けがナデを伴っていない。

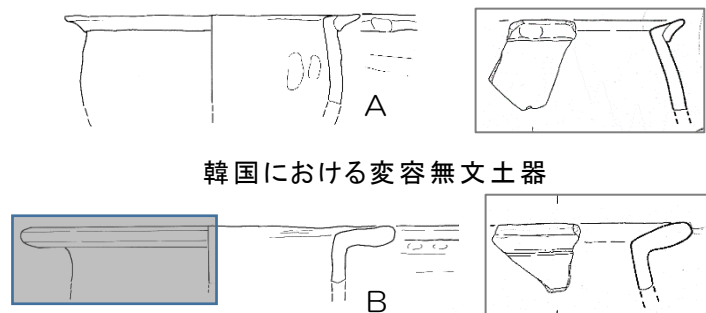
## （２）韓国における変容無文土器例（＊これまでの韓国における「擬無文土器」）

### ・泗川芳芝里遺跡（慶南発展研究院 2005、慶尚大学校 2007）

2019 年 3 月に武末純一・古澤義久と慶尚大学校博物館で実見した（慶尚大学校 2007 分）。弥生土器（第 101 図 B）はもとの図面よりも口縁部が水平となる。ナデによる仕上げ調整が顕著であるが、外側の口縁の付け根部分には指押さえがわずかに残っている。破片のため、口縁の復元は不確かなところもあるが、20 cm 前後となり、かなり小形の須玖式甕となる。変容弥生土器（第 101 図 C・D）（無文土器の要素を一部持つ弥生土器）は、やはり口

径が日本のものよりも小さい傾向がある。口縁部の胴部との接着が弱く、指押さえ・ナデがみられるが、部分的には未処理である。口縁部の張り出しも比較的小さい傾向があり、変容弥生土器の特徴、縮約化をよく示している（武末 2006・2010）。変容無文土器（第 101 図 A）（弥生土器の要素を一部持つ無文土器）は、もとの図面よりも口縁部が水平となる。口縁部の巻き込みは弱く、下端は未処理である。指押さえも確認できる。胴部はナデ調整で仕上げられる。

以上のように、日韓それぞれの地域で、無文土器・弥生土器が相互に影響を受けていることが資料から指摘できる。在地社会の規制が強くて、その土器の規範を受けるという方向性だけではなく、在地社会も渡来土器や渡来人を受け入れて、相互に影響を与えていることが明らかである。今後、この視点での研究が必要である。

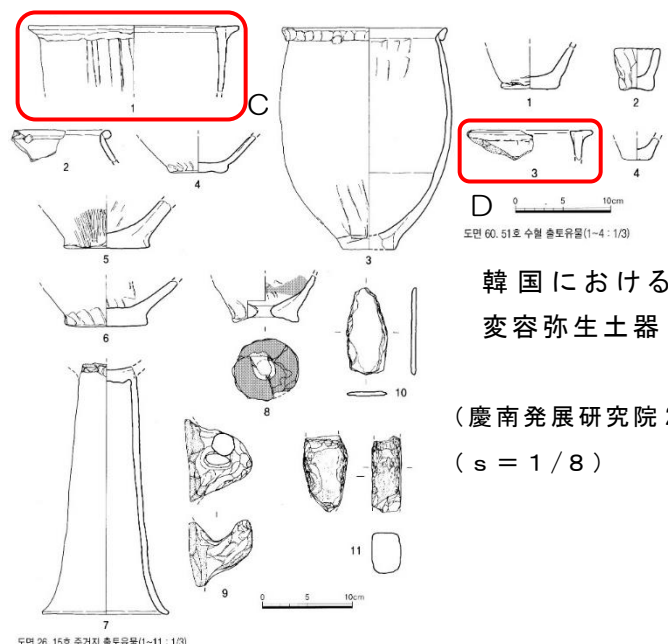


韓国における変容無文土器

韓国出土弥生土器 ＊口径復元は小片のため、不確か

（慶尚大学校 2007）（ $s = 1/4$ ）

右：報告書 左：山崎実測分



韓国における  
変容弥生土器

（慶南発展研究院 2005）

（ $s = 1/8$ ）

第 101 図 泗川芳芝里遺跡出土変容弥生土器

【註】

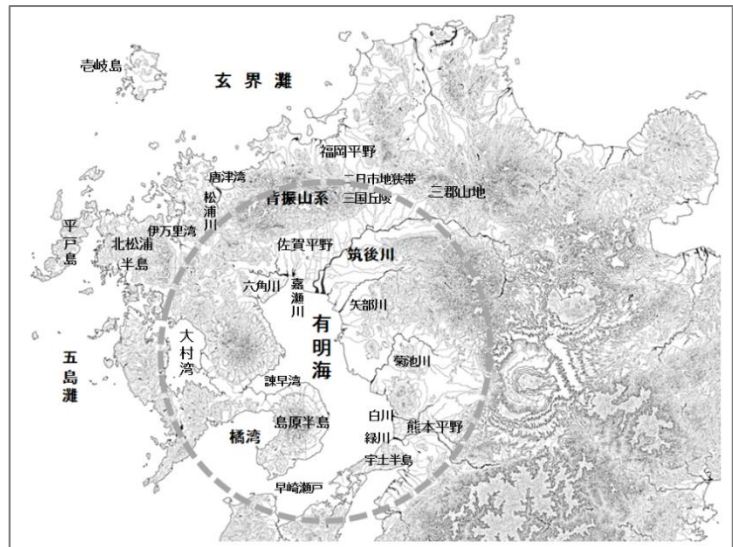
(1)「擬」という言葉には、①なぞらえる。まねる。にる。にせる。「擬音」「模擬」②はかる。おしはかる。「擬議」「擬度」③まがい。もどき。にせ。という意がある。「擬」無文土器、「擬」弥生土器と用いる場合は、①動詞　なぞらえる。まねる。似る。似せる。と③修飾語　まがい。もどき。にせ。という意味であるだろう。また、本来であれば無文土器を「擬する」という意味で、『「擬」無文土器』の場合、語彙的には無文土器を対象として真似をしたことになる。同様に、『「擬」弥生土器』とした場合は、弥生土器を擬する、模倣したものである。そういう意味では、今日的な使用方法では③まがい、もどきの意味に近いかもしれない。「擬」無文土器であれば、まがい無文土器、無文土器もどきと理解できる。古澤義久の助言によれば、ハングルに「擬」に対応する語句がないという。そうであれば、韓日交流を検討するのであれば、「変容」無文土器、「変容」弥生土器という言葉がよいと思う。ほかにも、類する：似かよう。類似する点がある。類化：混合する・吸収する・同化するという語もある。

## 第2節 環有明海地域における弥生時代の日韓交流 ～交流拠点としての環有明海地域の評価～

### 1. はじめに

これまでに、対馬海峡を介した弥生／無文土器・原三国時代における集団の交流は断続的に認められ、列島に大きな影響をもたらした。水田稲作農耕の伝播（弥生時代早期～前期初頭）、金属器の招来・クニの形成（弥生時代前期末～中期前半）、楽浪・三韓との交易（弥生時代後半期）など、交流が果たした役割は大きい。特に無文土器時代後期（水石里式期）における日本列島への移住、集団の同化の過程が列島出土の無文土器系土器の分析や金属器の流入、生産との関係から示されてきた。近年では、韓半島においても弥生系土器の出土事例が増加し、弥生人の韓半島での居住・交流、後期無文土器人の列島での居住・交流など双方向の理解が進みつつある（白井 2001、武末 2008・2013、李 2009、川上 2012、武末・山崎 2015 など）。

「魏志」倭人伝からも窺える、大陸・朝鮮半島から対馬・壱岐、そして玄界灘沿岸へ至るルートが当該期の主要な航路として位置づけられるが、縄文時代後期から拓かれた腰岳産黒曜石の流通や稲作開始期の支石墓の分布、弥生時代中期の「南海産貝の道」、古墳時代の阿蘇溶結凝灰岩製石棺の搬送航路など、時代を違えても多くの有明海や西北九州を行き来する海路が開拓されていることに気付く。



第 102 図 環有明海地域

当時、多くの準構造船が航行していたらう有明海は閉鎖性の強い内湾で、約 1700 k m<sup>2</sup>の水面面積を有し、さらに約 8000 k m<sup>2</sup>の河川流域を持っている（第 102 図）。有明海の特徴は干満差が大きいことであり、湾口の早崎瀬戸で 3～4 m、湾奥の佐賀平野付近では 5 m 近い。この大きな干満差から潮流も比較的早く早崎瀬戸で 7～8 ノットで、湾の奥に行くほど弱くなる。早崎瀬戸から流入した海水は天草下島から大矢野島をかすめて、島原半島沿いに北上し、筑後川河口付近へ至る。引き潮の際には、佐賀平野沿岸部を南下し一部は諫早湾に流入しながら島原半島に沿って早崎瀬戸に戻る（有明海 2006）。沿岸域は地形環境から大きく東西南北の 4 地域に区分できる。有明海北部には筑後川流域に筑紫平野がひろがる。筑紫平野はさらに細分され、北東地域の両筑平野、南東地域の南筑平野、西部の佐賀平野に分かれる。有明海東部の肥後地域海岸部には、熊本平野をはじめとした小規模な海岸平野が連続する。これらに対して、有明海西部の佐賀・長崎の県境付近から島原半島にかけてや南部の天草諸島・宇土半島では、台地・丘陵地が海岸近くまでせり出し、平坦地は少ない。

本稿では主に弥生時代前期から中期、韓半島の無文土器時代後期（粘土帯土器）の時期を対象に日韓交流を考察するが、特に有明海北部の筑後川流域や佐賀平野、有明海東部の



熊本平野では多くの円形粘土帯土器関連資料が出土している。果たして、これらの円形粘土帯土器をたずさえた渡来人は、朝鮮半島南部から対馬・壱岐を経由し、玄界灘沿岸にいたり、さらには二日市地峡帯を抜けて、筑後川下流域、有明海へ至るのであろうか。弥生時代の日韓交流について、玄界灘沿岸地域の動向だけで検討するのではなく、環有明海地域の果たした役割を主題に考察する。

## 2. 弥生土器と無文土器の製作方法

### (1) 口縁部製作工程における比較

先学によって、無文土器甕・高杯・壺など全般にわたって、その特徴（胎土・成形・調整・焼成・色調）や製作工程復原についての詳細な検討がなされている（後藤 1979、中島 1985、片岡 1993）。それらに導かれながら、資料増加による弥生土器の地域編年や検討が進んだ現在、粘土帯土器と在地の貼り付け突帯を持つ土器、特に甕の製作について、改めて比較検討しておきたい。当地域にあっても、無文土器甕を特徴づける口縁部への粘土紐（帯）方法は、重要な一指標である。弥生時代前期から中期にかけての在地土器には、口縁部に突帯を貼りつける器種が多くみられる。この属性の検討は単なる無文土器と弥生土器との峻別だけでなく、無文土器と弥生土器の製作技術の影響を図る際にも有効な視点となる。特に、当地域においては粘土帯土器についての理解は一定の共通認識が図られていると考えられるものの、依然、変容無文土器系土器（「擬」無文土器）と弥生土器との峻別には困難なケースが伴うため、基本的な成形原理を再抽出することによって、その区別を明確に示すことが本検討の目的である。

#### 〈粘土帯土器甕〉

円形粘土帯土器甕では、胴部整形・調整の際に、粘土紐接着面にあたる端部付近をやや薄めに成形し、その後、先端を細く伸ばす。次に直径約1 cm 前後の粘土紐を端部に水平に巻きつけるように貼り付けるが、その位置は端部よりやや下で、先の細い端部を上方から外側へ粘土帯に巻きつけるように折り返す（写真1）。これは、粘土紐と接着面との間に空間を持つことから理解できる。貼り付け方法は、胴部内面から指による粘土のナデ延ばしによる。胴部内面上方には縦方向の指ナデによる圧痕を残し、また器壁は貼り付け面の直下で一番薄くなる。その後、個体によっては、外面において粘土紐を所々指で押さえて貼り付けを強固にしている。こうした貼り付け方法の結果、粘土紐断面は取り付け時とほとんど変わらない円形ないし楕円形のままであり、口縁部上端もまるくなる。また、粘土紐は、紐自体に大きな形の崩れがみられないことから貼り付け時にはある程度乾燥させた生乾きの状態で貼り付けを行った可能性も考えられている。



写真1 粘土帯土器  
断面（横隈鍋倉遺跡）

つまり、円形粘土帯土器の成形原理は、胴部と粘土紐（帯）の取り付けに関し、胴部側の粘土の動きが主体となり、擬口縁（先端部）が可変的である。その後の三角形粘土帯土器段階では、口縁部粘土帯の中央部が強く押されてへこみ、断面ソラマメ形を呈するものが出現し、盛行する段階があるが、この段階においても擬口縁（先端部）を粘土帯に巻き込んでおり、その原理は基本的に変わっていない。

無文土器に特徴的な底部は、円盤貼り付けで比較的薄い作りをしている。胴部は丸みを帯びるものが多く、調整は内外面ともナデで仕上げられる。タタキのあとを残すものもある。弥生土器が回転台を使用したとされるのに対し、無文土器は回転台を使用せず、弥生土器と比べると均整が保たれていない印象がある。

さて、当地で弥生時代前期末～中期初頭にみられる、口縁部断面が三角形をなす甕もまた、無文土器と同様に粘土紐を巡らせて口縁とし、その剥離面も無文土器の粘土紐剥離面と同様の感を呈す。

#### < 亀ノ甲式土器・城ノ越式土器 >

亀ノ甲式土器は、古くは板付遺跡報告中の甕形土器 E 類として注意され

(森・岡崎 1961)、その後、名租の八女市亀ノ甲遺跡調査報告における小田富士雄氏分類の「甕形土器 C 類」が該当

し、「直口またはやや内彎する口縁の上端外面に刻み目がある粘土帯を貼りつけて、断面を水平あるいはやや外下がり

に仕上げたもの。口縁の少し下にも一条、まれに二条の刻み目ある突帯を巡らす

ものが一般的な亀ノ甲タイプの理解の基となっている(小田 1964)。当地域の弥生前期土器を特徴づけるもので、特に佐賀平野周辺では弥生前期に亀ノ甲タイプと総称される甕が広く分布する。中野充氏よれば佐賀平野でみられる甕口縁部分類のいずれもが、口縁部への突帯の取り付けは、粘土紐を擬口縁へ押し付けるものである(中野 1997)。様々な口縁部突帯バリエーションはその押し付けの度合いにより生まれている。擬口縁は押し付けやナデによって多少変化することはあっても、貼り付けの(可変)主体は突帯(粘土紐)にある。

城ノ越式土器は中期初頭土器の標識名であり、甕の口縁部は如意形から変化した屈折ないし逆 L 字や、亀ノ甲式から変化した平坦な断面三角形が主流であり、亀ノ甲式から城ノ越式への変遷をたどることができる。

城ノ越式も擬口縁に外側から粘土紐を押さえつけて貼り付ける。城ノ越式には、口唇の上部から粘土紐を押しつけて断面三角形の突帯にするものがみられるが、これについても、粘土帯を主体とした貼り付けであると理解できよう。

つまりは、亀ノ甲式から城ノ越式における口縁部への突帯(粘土紐)貼り付け原理は、貼り付ける粘土紐側を可変することにあり、仕上げにおいても本来の粘土紐の接合部位の痕跡を残さないように丁寧なナデが行われ、粘土紐自体の存在感を失わせている。

これら両系統の属性の強弱により、無文土器の弥生土器化を論じることが可能である。基本的に粘土紐を口縁端部のやわらかい段階でのばして内側から巻き込む手法が無文土器系統の手法で、擬口縁を作り、外側から貼り付ける(かぶせる)手法が弥生土器系統の技法であると考えて、分析を進めたい。無論、口径や全体の大きさ、器面の調整などにも無文土器/弥生土器それぞれの特徴がみられるので、総合的な諸属性をもとにした検討



写真 2 城ノ越式土器断面(三沢蓬ヶ浦遺跡)

第 8 表 粘土帯土器・弥生土器甕比較（古澤 2016）

	粘土帯土器		弥生土器		種別
	製作技法	外観状の特徴	製作技法	外観状の特徴	
口縁部	粘土帯貼り付け・折り返し	粘土帯	積み上げ	し字口縁(鋤先口縁)	視覚で模倣可能
口縁部側面観	粗雑なナデ・指押さえ	いびつ	強いヨコナデ	直線的	
口縁部上面観		いびつ・楕円形		真円に近い	
粘土紐接合	比較的広い粘土貼り付け	—	比較的狭い粘土紐積み上げ	—	土器製作の流儀・癖
調整と口縁部作出の順序	ハケメ→口縁部粘土貼付→ナデ	—	口縁部作出→ハケメ→ヨコナデ	—	

が必要である。

## （２）口縁部作出と胴部調整の順序

最近、壱岐市原の辻遺跡の粘土帯土器を詳細に観察した古澤義久氏が「ハケメ調整・口縁部作出順序によって無文土器／弥生土器を区別できる」という興味深い指摘を行った（古澤 2016）（第 8 表）。

粘土帯土器では、まず外器面に全体的に口縁までハケメ調整を行った後に、口縁部の粘土帯土器を貼り付けており、弥生土器では口縁部を作出してからハケメ調整・ヨコナデを行っているという。口縁部は弥生土器を意識して製作されているものの、ハケメ調整・口縁部作出順序が粘土帯土器と共通するものの存在を指摘して、「擬弥生土器（甕）」を抽出した（写真 3 左）。

筆者も同様の視点で有明海北部筑後川流域の資料について検討したがそのまま当てはまらなかった（写真 3 右）。筑後川流域の弥生中期初頭（城の越式）以降の甕の口縁部作出と胴部調整は、

①成形（粘土紐積み上げ・指オサエナデ・タタキ等）
②胴部調整第 1 段階（粗い（ハケ）調整）
③口縁部作出（貼付）（胴部沈線（最終）・突帯貼付）
④口縁部（ハケ工具押圧・）ヨコナデによる貼付強化・仕上げ（指オサエ痕を平滑化）
（⑤胴部調整 2 段階：仕上げ調整（丁寧なナデ・板ナデ、ハケ、ミガキ風ナデ等）を施すものもある）
（胴部沈線（最終）・突帯貼付）

弥生土器甕は成形に近い段階でも粗いハケ調整を口縁部付近まで行っている。口縁貼付後、再度、口縁部付近を中心に仕上げの調整を施す（写真 3 右）。

地域ごとの土器様式中のコンテキストで検討すべき事象であり、基本的に筆者が日常的に目にする筑後川流域の土器観察、韓国での資料調査で粘土帯の指押さえ痕／口縁部ヨコナデに注意をし、実測作業を進めた経験がある。弥生土器は口縁部付近の指オサエ痕を消そうとする意識が強く、逆に無文土器では指押さえ痕を残すことが多いのが特徴ということがいえる。これらも、傾向として見られるのみで、弥生土器にも仕上げが弱く、口縁部付近の貼り付け指オサエ痕を残すものも少なからず含まれている。

口縁の貼り付けの段階がいつなのか。先学も土器製作技術には言及している。「口縁部に粘

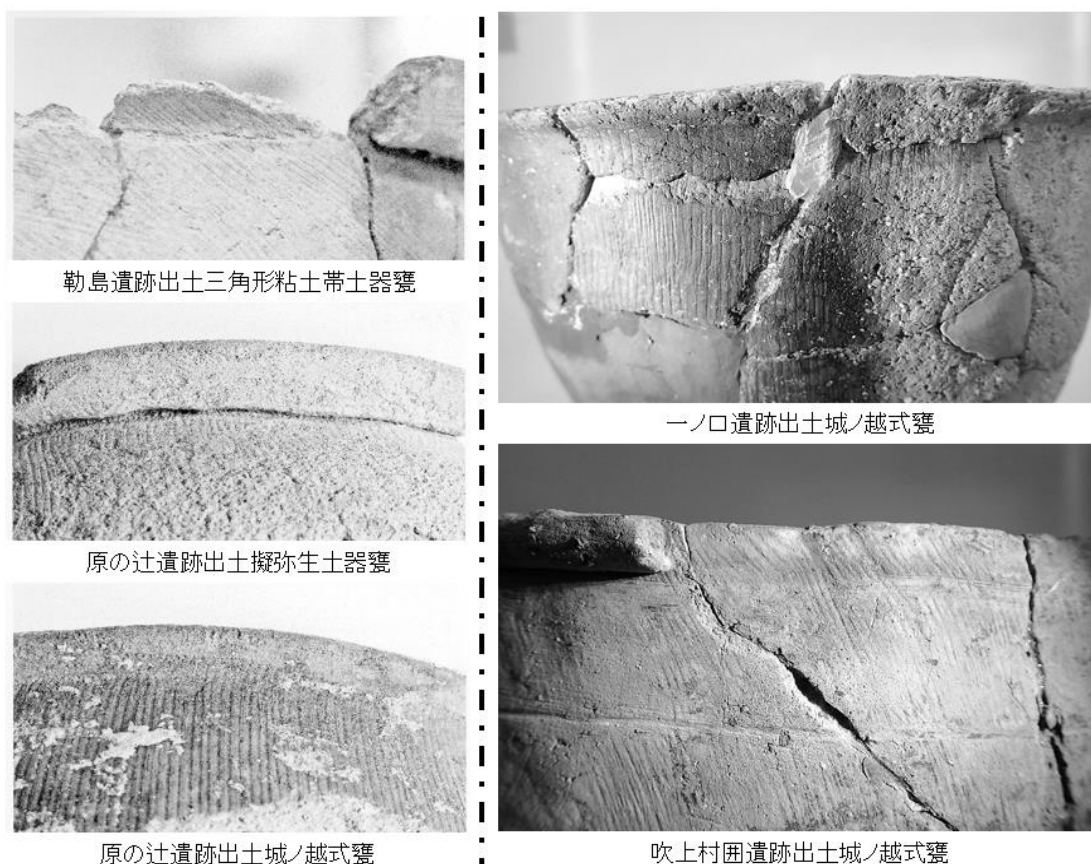


写真3 口縁部作出と胴部調整の順序（左：原の辻（古澤 2016）右：筑後川流域）

土紐を取り付ける前に内外面を調整する。粘土紐は外れやすく、それがとれた破片には粘土紐をまきつけた跡が浅い溝状に口縁部をまわり、そこに粘土紐とりつけ前の器面調整の痕が認められる」（後藤 1979）「粘土紐貼り付けに際しては、胴部調整後に行われる」（中島 1985）。調整→口縁部貼付は無文土器と弥生土器に共通する。

### 3. 環有明海地域における粘土帯土器とその分布

次に各型式土器の分布傾向をみてみたい。円形粘土帯土器（擬円形粘土帯土器）については、片岡 1999 の集成をもとに最近の事例を加えた。<sup>（註1）</sup>

#### 〈円形粘土帯土器〉（第 103 図）

筑後川流域では、筑紫野市から小郡市にかけての低丘陵部に密に弥生前期から中期にかけて隆盛する集落が多く分布するが、その三国丘陵の遺跡群（三国の鼻遺跡 横隈北田遺跡 横隈鍋倉遺跡 みくにの東遺跡 横隈山遺跡第7地点 隈西小田遺跡第5地点）で、甕・壺・高杯・碗などの複数機種が確認され、出土量も 100 点を超えている。最近、三国丘陵でも津古内畑遺跡で新たに甕、壺が確認された。朝倉市上の原遺跡で甕口縁部、久留米市仁王丸遺跡で牛角状把手が確認され、三国丘陵からやや離れた地点での確認例としてその広がりが推測される。佐賀平野では前期末～中期の佐賀平野西部の拠点集落である土生遺跡群（土生遺跡・久蘇遺跡・仁俣遺跡）で甕・壺・高杯・蓋・鉢など各器種が多数確認されている。土生遺跡群は牛津川や嘉瀬川水系が形成した扇状地、沖積平野に立地している。資料を実見した結果、吉野ヶ里遺跡や鍋島本村南遺跡でも円形粘土帯土器甕の出土が確認できた。これらの 3 遺跡は地域の核となる遺跡で、円形粘土帯土器段階

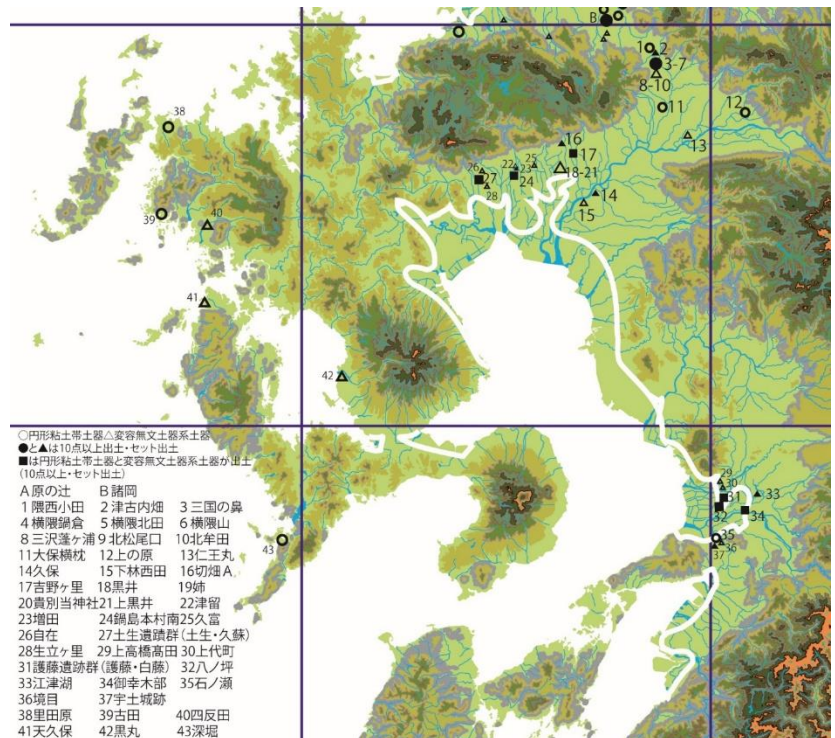
から擬円形粘土帯土器への変化が追え、周辺集落への擬円形粘土帯土器の広がりを示している。熊本平野においては、熊本平野西部（護藤遺跡 八ノ坪遺跡）、熊本平野東部（江津湖遺跡 御幸木部遺跡）、宇土半島基部（石ノ瀬遺跡）の3箇所の出土集中遺跡が分布している（片岡 2006、林田 2008）。いずれも立地は自然堤防上～氾濫原の低地部分にあたり、甕を中心に壺・高杯・鉢なども確認される。

三国丘陵域や佐賀平野の土生遺跡群、吉野ヶ里遺跡、鍋島本村南遺跡、熊本平野の護藤遺跡、八ノ坪遺跡、御幸木部遺跡などでは核となる遺跡で出土数が10点以上、複数器種の確認ができる。

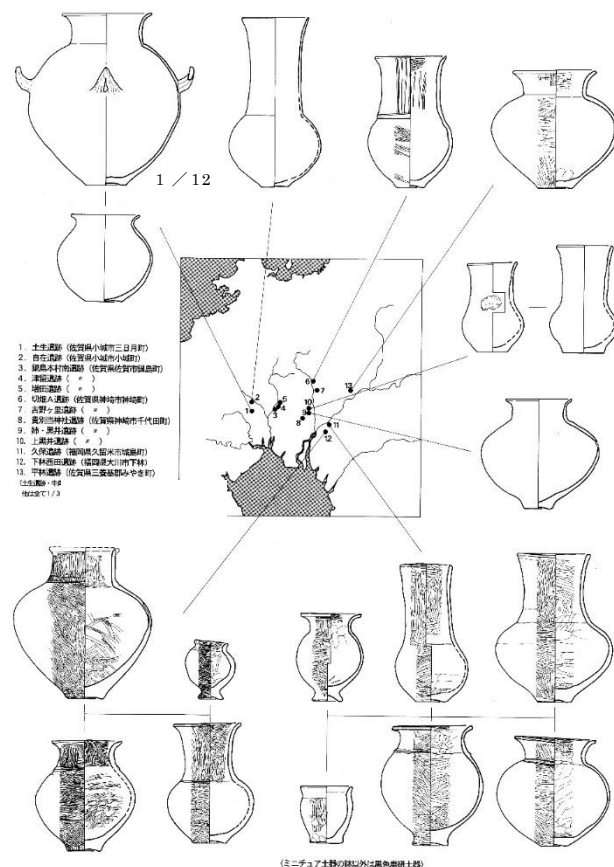
#### ＜変容無文土器系土器 （円形粘土帯土器段階）＞ （第103・104図）

筑後川流域では、三国丘陵の遺跡群（三沢蓬ヶ浦遺跡 三沢北松尾口遺跡 北牟田遺跡等）で甕や鉢が少数確認された。筑後川下流域でも久留米市久保遺跡や大川市下林西田遺跡で出土例がある。久保遺跡からは甕はなく、長頸壺を中心とした黒色磨研土器が多数出土した。下林西田遺跡からは甕・牛角状把手・黒色磨研壺が出土している。

佐賀平野では、この時期多くの出土遺跡が確認される。土生遺跡群からは、多数の円形形粘土帯土器の「擬化」が確認でき



第103図 環有明海における円形粘土帯土器の分布  
（75 kmグリッド）



第104図 有明海北岸の黒色磨研土器  
（1／6）（岡 2006）



る資料があり、既に土生Ⅰ～Ⅲ式として整理されているところである（片岡 1993）。その分布は拠点的な集落を中心としたものであり、牛津川上流域の土生遺跡群周辺（生立ヶ里遺跡：黒色磨研長頸壺 甕、自在遺跡：黒色磨研長頸壺）、田手川中流域吉野ヶ里遺跡周辺（吉野ヶ里：甕・牛角状把手壺、切畑 A 遺跡；黒色磨研長頸壺・高杯・甕）、中地江川中流域姉遺跡周辺（姉：牛角状把手ほか、上黒井遺跡：黒色磨研長頸壺、黒井遺跡：黒色磨研壺、貴別当神社遺跡：高杯 黒色磨研長頸壺）、嘉瀬川中流域鍋島本村南遺跡周辺（鍋島本村：甕・牛角状把手壺、増田遺跡：牛角状把手壺・高杯、津留遺跡：牛角状把手壺）の大きく 4 地域に分かれる。

増田遺跡や津留遺跡では牛角状把手壺を使用した甕棺墓が確認され、自在遺跡では土壙墓副葬品として黒色磨研長頸壺が出土している。

熊本平野では、先に示した熊本平野西部、熊本平野東部、宇土半島基部の 3 地域を中心として、それぞれ引き続き出土遺跡が確認されている（林田 2008）。熊本平野西部の八ノ坪遺跡では牛角状把手壺・長頸壺・甕・高杯が多数出土しており、牛角状把手壺を甕棺に使用した例も確認されている。

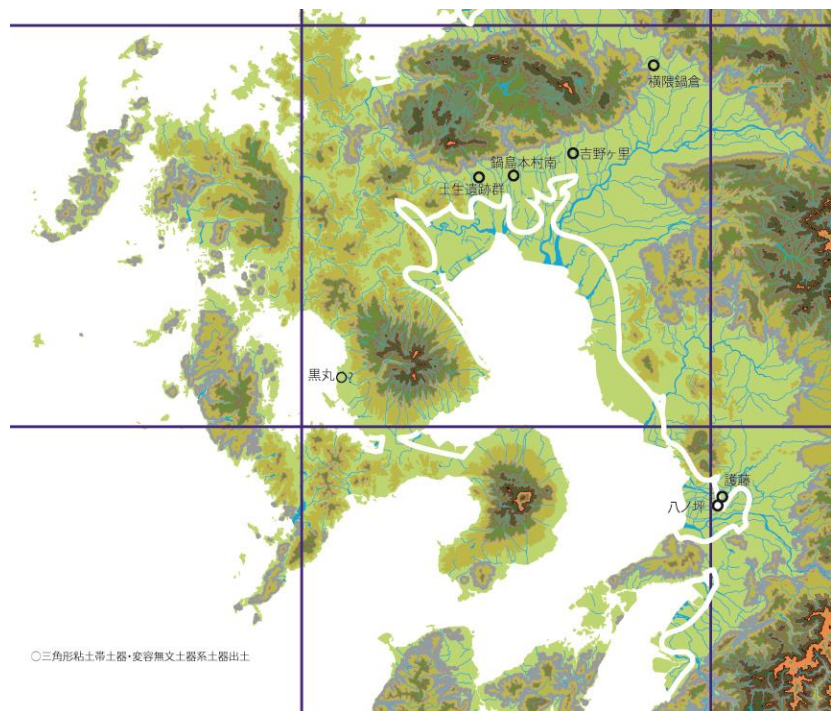
#### ＜三角形粘土帯土器＞（第 105 図）

私は以前、当地域での三角形粘土帯土器の確認例は極端に少なくなり、壱岐などの対馬海

峡付近や玄界灘沿岸地域に分布域が固定されると述べたが（山崎 2010a）、改めて佐賀平野の資料を確認したところ、吉野ヶ里遺跡や鍋島本村南遺跡、土生遺跡でも三角形粘土帯土器段階の無文土器系土器の出土を確認した。これは、在地の甕型土器のなかに埋没している可能性が高く、詳細な観察が求められる。

城ノ越式～須玖式甕が  
佐賀平野や熊本平野では

口縁部が大きく内傾し、全体の器形が樽型を呈するタイプが見られるが、これは、朝鮮半島南部の粘土帯土器に共通する器形である。器形への視覚的な模倣だけでなく、先に示した口縁部成形や底部成形ほどの程度無文土器との接触があるのか、継続的な見直しと詳細な資料調査が要求される。機会をあらためて、評価したい。

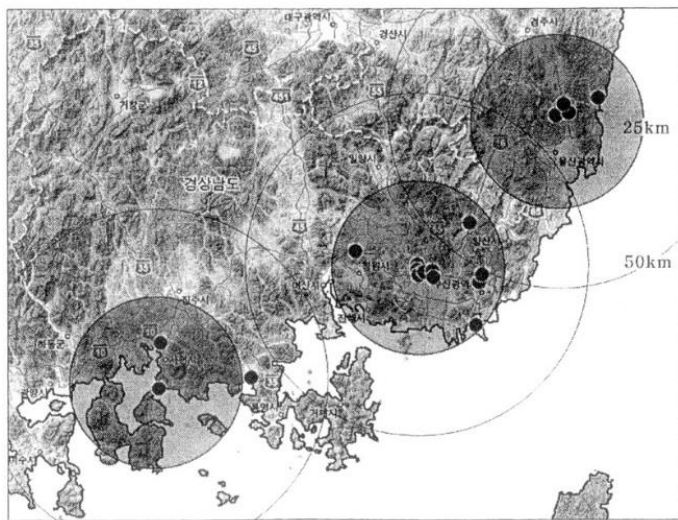


第 105 図 環有明海における三角形粘土帯土器の分布  
（75 km グリッド）

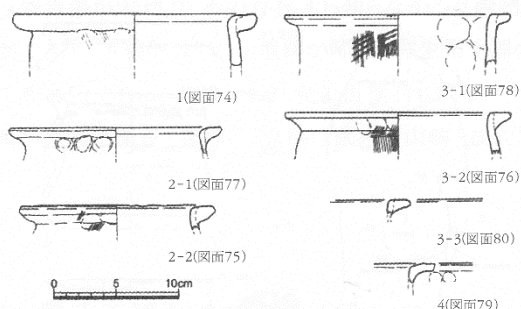
#### 4. 日韓における土器移動の変遷

近年の成果から、玄界灘沿岸や内陸部において散在的な無文土器系土器の出土が追加されるものの、古くから知られる福岡県諸岡遺跡や三国丘陵地域、土生遺跡などの集中出土の状況に大きく変更はなく、新たに、熊本平野でも集中出土する状況が加わっている。渡来人は交流拠点を核とした動きがうかがえる。また、三国丘陵地域の無文土器と共伴する弥生土器の関係を再検討した結果、弥生時代前期中頃（板付Ⅱa式新相）より少数の水石里式無文土器、擬無文土器が確認でき（松菊里型土器の出土とも一部重なり）、従来よりも長期間にわたる流入が認められた。当初は散在的に少量の甕が出土し、前期末に至って甕・壺・高杯・鉢などセットでの集中出土遺跡がみられるほか、韓半島の集落構造と類似する集落跡が諸岡遺跡や三国丘陵の鍋倉遺跡、北松尾口遺跡等で認められ、渡来人の居住、集団の接触について具体的に言及できるようになった（李 2009、埋文研究会 2010）。

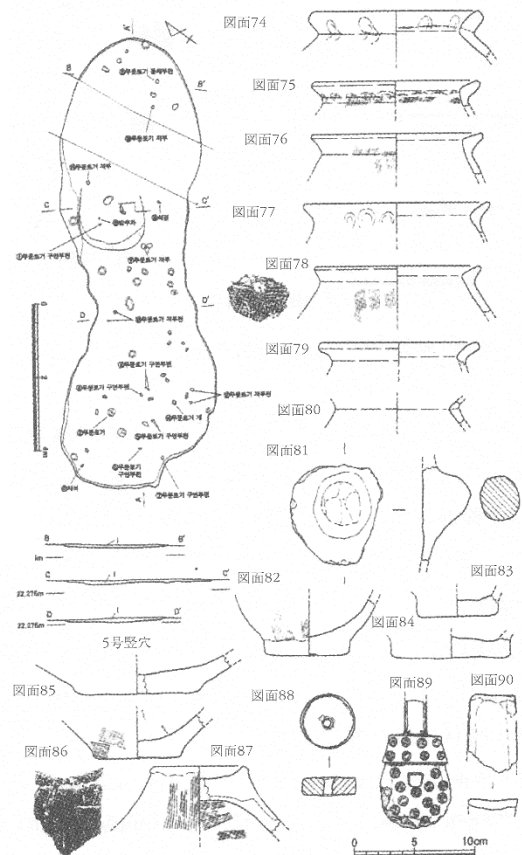
土生遺跡の堅穴状遺構も同じ可能性があるだろう。中期初頭以後には、特に有明海沿岸地域（佐賀平野や熊本平野）で擬無文土器が多く認められ、渡来人の居住と集団の同化が行われていたことが推定される。続く靫島式無文土器系土器の出土は、水石里式無文土器系土器の分布と異なり、対馬や壱岐原ノ辻遺跡で集中的にみられるほかは、北部九州や中国地方の沿岸域で少量出土する程度となり、大きく変化する。有明海沿岸地域でも、資料



第 106 図 韓半島南部の弥生系土器出土分布（李 2011）



第 107 図 下西里遺跡 5 号堅穴出土弥生系土器  
（武末・山崎 2015）



第 108 図 下西里遺跡 5 号堅穴出土遺物  
（武末・山崎 2015）

の探索を進めた結果、水石里式土器の流入以降も継続する吉野ヶ里遺跡、鍋島本村遺跡、土生遺跡で靫島式無文土器系土器が出土している。特に在地の土器の器形や口縁部の見た目の特徴が韓半島と共通する部分、もしくは影響を受けた部分があり、在地の土器様式に埋没している可能性があるので意識的な探索が必要である。新たに靫島式無文土器系土器を確認できた遺跡が追加されたが、その数は少ない。玄界灘沿岸地域でもこの時期の無文土器の出土は少なく同様の傾向であるといえ、この時期は逆に韓半島で弥生系土器が確認される時期でもある。

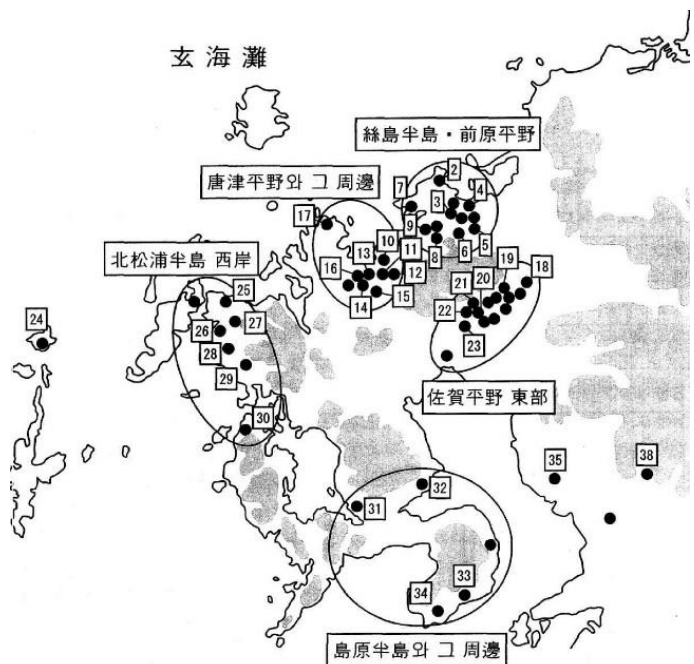
韓半島では、弥生系土器の出土遺跡は慶尚南道の海岸域である泗川地域、金海地域で知られており（第 106 図）、近年、蔚山地域でも確認例が増えつつある（第 107・108 図）。図に一例を示したが、靫島式と須玖式の折衷がみられ、一見ただけではどちらの影響が強いのか判断が難しい。同様の状況が佐賀平野の土生遺跡周辺でも確認できる。

靫島式土器段階には須玖Ⅰ・Ⅱ式土器が集中して出土しているが、近年、韓半島でも弥生早期や前期の土器が少数ながら確認され始めている<sup>(3)</sup>。弥生系土器の出土は少量で散発的なものが多いが、泗川地域の靫島遺跡や金海地域では集中的に出土する遺跡が確認される（李 2009・武末 2010）。

以上から、集中出土の見られる前期末段階における韓半島からの渡来は一時的な交流経路の形成により達成されたものではなく、弥生文化の伝来以降、形を変えつつも、石器石材の流通等によって維持された経路が存在し、前期末段階以降、既存の経路に則して顕在化するものであるといえる。環有明海地域では、すでに弥生時代早期の支石墓の分布からも韓半島との交流や影響がうかがえることも重要である。その後、無文土器系土器・弥生系土器の分布は大きく偏りをみせ、交流拠点的な遺跡が認められるようになる。中期前半から後半における靫島遺跡、金海地域の遺跡群や中期末以降の原ノ辻遺跡が該当し、交易拠点として整備される。なお、原ノ辻遺跡では三韓土器・楽浪土器の搬入の継続から後期後半までその交易拠点として維持されていることがわかる。

## 5. 環有明海地域における日韓交流

環有明海地域は先の円形粘土帯土器の分布から、各平野の拠点となる集落において渡来人の存在がうかがえ、特にその粘土帯土器の「初期鋳型」の分布が重なることから、渡来人によって金属器生産がもたらされたと位置づけられた（片岡 1999）。佐賀平野では、粘土帯土器が出土する吉野ヶ里遺跡、鍋島本村南遺跡、土生遺跡では青銅器の鋳型各種をはじめとした鋳造関連遺物が出土しており、同じく熊本平野の八ノ坪遺跡でも青銅器鋳型や送風管、銅片、銅滓などが出土している。弥生時代中期前葉以前の「初期鋳型」は佐賀平野を中心とした環有明海地域で発見されているが、近年、



第 109 図 日本列島の支石墓の分布（武末・平郡 2009）

第 8 表 日本列島の支石墓（武末・平郡 2009）

番號	地域	遺蹟名	彌生 早期	弥生前期			彌生 中期	立地	遺構	他部材 共存	埋葬主體部			出土遺物	人骨 (個)
				板付 I	板付 II a	板付 II b					石棺	土壇	羨棺		
1	糸島半島 前原平野	畑田						段丘 上	5	있음		●		小壺	2
2		小田	— ? —					砂丘 上	2	있음	●		●	小壺	
3		志登						沖積台地	10	있음		●		磨製石鏃・打製石鏃	
4		井田用倉						微高地	1			●		管玉・磨製石鏃	
5		三雲ヶ崎						丘陵 上	1		●			管玉	
6		長野宮ノ前						段丘 斜面	2	있음		●	●	小壺・磨製石鏃	
7		新町						砂丘 上	7+	있음		●	●	小壺	
8		石崎矢風						微高地	3	있음		●		小壺	
9		石崎曲り田						丘陵 上	1	있음		●		小壺	
10		五反田	— — — —					丘陵 上	5	있음		●		小壺	
11	唐津平野	岸高	— — — — — — — —					丘陵 上	9	있음		●		小壺	14
12		葉山尻						丘陵 上	4	있음		●	●	小壺・打製石鏃	
13		迫頭	— — — — — — — —					丘陵 上	3			?			
14		瀬戸口						丘陵 上	12	있음	●		●		
15		森田	— — — — — — — —					丘陵 上	16	있음		●		小壺	
16		割石	— — — — — — — —					丘陵 上	6	있음		●			
17		大友						砂丘 上	13	있음		●	●	小壺・貝輪	
18		香田						中位段丘 上	1			●		小壺	
19		戦場ヶ谷						中位段丘 上	1			●			
20		久保泉丸山						中位段丘 上	118	있음	●	●	●	小壺・鏃・鏃・高坪・管玉	
21	佐賀平野 東部	黒土原						中位段丘 上	8	있음		●		小壺	20+
22		磯石						中位段丘 上	23+	있음		●		小壺・管玉・土製勾玉	
23		南小路						扇状地	1			●			
24		宇久松原						砂丘 上	10	있음		●	●	小壺・貝輪	
25		里田原	— — — — — — — —					微高地	3+		●				
26		大野台						丘陵 上	46+	있음		●		鏃形大珠	
27		小川内						丘陵 上	10	있음	●			小壺	
28		狛山						丘陵 上	7	있음		●		鏃形大珠	
29		四反田						微高地	1				●	小壺	
30		天久保						丘陵 上	7	있음	●			管玉	
31	島原半島 コ  주변	風観岳						山外 鞍部	35	있음	●	●		小壺・打製石鏃	20+
32		井崎						丘陵 上	7+	있음				小壺	
33		西鬼塚						丘陵 上	1			●		小壺	
34		原山						丘陵 上	60+	있음	●	●	●	小壺・管玉・打製石鏃	
35		年の神						丘陵 上	1				●	貝輪	
36		藤尾						丘陵 上	9	있음		●	●		
37		塔の本						?	2	있음					
38		入来						砂丘 上	1				●		
39		下小路						砂丘 上	1				●	貝輪	
40		山口	中ノ浜					砂丘 上	1			?			

福岡県須玖タカウタ遺跡では弥生時代中期前半にさかのぼる細形銅戈・有柄銅剣、多鈕鏡の鋳型が発見されている注目を集めている（春日市 2017）。青銅器生産が有明海沿岸だけでなく、玄界灘沿岸地域においても始まっていたことを示唆する。さて、環有明海への稲作農耕文化やこのような金属器生産の技術はどのルートで受容されるのだろうか。片岡宏二は円形粘土帯土器の分布・変遷から、福岡市諸岡遺跡や小郡市三国丘陵にいた渡来集団の一派が有明海を通じて熊本平野まで一気に南下したと考えている（片岡 2000）。

稲作農耕文化の伝播は玄界灘沿岸に位置する平野（唐津平野、糸島平野、早良平野、福岡平野）から受容が始まったことに異論はない。しかし、円形粘土帯土器の分布（第 103 図）を読み解くと、玄界灘沿岸から二日市地峡帯を抜けて筑後川流域、有明海へ至る単一のルートだけではなく、北松浦半島から西回りで有明海に至る海上ルートも想定されるべきであろう（註 2）。また、唐津平野から松浦川を上る「唐津街道」で小城（土生遺跡群）に至る、現 JR 唐津線のルートも候補である。土生遺跡群もそのような交通の要所に位置している。

韓半島との多様な交流ルートを復元する上では粘土帯土器が出土する弥生時代前期から中期だけでなく、前後の時代、地域の歴史的脈絡も参考にしなければならない。

弥生時代早期に、朝鮮半島青銅器時代の主要な墓制としての支石墓が九州西北部から玄界灘沿岸に出現し、弥生文化の開始とともに現れる文化要素と位置付けられる（端野 2001）。唐津平野、佐賀平野、北松浦半島西岸、島原半島周辺では支石墓のみで構成される墓地が多く、糸島半島では早期には支石墓とそれ以外の墓制が共存し、墓地の中心に支石墓があり、それぞれの地域で墓地構成・構造や副葬品に違いがある（第 119 図・第 9 表）。日本の支石墓は起源地の形態をそのまま見せるものではなく、九州北部で出現した時点で既に在地的要素を含んで変容した形で築造されており、縄文時代から続く葬制・墓



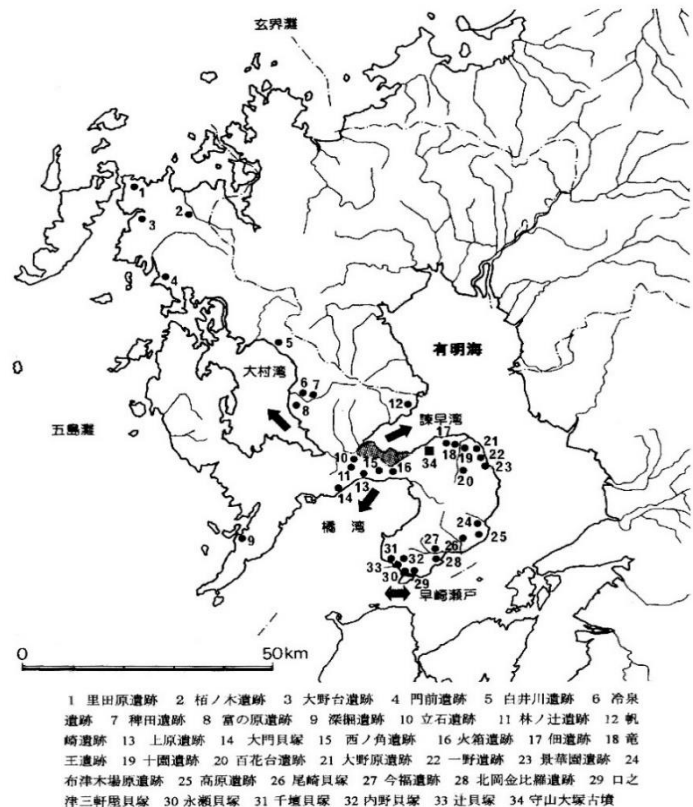
制の要素と韓半島からの影響を有する文化が重層的かつモザイク状に浸透していることが看取できる（平郡 2018）。また、弥生時代後期の肥前型器台の分布が有明海沿岸地域の河

川流域の集落であり、弥生時代の有明海をめぐる交流は、内海での海上交通にとどまらず、内陸水運としての河川について注目すべきと平成 23・24・26 年度長崎県考古学会・肥後考古学会の合同学会で提言されている（宮崎 2015）。弥生時代後期の肥前型器台だけでなく、弥生時代中期の島原市景華園遺跡の青銅器を保有する集団の大型甕棺墓群の存在や大村市富の原遺跡の甕棺・鉄戈出土から北部九州と大村湾・島原半島との関係性も注目される（稲富 1995、小田 1983、小田・上田 2004）。

さらに、宮崎貴夫氏は島原半島周辺の海浜集落を検討し、「関門」「船越」論を展開している（宮崎 2012）。有明海出入口の「早崎瀬戸」に面している弥生時代から古墳時代の集落立地について、有明海の水先案内を行う海人集団を想定した（図 14）。幅が 3 km ほどの早崎瀬戸は、潮の満ち引きに応じて川のように激しく流れるという。外海から吉野ヶ里遺跡などの遺跡がある佐賀平野や筑後平野の弥生集落の港への出入りには早崎瀬戸を通過しなければならず、干満の差が激しい有明海では大形船を航行して港へ導くには専門の水先案内人を必要としたと考えた。また、有明海と大村湾をつなぐ「諫早地峡」（約 4 km）では、細形銅剣を出土した立石遺跡のある丘陵から大村湾にそそぐ東大川上流部へは 2 km の距離しかなく、島原半島の付け根部分にも「愛津地峡」（約 2 km）がある。「早崎瀬戸」の海人集団の遺跡（三軒屋・内野・千壇・辻・永瀬貝塚）、地峡（船越）を押さえる遺跡（立石・西ノ角・火箱遺跡）が、弥生時代中期の吉野ヶ里遺跡などの拠点集落の成立と呼応して出現することが推測され、有明海の入出、航海を行う、諫早湾から大村湾・橘湾への船越を管理していた海人集団の存在を評価した。

背振山地の東西、そして、海上ルートが一体となって、当時の交流回路が存在したものと思われる。今後、そのような立体的で多様な交流ルートの探索を進めていかなければならない。

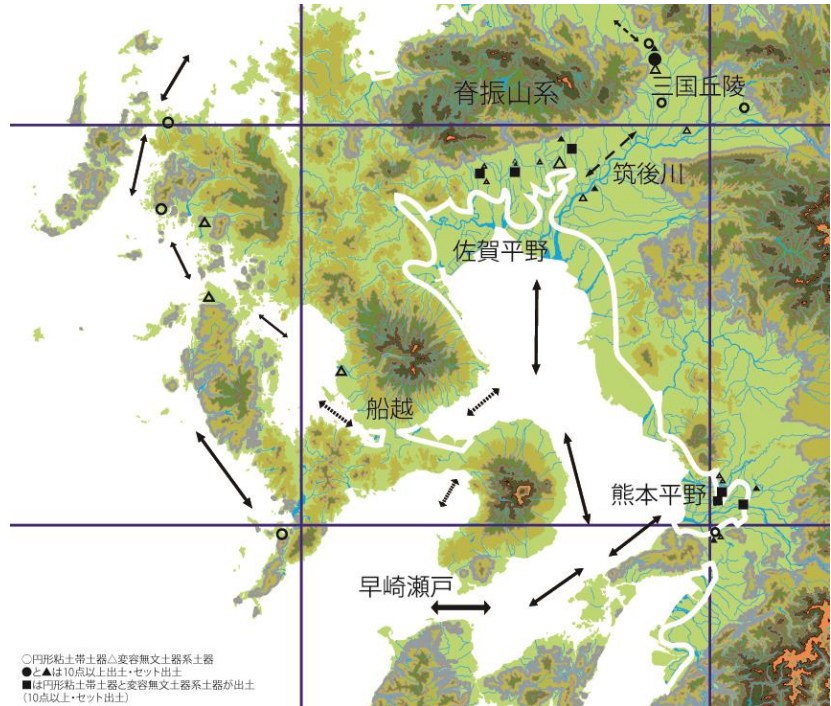
以上の先行研究を参考にすれば、有明海北岸の円形粘土帯土器が集中して出土する吉野ヶ里遺跡、鍋島本村南遺跡、土生遺跡群ともに弥生時代の海岸線から河川を数キロさかのぼる位置に立地している。



第 110 図 島原半島周辺の弥生～古墳時代初頭の遺跡分布  
（宮崎 2012）



有明海南東部の熊本平野の遺跡群も、早崎瀬戸から宇土半島に沿って直進すると突き当たる、弥生時代には内湾となっていた箇所である。いずれも、準構造船を利用した航行で行き来しやすい立地であり、「津」としての評価を今後、深めていかなければならない。ちなみに、三国丘陵も二日市地峡帯の南側の出入口にあたり、福岡平野と筑紫平野・有明海をつなぐ要衝の地域である。三国丘陵では大規模造成によって広大な面積を調査した



第 111 図 環有明海における海上・河川交通からみた日韓交流  
(弥生時代前期後半～中期初頭)

が、無文土器が出土する地区は偏り、その立地は宝満川に面した丘陵地のみである。河川交通の拠点が日韓交流の窓口になっている状況が確認でき、渡来人は船を用い、海岸部や内陸部の河川の交通拠点に進出し、交流を進めていることが想定されるのである。

弥生時代前半期は、環有明海を介した海上交流路が発達しており、環有明海地域はこの海上交通や河川交通の拠点が日韓交流の場となっているだろう。この重要な海上・河川交通網は弥生社会が発展していくなかで、首長に掌握され、対外的な交渉ルートとして整備されていくものと思われる。

#### 【註】

(1) 分布地図の作成にあたり、下山正一 1993 や各市町村史等で確認できた範囲で弥生時代の海岸線をできるだけ図中に示している。

(2) このルートに沿う形で発見されている平戸市里田原遺跡、佐世保市古田遺跡、西海市天久保遺跡、長崎市深堀遺跡、大村市黒丸遺跡出土弥生型粘土帯土器は日韓交流を解明するうえで重要な資料である。未実見のため、継続して調査を進めたい。

### 第3節 金海会峴里貝塚出土甕棺の調査

#### 1. はじめに

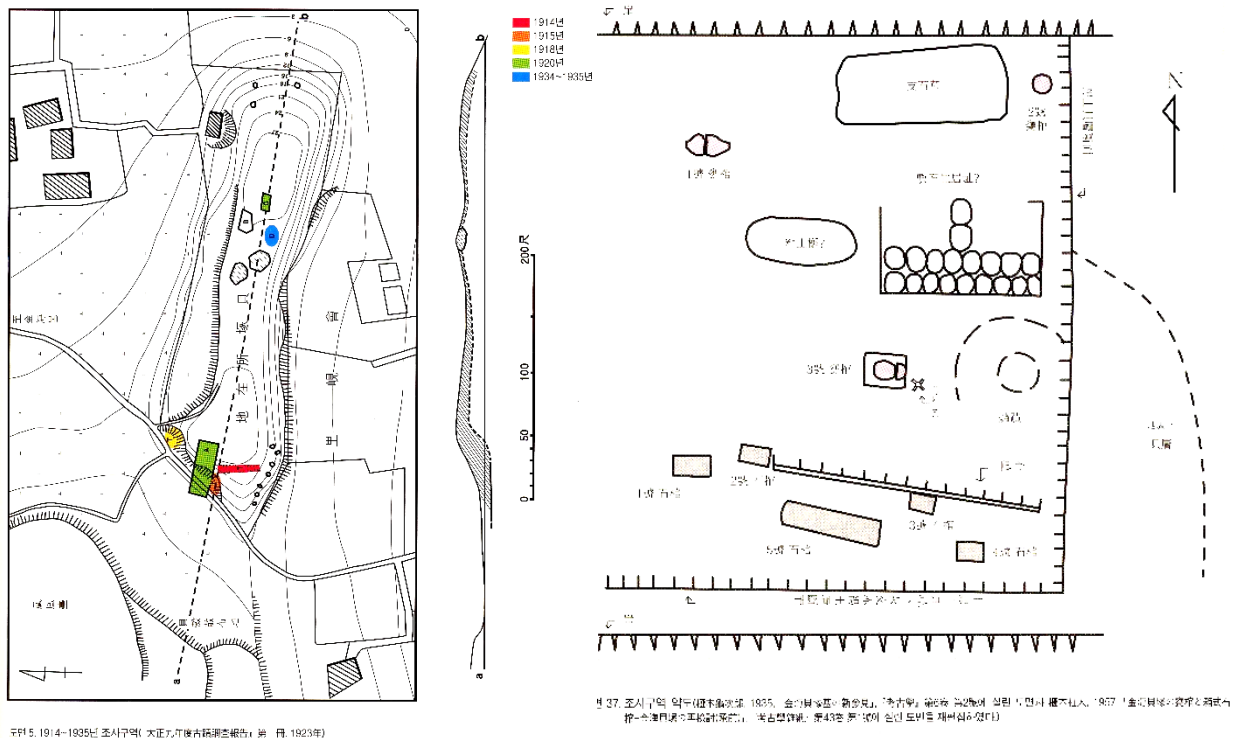
韓国慶尚南道金海市に所在する金海会峴里貝塚は戦前から調査が行われている学史的な遺跡である（第10表）。特に、榎本杜人氏が1934～1935年に発掘した1～3号甕棺墓は北部九州の弥生時代前期末～中期初頭の『金海式甕棺』の標識となっている（榎本1935・1936・1938）。

これまで、甕棺墓資料は行方不明となっていたが、国立金海博物館によりその所在が明らかとなり、大部の報告書が2014年12月に刊行された。2015年3月には武末純一・山崎が2018年3月に武末純一・森本幹彦・山崎が実見、調査することができた。

金海式甕棺は日本においても、その編年的位置づけや青銅器副葬との関わりでその所属時期が近年、議論されているところである。今回は、観察記録を主に報告する。日本における金海式甕棺の調査・再検討も今後進めなければならない。

第10表 金海会峴里貝塚の既往の調査（武末2013）

番号	調査年月	責任調査者、調査期間	調査区域	報告文献
1	1907.8	今西龍	丘陵西側にある土木峴（小路）断崖部の貝塚	今西龍1907、遺物挿図1
2	1907.1	柴田常恵	番号1を基準に中央から北側	柴田常恵1908、口絵貝塚写真2、遺物挿図1
3	1914	鳥居龍藏	番号1を基準に中央から南側および南北縦溝T区	浜田耕作・梅原末治1923
4	1915	黒板勝美	K区	黒板勝美先生生誕百年記念会1974
5	1917	鳥居龍藏	北側T区	浜田耕作・梅原末治1923 鳥居龍藏1925
6	1920.9	浜田耕作 梅原末治	K区北側にあるA区	浜田耕作・梅原末治1923
7	1922.5 ～6	藤田亮策 梅原末治 小泉顯夫	A区西南	藤田亮策・梅原末治・小泉顯夫1923
8	1934.2 ～1935.1	榎本杜人	支石墓南側、C区西側のD区、5号石棺、2号甕棺、1号甕棺	榎本杜人1935 榎本杜人1938 榎本杜人1936 榎本杜人1957 藤田亮策・梅原末治1944
9	1992.1 ～1992.3	釜山大学校博物館	鳳凰台	釜山大学校博物館1998
10	1998.10 ～1998.11	釜山大学校博物館・考古学科	1920年発掘地点A区と同一	釜山大学校人文大学2002
11	2005.3 ～6、8～11	慶南考古学研究所	A区の西南	三江文化財研究院2009



第112図 金海会峴里貝塚第8次調査（金海博2014）

## 2. 金海会峴里貝塚の既往の発掘調査（榎本 1957・金海博 2014）

1934～1935 年の第 8 次調査では、支石墓、箱式石棺墓等とともに 3 基の甕棺墓が調査された（第 112 図）。

1 号甕棺は支石墓の西南側に位置する。ほとんどが破壊された状態で確認されたが、墓壇があったと推定される。内甕（333）は水平におかれ、外甕（334）は傾斜していて、原状を失った状態と調査者は判断した。内甕は口縁全体と胴部の一部を欠失し、外甕は上半の折半と底部が残存している。復原高は、外甕が 80 cm、内甕が 64 cm であるから、墓壇の長さは 140 cm を大きく越えず、深さも胴部径から 60 cm 内外と推定した。甕棺の長軸は東西方向で西側が内甕、東側が外甕である。すなわち、内甕を外甕に挿入したかたちで、外甕が原位置でなければ、ほとんど水平におかれた内甕の状態からみて甕棺は水平におかれたものと推定した。内甕内から底部付近で銅製品の小片が錆着しており副葬品の存在が窺われるが、原形はわからない（金海博 2014）。

2 号甕棺（335～337）は支石墓の東側で発見された。底部と胴部の一部のみ残るものと、新羅土器とともに出土したものの中に、口縁と底部の一部があり、合口式甕棺とみた。こうした場合、支石墓との関係からみて 2 次的なものと推定した（金海博 2014）。

3 号甕棺は、東側の外甕（339／Ⅲ・2）口縁部 1／2 程度が欠失しているが原形を維持しており、西側の内甕（338／Ⅲ・1）口縁部の一部のみが残る。墓壇は東西 100 cm 前後、深さ 60 cm 前後で、長軸は東西方向である。墓壇東壁に穴を掘って、外甕底部をはめ込んでおり、甕棺は水平におかれていたという。甕棺の下で銅剣 2 点と青銅製ヤリガンナ数点、甕棺内部から管玉 1 点および除去土中から管玉 2 点を収集した。いっぽう、墓壇西側で 2 枚の板石があったというが、甕棺との関係はわからないという（国立金海博物館 2014）。

＊内甕・外甕の名称は榎本報告を踏襲

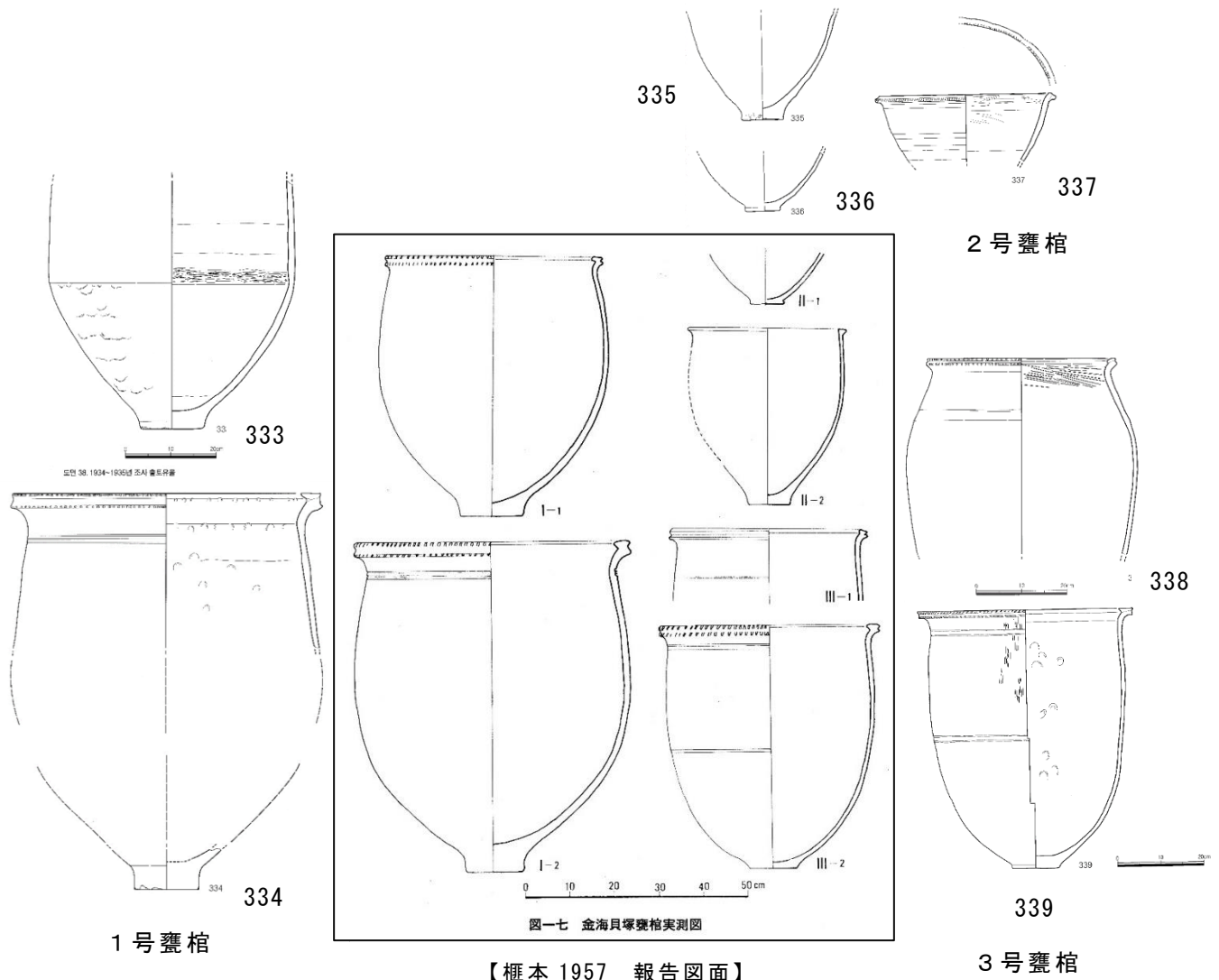
## 3. 榎本報告実測図（榎本 1957）と金海博物館報告実測図（金海博 2014）の違い

榎本報告図と金海博物館報告図には差異がある（第 113 図）。特に 1 号甕棺の場合、上甕（金海博 334／榎本Ⅰ・2）は口縁部と底部の残存にもかかわらず、遺物を図上復元しており、下甕（金海博 333／榎本Ⅰ・1）も現在、口縁部が見つかっていないが、口縁部の表現が行われている。第 3 号甕棺もやはり、上甕（榎本Ⅲ・1）の場合、口縁部のみ残るが、新たに提示した図面（金海博 338）では異なって表現された。下甕（金海博 339／榎本Ⅲ・2）は完形だが、胴部から口縁部へ至る部分の傾きや口縁部の表現が異なっている。2 号甕棺は既存の提示された図面（榎本Ⅱ・1・2）と新たに確認した遺物（金海博 335・336・337）とは相当な差異を見せる。口縁部の傾斜度と底部の傾斜度が異なり、他の個体と判断できる（金海博 337 か）。また、口縁部の場合、口縁外側に突帯を巡らしてその上に刻み目をしたものに表現されているが、実際の遺物は外側の突帯だけでなく口縁端上面にも突帯があるものである（尹邵映 2014）。

## 4. 観察所見

### 1 号甕棺内甕（第 114 図 1（333）） 残存器高 55.1 cm、底径 13.8 cm（写真 4）

軟質の大甕で底部から胴部の資料である。焼成は良好で、胎土は細砂粒を少量混入した精選された粘土である。色調は 5 YR4／8 赤褐色に近く、内面には一部 5 YR4／2 灰褐色が観察される。外面の一部には黒班が確認される。底部から胴部では緩やかに外傾して、胴部中位で屈曲し、直線的に立ち上がる。内面屈曲部位では上下に約 4 cm まで緻密な研磨痕



【榎本 1957 報告図面】

第 113 図 金海会峴里貝塚甕棺実測図の違い (s = 1/15)

が確認される。主要な器面を整面したものと推定される。外面屈曲部位から下位は、粘土を付け足した痕跡が確認される。内面には粘土紐の痕跡が確認されるがわずかである。胴部外面下位には径 1 cm の透かし孔がある。底部は平底で、底部成形時の粘土を押し上げた痕跡が確認される。出土当時、銅製品が錆着していたという記録があるが、現在は確認出来ない。胴体の全面に縦方向のハケメ痕が確認されるが、剥離によって明確でない（金海博 2014）。

筆者追加所見：胴部下位には日本でも甕棺下甕に通例みられる焼成後穿孔が認められる。粘土板の接合痕跡は 7 ～ 8 cm 程度かと思われる。外面調整は縦方向のハケメ、内面中位でミガキ風ナデが 15 cm の高さにわたり認められる。その上位ではハケ状の工具ナデが認められる。北部九州でみられる甕棺と同様の器形・製作方法である。

1号甕棺外甕（第 114 図 2（334））口縁～胴部：残存器高 34.2 cm、口径 67.8 cm

底部：残存器高 9.1 cm、推定直径 14 cm（写真 4）

軟質の大甕で口縁の一部および胴体上部、底部の一部のみが残存する。胎土は細砂粒を多量に混入した粘土である。色調は 7.5YR6/6 橙色だが、一部黒色が包含される。口唇上

下に刻目文が施文され、刻目の大きさは同じものとみられる。口縁部は内側と外側にそれぞれ粘土を貼り足している。胴部上位には3条の沈線が巡る。器面全体をハケメ調整した後に胴体の中上位はナデで整面した。頸部には横に長い圧痕が存在するが、頸部を整面したものとみられる。内面の口縁および胴部には指頭痕が観察される。底部は平底でハケメ調整痕が明らかである（金海博 2014）。

筆者追加所見：口縁部は、如意系口縁部の上部に厚みのある粘土帯を貼り付けている。接合痕で割れていることからもうかがえる。口縁部内面は接合痕を押さえ付け、その後丁寧にヨコナデで仕上げている。胴部は指押さえ痕を板ナデでナデ消している。外面口縁下は斜め方向の指押さえナデ、その下位には板ナデがみられる。沈線の下位ではタタキ面が確認できる。6～7 cm単位の粘土板積み上げである。北部九州でみられる金海式甕棺と同様の器形・製作方法である。

**2号甕棺底部片（第114図4（335）） 残存器高 24.4 cm、底径 9.6 cm （写真5）**

支石墓の東側で出土した。口縁部は欠失している。胎土は細砂粒が混入された粘土である。色調は 7.5YR6/6 橙色で、一部黒班が確認される。器面は剥離現象が甚だしいが、縦方向のハケメ調整痕が観察され、内面はナデで滑らかに整えている。底は中央がやや上がった平底である（金海博 2014）。

筆者追加所見：底部は指押さえ後タテハケ、やや上位では底部付近よりも粗いハケメの単位が確認できる。内面は横走行のナデや底部付近では工具ナデからミガキ風のナデが上方に向けて行われる。北部九州でみられる甕棺と同様の器形・製作方法である。

**2号甕棺底部片（第114図4（336）） 残存器高 13.4 cm、底径 8.1 cm （写真5）**

胎土は砂粒および石粒が混入された粘土である。色調は均質な方で 10YR5/3 淡い黄橙色である。胴体下段内外に器面接合のために横に巡って押した痕跡とハケメ調整痕が確認される。底部は縮約されながら、胴体との接合のために突き出した痕跡と指頭痕が確認される（金海博 2014）。

筆者追加所見：底部はやや低く、断面でみると少し外側に突出しするもので、無文土器の底部である。外面の指押さえ痕も残しており、底部の突出ラインが波打っている。外面はタタキ面を残し、また接合の段も確認できるほどである。内面は工具ナデが確認できる。無文土器的な特徴を持っている。336と337が同一個体となる可能性がある。

**2号甕棺口縁部（第114図4（337）） 残存器高 15.7 cm、口径 39.7 cm （写真5）**

口縁部は内側と外側にそれぞれ粘土を貼り足して、刻目文を施文した。外面は縦方向のハケメ調整痕が、内面は刻目文下にのみ横方向のハケメ痕が観察される（金海博 2014）。

筆者追加所見：内外とも粗いハケメが多く確認できる。胎土・色調とも金海地域でみられるものと同様である。口縁部の突帯は写真で確認できるように、薄く伸ばした口縁部に巻き込みはほとんどないがかぶせて、突帯を貼り付けている。外面の突帯貼り付けのナデも安定せず、粗いナデの単位が下位にわたって確認できる。全体の器形は弥生土器であるが、口縁部の接合方法や調整などには無文土器の影響がみられる。変容弥生土器である。

**3号甕棺口縁部（第114図5（338）） 残存器高 40.4 cm、推定口径 56.8 cm （写真6）**

軟質の大甕である。破片は一部存在するが発掘調査当時に破損して出土しており、各断面の剥離が著しくて、すべてが復元されない。現在、口縁一部および胴体の一部が復元された。胎土は細砂粒が多量に混入された粘土である。色調は全体的に 5 YR 7/8 橙色だが





写真 4 金海会峴里貝塚 1 号甕棺



写真5 金海会峴里貝塚  
2号甕棺

現在復元された胴体の外面には焼成痕跡とみられる黒色が大部分を占める。口唇前側と上、側に粘土を貼り足して、刻目文を施文した。胴体上位には1条の沈線が巡る。器面全体に剥離が著しく、整面痕は明確には確認されないが、外面には横方向のナデ痕が確認され、内面の胴体上部には横方向の道具調整痕が観察される（金海博 2014）。

筆者追加所見：傾きは金海博の報告よりも外側に傾き、口縁部の肥厚部が水平になる。胴部最大径が沈線下3～4 cm程度に来ると思われる。口縁部は如意形口縁の上方に粘土帯を乗せるかたちで、弱いナデで仕上げられる。そのため、内面、外面の接合部はやや屈曲した線となり、内面では接合痕のラインが確認できる。口縁部の接合部や内面の接合ラインが全体的に整円～楕円に整っていない面もある。外面はタテハケ後ヨコナデが確認できる。内面口縁部下は水平から斜め上方へのハケメ、胴部でも同様のハケメが確認できる。



日本甕棺

金海甕棺



写真 6 金海会峴里貝塚 3号甕棺



胴部最大径が中位にあり、外湾して立ち上がり頸部が外反気味に立ち上がる器形である。北部九州でみられる金海式甕棺でやや古手の傾向を示すものである。

**3号甕棺（第114図6（339））器高 60 cm、口径 49.6 cm、底径 10.6 cm （写真6）**

軟質の大甕で胴体の一部と口縁 1/3 程度が欠失する。胎土は細砂粒が多量に混入された粘土である。色調は全体的に 10YR 6 / 8 明黄褐色と 10YR 7 / 4 淡い黄橙色が混じっていて、焼成時に生じた黒班が確認される。器形は中部からわずかにひねられた形態である。胴体は全体的に長胴形で口縁の下で急に内湾する。口唇上下にそれぞれ粘土を貼り足して、刻目文を施文しており、上部には右側から左側に、下部には左側から右側に刻目した。口縁下面と胴体中央にそれぞれ 2 条の横沈線がめぐる。底部は平底である（金海博 2014）。

筆者追加所見：胴部最大径の位置は不明瞭で重心は低い。下位から上位にかけて丸みを持ちつつ直線的に立ち上がり、口縁に至る。口縁部の接合方法は如意形口縁の上面に粘土帯を貼り付け外面はしっかりとしたナデで接合している。内面については、粘土貼り付け部分が不整で波打っている傾向があるが、それは横ナデが接合部までかからず、接合痕を残していることからその傾向がわかる。外面はタテハケ後ナデが確認できる。胴部下位の沈線部分ではミガキ風のナデ後に沈線が施され、その下位では工具状の不定方向ナデである。内面は指押さえ後口縁部付近は細かい横ハケ、胴部上半は縦方向のハケメ、その後ナデで仕上げられている。口縁部下の 2 条沈線が全周した時にうまく接合せず、その箇所は 3 条になっている。沈線も波打っていて、2 条の間隔も変化する。

北部九州でみられる金海式甕棺でやや新しい傾向を示すものである。

**5. 日本の金海式甕棺との距離**

以上のように、金海会峴里貝塚遺跡で出土した甕棺は日本で見られる甕棺と類似しているが、細部にはやや異なる特徴もみられる。

特徴としてはやや小形の類に属し、高さのわかる 3 号甕棺は器高 60 cm 程度である。（日本のものはおよそ 80 cm から 90 cm 程度が中心でそれに比べて小形のものもみられる）。1 号甕棺についても 60 cm 程度と 80 cm 程度のものに復元できる。

いずれも 1・3 号は弥生土器（金海式甕棺）、2 号上甕は変容弥生土器鉢に区分できる。

2 号は中形棺なのであろうか。甕と上蓋（鉢）で構成される。上甕は変容弥生土器と言える。

1・3 号甕棺と 2 号下甕はどこで作られたかという問題であろう。1・3 号の胎土は日本でも違和感なくにぶい黄褐色から赤褐色系の色調。2 号は金海地域でよく確認できる赤褐色系の色調で砂粒を多く含む。そして、3 号甕棺には上下で時期差があるだろうことが興味深い。

現在、金海式を古段階と新段階に分ける傾向があるが、古段階と新段階を区分する基準はプロポーションと口縁部における粘土貼付の肥厚である。重心が胴部下位にあるものから上位への変化、口縁部の薄いものから厚いものへの変化が特徴である。古段階が板付Ⅱc 式、新段階が城ノ越式に併行すると位置づけた。金海会峴里貝塚出土の甕棺は新段階としている（常松 1998）。一方で、金海式甕棺を新古に区分するのは困難であり、金海式のみ段階/金海式・城ノ越式の段階/城ノ越式のみ段階という 3 段階区分も提示されている（梶原 2016）。

1・3 号甕棺は金海式で 2 号は城ノ越式段階といえ、3 号甕棺では古と新段階がセット

になる可能性もあって、興味深い。入手の時期が異なる可能性もある。

おそらくは、日本での小形に属する甕棺のサイズは運搬しやすい大きさのもので合ったのであろう。光州でも弥生系の大型の甕や鉢が確認されており、運搬容器としての入手経緯も十分考えられる。入手形態はいずれかであっても、葬送儀礼として、水抜き打ちの穿孔がみられる点などは共通する面である。3号甕棺の時期差であるが、この組み合わせが生じることはやはり、運搬容器としての利用があり、その後、埋葬容器として用いられたという時間差が想定出来はしないだろうか。

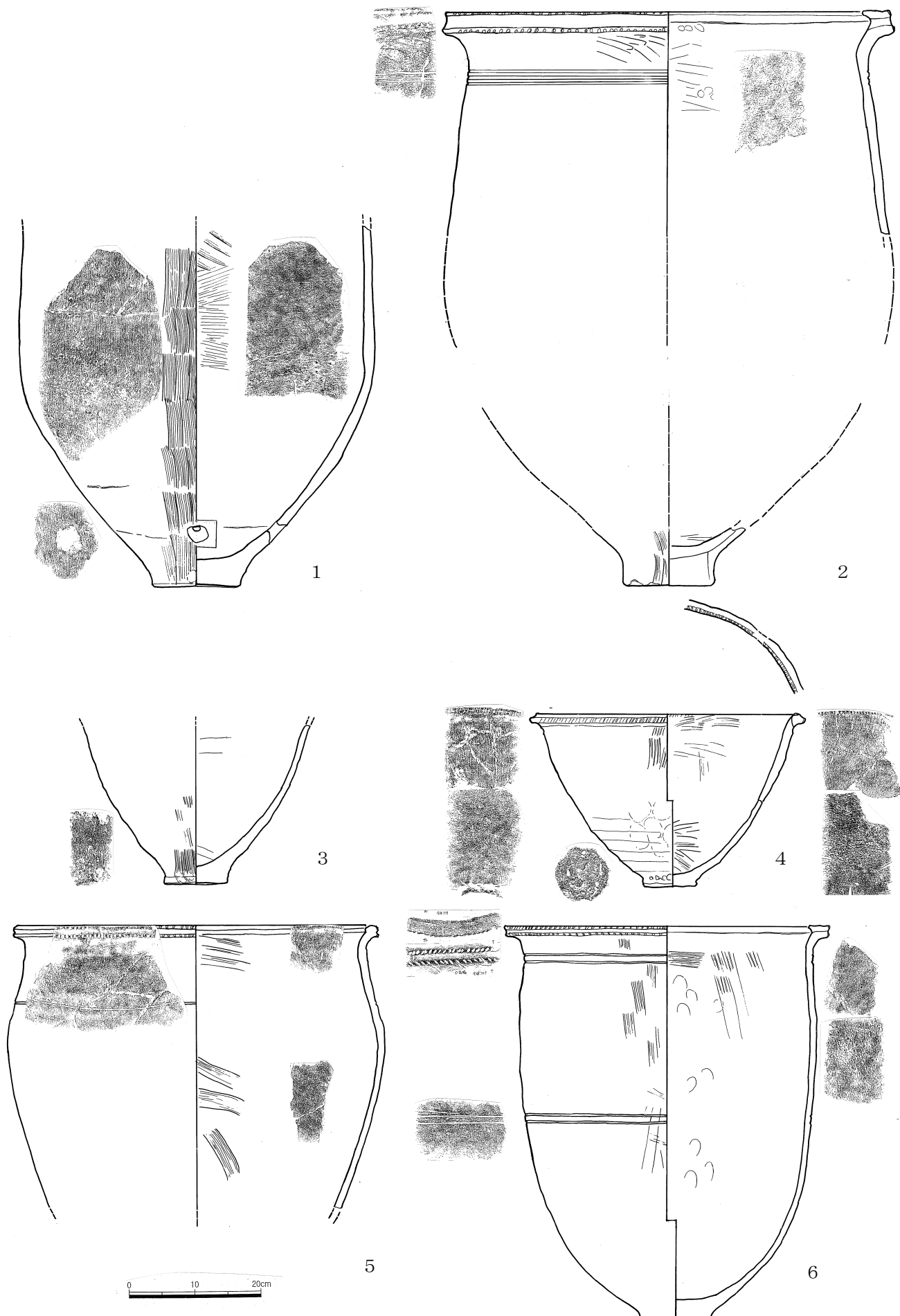
## 6. まとめ

金海地域では、弥生系土器が多く出土する地域の一つであり、会峴里貝塚からは弥生時代前期に遡る貝殻無軸羽状文壺の出土があり、この時期から交流が進んでいることが分かる（三江文化財研究所 2009）。弥生時代中期城ノ越式から須玖式にかけては韓半島で多くの弥生系土器が確認されるようになる。そのなかで、金海亀山洞遺跡は多くの弥生系土器が出土する遺跡で注目されるが、城ノ越式～須玖Ⅰ式段階にかけて、擬弥生土器よりも弥生土器の比率が高くなる様相が指摘されている（崔 2010a）。最初は在地で模倣され作られたが、時間が経つほど直接的な移動が増えたと推定している。

金海地域の紀元前4世紀代から2世紀代の墓制は、伝統的な墓制である支石墓に、新たな文化である粘土帯土器文化・韓国式銅剣文化が取り込まれる。そして、弥生文化的な墓制に新たな粘土帯土器文化と在地の松菊里文化が融合したものが会峴里貝塚（D地区3号甕棺）と位置づけた。この時期の金海の支配勢力は支石墓と石棺墓の伝統的な松菊里文化と新たな粘土帯土器文化とともに木棺墓、韓国式銅剣が流入し、更には倭系の文化要素もある。D地区3号甕棺墓も墓制として弥生文化的要素をもち、韓国式銅剣や銅ヤリガンナの副葬、松菊里文化として管玉を副葬していると評価した（李陽洙 2016）。

この評価は日本においても同様で、副葬品や棺体として無文土器を採用した事例が有明海を中心にみられるが単独ではなく在地の伝統的な甕棺墓や土坑墓の墓域のなかにある。吉武高木遺跡木棺墓群の評価についても、粘土帯土器文化の墓制・青銅器を副葬するが、在地の墓制の中にあることが重要であろう（福岡市 1996）。在来文化と渡来文化が併せて見られる。





第 114 図 金海会峴里貝塚甕棺実測図 (s = 1/8) (山崎・武末実測)

## 第4節 日韓青銅斧の研究～日本青銅器時代の提唱～

### 1. はじめに～韓国調査に至る経緯～

福岡県小郡市三沢北中尾遺跡2地点で韓半島青銅器時代の銅斧かと思われる破片が弥生時代前期の貯蔵穴中から出土した。この青銅器片は長さ3cmほどの極めて小さい破片である。「銅斧片」と位置付けるまでに日韓考古学者の鑑識やX線CT調査での詳細な形態的特徴の観察、さらには3Dモデルを韓国内に持ち込み、類例と突き合わせて比較検討する作業を経た<sup>(註1)</sup>。銅斧は日本列島では出土例がほとんどないため、韓国での関連資料の調査が必要であり、それら一連の過程を経て、ようやく本例が韓半島青銅器時代に盛行する銅斧〔長方形斧B類(後藤1996)〕と比定できた。

この成果は韓半島の青銅器時代と日本列島の弥生時代の交差年代を考える上で重要な成果のひとつであり、今後、同様な考古資料の積み重ねによる日韓の併行関係の議論の深化を期待する。さらには、日本列島の前期末～中期初頭以降にみられる武器類(銅剣・銅矛・銅戈)や多鈕細文鏡などの完形青銅器流入以前に、このような工具類やその破片流入の段階が設定できる見通しを持った。なお、本稿は、韓国で銅斧関係資料を共に調査した武末純一との協議内容をもとに、山崎が成稿したものである。

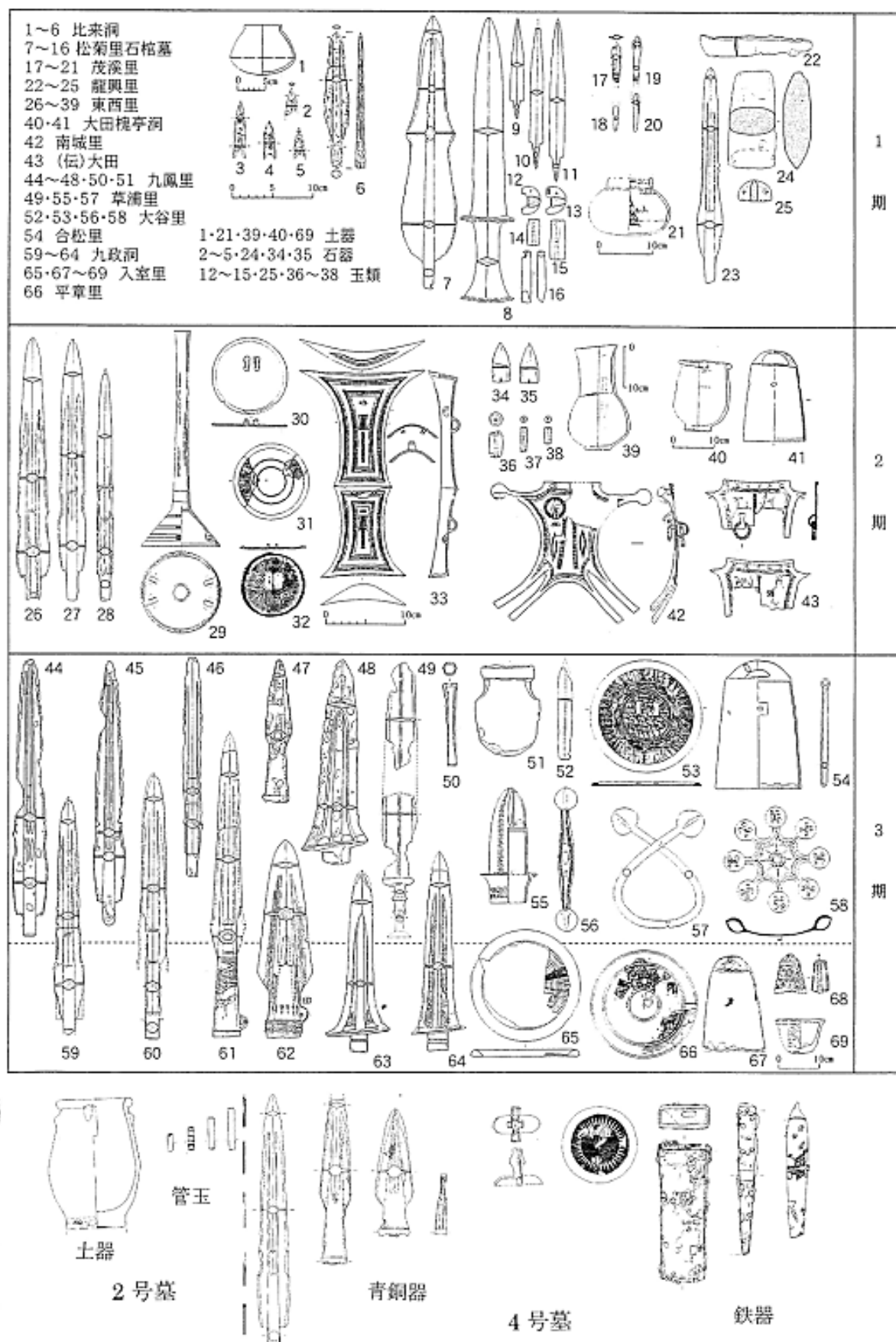
### 2. 韓半島における青銅斧の研究

#### (1) 韓半島の青銅器編年

韓半島南部の青銅器編年を武末純一は、遼寧式銅剣が主体の1期、細形銅剣が出現する2期、細形の銅剣・銅矛・銅戈がそろそろ3期、前漢後半以降の中国鏡が共伴する4期・5期に分ける(第115図)。銅斧は1～3期にみられ、1期は遼寧式銅剣の時期、2期は細形銅剣が成立して多鈕粗文鏡や異形銅器、小銅鐸などが組み合う時期である。3期は、無文で短い細形銅矛や無文の細形銅戈が特色で多鈕粗文鏡と多鈕細文鏡がある古段階と、長い細形銅矛や有文の細形銅戈が特色で多鈕細文鏡や前漢前半代の中国鏡が伴う新段階にさらに分かれる。さらに3期古段階は、多鈕粗文鏡が残る3期古段階前半と、多鈕細文鏡だけで鉄器が伴う3期古段階後半に細分できる(武末純一2004)。3期古段階前半は鑄造鉄器出現以前の資料群である。日本列島で出現した鑄造鉄器は、近年の見直しにより、前期末～中期前半に属する鑄造鉄斧の破片や再加工品であり、戦国時代後期の燕から韓半島西北部一帯の鉄器の系統と考えられるようになった(野島2008)。

1～3期が無文土器時代<sup>(註2)</sup>(3期古段階後半が無文土器時代後期の水石里式の最末期)で、4・5期は原三国時代に相当する。1期の代表的な遺跡は扶余松菊里1号石棺墓(国立中央博物館1979)など、2期は大田槐亭洞墓(韓国考古学会1969)・礼山東西里墓(池健吉1974)など、3期古段階前半は扶余九鳳里墓・和順大谷里墓など、3期古段階後半は長水南陽里墓群(全羅北道長水郡・全北大学校博物館2000)・完州葛洞3号墓(湖南文化財研究院2005)など、3期新段階は慶州入室里墓(梅原末治・藤田亮策・小泉頭夫1923)・慶州九政里墓(金元龍1952・金載元1964)・益山平章里墓(全榮來1987)などが相当する。

本稿では各期を代表する遺跡名によって、槐亭洞段階(2期)、九鳳里段階(3期古段階前半)、南陽里段階(3期古段階後半)、入室里段階(3期新段階)と呼ぶ。無文土器との関係は、水石里式土器(円形粘土帯土器)が槐亭洞段階から南陽里段階まで伴い、勸島式土器(三角形



第 115 図 韓半島南部の青銅器編年（上）と南陽里 2・4 号墓出土遺物（下）（武末 2014）

粘土帯土器)が入室里段階に伴う。南陽里段階からは鉄器が見られる。また、九鳳里出土の黒色磨研土器長頸壺は頸のつけねが締まって、槐亭洞段階の大田槐亭洞墓や礼山東西里墓出土例に近く、頸のつけねがゆるくなった南陽里段階の長頸壺とは異なる。

以上を整理すれば次の通りである。

槐亭洞段階：青銅器 2 期	水石里式古段階
九鳳里段階：青銅器 3 期古段階前半	水石里式中段階
南陽里段階：青銅器 3 期古段階後半(鉄器が共伴)	水石里式新段階
入室里遺跡：青銅器 3 期新段階(鉄器が共伴)	勒島式段階

## (2) 韓半島の青銅斧

銅斧は中国東北部から朝鮮半島に多く分布し、「扇形銅斧」、「長方形斧」、「有肩円刃斧」、「有肩斧」に大別される。扇形銅斧は東北アジアで主に遼寧式銅剣と共伴する特徴的な遺物である。長方形斧では、装飾のないA類は中国東北部にも出土例があるが朝鮮半島西北部に多く、装飾のあるB類は朝鮮半島南西部に分布する。有肩円刃斧や有肩斧は朝鮮半島で独自に発展した形態である。

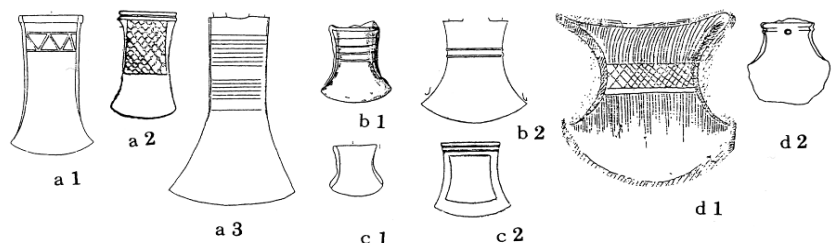
銅斧は朝鮮半島では先に示した青銅器編年の1～3期に属する。扇形銅斧→長方形斧・有肩円刃斧の出現→有肩斧の出現の順で変遷し、それぞれの消長のなかで組み合わせる。長方形斧と有肩円刃斧は九鳳里遺跡で共伴が確認でき、また、長方形斧・有肩円刃斧・有肩斧は霊岩鋳型で共伴が確認できるので、青銅器編年2期の終わりから3期古段階にはそれらが共存する時期があることがわかる。その後、有肩斧はそれらより長く継続して残る。

銅斧の各分類は、後藤直氏が霊岩鋳型の検討のなかで中国・朝鮮半島出土の銅斧とその鋳型を通覧しており、参考とするが〔後藤 1996〕、扇形銅斧はその後の資料などで改定した〔呉 2003、武末 2011〕。

〔扇形斧〕(第116図、第117図1～7)

刃部の両端が左右に突出し、刃線は半円形に外彎するものから多少の膨らみを持つものなど数形態みられる。袋部断面は長楕円形と長方形(扁平六角形)に分けられる。袋部には節帯や突線をめぐらすもの、袋部下部から身中央に突線や幾何学文を持つものがある。永興邑遺跡、松菊里遺跡で鋳型が出土している。

呉江原による分類では、装飾文様を基準に、A型：袋部から体部に突稜帯文から幾何学文 B型：主に袋部側のみ数本の突稜線または突稜帯文 C型：無文と大分類し、次に細かい文様の種類で、I式：三角形の組み合わせ文 II式：斜格子文 III式：数条の突稜線文に細分した。さらに、刃部の旋回角度と長さ対幅の比率を補助基準として設



〔a1 小黒石溝、a2 十二台營子、a3 新舍双房、b1 劉家窪、b2 二道河子、c1 臥竜泉、c2 丁峰里、d1 小都嶺、d2 如意洞〕

第116図 武末純一の扇形銅斧分類案(武末 2011)

けた（呉江原 2003）。武末はそれを受けて、時期的変遷を示す刃部の形状と長さ対幅の比率による分類に修正を加え補強した（武末 2011）。a 類：身部が細長くて、刃部が開くもの b 類：短形だが、袋部口が横にあまり広がらない。a 類に比べて刃部の幅が広く、旋回角度が大きいもの c 類：細身だが腰部のくびれが大きく、袋部側にも少し広がるもの d 類：くびれが大きく、刃部・袋部双方に大きく広がるもの、刃部の旋回幅が非常に大きいもの とし、a 類から d 類への変遷とそれぞれの細分案を提示した（第 116 図）。

近年、年代論との関係で遼寧式銅剣と伴出する銅斧の検討が進んでおり、特に、松菊里遺跡出土の銅斧鑄型の位置付けが重要となる〔呉 2003、武末 2006、2011、小林・宮本・石川・李新全 2012 など〕。松菊里遺跡出土銅斧鑄型は第 1 次調査の 55 地区 8 号住居の上層（褐色腐植土層）から出土し、この層からは松菊里式期の甕が出土した。武末氏は、韓国青銅器編年との検討からも、松菊里遺跡出土扇形銅斧鑄型は、類似する朝陽洞 1 号支石墓出土扇形銅斧にやや先行し、松菊里式期の所産と位置付けた。また、松菊里遺跡の鑄型は扇形銅斧 d 類のなかで最も古く、古式の遼寧式銅剣に伴う二道河子遺跡 1 号石棺墓出土銅斧よりも新しく、古式から新式の過渡的な遼寧式銅剣に伴い、前 5～6 世紀とされる瀋陽鄭家窪子遺跡出土銅斧やそれより遅れ新式銅剣に伴う臥竜泉墓出土銅斧の時期があてられ、松菊里式の段階を前 5 世紀代が中心となることを示した〔武末 2011〕。一方で、小林青樹氏らは春秋・戦国期の遼寧（遼東・遼西）地域における銅戈や銅斧、鉄器を総攬、検討するなかで、韓半島では美松里遺跡段階から扇形銅斧の伝統が古くから窺えることから、これに遼東的な文様帯を併せ持つ銅斧が形成されたと考え、松菊里遺跡出土扇形銅斧鑄型の時期を春秋前半段階とした〔小林・宮本・石川・李新全 2012〕。しかし、美松里遺跡の銅斧自体は小林氏らの検討でも新しい型式に属する形態であり、共伴関係の再検討こそが必要なはずである。

#### 〔長方形斧〕（第 117 図 8～11）

平面形が撥形の斧を長方形斧と呼ぶ。形態と出土地域から A 類・B 類に大別できる。

A 類：袋部に節帯などの装飾がなく、袋部断面が長方形。両刃である。朝鮮半島西北地域で出土する。

B 類：A 類より大きく、刃の開きが強く、袋部に突線を 3～4 条巡らし、横断面が扁平六角形、片刃で片の上部中央に半環状の耳がつくものがある。朝鮮半島南西部で出土する。

A 類は遼東半島に類例が少数みられ、中国東北部とのつながりが想定できる。しかし、B 類は遼西地区に類似品はあるが、地理的關係から直接な關係づけはできない。B 類は製品 2 点が耳を持つため、儀器的なもので A 類から生まれた朝鮮半島南西部独自の器種とみている（後藤 1996）。

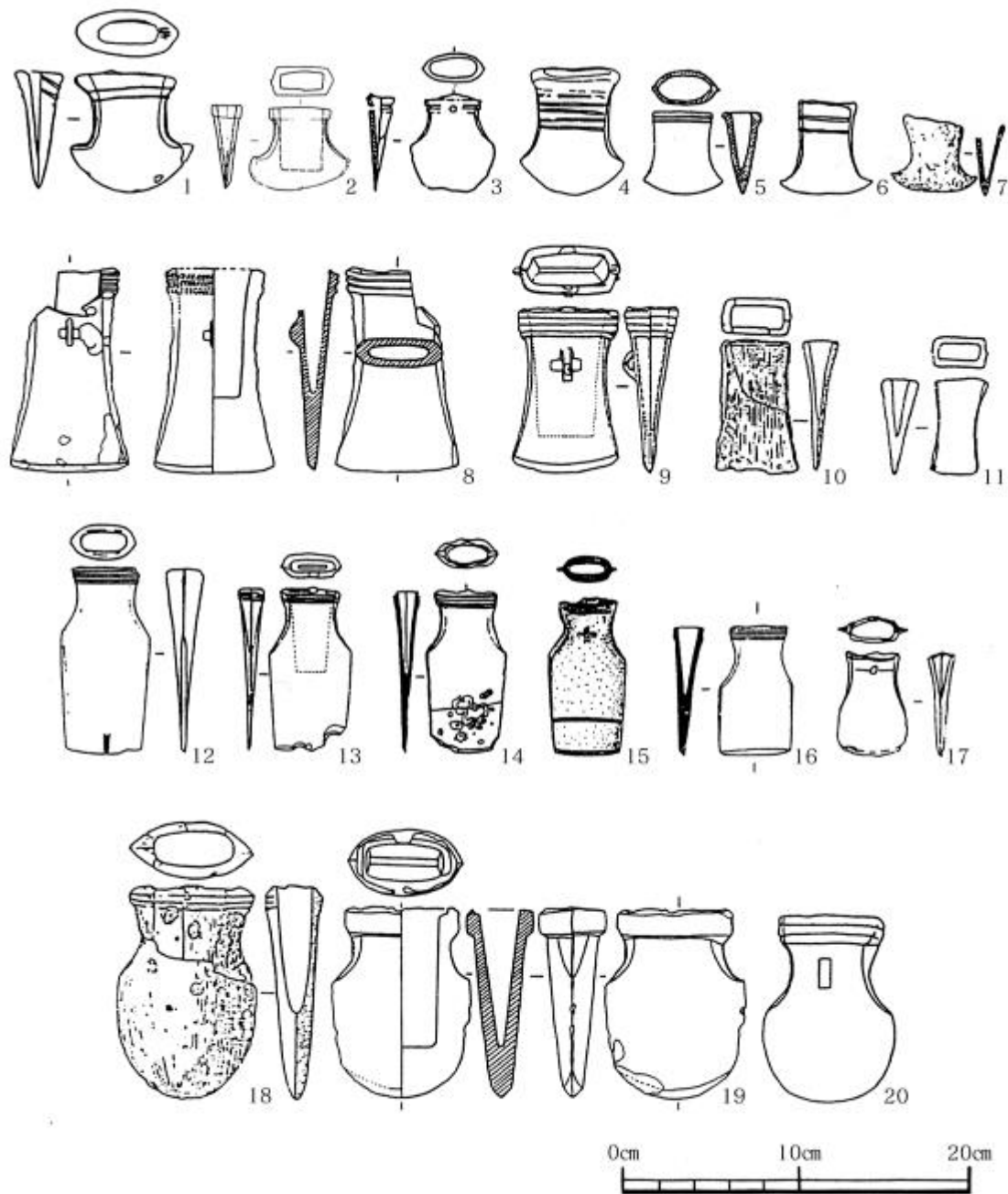
#### 〔有肩円刃斧〕（第 117 図 18～20）

袋部の下に肩がつき、肩から半円形の身・刃部へと続く。刃は両刃、横断面形は袋部で長楕円形、身部で凸レンズ状である。中国東北地方にはなく、朝鮮半島独自の斧とみられ、実用品よりは儀器と考えられる。

#### 〔有肩斧〕（第 117 図 12～17）

中国東北部に類例がなく、朝鮮半島独自の斧である。肩部を作り、肩部から刃部へと多少幅が狭くなる。刃部は直線をなす。横断面形は袋部で長楕円形、身部で凸レンズ状となる。





1：朝陽洞，2：南城里，3：如意洞，4：土城里，5：丁峰里，6：義州郡，7：美松里，8・19：九鳳里，9：菊隠蒐集品，10・18：松山里，11：狐山里，12：順安，13：草浦里，14：西辺洞，15：伝公州，16：大谷里，17：伝慶州，20：湖巖美術館蔵

第 117 図 韓半島出土銅斧類例 [後藤 1996・藤島 2008]

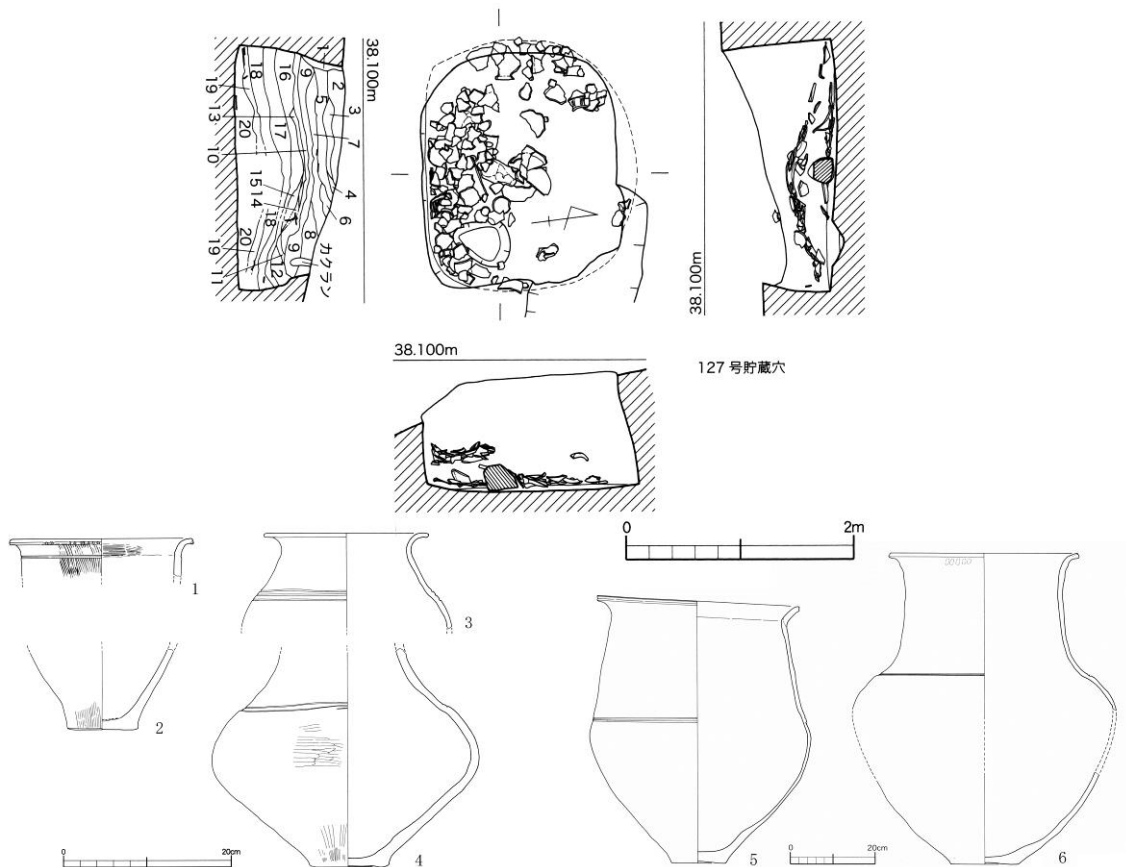
## 2. 日本列島出土の青銅斧資料

これまでに日本列島で確認された青銅斧関連の資料は3点のみである<sup>(註3)</sup>。出土状況や共伴資料も銅斧の年代を考える上で重要な要素となるので詳しくみておきたい。

### (1) 福岡県小郡市三沢北中尾遺跡(2地点)出土銅斧片(山崎 2012)

三沢北中尾遺跡2地点は三国丘陵の南東部に位置する弥生時代前期中頃から中期前半までの集落跡である。

銅斧片が出土した127号貯蔵穴は丘陵頂部平坦面から南側斜面の変換点付近に位置する。

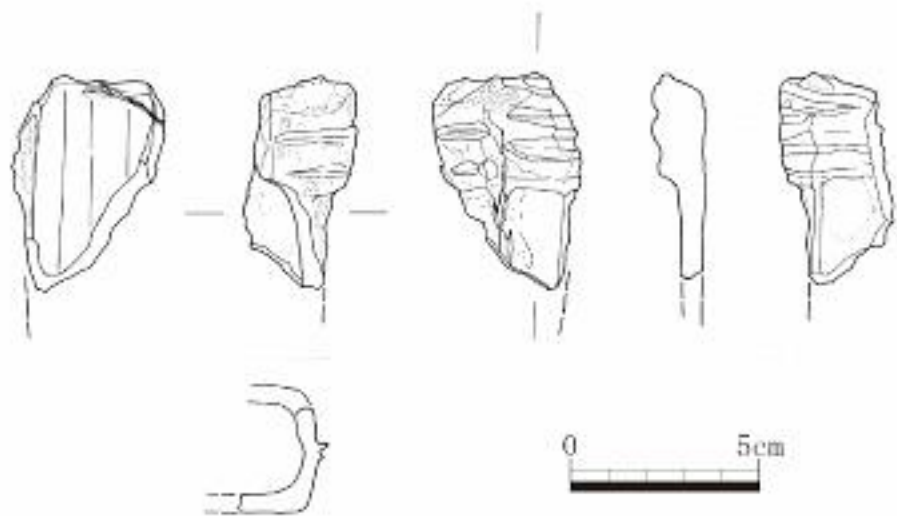


第 118 図 三沢北中尾遺跡 2 b 区 SK127 遺構平断面図・出土土器実測図（山崎 2012）

126 号土坑（城ノ越式）に北西側を切られている（第 118 図）。検出面の上端は長軸 2.16 m×短軸 1.69mの長方形プランを呈する。床面は長軸 2.18m×短軸 1.76m、深さ 1.0mを測る。壁面はフラスコ状を呈し、床面南東隅付近に小穴を有す。床上 20cm～40cm にかけてと床面直上から多くの土器と小礫が出土した。堆積状況は下半部まで中央付近が高い堆積で、土器の廃棄状況も中央部分がやや高い。銅斧片の出土状況の記録や出土層位の記載はなかった（註 4）。

出土土器 1 は如意形を呈す甕口縁部である。短く外反する如意形口縁の下端のみに刻みが施され、口縁下には 1 条の沈線がまわる。2 は甕底部である。平底でしっかりと成形をする。3 は壺の胴部中位以上である。器壁はうすく、口縁は大きく緩やかに外反する。頸部と胴部の境には 3 条の沈線がまわる。4 は壺の頸部以下である。胴部最大径がかなり外に張って胴部と頸部の境には 2 条の沈線がまわる。5・6 は大型壺である。5 は完形品、6 は胴部中位を欠くが、胴部中位以上と底部周辺が同一個体である。5 はすでに頸部と胴部の境が明瞭でなくなり、そこに 2 条の沈線がある。口縁は擬口縁の外側から貼り付けるが、その境に明瞭な区別がない。一方、6 のほうは胴部と頸部の境に明瞭な区別があって、大きくくびれ、そこにやはり 2 条の沈線がある。また、口縁部も外側からの貼り付けがなされ、口縁下の口縁と頸部の境が肥厚して古い様相を呈する。このほか、甕口縁・甕底部・壺口縁・壺底部・甕底部・小形甕などの破片が約 100 点出土している。相伴土器の時期は板付Ⅱa 式新段階から板付Ⅱb 式古段階である。出土土器を全点確認したが、前期末や中期に下る土器はない。

銅斧は破片資料で、全体形状をよく遺していない（第 119 図・写真 1）。腐食が著しく、破断面は粉状で、淡いエメラルドグリーン色を呈していた。現状を保つために、パラロイド B72 5% 溶液を筆で浸透させて仮強化した。なお、表面に付着し



第 119 図 三沢北中尾遺跡 2 b 区 SK127 出土銅斧片

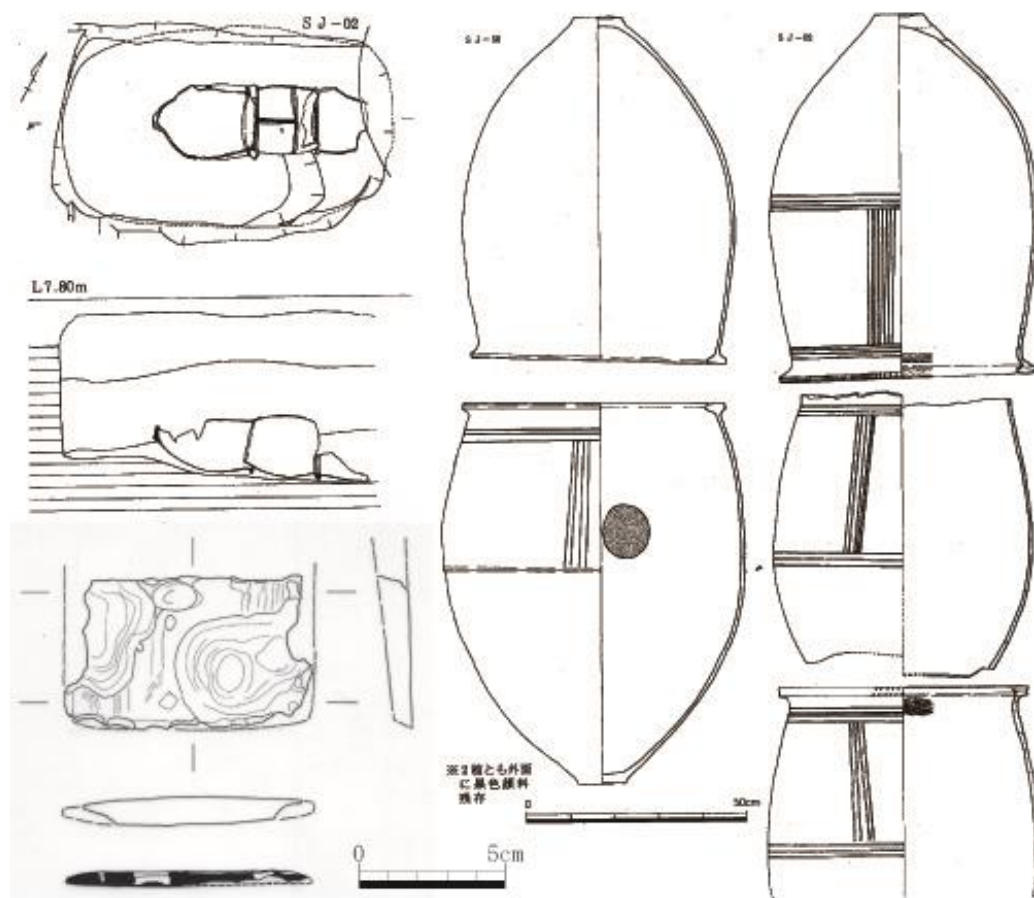
た錆は土と一体化しており、可能な範囲でしか除去出来なかったため、X 線 CT 撮影で詳細に観察した。肉眼での観察では判断が難しい部分もあったが、X 線 CT 画像と併せて考えると、本例は銅斧袋部の基部付近の破片資料と考えられる。残存長 2.8cm、残存幅 1.5 センチ、残存厚 1.4cm、現状で袋部基部に 2～3 条の突線が確認できる。側面を観察すると双範鑄型による突線のズレがある。身部側面にも双範鑄型の甲張りがよく残る。基部上端は湯周りが悪く突線が不明瞭である。基部中央の破損面は一部研磨された箇所があり、擦痕が確認できる。断面形は側面中央でわずかな角をもち、側面がやや凸状にふくれる隅丸長方形から扁平六角形状の断面形となる。内側は外側よりも丸みを帯びている。内側の基端には斜め方向の新しい亀裂が生じているが、それと一部重複して鑄掛けの可能性がある痕跡が確認できる（元国学院大学教授柳田康雄氏ご教示）。

平面形状、袋部の装飾の有無、断面形状から考えて、長方形斧 B 類に該当し、3 条突帯袋部の破片と考える（後藤 1996）。

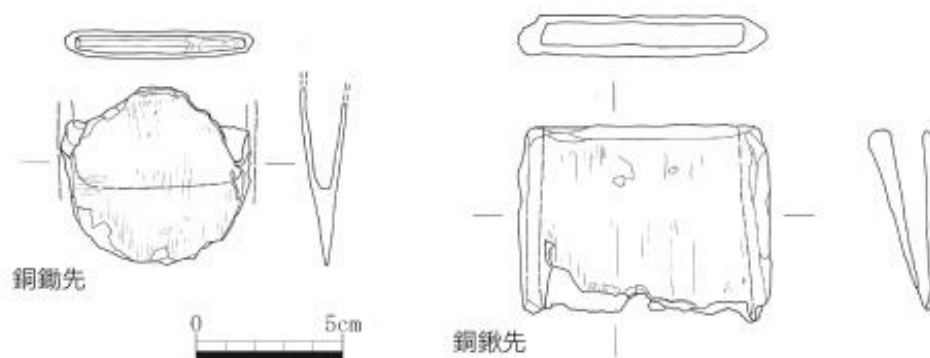
## （2）佐賀市本村籠遺跡出土銅斧片（田中・松本 1992）

嘉瀬川の氾濫原中微高地上に立地する。2 次調査区は 300 m<sup>2</sup> の限定された調査だが、前期末～中期初頭の列埋葬の甕棺墓が調査された。2 号甕棺墓からは有肩銅斧の刃部片、58 号甕棺墓からは多紐細文鏡、青銅製ヤリガンナ、碧玉製管玉が出土した。

2 号甕棺墓は三連棺で墓壇の掘り込みは東西方向に主軸を持つ、隅丸方形である（第 120 図）。甕棺は墓壇中央の東寄りに位置しやや西側が高い角度を持つ。中甕は口縁部と胴部下半を打ち欠いて、上甕の口縁部が中甕口縁部の打ち欠き部分を、下甕の口縁部が胴部下半の打ち欠き部分をそれぞれ内側に覆い込む状態である。上甕は器高 83.9 cm、口径 58.7 cm、底径 11.1 cm、胴部最大径 61.5 cm である。口縁部は内側に厚手の粘土帯を張り付けて肥厚させ、口縁端部の上下に刻目をめぐらす。口縁部下と胴部最大径に 4 条の沈線を巡らし、その区画内を 4 分割する縦方向 4 条の沈線を持つ。中甕は器高 46.2 cm、口径 56.6 cm、胴部最大径 62.0 cm である。口縁部と胴部下半は打ち欠きのため不明である。沈線による区画は口縁下部と胴部最大径に 3 条の沈線を巡らし、その区画内を 4 分割する 4～5 条の沈線を持つ。下甕は残存高 46.2 cm、口径 56.6 cm、胴部最大径 62.0 cm である。口縁部は内側



第 120 図 本村籠遺跡 2 号甕棺・出土銅斧実測図



第 121 図 石崎曲り田遺跡 2 次出土銅斧関連資料

に厚手の粘土帯を張り付け肥厚させたもので、口縁端部の上下に刻目をめぐらす。口縁部下と胴部最大径に 4 条の沈線をめぐらせ、その区画内を 4 分割する縦方向 4～5 条の沈線を持つ。以上の特徴から金海式新段階の甕棺である。

銅斧刃部は、中甕より出土した。中甕はほぼ完全な状態で出土したので、銅斧は副葬時より破片の状態であった。銅質は良いがブロンズ病が進み損傷が著しい。残存長 2.6 cm、残存幅 4.3 cm、厚さ 3～5.2 mm である。

刃部は片面で、刃面が部分的に残存する。刃部端面が比較的強い角度を持ち屈曲し、斜

面状となる。側縁は破損するが、左側縁では、両側から収束する状況が窺えるので、およそこのあたりで側縁となる。表裏面とも縦方向の鑄型整形痕（鑄肌）が確認できる。鑄肌とは異なる方向でのやや斜め方向の擦痕も刃部付近にみられる。横断面をみると中央よりが緩やかに膨らみを持ち、縦断面では刃部に行くに従い厚さを減ずる。

銅斧は片刃状の部分が残存し、両側が薄くなる形状から有肩銅斧の刃部片と判断できる。刃部幅が 4.3 cm 程度であり、韓半島でみられる有肩銅斧に通有のサイズである。

### （３）糸島市石崎曲り田遺跡出土関連資料（古川編 2001、藤島 2008）

藤島志考氏が、有肩円刃斧の刃部の可能性を指摘した資料があり、取り上げる（藤島 2008）。

遺跡は糸島市二丈町の石崎丘陵の西側緩斜面に立地する。第 3 次調査のⅣ区最下層 24 号住居跡床面から弥生時代後期後半の土器とともに「銅鋤先」が出土した（第 121 図）。これまでに知られる青銅製鋤先は U 字形だが、本例はそれらとは形状が異なる。ほかにもⅣ区下層 9 号住居からは列島で類例のない「銅鋤先」が出た。

Ⅳ区下層 9 号住居からは、弥生時代後期後半から終末の土器とともに楽浪系土器の鉢や筒坏が出土して特筆される。

さて、銅斧との関連性が指摘された「銅鋤先」は次の特徴を持つ。鋤先は全長 6.0 cm、刃部幅 6.1 cm、最大幅 6.6 cm、袋基部幅 6.2 cm、袋基部厚さ 1.65 cm、袋部内法幅 5.9 cm、袋部内法厚 1.5 cm、深さ 3.7 cm である。袋部から刃部にかけての傾斜度は強い。刃部は半円形の両刃で、装着部が著しく損傷する。基部上面の左右に再加工の研ぎ減りはないため、細くすばまる形態と想定できる。銅質は悪く、表面には縦方向の線状痕が残る。さらに刃部の摩耗が確認でき、土堀具の可能性が考えられた。

山崎の観察所見では、身の下面に比べて、上面が若干外側へ反る可能性が窺えた。刃部はかなり残りが悪く、オリジナルの部分はなく丸みを帯びているが、両刃の可能性が窺える。また、断面形では内部は扁平な隅丸長方形を呈し、外側は扁平な六角形から八角形状となるような側面に弱い角を持つ。身は若干膨らみを持つがレンズ状までは至らない。側面はほとんどが剥落し、本来の面は部分的にしか残っておらず、銅斧に特徴的だった合範の痕跡も全く確認できない。有肩円刃斧の特徴である身部分のレンズ状のカーブがなく、銅斧とするには違和感があり、銅斧に通例みられる合範のバリ痕跡がない。身の上面・下面は斧とした場合、厚さが 1.5～2 ミリ程度とかなり薄い。また、側縁は 3 ミリ程度の厚さがあるが、上下面一様の厚さであり、中央と側縁部が分厚くなる有肩円刃斧の特徴とは異なる。円刃斧からの再加工を見積もっても、側縁付近をかなり研ぎこまないとこの形状には近づかない。また、断面形の特徴からは斧であれば長方形斧だが、その場合も法量からこれまでの出土例よりかなり大形になり、可能性は低いと考えられる。

山崎が推測するに同じ遺跡から出土した「銅鋤先」とされた資料と親縁性があると考ええる。2 点ともに側縁にバリの痕跡を残さず、面取りしてかなりの丸みを持つ。「銅鋤先」は上端部の処理も非常に丁寧である。

今後、石崎曲り田出土青銅製「鋤先」・「鋤先」は類例を待つ必要があり、現時点では銅斧との関連性は考えにくいものと判断した。

## 4. 韓国出土の青銅斧との比較

先述の通り、銅斧の出土は日本列島にはほとんどない。日本列島で受容されなかった青



銅器のひとつで、破片資料のみが確認されている。韓国での類例調査を進めて、日本列島出土銅斧片との比較検討が可能になった<sup>(註5)</sup>。

#### (1) 九鳳里遺跡出土銅斧 (李 1987)

韓国忠清南道扶余郡九龍面九鳳里遺跡は 1985 年 3 月 30 日に発見され、李康承氏がその全容を紹介している(李康承 1987)。

遺跡は扶余から舒川方面に約 8km 離れた国道のそばで、南に突出する標高約 25m 程度の丘の南斜面にある。朝鮮時代末期からの共同墓地で、ここに縁故を置くソウル居住の李貴勲氏が亡父の墓の東側に亡母の墓を合葬しようと掘って発見し、扶余郡文化財広報室に申告した。申告を受けて直ちに国立扶余博物館から現場に行き調査したが、到着した時にはすでに故人の埋葬は終わって封墳がつくられていた。収集された遺物は作業現場を指揮した李顕承氏の家に保管されており、現場の移行は確認できなかった。しかし作業員からの聞き取りで、封土はなく、地表の腐植土から 50cm 下の風化岩盤に深さ 50 cm、南北 180 cm 程度、東西 100 cm 程度の土壌を掘って、その中に風化した花崗岩で石積みした 1 基の石棺から遺物が出土したことがわかった。墓を掘り始めた作業時間と調査班が到着した時間を考慮しても、発見遺物がよそに散失する余裕はなく、一括遺物のほぼ全体を收拾できたと考えられる<sup>(2)</sup>。

出土した遺物は、細形銅剣 11、細形銅戈 2、細形銅矛 1、銅斧 2、多鈕粗文鏡 1、多鈕細文鏡 1、銅鑿 1、銅鉈 1、磨製石斧 1、砥石 1、無文土器壺 2 で、合計 24 点である。

銅斧は長方形斧 B 類と円刃斧の 2 点が出土した。今回、三沢北中尾遺跡出土銅斧片に近い形態の長方形斧を、実見出来た。

銅斧は長さ 12.1 cm、刃部幅 6.2 cm、袋部深さ 7.6 cm、環耳は 1.9×0.6×0.7 cm である(第 122 図 写真 8)。平面形は袋部から身部上半にかけて、直線状につづき、身部下半から刃部は広がって撥状になる。斧身は長く、片刃であり、刃こぼれも確認できる。袋部上面から左側面を欠損する資料である。銅質は良いが、パッチ状に腐食部が多くみられ、ブロンズ病がやや進行している。

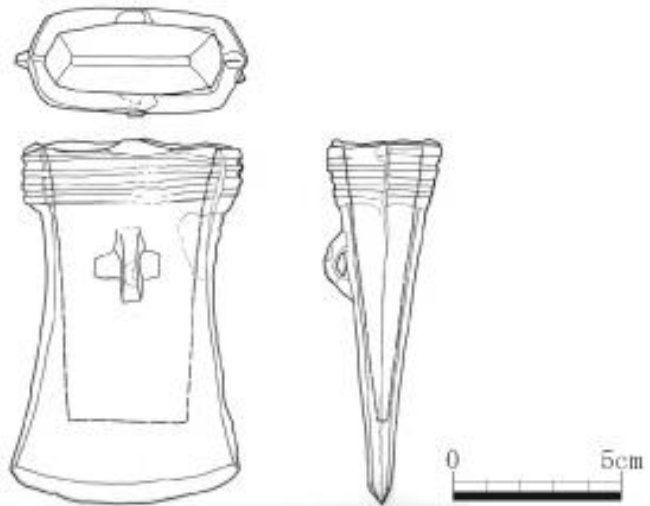
断面形は扁平六角形状を呈する。袋部には三条のやや太い突線が巡り、右側面では入れ違いとなるほどの突線のズレがみられる。側面には双范鑄型の合范部分に甲バリを多く残す。なお、左側面部は破損で、突線のズレは確認できない。博物館に展示するために欠失



第 122 図 九鳳里遺跡出土長方形銅斧実測図 (李 1987 をもとに補足修正)

部分の突線は合致するように復元されている。

破損資料のため、袋部の端部下側の状況がわかりにくい、上面では半円形の鑄型溝の痕跡が確認できる。三沢北中尾遺跡例は、外側断面形状はおおよそ長方形に近いが、九鳳里遺跡例は長六角形状であり、側面に明確で広い「く」の字形の傾斜面を持つ。また、九鳳里遺跡資料を実見して、袋部上端部の傾斜面がやや波うち、ハバキとの接触部分にバリ状の細い突線が確認できることなどから、三沢北中尾遺跡例も現状で袋部上端部は欠損していないと判断できた。



第 123 図 慶州博物館蔵菊隠菟集長方形銅斧実測図  
(慶州博 1987 をもとに補足修正)

## (2) 慶州博物館蔵 菊隠菟集銅斧 (国立慶州博物館 1987)

慶州博物館に所蔵されている菊隠李養璿博士が収集した資料で、出土地は伝全羅南道和順とされる (第 123 図 写真 9)。

銅斧は長さ 9.7 cm、刃部幅 7.1 cm、基部幅 5.7 cm、厚さ 2.7 cm、袋部内法幅 4.5 cm、袋部内法厚さ 1.8 cm、

袋部深さ 7.3 cm、環耳 1.6×0.45×0.5 cm である (第 10 図)。平面形は袋部と刃部幅が大差なく、袋部からややくびれて刃部付近で撥状に広がる。斧身は短く、両刃である。刃部は摩耗しており、使用による研ぎ減りが考えられる。銅質は良い。断面形は袋部では扁平六角形状で、身部分では側面の中央の屈曲が緩やかで、長方形に近くなる。袋部には 4 条のやや太い突帯が巡り、側面では双范鑄型によるズレが観察できる。右側面よりも左側面のズレが大きい。また、上下面中央では湯周りが悪く、突線の仕上がりが鈍い。身部分の前面には袋部よりも環耳がつく。環耳は貫通して、長軸 7 mm、高さ 3 mm の半円形を呈し、鑄造時の芯の痕跡が残る。側面には双范鑄型の甲バリが多く残る。

なお、袋部端には、上下の中央部分で半円形状の突起部があり、鑄型 2 条溝の痕跡が明瞭に確認される。

また、最近では許俊亮氏により、内面に内型を設置するための突起部 (痕跡では方形孔) 痕跡の存在が指摘され、考察された (許 2011)。

三沢北中尾遺跡例は袋部からの身部へ至るラインが直線的に見受けられくびれが弱い印象を受けるが、菊隠菟集品は袋部から傾斜しながら環耳付近でくびれて刃部へ広がり撥状となっている違いがある。断面形については、九鳳里遺跡のものはしっかりとした袋部・身部ともに扁平六角形状であるが、菊隠菟集品は、袋部は弱い角を持つ六角形状であり、身部は長方形に近い、三沢北中尾遺跡例に近い特徴を持っている。

## (3) 霊岩出土鑄型 (林 1987・後藤 1986・崇実大学校 2011)

崇実大学校博物館に所蔵されている霊岩出土の鑄型を、銅斧製作の観点、鑄造技術から

の検討、およびサイズや形態比較のために実見した（第 124 図 写真 10～13）。

霊岩出土の 14 枚の鋳型は 1960 年に金良善崇田大学校教授が骨董商蔣某から全羅南道霊岩郡鶴山面犢川里出土と伝えられて購入したものである（林 1987）。一方では、崔夢龍が「今から約 10 年前に、霊岩郡郡西面東鳩林里と推定されるところで、山崩れにより石製溶範が一括出土した」とし（崔夢龍 1976）、出土地は 2 説ある。霊岩出土鋳型は 14 枚がまとまって出土し、完形品が 13 枚、対になる鋳型が 12 枚も含まれており、一括出土品と考えられる。ここまでまとまった鋳型の出土は他になく、韓国国宝第 141 号に指定されている。

鋳型の種類は片面鋳型 4 枚、両面鋳型 10 枚 鋳型面数は 24 面 型の合計は 37 個となり、剣が 6 面 6 個（4 面 4 個は対となる 2 組）、戈は 2 面 2 個（対となる 1 組）矛は 1 面 1 個、斧は長方形斧 2 面 2 個（対となる 1 組）、有肩円刃斧が 2 面 2 個（対となる 1 組）、有肩斧が 6 面 6 個（対となる 3 組）、鑿は 4 面 6 個（対をなす 2 組）、釣針は 2 面 4 個、多紐鏡は 1 面 2 個、ヤリガンナは 1 面 1 個、針状品は 3 面 5 個 である（第 124 図）。

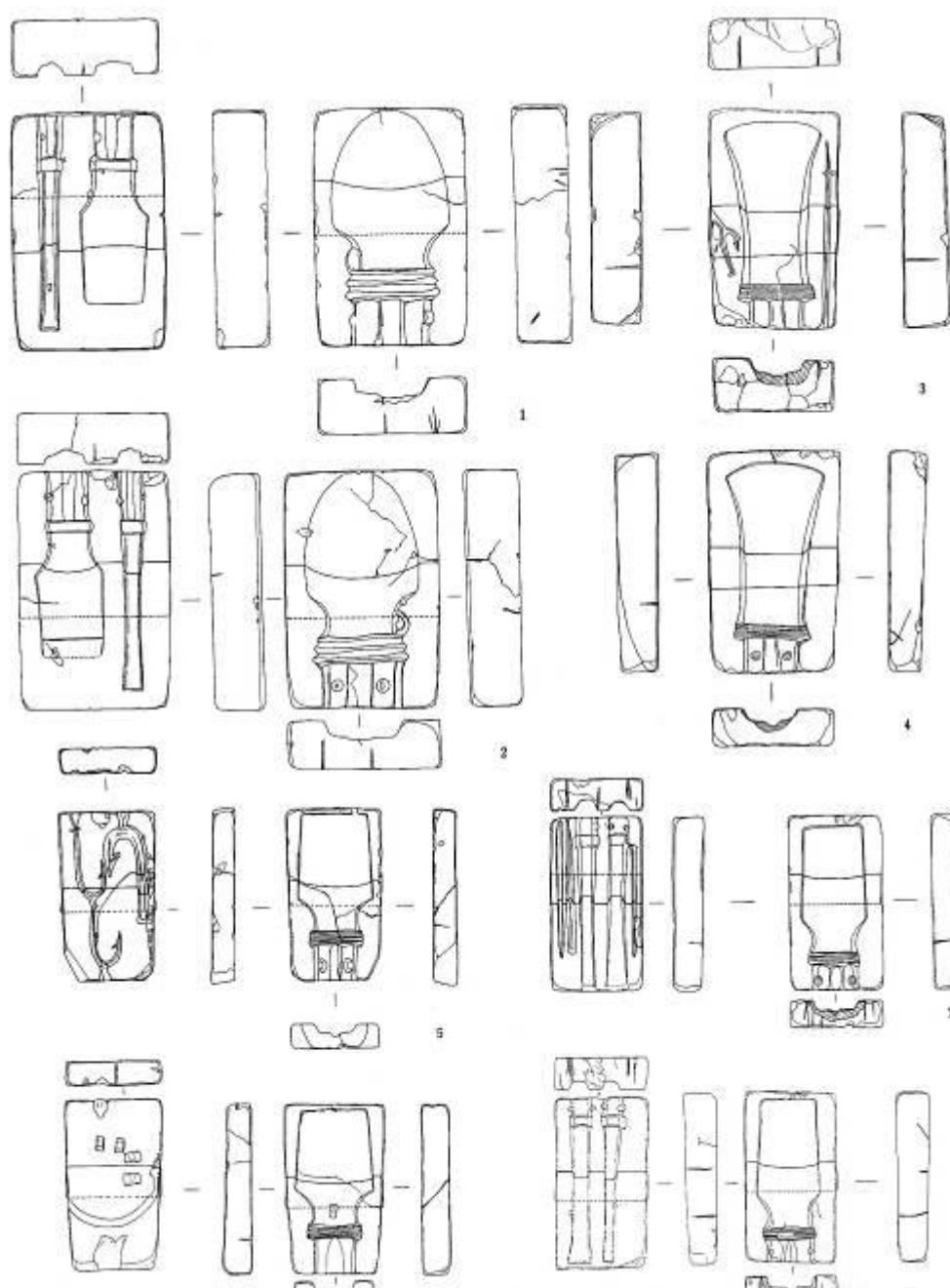
鋳型の石材は滑石製でやや赤みのある灰褐色を呈し、日本列島に通有の滑石とは色調が異なる。鋳型の形態は直方体、もしくは角が丸みを持つかまぼこ状である。

さて、斧の鋳型は長方形斧 2 面 2 個（対となる 1 組）、有肩円刃斧が 2 面 2 個（対となる 1 組）、有肩斧が 6 面 6 個（対となる 3 組）である。霊岩出土以外にも永興邑 1・2 号と松菊里の 3 枚 3 個が知られるが、いずれも扇形斧の片面鋳型で霊岩出土鋳型にはない。

斧の鋳型は装着するための空洞部を作りだす必要があり、中子を必要とする。湯口と中子固定部ハバキを同じところにつくり、中子の固定部分には小円形の窪みを掘って、中子の対応する小突起とともに、中子の固定をより強固とする造作がある。この窪みは全くない場合や一方だけの鋳型にみられる場合もある。後藤直によれば、中国東北部の斧鋳型の湯口は 2 種類あって、遼西の長方形銅斧鋳型は、幅と深さが斧部と同じ溝を掘り、溝の先端近くで両側面に中子を固定する細い穴（溝）を掘っている。下溝がないので、中子の方に溝を掘ると考えられる。これに対し、遼東の扇形銅斧、鑿鋳型の湯口は霊岩同様、大溝と小溝を彫っていて、霊岩鋳型の源流が松菊里扇形銅斧鋳型を介して遼東に求められることを示す。ただし、遼東の鋳型にはハバキに窪みがなく、これは朝鮮半島での工夫と推測される（後藤 1996）。

長方形斧の鋳型（7 号・8 号）（第 124 図 3・4）は 7 号鋳型が長さ 15.5 cm、幅 8.4～9.15 cm、厚さ 3.4～3.7 cm の長方形状で、彫られた斧の長さ 12.9 cm、突帯部最大幅 5.5 cm、刃幅 6.9 cm で袋部に 4 条突帯がみられる。重さは 1226 g である。8 号鋳型よりも分厚い。斧の左には棒状製品、右には釣針の掘り込みがある。鋳型面以外には鑿状の痕跡が多く残る。鋳型溝は上溝が長さ 2.2 cm、幅 3.8 cm、深さ 1.0 cm、下溝が幅 1.0 cm、深さはわずかで 0.1 cm 程度である。溝部分に窪みはない。湯口周り と 溝部分、斧部分は黒味がある。

8 号鋳型は長 15.75 cm、幅 8.5～9.2 cm、厚さ 2.5～3.2 cm の断面は平たい長方形で、彫られた斧の長さ 12.6 cm、袋部厚さ 5.4 cm、刃幅 6.9 cm で、袋部に 4 条の突帯がみられる。重さは 980 g である。鋳型面以外には鑿状の痕跡が多く残る。突帯下から緩やかに長くのびて、刃部付近で撥状に広がる。突帯の縦幅は 1 cm でその中に 4 条の突帯があり、細い突帯である。鋳型溝は上溝が長さ 2.6 cm、幅 3.8 cm、深さ 0.8 cm、下溝が幅 1.0～1.2 cm、深さ 0.4 cm 程度である。上溝の両側中央には小円形の窪みがある。湯口周り と 溝部分、斧部分にはやはり黒味がある。合印は左側面の上半に 1 本、湯口の片側に 1 本、湯口の反対側



第 124 図 霊岩出土鋳型（林 1987、李 1991）

の左右に 1 本ずつ確認できる。

三沢北中尾遺跡例と実際に合わせてみたが、節帯部の幅、それぞれの突帯の幅が大きく異なり、霊岩鋳型がいずれも細い。突帯部分の側面のカーブも霊岩鋳型では台形状で、傾斜面がはっきりしており、三沢北中尾遺跡例と異なっている（写真 11）。

有肩円刃斧の鋳型（13 号・14 号）（第 124 図 1・2）は 13 号鋳型が長さ 16.9 cm、幅 10.5～10.8 cm、厚さ 3.6～3.8 cm の長方形で、彫られた斧の長さ 13.5 cm、突帯部最大幅 6.8 cm、刃幅 8.0 cm で袋部に 3 条突帯がみられる。重さは 1525 g である。突帯幅は太く、突帯下で短くくびれて長円形の円刃となっている。帯下には耳がつく。反対の面には有肩斧と

鑿を彫る。鑄型面以外には鑿状の痕跡が多く残る。鑄型溝は上溝が 3.3 cm、幅 5.5 cm、深さ 1.2 cm、下溝が幅 1.9 cm、深さはわずかで 0.2 cm 程度である。上溝の両側中央には小円形の窪みがある。湯口周りと溝部分、斧部分には黒味がある。

14 号鑄型は長さ 17.0 cm、幅 10.5~11.0 cm、厚さ 3.8~3.9 cm の断面長方形で、掘られた斧の長さ 13.6 cm、基部幅 6.8 cm、刃幅 8.6 cm で、袋部に 3 条の突帯がみられる。重さは 1637 g である。突帯下には耳がつく。反対の面には同じく有肩斧と鑿が彫られている。鑄型面以外には鑿状の痕跡が多く残る。鑄型溝は上溝が 3.3 cm、幅 5.5 cm、深さ 1.2 cm、下溝が幅 1.9 cm、深さ 0.2 cm 程度である。上溝左右端中央に小円形の窪みがある。湯口周りと溝部分、斧部分にはやはり黒味がある。円刃斧に伴う合印はなく、有肩斧・鑿面に伴う合印がみられる。

三沢北中尾遺跡例と実際に合わせてみたが、節帯部の幅、それぞれの突帯の幅が大きい。突帯部分の側面のカーブも霊岩鑄型では大きくレンズ状である（写真 10）。

ちなみにほかに 3 組みられる有肩斧（第 124 図 1・2・5・6・7・8）は全体のサイズ面で、いずれも三沢北中尾遺跡の長方形斧よりも一回りも二回りも小さいから、一見して三沢北中尾遺跡例とは異なるタイプである。

#### （４）釜山市博物館所蔵銅斧 2 例

釜山市博物館所蔵の有肩銅斧と長方形銅斧 A 類を実見した（第 125 図 写真 14）。博物館収集品で出土地は不明である。

長方形銅斧は長さ 10.7 cm、刃部幅 4.7 cm、基部幅 4.4 cm、袋部内法幅 3.1 cm、袋部内法厚さ 1.6 cm、袋部深さ 6.0 cm である（第 12 図）。銅質は比較的良い。平面形は袋部と刃部幅が大差なく、わずかに刃部が広がる。斧身は小形で短く、両刃である。刃部は鑄が進行しており全体を遺していないが、幅の狭い刃部の割には平面形が弧状の刃形となっている。細かい擦痕が縦方向にみられ、刃を研ぎ出す。断面形は長方形で、長辺の中央がやや膨らみをもつカーブを持つ。袋端部から 1.9 cm でわずかな段を有す。側面では双範鑄型による段のズレが観察できる。また、袋端部と段との中間に縦方向のかすかな稜線が観察される。側面形は袋部から身部にかけて、上下ともわずかに内湾して部へ至る。側面には双範鑄型の甲バリが多く残る。

なお、袋部端には、上下の中央部分で鑄型 2 条溝の痕跡であるうすい半円形状の突起部が観察できる。また、左右には大きな



第 125 図 釜山市博物館所蔵銅斧



こぶ状のでっぱりがあり、側面の甲張りへと続く。双范鑄型による製作時の痕跡を残している。

袋部に明確な節帯などの装飾がなく、袋部断面が長方形、B類に比べて小形の斧で、両刃という特徴から長方形銅斧A類に相当すると考える。

次に有肩銅斧である。(時間的制約から袋部の特徴がわかり、全体の残りの良い方のみ(刃部の反対側)を実測した。)有肩銅斧は片側の袋部を欠損している。長さ 9.2 cm、肩部幅 4.45 cm、刃部幅推定 3.9 cm 程度、基部幅 3.2 cm、袋部内法幅 2.35 cm、袋部内法推定厚さ 0.8 cm、袋部深さ 4.6 cm である(第 125 図)。平面形は袋部からやや内傾して緩やかに肩部へ至る。なで肩で、肩部から刃部へは直線的にやや狭まる。小型の斧で片刃である。断面形は、袋部では扁平な隅丸六角形で側面の丸みが強く、刃部に至ると長円形となり、緩いレンズ状の膨らみへと変わる。刃部付近はクレーター状の小さな進行性の錆が多く分布している。刃部は横方向の粗い擦痕と端部で縦方向の細かい擦痕が確認できる

袋部には細い突線が 4 条確認できる。中央左寄りでは鑄上りが悪い。側面付近もカーブの部分は突線がはっきりせず、とぎれとぎれとなっている。

側面の甲張りは肩部までで、刃部ではほとんどない。なお、袋部端には、鑄型 2 条溝の痕跡であるうすい半円形状の突起部が観察できる。

## 5. 考察

### (1) 日本列島出土青銅斧の編年的位置

以上のように、日本出土青銅斧関連資料の実見観察、韓国出土青銅斧との比較調査から、日本列島で確認される確実な青銅斧は福岡県小郡市三沢北中尾遺跡貯蔵穴出土の長方形銅斧B類の袋部の破片と佐賀県本村籠遺跡甕棺出土の有肩斧の刃部の 2 例に絞られた。

この 2 例の所属時期を考察する前に、日韓の弥生／無文土器時代の併行関係を再確認しておきたい。当該期における日韓の併行関係については冒頭で示した通り整理される(武末 2004)(第 115 図)。本論では特に韓半島南部の無文土器時代水石里式段階が大きく関係するが、近年、日本では新成果や既出資料の見直しから、その上限が引き上げられる傾向にある。日本での円形粘土帯土器の出土は、従来板付Ⅱ式新段階から前期末、一部中期初頭に係る時期とされてきたが[片岡 1990]、糸島市石崎曲り田遺跡において板付Ⅰ式土器と包含層中で出土した資料(円形粘土帯甕口縁部)の積極的評価(端野 2009)や行橋市葛川遺跡 SP39 における板付Ⅱa 式土器と円形粘土帯土器(小形甕、もしくは鉢)の共伴例(武末・上田 2006)、小郡市大保横枕遺跡 2 環濠最下層での板付Ⅱa 式新段階の弥生土器と円形粘土帯土器(小型甕もしくは鉢)との共伴例(山崎 2012)などが知られ、前期末以前での円形粘土帯土器の流入が窺えるようになった。さらには韓国馬山網谷里遺跡でも突帯文系土器が出土し、その頃より小規模な交流があった蓋然性は高い(慶南発展研究院歴史文化研究センター 2009)。古くより無文土器集中出土地域として知られる三国丘陵地域でも弥生時代前期中頃(板付Ⅱa 式新相)から少数の水石里式無文土器、擬無文土器が確認でき(松菊里式系土器の出土とも一部重なる)、従来考えられていた前期末段階だけでなく、より長期間の流入が認められた(山崎 2010a・2014)。流入の初期は散在的に少量の甕が出土する状況で、前期末に至って甕・壺・高杯・鉢などセットでの集中出土遺跡がみられるほか、韓半島の集落構造と類似する集落跡が福岡市諸岡遺跡や三国丘陵の鍋倉遺跡、北松尾口遺跡等で認められ、渡来人の居住、集団の接触を具体的に言及できるようになった

(李 2009、松尾 2010)。中期初頭以後には、特に有明海沿岸地域で擬無文土器が多く認められ、渡来人が居住し在来集団への同化が推定される。続く勒島式無文土器系土器の出土は、水石里式無文土器系土器の分布と異なり、対馬や壱岐原ノ辻遺跡で集中的にみられるほかは、北部九州や中国地方の沿岸域で少量出土する程度となり、大きく変化する。以上のように、弥生時代前期末以前での粘土帯土器の流入、韓半島の青銅器文化との接触が確認されつつある(山崎 2014)。

さて、三沢北中尾遺跡出土銅斧片は相伴土器から板付Ⅱa式新段階から板付Ⅱb式古段階の時期と考えられる(山崎・井上 2004、山崎・杉本・井上 2005)。これは扇形銅斧とは異なる長方形斧であることが一連の資料調査から確認できており、青銅器編年Ⅲ期古段階前半の九鳳里遺跡一括資料を構成する長方形銅斧(B類)、その前後する時期であると思われる慶州博物館蔵菊隠菟集品の長方形銅斧(B類)と近い特徴をもつ。九鳳里段階直後の青銅器編年Ⅲ期古段階後半の南陽里遺跡2・4号墓では銅斧との相伴例がないため、南陽里段階の銅斧(特に長方形銅斧)の形態が不明ながら、現段階では九鳳里段階(青銅器編年3期古段階前半)を中心とした時期に相当すると考えられる。本例は、朝鮮半島南部青銅器編年3期古段階前半の資料が、北部九州で、板付Ⅱa式新段階からⅡb式古段階の土器と相伴する事例として重要な資料である。

また、本村籠遺跡で青銅器編年3期古段階後半以降に顕著な有肩銅斧刃部片が金海式新段階の甕棺から出土している。本村籠遺跡では他にも隣接する金海式新段階の58号甕棺墓から多紐細文鏡・青銅製ヤリガンナが出土しており、有肩斧の時期を考える上で参考となる。

以上のように、日本列島では完形の青銅斧の出土はなく、いずれも破片資料だが、その所属時期は先に示した日韓の弥生時代／無文土器時代の併行関係に照らし合わせても順当な位置を示していることが窺える。

## (2) 破片青銅器の意味～日本における青銅器時代の提唱～

日本列島では、完品の武器形青銅器や鏡、あるいは銅鐸が出現する弥生時代前期末～中期初頭以前に、武器形青銅器の小型破片を利器に転用する事例が知られている(吉田 20013・2014)。遼寧式銅劍の転用品と考えられる福岡県今川遺跡出土有茎式有翼形銅鏃・銅鏃状利器(板付Ⅰ式新)や山口県井ノ山遺跡片刃利器(時期不明)、北九州市上徳力遺跡遼寧式銅劍破片(前期)などである。今川遺跡の銅鏃は板付Ⅰ式新段階のV字溝に切られた包含層下層出土資料で、弥生時代前期初頭前後とされる(酒井編 1981)。小型円柱状片刃青銅利器は調査時に表採され、同じ包含層下層出土と考えられている。井ノ山遺跡の利器は表採品で時期は不明だが、遼寧式銅劍の転用品である可能性が指摘されている(石井編 2005)。参考までに遼寧式銅劍を転用した例は、韓半島でも確認されており、松菊里遺跡では、遼寧式銅劍の茎下端一側縁に抉りを残す円柱状の片刃利器がみられる。韓半島の青銅器文化は日本列島に、当初、青銅武器を転用・再加工する技術や思想も含めて、大陸系磨製石器とともに招来したと考えられる。

以上の武器形青銅器の破片に加えて、青銅工具の破片資料も確認された。三沢北中尾遺跡銅斧片(板付Ⅱa式新段階からb式古段階)は再加工がみられるので、青銅武器転用品のように利器としての使用、転用も想定される。

日本列島では、既に北部九州以東で武器形青銅器完品の前に武器形青銅器断片が小型利

器素材として流入した段階を設定できるから、北部九州、すなわち日本列島への青銅器伝播最初期の地でも、小型利器素材としての青銅器破片流入段階を想定できると考えられる（吉田 2010）。すなわち、金属器でも青銅器単独時期が確認できるので、日本における青銅器時代を提唱したい。

それでは、三国丘陵に小型青銅利器が流入した理由に若干触れて擱筆としたい。

三国丘陵地域では板付Ⅰ式併行期段階から松菊里型土器、松菊里型住居がみられるなど、弥生文化受容期から渡来的要素が窺える地域である（山崎 2010a）。板付Ⅱa式以降は円形粘土帯土器の流入が確認され、Ⅱb式新段階以降前期末にかけて、円形粘土帯土器の集中出土遺跡がみられるように変遷する。中期初頭には青銅製ヤリガンナなどの小型工具、鋳造鉄斧再加工品など（初期鉄器）が流入し、初期の鉄器（工具類）や青銅工具類が比較的多くみられる地域である（比嘉 2011）。また、三国丘陵地域は弥生時代前期以降、今山系伐採石斧の大消費地だと考えられ（武末 2001、森 2011）、それには三国丘陵の「森林資源」が大きな要素であったと考えられる。「森林資源」の利用は、戦略的な集落占地、変遷からも窺うことができ、丘陵上の調査が多く木器自体の出土は未だ少ないが、その他の要素から当地域の「森林資源」の開発は首肯できよう。これらの利器、工具類は「森林資源」の利用に関連して、当地域の特徴として流通・流入した可能性が大きい。

このように、三国丘陵地域では、無文土器や住居等遺構からも窺える韓半島からの文化流入が早い段階から継続して認められ、青銅斧がもたらされる素地は既に形成されていたのであろう。

## 6. おわりに

近年、AMS年代により弥生時代の開始が500年程度さかのぼることを国立歴史民俗博物館が示した（国立歴史民俗博物館 2003 ほか）が、本論では韓半島の無文土器時代／日本列島の弥生時代の併行関係を考える上で重要な資料のひとつになると思われる三沢北中尾遺跡2地点出土銅斧片の位置を検討した。

まず、列島では出土例がわずかな韓半島青銅器時代の青銅斧を、韓国で資料調査を実施して、三沢北中尾遺跡例が長方形銅斧B類の袋部の破片であることを確認した。ほかには本村籠遺跡の2号甕棺から出土した有肩斧の刃部片が該当する。関連性が指摘されている石崎曲り田遺跡出土の「銅鋤先」は、有肩円刃斧ではない可能性が窺えるので、日本列島で確実な韓半島青銅器時代の銅斧の出土はこれまでに2例しか確認されていないことになる。

三沢北中尾遺跡銅斧は、朝鮮半島南部青銅器編年3期古段階前半の資料が、北部九州の板付Ⅱa式新段階からⅡb式古段階の土器と共伴する事例として重要な資料である。本村籠遺跡出土有肩斧は金海式甕棺新段階の副葬品で、有肩斧は長方形銅斧B類より一段階遅れて出現し、その後隆盛する銅斧であり、この2例は韓半島青銅器編年と日本列島弥生時代編年の併行関係を考える上で重要な位置を占める。理化学的な年代との互いの検証のためにも、今後もこのような考古資料による日韓の交差年代を推定する方法の積み重ねが必要である。

銅斧が出土した三沢北中尾遺跡周辺は古くから無文土器の集中出土地である。今山系伐採斧の大消費地でもあり、周辺地域への流通を含めた当地域の「森林資源」利用の様子が窺え、中期初頭以降は鋳造鉄器片や青銅製ヤリガンナなどの金属製木工具の出土が多くみ

られる地域である。本青銅斧の破片も、再加工がみられる転用品である。破損しており、工具としての使用ははっきりしないが、完形品で流入した後に破損した可能性のほかに、もともと破片青銅器の形で、小型木工具として持ち込まれた可能性も考えられた。三国丘陵地域は韓半島との交流や「森林資源」の利用などで特徴づけられ、前期段階でも小型工具としての青銅器破損品が流入する素地は整っていたといえる。

このように、前期末～中期初頭に完形の武器形青銅器が流入する以前にも、銅斧などの工具類そのもの、または小型利器やその素材として破片青銅器が流入する段階が設定できる見通しを得た。

【註】註＞

(1) 銅斧片のX線CT調査は九州歴史資料館、3Dモデルの作成は九州国立博物館の協力による。

(2) 現在、青銅器時代と呼ぶ説が優勢になっているが、なお疑問点もあり、ここでは無文土器時代としておく。

(3) 佐賀市本村籠遺跡出土銅斧は平成25年2月28日に山崎が実見し、佐賀県立博物館 蒲原宏行氏、佐賀県教育委員会細川金也氏にお世話になった。福岡県糸島市石崎曲り田遺跡出土銅鋤鉞先は平成26年9月7日に山崎が実見し、伊都国歴史博物館の岡部裕俊氏にお世話になった。

(4) 小郡市三沢北中尾遺跡の貯蔵穴出土の土器は、板付Ⅱa式(新)～Ⅱb式(古)の特徴を有しており、遺構の切り合いからは城ノ越式の貯蔵穴に切られるので、その下限がうかがい知れる。報告書掲載以外にも破片資料が黄色のパンケースに数箱あるが、確認したところ板付Ⅱc式に下る資料は見られなかった。出土土器群と銅斧の出土層位の関係は復原できなかったが、出土年月日や発掘作業工程から推定すると下層で廃棄された土器群とともに廃棄された可能性が高く、板付Ⅱb式が相伴土器の下限と考えられる。

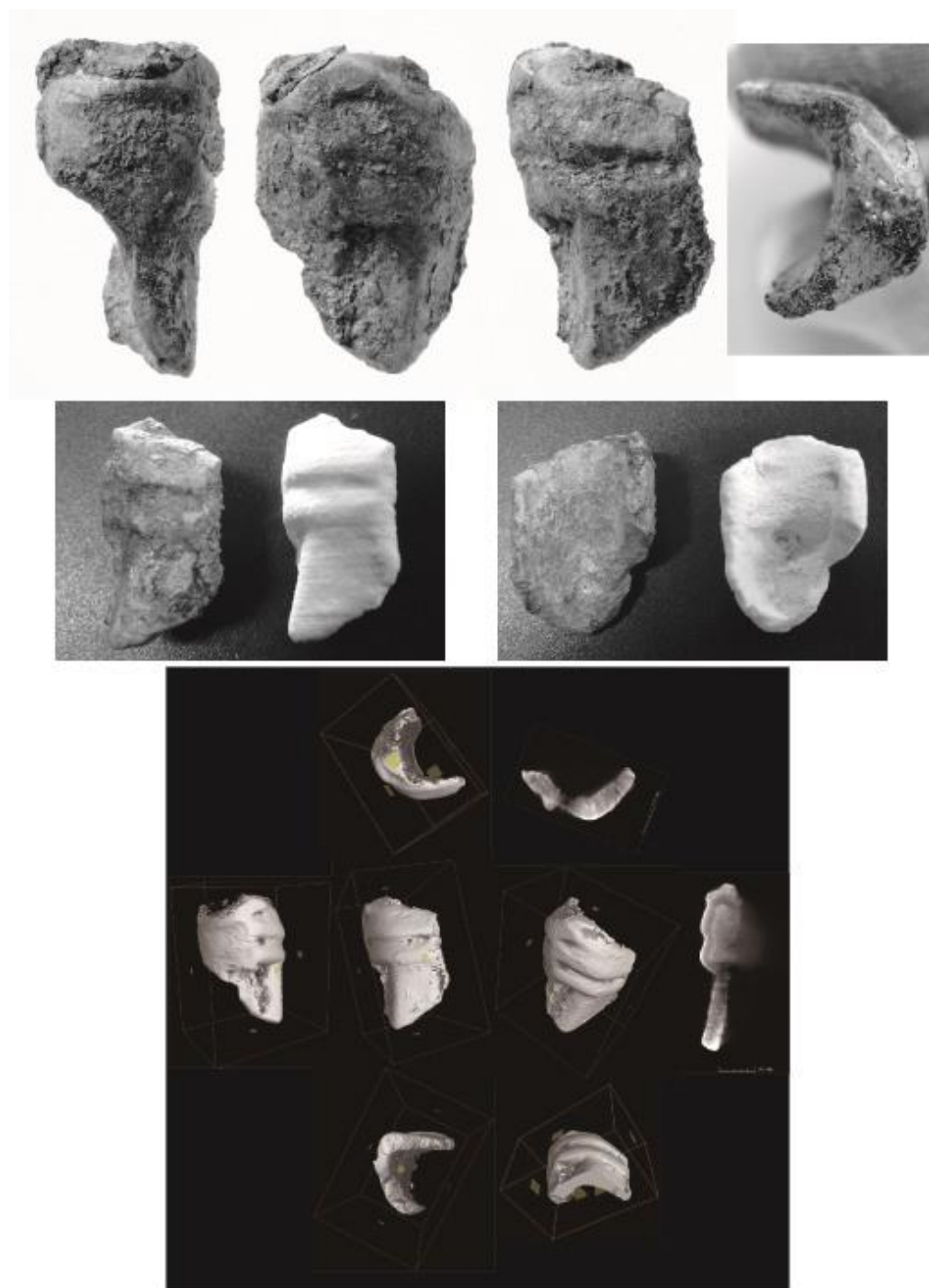
(5) 扶余九鳳里遺跡出土一括資料は、平成24年12月3日に山崎・武末が実見した。国立扶余博物館の朴方龍 韓鳳奎 具門慶の各氏、大田大学校李漢祥氏のお世話になった。

慶州博物館蔵菊隠菟集銅斧は平成25年4月29日に山崎・武末が実見した。慶州博物館の李榮勳、張龍俊、李姪恩の各氏のお世話になった。

釜山市博物館蔵銅斧2例(出土地不明)は平成26年3月10日に山崎・武末が実見した。釜山市博物館 洪漣植 朴程郁の両氏のお世話になった。

霊岩出土鋳型は平成26年3月11日に崇実大学校博物館で山崎・武末が実見した。崇実大学校博物館の崔恩珠 朴敬信の両氏、(財)錦江文化遺産研究院の柳基正氏、並びに李健茂氏、金武重氏のお世話になった。

写真 7



三沢北中尾遺跡出土銅斧と X 線 CT 画像（小郡市教委 2012）



写真 8



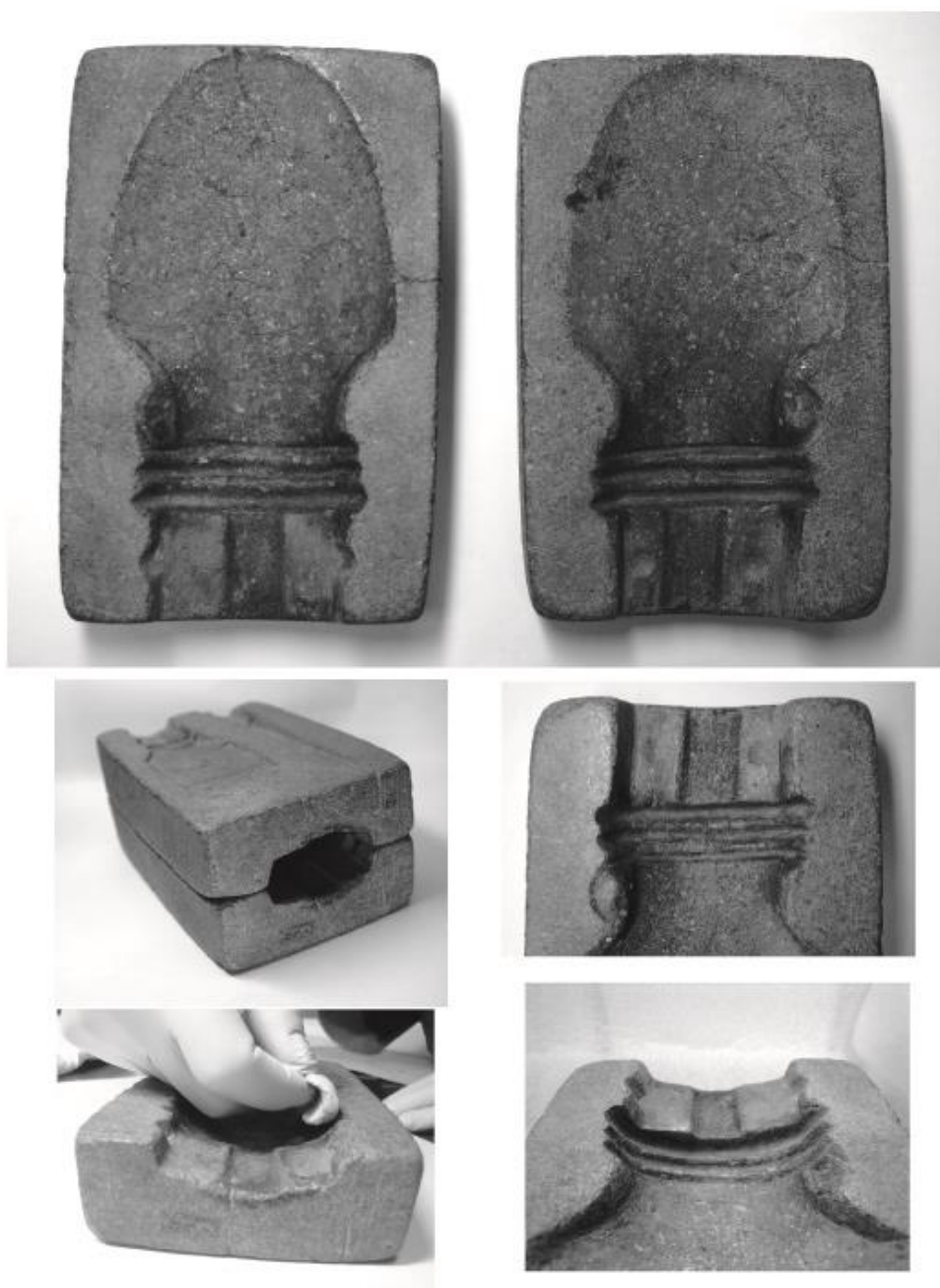
九鳳里遺跡出土銅斧（武末・山崎撮影）

写真 9



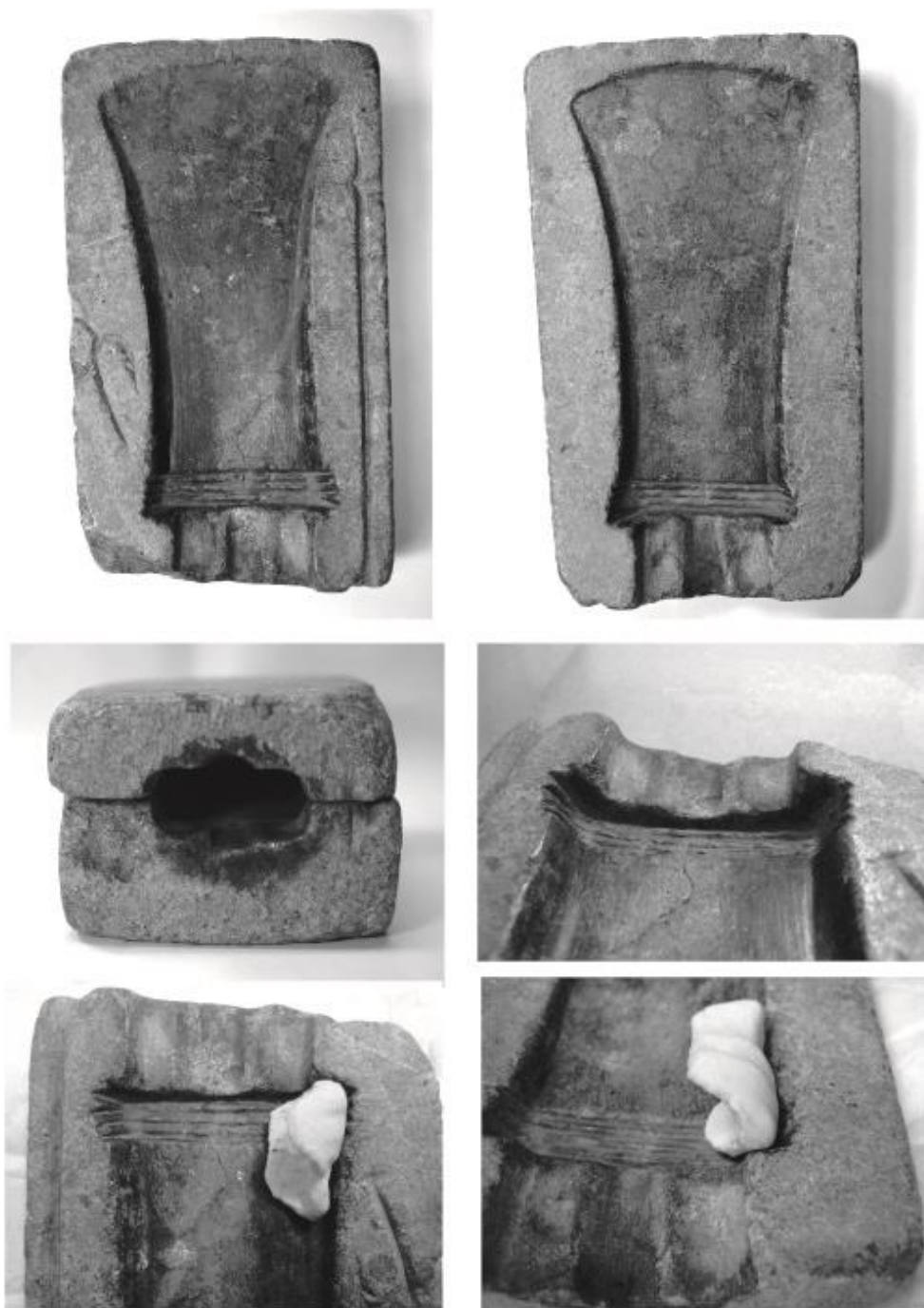
慶州博所蔵銅斧（武末・山崎撮影）

写真 10



黒岩出土銅斧鑄型 1 (武末・山崎撮影)

写真 11



靈岩出土銅斧鑄型 2（武末・山崎撮影）

写真 12



靈岩出土銅斧鑄型 3（武末・山崎撮影）



写真 13



霊岩出土銅斧鑄型 4 (武末・山崎撮影)

写真 14



釜山市博物館所蔵銅斧（武末・山崎撮影）

## 第5章 「地域社会」における日韓交流

三国丘陵地域で検討する「在来の土器生産体制と渡来人の土器作りとの関係」・「その同化の過程」、及び「集落内での渡来人の様相とその場で果たした役割」を他地域や遺跡とも比較検討し、弥生時代における「在来人と渡来人の接触・交流・同化のモデル」を各地域の特徴から示す。「日韓双方向での交流」を明らかにすることを目指す。なお、本章の課題設定「地域社会においてどのように集団の交流が進むのか、それにどのようにアプローチするのか」は序章で示した通りである。

### 第1節 無文土器系土器と集団

#### ～三国丘陵における土器生産からみた日韓交流～

##### 1. はじめに

筆者はこれまで、多くの無文土器（第126図）（円形粘土帯土器）や初期の金属器（銅や鉄の斧・鉋などの工具類）が出土する地域である福岡県内陸部、小都市三国丘陵地域の集落動態を検討しており、近年、無文土器が集中して出土する遺跡群周辺の発掘調査が進んだが、新たに無文土器が出土する遺跡は発見されず、逆に無文土器が集中出土する範囲が非常に限られることが明らかになった。三国丘陵地域では、当初、地域内の限定された集落が渡来人との交流拠点となり、次にその集落の規模縮小・移動に伴って、渡来系集団が周辺集落に拡散・同化する可能性が窺えるのである（山崎 2016）。この理解を深めるために、まず、交流拠点と考えられる集落群での渡来人と在来人のあり方を検討する。そのうえで、地域における土器生産体制を明らかにして、土器製作技法の接触や変容過程を考察し、地域における日韓交流モデルを構築したい。この作業は、日韓の他の地域社会においても検討することが可能であり、それらを比較することで、土器生産体制と土器製作者からみた在来人と渡来人の接触・交流過程が一層明らかになると考える。集団像や渡来人との交流の諸相（一時的移動・帰還／滞留／婚姻・永住など）にも言及できる可能性を持つ。

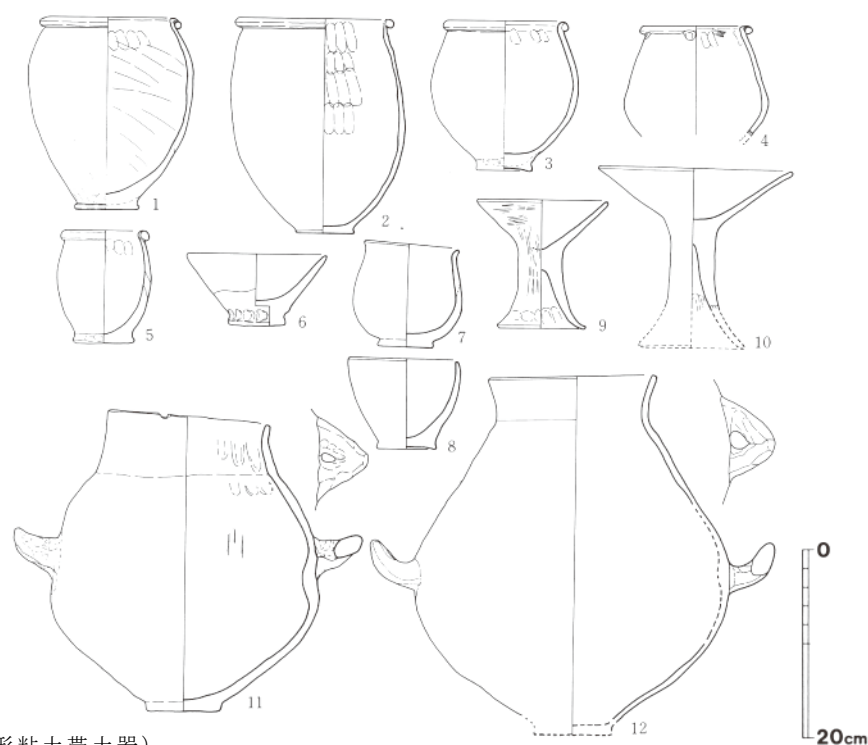
##### 2. 研究の現状と課題

###### （1）土器の移動と変容の概念整理

土器の製作は先史社会において一般的に行われ、その移動現象は、金属器などの威信財とは異なり、広く「常民」レベルまでの交流を対象とすることが出来る。そして、民族誌を鑑みると土器の作り手は女性を中心としたものであり、土器製作技術の交流を考える上で重要な視点である（Murdok 1937）。

土器移動に関する名称を整理しておくと、「搬入土器」、「模倣土器」、「折衷土器」、「○○系土器」などがある。土器移動の背景には、それを携えた人の動きや集団間の接触・交流が考えられるが、現象面的理解（製作技法や移動形態、移動量など）とそれらの集団像・集団関係の復原については分けて考える必要があり、その上で両者を結び付ける操作と作業が要請される。それらの土器の変容過程を分析することも、製作者像（集団像）の観点から重要である（註1）。

これまで粘土帯土器と弥生土器の製作技法の違いについては多くの検討が行われ、日本列島では「朝鮮系無文土器」、「擬朝鮮系無文土器」といった名称で、その変容過程が考察さ



無文土器（円形粘土帯土器）



変容無文土器系土器  
（「擬無文土器」）

1～5: 横隈鍋倉遺跡 6～11: 三国の鼻遺跡 12: みくにの東遺跡 13: 三沢蓬ヶ浦遺跡 14: 北牟田遺跡

第 126 図 三国丘陵の無文土器系土器（片岡 1999 を一部改変）

れてきた（後藤 1979・1987, 片岡 1990・1993 ほか）<sup>註 2）</sup>。

それらの先行研究に従うが、双方向的な土器移動・接触を考慮するならば、第 4 章第 1 節の定義に従い、両系統の変化を「変容」を用いて示す。

## （2）土器生産について

弥生時代の土器づくりは、自家的生産もしくは集落単位での生産で規模が小さく、専業生産のシステムが一般的ではなかったと想定されてきた（都出 1989）。そして、土器づくりの技法そのものが製作者の属する共同体からの規制を受けて、製作者の属する集団の個性が表れやすく、土器の地域色や移動をもとに、弥生時代の「クニ」の領域や通婚圏、地域間交流や社会が復元された（佐原 1970, 横山 1985, 都出 1989）。

近年、発掘調査データの蓄積に伴い、発掘資料と民族事例や土器の焼成実験との比較により、被覆材や燃料の検討が進んだ。縄文時代の開放型野焼きから水田稲作とともに朝鮮半島から覆い型野焼きの技術が伝わったと考えられている（小林・北野ほか 2000）。さらには、弥生時代土器製作の場や焼成技術を明らかにし、当時の土器の生産体制を復元する試みが進められた（石橋 1997・1998, 柏原 1997, 田崎 2000・2002・2004, 長友 2013）。

田崎博之は土器焼成関連資料（焼成失敗品）から土器生産の場を復元し、土器の生産単

位・規模・組織化を論じた（田崎 2002・2004）。農耕社会成立期には、自家生産・消費の小規模な土器づくりが径 2 km ほどに展開する遺跡群や地域内での分業システムへと飛躍、弥生時代中期後葉～後期初頭に、大規模集落内部に土器づくりの工房域が設定され、それらを単位とした土器生産、特定器種が集中生産される器種別分業が成立する。

特に、三国丘陵では遺跡群のなかで土器焼成残滓が出土するのは弥生時代前期前葉～後葉の津古土取遺跡、前期中葉～前期末の一ノ口遺跡であることを確認し、「土器づくりは、径 2 km に展開する津古・三沢遺跡群で継続的に行われているものの、丘陵の各所に点在する住居群のすべてで行われていたわけではなく、遺跡群内の限られた 1～2 カ所の住居群で土器が生産され、他の住居群へ供給されていたモデルを提示した（田崎 1995・2004）。その後、三国丘陵に所在する弥生集落の調査成果や土器生産に関する遺構と遺物の検討からも、地域における中心的な限られた集落による土器生産・供給システムが追認された（宮田 1997、柏原 1997）。

土器の集中生産は專業度を高め、遺跡群間をこえた広域地域間における交流・交易と一部連動し、古墳時代には、さらに大規模な土器の專業生産と供給のシステムを達成、分業システムの多重化・階層化が想定された（田崎 2004）。

土器の移動・模倣・折衷のプロセス、集団の交流を考える上では土器生産体制の復元が肝要である。

### （3）日本列島における無文土器の製作～日本列島出土無文土器の胎土分析～

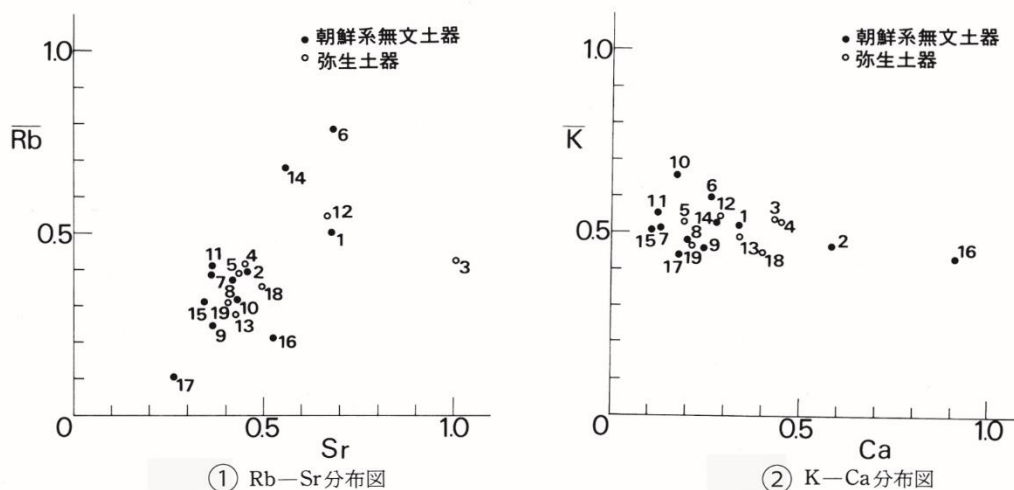
1974 年の福岡市諸岡遺跡発掘調査を契機に日本列島出土の無文土器に注意が払われ、既出土資料のなかにも無文土器があることがわかってきた（後藤・横山 1975）。最大の問題はこの種の土器が「朝鮮半島南部で作られたものが搬入されたのか、北部九州において当時の無文土器人あるいは弥生人が製作したのかという点」であった（後藤 1978）。

この点を解明するために、清水芳裕による諸岡遺跡・板付遺跡の無文土器・弥生土器の岩石学的手法による産地同定が行われた（清水 1978）。諸岡遺跡のある福岡平野は朝鮮半島南端部から東海岸にかけての地域と同様に火山岩類で組成される。しかし、諸岡遺跡出土の土器には火山岩片が見られず、朝鮮半島南端の山間部とそれ以北と考えられた（清水 1978）。だが、諸岡遺跡の弥生土器も他地域で作られた可能性が残り、朝鮮半島産か諸岡遺跡近辺で製作されたのか、結論付けることはできなかった。

三国丘陵地域の横隈鍋倉遺跡では、無文土器・弥生土器の蛍光 X 線分析が行われ、K, Ca, Fe, Rb, Sr 値を測定した（第 127 図）。弥生土器・無文土器の胎土組成は近く、大部分のものは同じ地域の粘土を素材にした可能性が高い。一部の無文土器（1・6・14）・弥生土器（12）は Rb 値がその一群と離れるので別地域からの搬入品と推定された。Sr 値の異なる弥生土器（3）も同一地域ではあるが、産地が異なる可能性が考えられる（三辻 1985）。続く、三国の鼻遺跡の蛍光 X 線分析では、同様の分析で三国の鼻遺跡の 8 点の無文土器と弥生土器は Fe, K, Rb 値が近く、同一地域の粘土を素材にした可能性がある。しかし、Ca, Sr 値には若干ばらつきがあるので、細かくいうと地域は同じだが、同じ産地とは限らない。分析データからは、無文土器と弥生土器は、「かたち」は異なるが、素材粘土は同質であり、同一地域の産物とみられる（三辻 1988）。

おそらく、実際に持ち込んだ無文土器が一定量存在し、それだけでなく無文土器の出土がかなりの量に及び、変容した無文土器もみられることから、全てが持ち込みではなく渡





試料番号	土器種類	出土遺構	本書図面番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr
1	無文土器	土 壇	1 7 1—7	0.522	0.340	2.62	0.505	0.673
2	〃	66号住居跡	1 7 2—2 4	0.466	0.578	3.97	0.395	0.455
3	弥生土器	66号住居跡		0.540	0.433	3.24	0.423	1.04
4	〃	土 壇		0.534	0.445	2.96	0.420	0.458
5	〃	48号住居跡		0.531	0.193	1.80	0.392	0.437
6	無文土器	土 壇	1 7 1—4	0.600	0.253	2.40	0.783	0.684
7	〃	土 壇	1 7 1—3	0.516	0.139	1.66	0.383	0.316
8	〃	小ピット	1 7 1—2	0.483	0.203	2.24	0.370	0.420
9	〃	64号住居跡	1 7 4—5 4	0.457	0.246	2.92	0.248	0.361
10	〃	土 壇	1 7 1—5	0.654	0.170	2.10	0.317	0.441
11	〃	35号住居跡	1 7 3—4 7	0.564	0.128	3.08	0.411	0.357
12	弥生土器	35号住居跡		0.546	0.286	2.34	0.545	0.666
13	〃	69号住居跡		0.486	0.344	2.23	0.279	0.428
14	無文土器	土 壇	1 7 1—6	0.533	0.281	2.87	0.681	0.549
15	〃	土 壇	1 7 4—5 3	0.511	0.107	2.27	0.307	0.341
16	〃	69号住居跡	1 7 3—3 0	0.436	0.909	3.89	0.220	0.523
17	〃	48号住居跡	1 7 2—2 2	0.441	0.177	2.61	0.106	0.263
18	弥生土器	土 壇		0.450	0.398	2.97	0.364	0.492
19	〃	64号住居跡		0.466	0.213	2.19	0.314	0.404

③ 横隈鍋倉遺跡出土、朝鮮系無文土器、及び弥生土器の分析データ

第 127 図 横隈鍋倉遺跡出土土器の蛍光 X 線分析 (三辻 1985)

来人が三国丘陵地域で製作した無文土器が存在する可能性が考えられる。考古学的現象では、前期末段階における器種組成の変化、すなわち、甕単体の器種から甕・壺・高坏・鉢など複数器種組成への変化と出土数の増加が当地における無文土器生産の可能性を示している。

産地推定については、近年希土類元素量の同定が進んでいる。韓国出土の無文土器の分析も含めて、日本出土の無文土器の産地同定を進めていく必要がある。一方、考古学的観察所見からも、日本出土の無文土器自体から確実な焼成失敗品が認められれば、出土したその集落で無文土器を製作していた蓋然性が高くなる。

#### (4) 渡来人集落の類型

序章で整理したとおりである。三国丘陵では、渡来人の存在がうかがえる集落の様相について、かつて無文土器が多く出土した遺跡の近隣の調査が進み、地域的な位置づけが新たに可能となっている。

### 3. 問題の所在

第 1 に、三国丘陵地域では無文土器が出土する集落が極めて限定されることが周辺の調査で明らかとなり、改めて地域内における出土集落の特異性や特色を検討する必要がある。これまでに当地では渡来人の居住やコロニーが想定されるものの、渡来系集団と在来系集

団の居住形態について積極的な言及はない。筆者らもかつて、無文土器が集中して出土する横隈鍋倉遺跡の住居様相について検討したが、松菊里系住居が周辺の遺跡に比べて少なく方形系住居が多い傾向を指摘するのみに留まっている（山崎他 2008）。渡来人は在来人と共住していたのか、あるいは別個の集団単位を抽出できるかを集落構造から再検討する。

次に無文土器生産についてである。自然科学的分析結果からは、産地は不明であるが、弥生土器と同様の粘土で製作された無文土器の可能性が指摘されており（三辻 1988）、全てが持ち込み品ではなく渡来人が当地で制作した無文土器が存在する可能性が考えられる。この点を考古学的に解決するために、当地での土器生産のあり方を示し、渡来人が土器生産にどのようにかかわっていたかを検討する必要がある。これまでは、漠然と渡来人と在来人が交流することによって、土器の変容を生み、馴化する過程が示された。しかし、土器生産のあり方によって変容が進む場合もあるし、変容が進みにくいケースもありうる。土器の移動や模倣・折衷、技法の変化などを議論する前提作業として、土器の生産、生産に関わる集団や規模の検討は不可欠である。

最後に、三国丘陵の弥生社会における日韓交流の実像についてである。これまで「弥生土器と無文土器」、「無文土器出土集落」の研究は関連付けられて進展してきたが、「土器生産」の視点や集落動態から日韓交流を具体的に論じることにはなかった。三国丘陵では先行研究で弥生時代前期～中期の土器生産体制が示されており（田崎 1995・2004）、土器生産体制と渡来人集団の土器づくりを具体的に検討できるフィールドである。加えて、新たに大規模開発が進んだ結果、三国丘陵東南部域中央に位置する独立丘陵群（三沢北中尾遺跡、三沢蓬ヶ浦遺跡）の調査成果を踏まえて、三国丘陵ほぼ全域の「弥生土器と無文土器」「無文土器出土集落」「土器生産」を検討し、地域社会における日韓交流のあり方を示すことが可能である。集落での渡来人・在来人の居住のあり方、三国丘陵での土器生産体制を明らかにして、当地域で無文土器の変容がどのように進むのかを集団の動きを示す集落動態と併せて検討することで、渡来人集団の在来社会への馴化過程を突き止める。

地域における土器の生産体制と無文土器出土遺跡の動態など総合的検討が可能な三国丘陵地域において、無文土器系土器と土器生産、そして集団についての地域モデルを提示したい。

#### **4. 対象資料と分析方法**

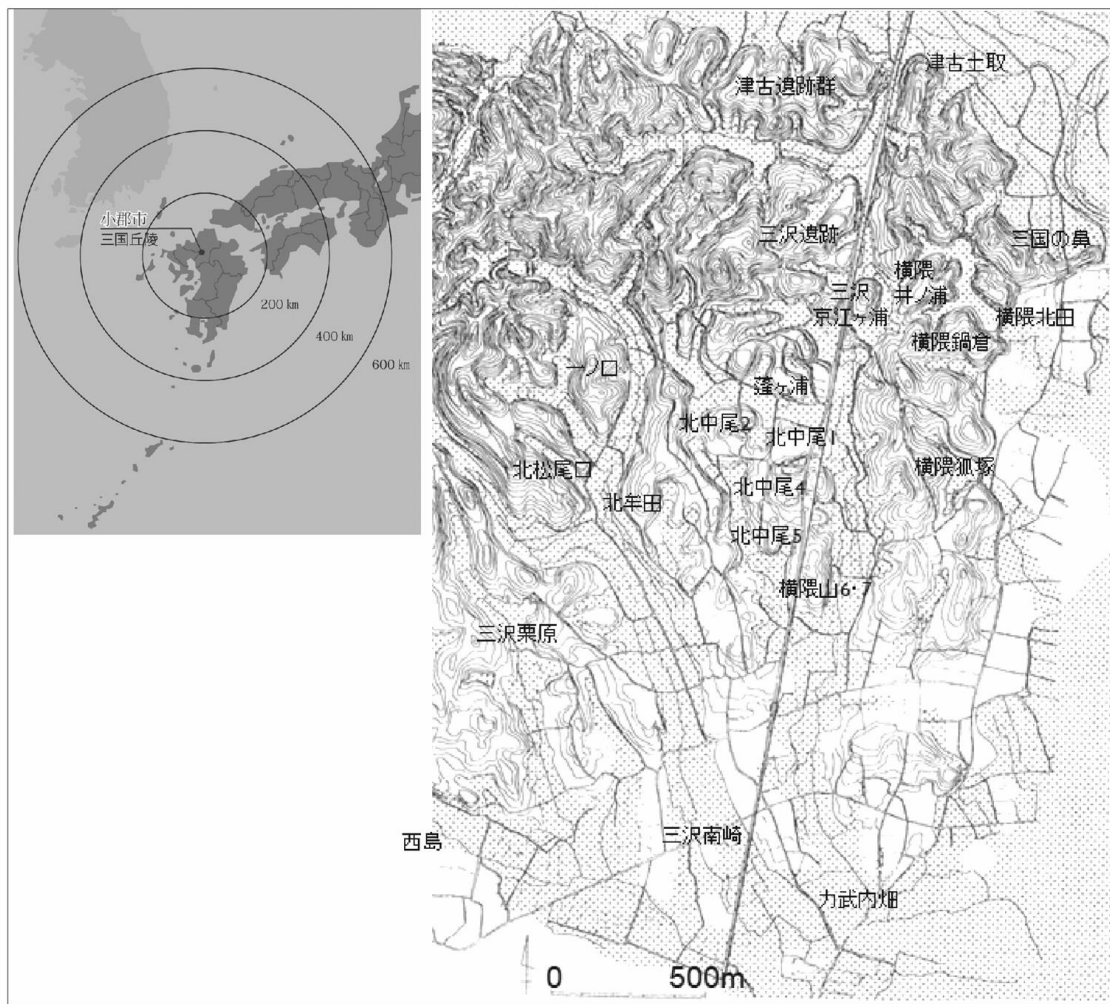
##### **（1）対象地域・資料**

無文土器系土器が多く出土している三国丘陵に所在する弥生時代前半期（板付Ⅰ式併行期～須玖Ⅰ式）の集落群を対象とする（第128図）。

出土した無文土器系土器からうかがえる交流の諸段階を明らかにするために、当地域で出土した無文土器系土器217点以上を対象とする。他にも、影響を少なからず受けた土器が存在するが、今回はこれまでに無文土器と「擬無文土器（本稿でいう変容無文土器系土器）」と広く認識されている円形粘土帯土器段階の資料に限定する（後藤 1987・片岡 1990）。同様に、この地域での弥生時代前半期の土器生産体制の復元にあたっては、対象地域の集落群出土土器生産関連遺物を用いて検討する。

##### **（2）分析方法**

無文土器系土器の分類については、先行研究に従うが（後藤 1979・1987, 片岡 1990・1993）、無文土器（粘土帯土器）・変容無文土器系土器（変容無文土器・変容弥生土器）の用語・定



第 128 図 対象とする三国丘陵(東南部域)の遺跡

義を用いる。三国丘陵における無文土器／擬無文土器の出現時期や器種組成の変化など、三国丘陵における無文土器系土器変遷の画期を筆者らの編年観（山崎・井上 2004）を用いて、共伴資料の時期を検討して示す。

無文土器が多く出土し、渡来人が居住したと考えられる集落の分析は、遺跡の変遷を捉え、各時期における無文土器の出土状況と集落構造についてその特徴を抽出する。なお、居住遺構については、当該期の住居変遷について示した（山崎ほか 2008）や韓半島や日本列島における類例と比較する。

土器生産体制の検討は田崎博之の土器生産関連遺物の検討（田崎 2000・2004）を参考にする。本稿では、①土器焼成遺構 ②焼成不完全品（一部は使用可か）③焼成破裂痕土器・焼成破裂土器片 ④焼成時破損土器（異常黒斑等）⑤スサ入り焼粘土塊（すべてが土器窯ではない）⑥生粘土塊（すべてが土器材料ではない）⑦生産工具（たたき板，ハケ工具，皮革，ヘラなど）の各集落での出土を集成する。土器焼成遺構そのものが検出されなくても、土器生産関連遺物が複数認められれば、土器生産の場との可能性が高いと考える<sup>註3)</sup>。

土器生産集落の抽出→生産モデルの検証を行い、三国丘陵における土器生産体制を明らかにしたうえで、無文土器，変容無文土器系土器の分布状況，推移を検討する。無文土器や変容無文土器系土器の焼成失敗品についても探索する。

土器生産体制の変遷、そして、無文土器、擬無文土器出土集落の変遷について、筆者がこれまで示してきた「集落群」（山崎 2010c）の時期的推移にあてはめて、土器の生産の諸相のなかで、弥生土器生産と無文土器生産、そしてそれにかかわる集団像を位置付ける。

## 5. 分析

### （1）三国丘陵における無文土器・変容無文土器系土器の出土分布の変化・推移

三国丘陵において、無文土器（円形粘土帯土器）の出土は板付Ⅱa式新段階から確認できる（山崎 2010a）。当初は少量の甕が出土し、板付Ⅱc式に至って甕・壺・高坏・鉢などセットでの集中出土遺跡がみられるように変化する傾向にある。当地域での無文土器・変容無文土器系土器の出土は200点を超えるが、共伴土器により、時期が絞り込めるものは意外と少ない。

横隈北田遺跡環濠出土の円形粘土帯土器を中心に、円形粘土帯土器が集中して出土する横隈鍋倉遺跡、三国の鼻遺跡の共伴する土器の時期幅を整理しておく（第11表）。

横隈北田遺跡のⅡa式新段階以降Ⅱb式までの環濠6区下層資料で円形粘土帯土器甕口縁部1点が出土している。Ⅱa式新段階の資料では、大保横枕遺跡2区内環濠（SD03）最下層出土円形粘土帯土器小形甕（鉢）の資料も知られる。いずれも環濠資料ではあるが、三国丘陵周辺ではⅡa式新段階以降に円形粘土帯土器が出現するようである。

Ⅱa式新段階からⅡb式までの弥生土器がみられる環濠3～5区上層では円形粘土帯土器甕5点、甕口縁部1、口縁部粘土紐のみ3、壺底部1が出土している。

板付Ⅱb式段階では、横隈北田遺跡環濠1区下層および2区上層資料で円形粘土帯土器甕口縁部2、壺把手1があり、Ⅱb～Ⅱc式の弥生土器と共伴する6・7区上層資料に、円形粘土帯土器甕1、口縁部2、鉢1、壺底部2、把手2の出土があり、横隈鍋倉遺跡では69号住居、71号住居、31号住居、31号貯蔵穴、41号貯蔵穴から計8点の円形粘土帯土器甕口縁部が出土した。

Ⅱb式～Ⅱc式段階の三国の鼻遺跡28号堅穴で円形粘土帯土器壺、41号堅穴では円形粘土帯土器甕底部の出土がある。

板付Ⅱc式段階では、横隈鍋倉遺跡の26号住居、48号住居、58号住居、64号住居、66号住居、から出土した円形粘土帯土器甕7点、三国の鼻遺跡18号堅穴円形粘土帯土器高坏・鉢、6号堅穴で円形粘土帯土器高坏の出土がある。

これらの横隈北田遺跡・三国の鼻遺跡・横隈鍋倉遺跡はいずれも隣接する遺跡群で、宝満川に丘陵がつきだした「三国の鼻」付近に位置する遺跡群である。板付Ⅱa式～Ⅱb式まで無文土器の出土はこの遺跡群の範囲を大きく越えない。大保横枕遺跡や津古内畑遺跡、横隈山遺跡などで散発的に出土がみられる程度である。そして、明確な変容無文土器系土器（円形粘土帯土器段階）が出現しない。

変容無文土器系土器が出現するのは、中期（城ノ越式）に入ってからのもので、三沢蓬ヶ浦遺跡B地区34号貯蔵穴、北牟田遺跡103号貯蔵穴、北松尾口遺跡Ⅱ地点2号住居で各1点ずつ確認された。

三国丘陵で確認される変容無文土器系土器（円形粘土帯土器段階）について、その評価を詳しくしておこう（第126図）。三沢蓬ヶ浦遺跡の変容粘土帯土器系土器の口縁部（第126図13）は上端にふくらみのある面を持っている。胴部側からのやや厚い巻き込みが確認され、粘土紐の下端はほぼ未処理で、側面からヨコナデで仕上げられている。粘土紐自

第 11 表 横隈北田遺跡環濠出土無文土器と共伴時期

横隈北田遺跡環濠(板付Ⅱa式新段階～板付Ⅱc式)		
地区／層位	無文土器器種／個数	共伴弥生土器の時期
環濠1区上層	円形粘土帯土器甕口縁部粘土帯のみ1	板付Ⅱa式新、Ⅱc式混在
環濠1区下層	円形粘土帯土器壺底部か？1	底部ばかりで詳細時期？
環濠2区上層	円形粘土帯土器甕口縁部2	板付Ⅱb式
環濠2区下層	円形粘土帯土器壺把手1	板付Ⅱb式新か
環濠3区上層	円形粘土帯土器甕口縁部粘土帯のみ1	板付Ⅱa式～Ⅱb式
環濠3区下層		板付Ⅱa式新
環濠4区上層	円形粘土帯土器甕5・壺底部1	板付Ⅱa式新～Ⅱb式
環濠5区上層	円形粘土帯土器甕口縁部粘土帯のみ2	板付Ⅱa式新～Ⅱb式
環濠5区下層		板付Ⅱa式新～Ⅱb式
環濠6区上層	円形粘土帯土器甕口縁2、壺底部1把手1	板付Ⅱb式～Ⅱc式
環濠6区下層	円形粘土帯土器甕口縁1(復原口径？)	板付Ⅱa式新～Ⅱb式
環濠7区上層	円形粘土帯土器甕1、鉢1、壺底部1、把手1	板付Ⅱb式～Ⅱc式
環濠7区下層		板付Ⅱa式新～Ⅱb式

体はやや小形の傾向がある。外面はハケ調整、内面はナデ調整である。全体のプロポーションは口縁部に最大径がある砲弾型で城ノ越式土器と非常に似ている器形で口径 20cm 程度、底部は不明である。口縁部にのみ、粘土帯土器の技法が残っている。

北牟田遺跡例(第 126 図 14)は、胴部から口縁部粘土紐への巻き込みは少ない。円形の粘土紐はやや小型化しており口縁上端部がナデにより平坦となってしっかりと面を持っている。下端はほぼ未処理であるが、側面からナデがみられる。外面はハケメ調整、内面はナデ調整が確認できる。全体のプロポーションは口縁部に最大径があり、胴部上半に張りがある城ノ越式土器と非常に似ている器形で、底部は不明、口径 24cm 程度である。北牟田遺跡例の方が口縁部の平坦面がしっかりしており、城ノ越式土器の口縁部に近い。

北松尾口遺跡Ⅱ地点2号住居では須玖Ⅰ式古段階の変容粘土帯土器系土器鉢が出土している。胴部からの口縁部粘土紐への巻き込みはわずかで、粘土紐は上端・側面・下端いずれもナデが確認できる。ナデによって断面方形の粘土紐へ変化している。口径は 24 cm 程度で、外面ハケ後ナデ、内面はナデ調整がみられる。底部のつくりも分厚く弥生土器の特徴を持っている。

三国丘陵でこれまでに「擬無文土器」(変容無文土器系土器)と認定されている土器は、いずれも無文土器の器形ではなくて、弥生土器の器形であり、変容弥生土器である。サイズの面でも、均整のとれた器形にしても無文土器とは異なり、弥生土器の範疇に入る。弥生土器の製作技術を習得した人物が、無文土器の口縁部接合方法のみを遺している。三国丘陵では口縁部の粘土紐接合痕がわからなくなるまでナデ消すという方向で変容が進まない。

## (2) 三国丘陵における無文土器出土集落の分析

松菊里型土器の出土は各遺跡で1点のみの確認で、少数散在傾向を示し低地部に近い津古土取遺跡や力武内畑遺跡で確認されている(第 135 図 1)。三沢北中尾遺跡の例は在地変容を遂げた松菊里型土器である。円形粘土帯土器段階になると、宝満川に面した丘陵上の遺跡群、横隈鍋倉遺跡、横隈北田遺跡、三国の鼻遺跡に集中して出土する傾向がある。破片を含めて、この遺跡群で 200 点以上の円形粘土帯土器が出土している(第 135 図 1)。

横隈鍋倉遺跡では板付Ⅱb式～Ⅱc式の集落が調査された。弥生時代の住居や貯蔵穴から出土する円形粘土帯土器もあるが、出土したそのほとんどが丘陵上からの流れ込みの出



土と調査担当者の中島達也は考え、片岡宏二はそれでもその出土傾向が丘陵斜面部に集中すると考えた（中島 1985, 片岡 1999）。横隈北田遺跡では、丘陵頂部を取り囲む環濠と貯蔵穴が検出され、住居は検出されていない。円形粘土帯土器の出土は環濠埋土や古墳時代の覆土層からの出土である。三国の鼻遺跡では板付Ⅱb式～Ⅱc式の集落が調査された。住居や竪穴から円形粘土帯土器が出土している。

横隈北田遺跡の環濠は貯蔵穴を囲む環濠で、周辺の集落（横隈鍋倉遺跡や三国の鼻遺跡など）が掘削、経営にあたったとみている（山崎 2010）。

ここでは、住居遺構が確認されている横隈鍋倉遺跡と三国の鼻遺跡の集落構造を検討する。

### ＜横隈鍋倉遺跡＞

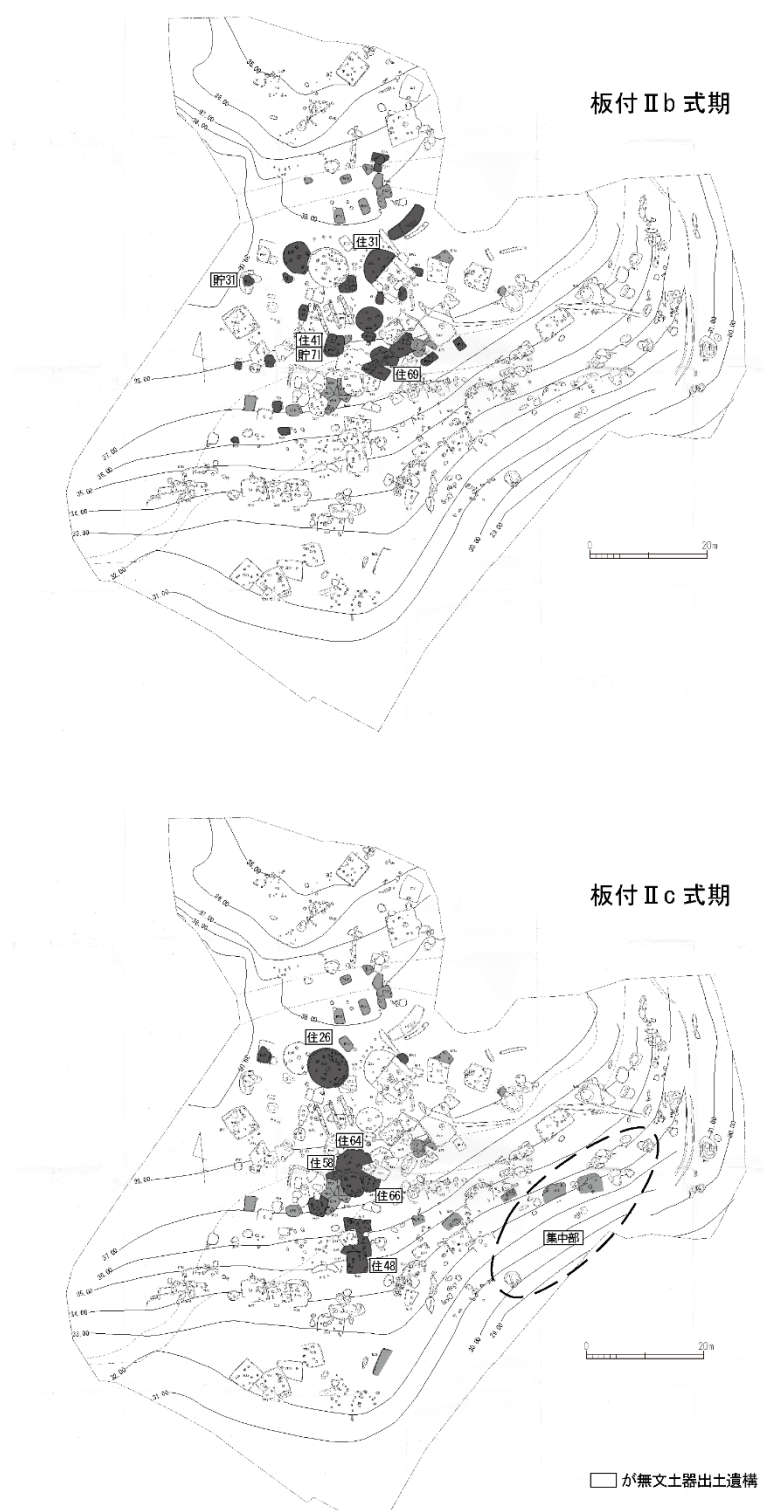
横隈鍋倉遺跡では板付Ⅱb式～Ⅱc式の弥生土器が出土しているが、細片の出土が多く、詳細時期を決めることが難しい。集落の変遷を検討するために大きく板付Ⅱb式までの遺構、確実に板付Ⅱc式と考えられる遺構に分けて、時期不明な弥生時代前期遺構も参考にした（第129図）。

板付Ⅱb式段階では、丘陵頂部付近に円形松菊里系住居、緩い斜面上に方形系住居が配置されており、さらに標高の低い斜面部分にも方形系住居がみられる。円形住居は径5m～8m程で、方形住居よりも規模が大きい。また、丘陵頂部の住居周辺には長方形の貯蔵穴が多く確認できる。この段階では、丘陵頂部の31号住居、71号方形住居で無文土器と弥生土器の共伴がみられる。そのほか69号住居、31号貯蔵穴、41号貯蔵穴から無文土器が出土した。無文土器の割合は1割にも満たない。

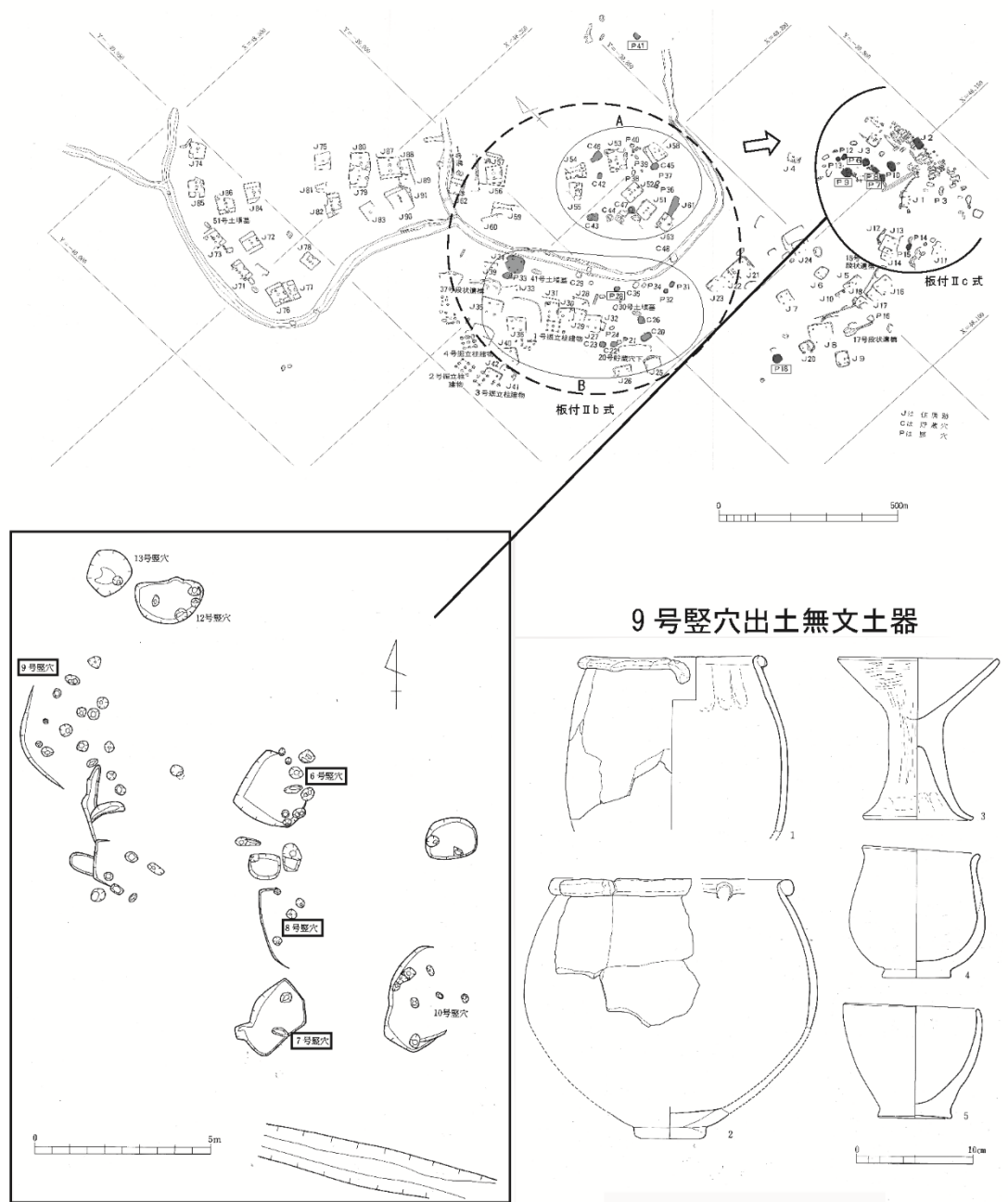
板付Ⅱc式段階では、丘陵頂部に円形松菊里系住居、緩斜面から斜面下位に支柱のはっきりしない円形住居や方形系住居が配置される。Ⅱb式からⅡc式の丘陵頂部から斜面上への住居の広がり傾向を考えると、斜面下位の詳細時期が不明な住居遺構もこの段階に属するものが多いかもしれない。無文土器は丘陵頂部の大型円形松菊里系住居（26号住居）、緩い斜面上の支柱のはっきりしない円形系住居（58・64・66号住居）、斜面下位の48号住居から出土している。また、遺構に伴わないが、南東斜面下位の住居付近では多くの無文土器が出土している。この段階でも弥生土器が9割以上を占めている。

以上のことから、丘陵頂部を中心に円形住居とそれに付随するかたちでやや規模の小さい方形系住居がみられ、その周辺に貯蔵穴が作られている。貯蔵穴はⅡc式段階には減少傾向を示す。

また、斜面の下位にも方形、もしくは円形の可能性もある方形斜面段状型住居（山崎ほか 2008）がみられるのが特徴である。無文土器の出土様相は斜面下位に集中する傾向がうかがえる一方で、丘陵頂部の主体的な居住域でも確認されている。丘陵頂部やその周辺の緩斜面上の住居や貯蔵穴に伴うものは破片が多く、口縁部から底部まで確認できる、もしくは上半や下半が確認できるものは南斜面の土坑から出土していることから、渡来人の主体は斜面下位に分布がありそうだ。土器から見ると在来集団のなかに渡来集団が入り込んでいる状況と、丘陵斜面下位における在来集団とは離れた地点に渡来集団が位置する傾向を併せて持つ集落である。



第 129 図 横隈鍋倉遺跡の遺構変遷図



第 130 図 三国の鼻遺跡の遺構変遷図

### ＜三国の鼻遺跡＞

三国の鼻遺跡では弥生時代後期の環濠集落や古墳時代前期の前方後円墳など後世の遺構によって、弥生時代前期遺構の残りはよくない。弥生時代前期では板付Ⅰ式～Ⅱa 式期の墓域があり、それとは遅れてⅡb 式～Ⅱc 式の竪穴住居や貯蔵穴が確認されている。

板付Ⅱb 式段階では、丘陵頂部付近と南西の緩斜面にわかれて方形の竪穴住居がみられ貯蔵穴や土坑を伴っている。それぞれ1軒しか確認できないが、貯蔵穴・土坑の量からみて数軒単位の居住集団であったと思われる。板付Ⅱb 式～Ⅱc 式の土器と共伴する無文土器が土坑2基から出土した。P28は南西緩い斜面にあり、B 集団の範囲にあるが、P41は北東部に離れて存在している。この段階では、弥生土器の割合が圧倒的に多く、無文土器

は数パーセントである。

板付Ⅱc式段階になると、それまでの居住遺構の範囲から離れて、東側の斜面上立地を採る。方形住居1軒と不整形な竪穴遺構で構成される。特に竪穴遺構では無文土器の出土が多く、韓半島の粘土帶土器段階の住居形態とも一致しており、ここに、渡来人集団が居住していた可能性がある。9号竪穴では無文土器のみが出土した（第130図）。報告書掲載資料では、Ⅱc式段階の無文土器と弥生土器の割合は無文土器19：弥生土器17と無文土器が上回っている。しかし、無文土器のみで構成されているわけではないことにも留意しなければならない。

以上のように、この両遺跡では板付Ⅱb式頃から無文土器が出土して、横隈鍋倉遺跡では渡来系集団は在来の居住地の中に入っているようだ。中心となる円形松菊里系住居からも無文土器が出土している。ただ、無文土器の種類は甕が多く、数は少ない。無文土器の持ち込みが考えられる時期で、渡来人特有の住居などはみられない。三国の鼻遺跡でも当初、在来集団の中、もしくは在来集団の周辺部にやや離れて無文土器が出土する土坑が確認された。板付Ⅱc式段階になると、韓半島でみられる浅い掘り込みで平面プランが不整形で柱穴のはっきりしない無文土器人の住居に類似する竪穴が見受けられる（図7）。この段階では無文土器が多く出土し、さらに多器種に変化している。三国の鼻遺跡の集団はその集団のみで一角を占め、横隈鍋倉遺跡でも渡来系集団が斜面部分を占地する傾向もうかがえる。

### （3）三国丘陵における土器生産関連遺構・遺物の抽出

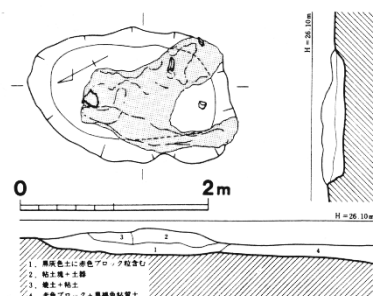
弥生時代に水田稲作とともに普及する土器の覆い型野焼きでは、温度変化が緩やかで、長時間高温が維持できる（小林・北野ほか2000）。焼成の各段階で、焼成失敗品が生じることがあり、使用されず再利用されない土器焼成失敗品・土器焼成残滓（焼成破裂土器片・焼成時破裂痕土器、焼成破裂痕が深く器体に穴があく程度のもの、層状剥離を生じた土器）がみられる（田崎2004）<sup>註4</sup>）。

#### <土器焼成遺構>（第131図）

弥生時代の覆い型野焼きでは稲わらや灰、泥を被覆材に利用した焼成が行われた（小林・北野ほか2000）。

三国丘陵では西島遺跡で須玖Ⅰ式の土器焼成遺構が良好な状態で確認されている（図8）。同時期の住居群に囲まれた地点で検出された（宮田1996）。他にも三沢栗原遺跡Ⅴ（城ノ越式（新））でも1.7×1.1m、深さ20cmの方形土坑から土器片多数とともに親指大から拳大の焼土塊が約11kg出土した。周辺では小郡中尾遺跡の土器焼成遺構、鳥栖市大久保遺跡の甕棺焼成遺構などもある。

これらの土器焼成遺構の特徴は、①浅い土坑の床面や壁が被熱を受けて著しく赤変している。②床面近くの埋土には炭化物、灰、焼土が多く混じる。出土遺物では、①焼粘土（焼泥土）塊の出土（厚さは2cm以下のもの、4～5cmの厚いものもある）が顕著で、その表面調整はヘラ・板・指頭によるナデや擦過、胎にスサが混じっている例がある。大久保遺



第131図 西島遺跡土器焼成遺構  
(1/80)

跡や西島遺跡の焼成粘土塊は壁の形態を残して出土した（第 132 図）。他にも、②焼き上がりの異なる破片が接合する（異常黒斑など）③器面がクレター状に薄く剥離した痕跡、器壁が 3 枚おろしのように薄く剥離する例、④変形した土器等（第 133 図）が出土する。

#### 〈焼成不完全品〉

いわゆる生焼け品である。田崎の設定した「焼成不完全品」は焼成中断品に水分がしみこむと器体が軟らかくなり、小さな土塊となって崩れたり、比較的硬く焼きあがった器表面が脱落して器壁の芯部分が土粒に戻ってバラバラになってしまった破片である。これとは別に全体的に焼成があまく、色調が灰色～暗褐色を呈するものもある。内外面は比較的焼けている印象を受けるが、経験上、いずれも、洗浄の時に強く洗うと溶けてしまうものもある。性質上残存しにくい遺物であるが、城ノ越式の津古内畑遺跡で出土例があるほか大板井遺跡でも確認された（板付Ⅱb式）。

#### 〈焼成破裂痕土器・焼成破裂土器片〉（第 12 表）

焼成時の温度上昇により、粘土に含まれる吸着水分の離脱過程で割れが生じる場合がある。土器の表面が破裂して、クレター状の痕跡を残す（石橋 1998）。破裂して飛び散った側を「破裂土器片」、クレター状の痕跡や層状剥離の跡を残す土器を「破裂痕土器」と呼び分ける。比較的多くの遺跡で確認できる。焼成破裂が使用に影響を及ぼさない程度のものであれば、使用された可能性も残る。破裂して飛び散った側の破片が見つかれば、その付近で土器焼成をしていた可能性が非常に高いが、調査時に意識して取り上げなければ確認は難しい。

力武内畑遺跡（板付Ⅰ式併行期）、津古土取遺跡（板付Ⅱa～Ⅱb式期）、津古生掛遺跡（城ノ越式期）、横隈北田遺跡（板付Ⅱb～Ⅱc式期）、横隈鍋倉遺跡（板付Ⅱb～Ⅱc式期）、横隈井ノ浦遺跡（城ノ越式期）、一ノ口遺跡（板付Ⅱa～須玖Ⅰ式期）、津古内畑遺跡（板付Ⅱa～城ノ越式期）、三沢北中尾遺跡（板付Ⅱa～須玖Ⅰ式期）などで焼成破裂痕を持つ土器が確認できる。

#### 〈焼成時破損土器（異常黒斑等）〉（第 12 表）

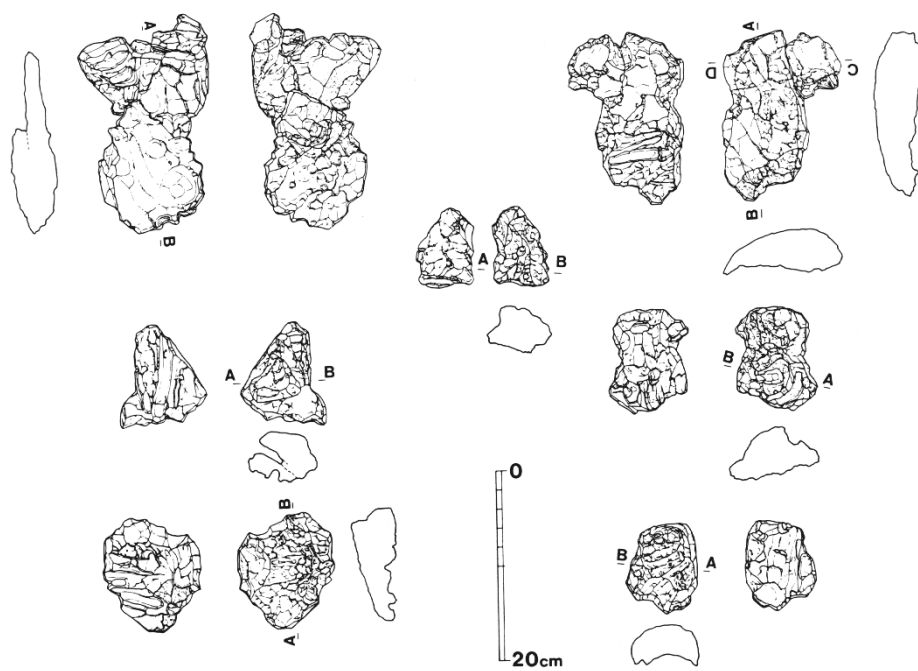
土器焼成には黒化層・黒変部・黒斑の生成する段階と消失する段階があるが、焼成時に器体が破損した結果、破片ごとに焼成環境が変化することによって生じたのが焼成時破損土器である。ここでは比較的探索のしやすい復元・接合部で黒斑が途切れる例を集成した。焼成時破損土器が出土する遺跡も、その付近で土器焼成が行われた可能性が高い。津古土取遺跡（板付Ⅱa～Ⅱb式期）一ノ口遺跡（板付Ⅱa～須玖Ⅰ式期）、三沢北中尾遺跡（板付Ⅱa～須玖Ⅰ式期）などで確認できる。

#### 〈スサ入り焼粘土塊〉（第 132 図、第 12 表）

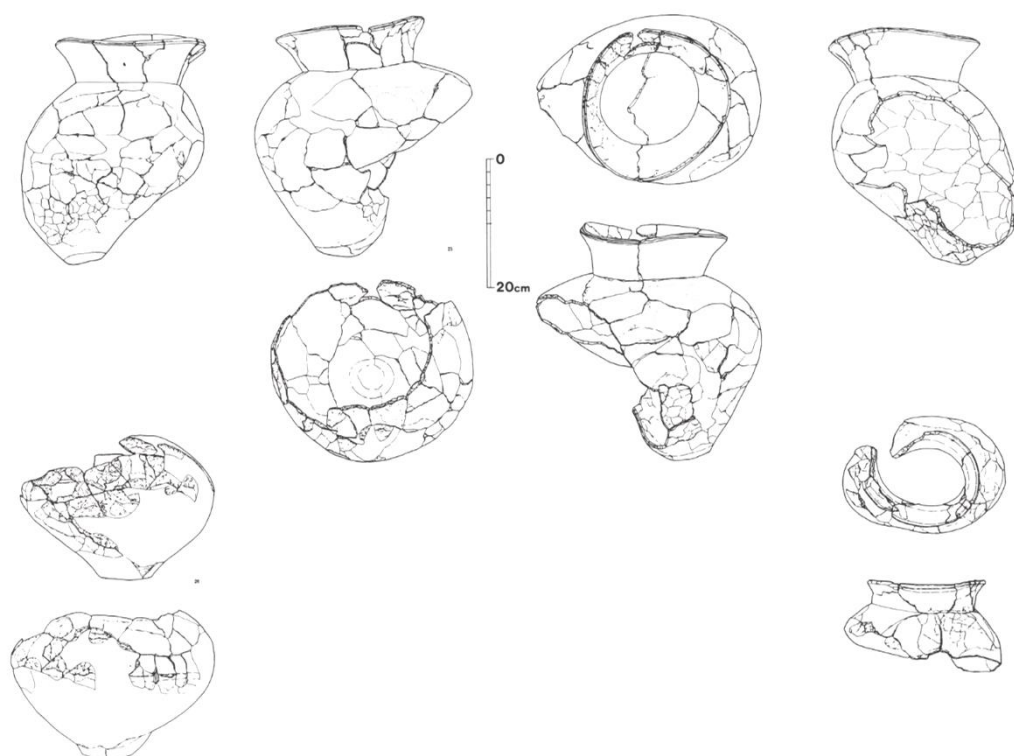
すべてが土器生産に関係するものとは言えない。

三沢北中尾遺跡、三沢蓬ヶ浦遺跡、一ノ口遺跡、津古土取遺跡、津古内畑遺跡では出土する遺構が 10 を超えており、点数も数十点～百点近くになる遺跡もある。10 点に満たないが確認できるのは、力武内畑遺跡、横隈井ノ浦遺跡、横隈鍋倉遺跡がある。





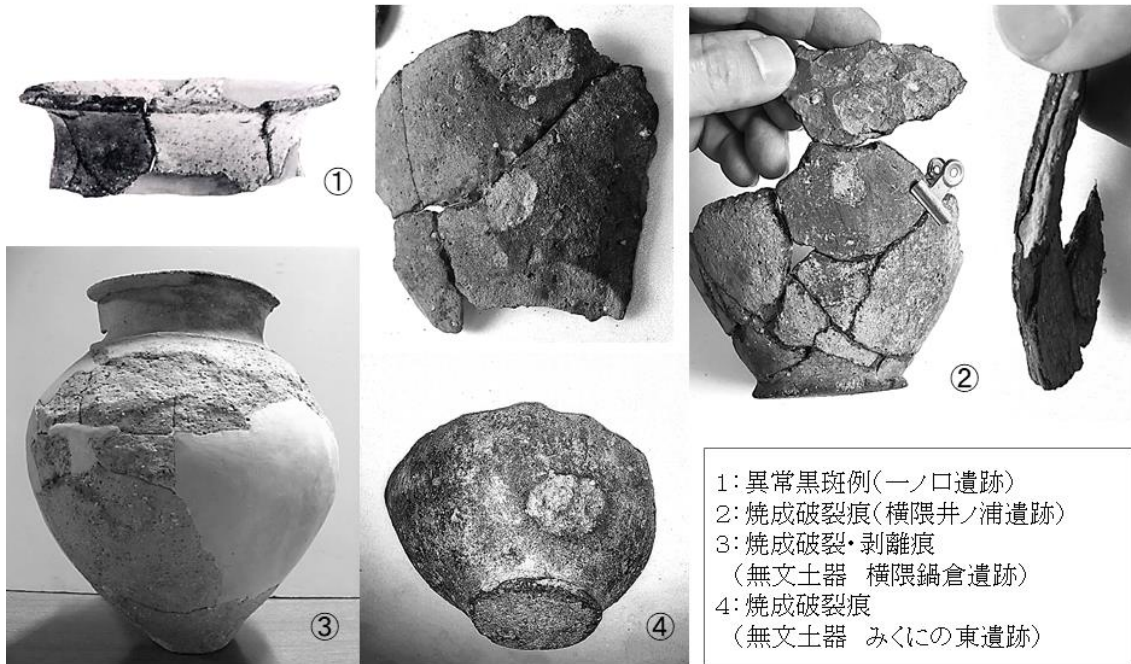
第 132 図 西島遺跡土器焼成遺構出土焼粘土塊（1／8）[宮田 1997]



第 133 図 西島遺跡 35 号住居跡出土変形土器（1／12）[宮田 1997]

第 12 表 三国丘陵の土器生産関連遺構と遺物出土遺跡

遺跡名	時期	土器焼成に関連する遺構と遺物 ＜③と⑤については ○3点以上 △1～2点 -不明(その他は○有り △可能性有り)＞ ※は宮田1997で言及有り *基本は報告書掲載遺物(復原個体) + αの確認					
		①土器焼成遺構	②焼成不完全品 (一部は使用可)	③焼成破裂痕土器・ 焼成破裂土器片	④焼成時破損土器 (異常黒斑等)	⑤スサ入焼粘土塊	⑥生粘土塊
津古内畑	板付Ⅱa式	—	—	○	—	○	—
	板付Ⅱb式	—	△	○	—	○	—
	板付Ⅱc式	—	△	○	—	○	—
	城ノ越式	—	○	○	○	○	—
津古土取	板付Ⅱa式	—	—	○	○	○	○
	板付Ⅱb式	—	—	○	○	○	—
三沢京江ヶ浦	城ノ越式	※	—	○	—	—	—
三国の鼻	板付Ⅱc式	—	—	○	△	—	—
横隈北田	板付Ⅱb式	—	—	△	—	—	—
	板付Ⅱc式	—	—	△	△	—	—
横隈鍋倉	板付Ⅱb式	—	—	○	—	—	—
	板付Ⅱc式	—	—	△	—	△	—
横隈井ノ浦	城ノ越式	—	—	△	—	○	—
力武内畑	板付Ⅰ式併行	—	—	○	—	○	—
三沢北中尾	板付Ⅱa式	—	—	○	○	○	—
	板付Ⅱb式	—	—	○	○	○	○
	板付Ⅱc式	—	—	○	○	○	—
	城ノ越式	—	—	○	○	○	—
	須玖Ⅰ式	—	—	○	○	○	—
三沢蓬ヶ浦	板付Ⅱb式	—	—	○	—	○	—
	板付Ⅱc式	—	—	○	—	○	—
	城ノ越式	—	—	○	—	○	—
一ノ口	板付Ⅱa式	—	—	○	○	○	—
	板付Ⅱb式	—	—	○	○	○	—
	板付Ⅱc式	—	—	○	○	○	—
	城ノ越式	—	—	○	○	○	○
	須玖Ⅰ式	—	—	○	○	○	—
北松尾口Ⅱ	板付Ⅱb～須玖Ⅰ式	※	—	△	—	—	—
三沢栗原	板付Ⅱc～城ノ越式	○	—	—	—	○	—
西島	須玖Ⅰ式	○	—	○	○	○	—



### 〈生粘土塊〉（第 134 図）

集落遺跡の調査において、時折、大型砂粒を多く含まず水簾された灰白色系の生粘土塊が貯蔵穴等から出土する。これは、すべてが土器づくりの材料ではないが、可能性があるものとして取り上げる。津古土取遺跡 123 号土坑（板付Ⅱa 式期）、三沢北中尾遺跡 4e 地点 91 号土坑（板付Ⅱb 式期古段階）一ノ口遺跡 1・2 号小土坑（城ノ越式期）、津古内畑遺跡（板付Ⅱc～城ノ越式か）などで確認できる。一ノ口遺跡例以外は、貯蔵穴の埋没過程で確認され、廃棄されたものである。一ノ口遺跡例では、2.1 kg の生粘土を取り上げている。その他にも現地で確認されており総重量は 4 kg 程になるという（柏原 1997）。板付Ⅱb 式からⅡc 式段階に顕著で、前期末段階では、各住居群中の貯蔵穴・ピット等に生粘土出土分布がみられる。また、前期末以降、多重の柵列に囲まれ、さらに長方形の区画内の緩斜面上に 3 基直線状に並んだ小土坑群がある。平面は径 50～80 cm で深さが 50～65 cm 程度で、1・2 号小土坑は底面に灰白色の粘土が確認された。特に中央の 2 号小土坑では粘土塊が中央で検出され、粘土塊を囲むように多数の土器片が検出された。粘土塊は底面から高さ 24 cm ほど断面台形状に盛り上げられている。周囲には櫓と考えられる 1・2 号建物も存在しており、やや特殊な空間に位置している遺構群である。

以上のように、各項目での出土遺物の多寡はあるものの、複数の項目が確認でき、安定した土器焼成残滓資料数が確認できる集落として津古土取遺跡、津古内畑遺跡、三沢北中尾遺跡、三沢蓬ヶ浦遺跡、一ノ口遺跡、西島遺跡が挙げられる。その他にも少数確認できる遺跡（横隈北田遺跡、横隈鍋倉遺跡、横隈井ノ浦遺跡、力武内畑遺跡、北松尾口遺跡、三沢栗原遺跡など）もあるので、実際に少ないのか、本来は土器生産に関する遺物が見られたのか、その評価が難しい。現段階では、これらの遺跡も小規模ながら土器生産を行っていたものと推定する。

無文土器の生産の可能性を直接的に示す焼成失敗品は、現時点では横隈鍋倉遺跡（みくにの東遺跡）で焼成破裂剥離痕を持つ数例の土器の指摘にとどまっている（第 1 表下）。これだけをもって、当地域での土器生産の根拠にはならないが、その可能性も含めて今後も探索を必要としている。

## 6. 考察

### （1）三国丘陵における土器生産体制と集落の変遷

田崎博之は三国丘陵では遺跡群のなかで土器焼成残滓が出土するのは弥生時代前期前葉～後葉の津古土取遺跡、前期中葉～前期末の一ノ口遺跡であることを確認し、「土器づくりは、径 2 km に展開する津古・三沢遺跡群で継続的に行われているものの、丘陵の各所に点在する住居群のすべてで行われていたわけではなく、遺跡群内の限られた 1～2 カ所の住居群で土器が生産され、他の住居群へ供給されていたモデルが提示され（田崎 1995・2004）、地域における中心的な限られた集落による土器生産・供給システムが追認された（宮田 1997、柏原 1997）。

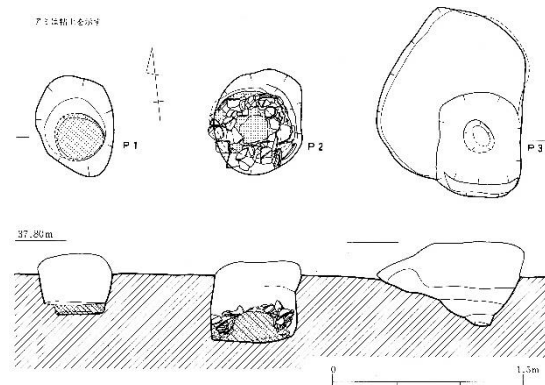


図 11 粘土塊が出土した土坑（一ノ口遺跡）

〔小郡市 1994〕

筆者は、三国丘陵では弥生時代の初期に丘陵最南端の段丘裾に着床した集落が、谷筋に沿って丘陵上に進出し、各独立丘陵上に立地する集落遺跡が一定のまとまりを持ちつつ変遷する様相を明らかにした（山崎ほか 2005, 山崎 2010）。この一連の変遷が追える集落のまとまりを「集落群」と呼称する<sup>註 6)</sup>。三国丘陵（宝珠川以南）では、このような一連の変遷が追える「集落群」の存在が 5 箇所程度確認できる（第 135 図）。田崎の「遺跡群」（田崎 2008）を構成する集落ブロックが数箇所確認でき、本稿の「集落群」に相当する。

三国丘陵での土器生産を整理すると、田崎らが示した遺跡以外にも土器焼成残滓が確認できる遺跡があるので、その動態から、少なくとも「集落群」単位での土器生産は首肯できるだろう（第 135 図）。一ノ口遺跡のある仮称 W ブロック、三沢北中尾遺跡・蓬ヶ浦遺跡の C ブロック、津古土取遺跡のある NE ブロック、津古内畑遺跡を中心とした宝珠川北側の N ブロックなど、各「集落群」内で安定的に土器生産を行う集落が存在している。すなわち、一ノ口遺跡、三沢北中尾遺跡・三沢蓬ヶ浦遺跡、津古土取遺跡、津古内畑遺跡では土器焼成残滓が各時期にわたり一定量確認できることから、「集落群」における土器生産の中心となっていることが推定できる（第 12 表）。「集落群」の下位レベル、集落単位でも、少数ながら土器残滓が確認できるので、「集落群」を構成する各集落でも小規模な土器づくりが併存して行われている可能性が考えられる。以上のことは、石器残滓についても同様の傾向が窺え、この「集落群」を単位として、土器づくりだけでなく石器の製作なども行われていたと考えられる。

田崎博之は、前期末以降の一ノ口遺跡では土器づくりの集約化が始まると考える（田崎 2004）。確かに一ノ口遺跡は拠点となる規模の集落ではあるが、検討した土器生産においては、未だ各集落群において生産を行っており、一ノ口遺跡の土器づくりが三国丘陵の径 2 km に及ぶ複数の「集落群」の土器消費をカバーしているわけではなく、協業から分業への動きが進行する段階であろう。土器生産拠点成立の萌芽がみられるとしても、5 箇所以上の「集落群」による土器生産も併せて行われている段階である。

## （2）集落変遷モデルと渡来系集団と無文土器の時間的推移

無文土器が多く出土する集落での渡来人と在来人の関係と三国丘陵の集落変遷モデル、そして土器生産体制と無文土器・擬無文土器出土遺跡の変遷を合わせて集団の動向として理解するモデルを提示する。

無文土器が集中して出土する集落構造の分析からは横隈鍋倉遺跡の板付Ⅱb 式段階では無文土器が集落内で偏ることなく、在来の居住遺構や中心となる大形円形住居からも出土しており、一旦弥生系集団内に渡来系集団が入っている（第 129 図）。

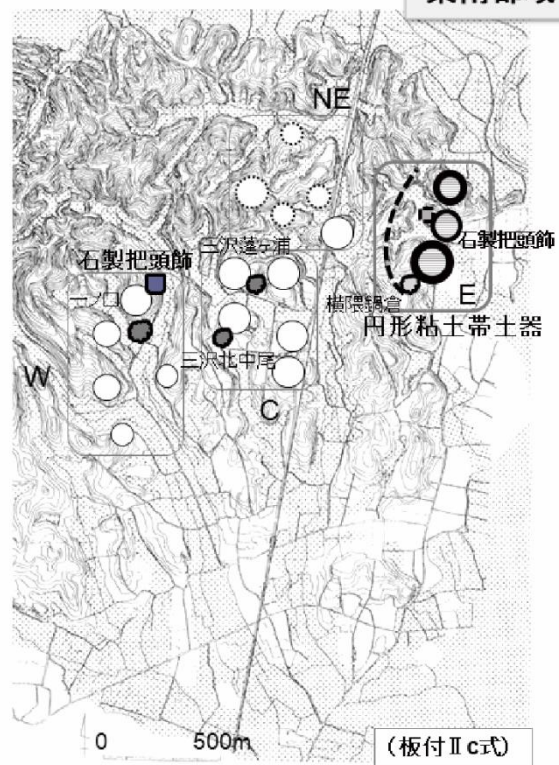
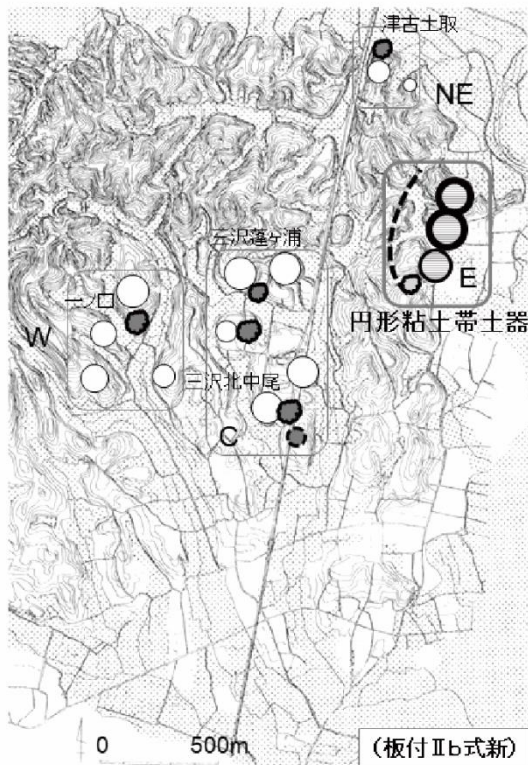
それが、板付Ⅱc 式段階になると三国の鼻遺跡で明らかなように、渡来系集団のみで一定の範囲に居住する様子がうかがえる（第 130 図）。横隈鍋倉遺跡でも、この段階で在来集団と別の単位として斜面上に占地する居住遺構群が見受けられ、渡来系集団が集落内で在来集団と距離を置いて居住している様子もうかがえる。この時期に無文土器集中部が顕著となり、割合も高くなっている。渡来系集団に特徴的な不整形で小形の居住遺構が多くみられ、その堅穴遺構から無文土器が多く出土する。これは、韓半島の事例とも共通し（李亭源 2016）、諸岡遺跡や土生遺跡でも同様の堅穴遺構があり、渡来人が一時的に居住した







三国丘陵  
東南部域



△ 初期鉄器 □ 青銅製鉢 ㊦ 壁際焼土住居 (カマド) ㊤ 天河石製勾玉 ㊤ 多鈕細文鏡

三国丘陵  
東南部域

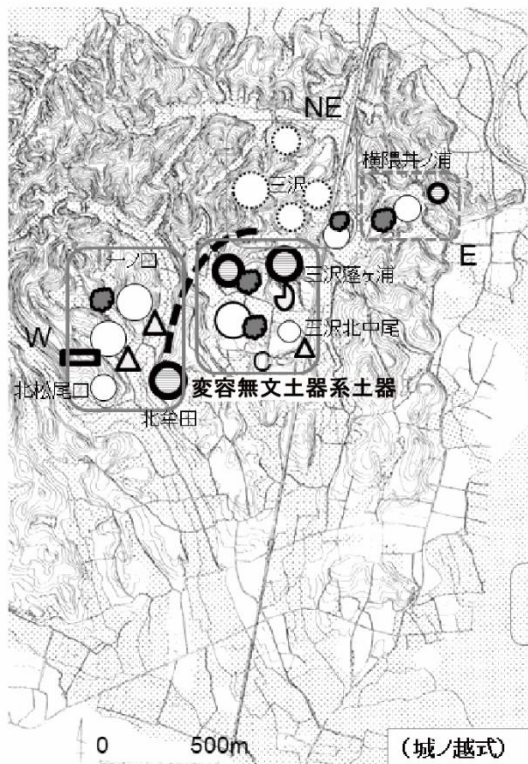


図 12-2 三国丘陵の集落変遷と土器生産と無文土器 [山崎 2018b を一部改変]



とされている（後藤 1987）。この段階で、初めて、在来集団とは異なる範囲で渡来系集団が居住していることがうかがえるのである。ただし、出土する土器には弥生土器も含まれているので、弥生社会と隔絶しているわけではない。

三国丘陵の集落群の変遷モデルでは中期初頭には、これらの無文土器が集中して出土する集落群が衰退し、移動する動きがある（第 135 図）。

一方で、無文土器の変遷は、板付Ⅱa 式～Ⅱb 式までは少数の出土で器種は甕が大半を占めている。それが、板付Ⅱc 式には出土量が増加し、器種においても多器種化を果たす。三国丘陵では中期以降に変容無文土器系土器（変容弥生土器）が顕著となるが、在地の弥生土器に比べるとわずかな出土である。中期段階の集落再編後も初期鉄器や青銅製工具、天河石勾玉や韓半島にみられる壁際偏在炉（カマド）と関連が窺われる住居がみられるが、渡来系集団の土器はほぼみられない（第 135 図）。渡来系集団が数世代を経て、弥生社会に馴化して、この時期にも日韓交流の担い手になっているのだろう。

以上を整理すると、当地域で変容無文土器系土器が発現するまでに、弥生集団との共住、弥生集団と分かれて構成される段階の 2 パターンを採っている。弥生時代前期後半（板付Ⅱb 式段階）までは渡来系集団は少数で三国丘陵に来て、在来集団の中に入って交流を果たす。一時的な滞在や往来と考えられる。無文土器は甕が少数出土し、共住段階でも、無文土器が変容せず土器の交流が進んでいないことから、持ち込み品が多かった可能性がある。

弥生時代前期末（板付Ⅱc 式段階）に、集落内で在来集団と渡来集団の区別が見受けられるようになり、渡来人特有の居住形態も看取できる。無文土器が集中して多く出土し、多器種化していることと符合する。前期末では、変容無文土器系土器が顕著でないで、土器製作上の交流の場が少なかったことが考えられる。在来人とは一定の距離を置いた集団の姿がうかがわれ、渡来人と在来人の各集団の土器製作が行われた可能性が考えられる。その場合、三国丘陵の弥生社会にあって、渡来人の土器生産も許容される地域社会でもあったことがうかがえる。また、使用した土器は無文土器だけでなく、弥生土器も併せて使用したことがうかがえ、弥生社会と隔絶しているわけではなく、一定の距離が保たれている。

土器焼成残滓の分析からは、三国丘陵における弥生時代前期から中期の土器生産は複数の「集落群」を横断する大規模かつ集約的なものでなく、「集落群」内や集落内で行われる中・小規模なものが想定される。無文土器が集中する集落（横隈北田遺跡、横隈鍋倉遺跡、

三国の鼻遺跡）の範囲もひとつの「集落群」で収まる（第 135 図－1）。先の分析結果から無文土器の全てが持ち込み品とは考えにくく、その「集落群」で生産された可能性も十分考えられる。直接的な証拠となる無文土器の焼成失敗品はわずかに横隈鍋倉遺跡（みくにの東遺跡）で確認出来たが（第 12 表下）、十分な確認数ではなく今後も探索が必要である。

調査精度も勘案しなければならないが、恒常的な土器焼成残滓の出土が認められる、一ノ口遺跡や三沢北中尾遺跡が含まれる集落群での無文土器の出土はほとんどないことと対照的に無文土器が集中して出土する集落群では土器焼成残滓が少ない。渡来人は限られた範囲で居住し、恒常的な土器生産の場には入っていないことがうかがえる。なので、土器

の交流にタイムラグが生まれている。

弥生時代中期初頭に、無文土器が集中出土する「集落群」が縮小し、隣接する「集落群」が拡大する（第135図-2）。その段階でようやく変容無文土器系土器（変容弥生土器）が少量、そして周辺に拡散して出現する。前期末までに移住した渡来人の子孫が周辺集落に拡散・同化し、この段階では既に「無文土器」そのものはあってもわずかで、在来の土器生産から使用に至るシステムの中に渡来系集団も組み込まれている。その状況下で、ようやく変容無文土器系土器が出現している。三国丘陵地域では変容無文土器系土器はさらにその後につかず、丘陵上の遺跡群自体が解体してしまう。一部は段丘上の大板井遺跡群への移動が考えられ、小郡若山遺跡の多鈕細文鏡2面の出土や大板井遺跡での初期鉄器の出土など、韓半島からの渡来系文物は継続して確認できる。

## 7. おわりに

以上のように、渡来系集団と在来集団の関係がどのように変化し、土器の変容段階がどのように対応するのかを当時の土器生産体制も含めて検討することによって、集団の交流の段階が想定できると考えられる。地域における土器生産体制や社会状況によって、土器からみた日韓交流の度合いはそれぞれの地域で異なるであろう。

まず、当該期の三国丘陵での土器生産は三国丘陵で5～6箇所確認できる「集落群」を単位としての生産がうかがえた。無文土器が集中して出土する横隈鍋倉遺跡、横隈北田遺跡、三国の鼻遺跡もひとつの「集落群」に相当する。

三国丘陵地域では円形粘土帯土器の出現（板付Ⅱa式新段階か）から円形粘土帯土器の出土量増加と多器種化（板付Ⅱc式期）、変容無文土器系土器の発現（城ノ越式期）と時間を経て無文土器の様相が変化している。集落構造では、在来集団の中に入る段階（～板付Ⅱb式）から、同じ集落内でも別に居住区を設定している段階（板付Ⅱc式）が窺え、「一時的滞在・往来」から渡来集団の「居住」への変化が想定された。この時期に円形粘土帯土器の出土量増加・多器種化が認められ、渡来人による無文土器生産の可能性を間接的に示す現象と考えた。しかし、無文土器自体の焼成失敗品例は現段階ではわずかな確認数で今後も探索が必要である。三国丘陵全体の集落変遷からは、三国丘陵弥生社会での渡来系集団の偏在性（～板付Ⅱc式）から集落再編による集団の移動・統合（城ノ越式以降）に起因する渡来系集団の変化がうかがえた。

このように、三国丘陵ではそれぞれの段階にタイムラグを持ちつつ交流が進むが、これはそれぞれの地域で異なるモデルが考えられるだろう。

今後は、三国丘陵で示した土器からみた日韓交流モデルをもとに、各地域の状況を検討、比較することで地域における日韓交流のあり方がより具体的な集団の動きとともに復元できることと思われる。

## 【註】

（1）たとえば、弥生時代後期以降の「土器相」の遷移を「土器伝播」によって在来的な土器組成から外来的要素が大きくなり「土器相」が変化する過程をモデル化した論考もある（岩永1989）

（2）「朝鮮系無文土器」と「擬朝鮮系無文土器」という呼称は学史的に重要であるが、近年、韓国研究者との間で齟齬を生じている。第4章第1節で整理した。

（3）なお、これらの土器生産残滓の抽出は発掘現場時からの細かな注意が必要であり、細片資料

や接合不可資料として報告段階で取り上げられないのも実状で、少しでも確認できれば、土器生産が行われた可能性も高いだろう。

(4) 土器焼成の復元的実験では、①燃料に着火した直後、焼成温度が上昇し始めると、焼成する土器は淡くくすんだ黒色や灰黒色、暗褐色に変化する。その原因として、ススの付着や粘土に含まれる有機質が炭化するためともいわれている。②その後、焼成温度は 500～600 度に達し、粘土に含まれる構造水分が焼失し、粘土の可逆性が失われる。この段階で土器が最も壊れやすく、焼成実験で「パンパン」と音を立てて破裂した経験があるだろう。③焼成温度が 700～800 度前後となると、薪燃料が「オキ」の状態となり煙が出なくなると、淡くくすんだ黒色や灰黒色、暗褐色となっていた土器は、表面から次第に明るい橙茶色～黄橙色の色調に変化する。しかし、「酸素が少なくて熱が十分に行き届かない場合、粘土中の有機質は十分に酸化せず炭素の色、すなわち灰黒色系の色が残る」(黒化層)、焼き上がった土器の器表面にのこるものを青みがかった黒色の斑紋が生じ、黒班とよぶ。が想定できる。

(5) 田崎によれば板付 54・59 次の環濠資料で朝鮮系無文土器の焼成時破損 I 種が確認されている(田崎 2004)。

(6) 三国丘陵(宝珠川以南)では、このような一連の変遷が迫える「集落群」の存在が 5 箇所程度確認できる。田崎氏の「遺跡群」[田崎 2008]を構成する集落ブロックが数か所看取でき、本稿で言う「集落群」に相当する。

## 第 2 節 「渡来人」の住居～北部九州における粘土帯土器文化期の住居形態～

### 1. はじめに

北部九州では、弥生時代前期後半以降、粘土帯土器が多く出土する遺跡があり、それを携えて渡来した集団の居住が推定されているものの、渡来集団が在来の住居形態に住んでいたのか、新たな住居形態を持ち込んだのかはこれまで、あまり言及されてこなかった<sup>註 1)</sup>。一方で、その前段階の松菊里文化に伴う「松菊里型住居」は特徴的な住居形態でもあり、列島でも比較的多く確認されており、韓半島から稲作を携えてわたってきた集団像が住居や集落構造の面からも議論されてきた(中間 1985、山崎ほか 2008、端野 2015、武末 2002)。

韓半島では、1980～90 年代以降、発掘調査の進展により青銅器時代の住居や集落構造への関心が高まり、現在の集落研究の基礎となる研究が精力的に進められた(申鉉東 1993、後藤直 1994、安在皓 1996、甲元眞之 1997 など)。また、近年の大規模な発掘調査により、これまであまりわかっていなかった韓半島の粘土帯土器文化の集落構造が明らかになってきており、松菊里文化期の住居・集落構造と粘土帯土器文化の住居・集落構造の比較により、当該期の韓半島における人の移動や社会変容が考察されている。韓半島では、円形粘土帯土器が出土することで古くから知られた水石里遺跡や保寧校成里遺跡が高地に位置し

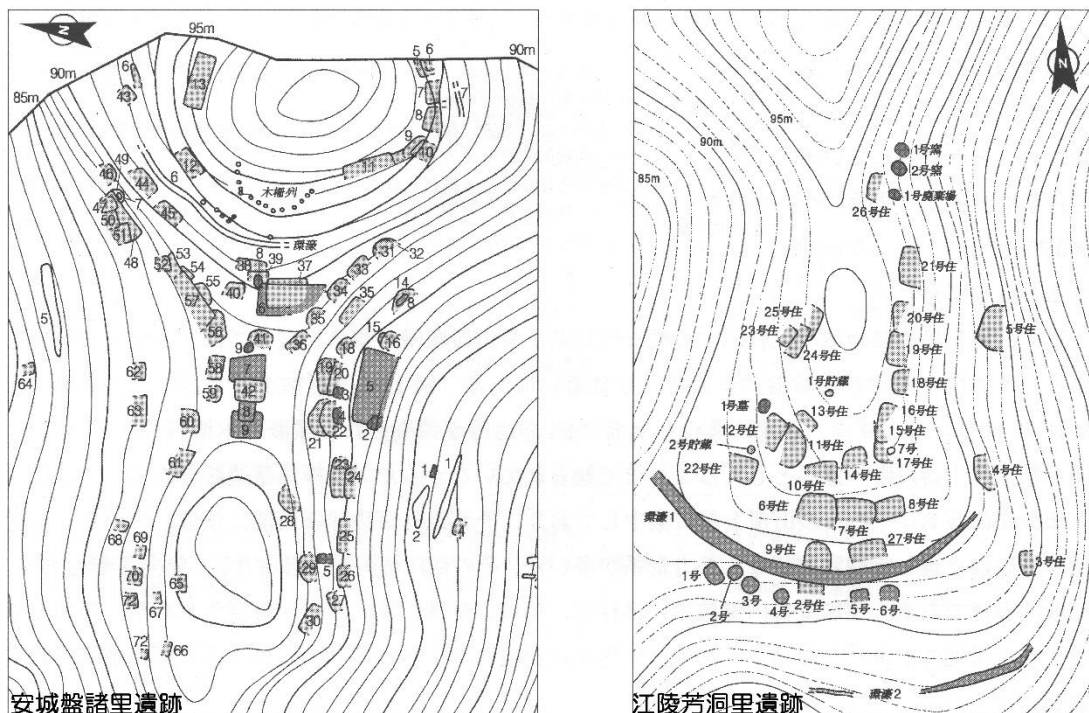
第 13 表 中部地域円形粘土帯土器文化期の集落編年と時期区分（庄田 2009）

水石里・校成里	盤諸里	松峴里	芳洞里	備考
			古段階（A 地区）	
		古段階（A1 類）	中段階（A1 類）	初期鉄器時代
	古段階（A 類）	中段階（A2 類）	新段階（A2 類）	中心広場
○	新段階（B 類）	新段階（B 類）	↓？	カマド

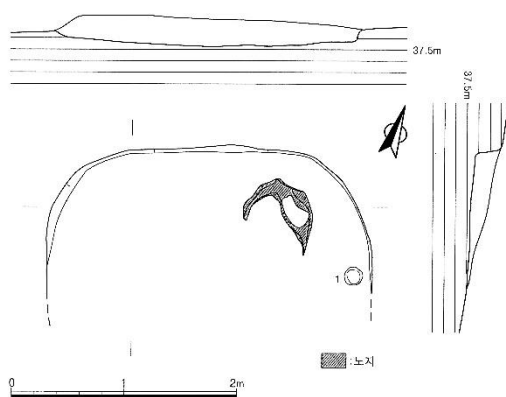
ているという指摘があり（李健茂 1994）、朴淳發氏はこれらの高地立地は移民が低地立地の在来集団との摩擦を避けた結果と位置付けた（朴 2004）。これを受けて、李亨源氏は韓半島中西部地域の状況を保寧寛倉里遺跡と保寧校成里遺跡を用いて検討し、在来の松菊里文化と外来の粘土帯土器文化の交流の諸相について類型化した（李亨源 2005）。

庄田慎矢氏による中部地域の円形粘土帯土器期の集落についての整理では、丘陵を中心に放射状の住居配置を持つ小規模集落のパターン（崔 2002）が盤諸里古段階／松峴里中段階に成立し、この時期の環濠には祭祀的空間を取り囲む儀礼的性格の強いもの（李盛周 2007）がみられる。また、住居構造では大貫静夫氏（2001）が指摘した祖形炕を持たないカマド（壁に接した地床炉）が盤諸里・松峴里遺跡の新段階／水石里・校成里段階に登場するという（庄田 2009）（第 13 表）。

高城松峴里遺跡ではカマドと考えられる粘土構築物が東西 276 cm×南北（115）cm、深さ 21 cmを測る隅丸方形の住居かと考えられる竪穴の北東壁付近に認められた（第 137 図）。長軸 65 cm×短軸 30 cm、高さ 12 cm程が残存しており、内部には木炭が一部確認されるという（江原文化財研究院 2007）。



第 136 図 円形粘土帯土器文化期の集落構造（李昌熙 2009）



第 137 図 高城松山見里遺跡 B-1 号住居  
(江原文化財研究所 2007)

李昌熙氏は日韓の交流を述べるなかで、無文土器時代の集落と住居の構造、変遷を整理した。安城盤諸里遺跡、江陵芳洞里遺跡例から、円形粘土帶土器人は山地や丘陵上等の高地に集落を営み、住居址は定型化せず、地形地理的環境を考慮して短期間で遊動性の高い構造を持っている(第 136 図)。つまり、円形粘土帶土器人は自然環境や在地勢力との関係によって短期間の定住を目的として、頻繁に移動することを考えた住居形態を選択した。三角形粘土帶土器の住居・集落は貝塚遺跡での検出が多く、実際に出土した土器の量に比べて住居の調査例は泗川

勒島遺跡、光州郡谷里遺跡、光州新昌洞遺跡くらいで極めて少なく、定住性も高くない。勒島遺跡では、オンドルとカマドがみられ、床面を黄色粘土などで突き固める場合が多い。このような内部施設を持つ住居は平面円形であり、勒島では典型的なモデルであるという。武末純一氏は弥生系土器が多く出土した金海亀山洞遺跡の様相をまとめるなかで A1 区域の無文土器時代後期の住居跡は壁際にカマドを設けるが、この点は日本の無文土器時代後期土器が出た住居や小郡市北松尾口遺跡の中期前半の住居跡に見られた壁際の焼土の再検討の必要性、カマド伝播の可能性について言及した(武末 2010・2012)。亀山洞遺跡を調査した崔鐘圭氏は壁際にみられる焼土及び焼土の入る小坑をカマドと位置づけ、それに接続する壁際を走行し住居床を網状に走る溝をオンドル状の構造として分析している。松菊里文化は放射状の槽網を持ち、勒島文化期では壁付型槽網であり、亀山洞では過渡期な様相がみられるとした(崔鐘圭 2010)(第 138 図)。

それらの調査研究を受けて北部九州において粘土帶土器が多く出土する集落、住居構造が再評価されつつある。後藤直氏は福岡市諸岡遺跡では粘土帶土器が出土する土坑群が①平面系が多様で不整形をなし、②床面あるいは床面付近から焼土が検出されるものがあり、③石器が少量しか出土しないことを根拠に、これらの土坑群が弥生時代前期末の短期間に営まれた仮住まいの住居であった可能性を指摘した(後藤 2006)。松尾奈緒子氏は諸岡遺跡の丘陵頂部を空間としてそれを囲むように住居が配置されている状況を粘土帶土器文化の集落立地との共通性で理解した(松尾 2010)(第 139 図)。

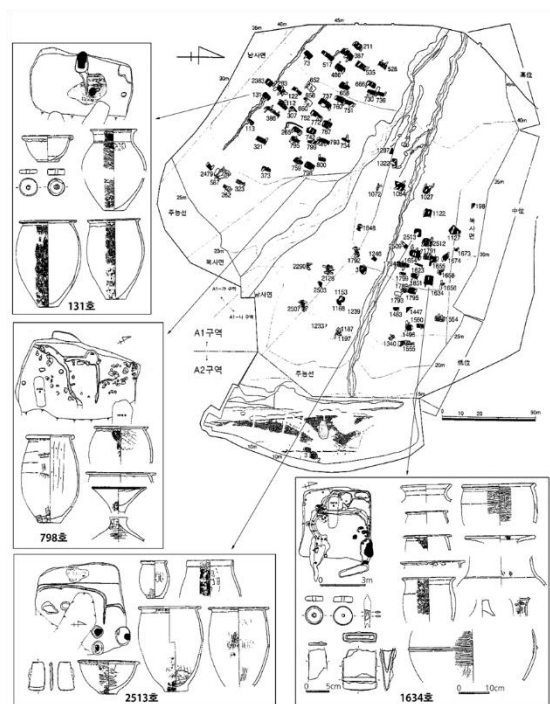
韓半島と類似する集落構造や住居形態が諸岡遺跡や三国丘陵の鍋倉遺跡、北松尾口遺跡等で認められ、渡来人の居住、集団の接触について遺構面からも具体的に言及できるようになりつつある(李昌熙 2009、埋文研究会 2010)。

## 2. 粘土帶土器文化期における住居と集落構造について

- 朝鮮半島の円形粘土帶土器文化期では、①丘陵頂部を囲むように住居を配置する
- ②住居の形態が定型化せずに多様。柱穴や壁溝がなく炉の位置も規則性がない
- ③存続期間が短く定住性が低い特徴がみられる(李昌熙 2009・庄田 2009)

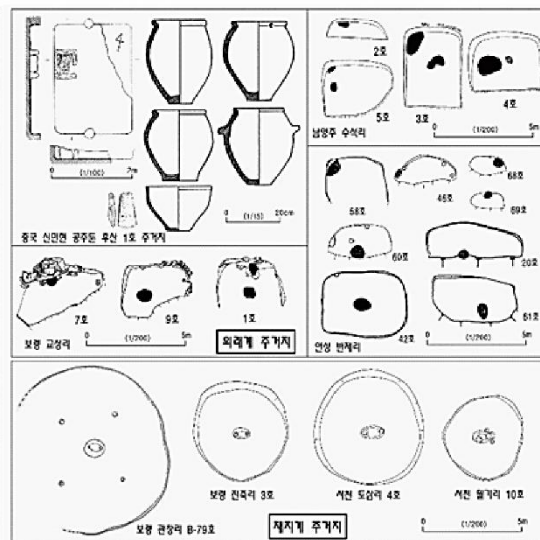
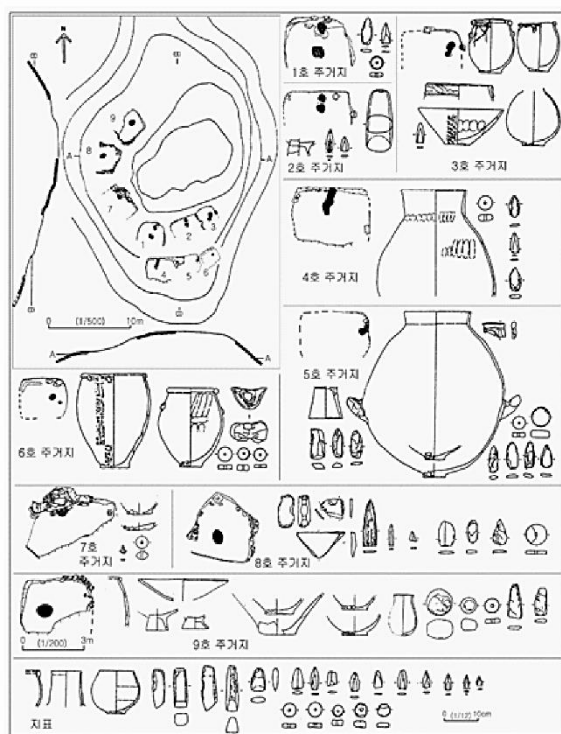
住居構造では、庄田が整理しているように住居跡の長軸上に炉があるもの(A類)、壁寄りにあるもの(B類)に分類して、A類からB類へ変遷することを示した。また、在来の松





第 139 図 諸岡遺跡遺構配置図(松尾 2010)

第 138 図 金海亀山洞遺跡の遺構配置図  
(慶南考古学研究所 2010)(李亨源氏作成)



第 140 図 保寧校成里遺跡(左)と在来系／  
外来系の住居構造(李亨源 2016)

菊里型住居と外来の不定形な壁際偏在炉の住居で区分できる(李亨源 2016) (第 140 図)。

壁際偏在炉は三角形粘土帶土器の時期になるとカマドとそれに接続する壁際を走る溝、すなわちオンドルが靑島遺跡などで確認できるようになる。

壁に接するカマド(炉)とそれに接続する溝に着目した崔氏は、松菊里段階では中央の炉と接続し放射状に走る槽網が寛倉里遺跡等で確認されており、三角形粘土帶土器の段階では靑島遺跡等で確認されるカマドとそれに接続する壁に沿って走行する石で組んだオンドルへと変遷することを示した。円形粘土帶土器の時期の亀山洞遺跡ではその中間形態で、

壁際の燃焼部と壁沿いに走る溝、住居床下にも槽網が広がる中間形態であると考えた（崔 2010）。

### 3. 日本列島における 2. 3 の事例 ～特に壁際の炉のあり方を抽出して～

韓半島粘土帯土器文化期にみられる住居形態は日本列島で確認できるのであろうか。以前、弥生時代前期から中期を中心とした三国丘陵の住居動態を整理したことがあり（山崎ほか 2008）、その際にも、壁際で焼土が出土する住居の存在が気になりであった。ここで紹介しておきたい。

#### ・北松尾口遺跡Ⅱ地点（小郡市）

北松尾口遺跡Ⅱ地点は三国丘陵東部に位置し、北松尾口遺跡Ⅰ・Ⅲ地点及び一ノ口遺跡Ⅰ地点に挟まれた 300m 程の舌状に延びる標高 30～47m の丘陵上に立地する。

弥生時代前期後半から中期の住居跡 117 軒、土坑 125 基（うち貯蔵穴 66 基）、溝 4 条、土壇墓 4 基等が検出された。住居形態には、円形、長方形、小判形もあるが、丘陵斜面段状型の住居が多く築かれていることが特徴である（第 145 図）。

それらのうち、12 軒で壁際に焼土が確認されている。いずれも方形・長方形系の住居跡の壁際に炭化物・焼土が塊状をなして検出された（第 14 表・第 141・142 図）。

調査担当者は、当初はこれを焼失した住居跡の痕跡と考え調査を進めていたが、焼失住居にしては、炭化物・焼土が検出される場所が壁際に限定され、それらが塊状をなしている例が数多く認められた。他の場所からの炭化材や焼土の検出が全く認められず、焼失住居の可能性は極めて低く、これらを壁際に設けられた何らかの施設か、壁際で何かが行われた痕跡と判断した（速水 1990）。

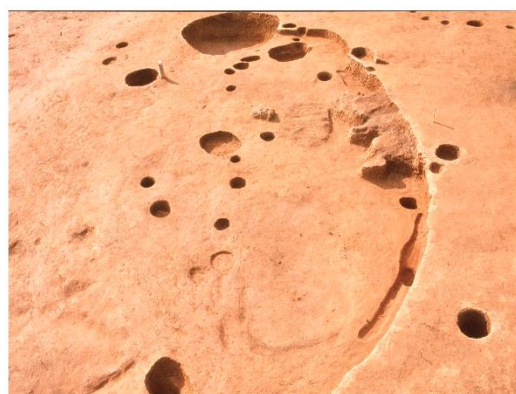
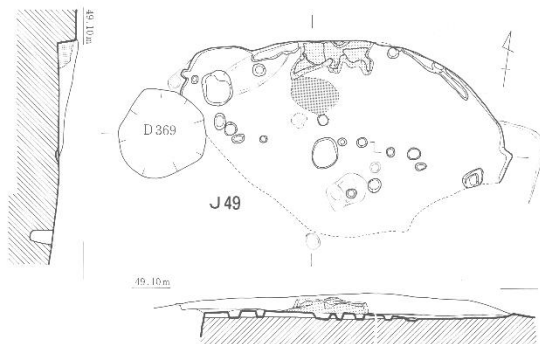
検出された形態は様々で炭化物・焼土が壁際に沿って長く、塊状に検出された例が 12・47・91・103・105・115 号住居で、小規模であるが塊状に検出された例が 8・27・50・90 号住居の 4 軒である（第 14 表・第 141 図）。28 号住居は特異な例で、大量の焼土とともに内部が強い被熱を受けたドーム状の小土坑が 2 基ならんで検出された（第 142 図）。いずれも住居で通常みられる「炉」は検出されていない。さらに、壁際の焼土、炉は掘り込みのある例とない例がある。器台や支脚は 8・12・27・28 号住居で出土し、特に 27 号住居は炭化物・焼土の横で出土した。

これらは、住居長軸の長辺の壁で確認されることが多い。炭化物・焼土が検出される箇所は被熱（焼成）を受けていることが多く、この箇所が炭化物・焼土の廃棄された場所ではなく、火をたいた場所と考えられる。

これらの住居の時期は円形 5 本柱の 7 号住居は前期後半でそれ以外は弥生時代中期初頭～中期前半に属する。

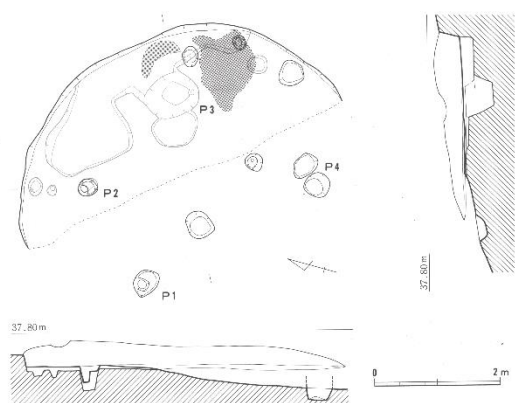
また、谷を挟んで南側丘陵の北松尾口Ⅰ地点 1 号住居跡でも長方形プランの住居壁の一部が 140 cm の範囲で焼けている状況が確認された。丘陵斜面上立地で長軸 513×短軸 102cm、深さは 30 cm を測る（第 14 表）。

韓半島と関係する出土品は、北松尾口遺跡Ⅱ地点では弥生時代中期前半の円形多支柱松菊里系住居（2 号住居）から擬無文土器が出土している。中期前半の 18 号住居から鉄斧、47 号住居から鉄鑿、66 号住居から小形の鉄斧・青銅製鉋の出土があるが、壁際に焼土が確認される住居との相関性は弱く、47 号住居のみが壁際に焼土がみられる。



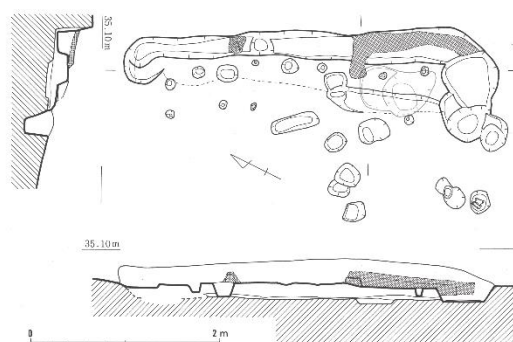
\* S= 1/120

一ノ口遺跡Ⅰ 地点 49 号住居



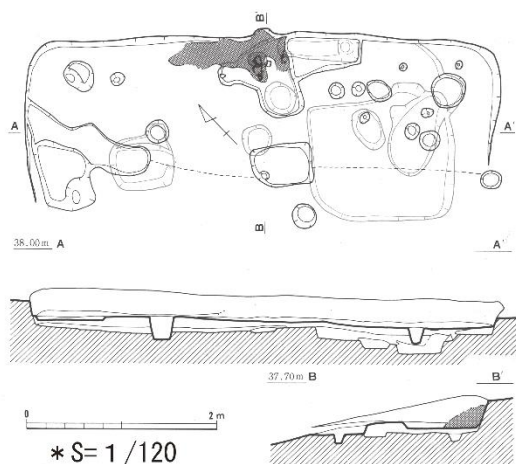
北松尾口遺跡Ⅱ 地点 7 号住居

\* S= 1/120

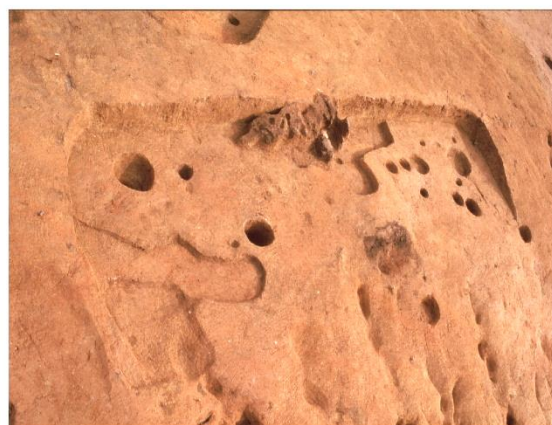


北松尾口遺跡Ⅱ 地点 115 号住居

\* S= 1/160



\* S= 1/120



北松尾口遺跡Ⅱ 地点 103 号住居

第 141 図 壁際に焼土がみられる住居

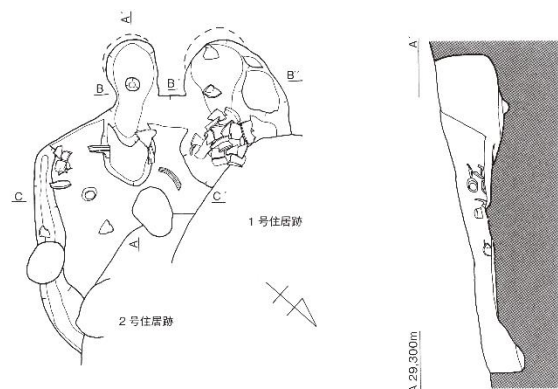
#### ・一ノ口遺跡Ⅰ 地点（小郡市）

一ノ口遺跡Ⅰ 地点は北松尾口遺跡の北側の丘陵に位置する。南北 450m、東西 190m、標高 32～49mを測る独立丘陵に立地し、東側から 3 か所に小さな谷が入り込み、その結果 4 か所の突出部分を持つ。弥生時代前期後半から中期前半に至る集落が主体で、住居跡 119 軒のほか掘立柱建物 4 棟、貯蔵穴 279 基、道状遺構 7 条、柵列状ピット群などが検出さ

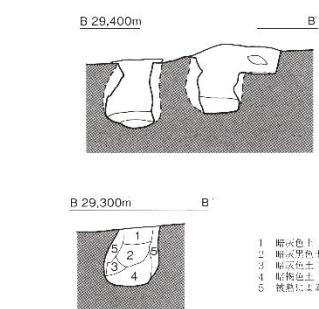
第 14 表 壁 際 に 焼 土 が み ら れ る 住 居

遺跡名	遺構名	時期	タイプ	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	内容 (焼土もしくは被熱範囲)	壁溝有無	備考
一ノロ I 地点 北松尾口 I 地点	49号住居	前期末(Ⅱc式)	円形	697	(424)	44	壁に接続する焼土塊(176×84cm)	壁溝一部	
	1号住居	中期前半(須玖 I 式)	丘陵斜面段状型	513	(102)	30	壁が焼ける(140×6cm)	壁溝	
	7号住居	前期後半(Ⅱb式)	円形5本柱	550	(221)	82	壁際偏在炉か、 (180×120cm内に2ヶ所)		
	8号住居	中期前半(須玖 I 式古)	丘陵斜面段状型	680	(146)	77	壁溝上層に帯状の焼土分布 (120×30cm)	壁溝	建替
	12号住居	中期初頭～前半 (城/越式～須玖 I 式古)	丘陵斜面段状型	563	(223)	48	壁が帯状に被熱する(180×15cm)	壁溝	
	27号住居	中期前半(須玖 I 式)	丘陵斜面段状型	317	170	89	短辺の壁に接して帯状の焼土塊 (102×30cm)		
	28号住居	中期前半(須玖 I 式)	丘陵斜面段状型	(478)	(277)	92	壁際小土坑が2基並列、小土坑内と周辺 には大量の焼土、壁も強く被熱		
	(42号住居)	中期初頭～前半 (城/越式～須玖 I 式古)	丘陵斜面段状型	395	(144)	94	壁が一部被熱(54×10cm)		
	47号住居	中期初頭～前半 (城/越式～須玖 I 式古)	丘陵斜面段状型	1208		40	壁際に小土坑状焼土分布、壁にも接する (88×60cm)	壁溝一部	鉄壁 出土
	49号住居	中期初頭～前半 (城/越式～須玖 I 式古)	丘陵斜面段状型	(517)	(200)	46	50号住居と同一住居か、		
	50号住居	中期初頭～前半 (城/越式～須玖 I 式古)	丘陵斜面段状型	(193)	(137)	50	壁に接続する焼土の高まり、上部は強く 被熱(78×60cm)		
	78号住居	中期初頭(城/越式)	円形多主柱	600	(200)	120	壁に接続する？焼土分布(42×33cm)		
	90号住居	中期前半(須玖 I 式)	丘陵斜面段状型	520	(174)	32	壁に接続する焼土塊(30×21cm)		
	91号住居	中期初頭～前半 (城/越式～須玖 I 式古)	丘陵斜面段状型	490	(120)	87	壁に接して帯状に分布する焼土塊 (114×36cm)		
	103号住居	中期初頭～前半 (城/越式～須玖 I 式古)	丘陵斜面段状型	490	(140)	52	壁中央に壁に接続して帯状に広がる焼土 塊(炉+壁際焼土 198×84cm)		
西島8	105号住居	中期前半(須玖 I 式)	丘陵斜面段状型	1170	(123)	60	壁溝から壁にかけて焼土塊が帯状に分布 (84×30cm)	壁溝	
	115号住居	中期前半(須玖 I 式)	丘陵斜面段状型	396	(120)	28	壁溝上部に帯状焼土塊、接続+壁際焼 土(120×45cm)	壁溝	
	炉跡	中期前半(須玖 I 式)	小壁穴状遺構	(170)	(170)	22	並列する2基の小ピット+前庭部、焼土が 詰まり、壁面も被熱	壁溝	

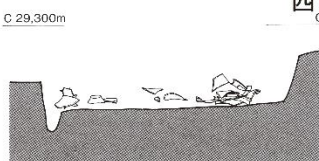




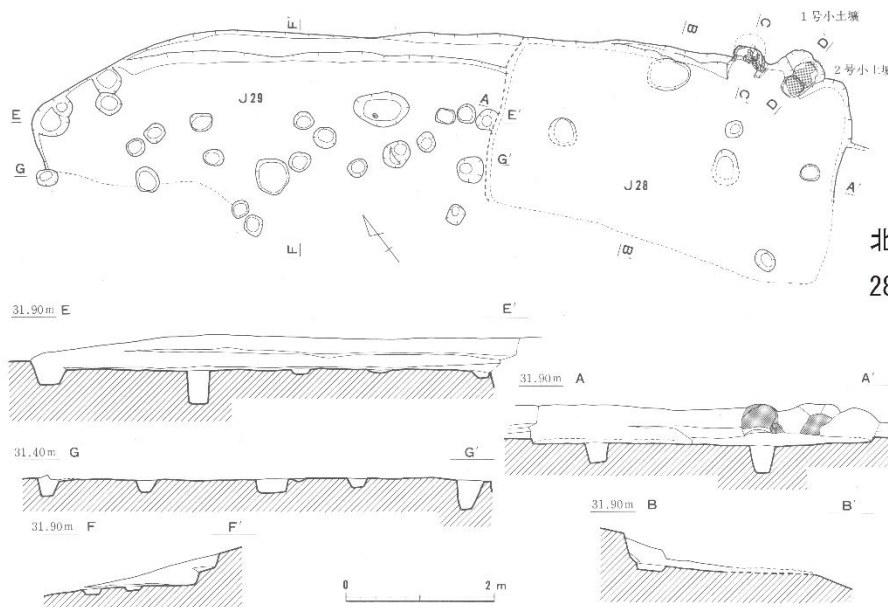
西島遺跡 8 炉跡



西島遺跡 8 炉 S=1/100



北松尾口遺跡Ⅱ地点 28号住居壁際小土坑



北松尾口遺跡Ⅱ地点  
28号住居壁際小土坑  
S=1/100

第 142 図 壁際に強く被熱した小土坑を持つ住居

れた（第 145 図）。壁際に焼土が確認された 49 号住居は円形住居と考えられるが柱穴は定かでない。前期末段階の住居で、壁際に偏って楕円形の炉（焼土・炭化物の分布）とそれと近接して壁際に広がる焼土塊が確認された（第 141 図）。

一ノ口遺跡では前期末の鉄鉱石製把頭飾をはじめ、中期初頭から前半の初期鉄器が比較的確認されており、城ノ越式期の 26 号住居からは小形の鉄斧が出土している。壁際焼土



確認の住居からは韓半島と関係する出土品はない。

#### ・西島遺跡 8（小郡市）

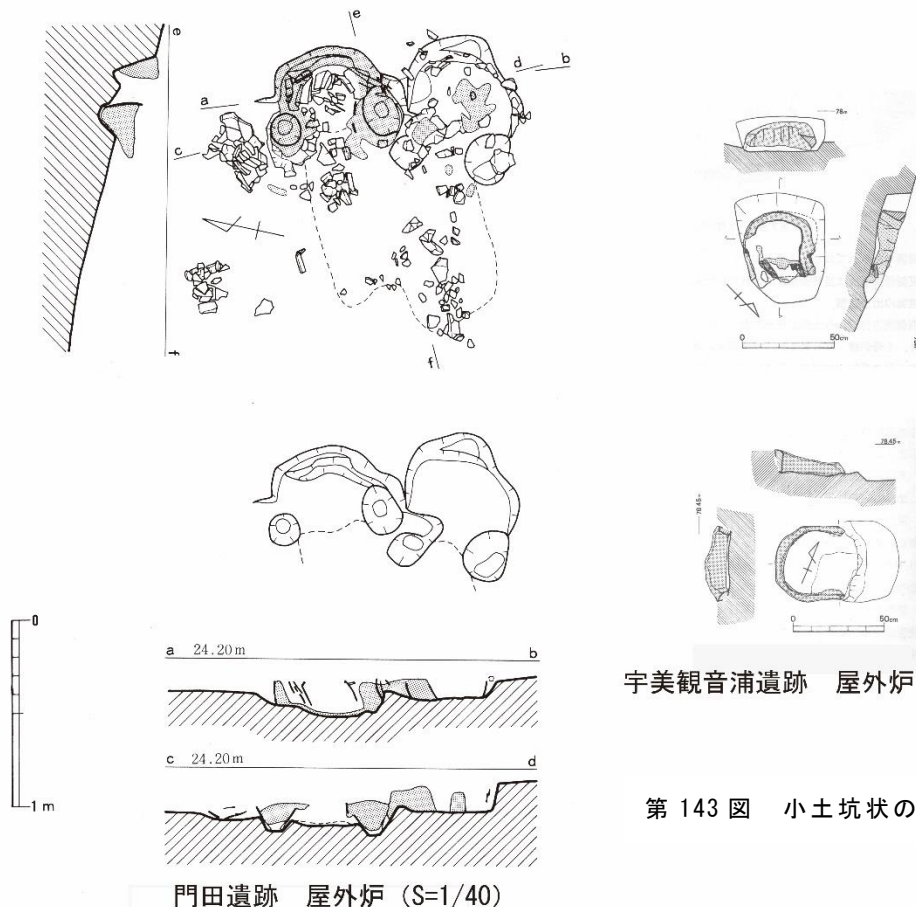
西島遺跡は三国丘陵南西部に位置し、標高 25m 前後の南東方向へ舌状に延びる丘陵末端部に位置する。これまで 9 地点で調査が行

われ、弥生時代中期前半以降の集落活動が顕著である。

1 号住居・2 号住居と切り合いがある炉跡は単独の遺構として報告が行われている（第 142 図）。炉跡は現状で一辺約 1.7m の隅丸方形の掘り込みがあり、深さは 22 cm で床面は硬化している。南東面の壁際にピット状の燃焼部が 2 基並列してみられる。南西面の壁際には周溝が一部あり、北東面にも続く可能性がある。埋土は東側へ傾斜する暗灰黒色土で、赤色焼土塊を多く含んでいる。下層では焼土と炭化物が多く含まれていた。2 基の燃焼部は径 23～33 cm 程で、上からみるとドーナツ状に広がる焼土（被熱硬化面）が認められ、断面形はドーム状となっている。床面は被熱硬化しておらず、側面から上部の壁が被熱硬化している。燃焼部の前面には浅いくぼみがある。須玖 I 式の甕・壺・支脚が出土した。

本来は 1・2 号住居以前にも住居があり炉跡はそれに付設されたものである可能性も考えられる。

そのほか、いずれも住居に伴わず屋外に位置する炉として、春日市門田遺跡辻田地区 G 6 区屋外炉跡（弥生時代中期前半）や糟屋郡宇美町観音浦遺跡 1・2 号炉跡（中期中葉から後期初頭か）がある（図 8）。門田遺跡例は前期末の V 字溝がほぼ埋没した段階で 2 基並列した状態、大量の炭化物・焼土とともに検出されている。



宇美観音浦遺跡 屋外炉 (S=1/40)

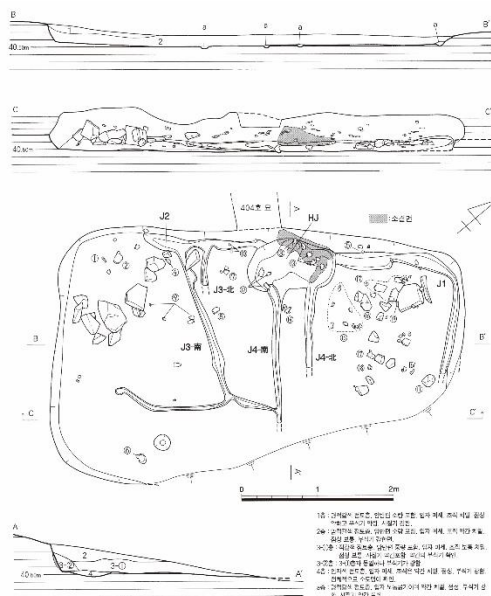
第 143 図 小土坑状の屋外炉

#### 4. 粘土帯土器文化期の住居・集落構造からの影響

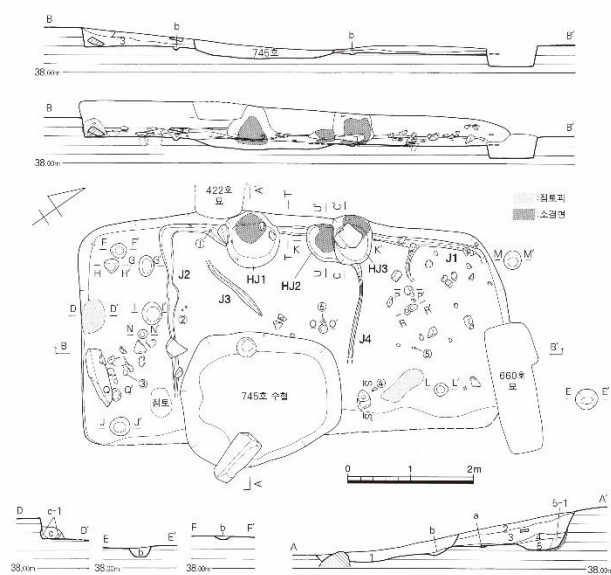
以上のように、韓半島粘土帯土器文化期の住居の特徴である壁際偏在炉や壁際の燃焼部（祖形炕をもたないカマド）<sup>註2）</sup>と接続する溝や被熱痕跡（オンドル状の構築物）、といった特徴的な事象を北部九州の三国丘陵を中心に抽出することができた。韓半島の事例と比較して、日本列島への住居や集落構造への影響について検討する。

韓半島の金海亀山洞遺跡では、丘陵斜面上に立地する粘土帯土器文化期の集落が全面的に発掘されており、特に弥生系土器が多く出土したことも知られている（図3）。A1地区で検出された住居跡89軒のうち、85軒が粘土帯土器文化期の住居である。丘陵斜面に段造成をもつ、長方形住居から方形住居への変遷がうかがえ、亀山洞遺跡の住居はそれらに燃焼部（カマド）と槽網（小溝群）を持つことが特徴である。

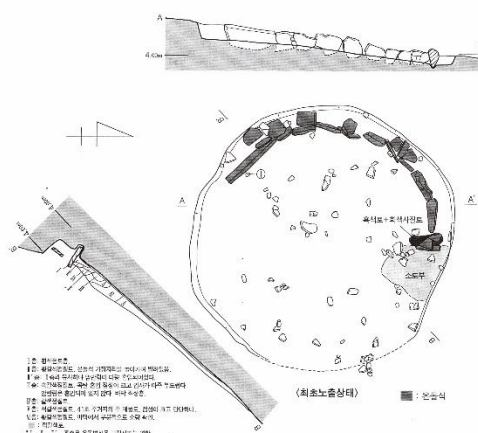
日本例と比較するために、残りの良い658号住居と737号住居を確認する（第144図）。



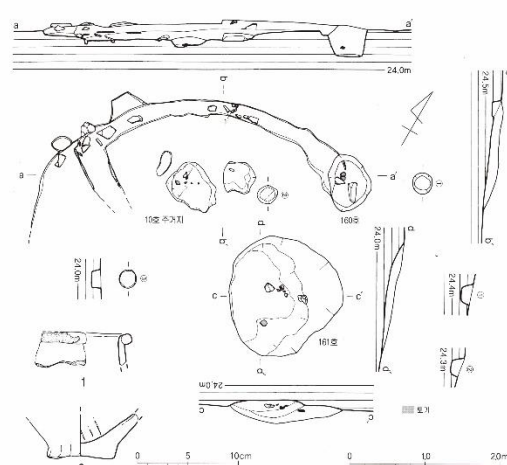
金海亀山洞遺跡 658 号住居 (S=1/100)



金海亀山洞遺跡 737 号住居 (S=1/120)



泗川勒島遺跡 A 地区 41 号住居 (S=1/100)



泗川芳芝里遺跡 10 号住居 (S=1/100)

第 144 図 韓半島における初現期のカマド・オンドルを持つ住居

737号住居は壁際に小ピット状の掘込みを持つ例で列島における北松尾口遺跡、西島遺跡、門田遺跡、宇美観音浦遺跡との比較対象となる。

658号住居は5.4×3.4m程の長方形住居で東長壁に楕円形の浅い穴を設けたカマドがあり、住居の外側に突出はしていない。壁に沿って両側に溝が走り、カマドに接続する住居床面の小溝が確認できる。このような住居の床下を走る小溝群は「槽網」と呼ばれ、松菊里段階の保寧寛倉里遺跡、金海栗下里遺跡でも中央の炉から放射状に延びる小溝が確認されており、変遷がたどれる（崔 2010）。

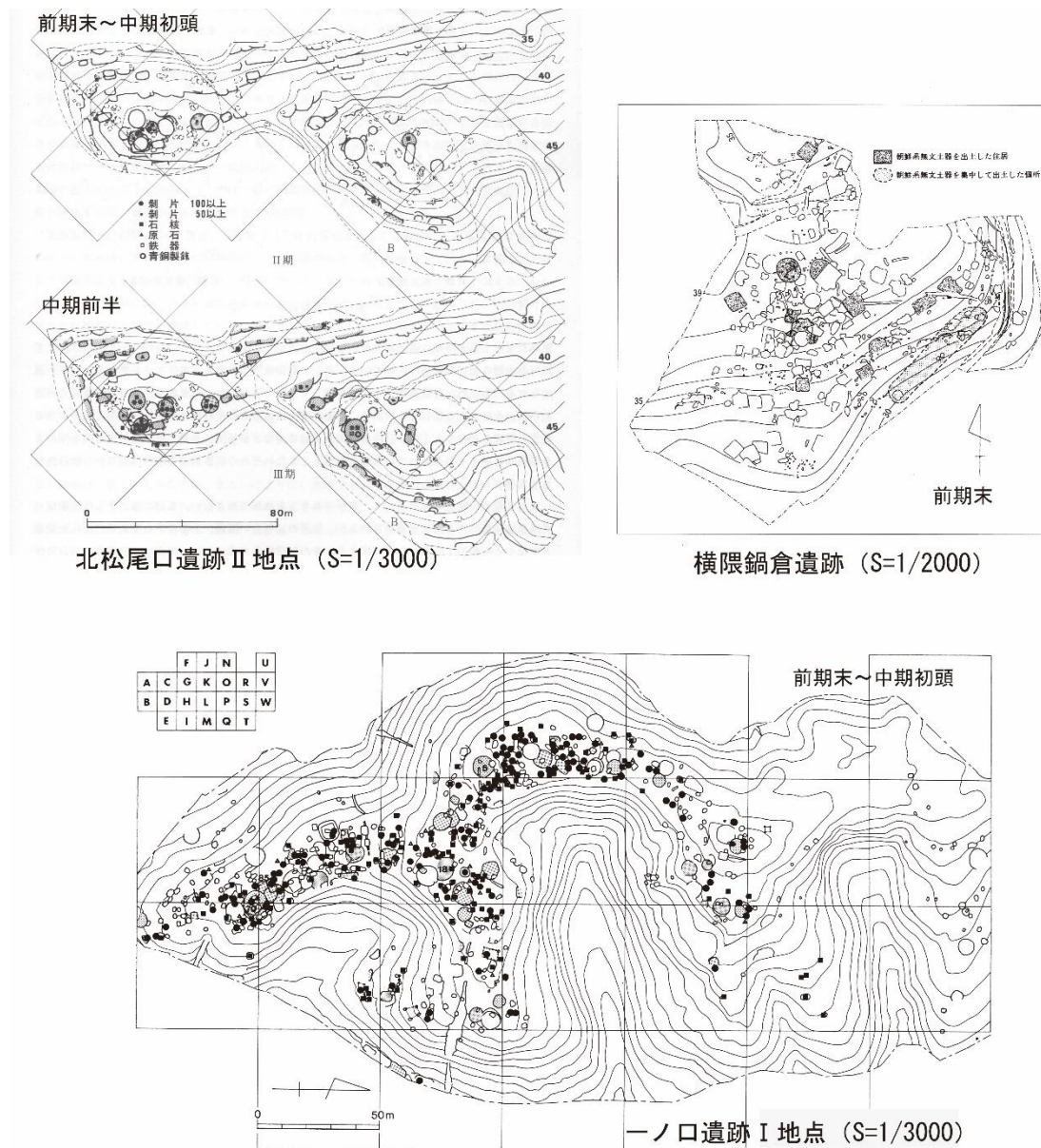
737号住居は7.8×3.7m程の長方形住居で、複数の小土坑が住居の壁に接してみられる。HU1とHU3は特に住居壁と接して立ち上がり、被熱した土壌壁が確認できる。これらは住居の壁の外側に一部突出する。槽網は長壁に沿って走り、住居を分割する形で直角に分岐している。

北松尾口遺跡Ⅱ地点では、板付Ⅱb式段階の円形5本柱住居で壁際偏在炉が確認された。その後、一ノ口遺跡Ⅰ地点で円形と思われる前期末の住居の壁際で、壁に接続する焼土塊が出土した。北松尾口遺跡ではⅡ地点を中心に丘陵緩斜面部に立地する「丘陵斜面段状型住居」が展開しており、そのなかには壁際に焼土が確認される例がある（第146図）。多くは中期初頭から前半に属し、①壁部分が帯状に被熱するもの、②壁際に帯状に焼土塊がみられるもの、③壁に接続して壁に沿って焼土塊がみられるもの、④壁際小土坑内に焼土がたくさん詰まっており、強く被熱するものなど様々な形態がある。これらは、金海亀山洞遺跡の住居に類例を求めることができるだろう。報告書では、亀山洞遺跡の住居形態の特徴である長方形・方形住居にカマドと網状溝は、北部九州では存在せず、異質なものとみている（崔 2010）。確かに、北部九州例では壁際の焼土と壁に沿って走行する溝のみで住居床下の網状溝とはなっていない。時期は若干新しくなるが靉島遺跡や芳芝里遺跡で見られるカマドと溝、その上にトンネル状の石板を組み合わせて用いたオンドルとなるものがみられる（図9）。これについては、住居床下には網状溝を持たずに、壁沿いを走行するトンネル状の溝で構成されている。今後、「槽網」（網状溝）の有無を検討する発掘調査が求められるが、日本では、それらを省略したかたちで採用された可能性も考えられる。

三国丘陵では須玖Ⅰ式段階を中心とした短期間に、丘陵斜面上に特徴的に作られる丘陵斜面段状型住居とそれと相関性のある壁際の焼土、壁際の溝については、カマドやオンドル状の構造を想起させるものである。粘土帯土器文化期の住居に類似した初現期のカマド・オンドル構造が北部九州でも確認できるが、その後には続かず、定着しなかったものと考えられる。カマドの成立は北部九州では弥生時代終末期の西新町遺跡の例を待たなければならない。

集落構造への影響はいかがであろうか。先述のとおり、韓半島では当該期の集落は丘陵中央を中心に放射状に広がる特徴がある。三国丘陵の事例と比較すると、北松尾口遺跡Ⅱ地点が、頂部に若干空間地を持っており、それを囲む形で斜面上に立地する方形系住居が多く作られている。円形住居は丘陵頂部に立地するので、狭い頂部の場合、空間地にはなりにくい。一ノ口遺跡では、丘陵鞍部を人工的にカットして平坦面を広げている。その狭い平坦面状に円形住居を中心に遺構が配置されている。無文土器が多く出土した横隈鍋倉遺跡では、丘陵頂部の未調査部分があるが、頂部付近に円形住居、斜面上に方形系住居が





第 145 図 三国丘陵の弥生時代前期末から中期前半の集落構造

配置されており、頂部は空間地となっている可能性がうかがえる。以上のように、集落構造は立地に影響されている部分もあるが、日本列島においては、円形住居が頂部付近、方形系住居が斜面上に立地する傾向がうかがえ、北松尾口遺跡や横隈鍋倉遺跡の方形系住居とその配置を渡来系集団の影響と考えた場合、在来集団と渡来系集団の住居配置が融合されているように感じられる。

## 5. まとめ

以上のように、韓半島の粘土帯土器文化期の住居や集落構造の影響が北部九州でも確認。これらを積極的に渡来系の住居構造と評価して、さらなる類例増加を期待したい。

最後に、これらの住居構造がどのように伝播したのかが課題である。端的にいうと、三国丘陵で無文土器（円形粘土帯土器）が多くみられる前期中頃から前期末の時期では不整形な小形竪穴状の住居構造が特徴的に三国の鼻遺跡や横隈鍋倉遺跡で確認できる（山崎

三国丘陵周辺の住居変遷図

	円形松葉型/系			円形松葉型派生型		方形松葉型類似
	中央2柱	4本柱	多本柱	4本柱	多本柱	
縄文時代晩期						
灰白Ⅱa～Ⅱc (渡来系で50%以上を占める)						
板付Ⅰ式併行期						
板付Ⅱa式(古)						
板付Ⅱa式(新)						
板付Ⅱb式(古)						
板付Ⅱb式(新)						
板付Ⅱc式						
城ノ越式(古)						
城ノ越式(新)						
須玖Ⅰ式						
須玖Ⅱ式						

	小形円形	方形	丘陵斜面段状	小形型
縄文時代晩期				
灰白Ⅱb～Ⅱc (渡来系で50%以上を占める)				
板付Ⅰ式併行期				
板付Ⅱa式(古)				
板付Ⅱa式(新)				
板付Ⅱb式(古)				
板付Ⅱb式(新)				
板付Ⅱc式				
城ノ越式(古)				
城ノ越式(新)				
須玖Ⅰ式				
須玖Ⅱ式				

【凡例】※それぞれの住居型式(縦軸)のなかでの消長を示した図。右下には、2006年3月時点の集積型を掲載。  
※松葉型住居は須玖Ⅰ式まで、その他は須玖Ⅱ式までを対象。

※本図は、集積型以外のものから構成。  
※丘陵斜面段状の配置は、一ノ口遺跡、北松尾口遺跡からの算出。

第 146 図 三国丘陵の住居変遷 (山崎ほか 2008 に壁際炉・焼土を加筆)

2018)。同様の時期に一ノ口遺跡や北松尾口遺跡で壁際偏在炉が確認されるようになるが、特に北松尾口遺跡では在来の松菊里系住居にその偏在炉が確認できることが注目される。

その後、斜面に特徴的に立地する段状型住居に壁際偏在炉、壁際に焼土を持つ住居が多くみられるようになる。渡来系住居が増加する一方で、この時期には少数の擬円形粘土帯土器の出土に変化している。なお、壁際焼土を持つ住居から擬無文土器の出土はみられない。土器の変化では渡来人が弥生社会と交流を進め、中期以降では変容無文土器系土器もわずかの確認数でかなり弥生社会に馴化して状況がうかがえる。これまでの研究では、この段階以後、渡来人はさらに移動を進め、各地に渡ったと解されてきた(片岡 2009)。しかし、住居形態では前期末連続して渡来人の影響がうかがえるのである。

城ノ越式～須玖Ⅰ式の時期では、三国丘陵ではすでに弥生社会への馴化がかなり進んでおり、渡来人の数世代後の集団が引き続き、日韓の交流を担っていたことが考えられる。そのなかで、初期鉄器や住居構造を引き続き採用しているのではない。この時期は、日本列島では無文土器の出土が少なく、逆に韓半島で弥生系土器が多く確認される時期である。日本からも韓半島へ渡海していることがうかがえ、韓半島と北部九州を往来する人々がどのように交流していたのかを日韓双方向の視点で評価しなければならないだろう。

#### 【註】

(1) 表題は渡来人の住居としているが、渡来人そのものが居住したというよりも、渡来系集団が居住、もしくは無文土器文化の影響を受けた集団が採用した住居形態である。

(2) 大貫 静夫 2001 も円形粘土帯土器期の住居跡について、保寧郡校正里遺跡にみられる壁に接した地床炉が祖形坑をもたないカマドである可能性を指摘している。



## 第6章 日韓交流モデルと弥生社会の変化

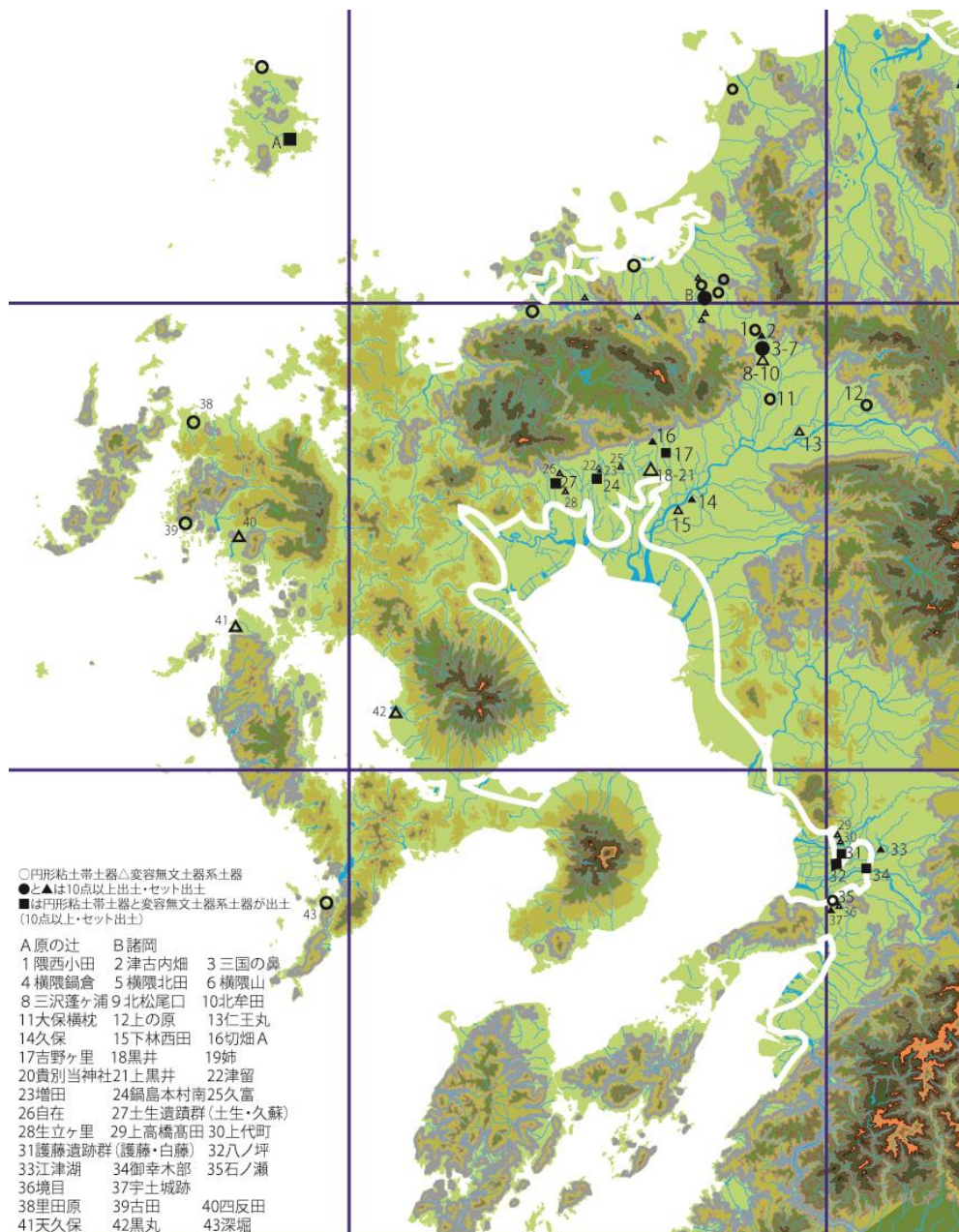
### 第1節 日韓交流モデルの構築

各地域における土器、特に円形粘土帯土器からみた日韓交流の比較を行う。

#### 1. 三国丘陵における日韓交流の様相

[無文土器系土器の時期と量、画期]

共伴土器で時期が推定できるものは、福岡県横隈北田遺跡で板付Ⅱa式新段階～板付Ⅱb式が13点、板付Ⅱc式が7点、横隈鍋倉遺跡で板付Ⅱb式が8点、板付Ⅱc式が7点（＋南斜面土坑等9点）、三国の鼻遺跡で、板付Ⅱb式では甕が大半を占めて、板付Ⅱc式が17点となっている。3遺跡の合計は、板付Ⅱa式新段階～板付Ⅱb式が21点、板付Ⅱc式が31点（＋9点）となり多器種化が顕著となる。



第147図 環有明海を中心とした無文土器系土器（円形粘土帯土器）出土遺跡

[集落における渡来人と在来人の関係] (P212 第 129 図・P213 第 130 図)

三国丘陵における渡来人と在来人の関係は、第 5 章第 1 節で詳しく述べた通りである。

[無文土器系土器の変容の方向性] (第 148 図)  
大きく 3 段階の画期が設定できる。

①無文土器持込み品が多い段階 (～Ⅱ b 式)

渡来人は在来集団の中に入り込んでいるのかかわらず、粘土帯土器は、器種が甕 (・鉢) に限定され、少数の出土である。少数の渡来が断続的に行われ、持ち込み品が多い可能性を考える。

②弥生土器生産と無文土器生産 (Ⅱ c 式前後) がそれぞれ行われる。

在来集団と渡来集団が同じ集落内ではあるが、分かれて居住する。粘土帯土器は多器種化がみられ、無文土器の量も増加する。

③集落再編により、集団にも変化がみられる。城ノ越式以降、「擬無文土器」(変容無文土器)ではなく、「擬弥生土器」(変容弥生土器)の方が多く確認される。

変容弥生土器がⅡ b 式以降、集中遺跡ではなく周辺の遺跡で散見される (p 204 第 126 図)。

[無文土器系土器と集落変遷の再検討] (第 150 図)

当地域で、円形粘土帯土器が確認されるのは板付Ⅱ a 式新段階以降である。横隈北田遺跡や大保横枕遺跡で、円形粘土帯土器甕 (・鉢) が確認されるのと併せて、津古土取遺跡で、変容弥生土器が確認できる (第 149 図)。プロポーシオンは弥生土器で、口縁部下に接合による段を有する資料で、口縁部は薄い粘土帯を胴部側から巻き込んで貼り付け、点的に指押さえをしている。板付Ⅱ b 式古段階まで、変容した松菊里系土器がみられ、円形粘土帯土器と一部併行する。この段階で、集中して出土するエリアだけでなく、各集落群でもわずかながら円形粘土帯土器の出土が確認でき、集中出土域から各集落群への二次的な土器移動かと考えられる。周辺の集落群へのわずかな分散、粘土帯土器文化の情報伝達が窺える。板付Ⅱ b 式新段階では集中出土域で、継続して無文土器が出土し、その周辺の集落群で変容した無文土器や弥生土器が少数出現している。本稿では、新たに無文土器の影響を受けて変容した弥生土器も抽出した。また、変容した無文土器もあることから、この段階でわずかながら相互の交流が見受けられる。ただし、各集落群で数点の確認であり、弥生土器全体からすると 1 %未満のわずかな現象である。

板付Ⅱ c 式新段階になると、さらに集中出土が顕著となり、引き続き、周辺地区でわずかな変容無文土器/変容弥生土器の出土がある。土器への影響は集中出土域ではなくて、周辺でみられる現象である (第 150 図)。集中出土域では、この時期に同じ集落内でも在来集団と別の地点で、渡来系集団が居住するようになる。周辺集落では、そのような集落構造・居住形態は見えずに、もしあるとしても視覚的に表れないくらいで弥生系集団内に

【三国丘陵の無文土器系土器】(全時期通じて)

・弥生土器

・無文土器

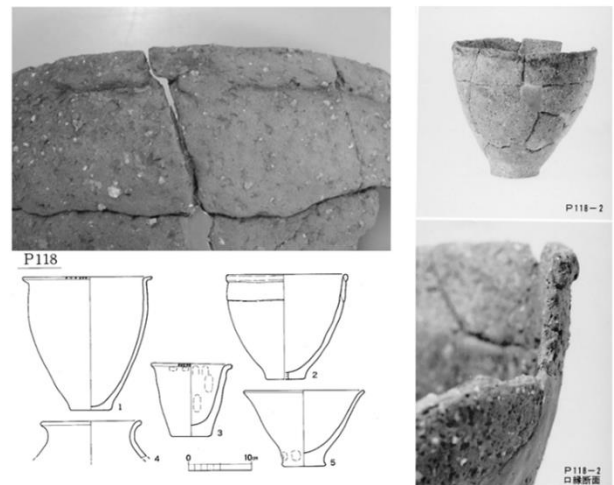
・変容弥生土器

・変容無文土器(第 1 段階)

・変容無文土器(第 2 段階)

第 148 図 三国丘陵で確認できる土器

(実線 (枠) は存在、点線 (枠) はわずかに認められる)



第 149 図 津古土取遺跡の変容弥生土器



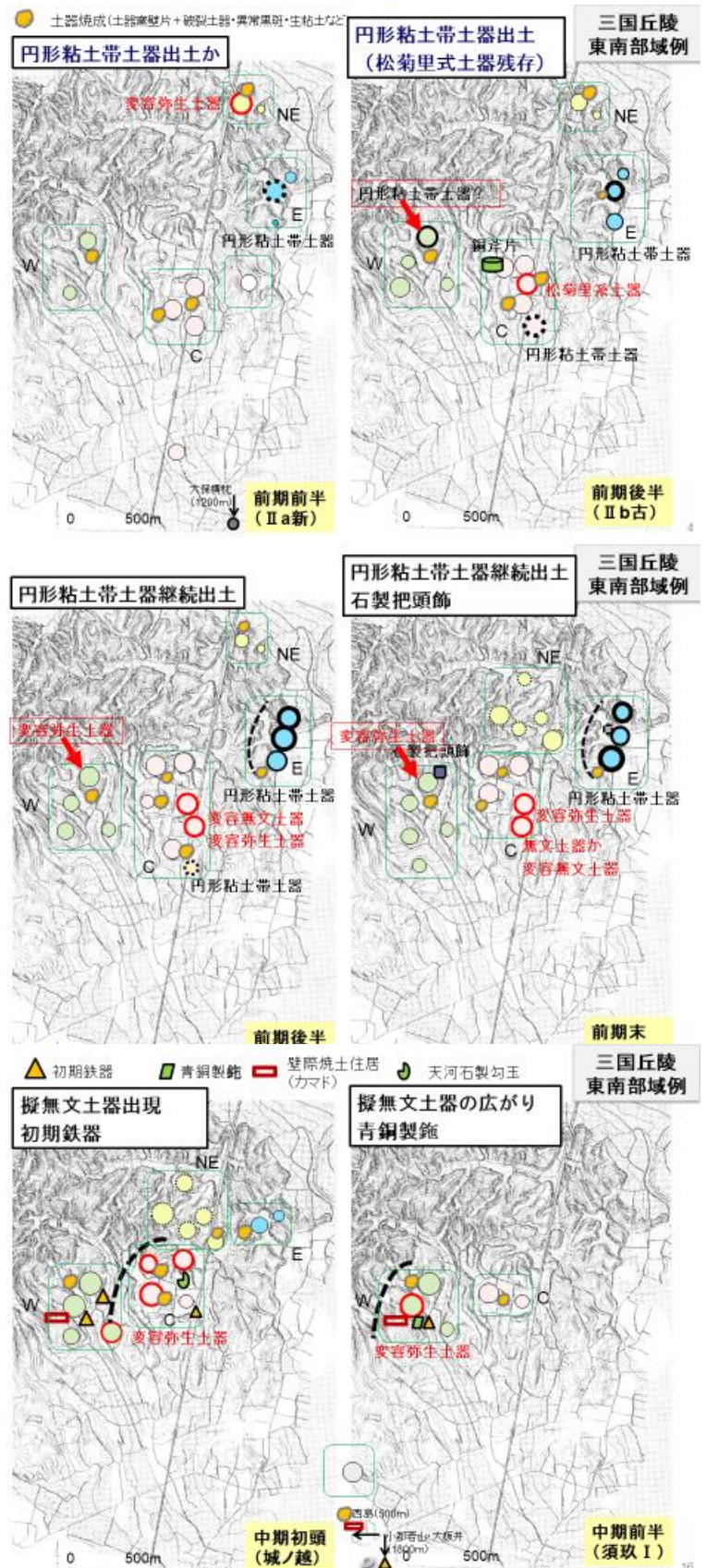
わずかながら入り込んでいるのだろう。そのなかで、土器の交流が少しずつ進む。

中期初頭には、無文土器が集中出土する「集落群」が縮小し、隣接する「集落群」が拡大する。その段階でようやくこれまで認識されていた「擬無文土器」（片岡 1999）が少量、そして周辺に拡散して出現する。

資料を再検討した結果、無文土器の影響を受けて変容した弥生土器は集中出土エリアの隣接「集落群」である三沢北中尾遺跡・蓬ヶ浦遺跡から出土していることがわかる。前期末までに移住した渡来人の子孫が周辺集落に拡散・同化し、在来の土器生産から使用に至るシステムの中に渡来系集団も組み込まれた可能性がある。その後、中期前半には、さらに隣接する「集落群」に広がりを見せて、変容弥生土器がわずかに確認される（第 150 図）。弥生時代前期を通して無文土器が多く出土するが、その間、変容した無文土器／弥生土器はわずかな発現で、製作技術上の交流は顕著でない。土器生産は複数の「集落群」にわたる大規模かつ集約的なものでなく、「集落群」内や集落内で行われる中・小規模なもので、集中出土エリアでは渡来人と在来人の各集団の土器製作が許容される社会でもあった。周辺地域では変容した土器がわずかながら確認され、弥生土器に一部無文土器の影響がみられるもので、弥生土器生産が主体となっているだろう。

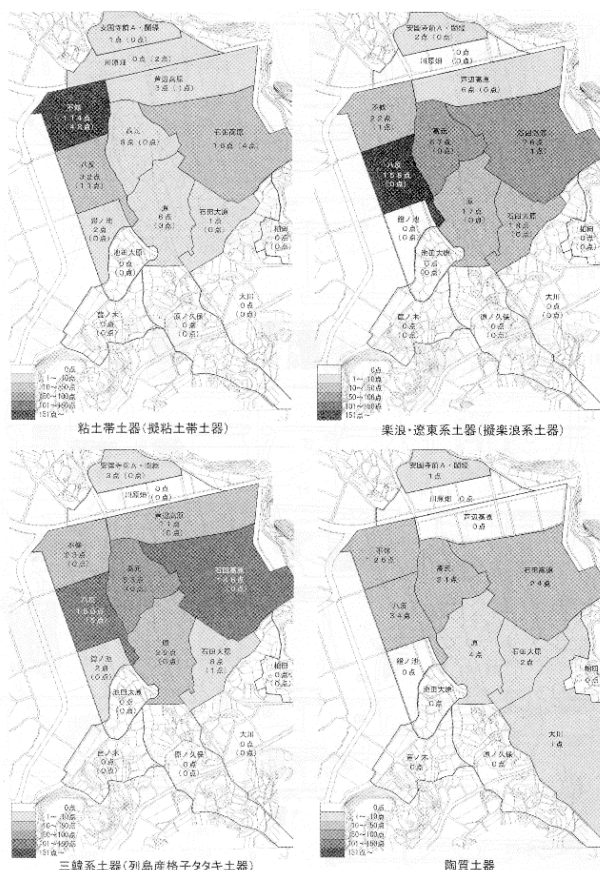
## 2. 原の辻遺跡における日韓交流の様相

壱岐島の原の辻遺跡は弥生時代前期後葉に集落が形成され、古墳時代初頭で解体を迎える（古澤 2016）。

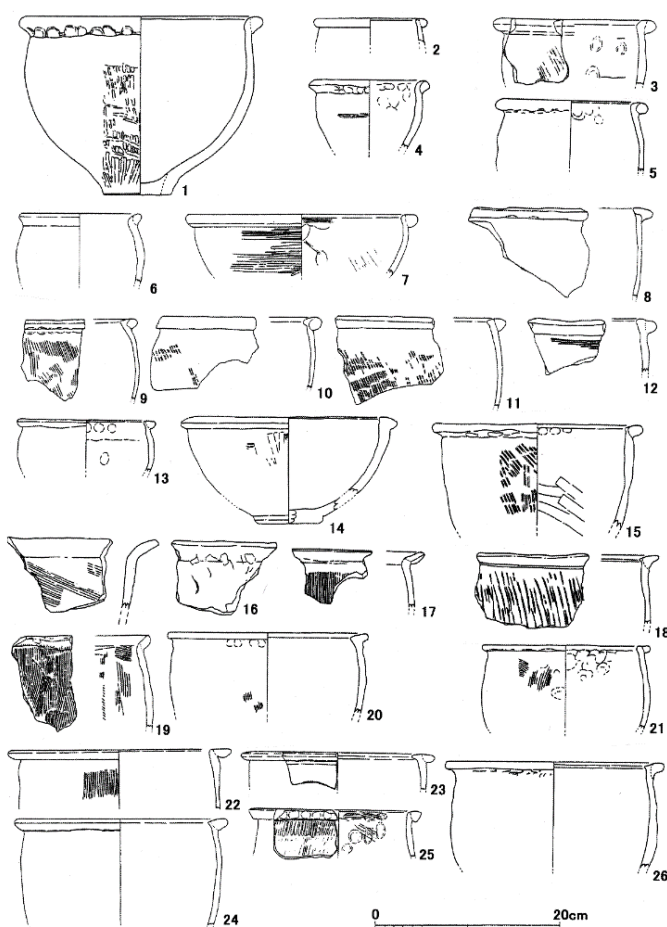


第 150 図 三国丘陵の無文土器系土器と集落変遷





第 151 図 原の辻遺跡の大陸系・半島系土器  
出土分布



第 152 図 原の辻遺跡出土無文土器系土器

前期後葉では舌状にのびた丘陵先端部に遺構が集中し、東側低地部に大溝が掘削される。この時期に、無文土器系土器が北西低地部の不篠地区で多く出土する(第 151 図)。北西低地、河川沿いの不篠地区を中心に渡来人が弥生人と交流し滞在・居住していた。中期初頭～中期中葉は集落確立期で、前期の集団が丘陵部全体に拡大するとともに周辺の丘陵上にも居住区を構える。低地を中心に環濠もめぐり、一部を既存河川につなぐことで丘陵部とそれ以外の空間を区画する。船着き場は、河川中の島状の地形となっており、ここに南北約 15m の突堤を 2 条築いて整備している。突堤には、大陸系の土木技術である敷粗朶工法が用いられた。盛土から出土した土器は須玖 I 式古段階である。

[無文土器系土器の時期と量、画期]

不篠地区 SX02 では、板付 II b 式～城ノ越式甕・壺と円形粘土帯土器甕 2 点が共伴した。SX02 は幅 4.5m、深さ 0.4m の土坑で住居跡の可能性もある。不篠地区 B 区 2 号溝では、板付 II b 式～城ノ越式の甕と円形粘土帯土器甕、不篠地区 E 区 6 号土坑では、須玖 I 式古段階の甕・壺・鉢と断面ソラマメ状の粘土帯土器甕が出土して、円形粘土帯土器が弥生時代前期末～城ノ越式、三角形粘土帯土器が須玖 I 式(古)～須玖 II 式(新)という併行関係(白井 2001)が原の辻遺跡でも確認できる(古澤 2010)。報告分では、粘土帯土器 185 点、擬粘土帯土器 69 点で、弥生土器の割合が圧倒的に高い。器種は、甕、把手付長胴壺、長胴壺、高坏、蓋、黒色磨研長頸壺、小壺、小型土器などが確認されている。

片岡宏二は、円形粘土帯土器段階、三角形粘土器段階それぞれを擬化の進行によって 1・3 類に分類した(片岡 2001)。1 類が韓半島からの搬入品か無文土器を製作しなれた工人によるもの、2 類はプライマリーな無文土器から弥土器の影響を受け擬化が始まる段階、3 類は擬化がさらに進んだものである。三角形粘土器の変容品の出土は他の遺跡ではあまりなく

【原の辻遺跡の無文土器系土器】

• 弥生土器

#### ・変容弥生土器

#### ・変容無文土器(第2段階)

(実線 (枠) は存在、点線 (枠) はわずかに認められる)



無文土器

變容無文土器（第1段階）

變容無文土器（第2段階）

## 原の計遺跡

### 鯉半島南部

【韓国】

無文土器

弥生土器

變容無文土器

變容弥生土器

原の辻

韓半島南部

1原の辻不條旧河道  
2,3興洞1号住居址

239



進んだ無文土器」と「変容した弥生土器」が含まれる。例えば、第 154 図上段左の 1 と 3 は弥生土器のつくりや器形で、部分的に無文土器の要素が取り込まれた「変容弥生土器」である。第 154 図 2 は器形や口縁部の角度など三角形粘土帯土器に近いが、口縁部の平坦化、水平化の影響がみられる「変容無文土器」である。第 154 図で示した原の辻遺跡例は口縁部に円形粘土帯を良く残しており、粘土帯下端の処理は粗いナデつけである。山陰地域でもよくみられる資料である。この資料は、口径も小さく樽型を呈し、「変容（した）無文土器」と考える。興洞遺跡の資料は粘土紐の貼り付けに際し、若干の巻き込みがうかがえ、口縁下端部はなでつけが丁寧に行われていることで粘土帯の円形部分がやや変形している。韓半島における「変容無文土器」である。

このように、日韓両沿岸部において同様の模倣土器「変容弥生土器」、「変容無文土器」がそれぞれに存在することが示された。特に原の辻遺跡資料からは、形態・製作技法など様々な要素が日韓両岸で複雑に交錯していることがわかる（古澤 2016）。これは、「変容弥生土器／変容無文土器」の新しい枠組みで整理が可能である。「変容弥生土器」と「変容無文土器」の双方がみられるのが原の辻遺跡の特徴であり、さらに無文土器は変容が進行している。頻繁な往来による交流の証であろう。

### 3. 玄海灘沿岸における日韓交流の様相（沿岸域＋諸岡遺跡）

〔無文土器系土器の時期と量、画期〕

沿岸部では、板付Ⅰ式新段階の可能性があり、福岡県曲り田遺跡や今川遺跡の円形粘土帯土器甕口縁部片のわずかな出土がある。しばらく間があり、板付Ⅱc 式に、諸岡遺跡で無文土器の大量出土がみられ、渡来系集団の居住が窺われる。しかし、弥生土器も伴う（中期初頭に下る甕もある）。そして、前期末段階で、少数の変容弥生土器（小形甕（鉢））が周辺の板付遺跡や門田遺跡で出土する。

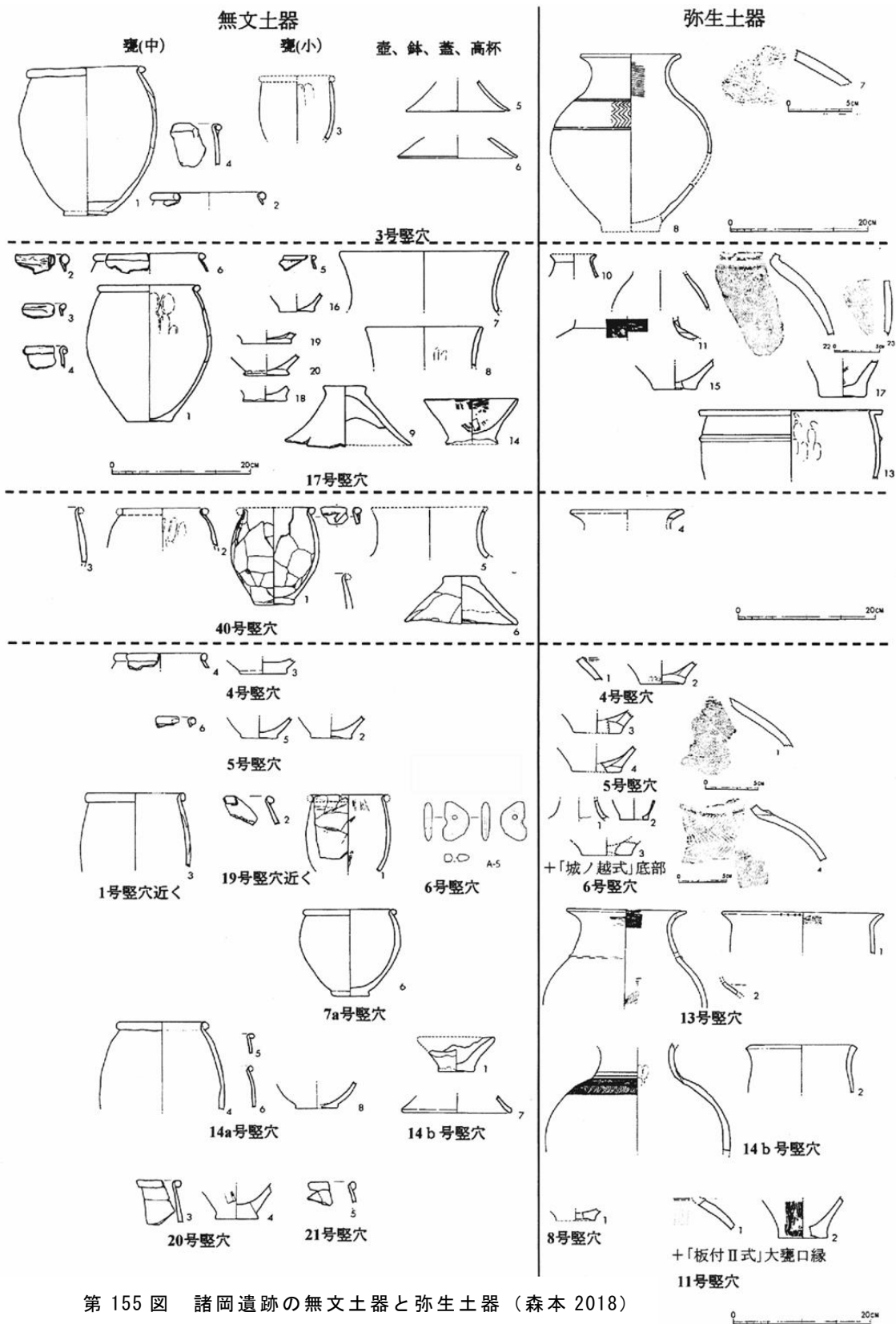
城ノ越式段階になると、福岡県姪浜遺跡で黒色磨研高坏と円形粘土帯土器甕が出土し、松木田遺跡で中期初頭の木棺墓から黒色磨研長頸壺が出土した。須玖Ⅰ式段階まで円形粘土帯土器が残り、須玖タカウタ遺跡で「擬円形粘土帯土器」甕口縁部片が出土している。

〔集落における渡来人と在来人の関係〕（p 227 第 139 図）

福岡平野中央部の台地上に立地する諸岡遺跡では、無文土器（33 点）が弥生土器を上回って出土する地区がある（4・5 次調査の C/D 区）。竪穴状遺構の多くから無文土器が出土し、天河石製勾玉も出土している。諸岡遺跡の各遺構を整理した森本幹彦によれば、無文土器と弥生土器は器種間の補完関係にあるという（第 155 図）（森本 2018）。甕は無文土器が多く、壺は弥生土器が多い傾向がある。無文土器は法量分化しており中型は器高さ 20 cm 前後、口径 15 cm 前後、小型は器高 13 cm 前後、口径 12 cm 前後であり大型はみられない。中型も弥生甕の平均サイズよりは小さい。大型品は壺にみられる。

諸岡遺跡の立地は、弥生時代前期の福岡平野で中心的な集落であった板付遺跡と 0.6 km ほどの距離で、水田や河川を挟んで対峙する。前期末から一部中期初頭に営まれた集落で、中期前半には甕棺を主体とする墓域へ変化する。周辺では板付遺跡をはじめとして散発的に無文土器と擬無文土器がみられる。この状況は、三国丘陵の様相に通じるものがある。板付、門田遺跡では無文土器系土器が出土している。

諸岡遺跡では、これまで言われている通り、前期末にほぼ限定される時期に、擬無文土器が出現せずに終わっている。板付遺跡が集落群の中心とすれば、周縁に位置する丘陵の



第 155 図 諸岡遺跡の無文土器と弥生土器（森本 2018）

さらに限られた区域で集落が営まれ、土器の交流が進むことなく終わっている。弥生土器との補完関係がうかがえることから板付遺跡との関係性が重要である。

調査者の後藤は、無文土器が出土する堅穴には、40号堅穴のように床面で火を燃やした形跡があるので、人間が一時的に居住したものもあるし、17号堅穴のように深いものは貯

蔵穴と想定した。また、これらの遺構が重複せずに密集し同時期の遺構が付近にないことから、弥生社会との隔たりを持って存在した短期間に営まれた宿営的な性格と考えた（後藤 1979）。松尾は、遺構頂部は空間地となり、それを囲むように斜面上に帯状に遺構が配置されており、遺構や集落構造が韓半島の粘土帯土器文化期の集落と共通することを指摘した（松尾 2010）。

〔土器の変容の方向性〕（第 156 図）

諸岡遺跡では、玄界灘沿岸地域で最も無文土器が確認されているが、変容自体は顕著ではない。諸岡遺跡の周辺でわずかながら、無文土器の影響を受けた変容弥生土器がみられる。弥生時代中期になって諸岡遺跡の居住者や子孫が近隣へ移住、または別集落に吸収された形跡はなく、短期間で故地へ戻った可能性も指摘されている（後藤 2006）。

須玖Ⅰ式期の粘土帯土器の出土が希薄な段階を経て、弥生時代中期後半に博多湾沿岸を中心に朝鮮半島系土器の出土数が増える（森本 2018）。三角形粘土帯土器は玄界灘沿岸では須玖Ⅱ式以降に顕著となる。三角形粘土帯土器段階は、拠点集落の形成と関係する。

#### 4. 環有明海における日韓交流の様相

環有明海は、日本列島で無文土器系土器（円形粘土帯土器）が最も出土する地域である（第 147 図）。先に示した三国丘陵も有明海に注ぐ大河筑後川を上り、その支流である宝満川を介して連なり、広い意味で環有明海地域に包括される。筆者は、環有明海では、海上・河川交通を利用して日韓交流が進められた可能性を指摘した（第 4 章第 2 節第 117 図）（山崎 2019）。なかでも佐賀平野・熊本平野では（円形）粘土帯土器、またその技術的、思想的

影響を受けた黒色磨研土器が集中し、青銅器鑄造関連遺物も併せてみられるのが特徴である（第 157 図）。環有明海では、玄界灘沿岸地域とはまた異なる軸として、海上・河川交通を介した日韓交流が進められた（山崎 2019a）。

##### A. 熊本平野における日韓交流の様相

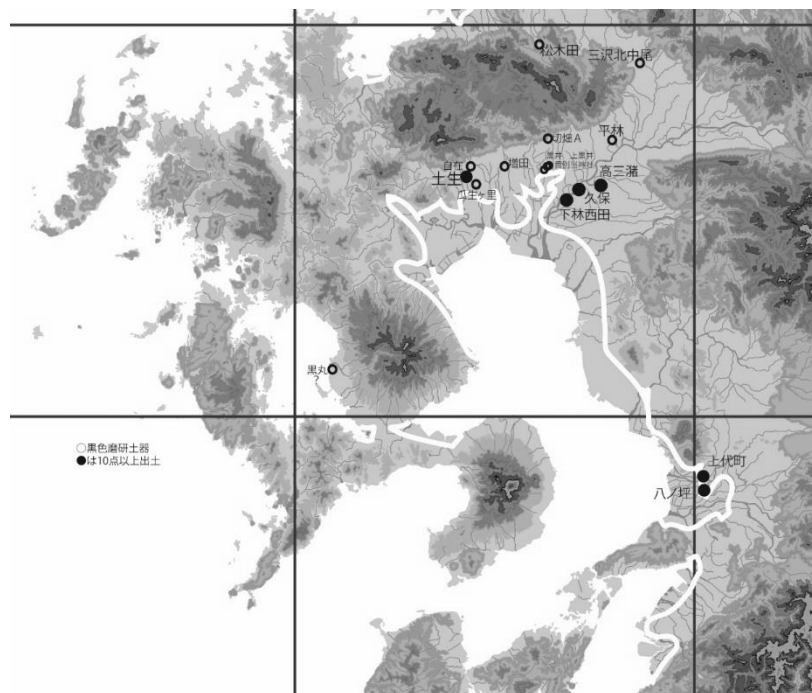
環有明海の無文土器系土器は、有明海北岸の佐賀平野や筑後川下流域、熊本平野に多く分布している（第 147 図）。円形粘土帯土器に比べて三角形粘土帯土器は少ない。

#### 【諸岡遺跡の無文土器系土器】

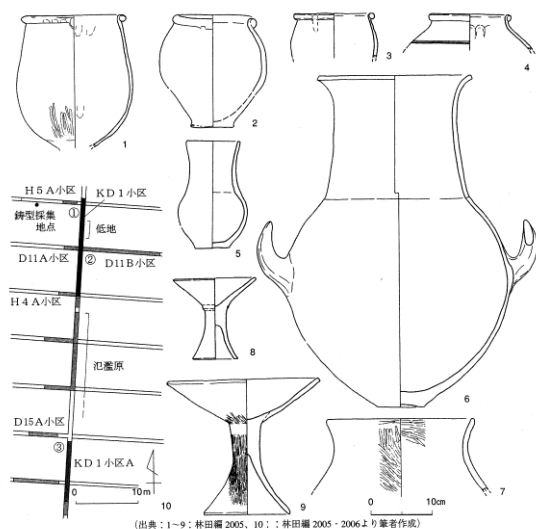
- |         |                 |
|---------|-----------------|
| ・弥生土器   | ・無文土器（多い）       |
| ・変容弥生土器 | ・変容無文土器（第 1 段階） |
|         | ・変容無文土器（第 2 段階） |

第 156 図 諸岡遺跡で確認できる土器

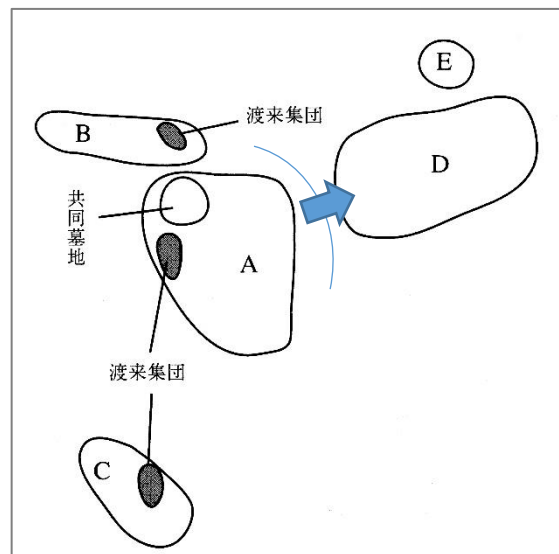
（実線（枠）は存在、点線（枠）はわずかに認められる）



第 157 図 環有明海の黒色磨研土器出土遺跡



第 158 図八ノ坪遺跡出土無文土器系土器（後藤 2011）



第 159 図八ノ坪遺跡の集落動態（林田 2008）

有明海の出入り口である早崎瀬戸から宇土半島沿いに進み、突き当たるのが、当時は内湾となっていた熊本平野である。熊本平野においては、これまでに 13+1 遺跡で無文土器系土器の出土が確認できる。熊本県八ノ坪遺跡、護藤遺跡群、上代町遺跡、御幸木部遺跡群、江津湖遺跡群、上高橋高田遺跡、石ノ瀬遺跡などでまとまった数の無文土器系土器が出土している（林田 2008）。熊本平野の低地部を挟んで南北にそれぞれ集中する遺跡があり、北側は旧白川によって東と西に分けられて、①熊本平野西部②熊本平野東部③宇土半島基部に分布する。

熊本平野東部の江津湖遺跡群や御幸木部遺跡例は変容無文土器がなく、前期までさかのぼる。これに対して熊本平野西部の八ノ坪遺跡や上代町遺跡は変容無文土器も中期初頭から前半代まで継続して確認され、平野内での無文土器人集団の移動が考えられる。

したがって熊本平野では、粘土帯土器人が継続的に居住して、故地との交流回路を開設・維持した地域の一つとみられる。そして、八ノ坪遺跡では青銅器の鋳造がみられる。

#### [時期と量、画期]

八ノ坪遺跡では、前期末段階で円形粘土帯土器が確認され、中期初頭以降変容が進んでいる。なお、八ノ坪遺跡では、黒色磨研長頸壺が前期末から認められる。報告書掲載分 A 地点：無文土器系土器 17 点、B 地点：30 点、c 地点：8 点で、いずれの地点も弥生土器が圧倒的多数ではある。

#### [集落における渡来人と在来人の関係]（第 158・159 図）

八ノ坪遺跡の集落変遷は、A 地点が母ムラと考えられ、最も古い土器が出土している（林田 2008）（第 159 図）。前期前半段階から集落形成が始まり、前期末から中期初頭にかけて盛行し、中期前半まで継続する。前期末から無文土器が確認できて、中期初頭には折衷化がみられる。比較的早い段階で渡来系集団と在来集団の交流が進み、中期初頭段階で変容無文土器が出現する。これは、母ムラに入っているからだろう。

A 地点の西側には前期後半で埋没する環濠があり、環濠の埋没期に、B・C の微高地が形成され、C 地点は前期末以降の集落で中期前半までで廃絶する。D・E 地点は中期前半以降の集落である。集落変遷は、A から分かれて、B・C が成立。その後、D・E へ変遷する。中期前半では D 地点へ中心が移り、中期中頃にはなくなる集落である。交流は A・B・C 地点

で進み折衷土器が出る。八ノ坪遺跡は各種出ているので、移住が想定でき、無文土器系土器を使ったお墓もみられる。

B 地点では、青銅器鑄造場所であった可能性のある溝で囲まれた掘立柱建物や廃棄土坑などが確認され、小銅鐸や武器型青銅器の鑄型・送風管・銅滓・銅バリ・銅滓が付着した土器や発泡土器が出土した。前期末から黒色磨研土器も確認できる。黒色磨研土器は墓からの出土が多くその出現期の共伴関係が捉えにくい、八ノ坪遺跡では集落遺構（SI068）からの出土もあり、前期末段階で長頸壺（黒色磨研 1 と非黒色 1）が伴うことがわかる。

〔土器の変容の方向性〕（第 160・161 図）

熊本平野東部では、わずかに変容する資料もあるが、ほとんどがプライマリーな無文土器である。遺構に伴う資料が少ないが、御幸木部遺跡では前期末～中期初頭の弥生土器、円形粘土帯土器が出土したが、変容無文土器／弥生土器が含まれていないようだ。短期間居住し、その後移動して土器製作技術への影響をほとんど残さない姿は諸岡遺跡と似ている。

一方、熊本平野西部では護藤遺跡や八ノ坪遺跡で確認されるように無文土器が弥生土器の影響を受けて変容する（第 161 図）。これは渡来集団が弥生社会の中に居住して徐々に同化する姿である。八ノ坪遺跡は無文土器・変容無文土器が多く、変容無文土器第 2 段階（下端なでつけ）は意外と少ない（第 161 図）。上代町遺跡は無文土器の底部がなく、円

【八ノ坪遺跡の無文土器系土器】

・弥生土器

・無文土器

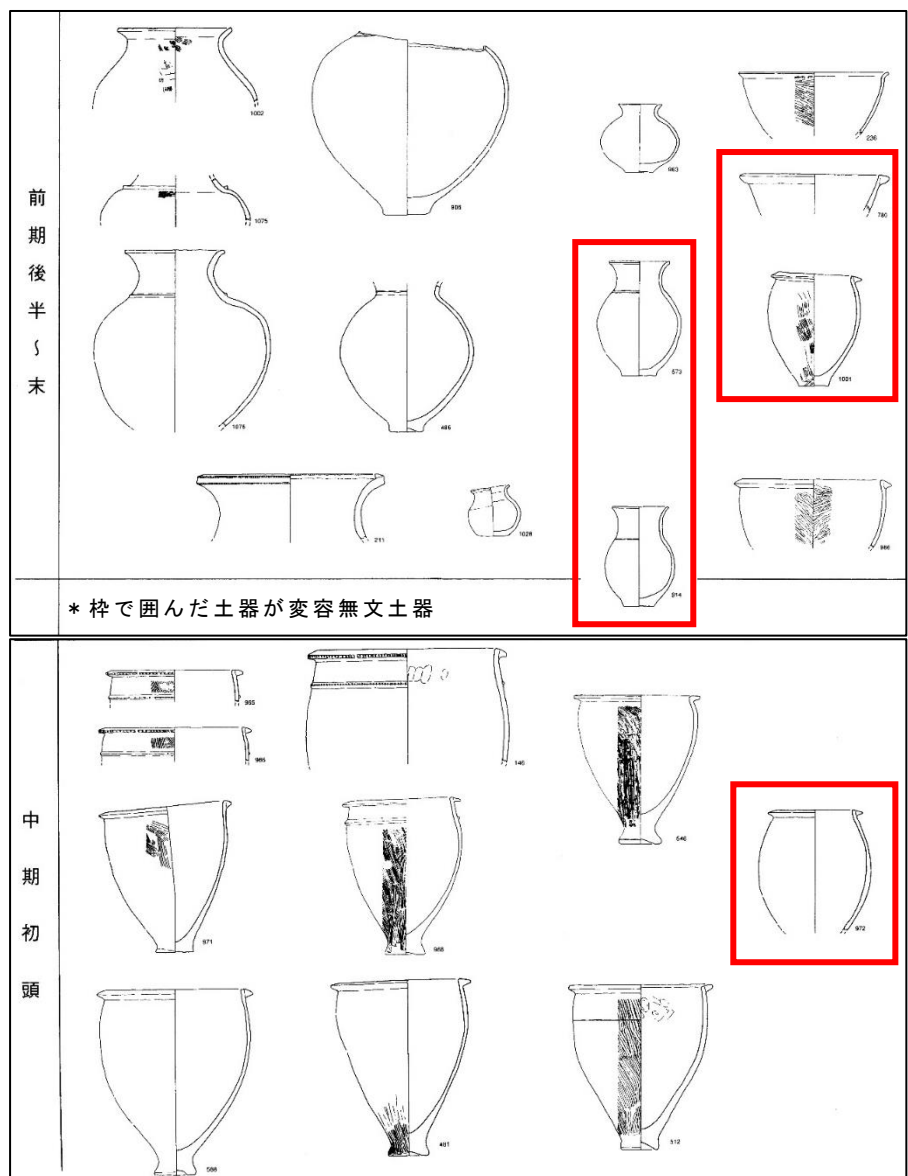
・変容弥生土器

・変容無文土器（第 1 段階）

・変容無文土器（第 2 段階）

第 160 図 八ノ坪遺跡で確認できる土器

（実線（枠）は存在、点線（枠）はわずかに認められる）



第 161 図 八ノ坪遺跡出土の変容無文土器（林田 2006）



形粘土帯土器段顔の資料は少ない。黒色磨研土器が多めであるので、八ノ坪遺跡より後出し、変容弥生土器が少数みられる。

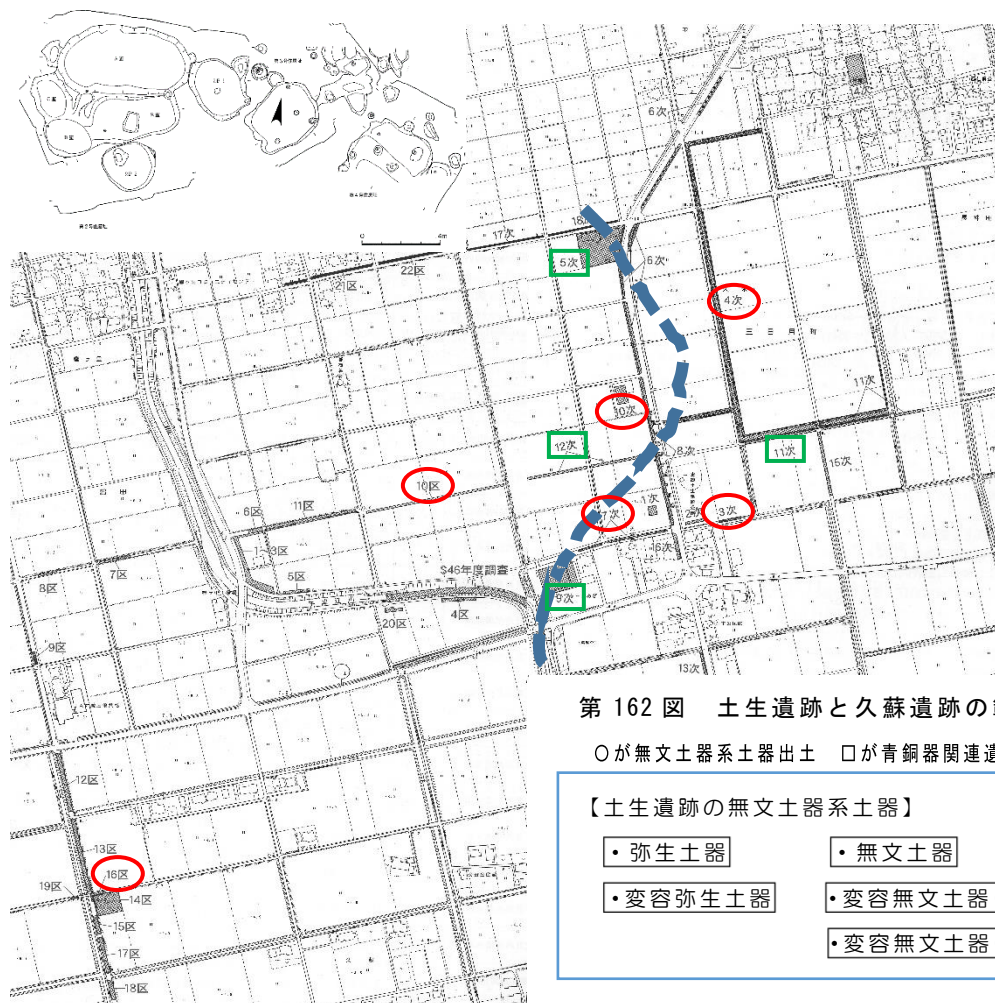
宇土半島基部は、熊本平野東部、西部との状況とも異なる。無文土器が集中する石ノ瀬遺跡付近では擬無文土器は見つかっていない。それを取り込む遺跡群が宇土城遺跡群であり、擬無文土器が出土する。片岡は石ノ瀬遺跡が前期末で完結して移動していく諸岡タイプと考え、宇土城遺跡群は前期末に始まり、その後子孫も継続して居住する土生タイプと考えた（片岡 2006）。これは三国丘陵の遺跡群と同様の動きかと思われる。

## B. 佐賀平野における日韓交流の様相（土生遺跡）

佐賀平野では、佐賀県土生遺跡をはじめ、近年では吉野ヶ里遺跡でも一定量の無文土器が出土するようになった。土生遺跡群は牛津川や嘉瀬川水系が形成した扇状地、沖積平野に立地している。土生遺跡群は、土生 A・B・C 遺跡、仁俣遺跡、久蘇遺跡からなり、無文土器系土器や初期鋳型を出土する共通性を持っており、一連の遺跡群と評価されている。

[時期と量、画期]

前期末～中期の佐賀平野西部の拠点集落である土生遺跡群で無文土器系土器甕・壺・高杯・蓋・鉢など各器種が多数確認されている（P6 第 4 図）。資料を実見した結果、吉野ヶ里遺跡や鍋島本村南遺跡でも円形粘土帯土器甕の出土が確認できた。これらの 3 遺跡は地域の核となる遺跡で、円形粘土帯土器段階から「変容無文土器／変容弥生土器」への変化



第 163 図 土生遺跡で確認できる土器

が追え、さらに周辺集落へ「変容無文土器／変容弥生土器」が広がる。土生遺跡群では前期末段階に円形粘土帯土器が出現し、無文土器の変容が進むことが明らかにされている(片岡 1993)。

〔集落における渡来人と在来人の関係〕(第 162 図)

土生遺跡群では無文土器系土器の出土地点が偏らず、当時の集落域の各地で出土する。出土遺構には、平面形が楕円形に近い不整形堅穴あり、報告書でも住居跡とされた。第 162 図に示した通り、集落全体に無文土器の出土が広がっているようにも見えるが、その中でも集中する地区が存在する可能性も十分考えられる。土生遺跡群はトレンチ調査が多く、遺跡の広がりにはわかってきたが、集落構造など課題も多い。土生遺跡群でも青銅器鋳型が出土しており、無文土器系集団と青銅器生産の関係が古くから指摘されている。

鍋島本村南遺跡では、集落の中心部は北側の台地にあり、その南側に位置する湿地、あるいは台地の先端部分に無文土器系土器が出土する不整形土坑群がみられ、ここに渡来人の居住が想定されている(片岡 1999)。

吉野ケ里遺跡では、遺跡南部の前期環濠やその周辺での出土が多いという(佐賀県 2015)。遺跡南部では中期にも集落遺構が確認でき、前期末から中期初頭の土器と共伴する無文土器系土器や中期初頭から前半の堅穴住居から出土した環状青銅製品がある。中期初頭から前半には青銅器鋳造関連の遺物がみられ、特に、田手二本黒木地区Ⅲ区 SK0404 土坑では青銅器鋳型・青銅片・錫塊・鋳滓・炉壁と考えられる焼土片、2 次焼成を受けた土器片が出土したほか、埋土に多量の焼土塊や灰層が確認されたことから注目された。なお、前期環濠田手二本黒木地区Ⅱ区 SD0001 から埴塙とみられる土製品や轆羽口が出土して、青銅器鋳造が前期にさかのぼる可能性もある。この時期の中心は丘陵南部にあり、一見、中心に近い部分で無文土器系土器が出土するようにみえるが、詳細な検討が必要である。

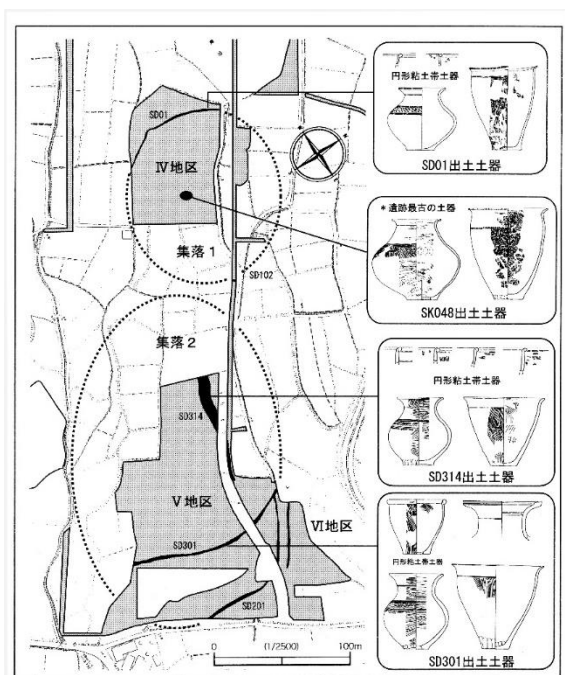
〔土器の変容の方向性〕(第 163 図)

片岡による土生Ⅰ～Ⅲ式の整理がある(片岡 1993)。城ノ越式～須玖式にかけて、弥生土器の全体のプロポーシオンも胴部上半が内傾する器形が有明海地域に特徴的にみられる(P6 第 4 図 19・20)。これは、無文土器との接触・交流によって、在地の土器様式にも影響を与えたと思われる。一方で、無文土器の影響を受けて変容した弥生土器もみられる。

それでは、どのようなルート、契機で熊本平野や佐賀平野に無文土器系土器を持つ渡来系集団が出現するのだろうか。片岡は北部九州の諸岡遺跡や三国丘陵遺跡群にいた無文土器を作る技術を持った渡来集団の一派が熊本まで一気に南下して定着したと考えている(片岡 2006)。しかし、北部九州の無文土器出土遺跡と熊本平野の間に無文土器を出土する拠点は今のところ発見されていない。筑後川流域に下林西田遺跡や久保遺跡などがあるが、熊本平野と直接結びつけることは時期的にも量的にも難しい部分が残る。筆者は長崎県北松浦半島経由のルートで熊本平野に直接的に渡来したと考えている(P165 第 111 図)。それは、玄界灘沿岸を東へ行くルートの様相(変容した土器、擬無文土器が伴う→渡来系集団の二次的な集団の動き)とも異なり、早い段階での黒色磨研長頸壺を持ち、それが有明海一帯へ広がりを見せる特有の土器文化も持っている。有明海では、長期にわたる土器の変容が確認でき、青銅器生産が行われることが特徴である。

## 5. 響灘沿岸から日本海沿岸における日韓交流の様相

豊前から長門では、無文土器そのものはほとんどなく、「擬無文土器」が主体である。円



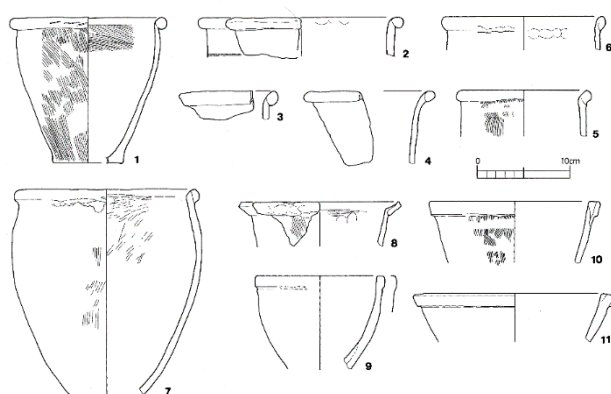
第 164 図 吉永遺跡の集落構造と無文土器系土器 (小南 2008)

形粘土帯土器とされるのは山口県綾羅木郷遺跡出土の鉢のみである。しかし、これも底部を欠く資料で、無文土器の影響を受けた変容弥生土器の可能性も残す。これらの無文土器系土器の器種は甕・鉢に限定されることから、無文土器系土器甕・鉢と在来系壺の組み合わせが想定できる。この地域では、文様を持つ壺（綾羅木式土器）には強い規制（長門西部の山形重弧文等）が存在したことが推測されるので、文様が少なく、機能的側面が強い甕・鉢を中心に「変容無文土器／変容弥生土器」が作られたと想定された（田畑 2018）。既に変容した無文土器や無文土器の影響を受けて変容した弥生土器段階から認められることから、北部九州で一旦定着した渡来系集団の新たな動きとして東方への広がりも考えられる。

山陰では、「擬無文土器」段階のことが多い。全体のプロポーシオンは弥生土器的なものが多く、また無文土器底部の出土もない。破片資料のみでは断定できないが、おそらく無文土器の影響を受けて変容した弥生土器が多いものと思われる。

[時期と量、画期、土器の変容の方向性] (第 165・166・167 図)

長門地域で、円形粘土帯土器段階の資料が比較的まとまって出土しているのは響灘沿岸の綾羅木郷遺跡や吉永遺跡である。綾羅木郷遺跡で 7 点、吉永遺跡で 31 点確認されている。両遺跡では前期後半から変容無文土器／変容弥生土器が出土し、前期末まで継続してみられる。周防地域の遺跡では中期初頭の変容無文土器／変容弥生土器が確認されている。山陰では、包含層・河道資料が多く時期を絞り込めないが、変容無文土器初期のものが出土している島根県里方本郷遺跡、矢野遺跡、西川津遺跡では前期後半以降に出現している



第 165 図 吉永遺跡の変容弥生土器ほか (片岡 2008)

- |          |                  |
|----------|------------------|
| • 弥生土器   | • 無文土器           |
| • 変容弥生土器 | • 変容無文土器(第 1 段階) |
|          | • 変容無文土器(第 2 段階) |

第 166 図 吉永遺跡で確認できる土器

(実線(枠)は存在、点線(枠)はわずかに認められる)

#### 【矢野遺跡の無文土器系土器】

- |          |                  |
|----------|------------------|
| • 弥生土器   | • 無文土器           |
| • 変容弥生土器 | • 変容無文土器(第 1 段階) |
|          | • 変容無文土器(第 2 段階) |

第 167 図 矢野遺跡で確認できる土器

(実線(枠)は存在、点線(枠)はわずかに認められる)



での交流過程がより鮮明になっていくと思われるが、現段階での類型化を行う(第15表)。

土器からみた交流の深度は時間軸(短期／長期)と中心・偏在性(拠点・移動・分散)への言及が可能で、集落構造からは居住形態(共住の有無)や渡来人と在来人の関わり方(集落における偏在性と中心性)について検討できる。

福岡平野の諸岡遺跡は板付遺跡の周縁部にあたり、中心部から距離を置いた地区で、渡来人特有の住居が確認されるも、変容した土器は出土せず無文土器のみが出土する。渡来人は弥生人と近接して交流するが同化はしないので、**短期居住・往来型(偏在)**とした。

二日市地狭帯南部の三国丘陵は、弥生時代前期中頃から後半にかけては、無文土器の出土する地域は限定され、周辺集落でその影響を受けた変容無文土器、変容弥生土器がわずかに出現する。無文土器が集中する集落では、中心部でも無文土器が出土するが、渡来人の住居はわからないので**短期滞在・往来型(偏在)**とした。前期末段階には、限定された集落内でも渡来人特有の住居が確認され、さらに在来集団と別の単位として居住をしはじめる。ただし、渡来人特有の墓はなく、**居住・往来型(偏在)**へと変化する。中期初頭以後は、無文土器が集中出土する集落が解体し隣接集団に吸収されて、それらから変容弥生土器が少量出土する。渡来第2～3世代が在来集団に馴化することが窺え、**居住・往来型(分散)**とした。つまりは、三国丘陵では前期後半までの**短期滞在・往来型(偏在)**、前期末に渡来人の移住が進められて**居住・往来型(偏在)**となり、中期初頭以後は移住した集落の解体により隣接集団へ移動して**居住・往来型(分散)**に変化する。トータルとしては、三国丘陵は**長期居住・往来型**になるだろう。

佐賀平野の土生遺跡では、少量の無文土器と多くの変容無文土器／変容弥生土器の両方が明確に確認できる。集落構造は不明な部分が多いが、広範に無文土器系土器や青銅器生産を示す鋳型の分布がみられる。渡来系集団がこの地に長期間にわたり居住し、集落の中心部にも入り込んで同化する過程を表している可能性があり、**長期居住・交流拠点型(広範・継続)**とした。佐賀平野では、渡来系の墓と習俗も確認されている。

一方で、熊本平野の八ノ坪遺跡では、無文土器と変容無文土器が多く出土し、変容弥生土器もみられる。土生遺跡とは異なり、無文土器や青銅器生産関連遺物が出土する地区は限られており、無文土器と弥生土器の変容がそれほど進まない。**長期居住・交流拠点型(偏在・移動)**とした。八ノ坪遺跡ではトレンチ調査が多く、渡来人の住居は見つかっていないが、渡来系の墓と習俗が確認されている。

環有明海の**長期居住・交流拠点型**(土生遺跡や八ノ坪遺跡)では土器の変容が弥生土器、無文土器ともに進む。このことは、渡来系集団と在来集団が長期にわたり交流して、集団が同化していることを示すが、このモデルと青銅器生産の開始との関係が窺われる。集落の拠点性を長期維持する土生遺跡ではさらに変容が進み、変容無文土器と変容弥生土器の区別が難しくなる。

壱岐島の原の辻遺跡は土生遺跡と同様、長期にわたり交流が進められる。土生遺跡との違いは多くの無文土器が出土すること、三角形粘土帯土器も多く出土して、その変容無文土器と変容弥生土器が確認できること、そして偏在性である。中期前半には、船着き場が造成されるが、その周辺にこれらの無文土器が多く出土する。弥生時代前半期の青銅器生産については、明らかになっていないが、鋳造鉄器(片)の出土、墓域からは青銅製武器・多鈕細文鏡片の出土がみられる。**長期交流拠点型**でも、その性格から**長期(居住)交流拠**



第 15 表 各地における土器の変容の方向性と日韓交流(円形粘土帯土器段階)

類型	遺跡名(時期)	土器の交流深度			渡来系 住居	渡来系 墓制	渡来系遺物	青銅器生産	備考
短期居住・往來型 (偏在)	諸岡遺跡 (弥生時代前期末)	無文土器 (円形粘土帯土器)	変容無文土器 (第1段階)	変容無文土器 (第2段階)	○	—	○	—	
		◎(多い)	—	—			・天河石製勾玉		
		弥生土器	変容弥生土器						
		◎	—						
短期滞在・往來型 (偏在) +周辺影響型	三国丘陵① (弥生時代前期中頃 ～後半)	無文土器 (円形粘土帯土器)	変容無文土器 (第1段階)	変容無文土器 (第2段階)	—	—	○	—	※周辺でのみ、少量 の変容品が出土
		○	△※	—			・銅斧片		
		弥生土器	変容弥生土器						
		◎	△※						
居住・往來型 (偏在) +周辺影響型	三国丘陵② (弥生時代前期末)	無文土器 (円形粘土帯土器)	変容無文土器 (第1段階)	変容無文土器 (第2段階)	○	—	○	—	※周辺では変容品が 出土
		◎	・	—			・把頭飾		
		弥生土器	変容弥生土器						
		◎	△※						
居住・往來型 (分散)	三国丘陵③ (弥生時代中期中頃 ～中期前半)	無文土器 (円形粘土帯土器)	変容無文土器 (第1段階)	変容無文土器 (第2段階)	○	—	○	—	無文土器集中出土遺 跡衰退 * 三国丘陵全体では 「長期居住・ 往來型」
		—	—	—			・天河石製勾玉		
		弥生土器	変容弥生土器				・鑄造鉄斧片		
		◎	○				・青銅製ヤリガンナ		
長期(居住) 交流拠点型 (往來・港湾)	原の辻遺跡 (弥生時代前期後半 ～古墳時代)	無文土器 (円形・三角形)	変容無文土器 (第1段階)	変容無文土器 (第2段階)	○? 現在のところ、確実な ものは見つからない。	○	◎	—	船着き場あり(中期前 半) * 渡来系遺物・青銅 器生産は円形粘土帯 土器時期を対象
		◎	○	○			・鑄造鉄斧(片)		
		弥生土器	変容弥生土器				・青銅製武器		
		◎	○				・多鈕細文鏡		
長期居住・ 交流拠点型 (広範・継続)	土生遺跡 (弥生時代前期末 ～中期後半)	無文土器 (円形粘土帯土器)	変容無文土器 (第1段階)	変容無文土器 (第2段階)	○	? 佐賀平野では渡来系墓 制が少なからず確認さ れている。	○	○	
		○	◎	○			・タビ	・青銅器鑄型	
		弥生土器	変容弥生土器						
		◎	○						
長期(居住) 交流拠点型 (偏在・移動)	八ノ坪遺跡 (弥生時代前期後半 ～中期前半)	無文土器 (円形粘土帯土器)	変容無文土器 (第1段階)	変容無文土器 (第2段階)	? 可能性はあるが、ト レンチ調査が多く不 明。	○	○	○	
		○	○	△				・青銅器鑄型	
		弥生土器	変容弥生土器					・迷風管	
		◎	○					・銅滓	
東方波及型 (地域開発拠点)	吉永遺跡 (弥生時代前期中頃 ～前期末)	無文土器 (円形粘土帯土器)	変容無文土器 (第1段階)	変容無文土器 (第2段階)	— 弥生住居も詳細不 明。	—	○	—	同様に無文土器系土 器がまとまって出土 する綾羅木郷遺跡で は中期前半の鑄造鉄 器片あり。
		・	○	○			・磨製石鏃		
		弥生土器	変容弥生土器						
		◎	○						
東方波及型 (地域開発拠点)	矢野遺跡 (弥生時代前期中頃 ～前期末)	無文土器 (円形粘土帯土器)	変容無文土器 (第1段階)	変容無文土器 (第2段階)	— 弥生住居も詳細不 明。	—	—	—	
		—	△	○					
		弥生土器	変容弥生土器						
		◎	○						

点型でも、その性格から長期(居住)交流拠点型(往來・港湾)とした。

響灘沿岸の吉永遺跡や綾羅木郷遺跡、出雲平野の矢野遺跡では、無文土器そのものがわずかで、渡来系集団は変容した無文土器や弥生土器を地域の拠点となる遺跡に持ち込んでいる。そのことから、東方波及型(地域開発拠点)として、地域の開発拠点となる集落に迎えられ、渡来文化を持ち込んで開発に一定の役割を果たした(小南 2008、田畑 2018)。

今後、集落研究の深化によって、土器からみた日韓交流、渡来人の動きがさらに明らかになっていくものと思われる。

## 第2節 日韓の環濠と社会～交流拠点と拠点環濠集落へ～

### 1. はじめに

九州での弥生時代環濠の調査例は福岡県比恵遺跡を嚆矢とする（鏡山 1941）。その後、1951 年に福岡県板付遺跡（森・岡崎 1960）、1975 年に佐賀県千塔山遺跡（基山町 1978）など弥生社会を論じる上で欠くことの出来ない遺跡の調査が進められた。これらの学史的な重要性は今も変わることはない。本論ではそれらを鑑みながら、地域の歴史的特性のなかで、環濠はどのように出現し消長するのか、その動態のなかでどのような意味を持つのかを検討し、「環濠」という遺跡・遺構の本質に迫りたい。

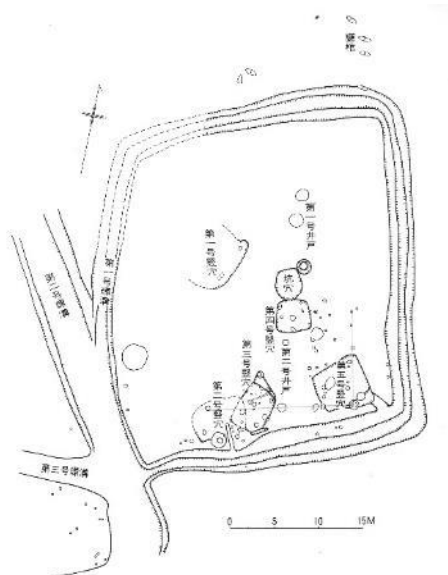
### 2. 九州島の環濠から描かれた弥生社会像と問題提起

#### （1）用語の整理

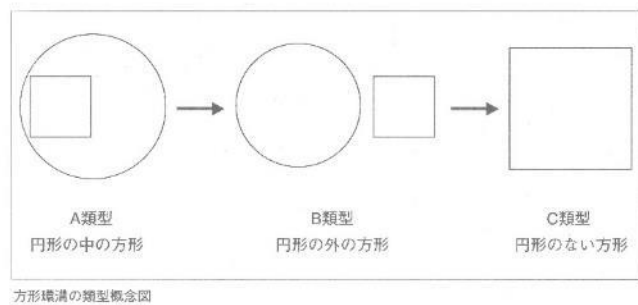
まず、「環濠（壕）」と「環溝」の使い分けが他地域よりみられるのが、九州の環濠論における特徴である。

それには、鏡山猛氏の「環溝住居址小論」への学史的な依拠が大きい（鏡山 1956）。福岡県比恵遺跡において、弥生時代中期後半に住居・井戸・倉庫・カマド等を共にする生活遺跡が大小 5 つの方形環溝で囲まれ同時に存在したとする論は、九州における環濠（溝）集落研究の原点となっている（第 169 図）（鏡山 1941）。近年の調査・再検討から、一部は弥生時代後期後半頃の周溝墓の可能性（5 号環濠）があり、首長居館と考えられる 1 号環溝の所属時期は後期初頭から前半かと修正されている（久住 2000）。

このように、九州の環濠集落研究の嚆矢が「環溝住居址小論」であること、「濠」は防御的な語義や城塞などの大規模な濠を連想させ、それを避けるために「環溝」と表現する傾向が九州では他の地域に比べて強い。また、集落を区画する地形分断の溝など、直線に



第 169 図比恵遺跡環溝 [鏡山 1956]



第 170 図 円形環濠から方形環濠への変遷概念図 [武末 2002]

近い溝を「条溝」と区別する（武末1998）。

本論では、他地域と統一して「環濠」という語を用い、必要に応じ、「環溝」と「条溝」に区別する。

## （２）九州島における環濠研究抄史

第２次世界大戦後、1951年から始まった福岡県板付遺跡の調査は弥生時代前期初頭の環濠と弦状溝が発見された。環濠は防御のためと考えられたが、板付遺跡では削平のために環濠内に住居跡は発見されなかった（森・岡崎1960）。

1975～1976年には佐賀県千塔山遺跡で弥生時代後期後半から古墳時代初頭の環溝がほぼ全面調査された。環濠内外の遺構、集落全体の様相が初めて明らかにされた大規模発掘調査である（基山町 1978）。その後、大規模開発によって、環濠の全貌が明らかとなった遺跡には、吉野ヶ里遺跡をはじめ、大分県小迫辻原遺跡、福岡県三国の鼻遺跡、福岡県平塚川添遺跡などがみられ、環濠内外の集落構造を検討できるようになった。

そういったなかで、武末純一は（Ａ）円形の中の方形，（Ｂ）円形の外の方形，（Ｃ）円形のない方形へと展開するといった、集落構造と集落構成員の変化の見通しを述べた（第170図）（武末1989・1998・2002）。

環濠集落は弥生時代中期以降に全国的に巨大化し、九州では巨大環濠集落の吉野ヶ里遺跡や原の辻遺跡、平塚川添遺跡などと環濠を持たない比恵・那珂遺跡群など、拠点集落論や「倭人伝の国々」とも大きく関係する事象である。

環濠の主な機能として防御的な側面が強調されてきたが、環濠に伴う土塁を環濠外部に設ける例がほとんどであることから、防御的側面を再検討する論考（武末1990）や、環濠は集落構成員の結束を維持するためのものとする考えなどもある（吉留1994）。また、弥生時代前期に非居住型の貯蔵穴専用の環濠が北部九州から瀬戸内にかけて多数存在することから、特に水稻耕作開始期の小規模な環濠集落のあり方自体を問い直す意見（片岡2003）もある。福岡県横隈北田遺跡、葛川遺跡や光岡長尾遺跡などの貯蔵穴のみを囲む環濠の存在が次第に位置づけられるようになり、山崎純男は福岡県板付遺跡では環濠の弦状弧部分に貯蔵穴が営まれることから、それが独立して貯蔵穴を囲む環濠へと発展したと考え（山崎純男1990）、また、禰宜田佳男はそうした環濠を「貯蔵穴専用環濠」と分類した（禰宜田1990）。

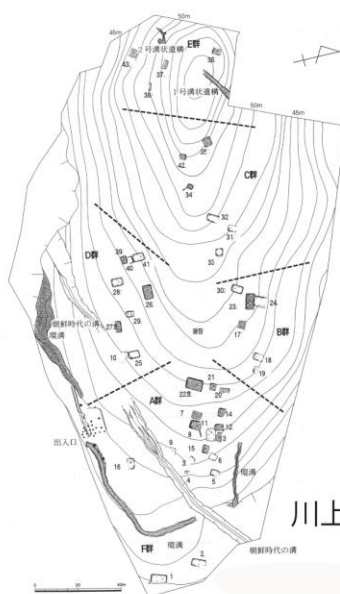
## ３．韓半島南部の環濠

壱岐・対馬や玄界灘沿岸地域は古くから朝鮮半島・中国大陸との交流の門戸として重要な位置を占める。この地域には佐賀県菜畑遺跡、福岡県曲り田遺跡、板付遺跡、江辻遺跡など、いち早く水田稲作農耕文化を受容した遺跡が点在している。

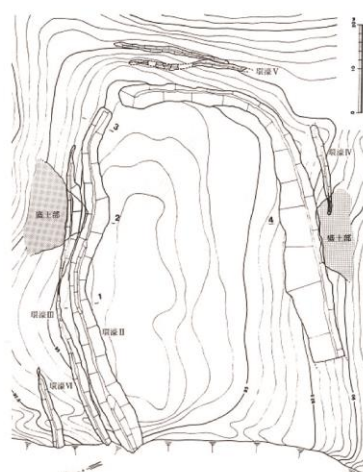
九州の環濠の成立を考える上で、大陸・朝鮮半島の動向は看過できない。環濠集落は中国大陸を起源とし、朝鮮半島を経由して稲作とともに伝わったと考えられてきたが、それがようやく実証されたのは1990年である。韓国慶尚南道蔚山検丹里遺跡で、丘陵上にV字溝を楕円形に巡らせた集落が確認された（第171図）（釜山大1995）。環濠の内外に堅穴住居、環濠外には支石墓が分布する。実質的な韓国における環濠集落研究の出発点はこの検丹里遺跡にあり、その後、現在までに調査された環濠の件数は原三国時代の環濠（5例）も含めると34遺跡に増加した（裴徳煥2012）。



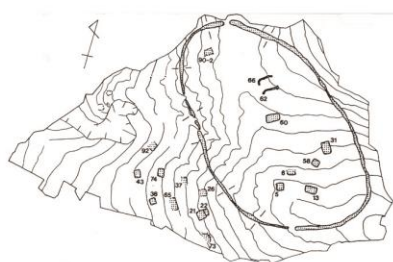
水系	遺跡
錦江流域	①清原 大栗里
南江流域	②山清 玉山里 ③山清 沙月里
	④晋州 大坪里 ⑤晋州 草田洞
	⑥晋州 耳谷里
洛東江流域	⑦馬山 網谷里 ⑧昌原 南山
太和江流域	⑨蔚山 検丹里 ⑩蔚山 芳基里
兄山江流域	⑪蔚山 蓮岩洞 ⑫蔚山 川上里
東川江流域	⑬慶州 甲山里
	⑭大邱 東川洞



川上里遺跡



南山里遺跡



検丹里遺跡

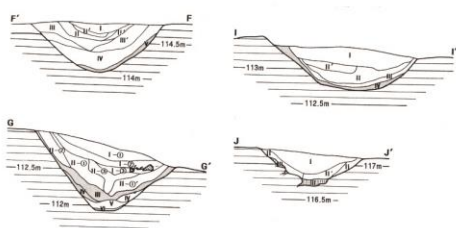


그림 5-1. 망곡리 유적 I 단계(표준층위 10층~9층 단계)

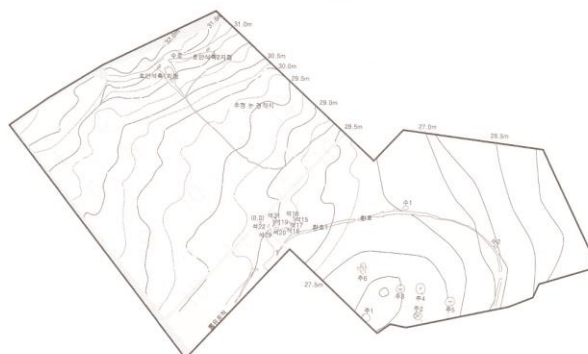


그림 5-2. 망곡리 유적 II 단계(표준층위 9층~7층 단계)



網谷里遺跡

그림 5-3. 망곡리 유적 III 단계(표준층위 7층 단계)



第 171 図 韓国の環濠集落（平面スケール≒1/2000）

を除けば、分布は慶尚道地域に偏り、さらに松菊里型土器・松菊里型住居で特徴づけられる松菊里文化圏（主に南江・洛東江流域の氾濫原中微高地）と検丹里式土器・蔚山式住居で特徴づけられる蔚山文化圏（東南海岸地域（太和江・東川江流域）の丘陵部）に大別される。蔚山地域では拠点性を持つ環濠集落とその可視圏内にある集落の複合体がひとつの大きな集落群と推定され、環濠集落の立地は、①眺望のきく突出した独立丘陵の傾斜面に位置する ②環濠の内部空間の中央が最もレベルが高い ③環濠は交通の要衝に位置し河川に近い ④環濠内部に住居址がないか、あっても少ないという特徴がある（李秀鴻 2009）。蔚山地域には、これまで確認された検丹里遺跡、川上里遺跡、蓮岩洞遺跡、明山里遺跡、新峴洞遺跡以外にも新華里遺跡、泉谷洞遺跡一帯に環濠が発見される可能性が高い（李秀鴻 2009）。環濠遺跡間の距離はおよそ 8～10 km 程度、拠点集落間の空間的距離は直径 3 km 内外と推定される（金鍾一 2005）。

無文土器時代前期には丘陵上に小規模な環濠がつくられ、中期前半になると平地と丘陵上立地の 2 者があり、平地には南江流域のように大規模な環濠集落が発達する。中期後半になると高地と丘陵でみられ、後期には高地に小規模な環濠、もしくは付属施設としての溝が採用される。原三国時代には高位丘陵や平地に大規模な環濠が造成される。平地の環濠は方形を呈し、丘陵・高地の環濠集落は地形に沿う形で楕円形や不定形となる。丘陵立地の代表的なものでは、検丹里遺跡の環濠が 119×70m の卵型の楕円形、芳基里遺跡の環濠は 140×90m 規模のいびつな長楕円、八達洞遺跡の環濠は集落を一周せず環濠の進行方向の等高線に沿って住居群を一行に配置している。

環濠の機能については、研究当初は防御機能に焦点が置かれたが、調査例が増えるに従い、境界・区画・排水・儀礼などの多様な機能論が展開される（李盛周 1998 李東柱 1999 李相吉 2000 裴徳煥 2000）。裴徳煥によれば、無文土器時代前期は区画・境界の意識が強いのに比べ、中期には区画・境界・防御・儀礼・排水など多様化し、後期の沿岸集落は防御、内陸集落は儀礼性が強く、原三国時代には防御に限定されるという（裴徳煥 2012）。

最終的に韓半島における環濠は、土城の築造によって衰退する。三国時代の土城のうち、高句麗では中国遼寧省下古城子城（BC37）が初現とみられ、百済では風納土城（AD 3 世紀中頃）、新羅では金城（AD37）、月城（AD101）など、『三国史記』によって築造時期が明らかである。

#### a. 蔚山川上里遺跡（第 171 図）（嶺南文化財研究院 2002）

川上里遺跡は標高 30～55m の低丘陵に立地する無文土器時代前期後半～中期初めの集落である。竪穴住居 43 軒と溝状遺構 2 条が調査され、前期後半のⅠ期と中期初めのⅡ期に分けられる。環濠はⅡ期に造られ、中央平坦部の広場を囲むように住居群 5 群が展開し、大形住居跡のある A 群が優越的位置を占める。環濠は等高線に沿い、傾斜が緩慢な部分のみ環濠があり、急峻な部分は切削している。平面規模は長径 246m、短径 116m、総延長推定 600m、溝幅は 2～3 m、深さ 0.5～0.8m、断面は U 字形である。掘削土の風化岩盤土が環濠外側から堆積しており、外側に土塁が想定される。出入口は環濠が 20m ほど途切れ、環濠内側の肩部分に径 20～30 cm、深さ 30 cm の木柵柱穴が 3.5～4 m 間隔で並ぶ。

#### b. 蔚山検丹里遺跡（第 171 図）（釜山大学校 1995）

集落が立地する丘陵は標高 110m～120m の緩い斜面で、周辺との比高は約 50m であ



る。無文土器前期末～中期前半（先松菊里式）に属する。頂上部を楕円形に取り巻く環濠とその内外に住居群がみられた。環濠集落の消長は3期に分かれ、第2期に環濠が掘削される。

第2期は環濠内、丘陵頂上部に7棟の竪穴住居、環濠の外部、南西側斜面に17棟の住居が分布する。環濠の中心に大形住居、南西傾斜面に5棟の住居群が配置される。環濠は長軸118m×短軸70mの楕円形を呈し、環濠の断面はV字形、残りの良いところで深さ1.1mである。北西側と南西側に出入口がある。土層断面では再掘削の痕跡は窺えず、概ね自然堆積を示す。環濠内側から掘削土の流入がみられ、内土壘と考えられる。

#### c. 昌原南山遺跡（第171図）（昌原大学校博物館 1997）

標高100m、比高90m程度の独立丘陵上の頂上部に形成された無文土器時代中期後半の環濠集落である。交通路の要衝に位置する。丘陵のへりを巡る環濠帯は内側の環濠のみが規模が大きく、頂上部を取り巻く。他はやや間隔を置いて部分的に併走する。環濠の平面形は楕円～隅丸長方形を呈し、長軸が100m程度、短軸が44mである。全ての環濠は断面V字形で、土層断面から複数回の掘り直しが確認できる。環濠内には同時期の住居はなく、1×1間の掘立柱建物のみである。環濠の外部にも特別な遺構はない。なお、原三国時代にも丘陵頂部を部分的に圍繞する溝が確認されている。

昌原南山遺跡の環濠や蔚山蓮岩洞遺跡の環濠のように、丘陵頂部を中心に巡る高地性環濠は環濠の規模に比べ、内部に位置する住居数が少ない、もしくはないので常住性集落ではなく、戦乱に備えた防御目的の臨時集落、または儀礼などの特殊目的で使用された施設とも想定される（宋満榮 2001、武末 2004）。

#### d. 馬山網谷里遺跡（第171図）（ウリ文化財研究院 2010 ほか）

無文土器時代中期の松菊里型段階の集落である。環濠以前の第1期、環濠が機能した第2期、環濠の南側部分を破壊して造成された墳墓段階の第3期に大別される。環濠は居住域を囲み、外側に石棺墓を主体とする墓域と掘立柱建物群がある。環濠の東側半分が調査され、その南側と北東側に陸橋部分が確認できる。環濠は長軸200m×短軸140mほどの楕円形に推定され、断面はV字形で最大幅2.6m、深さ80cmである。この網谷里遺跡では西部九州系の屈曲型二条突帯甕に類似した資料があり、筆者も武末純一氏と金海博物館で実見した。内傾接合や胎土・色調からみて網谷里集落の青銅器人が製作したと考えられている〔李亨源 2014〕。韓半島南部では無文土器時代中期前半、北部九州では弥生時代早期に併行する。稲作農耕文化、環濠の伝播を考える上で重要な遺跡である。

### 4. 九州島の代表的な環濠と集落

九州島の弥生時代を早期／前期／中期／後期／終末に便宜上区分して記載する。土器型式ではそれぞれ、夜臼式／板付式／城ノ越式・須玖式／高三瀦式・下大隈式／西新式、またはその併行期にほぼ対応する。

環濠には、大きく掘削時期／機能時期／埋没時期がある。これに再掘削が加わり、維持期間は複雑である。「環濠に伴う遺物」をしっかりと調査過程で認識しなければならない。

#### （1）弥生時代早期の環濠

近年まで、環濠集落の実例は弥生時代前期初めの板付遺跡環濠を遡るものがなかったが、福岡県那珂遺跡で刻目突帯文単純期の二重環濠が確認され、弥生時代早期（縄文時代晩期）

に稲作とともに環濠集落も出現していることが明らかになった（福岡市 1994）。また、福岡県江辻遺跡では微高地縁辺を区画すると思われる複数の小溝群がある。松菊里型住居を伴い、朝鮮半島との結びつきを示している。江辻遺跡の小溝群を環濠とするには議論があるが、那珂遺跡のような本格的な環濠が出現する以前に、集落や何らかの施設を囲む溝、初現的な区画溝（環濠）が出現している。また、この時期の確実な環濠は、玄界灘沿岸部に限られるとあってよいだろう。

その他に、縄文期の溝として、縄文時代後期後葉の福岡県千里シビナ遺跡の溝状遺構、アミダ遺跡の後期後葉の溝（集落の排水用か）、清末遺跡の黒川式（晚期中葉）の V 字溝、柏田遺跡の微高地先端を断ち切る大溝等が古くから知られている。

#### a. 福岡県江辻遺跡（第 172 図）（新宅 1996）

江辻遺跡は糟屋平野の篠栗川と久原川の合流地点付近、標高 10m の沖積微高地上に立地する。1992 年に調査が行われ、第 2 地点で竪穴住居 11 軒、掘立柱建物 7 軒、土坑 28 基等が検出された。松菊里型住居が外縁部に環状に配置され、その内側に掘立柱建物がみられ、中心部は広場となっている。これらの北側に微高地縁辺を巡る小溝群が多数検出されている。これらの溝が集落を囲むかどうかは調査範囲では明らかとなっていない。溝の規模は小さく、最大でも幅 1 m、深さ 0.7m の断面 U 字形である。溝には切り合いがあり、1 条から 2 条に推移するという。多くの遺構が夜臼単純期である。

#### b. 福岡県那珂遺跡（第 172 図）（福岡市 1994）

那珂遺跡は福岡平野の那珂川右岸、標高約 11m の洪積台地上に立地する。1992～93 年の調査で二重の環濠が明らかとなった。遺構は約 2 m の削平を受けていると考えられ、環濠内部の遺構の状況はよくわかっていない。環濠は平面が円形に復元され、外周で径約 150m と推定される。濠は約 5 m 幅で 2 条が並走する。外濠は断面 V 字形を呈し、幅約 5 m、深さ約 2 m、内濠は断面逆台形を呈し、幅約 2 m、深さ約 1 m である。外濠の中～下層からは弥生時代前期以前の遺物が少量出土した。内濠では下層に遺物が集中して出土し、内濠の土器類は夜臼Ⅱ b 式である。

### （2）弥生時代前期の環濠

前期には環濠の分布が広がりを見せる。前期前半（板付Ⅰ式）までに掘削される環濠は福岡県有田遺跡群、板付遺跡、上岩田遺跡、東郷登り立遺跡、今川遺跡、佐賀県吉野ヶ里遺跡（田手一本黒木地区）・小楠遺跡など、玄界灘沿岸から響灘、そして二日市地峡帯を抜けて有明海北岸までの地域に限られる。

前期中頃（板付Ⅱ a 式）以降、環濠の分布域が拡大し、中九州までの広がりを見せ、前期末（～中期初頭）頃には鹿児島県まで広がる可能性もある。熊本県八ノ坪遺跡（前期後半）、中道遺跡（前期後半）、新屋敷遺跡（前期後半）、宇土城三ノ丸遺跡（前期末）などで環濠の可能性のある V 字溝が検出されている。大分県では城原Ⅱ 遺跡（前期末～中期前半）、上ノ原平原遺跡（前期末～中期初頭）などがみられる。鹿児島県では前期末～中期初頭段階で鹿児島大学構内遺跡で検出された弧状に走る断面 U 字溝が、環濠となる可能性が指摘されている。

北部九州の福岡県葛川遺跡、大井三倉遺跡、光岡長尾遺跡、横隈北田遺跡、横隈山遺跡、彼坪遺跡、神手遺跡、大碓遺跡、佐賀県八ツ並金丸遺跡等の発掘成果からすれば、この時期の環濠内に同時期の住居が見られる例は非常に少なく、環濠をとりまく集落景観が

変化している。環濠内に貯蔵穴群のみが検出される事例が増加する。貯蔵穴専用環濠の存在は早くより指摘されており、前期後半～中期初頭の北部九州～瀬戸内東部地域においては小規模環濠が多い。貯蔵穴専用環濠こそが、一般的な環濠のあり方かもしれない。

**a. 福岡県板付遺跡（第172図）（森・岡崎1960、福岡市2010ほか）**

板付遺跡は御笠川と諸岡川に挟まれた標高約 11～12mの低台地上に立地する。1951 年以降、50 次を超える調査が重ねられ、特に 1988～89 年の史跡整備のための調査で環濠の全体像が明らかとなった。環濠は平面が倒卵形（南北 110m、東西 86m）で、台地中央の最高所を巡る。環濠は残りの良い部分で検出幅 4 m、深さ 1.8m程の V 字形である。土層堆積状況から濠の両側に土塁があったと考えられる。

環濠内部の西側には「弦状溝」と呼ばれる検出幅 3 m、深さ 2.3mの V 字溝で区画した部分がある。環濠ととの同時性が古くから議論されてきたが、弦状溝の形成は板付Ⅰ式で、土器型式上は環濠と同時期である。「弦状溝」は直線的に 56m走り、貯蔵穴（50 基）が密集する平面半月形の倉庫区画となり、南西部の環濠との間に幅 5 mの陸橋がある。陸橋部分はほぼ垂直に立ち上がる。削平を受けており、陸橋付近の門柱等の施設は確認されていない（福岡市 2010）。

環濠内には同時期の堅穴住居跡は確認されていない。貯蔵穴の残存状況から 0.5m～1.5m程度の削平が考えられること、環濠内に獣骨や貝殻がみられること、台地斜面には中・後期の住居は見られること、弦状溝の区画の意味合いからして、もともと区画内には住居があった可能性が高い。なお、環濠の外側に、南北 370m、東西約 170mの外濠の可能性を想定する考えもある（山崎 1990）。

**b. 福岡県備後守屋敷遺跡（第 172 図）（北九州市 2008）**

北九州市、紫川左岸の東へ延びる標高 12mの段丘上に立地する。小倉城南土塁の下で弥生集落を検出した。

2 号溝は長さ 67.5m、10 号溝は 14m分を確認した。環濠となる 2 号溝と 10 号溝の規模は少なく見積もっても 100×100m程度はある。2 号溝の断面は V 字形で、幅 1.9～2.5 m、深さ 1.4m、底の幅は 30～45 cmである。10 号溝は削平を大きく受けるが、最大幅 2.4m、深さ 1.2m、断面は逆台形で、底の幅が 55～70 cm。中・下層から遺物が多く出土し、10 号溝と 2 号溝の砥石片が接合している。環濠出土の土器は板付Ⅱ a 式段階で、埋土は自然堆積と報告される。

環濠内部には松菊里型住居（中央 2 主柱）4 軒がかろうじて残っていた。板付遺跡の環濠内部の住居の有無が議論されているが、本例は、残存は悪いが、集落を囲む環濠の調査例として重要である。

**c. 三国丘陵遺跡群（第 173 図）（山崎 2010 ほか）**

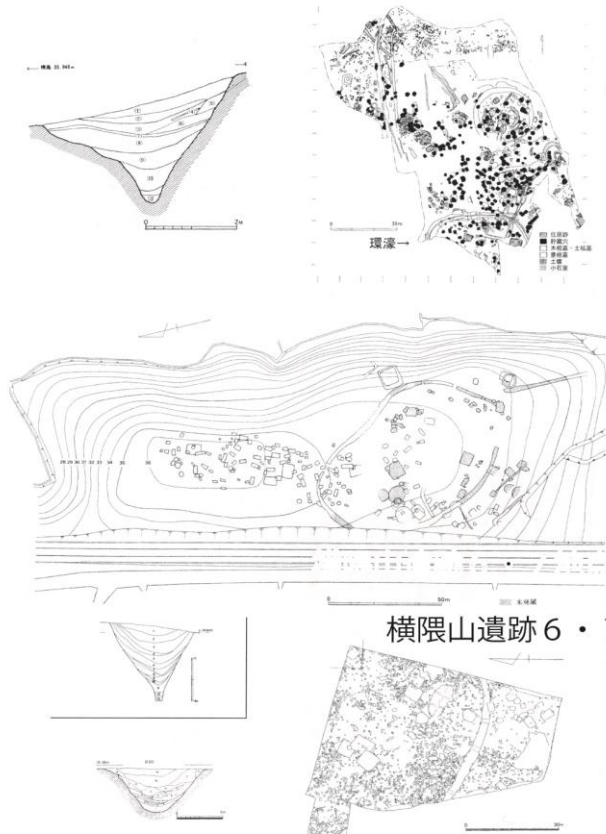
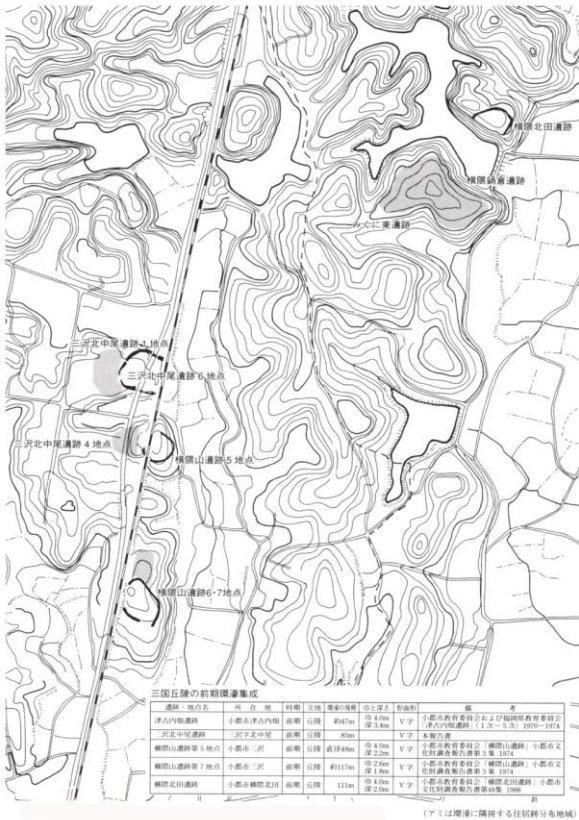
「三国丘陵」は旧国の三国境（筑前・筑後・肥前）の丘陵地帯を指す。標高 50mまでの低丘陵に前期～中期前半を中心とした弥生集落が多く立地する。大規模造成により集落全容がわかる調査例が多い。遺跡の概要は第 3 章第 2 節で示した通りである。

周辺では、中期の大溝が板井遺跡、後期の環濠が佐賀県千塔山遺跡や福岡県七板遺跡・宮ノ前遺跡・中原前遺跡、以来尺遺跡や三国の鼻遺跡、小郡遺跡など、古墳時代初頭の方形環濠が福童町遺跡でみられ、全時期を通して環濠の在り方を検討できる地域である。



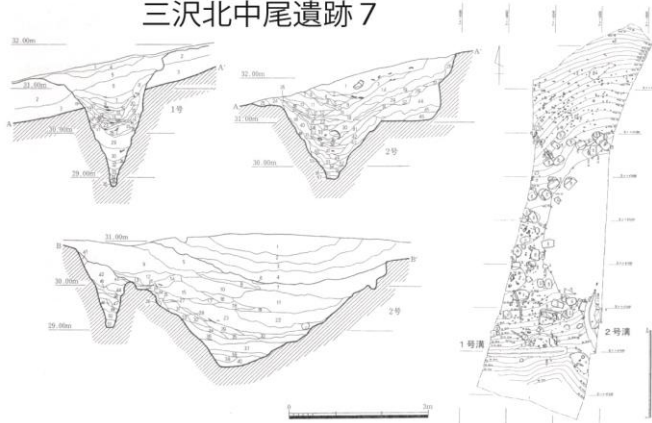


津古内畑遺跡



横隈山遺跡6・7

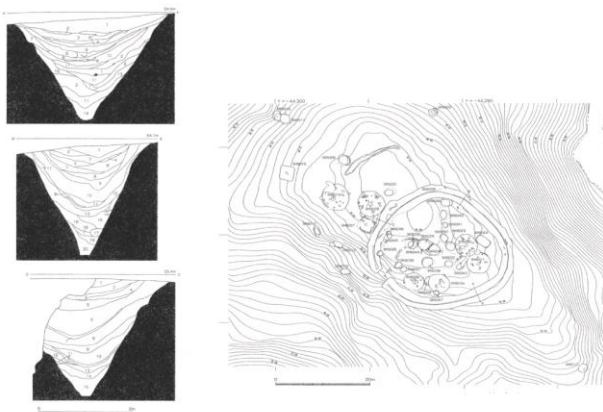
三沢北中尾遺跡7



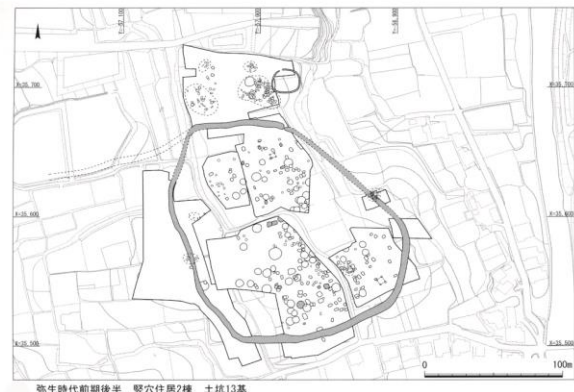
上岩田遺跡



横隈北田遺跡



ハツ並金丸遺跡



吉野ヶ里遺跡

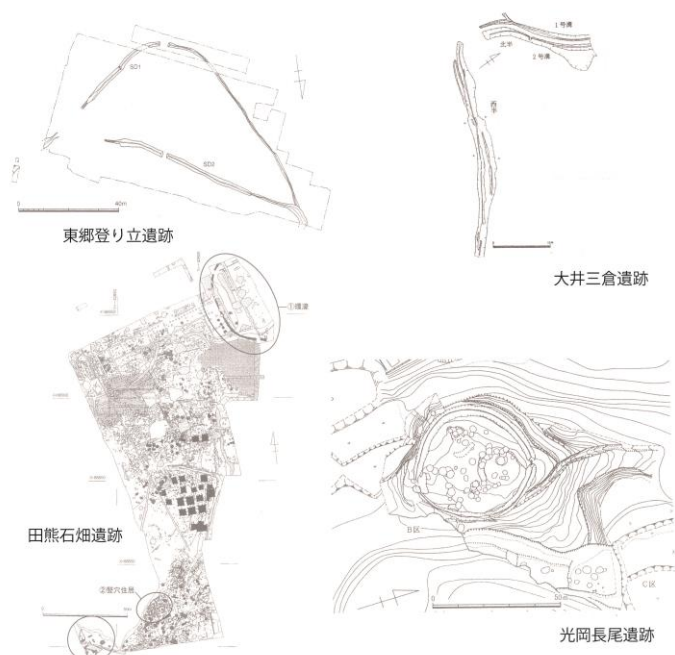
第 173 図 前期の環濠2(三国丘陵遺跡群 ハツ並金丸遺跡 吉野ヶ里遺跡)[山崎 2010]



#### d. 宗像地域（集落・貯蔵穴を囲繞）

（第 174 図）

宗像市を貫流する釣川流域では、東郷登り立遺跡、田熊石畑遺跡、大井三倉遺跡、光岡長尾遺跡、田久立崎遺跡などの前期（～中期初頭）の環濠がみられる（原・白木・秋成 2000、川口 2010）。環濠を持つ集落は、釣川を望む標高 10m 程度の台地や標高 20～30 m の丘陵上に立地する。釣川では、舌状に伸びる丘陵地形が発達しており、左岸域ではそれぞれに環濠持つ集落があるようだ。周辺では福津市今川遺跡も含めて、前期環濠が多くみられる地域である。



第 174 図 前期の環濠3(宗像地域)[川口 2010]

宗像地域の環濠集落の変遷は、板付Ⅰ式の今川遺跡の集落形成当初に東郷

登り立遺跡の環濠集落形成が始まる。この拠点集落を軸に今川遺跡や大井三倉遺跡の環溝集落が形成された（原・白木・秋成 2000）。光岡長尾遺跡の環濠は上記の 3 遺跡からは時期が下り、環溝内に住居がなく、貯蔵穴型の環濠である。

東郷登り立遺跡は東郷高塚前方後円墳と同一丘陵にあり、標高 10m 前後、環濠は宗像高校内の調査で発見された。地形の改変が著しく、溝と土坑のみ検出された。

SD1(溝)は調査区南側で弧状に検出され、南北110m以上、東西60m以上の規模を有す。西側ではSD2と交差する地点で溝は消えるが、東側では凹地で一旦消滅した後、さらに北側にのびる。最南端に幅3.3mの陸橋がある。溝は最大幅2.1m、深さ1m、断面はV字形である。陸橋から東側延長部20mの地点に、溝底から0.6mの高さで地山を掘り残した中仕切り壁がある。陸橋部が環溝掘削以前の自然丘陵の稜線にあたり、溝底の標高は陸橋部が最も高く、東西方向へ傾斜していく。溝の埋土は3層にわかれ、全て自然堆積とされる。溝内の出土遺物は少ない。SD2(溝)は調査区内では東西方向の直線的な弦状溝で80mあり、東側では凹地で消滅し、SD1とは重ならない。西側はSD1と重なった後、北側へ向きを変えて調査区外へ延びる。SD1と重なる部分では、溝底の標高はSD2がSD1より0.5m深く、土層観察からSD2がSD1を切っている。溝は断面V字で、最大幅3.2m、深さ1.3mで、中央部には幅2mの陸橋がある。溝底の標高は陸橋部が最も高い。溝出土土器は上層に中期の土器が混じるが、中・下層は前期の土器で占められている。平面規格は板付遺跡に類似する。

東郷登り立遺跡の西の段丘には田熊石畑遺跡がある。東西150m、南北300m、標高12m程度で、釣川支流の松本川が段丘の西側に沿って流れる。残存直径54m、南北2か所の陸橋を持つ環濠である。溝底より板付Ⅱb式土器、埋土中から城ノ越式土器が出土した。環濠内部は後世の攪乱により貯蔵穴1基のみの確認。環濠内外に円弧に沿う形で6基の方形土坑があり、前期の小壺が出土している。

大井三倉遺跡は釣川中流の左岸丘陵上、標高22mの丘陵頂部に弥生時代前期の溝、下位

の段丘に中期の袋状堅穴および円形住居跡が検出された。前期の溝は、調査区内で2本認められ、土層観察から2号溝の埋没後、1号溝を深く掘り直す。2号溝は幅10.6mの西側陸橋部を挟んで平面L字形に掘られ、北側で長さ29m、最大幅1.6m、南側で長さ37m、最大幅2m分が調査された。2号溝は北側では1号溝との切合いはないが、南側は大半が1号溝に切られる。1号溝は幅5.8mの陸橋部を挟んで平面L字形を呈す。1・2号溝とも断面はV字形で溝底は幅10cm前後、最大の深さは1.9mである。堆積土層は下層が砂礫を含み、中層は固い粘質土、上層は炭化物を含む。出土遺物は上層に集中し、溝埋土からは板付Ⅱa～Ⅱb式の甕などが出土する。溝は全掘していないが、地形から判断して東西80m、南北60mほどの環濠に復元できよう。溝の内側では遺構が検出されず、深い袋状堅穴も認められないから、本来、住居跡が存在したものと考えられている。

光岡長尾遺跡は標高30mの丘陵上に住居跡4軒、貯蔵穴89基、環濠1条が調査された。最高所にあるB区は、環濠内部の貯蔵穴52基、環溝外の貯蔵穴1基が弥生時代前期に属す。環濠平面形は正円に近く、東西42m、南北46mとなる。溝は最大幅4.8m、深さ3m、断面はV字形で外側の傾斜角がきつい。環溝の南北2ヶ所には陸橋が設けられ、出入口となる。溝底は陸橋部が最も高く、東西に向かって緩く傾斜する。南陸橋は幅1.4m、北陸橋は1.5m、中央に上端の幅0.5m、深さ0.7m、床幅0.15mの小溝がある。陸橋周辺には柵列等の施設は認められない。溝は自然堆積で、土層の流れ込み状況から掘り上げた土を外側に積み上げて堤としていた。板付Ⅱb式から城ノ越式の土器が出土する。住居跡の有無及び貯蔵穴の密な分布から、環溝は貯蔵穴のみを囲むと考えられている。

以上から、弥生時代の宗像地域は前期初めの環溝集落形成と前期後半以降の貯蔵施設の集中管理のはじまりに集落構造の画期を求めることが出来る。

### （3）弥生時代中期の環濠

前期後半以降、環濠数は飛躍的に増えるが、実は中期段階の環濠は北部九州では意外に少ない。前期末に掘削された環濠も中期初頭もしくは中期前半段階までにほとんどが埋没しており、新たに環濠が掘削されない時期と言える。中期前半段階での掘削環濠の少なさは地域の集落動向と大きく関係するものと思われ、後述することにする。北部九州では一部を除いて、中期初頭以降に環濠掘削行為が停滞するが、中九州・南九州では新たな環濠が掘削されている。これらは、地域社会の発展過程に関わりがあるので、地域における弥生集落変遷を併せて考える必要があるだろう。

中期初頭～前半の時期に新たに掘削された環濠は、管見によれば、佐賀県吉野ヶ里遺跡田一本松地区、京町遺跡（中期中葉）、平原遺跡（中期初頭～前半か）熊本県護国寺遺跡（中期前半～後半）、大分県東上田遺跡（中期前半～中葉）、大分県福島遺跡東入垣地区（中期前半から中葉）、宮崎県持田中尾遺跡（中期初頭～前半）、宮崎県鑑遺跡（中期初頭）、宮崎県石ノ迫第2遺跡（中期前半～中葉）、宮崎県下郷遺跡（中期前半～中葉）鹿児島県入来遺跡（中期初頭）、寺山遺跡（中期前半）などがある。

中期前半の段階までに、鹿児島県入来遺跡など薩摩半島西部の田布施平野まで環濠の南下が確認できる。中期前半代には同地域の寺山遺跡で台地上に立地する二重環濠が確認されている。田布施平野の遺跡では、北部九州系の土器や肥後系土器が出土しており、交流拠点的な集落であり、弥生文化の情報とともに環濠も伝播した一のだろう。また、宮崎県下郷遺跡も前期後葉～中期前葉に掘削された台地上の環濠である。いずれも、断面V字

形である。

中期末以降は、再び北部九州でも環濠が確認できる。特に春日丘陵の須玖遺跡群では、各独立丘陵を圍繞する環濠ではなく、春日丘陵全体を区画、または分節するような丘陵間や谷部分を横断する大溝が検出されている。将来的にはかなりの面積を囲むような条溝や環濠となる可能性も示唆されている（井上 2009）。

**a. 佐賀県吉野ヶ里遺跡田一本松地区（第 176 図）（佐賀県 2003 ほか）**

吉野ヶ里遺跡では早期～前期初頭段階、前期前半～後半段階にも環濠がみられるが、中期段階にも大規模な環濠が掘削される。前期前半には丘陵の南部で約 3 万 m<sup>2</sup> を環濠が囲み、前期末まで続く。環濠内部はまだよくわからないが前期末には数棟の住居と貯蔵穴を単位とした小規模な居住域が広がる。それが中期前半になると丘陵南部の 20 万 m<sup>2</sup> ほどを環濠が大きく囲む。丘陵のくびれ部を東西に結んで丘陵を北側と南側に切断し、丘陵南部を地形に沿って圍繞する逆台形状の溝である。南北 400m、東西 700m 以上の平面楕円形 20ha 弱となる。

散在していた居住域がこの内に集まり、貯蔵域も区分されていた可能性がある。この環濠は中期後半まで機能するが、基本的に内部には同時期の墓地はなく、貯蔵穴は中期後半には高床倉庫に変わる。

**b. 長崎県原の辻遺跡（第 175 図）（松見 2015）**

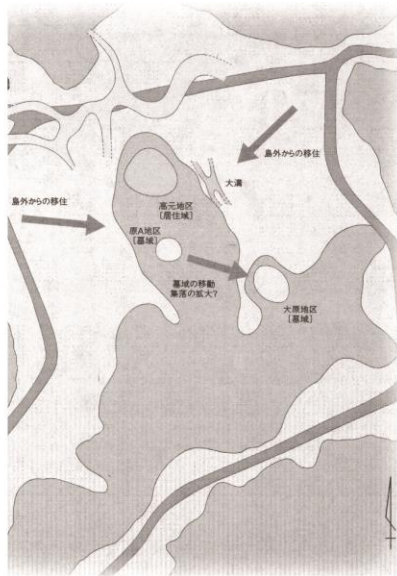
壱岐島の南東に広がる深江田原と呼ばれる平野部に広がる。遺跡は舌状に伸びた丘陵上に居住域が広がり、丘陵裾部に多重の環濠が巡る。それらは旧河道と合流しながら、複雑に環濠帯となっている。前期後葉から始まる遺跡変遷はⅠ～Ⅵ期に分けられる。弥生時代前期後葉～前期末までの第Ⅰ期は原の辻遺跡の集落形成期であり、台地の先端から居住が始まる。台地東端にある大溝遺構では、鍬・手斧ほかの木製品、未製品が出土している。

中期前半代の第Ⅱ期には、東西低地部で本格的に環濠が掘削され、大規模環濠集落のフレームが成立する。西側低地部に敷粗朶工法を用いた船着き場が完成する。低地を中心に環濠が巡らされ、一部河川とつながり、丘陵部とそれ以外の空間を区画する。

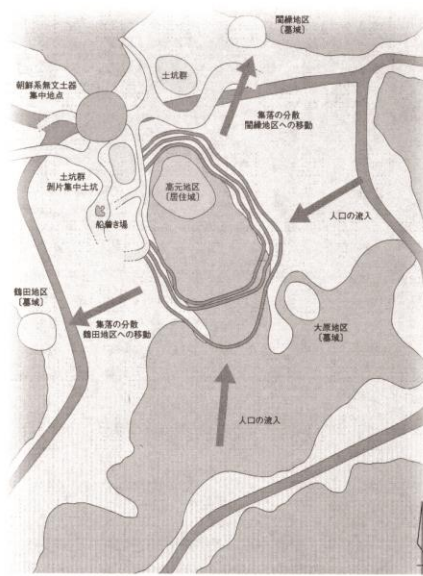
中期後半代の第Ⅲ期は、第Ⅱ期以降整備された環濠集落が盛行する。多重の環濠が台地の裾を楕円形に巡り、内 2 条は台地上を横断して接続し、拡大した居住域を囲む。台地の付け根の最高地点では外側の環濠が半円形に南側に張り出し、物見の空間となる。この時期の環濠は南側台地へも展開し、推定で南北 750m、東西 300m の範囲を囲む巨大環濠集落となる。環濠内では台地南半部に竪穴住居群・掘立柱建物群が展開し、北半部では竪穴住居が散在、土坑群がまとまって分布する。南半部では鉄器・青銅器の工房も推定されている。北西低地部一帯は石器工房や渡来人の居住域が推定され、船着き場の存在も重要である。この段階の低地部一帯には掘立柱建物が散在し、南東低地部では倉庫群が想定されている。

第Ⅳ期の初め、中期末～後期初頭には環濠が一旦埋没し、集落も分散化するようだ。弥生時代後期前半には船着き場の解体など、自然災害を誘因として、集落が衰退し見えにくくなる（松見 2011）。原の辻遺跡の衰退と呼応して同じく環濠集落である車出遺跡やカラミ遺跡で集落の拡大がみられる。

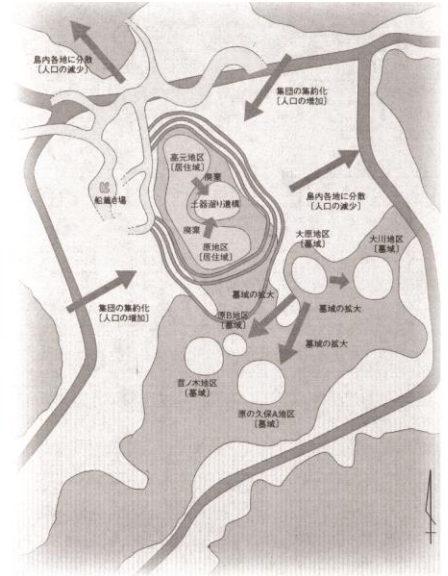
再び後期後半代の第Ⅴ期には、後期中頃には環濠が再掘削され、集落全体の再整備が



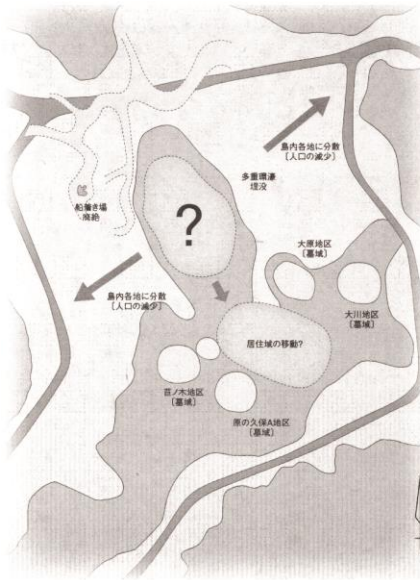
原の辻遺跡Ⅰ期



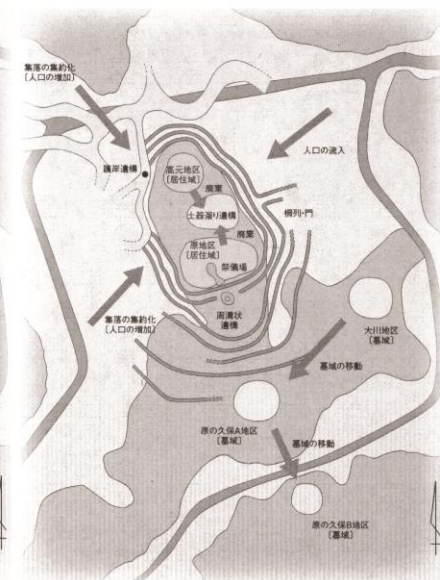
原の辻遺跡Ⅱ期



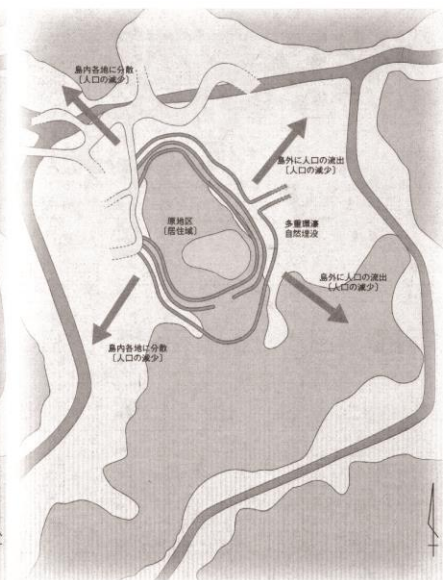
原の辻遺跡Ⅲ期



原の辻遺跡Ⅳ期



原の辻遺跡Ⅴ期



原の辻遺跡Ⅵ期

第 175 図 中期の環濠集落1(原の辻遺跡)[松見 2015]

行われる。Ⅱ・Ⅲ期に整備された環濠のうち、台地裾の2条の環濠がこの時期再掘削され、北西低地部では河道の西側にも短い環濠帯が掘削される。環濠の断面形は逆台形、幅3m前後、深さ1.2mである[中尾・福田 2005]。

東側低地部では幅3mの道路状遺構がみられ、陸橋部分を通して台地上へ向かう。環濠には道路状遺構に沿って小ピットがみられ、出入り口には柵列と門が想定される。台地の最高所付近は周溝状遺構や掘立柱建物2棟や祭祀関連遺物の出土から祭儀場と考えられている。居住域は祭儀場の東側に集中する。祭儀場の北側には大形竪穴住居が立ち並び、集落のなかで交易を担っていたエリアとして、祭儀場東側で権が出土している。台地南側







でくびれて接続する東西の台地にも数条の大溝がみられ、集落範囲を拡大している可能性が窺える。大溝より南側には墓域が数群展開する。

第Ⅵ期は集落の解体期で環濠群は弥生時代終末期以降に全域で埋没が進み、大量の土器が投棄される。

#### （４）弥生時代後期～終末期の環濠

弥生時代後期になると各地で拠点的な大規模集落が発達し、大溝を伴うものも多くなる。吉野ヶ里遺跡は前期から後期を通じて環濠集落が変遷する、九州島では珍しい遺跡と言える。

後期になると前期・中期の環濠集落域や北の墳丘墓を大きく取り囲むように地形に沿って外環濠が掘削され、その範囲は南北約 1 km、東西最大約 0.6 km、40ha となる。後期前半は段丘の周囲を巡る大規模環濠の内側に竪穴住居を主体とする居住区、西の外側に高床倉庫と考えられる掘立柱建物群を設ける。この倉庫群は終末期まで営まれるが、その西側の段丘裾部にはこの部分を取り囲むかのような濠があり、外環濠とこの濠で掘立柱建物群は囲繞されていた。外環濠からは後期前半から終末期、さらには古墳時代初頭の土器群が出土した。

後期中頃以降になると環濠集落の北部と中部に断面逆台形の溝によって内郭がそれぞれ成立する。これらは後期中頃～後半と後期後半～終末期の 2 時期に掘り直して営まれ、終末期に埋没する。

古段階の南内郭環濠は南北 150m、東西 70m、面積約 7800 m<sup>2</sup>の直線的ではあるがいびつな平面形であったのが、新段階になると長方形に近い平面形に掘りなおされる（南北 150m、東西 90m、面積 11000 m<sup>2</sup>）。北内郭は古段階の環濠が一部しか遺存していないが、新段階のものは二重の環濠からなり、円と方を組み合わせたような先端が丸い A 字形の対照的な平面形態をとっている。（底辺 60m、高さ 56m、面積 2750 m<sup>2</sup>）これらの内郭環濠には各所に半円形あるいは方形の張り出し部分が付属し、内側に 1 × 2 間の物見やぐらと考えられる掘立柱建物跡がみられる。出入り口は南内郭で 2 箇所、北内郭で 1 箇所設けられる。南内郭内部には物見やぐら以外の建物は少数の竪穴住居跡、小規模な建物群がある。北内郭内部には大規模な 3 × 3 間の建物をはじめとする建物群、少数の竪穴住居群がみられ、様相が異なる。

なお、後期中頃以降、有明海沿岸地域から筑後川流域に突出部を持つ環濠が福岡県道蔵遺跡、中里遺跡、大分県小迫辻原遺跡、佐賀県松原遺跡（後期後半から終末）・原古賀三本谷遺跡（後期終末～古墳初頭）・千塔山遺跡（後期後半～古墳初頭）、惣座遺跡（後半から終末）・榎木遺跡（終末～古墳初頭）・岡裏遺跡（後期後半～終末）などで確認される。なお、対照的な平面プランをとり、対称位置に突出部を持つ古墳時代の豪族居館は、これらの突出部を持つ環濠区画から成立したという考えもある（蒲原 1995）。

##### a. 佐賀県千塔山遺跡（第 177 図）（基山町 1978）

鹿児島本線 JR 基山駅の西側、標高 53m の独立丘陵上に立地していた。1975 年から大規模な宅地造成工事に伴い、約 13,000 m<sup>2</sup>を対象に発掘調査が行われた。弥生時代の遺構は中期初頭と後期後半～古墳時代前期の大きく 2 時期に分かれ、環濠は後者の時期で、住居跡 40 軒、掘立柱建物 8 棟が併せて調査された。環濠は集落の一部を囲む断面 U 字形の溝と V 字形の溝がある。墓地は方形環濠外の南東に箱式石棺墓 9 基、石蓋土墳墓 3 基があ

る。住居跡は丘陵頂部のA地区で27軒、そこから北側に伸びた東側のB地区で10軒、西側のC地区で3軒が見つかっている。

溝はU字溝からV字溝への変遷があり、U字溝は丘陵の頂上付近の平坦な部分を方形に南北75m、東西67m以上を囲んでいる。東側では確認できていない。急峻な地形に取りつくのか、削平されたのかはわからない。U字溝で囲まれた面積はおよそ5000㎡である。北側中央部には1.25m幅の陸橋がある。U字溝の幅は1.7～2.4m、下端1.7～2.4mで、深さは65～80cmである。後期後半～終末の所産。U字溝の時期には内部には住居7軒、外部にも10数軒ある。

その北側は丘陵が分岐する場所で、方形環濠から西北角で斜面を下る溝が取りつく。この枝溝は、圍繞するU字溝北西コーナーよりも一段深い。

V字溝は西北部から南側までU字溝と同じ場所に掘りなおされており、西北コーナーからはU字溝の北側を巡る。V字溝で囲まれる範囲は、南北95m、東西は75m以上と考えられ、6300㎡以上となる。V字溝の規模は一定しておらず、残りの良い部分では上端4.4m深さ1.6mである。出土した土器は庄内系土器を含む。V字溝の時期には内部に11軒、外部に5軒ある。

#### **b. 福岡県平塚川添遺跡（第177図）（甘木市 2004）**

平塚川添遺跡の環濠は集落の立地する標高20mの微高地の周縁に掘削される。木製品の遺存状態や土層堆積からみて埋没前は、浅く滞水していたものと思われ、走行は特に西側で複雑になっている。

集落を囲む溝は3本を中心として多重化している。いずれも溝底で後期後半の土器が出土した。断面形は緩やかなU字形で検出面からの深さは1mである。土塁の痕跡を示す堆積は確認されていない。

比較的残りの良い中央集落周りの「内濠」のなかで、北西部の拡張トレンチ17と砂礫層の間で検出した幅約10m、深さ70～1mの「内濠」部分だけは礫層でほぼ一様に埋まっており、他の環濠とは状況が異なる。併せて、中央集落の竪穴住居の分布が北西縁では薄い。礫による最終埋没は終末期で、中央集落はその南東部で自然流路（現天神川）によって竪穴住居などが破壊されたり、この「内濠」のさらに北西側（トレンチ17）には再び竪穴住居などが検出されることから、北西の内濠自体は放水や大水による成因の可能性がある。

北西から南西にかけては、中央集落北東部で先述の北西部「内濠」を切り、埋土に共通して褐色粘質土や植物遺体などを含み、南下するのは北東部「内濠」である。北部では一部走行が確定しないが、西部「内濠」と併行した時期に北東部「内濠」と連続すると考えられる環濠帯（2～4条目：複数の環濠が併存・一部合流、もしくは変遷）が西側に形成され、それらは北西部の内濠が埋没した後もしばらくは掘削・浚渫され続けたと思われる。この環濠帯の西に検出された溝は自然流路との区別も含めて判断が難しい。

北西部では微高地の西限として自然流路（現二又川）が南南西に流れ、網の目状の複雑な流路となっている。この流路がやがて南北に走行し、環濠帯と一体化して大きく集落の西を限っている。集落の南側については、3条ないしは4条の溝が確認される。東側の低台地の崖面直下では3本目の溝が走り、南側では4条に分岐する。環濠帯・自然流路による西側の限界、東側の崖や南部の環濠、遺構の分布を考慮すると、この拡大中央集落は

250×150m、約3haの不定形を呈す。

平塚川添遺跡の環濠は東側の低台地縁から湧水を集めた小規模自然流路と、集落中央部の微高地西縁を流れる自然流路を利用して設計された。この基本設計は弥生時代中期後半から古墳時代初頭まで続き、環濠の維持・拡大が行われた。集落の廃絶は、かつての大溝が埋まった上部に大規模な遺構が検出されたことなどから、大溝が埋没してからしばらくは集落が継続していた。

平塚川添遺跡の北東150mに近接して平塚山の上遺跡がある。川添遺跡と同様、福田台地から一段落ちた標高23mの低地に立地する。台地との比高差は4mあり、遺跡の範囲はこの崖により3方を限られている。西側は天神川が流れている。山の上集落の浅い区画溝は2ヶ所で確認された。北西隅の浅い溝は西に弧を描いて南へつながると思われるが、東から南へ回る濠とは南西隅で切り合い関係となる。集落の東側では濠を検出できなかったことから、崖面を利用した区画となろう。東から南の環濠は幅14～18m、深さ1mで、断面は緩やかな傾斜で皿状となっている。西の濠は幅7～8m、深さ1.2mで、東側の断面はやや立ち上がり角度がある皿状で、西側の濠は弥生時代後期後半以前の所産と考えられている。川添遺跡の環濠をさかのぼる時期のものであろう。

川添遺跡では集落の形成は中期後半に始まり、後期～終末にかけて最盛期となる。集落が環濠を有するのは後期後半～終末頃で、中心集落には大型建物が並び、その周囲には環濠によって区画された「別区」を有する。この小集落は工房域や倉庫域などがあり、集落内での機能分化が看取できる。山の上遺跡では川添遺跡の55棟の掘立柱建物に比べて、3倍近い167棟の掘立柱建物が確認されている。また、立地からみても山の上遺跡は川添遺跡のやや高所にあり、環濠とはいかないまでも浅い溝と崖面に画された区域となっている。墓地は東の福田台地上、縁辺部に広がっている。

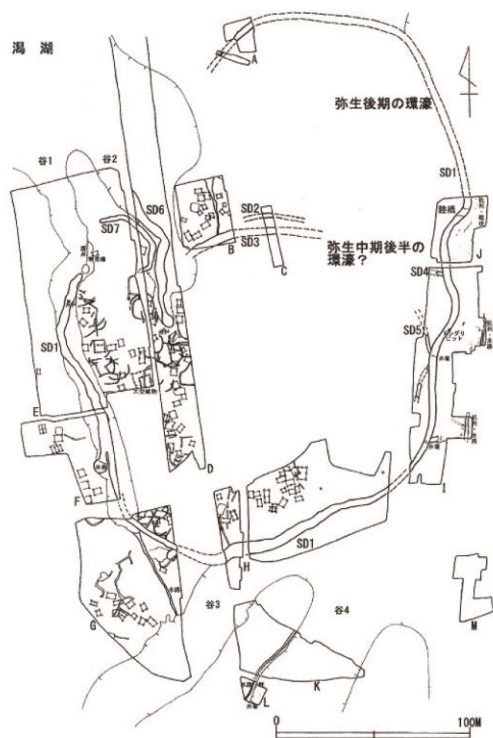
#### c. 今宿五郎江遺跡（第177図）（森本2009・2010・2012）

糸島平野の東部の小平野、今宿平野に位置する。遺跡は段丘先端から沖積地に立地し、内海に面する環境であったと考えられる。伊都国の中枢である三雲遺跡群は南西6km、玄武岩製石斧の原産地である今山は北西2kmに位置する。今山の石斧生産が衰退する弥生時代中期後半以降、今宿平野の拠点的な集落へと発展する。

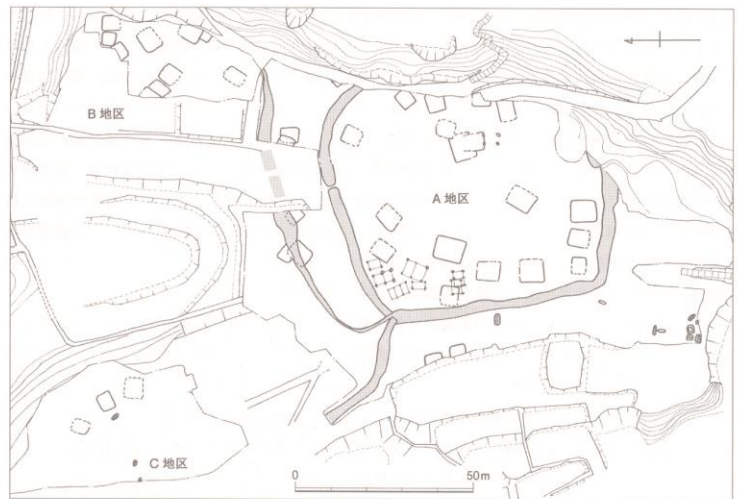
弥生時代後期の環濠集落以前にも、部分的に大溝が確認されており、中期後半段階で谷部を取り込みながら、集落域径120mを区画する施設が想定される。なお、後期前半にはこの環濠は埋没している。

後期初頭には新たな集落フレームが計画され、南北270m、東西200mの環濠集落へと発展する。後期の環濠に顕著な再掘削の痕跡は見られず、弥生時代終末期～古墳時代前期前半にはほぼ埋没する。環濠の埋没が進む終末期前後には、環濠集落内の中心集落が拡大し、周辺（大塚遺跡）へも集落が増加（分村）している。これらは古墳時代前期前半を最後に衰退する。

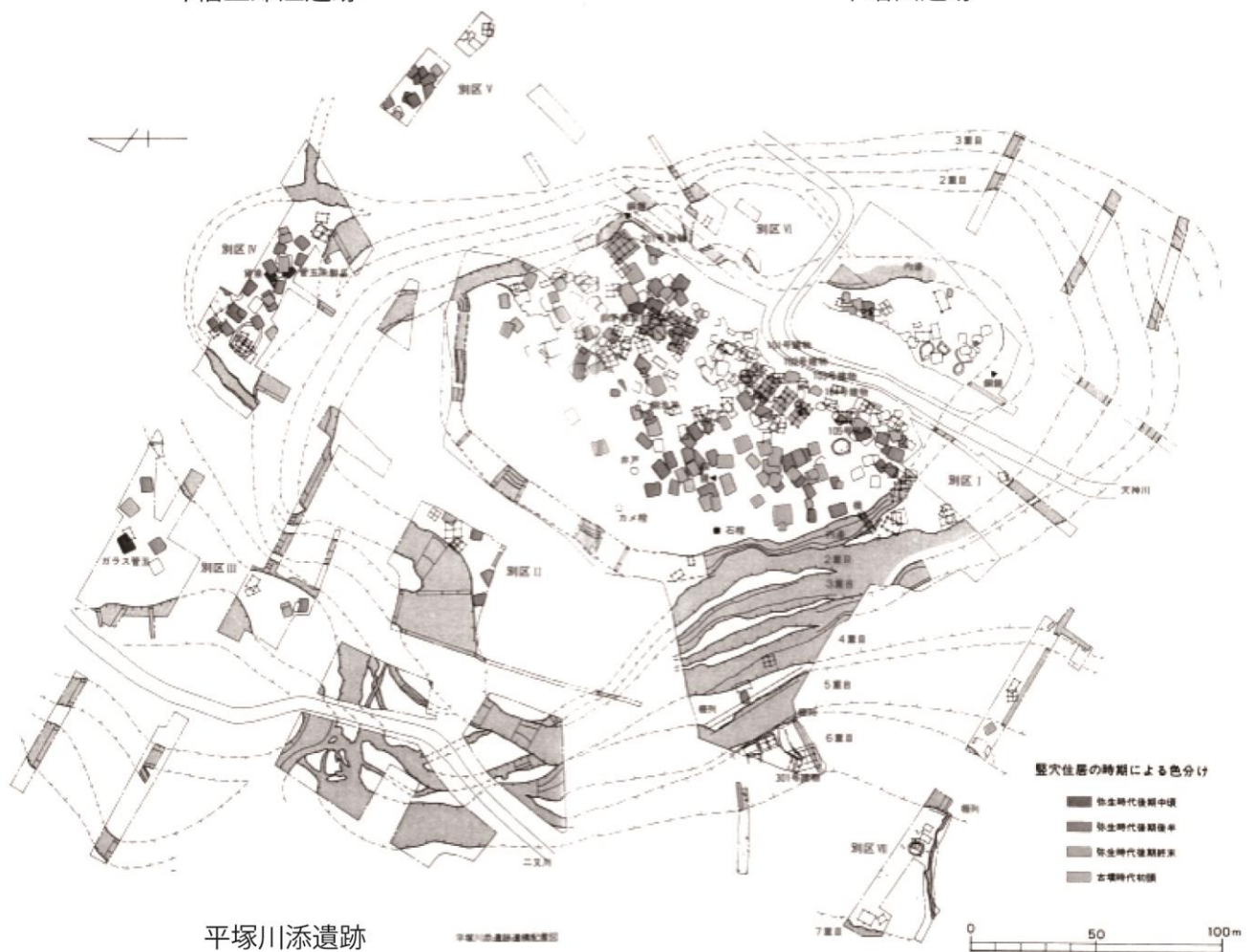
弥生時代後期の環濠は幅3m、深さ1.5m前後で断面形は逆台形である。遺構面は削平されており、本来の深さは2m程であったと考えられている。環濠は集落の東部と西部では段丘縁辺から谷部にかかる場所を走行し、南部と北部では段丘を東西に切断する。掘削土は区画のすぐ外側に排出され、盛り土状に確認できる。土塁というよりも畦畔に近い



今宿五郎江遺跡



千塔山遺跡



平塚川添遺跡



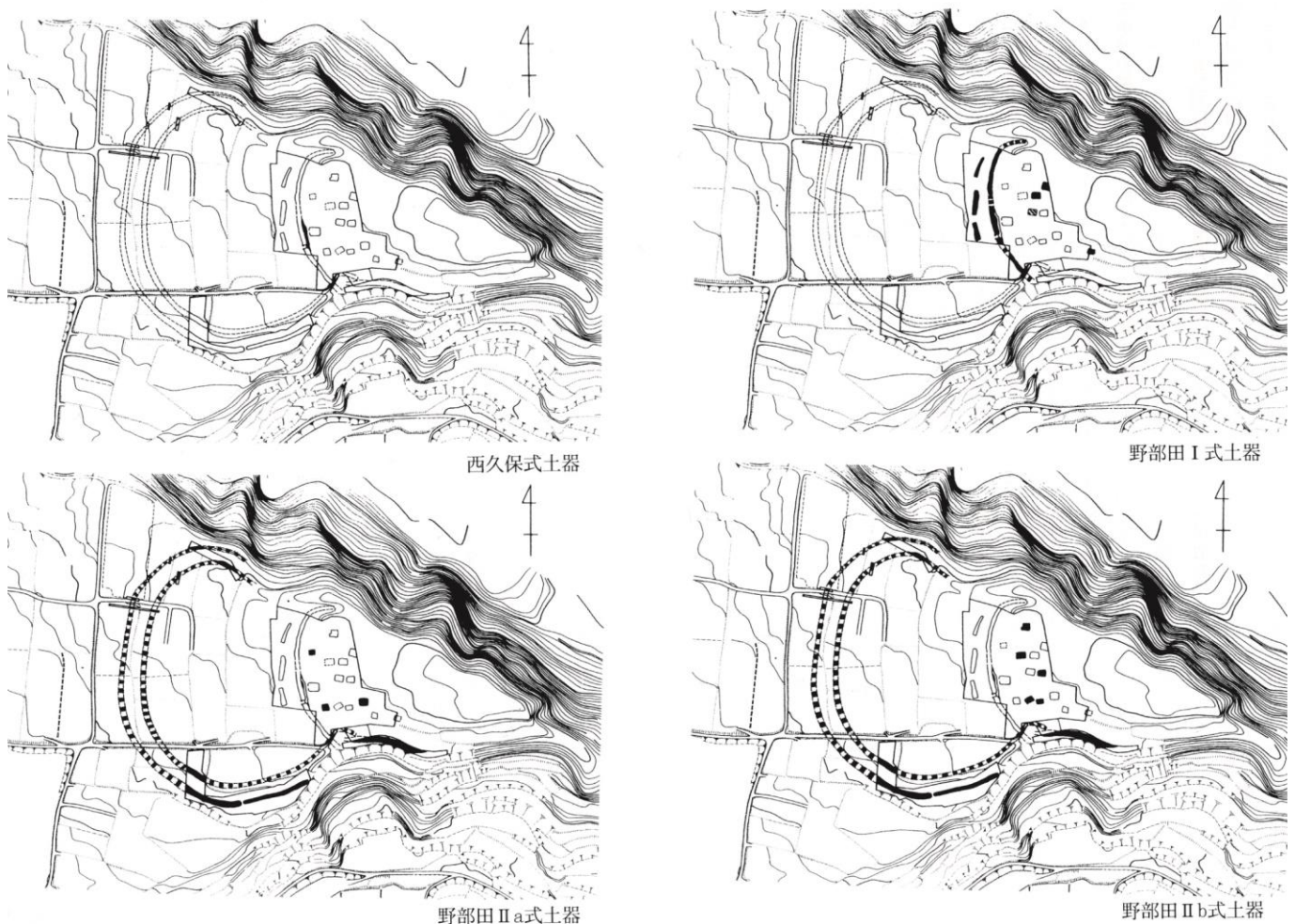
という。環濠は全周せずに、北西部と東部で途切れる。北西部は潟湖へ通じ、付近には矢板による護岸、物見やぐら状施設、環状区画溝（SD07）がある。東部は水利施設が多くみられ、水田へ通じる出入り口が想定される。

今宿五郎江遺跡の環濠は東側を中心に灌漑水路として利用され、環濠西側では、環濠（内）に、井戸や井泉が連結し特殊な水辺の空間となっているのが特徴である。これらは、環濠の埋没過程で営まれたものが多い。低地付近における環濠の機能、またはその変容を考察するうえで重要な知見である。

環濠内には集落の存続時期を通じて掘立柱建物と平地式建物がみられた。特に西部では後期前半代の大型側柱建物（4間×5間以上）が2棟みられる。楽浪系土器や三韓土器をはじめ、舶載品が環濠西部で偏って出土している。ほかに西部瀬戸内、近畿西部、日本海沿岸や東海地方との交流を示す土器も出土しており、交流拠点の集落である。

#### d. 蒲生・上の原遺跡（第178図）（熊本県1996）

菊池川中流域の御宇田台地に立地する。遺跡の所在する台地は起伏が大きく、その広がり東西4.5km、南北1kmで、東端を最高所として西へ下る。遺跡はこの東端部の標高の高い部分（95m前後）に位置する。農業基盤整備事業に伴う調査で弥生時代後期の環濠集落が確認され、住居跡13軒、方形周溝遺構1基、大溝6条が調査された。これらは、



第178図 後期の環濠集落2(蒲生・上の原遺跡)[熊本県1996]



道路部分や削平が及ぶ箇所の部分的な調査となっている。

弥生時代後期前半に集落が営まれ始め、濠Ⅵが掘削される。濠Ⅵの規模は検出長 27 m、最大幅 1.6m、深さ 1.2m、断面形は V 字に近い。

弥生時代後期後半の段階になると濠Ⅵが埋没し、新たな濠Ⅰや濠Ⅴが掘削される。東側の集落を弧状に取り囲み、北側と南側では崖面につながり、地形とともに集落を囲繞する。環濠内部には竪穴住居が確認されている。濠Ⅴは濠Ⅰと同じ方向で走るが、部分的な掘削にとどまり、調査者は開削中断があったものと捉えている。

濠Ⅰでは、幅 3.2m の陸橋が中央よりもやや南側で検出された。最大幅は 3.0m、深さ 1.7m、断面形は逆台形である。南側では断面形が V 字に変化する。掘削に伴う際の階段状の遺構と梯子据え付けのための浅い溝が数か所確認されていることも興味深い。上層を中心に多量の遺物が出土した。

濠Ⅴは濠Ⅰと並行して走り、対となるものである。濠そのものは完全に開削されておらず、掘削途中の 3 本の溝を検出した。一番北側のものは掘削を開始して間もないものである。これに対して、中ほどと北側のものはほぼ掘削を完了していた。北側の濠は 14.8 m の長さで幅 1.4～2.2m、深さ 0.85～1.04m である。遺物の出土はない。中央の濠は北側の濠から 9 m 離れてあり、17.7m の長さ、幅は 2.98～3.38m、その深さは 1.3～1.7m、断面形は逆台形である。遺物は中位から投げ込まれた形で出土している。南側の濠は、中央の濠から 4.5m おいて掘削され、13.2m の長さである。南側に 2 か所の深堀り部に挟まれ、掘り残された箇所（長さ 2.5m）がある。幅は 2.7～3.7m、深さは深堀部で 2.56m（北側）、2.32m（南側）、その他のところで 2.26m 前後である。断面形は逆台形である。遺物は少ない。

次の段階では濠Ⅰ・濠Ⅴが埋没し、濠Ⅱ・Ⅲが西側に大きく広がり掘削される。住居の分布も西側に広がりを見せている。濠Ⅱは環状を呈し、南側の鉤状に曲がる箇所で濠Ⅰを切っている。最大幅は 3.6m、深さ 1.4m、断面形は V 字に近い。遺物は少ない。濠Ⅲは濠Ⅱの西側を並行して走り、集落の一番外側を回る。南側に 1 か所陸橋部を確認できる。最大幅は 5.1m、深さ 1.8m で断面形は台形から V 字形である。遺物は陸橋部周辺から多量に出土した。

次の段階では、濠Ⅱ・Ⅲと併せて、濠Ⅵが東側で台地の裾に沿う部分に掘削されて、環濠の区画が完成する時期である。竪穴住居は確認されたなかで一番増加しているため、この時期に全体に増加するものだろう。

濠Ⅵは集落の南側の崖付近を走行する。最大幅 4.5m、深さ 2.78m で逆台形から V 字形である。底は段掘りになっており、幅もそれを単位として変わる。遺物は多量に出土した。

その後、弥生時代終末段階で環濠が埋没し、集落が廃絶されるようだ。

環濠（弧状溝）は、同じ溝でも断面形態が底面が広い部分と狭い部分で形状が異なり、台形状と V 字形のものや階段状になるものが合わさる。また、濠Ⅴは掘削途中と判断されており、これらは、掘削単位や掘削工程など興味深い知見を示している。

## （５）古墳時代の居館へ

### a. 大分県小迫辻原遺跡（第 179 図）（大分県 1999、日田市 2011）

小迫辻原遺跡は大分県の西部日田盆地に位置し、筑後川上流の三隈川流域に形成された標高 120m の台地上に立地する。昭和 62 年に始まった九州横断道の調査以降、台地の

西側で、弥生時代終末期～古墳時代初めの環濠、台地東側で方形環濠（建物）がそれぞれ3条確認された。遺構変遷はⅠ～Ⅳ期に分けられる。

Ⅰ期は庄内式古段階併行で、1号環濠が台地の北西部、台地縁辺に出現する。縁辺部でくの字状に屈曲し、台地裾を巡る可能性がある。幅2.5m、深さ1m、断面は逆台形ないしコ字状の張出部を2ヶ所持つ。環濠は全体に不整形で、その規模は東西150m、南北100mと推定される。環濠内部では竪穴住居6軒を検出した。

Ⅱ期は1号環濠から2号環濠へ移り廃絶するまでの期間で、概ね庄内式新段階併行である。1号環濠同様、台地の縁辺部に位置し、谷部の水利用をしやすい場所が選地されている。2号環濠は1号環濠の南にあり、台地縁辺部を巡る。その規模は一辺約100mの方形に近い平面形で、幅3m、深さ1.5m、断面逆台形である。4か所の張出部が確認された。そのうち南西部の張出部には出入口用の橋脚に使われた2つの柱穴が法面南側で確認された。東側中央の張出部は当初直線に掘られた濠を埋戻し、新たに掘り変えている。濠の内側には幅30cm、深さ15cmの布掘りの一部も確認され、濠に沿う可能性がある。環濠内部からは竪穴住居2棟が検出された。

Ⅲ期は布留式最古段階にあたり、3号環濠へ変遷する。南北に走る条溝やさらに1号方形環濠が掘削される。3号環濠は1号環濠と重なって存在し、台地縁辺部に沿う。幅4.5m、深さ1.6mで一辺約100mの隅丸方形をなす。断面はV字形で、内側は緩やかで外側は急である。外側に土塁の痕跡が確認される。環濠内部には竪穴住居か土坑と考えられる遺構が確認された。

1号方形環濠は47m四方で、環濠は約3.5m、深さ1.5mの断面逆台形～V字形である。濠の内側には幅40cmの布掘りの一部が確認され、環濠と併行して巡る。内部には東西3間×南北2間以上（6.5×6.3m）の総柱建物1棟がある。

台地を分断する1号条溝は総延長270m、幅3m、深さ1.5m、断面逆台形、東側に土塁の痕跡を残す。この条溝により、3号環濠と1号方形環濠は明確な区分がみられ、東側の居住空間と西側の方形環濠の特別な空間へと変化する。12号溝も台地を分断する溝になる可能性があり、その中央部分に1号方形環濠が位置する。

Ⅳ期は布留式古段階併行で、3号環濠は存続するが、方形環濠が1号方形環濠から2号方形環濠へ変遷する。3号方形環濠の時期もはっきりわからないが、1号方形環濠から2・3号方形環濠へと変遷すると考えられ、これらの廃絶により、集落は終結する。2号方形環濠は1号方形環濠の西側に位置し、双方の環濠が接するように並ぶ。36m四方、幅2m、深さ1mの断面逆台形をなす。内側には併行する幅50cm、深さ30～60cmの布掘りが巡り、溝底面には不規則な間隔で小柱穴が検出され柵状の施設である。環濠北側部分には出入口とみられる環濠幅3.1mと布掘り幅1.8mの陸橋がある。内部には南北に並立する総柱建物2棟がみられる。両建物とも東西3間×南北2間（6.5×5.3m）の同一規模である。

3号方形環濠は2号方形環濠の西側40mに位置する。外濠は20m四方と推定され、幅1m、深さ0.5mの断面逆台形をなす。北側部分には幅1.8mの陸橋部が存在する。内部には濠に並行して東西3間×南北2間（5.5×4.5m）の掘立柱建物1棟がある。

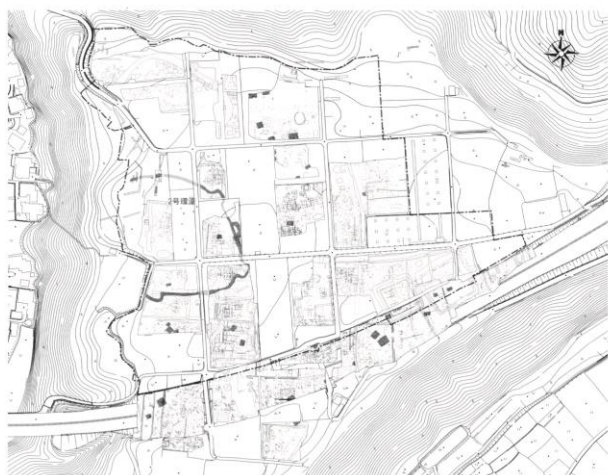
方形環濠よりも先に環濠が出現し、1～3号環濠へと変遷、不整形から方形へと変化



弥生時代末から古墳時代初頭（Ⅰ期）遺構配置図



弥生時代末から古墳時代初頭（Ⅲ期）遺構配置図



弥生時代末から古墳時代初頭（Ⅱ期）遺構配置図



弥生時代末から古墳時代初頭（Ⅳ期）遺構配置図

小迫辻原遺跡

第 179 図 終末期～古墳時代初めの環濠集落（小迫辻原遺跡）[日田市 2011]

している。その過程で堀の幅や深さなどの規模は増し、2号環濠では濠の内側に小溝を巡らし、3号環濠では土塁を築くなどより強固なものへと変化している。

方形環濠は台地内でも高い部分に造営され、1～2号方形環濠へと変遷する。3基の方形環濠は規模の差はあるが、内部には掘立柱、その配置を西側に限定している共通性がある。1号条溝を境に1・2号と3号では布掘りの有無や建物構造に違いがみられる。

環濠と方形環濠では遺物の出土状況に違いがみられる。環濠遺構や条溝には大量に土器が廃棄されるが、方形環濠には廃棄されていない。1・2号方形環濠は環濠内部の整地土を用いて、人為的に埋められている時期がある。

## 5. 環濠属性の具体的検討～大保横枕遺跡環濠調査をケーススタディとして～

### （1）環濠調査の検討課題

部分的な調査であれば、検出された溝を「環」濠と認定すること、その機能の推定は困難を極める。しかし、近年では、各自治体の調査次数の積み重ねによって、環濠や集落像を復元出来るようになった。大きな成果である。

筆者は福岡県大保横枕遺跡で、幸運にも二重環濠全体を調査する機会に恵まれたが（第 180 図）（小郡市 2012）、検出段階で直近の課題となったのが、平面形の軸がずれる

第 16 表 大保横枕遺跡環濠調査の課題

調査検討課題	結果
①外環濠・内環濠の同時性の検討 (外環濠・内環濠の接合事例) (環濠複数区間での接合事例)	○
②掘削詳細時期の特定	○
③掘り直しの有無／その時期の特定	○
④内土手・外土手の別	×
⑤環濠付帯施設の検討	△
⑥環濠(集落)のライフヒストリー	○
⑦環濠の堆積環境復元	○
⑧環濠の機能推定	○

環濠 2 条の同時存在の問題であった。  
また、調査中は豪雨や台風被害の復旧作業を通して、環濠の維持についても身を持って経験した。

当地域では丘陵上の貯蔵穴を囲繞する環濠が多く知られているが、大保横枕遺跡のように、低地に立地する環濠、そして二重環濠は初出で、その機能推定も大きな調査課題であった。第 16 表の検討課題を設定しながら、調査を進めた。

#### a. 大保横枕遺跡二重環濠平面形・断面形の比較

大保横枕遺跡の前期二重環濠は、自然堤防上(微高地)に立地する。周辺の田圃造成により、本来の地形は失われている。環濠の西側で標高 14.6m、東側で 13.7m、南側で 14.0m、北側で 13.4m となっており、環濠の北～東側では谷部分に向かって地形が下る。削平を考えると、本来は検出された高低差以上が見込まれる。

内環濠の平面形は、北辺と東辺が直線的で北東隅に角を持つ不整円形、外環濠は北辺から西辺にかけて直線的で角を持つ不整円形を呈する。内環濠は北辺が 36m 程にわたり直線状をなし、北西隅では緩やかな 120° 程度の角を持ち、北東隅では 90° に近い角度で屈曲する(図 13)。外環濠では北東隅に陸橋部を有するが内環濠では北東隅に陸橋部を持たない。西辺は弱いふくらみを持ちつつ、南の陸橋部へと向かう。南の陸橋部は外環濠と対応する箇所であり、幅 2.4m ほどである。西辺は A-2 区と A-5 区の境付近で緩やかにまがり、弱いくの字状を呈する。北辺を二等分して中軸を求めると、内環濠の軸は N-27°-E、規模は最大で 54.8m×53.4m となる。内環濠は検出面での幅 2.7~4.1m、深さは 1.2~2.0m で、断面 V 字形・漏斗形・逆台形状に変化する。

外環濠は、北辺が約 58m にわたり直線状を呈している。北西隅では 90° に近い角を持ち、北東隅では緩やかな弧を描く。北東隅では幅 2.6m 以上の陸橋部を有する(陸橋部は大雨による崩落で詳細は不明)。北西の陸橋部からは短く弱い屈曲を持ち、東辺は 40m ほど直線的となる。その後屈曲し、南の陸橋部へ向かう。南の陸橋部は幅 3.2m 程である。西辺は緩やかな弧を描いて、北西隅へと向かう。北辺を二等分して中軸を求めると、外環濠の軸は N-20°-E、規模は最大で 79.6m×78.8m となる。内環濠は検出面での幅 2.2~3.4m、深さは 1.0~1.7m で、断面 V 字形・漏斗形・逆台形状に変化する。

外環濠・内環濠とも北辺と西辺で直線の傾向が強いが、環濠北側、西側付近は直近に谷部が迫っている地形的制約のため、内外環濠の軸が若干ぶれてもいる。

内環濠・外環濠ともに断面形状は概して言えば V 字形となるが、掘り込みベースとなる土質の違いで断面形状は異なる。堆積状況からは、掘り直しや溝さらえなどの状況が窺える。必ずしも埋没過程は一樣ではなく、自然災害で部分的に崩落し、復旧したことも考えられる。崩落しやすく、埋没が進みやすい箇所もあるし、底からの湧水状況も各所で異なる。

るだろう。土層の捉え方、判断基準は個々の調査者により違いがあることは否めず、一貫した環濠全体の土層堆積状況の把握を意識した調査を目指したが、これら環濠の部分的な埋没環境・掘り直しの違いなどの詳細な把握は現状では難しかった。今後、調査技術の進展・堆積データの客観性の担保が望まれる。

調査者は掘り直しを数回想定して土層観察、掘削を進めていたが、掘り直しの有無については来跡した研究者間で意見が分かれた。将来的に追証可能なように土層剥ぎ取りを実施していることも重要であろう。最終的にA-5区SD03（内環濠）では、掘り直し部分が環濠内側へずれて行われており、確実な掘り直しの状況が明らかとなった（第181図）。検討の結果、内環濠・外環濠、それぞれ大きく3段階（a・b・c段階と表記）の大掛かりな掘り直しを想定するに至り、そのほか、簡易な溝さらえ等の環濠維持・管理が行われている状況が窺えた（第181図）。

#### b. 大保横枕遺跡二重環濠付帯施設の検討

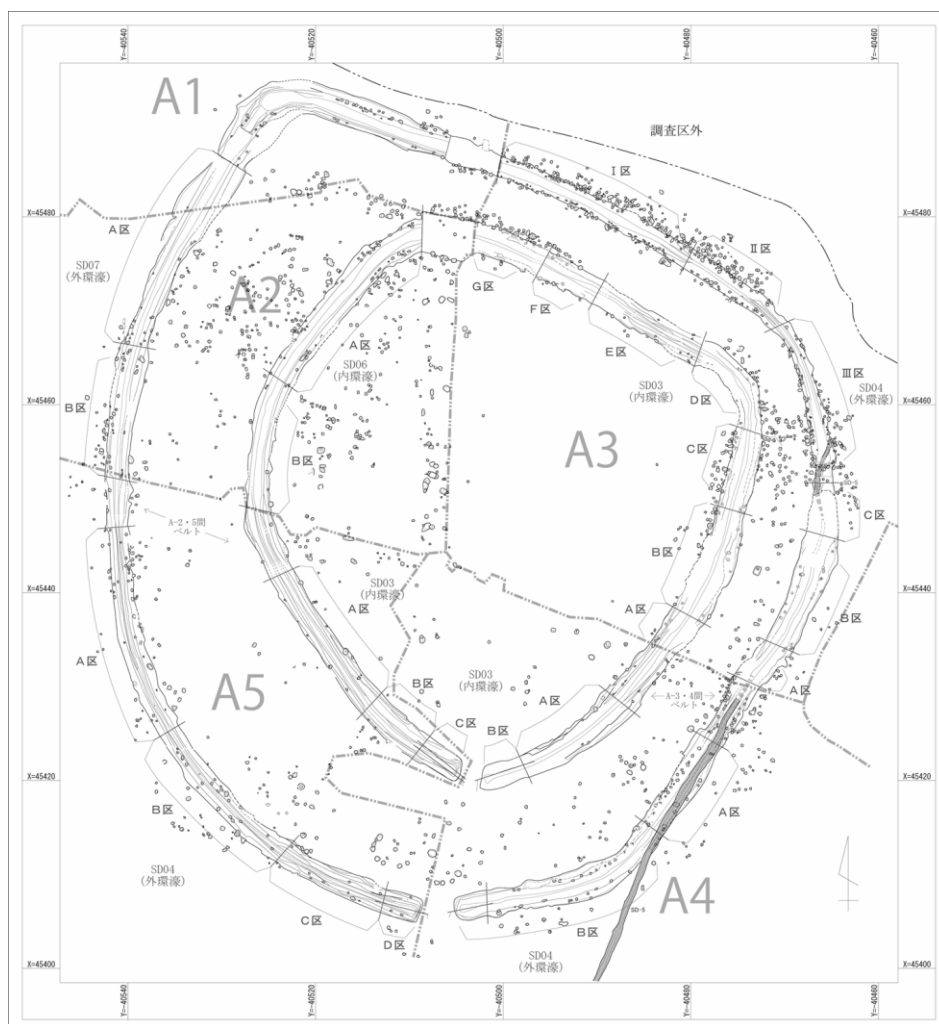
陸橋部は内環濠で1箇所、外環濠で2箇所確認された。両環濠ともに共通する南側の陸橋部は、内環濠で検出幅2.3m、主軸はN-10°-Eである。なお、A-5区では、掘り直しの段階で環濠が短くなっている状況が明らかと

なっている。その場合、陸橋部の幅が3.25mと広がる（第181図）。外環濠の南側陸橋は、

A-4区で調査中に崩落があったので、若干環濠上部が広がった可能性がある。本来は遺構下部の形状や、A-5区の陸橋部に面する上端を参考にするやや東へ振る軸を形成していた可能性がある。陸橋部の主軸はN-20°-Eで、幅は3.5mである。陸橋付近では、入口に伴う施設を探索したが、明らかにできなかった。

北東側の陸橋は外環濠のみ確認される。外環濠の北東の緩いカーブを描き外に少し広がる箇所に陸橋部が存在する。

残念ながら、陸橋の



第180図 大保横枕遺跡の二重環濠〔小郡市2012〕



南側が大雨により、図化・写真撮影前に著しく崩落した。陸橋部の幅は崩落後では 2.4m 程である。検出時のメモから、実際は 4 m 程の幅があり、1 m 程度崩落したと考えられる。陸橋部の主軸は N-85°-E となっており、谷部へ向いている。この陸橋部には、浅い溝状の掘り込みがみられ、それを切るかたちで環濠が掘削されている。北東側陸橋部付近はもともと地形が下がる部分であり、大きな削平は見込まなくてよい。陸橋部の浅い掘り込みは幅 2.1m 深さ 10cm 程度を測る。埋土は黒褐色粘質シルト～粘質土である。浅い掘り込みの性格は、ネズミ除けというよりも、本来の計画ラインである可能性を考えたい。陸橋を延長すると、内環濠の東辺の直線的な部分にあたり、もし、ここに陸橋をつくるのであれば環濠を斜めに横断することとなり、構造上やや不自然である。周辺には、ピットが密集しており、内環濠の橋や門などの付帯施設の存在を探索したが、明らかにできなかった。

以上の状況から、南の陸橋部は、内環濠と外環濠の同時性・同規格性を示す一証左であるといえる。一方で、外環濠は計画段階では、北東陸橋部を持たなかった可能性も考えられる。陸橋部が必要となるのは、北東谷部（水田か）や河川からの物資運搬に適したためであろうか。外環濠と内環濠の間にピット以外の遺構が存在しない空間があり、運搬経路であろう。環濠に沿うピット列は外環濠と内環濠ともに北辺から東辺にかけて密度が高く、外環濠内側の肩部分にピットが多い傾向にある。ピットの性格付けは、土層堆積状況から環濠内外の土塁の状況は窺えず、土留めの杭の可能性は低い。環濠と併せた囲繞施設と考えられる。これらから、内環濠と外環濠が異なる時期にあったというよりも、同時に存在し、内環濠よりも外環濠が内と外との境界となっていたことが窺えよう。

#### c. 二重環濠の時期についての検討

環濠の所属時期を決定するのは非常に難しい。環濠機能時には、廃棄行為を伴わず、土器が少ないので、切り合いのある遺構を含めて検討する必要がある。

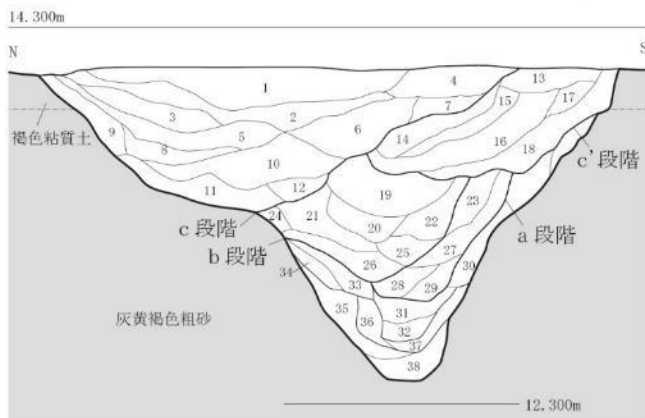
土器は外環濠より内環濠から多く出土した。報告図化点数 559 点で単純に比較した場合、内環濠が 367 点（65.7%）、外環濠が 189 点（33.8%）である。他 3 点（0.5%）は内環濠と外環濠の接合資料である。この場合、廃棄物の内容に違いがある可能性もあるが、外環濠の方がより機能的に意味があり、廃棄行為を抑制していた可能性が高いともいえる。また、内環濠と比べて外環濠の土器の入り方が後出的であった。掘削当初の板付Ⅱ a 式期段階には土器の量が少なく、板付Ⅱ b 式期になって多く入るので、その段階で、外側からの廃棄行為が主体となり、環濠の機能が衰退したと理解できる。

内環濠、外環濠ともに板付Ⅱ a 式古段階以降に掘削が行われ、板付Ⅱ b 式新段階で埋没想定できるが、その後は出土土器の錯綜がみられ、明確な時期の言及が難しい。確実に言えることは、外環濠と内環濠出土土器の上層・中層での接合例があり、環濠掘り直し以降の同時併存が明らかとなっている。

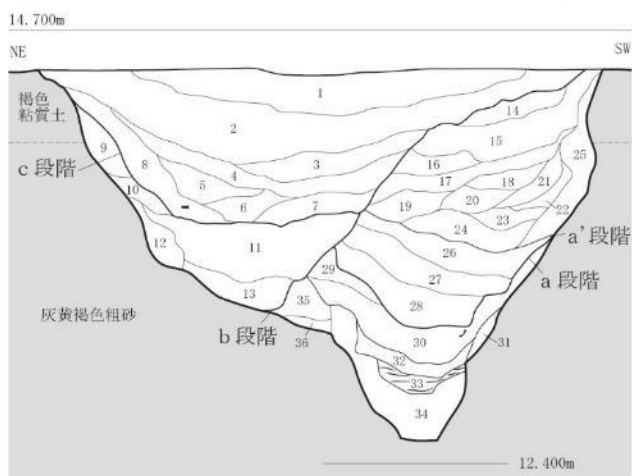
#### d. 二重環濠のライフヒストリー、周辺環境の復元

外環濠と内環濠は二重にする意図を持って掘削され、併存していただろう。掘削の先後関係は、土器編年上、時期差はない。両環濠とも板付Ⅱ a 式古段階以降に掘削が行われ、埋没時期の主体は板付Ⅱ b 式新段階である。まれに、板付Ⅱ c 式の土器片が入るので、その頃もくぼみとして、環濠の名残はあった。板付Ⅱ b 式新段階には、外環濠の埋没過程で 5 号溝が掘削される。その頃には、環濠は役割を終え、新たな集落フレームが用意される。当初の環濠への廃棄行為は内環濠から進み、その量も外環濠に比べてかなり多い。埋没が

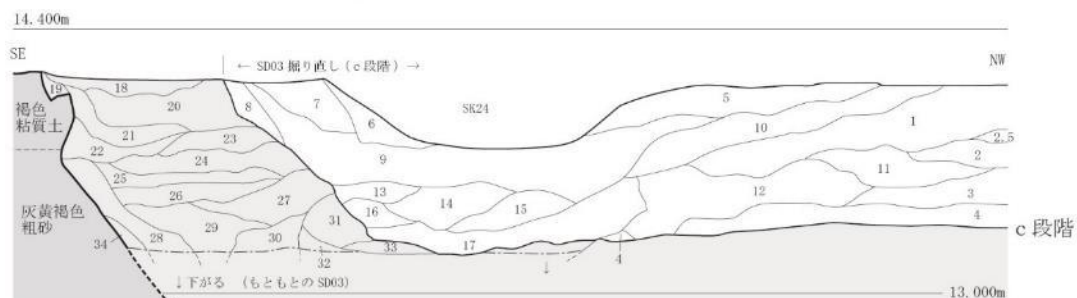
A-5区 SD03（内環濠）C区 土層断面図（位置：内⑥）



A-5区 SD03（内環濠）B区 土層断面図（位置：内⑤）



A-5区 SD03（内環濠）C区タテ北 土層断面図（位置：内⑦）



第 181 図 大保横枕遺跡の二重環濠の掘り直し断面図〔小郡市 2012〕



進む板付Ⅱb式期には、大形の土器が外環濠に多く廃棄されている。掘り直しは双方ともに行われるが、廃棄行為は内環濠を主体に行われているようで、外環濠では廃棄行為が抑制され、機能維持の意識が窺える。

北部九州の弥生時代早期～前期環濠は掘削後急速に埋没し、維持されないのが一般的だと考えられている（吉留 1994、小澤 2008）。大保横枕遺跡では小規模環濠ではあるが、環濠全周を調査することで、二重環濠の維持過程を復原できた。各土層の観察、ならびに掘り直しによる平面的なズレの抽出から、確実に環濠は掘り直し・維持されている。今後、環濠の維持については周辺事例を含め、改めて考える必要があるだろう。

A-3 区下層からは、調査段階から昆虫化石を目視できた。分析の結果、エンマコガネ等の食糞性昆虫が多産し、環濠下層の環境汚染が進行している状況が復原された。しかし、環濠機能時には環濠内部には種もみや食料を保管する貯蔵穴が営まれており、環境汚染の度合いが問題となる。環濠機能時には、周辺に居住域が活発化して営まれるようになるが、環濠を維持している段階でもあり、環濠内の汚染は現代の常識からは考えにくい。環濠全域の汚染が進行したのではなく、地形の低い部分に周辺から汚濁物が一時、部分的に集積したのか、もしくは、一時的に集落が放棄され、移動した可能性を考えなければならない。花粉分析・植物珪酸体分析では環濠東側の底部には水生植物が分布し、湿地から浅水域を呈する時もあり、内環濠よりも外環濠の環境がやや湿潤な環境と復原された。調査時も地下水位の高い時は湧水がみられたので、当時も変わらない環境であったことが確認された。また、内環濠の分析対象試料では全てからイネ花粉が検出され、外環濠では1層のみの確認であった。集落における稲藁の利用を反映したものであり、内環濠が作業場として用いられ、内環濠に稲藁が混入した可能性も示唆される。

今回は定量分析を行えなかった。本来、複数地点における植生、堆積環境の比較を行う場合、一定量（1000～5000 cm<sup>3</sup>の堆積物による定量分析が必要である。

#### **e. 二重環濠の機能**

当遺跡では、環濠内部にも住居跡が検出されたが、いずれも環濠以前のものと環濠埋没後のものである。環濠内部には、貯蔵穴群が営まれている。内環濠内部と内環濠と外環濠の間、陸橋よりも西側の空間に主に貯蔵穴が掘削されている。

環濠掘削行為には、共同の生産物を守る目的から掘削にあたった周辺集落がより強い「共・協同性」への意識高揚があり、環濠掘削後の機能にはそれに加え、共同貯蔵穴群の境界としての表徴、外敵防止の機能、湿気抜きの機能等、必ずしもひとつの機能に収斂するわけではなく、様々な意味合いや機能を有していると思われる（山崎 2010）。特に、今回の立地条件の場合、直接的には貯蔵穴を深い溝で囲繞することによって、貯蔵穴内の湧水を防止したり、湿気を防ぐ効果が窺える。

二重環濠の属性分析を詳しく行ってきたが、機能や集落変遷を考える上で重要なのが、併せて検出されたもう一つの環濠である。2者の環濠は非常に対照的である。二重環濠は深く掘削土量が多いが、もう一つの環濠は掘削深度が非常に浅く、幅 0.5～1.3m、深さ 0.5～0.7mのU字形の小溝である。北側の谷部では接続せず、地形を取り込んだ楕円形状の平面形となる。ただし、囲繞範囲は前者より広く、140m以上×80mを測る環濠となると考えられる。大がかりな掘削量を誇る断面V字形の二重環濠と、浅いがそれよりも広い面積をめぐる環濠には、おのずと機能の違いや掘削（契機）背景の違いが想定されるだろう。浅

い環濠は内部には住居と貯蔵穴が認められる。二重環濠の埋没過程で掘削されており、新しい集落フレームと考えられる。

## （２）環濠と集落の変遷（第 182 図）

### 【二重環濠以前】

環濠掘削以前から、この地には集落活動が確認できる。板付Ⅰ式新段階の集落は、のちの二重環濠部の東側に展開する。方形竪穴建物や 7×5 間の多柱列建物（B 区）と北側に掘立柱建物 2 棟（A-4 区）があり、西側でも大形の貯蔵穴が展開する（C 区）。削平された住居跡も存在した可能性がある。

板付Ⅱa 式古段階の集落は、大きく広がりを見せる。この時期の遺構は環濠と直接切り合い関係を持つものが多い。外環濠に切られる中央 2 柱松菊里型住居（A-4 区）やその南に位置する小形方形竪穴建物（B 区）、環濠内部の竪穴状遺構（A-2 区）、西側に展開する 4 本柱松菊里型住居（A-5 区）がある。東側では 3×1 間の掘立柱建物（A-4 区）、南側でも 3 間×1 間の掘立柱建物（A-5 区）がみられる。のちの二重環濠が位置する地形の高い部分には、北北東—南南西方向の軸をもつ平面隅丸長方形の貯蔵穴群が分布する。貯蔵穴には大形と小形があり、大形では長軸 4～5 m のものもある。貯蔵穴は切り合っており、時期細分が可能であろう。

集落構造としては、地形の高い部分に集中して貯蔵穴群が分布し、その周縁に住居跡が環状に分布する。

### 【二重環濠の掘削・維持】

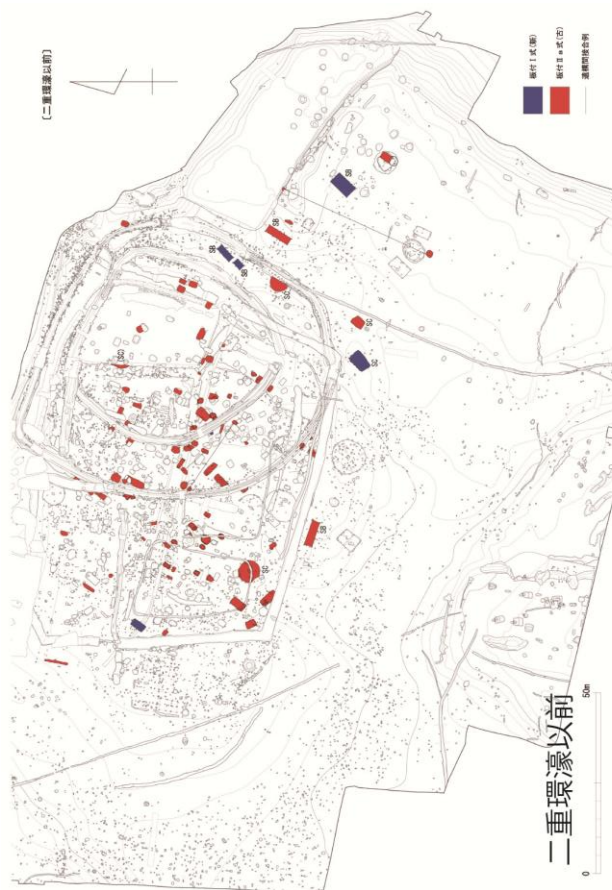
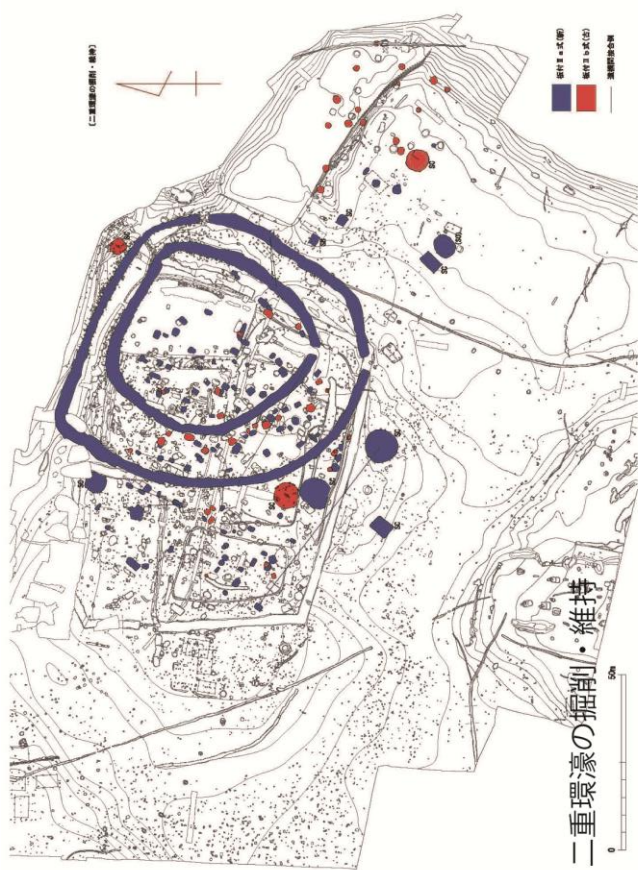
二重環濠が掘削され、維持される段階である。環濠は内外環濠が併存し、両環濠とも板付Ⅱa 式古段階以降に掘削され、板付Ⅱb 式新段階には埋没が進行する。環濠は地形の高い部分に配置され、外環濠が最大で 79.6m×78.8m の不整形円形、内環濠が最大で 54.8m×53.4m の不整形円形を呈する。環濠内部には、住居跡はみられない。

板付Ⅱa 式新段階の住居跡は、環濠の南側を中心に展開する。環濠の南東には方形住居と楕円形状の竪穴状遺構がみられる（B 区）。竪穴状遺構は出土土器相から隣接する方形住居に先行するものであろう。環濠の東側には小形竪穴建物、2×1 間の掘立柱建物がある（A-4 区）。南西側には、径 9 m 以上の 5 本柱円形松菊里系住居と多支柱円形松菊里系住居、方形住居が確認される（A-5 区）。多支柱松菊里系住居は 7 本柱から 6 本柱への建て替えが認められる。さらに、環濠の北西隅付近にやや小型の 4 本柱円形松菊里派生型住居がみられる（A-1 区）。

貯蔵穴群は内環濠内部、内環濠と外環濠の間、環濠外の南西側、環濠外の東側に分布する。貯蔵穴は長方形が多く、北東—南西方向の主軸をとる。特に定型化した小形長方形が多くみられる。内環濠と外環濠の間では、環濠に沿う形で貯蔵穴が掘削されている。環濠外の南東側では特徴的に円形の貯蔵穴がみられる。住居跡や貯蔵穴の主軸には詳しくみると異なるグループがあるので、時期差を反映している可能性がある。

板付Ⅱb 式古段階は、環濠の掘り直しが行われ、環濠機能が維持されている。環濠の外側に近接して住居跡がみられる。南西には多支柱円形松菊里系住居、北東には小型の隅丸形状多支柱松菊里系住居（焼失住居）がそれぞれ単独で確認される。環濠南西には、環濠からやや離れて、多支柱円形松菊里系住居がある。中央 2 柱には柱が遺存しており、特筆される。貯蔵穴は内環濠内部、内環濠と外環濠の間、環濠外の東側、環濠外の南西側に分





第 182 図 大保横枕遺跡の集落変遷 [山崎 2012]



布し、前時期に比べやや少なくなっている。貯蔵穴の主軸は内環濠と外環濠の間に顕著に内環濠に沿う形で分布する。引き続き環濠の南東側では円形の貯蔵穴が特徴的にみられる。

二重環濠の下層堆積土壌の分析では、昆虫化石同定から食糞性昆虫が多産し、周辺の環境汚染が示唆され、食葉性昆虫からは人が介在した二次林や植栽された畑作物や果樹が想定された。種実同定では、イネ・アズキ・ウリ等の栽培植物が確認されたのをはじめ、サクラ・エゴノキ・ムクノキ・ウコギ・コナラ・ブドウ・サンショウ等の畑や集落域およびその縁辺に生息する植物がみられた。植物珪酸体分析では内環濠から顕著にイネが確認され、周辺での稲作や稲藁の利用が示唆されている。

### 【二重環濠の埋没から新たな環濠へ】

板付Ⅱb式には二重環濠の掘り直し・維持が行われなくなり、埋没が進行した。外環濠の東側で、埋没過程に掘削される5号溝が出現する。B区の西部をやや西側に膨らみながら南北に縦断し、A-4区で環濠と重複し、A-3区の外環濠陸橋部付近まで連なり、谷部で消える。周回して東側はD区に再び現れる。復元すると南北140m以上、東西約80mの周辺に比べて地形のやや高い部分を囲繞する溝となる。これは、新しい集落フレームで地形を利用しながら、環濠の東側に展開する住居・貯蔵穴を囲繞する。5号溝は出土遺物も少なく、また、後世の遺物も含むが、切り合い関係や溝内部の状況からこの段階に設定した。内部には、四隅にピットを有する方形住居や削平を大きく受けた円形住居、円形貯蔵穴が確認できる。特に北側は大きく削平を受けているので、他にも確認できない住居が存在した可能性が高い。なお、二重環濠周辺にも貯蔵穴が散見される程度で、非常に数が少なくなっている。

### 【集落の衰退】

板付Ⅱc式は居住域利用の最終段階で、谷を挟んで地形の高い南側では墓域の形成が始まる。埋没した環濠の内部に小型方形堅穴建物が営まれる。他に貯蔵穴や不定形の土坑が散見される。東側の新環濠もこの時期には維持されなくなった可能性が高い。

中期に至ると、南側で中期前半まで墓域が営まれる（A-6区）。北西部では北北西から南南東に走る検出長103m、最大幅5.2mの道路状遺構が確認された（C区）A-6区で確認された墓地へ向かうものと思われる。

## 6. 九州島の環濠の特徴

九州島では環濠の全容が明らかな例は北部九州に偏っているものの、地形に応じた環濠掘削、地形を取り込んだ環濠形態が復元できる。環濠には文字通り、溝が一周する場合と地形を取り込んで必要な範囲に溝を掘削する場合があります、溝を完周させる例は意外に少ない。

環濠の立地は①丘陵上、②段丘上、③沖積低地（微高地・自然堤防含む）に大きく分けられ、低地の環濠であれば、流路と接合して、流路機能を果たすものもある。段丘であれば、突出した段丘先端を区画する場合、段丘を切断する条溝を掘削するものがあり、丘陵上でも急峻な地形を取り込みながら、溝と合わせて囲繞することがある。

北部九州では各地域に先駆けて環濠集落が出現するが、その後（前期中頃以降）、変容を遂げ、貯蔵穴を囲む小規模な環濠が盛行する時期が訪れる。

やがて、貯蔵穴を囲む環濠も中期初頭までには衰退し、その機能を終える。中期後半以降、拠点的な集落で環濠や大溝の掘削が始まる。三雲・井原遺跡群、須玖遺跡群、比

恵・那珂遺跡群など、一平野の中核をなす巨大集落群はこれまで環濠を持たないとされてきた。調査が進んだ昨今、これらも、旧河川や自然流路を取り込み、その内部を区画する構造が見えてきた。いわゆる「環濠」集落ではなくとも、集落を自然地形や自然流路で画しており、我々の現在の理解を大きく超えた「囲郭集落」が定義されるべきかもしれない。

九州各地で環濠集落が出現する時期は異なり、地域社会の動向や交流拠点（ネットワーク）の形成などから特定の時期や地域で発達することが見えてくる。この様相を明らかにするためには、環濠と集落の詳細な時期を検討することが肝要である。環濠掘削時期、機能時期、埋没時期などを確定し、集落の消長とどう対応するのか、各地域で研究が深化することを期待したい。

南九州の様相は、鹿児島県域では環濠（大溝）を持つ集落は少なく、薩摩半島の沿岸部を中心に数例が確認されるのみである〔本田 2011〕。中期前半の段階までに、鹿児島県入来遺跡など薩摩半島西部の田布施平野まで環濠の南下が確認できる。中期前半代には同地域の寺山遺跡で台地上に立地する二重環濠が確認されている。田布施平野の遺跡では、北部九州系の土器や肥後系土器が出土しており、交流拠点的な集落であり、弥生文化の情報とともに環濠も伝播したのだろう。これらは後期には継続しない。中期後半に至ると、松木園遺跡で、舌状台地を切るように V 字溝が掘削される（第 183 図）。削平が著しいが、検出面からの規模は最大幅 4 m、深さ 2.3 m ある。土層堆積状況からは溝の東（外）側に土塁の存在が想定されている。溝の掘削時期は中期後半と推定され、下層が埋まった段階で後期の土器が大量に投棄されている。また、北部九州や中九州・瀬戸内との交流が窺える土器が出土しており、遺跡から 1.5 m で南海産貝製品の中継地である高橋貝塚があることから、この地域は物流・交流拠点として位置づけられる。

大隅半島では中期後半の集落である王子遺跡で弧状を示す浅い U 字溝が確認されているのみであった。近年、大隅半島でも低地に立地する西ノ丸遺跡において後期の V 字溝が確認されており、注目される。

宮崎県域では、宮崎平野で前期末～中期初頭の大溝を持つ集落として鑑遺跡、持田中尾遺跡、塚原遺跡、都城盆地では高田遺跡などがあげられる〔加覧 2009〕。その後、空白期間を持ち、後期前葉に下郷遺跡で環濠集落が営まれている。下郷遺跡では 2 つの環濠が調査された。内側の環濠は逆台形から V 字形で最大幅 4 m、深さ 1.7 m、外側の環濠は逆台形で最大幅 3.5 m、深さ 1.5 m である。内側の環濠は前期後葉～中期前葉に掘削され、中期末～後期初頭には埋没が進み、外側の環濠は中期末～後期初頭に掘削され、後期前葉から後葉にかけて維持された。内側の環濠の集落域は 4000 m<sup>2</sup>、外側の環濠の集落域は 31,000 m<sup>2</sup>と拡大する（第 183 図）。

中九州の様相は、熊本県では北部の菊池川中流域の台地上に方保田東原遺跡、蒲生上の原遺跡、うてな遺跡群、小野崎遺跡など多数の環濠集落がみられる〔宮崎 1995、西山 2009〕。後期の竪穴住居を中心とする集落で、中期からの継続性はない。中部の緑川流域でも、新御堂遺跡、二子塚遺跡などで後期の大規模な環濠集落がみられる。新御堂遺跡は中期から集落が継続するが、環濠を伴うのは後期以降である。熊本県域では前期末～中期初頭にも環濠の可能性のある大溝が散見されるが、後期以降に顕著に環濠集落が発達するといえる。



第 183 図 南九州の環濠(松木園遺跡 下郷遺跡)[本田 2011、宮崎市 1999]

東北部九州の様相は、大分県では宇佐地域に中期前半代の環濠集落が散見され、古墳時代前期には宇佐市小部遺跡で柵列、張り出し部を持つ環濠（南北 120×東西 100m の隅丸方形）、その内部に長方形区画（南北 50×37m）が確認されている [坪根 2009]。

中部の別府湾沿岸地域では下郷遺跡で環濠がみられる。大分川の右岸に展開する自然堤防上に立地する集落で、周囲に分岐する小河川や谷、これに環濠を併せて集落域を構成している。大分川方向に造られた環濠は幅 4.5m、深さ 1.5m、断面形は梯形形である。南北長 350m 以上にわたり掘削されており、環濠に包括されるエリアには複数の集団単位が存在する。拠点集落のひとつであるが、後期前葉に環濠の廃絶、住居遺構の激変など衰退している。後期後葉の新段階になると守岡遺跡のように比高差 50m の独立丘陵上への進出が行われ、こうした状況と呼応して平野内の遺跡数も著しく増加する。沖積地や自然堤防上に立地する下郡遺跡、大道遺跡、台地縁辺部や独立丘陵上に造られる横尾遺跡、米竹遺跡、雄城台遺跡、北の崎遺跡など同時期の大規模な環濠や条溝が掘削される。

西北部九州の様相は、長崎県ではこれまでの環濠（大溝）の確認例は壱岐と大村、島原半島に限られている [寺田 2009]。中期末以降には島原半島でも、拠点的な集落に大溝がみられるようになるが、環濠ではなく、地形を切断するような構造である。半島北部の十園遺跡では東西 200m×南北 300m の範囲に中期後半の環濠（深さ 1 m、V 字）と集落、後期の大溝（深さ 75 cm、V 字）が地点を変えて掘削されている。中期の環濠は腐食土層が累積することから自然堆積で、後期の環濠は下層で大量の遺物が出土し、一気に埋められたものと考察されている [竹中 2007]。佃遺跡でも同時期の大型掘立柱建物、大型竪穴建物（径 14m）を含む集落を取り囲む環濠が 2 条確認されている。また、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて方形環濠を有する集落が龍王遺跡でみつかった。半島南部でも高原遺跡で断面 V 字の地形分断溝になる可能性のある二重の溝が検出されている。弧状を描

第 17 表 環濠機能の概念化（方形環濠出現以前）〔山崎 2010〕

環濠機能の概念化(方形環濠出現以前)		
対象	環濠内	想定される機能
区画	居住施設	A 視覚的・物理的結界・区別(抗争抑制装置(緩衝帯)にも働く)
		B 防衛・防禦
		C 防水害・利水
		その他
	貯蔵穴	A 視覚的・物理的結界・区別(抗争抑制装置にも働く)
		B 対害獣
		C 乾燥(防水・防湿)
		その他
	空間 (遺構の空白部)	A 視覚的・物理的結界・区別
		B 防衛・防禦(避難空間)
		C 防水害・乾燥(避難空間)
		D 非日常的行為の場(祭祀等)/日常的(定期的)行為の場(作業や市)
		その他(家畜飼育施設等)
掘削行為(付加属性)		象徴的施設(モニュメント) 集落維持装置 共/協同性の体現 など
* 区画施設に関する評価は上位概念として、区別観念・意識が考えられる。		

く内溝 S D 01 は断面 V 字形で最大幅 4.2m、深さ 1.4m である。溝の内部は 9000 m<sup>2</sup> である。

北部九州の様相は、特に玄界灘沿岸地域については後述するが、佐賀県では環濠集落は①弥生時代前期後半から中期初頭、②弥生時代中期末から後期初頭、弥生時代後期後半以降の 3 時期に出現する（細川・土屋 2009）。②の時期に造られる環濠集落は鳥栖市本行遺跡や吉野ヶ里遺跡など地域の拠点となる集落であり、前期または中期の前半から継続するものが多い。後期後半以降、惣座遺跡や原古賀三本谷遺跡など張り出し部を持ち、濠を多重に巡らす環濠集落が特徴的に出現するこれらの有明海沿岸に特徴的な張り出し部を持つ環濠集落は中国の城郭造営思想に影響を受けたものと考えられている〔七田 1997〕。

環濠の形態については、武末純一は北部九州の環濠から「円形」から「円形のなかの方形」、「方形」へと環濠形態が変化し、環濠の持つ意味合いが変化すると導いた〔武末 1990〕。その変化は弥生時代後期前後に、前期以来の円形環濠から、円形環濠のなかの方形が生まれ、やがて円形環濠が失われる。ほかにも、七田忠昭による中国城郭構造と弥生環濠の関連性の指摘がある。佐賀平野の神埼地方では環濠の画期として、第Ⅰ期：縄文時代晩期（弥生時代早期）の韓半島文化導入期における環濠集落形態の伝播、第Ⅱ期は弥生時代中期前半期における区画の突出部と物見やぐら、鍵型の出入り口など中国城郭の城壁構造の部分的模倣、第Ⅲ期は後期後半から終末期における中国城郭の城壁構造の全体的模倣の段階を設定した。Ⅱ・Ⅲ期の変化は佐賀平野を中心とした有明海北岸地方を中心とした特徴である。

環濠の掘削工程については、宮崎敬士が熊本県の環濠（五丁中原遺跡や蒲生上の原遺跡など）でみられる大溝の諸特徴、①大溝底面プランの屈折部の存在、②底面の段差の存在、③屈折部における溝の断面形態の変化、④屈折部間の直線的な底面プラン、壁面の一樣な形状 から、大溝掘削時の掘り方の違いを示す単位を認め、単位ごとの作業集団を想

定した（宮崎 1995）。

また単位が切り合っていることから、掘削作業は必ずしも同時併行的に行われたものではないとした。この視点は、環濠と集団を考える上で重要である。

先の大保横枕遺跡でも注意して調査を進めたが、大保横枕遺跡で確認した底面プランでの切り合いは、溝さらえに伴うものと考えた。また、再掘削が行われており、掘削工程は当初の掘削に伴う遺構形状、再掘削に伴う遺構形状などが複雑に重なっていることが想定され、その復元はなかなか難しいものと感じた。

維持過程については、福岡平野の初期環濠は掘削後すぐに埋没をはじめ、一定期間維持する試みは確認できないという（吉留1993）。また、一方で後期段階の環濠は数回の掘り直しが一般的に想定されている。

これらの違いが、時代的背景の変化や地域社会の在り方なのか今後検討が必要である（第17表）。なお、三国丘陵の前期環濠では掘り直し・維持過程を意識的に探索した結果、数回の掘直しを認めた（片岡1988、山崎2010など）。これから、調査・研究が進展する分野であろう。

環濠の埋没過程については、その観察・判断は非常に難しい。しかし、環濠の維持過程を考える際、堆積状況の把握は重要で、外土手・内土手を類推することも可能である。弥生時代の環濠はそのほとんどが防御にそぐわない外土手が多いという〔武末1990〕。福岡県今宿五郎江遺跡では、環濠が谷部分を走行するが、その谷部分でグリッド堀りによる層位的な調査と綿密な土層確認が行われた。その結果、掘削土を溝の外に積み上げた堤状盛り土の痕跡も明らかになっている（福岡市2007）。

北部九州の環濠の埋没過程では、土器・石器・貝殻などの廃棄形態が、①火災などによる臨時の土器廃棄、②陸橋付近で行われた日常的な土器片廃棄、③環濠の意図的な埋め立てによるものの3つが想定されるという（竹中2007）。

## 7. 環濠と社会

### （1）. 環濠を持つムラ／持たないムラ

弥生時代集落には濠のあるものとなないものがある。

囲郭集落の形成される契機は、定着を基本とする穀物栽培（集中的備蓄、管理可能な食料の精算）の開始と何らかの要因による集団の凝集性である（石黒 1990）。

環濠を持つ時期／持たない時期は社会的要因において形成されるものである以上、その併存は広域的にあり得ても、狭域的には認められない。環濠の有無に社会性を考慮した場合、その集落動態から地域社会のおおよその範囲が明らかになるであろう。

北部九州には集落面積が数十haとなるひとつの平野を領域とする拠点的な巨大集落群が中期後半（中頃 統一する）以降出現し、後期に入ってその規模をさらに拡大する。糸島平野の三雲・井原遺跡群、福岡平野の比恵・那珂遺跡群、須玖遺跡群などが著名である。現在の埋蔵文化財行政では数十の遺跡名が付けられているが、近年になってようやく一つの集落群としての位置づけが可能となってきた。

これらは、中国の『史書』に国と表記されるような中枢をなす遺跡である。これまで、一集落としての認定が難しく、漠然と「環濠」はないと考えられてきた。また、このような「国邑」は環濠を必要としないとも考えられてきた（中尾2012）。新石器時代後期の中国でも囲壁集落が盛行する時期に、比較的巨大な集落がそれを欠いたり、途中で放棄



する例があるという（中村2002）。実際、これらの遺跡群は古くから市街地化が進んでおり、一度にまとまった面積の調査が行われていない。数十次から数百次を越えるモザイク状の調査をつなぎ合わせる各自治体の担当者の検討・努力が結実し、およそその遺跡群の全容が明らかになりつつある（井上・平田2011、久住2008、角2006、平尾2014ほか）。

そのうちでも古くから調査の蓄積があり、集落研究の進んでいる比恵・那珂遺跡群から、それぞれの時期の環濠の特徴を抽出しよう（第184図）（吉留1999、久住2008）。

比恵・那珂遺跡群は福岡平野のほぼ中央に位置し、東西を御笠川・諸岡川と那珂川に挟まれた標高5～11mの中位段丘上に立地する。遺跡の範囲は南北2.5km、東西最大1.0km前後に及ぶという。環濠や条溝などの大溝は突帯文単純期のものから、古墳時代に至るまでみられる。比恵遺跡の「環溝住居址」など学史的にも著名な遺跡である。

環濠の掘削は夜臼Ⅱ式～板付Ⅰ式段階の二重環濠が那珂遺跡の南端に現れる（那珂37次）。この時期、段丘縁辺部に10～12か所の中小の集落域が営まれる。環濠集落周辺では板付Ⅱ式の遺物が減少、継続性がない。

その後、那珂遺跡中央東側に前期後半段階の環濠が掘削される（那珂67次）。径（60～80）×50m、幅4.15m、深さ2.4mで、これは貯蔵穴専用の小規模環濠とみられる。中期前半になると、段丘縁辺部の集落が段丘中央へ移る。中期前半における段丘中央の遺構密度はまだ低いが、比恵遺跡では中期中頃（須玖Ⅰ式新相）には遺構数が増大、那珂遺跡では中期後半から集住化が顕著となる。墓域のあり方からも、比恵遺跡と那珂遺跡が一体化していく。

中期後半には、比恵・那珂遺跡群の段丘上を区画する大溝が掘削される。比恵遺跡の大溝は集落のレイアウトの基軸とみられ、環濠とはなっていない。大溝は幅5m、深さ2.5m前後の断面逆台形の条溝で全長900m以上、クランク状に曲がり、谷部へ取りつく。比恵・那珂遺跡全体にわたる大規模な土木事業である。大溝には、溝底の滞水状況や護岸杭列の存在、小舟の引き込み部と考えられる支溝があり、当初は段丘を東西に横断する「運河」であった可能性がある（吉留1999b）。大溝の両側には竪穴住居が少なく、掘立柱建物群や高床倉庫群が配置される。大溝はその後、継続して維持され、古墳時代前期前半まで区画溝として機能したと考えられる。

那珂遺跡の大溝はもともと幅3m前後、深さ1.6～1.8m程の全長300m以上の直線的条溝で、段丘を横断する。比恵遺跡の大溝と同じ時期に掘削される。中期末には大溝の西北側に5×8間の大型建物があるので、条溝はこれらの空間を明示したものと考えられている。

後期における比恵・那珂遺跡群は、方形環溝を中心とする中枢域や倉庫域の成立など、より機能的に再レイアウトされる。中期後半に掘削された大溝は埋没が進行するが、新たな大溝（条溝）が段丘上の各所で後期前半に掘削され、より段丘上の区画が明示される。1号方形環溝内では、竪穴住居数棟から大型建物への変遷が考えられる。方形環溝は一定空間のなかで近接・連続して営まれており、古墳時代首長居館的なあり方に通じる（久住2000）。これらの環溝（1・3号環溝）は比恵遺跡中央の大溝南北走行部分に平行し、先行する集落レイアウトにそって造営されている。

比恵遺跡の後期大溝（比恵40・48次）は中期後半段階の大溝の埋戻しに伴って併行する位置に掘削され、倉庫域の南限付近を走る。那珂遺跡18次の大溝は深さ3m以上の断面Y字



弥生時代中期後半から後期初頭



弥生時代後期後半から古墳時代前半

形を示し、防御的性格も考えられる。それと 180m 離れるが併行する大溝（那珂 49 次）があり、大規模な区画となっている可能性がある。これらの後期大溝は比恵・那珂遺跡群の段丘上をブロック状に区画し、環溝と併せて「街区」を形成していた。終末期になると、比恵・那珂遺跡群を南北に貫く全長 1.5 km 以上の長大な道路状遺構が成立する。幅 5 ～ 9 m、平均 6 ～ 7 m の両側に側溝を持つ。集落の新たなレイアウトを決める基幹道路の成立である。集落の中核域では 1 辺 70m の 2 号環溝が掘削される。比恵遺跡の北部には古墳時代初頭までに開削された幅 25m 以上の河川状の落ち込みがあり（31 次）、人為的に段丘を切った「運河」状の施設の可能性がある（吉留 1997、久住 2000、2008）。

このように、比恵・那珂遺跡群のような集住の進んだ巨大集落には、「環濠」を伴わず、段丘上を区画する集落レイアウト、都市計画が「条溝」によって行われている。集落を圍繞する明確な環濠を伴わない背景にはその集落の大きさや自然地形利用があり、集落の西側の那珂川と東側の御笠川・諸岡川自体が集落を囲む大枠の地形環境として機能している。いわゆる「環濠」とは異なるが、広範な集落形態をとる大型集落、比恵・那珂遺跡群のあり方である。

このようなあり方は、板付遺跡の外濠・内濠の捉え方にも通じる（山崎純 1990）。三雲・井原遺跡群でも段丘裾で、部分的に大溝が検出されているが、周辺環境を取り込んだ同様の集落構造が窺える（図 18）（角 2006）。

## （２）環濠と地域社会～北部九州を中心として～

地域ごとに、社会変化（成層化）と関連する集落動態には若干のタイムラグや相違がもちろんあるだろう。ここでは、大きく北部九州の弥生時代集団関係の変遷と弥生社会における環濠の持つ意味について考察する。

北部九州に限ってみれば、弥生早期に稲作農耕文化とともに伝来した環濠集落が、前期には一部変容を遂げ、貯蔵穴専用環濠が出現する。前期環濠は前期末～中期初頭までにはほとんどが埋没し、中期前半までは環濠が掘削されない時期がみられる。中期後半以降、再度環濠が掘削され始め、その分布を拡大する。環濠を欠く北部九州における中期初頭から前半はどのような時代なのであろうか。集落の動向からは、中期前半代の集落分散化／移動現象が環濠集落の消長と関連している可能性があり、また、貯蔵穴専用環濠は貯蔵形態の変化がこの時期にあり、関連しよう。中九州や南九州では、北部九州とは異なる環濠集落の盛衰があるようだ。北部九州の動きと必ずしも連動していない。中九州・南九州では中期（前半）以降に掘削される環濠がみられ、今後、弥生時代集落周辺における環濠探索の成果から、地域ごとの議論が可能となるであろう（本田 2011）。

### 〔早期～前期〕

福岡平野では、板付遺跡の成果からみて、板付Ⅰ式段階までには水稻農耕地が一定範囲に拡大しており、集落間のネットワーク形成が進んでいることが分かる。板付Ⅰ式段階に出現する環濠集落はこうした既存の集落間ネットワークの中で構築されたと考えられる。環濠内部の調査例は乏しいが、有田、原東遺跡などの少ない事例から環濠内には散漫に住居、貯蔵穴などが存在しているだろう。最近では福岡県備後守屋敷遺跡の環濠内住居の検出例があることからそのことは裏付けられる。

環濠内にある小集落の構成員が、単独で集落を囲郭する規模の環濠を掘削することは土木

量から見て不可能である。少なくとも平野内（領域）の複数のブロックによる協業が必要である。筆者が三国丘陵で検討したような近隣集落および、そのソダリティーを横断する協業によるものも想定される（山崎 2010）。

居住域を囲う環濠は、平野ごとに、一時期 1 カ所で、ブロックを異にして継続的に設けられる特徴があるという。那珂遺跡の二重環濠→有田遺跡 A 環濠→板付遺跡環濠→有田遺跡 B 環濠というように福岡平野と早良平野において輪番で造られているという興味深い指摘もある（吉留 1994）。

環濠を有する集落については、造営に関して当然何らかの背景が存在したはずであるが、周辺集落における集落規模の差や優劣は見出しがたい。三国丘陵では、構成員の富である貯蔵穴内の穀物を共同で管理する動きから、突出した集落が環濠を持つということでもない。弥生時代前期には周辺集落が共同で農耕にあたり、その生産物を共同で管理するあり方が看取され、貯蔵穴管理用環濠はその具体像を端的に示すものと位置付けることができる。環濠・およびその内包施設は特定の有力集団が所有するものではなく、周辺集落が共同掘削、共同管理に当たる状況（等質的な集団関係の構築・維持）が弥生前期社会の特徴と位置付けたことがある（山崎 2010）。掘削行為には、共同の生産物を守る目的から掘削にあたった周辺集落がより強い「共・協同性」への意識高揚があり、環濠掘削後の機能にはそれに加え、共同貯蔵穴群の境界としての表徴、外敵防止の機能、湿気ぬきの機能等、必ずしもひとつの機能に収斂するわけではなく、様々な意味合いや機能を有している。

三国丘陵における貯蔵穴専用環濠も前期末にいたって埋没する（環濠の放棄）。環濠を集落間の争いの影響で生じた防御的施設と考えると、逆に環濠埋没期の前期末に周辺の墓域で犠牲者の墓などが散見され、小規模な争いが起こっている。この時期以降は、貯蔵穴も群集するというよりも、住居周辺や住居近接地での管理となり、貯蔵域として明確でなくなり、居住域内に取り込まれるようになる。共同性の具現としての貯蔵穴群（あるいは付属する環濠）は見えなくなる。

弥生時代前期社会は集落間ネットワークこそが当該期の社会体制であり、集落を囲郭する環濠についても、平野単位で増大した生産余剰や、ブロック間で発生する様々な利害に対して、初期には有効に働く調整装置としての施設であったと推定する（吉留 2008）。環濠埋没期の前期末～中期初頭の時期は、博多湾沿岸部では、平野の中央部（特に低地の微高地上）に多くみられた早期から前期の集落が衰退する時期で、前期に低地帯に多く営まれていた集落が各平野の周りある丘陵や段丘上に移動したと考えられる（小澤 2013）。この現象は遠賀川の彼岸原丘陵、北九州の紫川流域の段丘・丘陵上でもよく似た変化が見られる（森 1966・橋口 1987・小澤 2000 b）。三国丘陵では、若干時期は後出するが、中期前半までに三国丘陵遺跡群が衰退し、周辺へ分散化する（山崎ほか 2005、山崎 2010）。

#### 〔中期〕

こうして成立した丘陵上の遺跡は安定的に継続するが、中期に入って新たに掘削される環濠はほとんどない。他にも三雲・井原遺跡群、比恵・那珂遺跡群、須玖遺跡群では、それまで台地の縁辺部に点在していた小集落が、台地の中央部へ進出することによって結合し大きな集落を形成し始める動きがみられる。このように、北部九州の各地で、「前期末～中期初頭」以降には集落画期・移動現象が認められる。



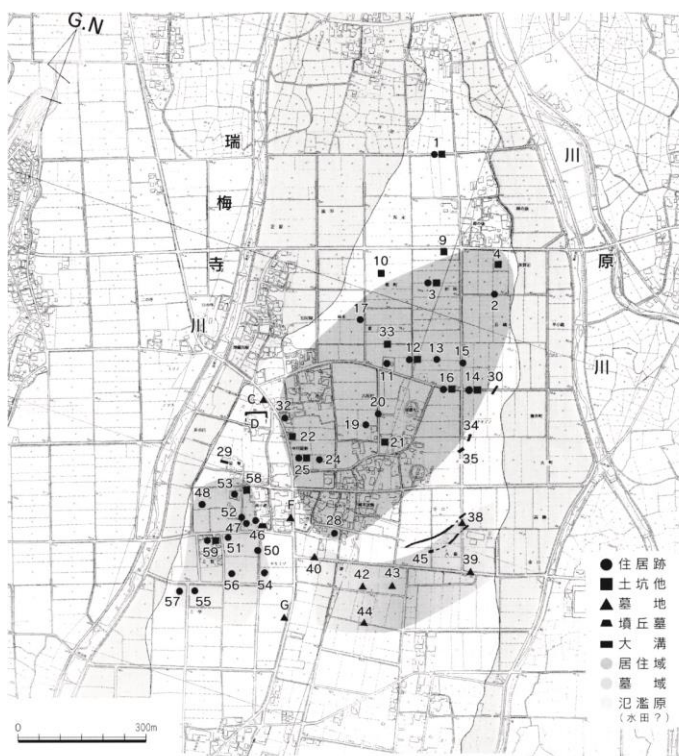
中期後半には比恵・那珂遺跡群や大南遺跡、樋井川A遺跡、今宿五郎江遺跡では環濠や大溝が掘削される。博多湾沿岸では前代の中期前半代まで新たな環濠集落がほとんど見られないことから、大溝の掘削行為はこの時期の拠点集落形成（集住化に伴う）の特徴的な動きである（第185図）。博多湾沿岸地域において、三雲・井原遺跡群、比恵・那珂遺跡群、須玖遺跡群などの集住の対象になった多くの遺跡は既に大規模な集落に成長しつつあり、区画墓や大型建物など特徴的な遺構を有し、拠点的な集落となっている（第184・185図）。継続して集住化の対象となるこれらの特別な集落は、後期を通じて拠点的な集落となる。規模は数十万～100万㎡に達し、一平野を単位に1～2集落が形成される。中期中頃に出現し古墳時代前期まで継続する。

#### 〔後期〕

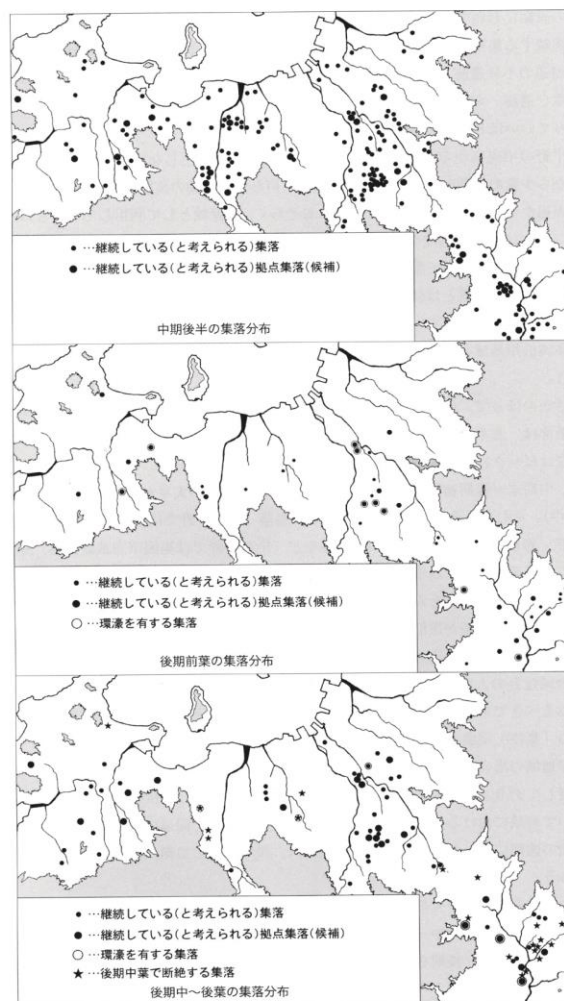
中期後半から後期前半には、大規模集落の展開と併せて「高所立地型集落」（吉留2004）が出現する。高所立地型集落は、他の集落から離れた丘陵頂部や山頂などに少数の住居と焼土坑で構成される小規模集落であり、平野ごとに少数が存在する。三苦永浦遺跡、席田大谷遺跡、野間B遺跡などがあり、必ずしも、環濠を伴っていない。糸島平野では中期後半以降に、環濠が中心的居住域を圍繞する大型環濠集落（森本A類）が成立する（第177図）。福岡平野では南の中核集落である須玖遺跡群南部に、大溝が地形に沿う形で丘陵外縁を（部分的に）めぐる環濠集落（森本B類）が成立し、筑紫平野側勢力への対応とみられるが、環濠集落A類は出現していない。糸島の環濠集落A類成立に対応する現象が高所立地型集落であり、福岡平野の縁辺部を中心に位置している。これらは、糸島と福岡平野に中核集落が成立した直後の最初の緊張関係を示すものである（森本2011）。中期初頭から古墳時代前期までに断続的に消長する比高130～170mの佐賀県湊中野遺跡は遠く壱岐から唐津湾、糸島半島までが眺望できる立地にある。C区丘陵では竪穴住居16棟、小児棺7基、土坑11基がみられ、その他の丘陵も併せて25基の焼土坑が検出された。対外交渉の門戸としての長期的な監視・通信機能を持った高所立地型集落の成立をうかがわせる。湊中野遺跡の調査が行われた昭和50年代後半は、「高地性集落」が軍事的性格を持つ集落で倭国乱と結びつくとする見解が主流であり、湊中野遺跡も軍事的緊張が高まった際に使用された集落と推測された（田島・中島1985）。その後、報告者である中島直幸は「末盧国の情報ネットワークの最先端基地として、大陸・伊都国の双方をにらむ位置に、日常的に通信的機能を担うために、通常のムラから小規模の集団が長期にわたり、高地に集落を形成したムラと考えられよう。おそらく、大陸・伊都国の情報をいち早く末盧国の中枢部へと瞬時に通信していたことであろう」と再評価している（中島1995）。それと併せて、中期後半の福岡県三苦永浦遺跡J地区（比高40m）は博多湾の眺望、北九州では中期後半の黒ヶ畑遺跡（比高90m）、高塔山遺跡（標高120m）、小伊藤遺跡（標高110m）などは洞海湾や関門海峡を眺望できる（吉留2004）。

後期後半～終末期前半になると、福岡・早良平野でも環濠集落A類が成立する。早良平野の西縁・東縁部と福岡平野の東縁部に分布する。早良平野は中核集落が存在しない点と環濠集落A類の成立が福岡平野と連動している点などから、後期後半から終末期までに奴国域になる可能性が高い（森本2011）。博多湾沿岸の、これらの環濠集落は弥生時代終末期には環濠の埋没が進み、古墳時代前期前半まで拠点性を維持するが、古墳時代前期後半には中核集落の消長と連動して衰退する。環濠集落の防御集落としての性格を重視する





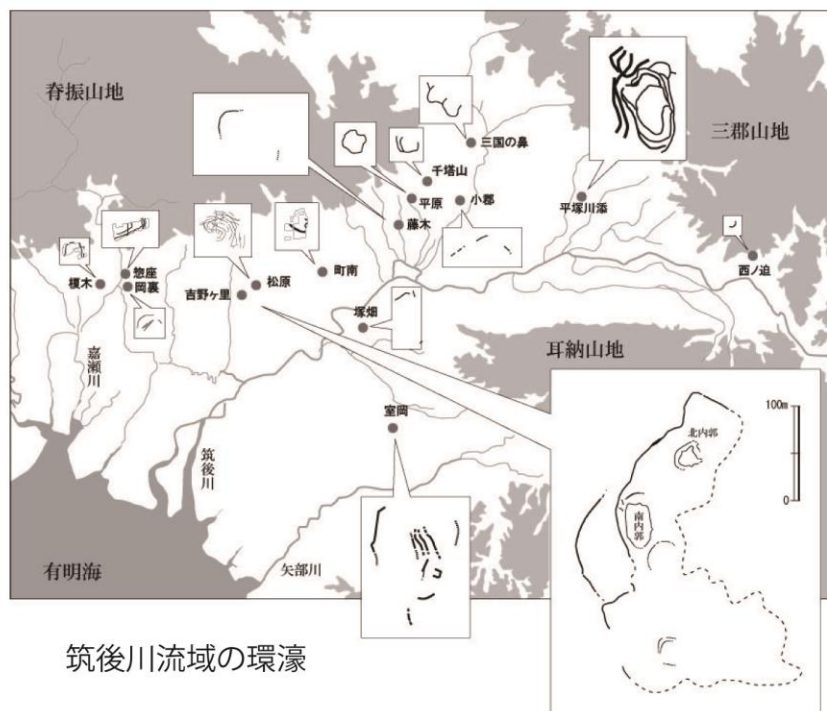
三雲・井原遺跡群



博多湾沿岸地域における集落動向



三国の鼻遺跡



筑後川流域の環境

ならば、博多湾沿岸地域におけるその分布は平野縁辺の要衝の地を中心としており、戦略的な立地とみえる。環濠集落の成立が拠点集落としての成立期でもあり、伊都国や奴国などの政治的動向や緊張関係を反映するものと考えている（森本 2011）。

各環濠集落は弥生時代終末期に環濠の埋没が進むので、後期後半～終末期前半のなかでも短期間の緊張関係を示す。背景として考えられる社会現象に「倭国大乱」などがあるが（小澤 2002）、当該期に活発化する対外交渉における主導権をめぐる対立や緊張関係もあったであろう（森本 2011）。

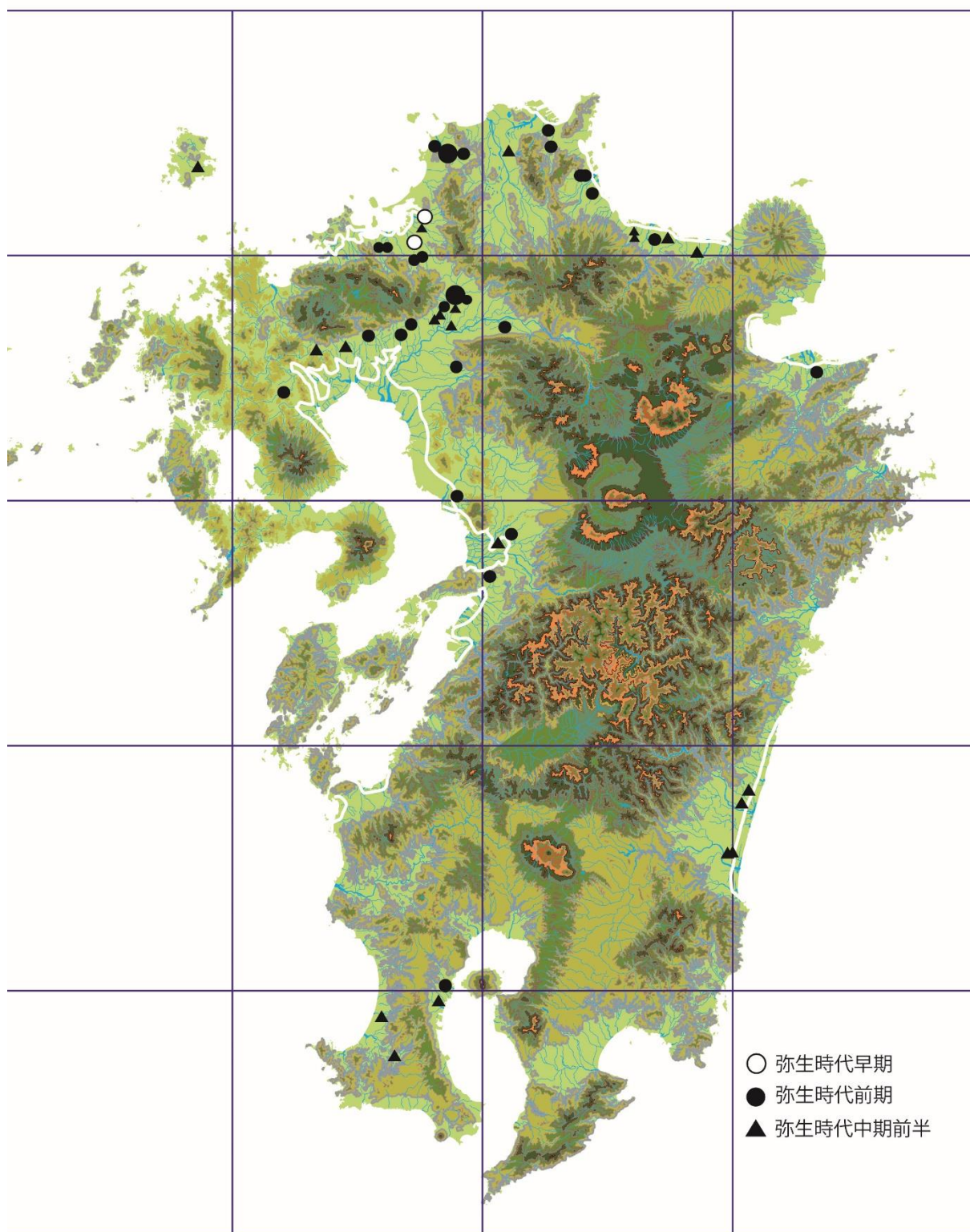
二日市地狭帯付近の三国丘陵では、三国の鼻遺跡でも後期中葉以降、丘陵上の集落を環濠で囲い、さらに内部を分割する溝がある（第 185 図）。佐賀県千塔山遺跡では後期後半から終末の環濠集落が溝によって分割され、三つの居住集団が明確に確認できる（第 177 図）。

後期後半～終末には筑後川上流域で高所立地型集落が出現する。福岡県西ノ迫遺跡は標高 130m、比高 90m で、環濠や住居、陸橋、門柱が検出された。標高 390m、比高 90m の大分県白岩遺跡でも環濠や焼土坑が検出され、自然石を転用した投弾が出土した。標高 410m、比高 80m の大分県陣ヶ台遺跡では環濠が検出され、竪穴住居と併せて墓地もみられ、生活領域のなかで軍事的防御的機能を付加させた高地性集落と位置付けられた（柴田 2004）。

以上のように、環濠は相当の労働力投下を伴うことから、集団の動態と大きく関連し、各地域の集落変遷と大きく連動するだろう。集団の展開・成層化と環濠集落の動向を地域ごとに検討しなければならない。

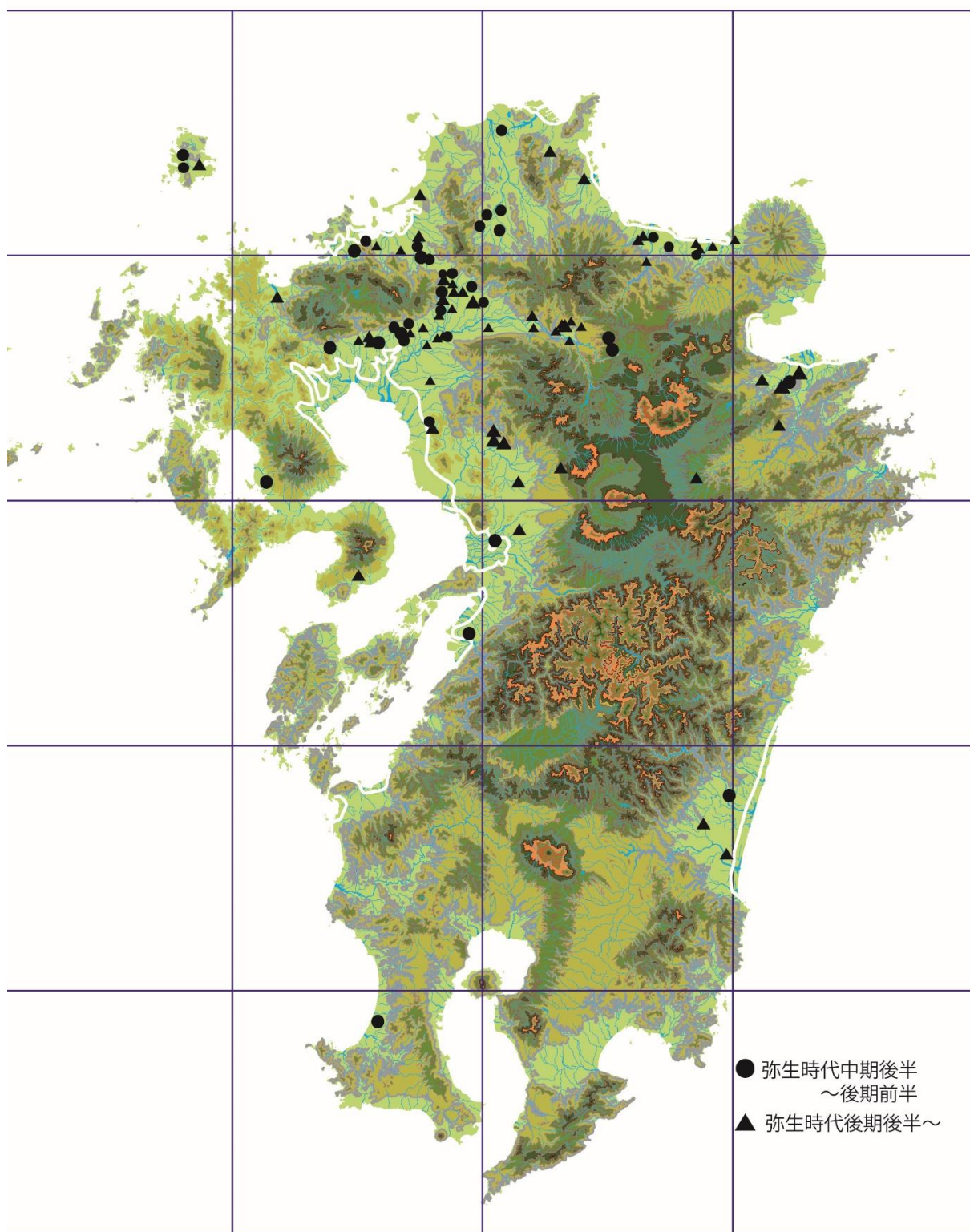
第 18 表 九州島の規模のわかる環濠(集落)〈抽出分〉

No.	地域	遺跡名	所在地	時期(出土土器)	立地	規模(最大)	断面形	備考
1	筑前	那珂	福岡市	早期	段丘(11m)	外:径150m、幅5m、深さ2m 内濠幅2m、深さ1m	V字(外)、逆台形(内)	
2		板付	福岡市	前期初頭	段丘(11m)	横円:110m×80m、幅3m、深さ2.2m	V字	・低京溝で内部区画・外濠の可能性
3		今川	福津市	前期初頭	丘陵(14m)	円:(80)×(60)m、幅3m、深さ1.3m	V字	
4		有田	福岡市	前期前半	段丘(13m)	横円:300m×200m、幅3.9m、深さ1.8m	V字	
5		那珂	福岡市	前期後半	段丘(6m)	円:(60~80)m×50m、幅4.15m、深さ2.4m	V字	貯蔵穴専用環濠か 陸橋幅2.2~1.75m
6		光岡長尾	宗像市	前期後半	丘陵(32m)	円:46×42m、幅5m、深さ1.3m	V字	貯蔵穴専用
7		今宿五郎江	福岡市	中期後半~後期前半	段丘先端~沖積地(5m)	不整円? :径120m前後、幅3.2m、深さ0.8m	逆台形	
8		今宿五郎江	福岡市	後期初頭~終末(古墳前期)	段丘先端~沖積地(5m)	270m×200m、幅3m、深さ1.5m	逆台形	(削平を受ける深さは2mを越えない?)
9		比恵	福岡市	後期初頭~前半	段丘(6m)	方形:30×33m、幅4m、深さ1m	逆台形	環濠住居址
10		雀居	福岡市	後期後半	微高地(5m)	(200)×(130)m、幅5m、深さ1m	U字~逆台形	
11		野方中原	福岡市	後期後半	扇状地(15~26m)	円:入径(120)×100m、幅2.5m、深さ0.5m	逆台形	
12		野方中原	福岡市	終末期	扇状地(15~26m)	方:径30m×25m、幅3m、深さ1.2m	V字~逆台形	
13	筑後	横隈山	小都市	前期中頃~後半	丘陵頂部~南緩斜面(33m)	約87m×55m、幅0.8m~2.6m、深さ0.9m~1.8m	V字	
14		三沢北中尾7(1号環濠)	小都市	前期中頃~後半	丘陵南斜面横断(32m)	検出長約17m、幅1.4~2.4m、深さ2.1~3m	V字	大きく削平、2号溝より先出、上層土器はⅡb古まで一旦途切れて連続する場合、検出長25m程。
15		三沢北中尾7(2号環濠)	小都市	前期中頃~後半	(東南に張り出す)丘陵頂部~南緩斜面(32m)	円:径約48m、幅2.2~3m、深さ約3m	V字	横隈山5地点につながる。1号溝より後出、削平をめぐりた箇所では約48mを測る
16		三沢北中尾1	小都市	前期後半~末	(東に張り出す)丘陵頂部(32m)	隅丸方形:73m以上×72m、幅1.6~7m、深さ1.1~4.2m、深さ1.7~2.2m	V字	貯蔵穴専用「環濠の西端中央部は完全に消えている部分が長さ7mにわたっているので、(その箇所は)高さ1m以上削られていると考えられる。
17		横隈北田	小都市	前期中頃~末	丘陵頂部(33~35m)	隅丸方形:68m以上×44m以上(検出部分)、幅2~4m、深さ1.7~2.2m	V字	貯蔵穴専用。地形を利用、全周せず、掘り直しのズレ有か
18		大保横柱2(AIC)	小都市	外:前期中頃~後半 内:前期中頃~後半	段丘上(15m、北~東に谷部、南に浅谷部)	横円:外:77m×76m、幅3.4m、深さ1.65m 内:52m×50m、幅4.12m、深さ1.96m	V字	二重環濠、貯蔵穴専用
19		大保横柱2(A・BIC)	小都市	前期後半	段丘上(15m、北~東に谷部)	隅丸方形:140m以上×80m以上、幅50~130cm程度、深さ50~70cm	U字	小規模環濠、二重環濠の外濠の埋込過程で掘削、集落を囲繞
20		飯坪	久留米市	前期~中期(前期後半中心?)	沖積微高地(7m)	円:径73m、幅1.3×3.1m、深さ1.4~1.7m	V字	道路幅の調査
21		立野・大坪	八女市	前期後半	段丘(22m)	円:径50m、内環濠幅5.4m、深さ1.3m 外環濠幅2.4m、深さ1.5m	逆台形	二重環濠 外環濠(最大幅250cm、深さ220cm) 内環濠(最大幅300cm、深さ2.2m)
22		三国の鼻	小都市	後期中頃~終末	丘陵(40m)	Ⅰ期:32m×26m幅4.1m、深さ1.75m Ⅱ期67×26m幅4.5m、深さ2.35m、墓周:全周48m	逆台形	北東側は回らない
23		平塚川添	朝倉市	後期後半~終末	沖積微高地(20m)	横円:250m×110m3~4条、幅6~14m、深さ1m	緩いU字	多重環濠集落
24		西ノ迫	朝倉市	後期後葉	丘陵(100~131m)	円:35m×?、最大幅2.35m、深さ0.8m	逆台形	北高90m、陸橋(埋戻し)1箇所、9m、門柱間3m環濠は崖面に現存不明
25	豊前	辻垣島田・長通	行橋市	前期中頃	沖積地(11m)	長円:180×35m、幅1.7m、深さ0.8m	V字	
26		葛川	行橋市	前期中頃	丘陵(20m)	円:57×43m、幅2.6m、深さ1.9m	V字	貯蔵穴専用
27		原の辻	志岐市	中期後半	低台地(18m)	横円:750×300m、幅3m、深さ1m	U字	
28		原の辻	志岐市	後期後半	低台地(18m)	横円:780m×(580)m、幅2.8m、深さ1.3m(SD03)	U字	
29		小楠	佐賀市	前期前半	段丘(11~13m)	横円:170×140m、幅3m、深さ1.2m	逆台形	
30		八ツ釜金丸	鳥栖市	前期中頃~末か	丘陵頂部~南東緩斜面(55m)	円:径28×26m、幅2.7~3.3m、深さ約2.3~2.7m	V字	小規模環濠 南西に陸橋、内部に貯蔵穴と住居4軒(前期末~中期初頭中心?)、貯蔵穴群の方が古い?
31		吉野ヶ里(杉籠田区)	神埼市	前期	丘陵(18m)	円:径20m、幅2m、深さ1m	V字	小規模環濠、2012年度発掘資料
32		吉野ヶ里	神埼市	前期前半~後半	丘陵(20m)	横円形:南北200m×東西160m程度、幅3m、深さ2m	V字	2.5ha、北東に隣接して径20mの小規模環濠有
33		吉野ヶ里	神埼市	中期初~後半	丘陵(20m)	横円形:南北400m×東西500m以上、幅6m、深さ2m以上	V字	20ha以上、丘陵南部
34		吉野ヶ里	神埼市	後期前半~終末	丘陵(20m)	丘陵地形に沿う:南北1000m、東西400m、幅3.3m、深さ1.9m	V字(低地では逆台形)	40ha以上
35		吉野ヶ里北内郭	神埼市	後期後半~終末	丘陵(20m)	二重A字形:底辺60m、高さ56m、2750㎡	逆台形	突出部あり、陸橋1箇所、掘立柱建物为主体、北環濠外に高床倉庫群
36		吉野ヶ里南内郭	神埼市	古段階:後期後半 新段階:後期後半~終末	丘陵(20m)	(古段階)不整形、南北150m、東西70m、7800㎡ (新段階)長方形、南北150m、東西90m、11000㎡	逆台形	突出部有、陸橋2箇所、掘立住居のみ
37	肥前	原古賀三本谷	みやき町	後期	扇状地(20m)	外:横円57×46.5m幅3.6m、深さ0.7m 内:37×21(西に突出部)幅3.8m深さ0.6m	逆台形	2重環濠2、遺3、堅穴住居84、土坑309、周溝状遺構5、2重環濠のうら、SD132・SD055が調査区外に及び構造不明
38		千塔山	基山町	後期後半~古墳初頭	丘陵(53m)	方形:U字溝方形75×67m以上、 方形:V字(古墳初頭)95×75以上、幅4.4×深さ1.6m	V字・U字	U字溝:北側中央に陸橋1箇所(幅1.25m)
39		下郡(E区)	大分市	後期後葉から終末	自然堤防(5~7m)	隅丸径65m前後、幅2.0~3.0m、深さ1~1.5m	V字~逆台形	外土塁、掘り直し、最終的に上層に大量に土器廃棄
40		下郡(H区)	大分市	後期後葉から古墳初頭	自然堤防(5~7m)	検出長150m、最大幅5.4m、深さ1.87m	V字	掘り変え有(SD01~SD02範囲拡大) 内土塁 掘り直し
41		白岩	玖珠町	後期後半	丘陵(385m)	地形に沿う:南北165m×東西65m、幅1.3~3m	V字~逆台形	外側に土塁が想定 東側は崖面、内部に粘土堆有、
42		小迫辻原	日田市	弥生時代終末	台地上(120m)	1号環濠:東西150×南北100m、最大幅2.5m、深さ1m	逆台形	小迫辻原Ⅰ期
43		小迫辻原	日田市	弥生時代終末	台地上(120m)	2号環濠:方形1辺100m、幅3m、深さ1.5m	逆台形	小迫辻原Ⅱ期、内側に小溝
44		小迫辻原	日田市	古墳時代前期初頭	台地上(120m)	3号環濠:隅丸方形1辺100m、幅4.5m、深さ1.6m	V字	小迫辻原Ⅲ期、土塁有か
45		小迫辻原	日田市	古墳時代前期初頭	台地上(120m)	1号方形環濠:1辺47m、幅3.5m、深さ1.5m	逆台形~V字	小迫辻原Ⅳ期
46		小迫辻原	日田市	古墳時代前期初頭	台地上(120m)	2号方形環濠:1辺36m、幅2m、深さ1m	逆台形	小迫辻原Ⅳ期
47		小迫辻原	日田市	古墳時代前期初頭	台地上(120m)	3号方形環濠:1辺20m、幅1m、深さ0.5m	逆台形	小迫辻原Ⅳ期
48		藤生・上の原	山鹿市	後期後半	台地(55m)	2重弧状溝(93× ) 最大幅3.0m、深さ1.7m	逆台形	菊池川中流域 藤Ⅰ・藤Ⅴ 藤Ⅰ陸橋(幅3.2m)藤Ⅴは掘削途中
49	日向	藤生・上の原	山鹿市	後期後半	台地(56m)	2重弧状溝(180×160m) 最大幅5.1m、深さ1.8m	逆台形	菊池川中流域 藤Ⅱ・藤Ⅲ(+藤Ⅵ)
50		五丁中原	熊本市	後期後半	丘陵(70m)	東西(300)×南北(250)m、幅4m、深さ2.5m	V字	壕には掘削単位?菊池川中流域
51		下郷	宮崎市	前期後葉~中期前葉	洪積台地(90m)	70m×35m以上、最大幅4m、深さ1.7m	逆台形~V字	
52		下郷	宮崎市	中期末~後期	洪積台地(90m)	100m×18m以上 最大幅3.5m、幅1.5m	逆台形	
53		入来	日置市	(前期末~)中期初頭	シラス台地先端(20m)	・U字溝(22m分)、幅0.46m深さ0.2m	U字	小規模弧状溝
54		入来	日置市	(前期末~)中期初頭	シラス台地先端(20m)	V字溝(47.5m分)、幅1.42m、深さ1.2m	V字	台地東端部を横断する条溝
55		寺山	川辺町	中期前半~後半	シラス台地先端(60~65m)	直径40~50m	V字	二重環濠 外環濠(最大幅250cm、深さ220cm) 内環濠(最大幅300cm、深さ2.2m)
56		松木園	南さつま市	中期末~後期前半	シラス台地先端(21m)	80m分、幅4m、深さ2.5m	V字	台地を切断する条溝か
*評価がおおよそ定まっているものを中心に抽出、環濠希薄地域は代表的な大濠を抽出								



第 186 図 弥生時代前半期の環濠分布図





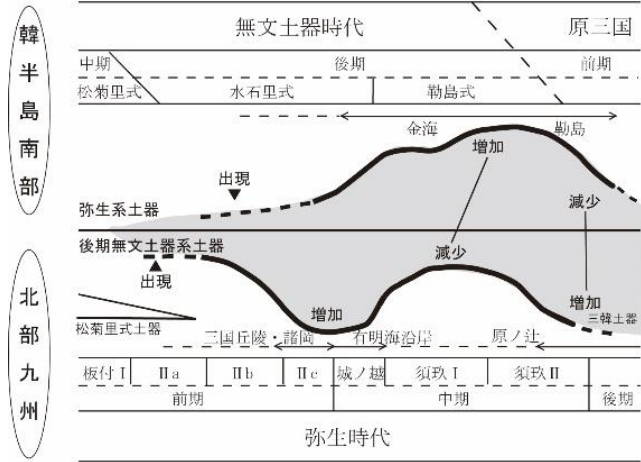
第 187 図 弥生時代後半期の環濠分布図



## 終章 日韓交流の階梯～日韓交流から日韓交渉へ～

### 1. 日韓における土器移動の変遷

近年の成果から、新たに玄界灘沿岸や内陸部において散在的な無文土器系土器の出土事例が追加されるものの、古くから知られる福岡県諸岡遺跡や三国丘陵地域などの集中出土の状況に変わりはない。また、三国丘陵地域では弥生時代前期中頃(板付Ⅱa式)より少数の水石里式無文土器、擬無文土器が確認でき(松菊里型土器の出土とも一部重なり)、従来よりも長期間にわたる流入が認められた(図1)。当初は散在的に少量の甕が出土し、前期末に至って甕・壺・高杯・鉢



第188図 日韓における土器からみた交流概念図

などセットでの集中出土がみられるほか、韓半島の集落構造と類似する集落跡が、諸岡遺跡や三国丘陵の横隈鍋倉遺跡、北松尾口遺跡等で認められ、渡来人の居住、集団の接触について具体的に言及できるようになった(山崎 2010a ほか)。中期初頭以後には、特に有明海沿岸地域で擬無文土器が多く認められ、渡来人の居住と集団の同化が行われていたことが推定される。続く靑島式無文土器系土器の出土は、水石里式無文土器系土器の分布と異なり、対馬や壱岐原の辻遺跡で集中的にみられるほかは、北部九州や中国地方の日本海沿岸域で少量出土する程度となり、大きく変化する。

韓半島では、弥生系土器の出土遺跡は慶尚南道の海岸域である泗川地域、金海地域、蔚山地域でみられ、靑島式土器段階には須玖Ⅰ・Ⅱ式土器が集中して出土している。しかし、近年、韓半島でも弥生前期土器が確認され始めている<sup>(2)</sup>。弥生系土器の出土は少量で散発的なものが多いが、泗川地域の靑島遺跡や金海地域では集中的に出土する遺跡が確認されつつある(李昌 2009・武末 2010)。

以上から、前期末段階における韓半島からの渡来は一時的な交流経路の形成により達成されたものではなく、弥生文化の伝来以降、形を変えつつも、たとえば石器石材の流通等によって維持された経路が存在し、前期末以降、既存の経路に則して顕在化するものであるといえる。その後、無文土器系土器・弥生系土器の分布は大きく偏りをみせ、交流拠点的な遺跡が認められるようになる。中期前半から後半における靑島遺跡や金海地域の遺跡群、中期末以降の原の辻遺跡が該当し、交易拠点として整備される。なお、原の辻遺跡では三韓土器・楽浪土器の搬入の継続から後期後半までその交易拠点として維持されていることがわかる。

### 2. 移住からみた社会の変化

弥生系土器・無文土器系土器出土の時期的変遷には相関性が認められる(第188図)。韓半島から日本列島への前期末段階の移住を大きな契機として、列島では金属器の本格的流入が行われ、それを社会が求めた結果、自集団における生産が要請された。中期以降、金属器生産技術の獲得やその原料入手を列島側から強く働きかけ、韓半島での交流拠点と

なる集落への短期的居住・滞在が進む。そして、それらの連続が弥生系土器の集中出土として現れる。技術や文物の獲得、物資の交換が継続され、立地的に恵まれた集落が交易の場となり、その拠点として発展、整備される。韓半島における既存の流通網についても、日本列島との交易を含めた新たな枠組みで再編が行われ、重層的なネットワーク形成が進められただろう。今後、当時の社会の実像に迫るためには、現在の国の枠組みを超えた視点で広く検討されるべきである。

当該期の移住による社会変化は、対馬海峡を介した交流・交易体制の整備を促し、弥生社会は、楽浪郡設置以前の段階で、東アジア世界の社会的枠組みのなか、国際的な交渉を行う素地が形成されつつあったものと位置付けられる。

### 3. 交流から交渉へ

北部九州では、弥生時代早期から前期、中期前半の空白期を挟んで、中期後半以降再び環濠集落が顕著となっている。これには九州島内でも若干の時間差があり、それぞれの地域で社会の発展や複雑化に違いがあることがわかる。

弥生文化の成立とつながりが深い松菊里文化の一要素として環濠も日本へ伝播し、その後日本的な変容を遂げて、貯蔵穴を囲む環濠の展開も認められる。前期後半から中期初頭においては、韓半島からの円形粘土帯土器の流入、また渡来集団の移住・馴化が進む段階であるが、各地域で小規模環濠が多く作られる時期でもある。

円形粘土帯土器が出土する遺跡、特に複数出土する遺跡は少なからず環濠を持つ集落もしくは環濠集落との関わりがある。壱岐原の辻遺跡は環濠の外側、福岡市諸岡遺跡も板付環濠集落の外側に位置する。三国丘陵では横隈北田遺跡で貯蔵穴を圍繞する環濠の隣接する丘陵に居住域があるが、そこで粘土帯土器が多く出土している。吉野ヶ里遺跡も前期環濠周辺での出土傾向が窺えるし、土生遺跡や八ノ坪遺跡についても環濠存在の可能性が指摘されているところである。津や内陸部での環濠集落と結びつき、多軸的な交流回路を形成しているものと思われる。

弥生時代前期末から中期初頭以降、渡来人がもたらした金属器・金属器生産や青銅器時代の階層化社会は日本においても同様に達成されたとみてよい。韓半島からのインパクトによって、日本の階層化社会への道程が進む。日本にもたらされた青銅武器は韓国では日常の生活域から完形品は出ず、多くは首長層の墓の副葬品である。この取り扱いが北部九州でも再現された。青銅器の生産は渡来系集団が交流回路を維持するなかで、変容無文土器／変容弥生土器段階に技術導入が実現して開始する。移動の自由をある程度持ち、韓半島の意志も貫徹しながら、その地域での開発や階層化、クニの形成を促進する渡来人集団像である。

北部九州の早良平野ではこの時期の青銅器は圧倒的に福岡市吉武遺跡群に集中し、その下に銅剣や銅戈が1～2本の拠点遺跡（野方遺跡、有田遺跡、飯倉遺跡、東入部遺跡など）、さらにその下に青銅器をもてない小集落という階層構造が形成され平野を単位としたクニが成立している。この時期、唐津平野や福岡平野、壱岐島などの国には韓国系青銅器の集中保有遺跡が一つずつある。しかし、それらの青銅器の質と量は大同小異で優劣の差はあまりなく、平野を単位としたクニは時を同じくして成立して実力の差はあまりない。また、特定の遺跡や地域で作られた石器や青銅器が北部九州独特の成人用甕棺が盛行する地域に流通しており大きな北部九州圏を形成する（武末 2018）。

日本で環濠の空白期となる弥生時代中期前半は、弥生系土器が韓半島で顕著となる時期である。環濠を作らない時期が私は一つの社会揺動期ととらえているが、この日本から韓国へ渡来が顕著にうかがえる時期とどのような関係性があるのだろうか。

韓国に渡来して交易を担った弥生人系集団は、釜山菜城遺跡や勒島遺跡などでまとまった弥生土器や変容弥生土器／変容無文土器をのこしている。勒島 A 地区では北部九州だけではなく中部九州や西瀬戸内の土器も確認された。このほか、金海亀山洞遺跡にも弥生系土器が主体の集落がありこうした交流の結節点が韓半島南海岸部にいくつか設定される。

社会の複雑化は中期前半以降進行し、中期末には大規模集落が成立し、弥生時代後半期は新たな集団の秩序が形成された社会となる。この時期には日本列島では三角形粘土帯土器が出土する。

日本列島では三角形粘土帯土器は、遊動性の高い海民の往来を示唆するような、少量の甕を中心とする散発的な出土遺跡が多い（李昌 2009）が、特に博多湾沿岸地域を中心に朝鮮半島系土器の出土遺跡が増加し、逆に有明海沿岸地域では少なくなる（森本 2010、山崎 2010a）この動きは、北部九州における対外交渉の整備が行われたとみてよい。しかしながら、有明海沿岸でも少なからず三角形粘土帯土器が確認されていることから伝統的な交流回路も存在したといえる。福岡県元岡・桑原遺跡群では多器種の出土があり、壱岐・対馬を除くと九州では最も多くの三角形粘土帯土器が確認されている（森本 2018）。また、元岡・桑原遺跡でも無文土器だけでなく、変容品も確認されることから長期的な交流が想定される。

円形粘土帯土器出土分布との違いは、当時の北部九州社会においては、円形粘土帯土器よりもさらに限定された集落、港湾施設や大規模集落で確認されるようになる。特に、三角形粘土帯土器の時期になると、拠点的な集落や港湾施設に集中するので、前代からの情報が収斂され、弥生時代中期後半以降、より一層日韓交流が限定されるのである。これは、韓半島の原三国時代、日本列島の弥生時代後半期に特徴的となり、階層化を果たした結果、より支配者層がコントロールをした形で日韓の交渉へと導いているものと考えられる。

ここに、新たな社会秩序を見ることが出来る。玄界灘沿岸地域では円形粘土帯土器の出土様相と三角形粘土帯土器の出土様相は連続しない（森本 2018）。一方で、有明海沿岸では、少量の出土ではあるが、円形粘土帯土器の出土遺跡と重なることが多い（山崎 2018）。玄界灘沿岸地域では、奴国や伊都国などの博多湾沿岸の国々の発展と対外交渉の変化を示しており、有明海沿岸地域では、北部九州弥生社会が組織される中で、独自対外交渉ルートを保有するものの、別方向の東アジア世界における位置を模索していたのかもしれない。その後も三韓系土器の出土も少なく楽浪系土器もほとんど出土しない。対馬・壱岐・博多湾沿岸での日韓交渉に収斂されていく傾向が窺える。須玖Ⅱ式から後期初頭は博多湾沿岸では、「勒島貿易」から「原の辻＝三雲貿易」への移行が行われたとする見解もあり（久住 2007）、そのような日韓交渉の大きな変化のなかに有明海沿岸地域も含まれている。

この円形粘土帯土器が流入する段階の社会から三角形粘土帯土器が出土する時期の社会変化は、弥生時代前半期と後半期の区分にもあたる。韓国で原三国時代が始まる弥生時

代の中期後半（紀元前1世紀）には、日本列島の各地で地域政権が明確になる。ツクシ政権内部では伊都国と奴国が台頭して他の国々の上に立ち、王が現れて王墓を含めた首長層墓の副葬品は前漢鏡やガラス璧などの中国系が主流になる。これは楽浪郡など漢四郡の設置に伴い、権威のよりどころが古朝鮮から前漢に変化、後期には後漢に引き継がれた。ただし、韓半島南部との交流はさらに盛んになる。三韓土器や楽浪土器が北部九州や山陰を中心に出土し、倭島では、中期後半から後期前半の弥生系土器が全時期と変わらず多く出土し、中広形・広形の銅矛・銅戈や小型仿製鏡などの北部九州産青銅器もみられる。

これまで検討してきた地域色を見出すことのできる小地域社会における「日韓交流」から北部九州弥生社会、大地域社会における「日韓交渉」の段階へ段階への変化を想定する。三角形粘土帯土器時期の具体的な社会変化の提示については今後の課題である。

## 【 文 献 】

- 赤木克視 1992「近畿地方の多重環濠集落」『新版 古代の日本』第5巻 近畿地方Ⅰ 角川書店
- 赤塚二郎 2007「東海・沖積低地の弥生時代の武器とその素材」『稲作とともに伝わった武器』弥生文化博物館
- 秋山浩三 2000「近畿における無文土器系土器の評価」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論集
- 秋山浩三 2002「河内湖岸地域における初期弥生水田をめぐって」『志紀遺跡(その2・3・5・6)』(財)大阪府文化財調査研究センター
- 秋山浩三 2004「弥生中期大形集落・瓜生堂遺跡の一構成単位」『瓜生堂遺跡 1』(財)大阪府文化財センター
- 甘木市教育委員会2004『平塚川添遺跡Ⅱ』
- 有明海・八代海干潟等沿岸海域再生検討委員会 2006『報告書～有明海・八代海干潟等沿岸海域の再生に向けて～』熊本県
- 安藤広道 2002「異説弥生畑作考―南関東地方を中心として―」『西相模考古』11
- 安藤広道 2005「日本列島の初期稲作技術を理解するために―東アジア的視点からの基礎整理―」『日本情報考古学会 第20回大会発表要旨』
- 安藤広道 2007「東アジア史的視点からみた縄文時代・弥生時代の農耕」『研究発表資料集』日本考古学協会 2007 年度熊本大会実行委員会
- 石井龍彦編 2005『井ノ山遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告書第 48 集
- 石黒立人1990「濠のある集落とない集落」『季刊考古学』31 雄山閣
- 石田智子 2015「土器・土製品」『吉野ヶ里遺跡―弥生時代の集落跡―』佐賀県文化財調査報告書第 207 集
- 池田祐司・阿部泰之 2004『橋本一丁田遺跡4』福岡市教育委員会
- 伊崎俊秋編 1999『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―56―』福岡県教育委員会
- 石川日出志2003「弥生時代暦年代論とAMS年代」『考古学ジャーナル』510
- 石川日出志 2009「弥生環濠集落とはなにか」『弥生時代の北陸を探る―考証 八日市地方遺跡とは―』小松市教育委員会
- 石野博信 1967「弥生時代の貯蔵施設」『関西大学考古学研究年報1』関西大学考古学研究会
- 石野博信 1985「西日本・弥生中期の2つの住居型」『論集日本原史』吉川弘文館
- 石橋新次 1996「土器の製作と焼成について」『栖』第 28 号 鳥栖郷土史研究会
- 石橋新次 1997・98「土器焼成に関する二・三の予察」『みずほ』第 23・24 号大和弥生文化の会
- 石丸あゆみ 2011「朝鮮半島出土弥生系土器から復元する日韓交渉―勒島遺跡・原の辻遺跡出土事例を中心に―」『東京大学考古学研究室研究紀要』25
- 井関弘太郎 1953「日本の初期農業集落の立地に関する若干の問題」『名古屋大学文学部研究論集』V
- 伊東隆夫・山田昌久編2012『木の考古学』海青社
- 伊藤秀紀・永井宏幸・蔭山誠一 1999「松菊里型住居」の受容と展開―日韓の比較から―『年報 平成 10 年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 稲富裕和 1995「鉄の武器」『長崎県の考古学』ろうきんブックレット2 長崎県労働金庫
- 井上智博 2002「弥生時代の井堰に関する予察」『池島・福万寺遺跡2』(財)大阪府文化財センター
- 井上義也2009「須玖遺跡群の集落構造」『弥生時代後期の社会変化』第58 回埋蔵文化研究集会
- 岩永省三 1989「土器から見た弥生社会の動態―北部九州地方の後期を中心として―」『生産と流通の考古学 Ⅰ』横山浩一先生退官記念事業会(編)
- 上田健太郎 2004a「伊丹市岩屋遺跡の調査―弥生時代前期の灌漑施設―」『第7回近畿弥生の会大阪場所』
- 上田健太郎 2004b「岩屋遺跡」『考古学ジャーナル』519
- 梅崎恵司2005「田手二本黒木地区Ⅱ区SD0001環濠出土の石材」『吉野ヶ里遺跡―田手二本黒木地区弥生時代前期環濠出土の土器と石器―』佐賀県教育委員会
- 梅原末治・藤田亮策・小泉顕夫 1923『南朝鮮に於ける漢代の遺跡』大正 9 年度古蹟調査報告第 1 冊
- 大分県教育委員会 1999『小迫辻原遺跡Ⅰ』九州横断道報告第 10 集
- 大貫静夫 2001「韓国の竪穴住居とその集落―覚え書き―」『韓国の竪穴住居とその集落』平成 12 年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究(A) 文部科学省科学研究費補助金報告書
- 岡めぐみ 2006「久保遺跡出土の黒色磨研土器について」『久保遺跡』久留米市文化財調査報告書 225 集
- 岡安雅彦 1999「野焼きから覆い焼きへ その技術と東日本への波及」『弥生の技術革新 野焼きから覆い焼きへ』
- 安城市歴史博物館
- 小郡市教育委員会 2012『大保横枕遺跡2』小郡市報第 260 集



小郡市史編纂委員会 1996『小郡市史』第1巻 通史編

小郡市教育委員会,1985.横隈鍋倉遺跡 小郡市文化財調査報告書第 26 集. 福岡.

小郡市教育委員会,1988.三国の鼻遺跡Ⅲ 小郡市文化財調査報告書第 43 集. 福岡.

小郡市教育委員会 1990『北松尾口遺跡Ⅱ 地点』小郡市文化財調査報告書第 63 集

小郡市教育委員会,1994.一ノ口遺跡Ⅰ 地点 小郡市文化財調査報告書第 86 集. 福岡.

小郡市教育委員会 1998『大崎中ノ前遺跡2』小郡市教育委員会文化財調査報告書第 123 集

小郡市教育委員会 2004『力武内畑遺跡7』小郡市文化財調査報告書第 190 集

小郡市教育委員会 2004『三沢蓬ヶ浦遺跡3地点』小郡市文化財調査報告書第 194 集、

小郡市教育委員会 2009『三沢南崎遺跡2』小郡市文化財調査報告書第 241 集、

小郡市教育委員会 2011『大崎後原遺跡2』小郡市文化財調査報告書第 256 集、

小郡市教育委員会 2010『横隈孤塚遺跡 7』小郡市文化財調査報告書第 250 集

小郡市教育委員会 2013『西島遺跡8』小郡市文化財調査報告書第 281 集

小澤佳憲 1999「玄界灘沿岸地域における中期から後期の集落動態」『弥生時代の集落—中・後期を中心として—』, 第 45 回埋蔵文化財研究集会,

小澤佳憲 2000a「弥生集落の動態と画期—福岡県春日丘陵域を対象として—」『古文化談叢』第 44 集

小澤佳憲 2000b「集落動態からみた弥生時代前半期の社会」『古文化談叢』第 45 集

小澤佳憲 2006「北部九州の高地性集落—集落動態からの検討—」『古代文化』58-2 古代学協会

小澤佳憲 2002「弥生時代における地域集団の形成」『究班』Ⅱ 埋蔵文化財研究会

小澤佳憲 2006「玄界灘沿岸地域の弥生時代前半期集落の様相—住居形態の変遷を中心に—」『弥生集落の成立と展開 発表要旨集』第 55 回埋蔵文化財研究集会

小澤佳憲 2008「集落と集団1—九州—」『集落からよむ弥生社会』弥生時代の考古学8 同成社

小澤佳憲 2009「北部九州の弥生時代集落と社会」『縄文・弥生集落遺跡の集成的研究』国立歴史民俗博物館研究報告 149 集

小澤佳憲 2013「弥生時代集落の変遷と社会」『自然と歴史からみた福岡の歴史』新修 福岡市史 特別編

小田富士雄編 1964『亀ノ甲遺跡』福岡県八女市教育委員会

小田富士雄 1983「西北九州」『三世紀の考古学』下巻 学生社

小田富士雄 1986「北部九州における弥生文化の出現序説—水稻農耕文化伝来をめぐる日韓交渉—」『九州文化史研究所紀要』第 31 号

小田富士雄 1990「弥生集落遺跡の調査と保存問題—福岡県・一ノ口遺跡をめぐる—」『古文化談叢』第 22 集 九州古文化研究会

小田富士雄・上田龍児 2004「長崎県・景華園遺跡の研究」『長崎県・景華園遺跡の研究、福岡県京都郡における二古墳の調査、佐賀県・東十郎古墳群の調査』福岡大学人文学部考古学研究室

小田富士雄・韓炳三編 1991『日韓交渉の考古学 弥生時代篇』六興出版

小畑弘己編 2008『極東先史古代の穀物』3 熊本大学

小畑弘己 2011『東北アジア古民族植物学と縄文農耕』同成社

小畑弘己・真邊彩 2011「最近の植物考古学の成果からみた日韓初期農耕問題」『日韓新石器時代研究の現在』九州縄文研究会

甲斐博幸 1998「千葉県常代遺跡の弥生時代の堰—弥生時代南関東の灌漑技術—」『治水・利水遺跡を考える』第7回東日本埋蔵文化財研究会

鏡山猛 1941「日本原始聚落の研究—福岡市比恵遺跡の紹介—」『歴史』16-2 歴史文化研究会

鏡山猛 1956～1959「環溝住居址小論(一)～(四)」『史淵』第 67・68、71、74、78

賀川光夫 1966「縄文時代の農耕」考古学ジャーナル 2

賀川光夫 1967a「縄文晩期農耕文化に関する一問題 —石刃技法—」『考古学雑誌』52 巻4号

賀川光夫 1967b「縄文晩期農耕の一問題 —いわゆる扁平石器の用途—」『考古学研究』13 巻4号

賀川光夫 1967c「縄文時代後・晩期農耕文化の一問題 —石鋤などについての分類と技法—」史叢 11

角縁進 2011「蛍光 X 線分析による石器石材の原産地同定と問題点」『考古学と地球科学—融合研究の最前線』九州考古学会・日本地質学会西日本支部合同大会

角縁進 2014「三沢遺跡および周辺遺跡出土石器石材の蛍光 X 線分析による産地同定分析」『三沢遺跡』小郡市教育委員会

笠原安夫 1982「種子」『菜畑遺跡』唐津市教育委員会

柏原孝俊 1990「石器について」『北松尾口遺跡Ⅱ 地点』小郡市教育委員会

柏原孝俊 1997「弥生時代前期の土器づくりーノロ遺跡出土の焼粘土をめぐるー」『みずほ』第23号大和弥生文化の会  
 柏原孝俊 2002「北部九州における弥生時代磨製石器の一樣相ー集落遺跡出土の「今山系石斧」とその供給形態ー」『環瀬戸  
 内の考古学ー平井勝氏追悼論文集ー』古代吉備研究会  
 梶原慎司 2016「汲田式の成立過程」『九州考古学』91  
 春日市教育委員会 2017『須玖タカウタ遺跡 3ー5 次調査』春日市文化財調査報告書第77集  
 片岡宏二 1988「遺構について 環濠」『横隈北田遺跡』小郡市教育委員会  
 片岡宏二 1990「日本出土の朝鮮系無文土器」『古代日本と朝鮮』名著出版  
 片岡宏二 1993「朝鮮系無文土器の弥生土器化とその社会」『MUSEUM』503  
 片岡宏二 1999『弥生時代渡来人と土器・青銅器』雄山閣出版  
 片岡宏二 2001a「三沢公家隈遺跡の水田遺構をめぐる問題」『三沢蓬ヶ浦遺跡2』小郡市教育委員会  
 片岡宏二 2001b「海峡を往来する人と土器ー壱岐原の辻遺跡出土の擬朝鮮系無文土器を中心にー」『勾玉』山中英彦先生  
 退職記念論文集刊行会  
 片岡宏二 2003「水田稲作農耕の定着と展開ー三国丘陵における弥生時代前期社会の諸問題ー」『三沢北中尾遺跡1地点』  
 小郡市文化財調査報告書第181集 小郡市教育委員会  
 片岡宏二 2006『弥生時代渡来人から倭人社会へ』雄山閣出版  
 片岡宏二 2008「弥生時代における渡来集団の問題」『考古学ジャーナル』568  
 片岡宏二 2011『邪馬台国論争の新視点ー遺跡が示す九州説ー』雄山閣  
 片桐孝治編 1996『川津下樋遺跡』香川県教育委員会神谷正義 1992「最古の水田」『吉備の考古学的研究』(上)山陽新聞社  
 神川恵 2008「九州の縄文時代後晩期における石刃流通ー鈴桶型石刃技法についてー」『熊本大学社会文化研究』6  
 榎本龜次郎 1935「金海貝塚 その新発見」『考古学』第6巻第2号  
 榎本龜次郎 1936「金海会峴里貝塚の一銅製品について」『考古学』第7巻第6号  
 榎本龜次郎 1938「金海会峴里貝塚発見の甕棺に就いて」『考古学』第9巻第1号  
 榎本杜人 1957「金海貝塚の甕棺と箱式石棺ー金海貝塚の再検討(承前)ー」『考古学雑誌』第43巻第1号  
 蒲原宏行 1995「九州2(佐賀県)」『ムラと地域社会の変貌ー弥生から古墳へー』第37回埋蔵文化財研究集会  
 加覧淳一 2009「宮崎県における弥生時代後期の社会変化」『弥生時代後期の社会変化』第58回埋蔵文化財研究集会  
 川上洋一 2012「九州出土の水石式土器とその製作者集団に関する検討」『研究紀要』17由良大和古代文化研究協会  
 川口陽子 2010「福岡県宗像市域の弥生時代ー田熊石畑遺跡の理解に向けてー」『還暦、還暦？、還暦！』武末純一先生還  
 暦記念献呈文集・研究集  
 川端正夫 1994『平塚川添遺跡 発掘調査概報ーⅡ』甘木市教育委員会  
 喜多村俊夫 1950『日本灌漑水利慣行の史的研究 総論篇』岩波書店  
 木下巧 1977「土器の分類」『佐賀県農業基盤整備に係る文化財確認調査報告書 第2部 土生遺跡群』佐賀県文化財調査報  
 告書第37集  
 木村幾多郎・島津義昭 1972「九州考古学の諸問題 ー縄文時代後晩期ー」考古学研究 19ー1  
 基山町遺跡発掘調査団 1978『千塔山遺跡』  
 北九州市芸術文化財団 2008『備後守屋鋪南側土塁跡』(市報第405集)  
 久住猛雄 2000「奴国の遺蹟ー須玖岡本遺跡群と比恵・那珂遺跡群ー」『考古学から見た弁辰韓と倭』九州考古学会・嶺南考  
 古学会第4回合同考古学会  
 久住猛雄 2003「北部九州における弥生時代特定環濠区画と大型建物の展開」『日本考古学協会 2003 年度滋賀大会資料集』  
 日本考古学協会滋賀大会実行委員会  
 久住猛雄 2007「博多湾貿易の成立と解体」『考古学研究』53ー4  
 久住猛雄 2008「弥生集落の様相 ⑧福岡平野 比恵・那珂遺跡群ー」列島におけ古学 8 集落からよむ弥生社会』同成社  
 久世辰男 2004「環濠と土塁ーその構造と機能ー」『考古学ジャーナル』No.511 ニューサイエンス社  
 隈昭志 1960「石器材料の石質からみた需要圏ー本州西端及び北九州の場合ー」『考古学研究』第7巻第1号 考古学研究会  
 熊本県教育委員会 1996『蒲生・上の原遺跡』熊本県報第158集  
 黒崎 直 1980「灌漑技術の展開」『歴史公論』6ー5  
 甲元眞之 1997「朝鮮先史時代の集落構造」『住の考古学(東京大学考古学研究室五十周年記念)』同成社  
 甲元眞之 2000「朝鮮半島の初期農耕」『琉球・東アジアの人と文化』下巻 高宮廣衛先生古希記念論集刊行会  
 甲元眞之 2008「気候変動と考古学」『熊本大学文学部論叢』第97号  
 古環境研究所 1993「三沢水島遺跡出土木材の樹種同定」『三国地区遺跡群2』小郡市文化財調査報告書第85集

古環境研究所1996「小郡市、三国地区遺跡群における自然科学分析」『三国地区遺跡群7』小郡市文化財調査報告書第111集

古環境研究所2001「三沢公家隈遺跡における花粉分析」『三沢蓬ヶ浦遺跡2』小郡市文化財調査報告書第151集

古環境研究所2004「力武内畑遺跡7における花粉分析」『力武内畑遺跡7』小郡市文化財調査報告書第190集

古環境研究所2006「小郡市三沢北中尾遺跡10B地点における自然科学分析」『三沢北中尾遺跡10B地点』小郡市文化財調査報告書第212集

古環境研究所2009「三沢南崎遺跡1における自然科学分析」『三沢南崎遺跡4』小郡市文化財調査報告書第243集

古環境研究所2014「A区弥生時代環濠に関する自然科学分析」『大保横枕遺跡2』小郡市文化財調査報告書第260集

国立金海博物館 2014『金海会峴里貝塚』日帝強占期資料調査報告9輯 国立金海博物館学術調査報告書第13冊

国立歴史民俗博物館 2003『国立歴史民俗博物館国際研究集会2003 弥生時代の実年代』

児玉洋志2005「稲作導入期における打製石器の石材の選択—佐賀県内について—」『弥生石器研究会佐賀大会発表資料集』弥生石器研究会

後藤直 1978「編者註（諸岡遺跡出土朝鮮系無文土器の胎土分析）」『福岡市立歴史資料館研究報告』第2集

後藤直 1979「朝鮮系無文土器」『三上次男博士頌寿記念東洋史・考古学論集』記念論集編集委員会

後藤直 1987「朝鮮系無文土器再論—後期無文土器系について—」『東アジアの考古と歴史 中』

後藤直 1994「朝鮮半島原始農耕集落の立地」『第四紀研究』33—5

後藤直 1996「壺岩出土鑄型の位置」『東北アジアの考古学』第二〔樺城〕 東北亜細亜考古学研究会

後藤直 2004a「無文土器時代の農耕と集落」『東アジア先史時代における生業の地域間比較研究』東京大学大学院

後藤直 2004b「植物質食料」『東アジア先史時代における生業の地域間比較研究』東京大学大学院

後藤直 2006「朝鮮青銅器文化の儀礼」『古代アジアの青銅器文化と社会』国立歴史民俗博物館シンポジウム

後藤直 2011「朝鮮半島無文土器と弥生土器の出会い」『異系統土器の出会い』同成社

後藤直・横山浩一 1975「板付周辺遺跡調査報告書(2)」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第31集

小林青樹・石川岳彦・宮本一夫・春成秀爾 2007「遼西式銅戈と朝鮮式銅戈の起源」『中国考古学』第7号

小林青樹・宮本一夫・石川岳彦・李新全 2012「近年の遼寧地域における青銅器・鉄器研究の現状」『中国考古学』第12号 日本中国考古学会

小林久雄 1939「九州の縄文土器」『人類学先史学講座』11

小林正史・北野博司・久世健二・小島俊彰 2000「北部九州における縄文・弥生土器の野焼き方法の変化」『青丘学術論集』第17集

小南裕一 1999「縄文後・晩期石器研究ノート」『研究紀要』第13号 財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室

小南裕一 2008「中国地方における無文土器関連資料と渡来系集団」『考古学ジャーナル』568

小南裕一 2009「縄文後・晩期土器と板付Ⅰ式土器」『弥生文化誕生』弥生文化の考古学2 同成社

近藤義郎 1959「共同体と単位集団」『考古学研究』21

近藤義郎 1962「弥生文化論」『岩波講座 日本歴史』1 岩波書店

近藤義郎 1957「初期水稻農業の技術的達成について」『私たちの考古学』4巻3号

斎野裕彦 2002「収穫に関わる石製農具3種の使用痕」『弥生文化と石器使用痕研究』第7回石器使用痕研究会発表要旨集

サーヴィス、E.R.1971(松園万亀雄訳)『未開の社会組織—進化論的考察—』弘文堂

酒井仁夫 1980『今川遺跡』津屋崎町文化財調査報告書4

酒井仁夫・副島邦弘 1984『葛川遺跡』苅田町教育委員会

坂口隆 2003『縄文時代貯蔵穴の研究』未完成考古学叢書⑤ アム・プロモーション

佐賀県教育委員会1992『吉野ヶ里遺跡—神埼工業団地計画に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書—』佐賀県報第113集

佐賀県教育委員会2003『吉野ヶ里遺跡—平成8年度～10年度の発掘調査の概要—』佐賀県報第156集

佐賀県教育委員会2005『吉野ヶ里遺跡—田手二黒木地区弥生時代前期環濠出土の土器と石器』佐賀県報第163集

佐賀県教育委員会2015『吉野ヶ里遺跡—弥生時代の集落跡—』佐賀県報第207集

坂本経堯 1952「縄文式文化の耕作性について」『熊本史学』1

坂元雄紀 2006「遠賀川流域以東における弥生時代集落の成立と展開」『弥生集落の成立と展開 発表要旨集』第55回埋蔵文化財研究集会

坂本嘉弘1997「東北九州における石器組成の変遷—縄文時代後期から古墳時代にかけて—」

『おおいた考古』第8集

佐々木由香 2012a「縄文時代における森林資源利用と栽培. 東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研

究」東北技術工科大学東北文化研究センター

佐々木由香 2012b「ここまでわかった！縄文人の植物利用」『第 86 回歴博フォーラムここまでわかった！縄文人の植物利用』  
国立歴史民俗博物館

佐原真 1970「大和川と淀川」『古代の日本5近畿』角川書店

佐原真2002「弥生文化の比較考古学—総論—」『古代を考える 稲・金属・戦争—弥生』吉川弘文館

志賀智史2013「弥生時代における姫島産黒曜石の流通」『考古学ジャーナル』638

静岡大学人文学部考古学研究室 2011『手越向山遺跡の研究』六一書房

七田忠昭 1995「吉野ヶ里遺跡の環濠区画」『ムラと地域社会の変貌—弥生から古墳へ—』第 37 回埋蔵文化財研究集会

七田忠昭 2006 「佐賀平野の弥生時代環濠区画と大型建物—吉野ヶ里遺跡を中心として—」『弥生の大型建物とその展開』  
サンライズ出版

柴尾俊介 2006「松菊里型住居をめぐる」『研究紀要』第 20 号 財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室

柴田昌児 2004「高地性集落と山住みの集落」『考古資料大観』10

島崎久恵 1997「久宝寺遺跡出土の堰」『大阪文化財研究』12 号

清水芳裕 1978「諸岡遺跡出土朝鮮系無文土器の胎土分析」『福岡市立歴史資料館研究報告』第2集

庄田慎矢 2009「円形粘土帯土器期の集落構造論(1)—中部地方—」『日韓集落研究会第5回共同研究会 日韓集落研究の  
新たな視角を求めて』

庄田慎矢 2009「東北アジアの先史農耕と弥生農耕—朝鮮半島を中心として—」『弥生時代の考古学5 食糧の獲得と生産』  
同成社

下條信行 1986「日本稲作受容期の大陸系磨製石器の展開」『九州文化史研究所紀要』第 31 号

白井克也 2001「靑島貿易と原の辻貿易—粘土帯土器・三韓土器・楽浪土器からみた弥生時代の交易—」『弥生時代の交易  
—モノの動きとその担い手—』第 49 回埋蔵文化財研究集会発表要旨集

申敬澈・河仁秀 1991「後期無文土器と弥生土器系土器」『日韓交渉の考古学—弥生時代編—』六興出版

申鉉東 1993『朝鮮原始古代住居址と日本への影響』雄山閣

新宅信久 1996「パズルの一片—弥生時代早期集落の様相—」『福岡考古』第 17 号 福岡考古懇話会

菅榮太郎 1999「弥生時代環溝集落小論」『考古学に学ぶ—遺構と遺物—』同志社大学考古学シリーズⅦ

菅原康夫 1980「弥生系農業における水利施設の意義と展開」『古代学研究』92・93 号

菅原康夫 1982「初期農業水利の技術的段階について」『考古学と古代史』(同志社大学考古学シリーズⅠ)

杉原荘介・戸沢充則・横田義章1965「九州における特殊な刃器技法—佐賀県伊万里市鈴桶遺跡の石器群—」『考古学雑誌』  
51巻3号

杉本岳史 2002「集落の変遷」『三沢北中尾遺跡1地点』小郡市教育委員会

佐賀県教育委員会編 2003「ハツ並金丸遺跡」『柚比遺跡群3』

杉本岳史・片岡宏二・山崎頼人 2002『三沢北中尾遺跡1地点』小郡市教育委員会

杉本岳史・坂井貴志 2010『横隈狐塚遺跡7』小郡市教育委員会

角 浩行 2006「三雲・井原弥生集落の成立と変遷」『伊都国歴史博物館紀要』創刊号

高木正文 1980「九州縄文時代の収穫用石器—打製石庖丁と打製石鎌について—」

高木正文 2007「第二章 縄文時代」『菊水町史 通史編』

高倉洋彰 1973「墳墓からみた弥生時代社会の発展過程」『考古学研究』20

高倉洋彰 1975「弥生時代の集団組成」『九州考古学の諸問題』東出版

高倉洋彰 1991「稲作出現期の環濠集落」『横山浩一先生退官記念論文集Ⅱ 日本における初期弥生文化の成立』文献出版

高橋学 1989「埋没水田遺構の地形環境分析」『第四紀研究』27

高橋学 1995「臨海平野における地形環境の変貌と土地開発」『古代の環境と考古学』古今書院

武末純一 1985「石器の生産と流通」『北九州市史』総論先史・原始 北九州市史編さん委員会

武末純一1989「北九州—吉野ヶ里の同時代史」『歴史読本』第34巻17号

武末純一 1990「北部九州の環溝集落」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会

武末純一 1991a『土器からみた日韓交渉』学生社

武末純一 1991b「倉庫の管理主体—北部九州の弥生時代拠点集落例から—」『古文化論叢』児島隆人先生喜寿記念事業会

武末純一 1998「弥生環濠集落と都市」『都市と工業の流通』古代史の論点3 小学館

武末純一 2001「石器の生産と流通—石庖丁と蛤刃石斧—」『筑紫野市史 資料編(上)』考古資料

武末純一 2002『弥生の村(日本史リブレット3)』山川出版社

武末純一 2004a「弥生時代前半期の暦年代—九州北部と朝鮮半島南部の併行関係から考える」『福岡大学考古学論集』  
小田富士雄先生退職記念事業会

武末純一 2004b「韓国の初期環溝(濠)の構造と機能」『考古学ジャーナル』No.511 ニューサイエンス社

武末純一 2006a「豊前地域の弥生集落—山国川以北を中心に—」『行橋市史』資料編

武末純一 2006b「弥生時代前半期の暦年代再考—扇形銅斧と多紐鏡から考える—」『平成 16 年度学術創生研究(弥生農耕の起源と東アジア—炭素年代測定による高精度編年体系の構築—) 福岡研究会』国立歴史民俗博物館

武末純一 2006「勒島 A 地区弥生系土器」『勒島遺跡Ⅴ』(考察編)(慶南考古学研究所)

武末純一 2008「考古遺物からみた韓日交流」『永き出会い 韓国と日本』釜山市博物館

武末純一 2008「韓国・勒島遺跡の弥生系土器」『七隈史学』第9号

武末純一 2010「韓国・金海亀山洞遺跡 A1 地区の弥生系土器をめぐる諸問題」『古文化談叢』65(1)

武末純一 2011「弥生時代前半期の暦年代再論」『AMS 年代と考古学』学生社

武末純一 2012「弥生・古墳時代集落構造論序説」『日韓集落の研究—弥生・古墳時代および無文土器—三国時代(最終報告書)』日韓集落研究会

武末純一 2013「韓国蔚山地域の弥生系土器」『弥生時代政治社会構造論』雄山閣

武末純一 2013「金海会峴里貝塚出土の弥生系土器」『朝鮮学報』第228輯

武末純一 2018「日韓交流と渡来人—古墳時代前期以前—」『古代東ユーラシア研究センター年報』第4号専修大学社会知性開発研究センター

武末純一・上田龍児 2006「弥生土器の編年と地域間交流」『行橋市史 資料編 原始・古代』行橋市史編纂委員会

武末純一・平郡達哉 2009「日本の支石墓をめぐる諸問題」『巨済大錦里遺跡 考察編』(財)慶南考古学研究所

武末純一・山崎頼人 2015「韓国蔚山地域の弥生系土器再論」『友情의考古學』故孫明助先生追慕論文集

竹中哲朗 2007「環濠埋没論序説」『日中交流の考古学』同成社

田崎博之 1994「弥生文化と土地環境」『第四紀研究』第 33 巻第5号

田崎博之 1995「弥生時代の土器作りノート」『みずほ』第 15 号 大和弥生文化の会

田崎博之 1998「福岡地方における弥生時代の土地環境の利用と開発」『福岡平野の古環境と遺跡立地—環境としての遺跡との共存のために—』九州大学出版会

田崎博之 1988・89・90「土器と集団(一・二・三)—弥生時代の集団関係—」『九州文化史研究所紀要』第 33・34・35 号 九州大学九州文化史研究施設

田崎博之 2000a「水稻農耕社会への移行 日本列島の土器・水田・農具の検討」『韓国古代文化の変遷と交渉』書溪文化社

田崎博之 2000b「遺跡出土の焼成粘土塊・焼成剥離土器片からみた弥生土器の生産・供給形態」  
平成9～11 年度科学研究費補助金<基盤研究(c)(2)>研究成果報告書

田崎博之 2002a「朝鮮半島の初期水田稲作」『韓半島考古学論叢』すずさわ書店

田崎博之 2002b「日本列島の水田稲作」『東アジアと日本の考古学』IV 同成社

田崎博之 2002c「焼成失敗品からみた弥生土器の生産と供給」『環瀬戸内海の考古学(平井勝氏追悼論集)』古代吉備研究会

田崎博之 2004『土器焼成・石器製作残滓からみた弥生時代の分業と集団間交流システムの実証的研究』平成 13～15 年度科学研究費補助金<基盤研究(c)(2)>研究成果報告書

田崎博之 2008「弥生集落の集団関係と階層性」『考古学研究』55-3 考古学研究会

田島龍太・中島直幸 1985『湊中野遺跡』唐津市文化財調査報告書第 14 集

立岡和人 2002「日高郡南部町所在徳蔵地区遺跡群の弥生時代前期井堰」『第 5 回近畿弥生の会和歌山場所』

田中浩・松本隆昌 1992『平成2年度大和町内遺跡確認調査』大和町文化財調査報告書第 16 集

田中良之 1982「磨消縄文土器伝播のプロセス」『古文化論集』森貞次郎博士古希記念論文集

田中良之 1991「いわゆる渡來說の再検討」『横山浩一先生退官記念論文集Ⅱ 日本における初期弥生文化の成立』文献出版

田中良之 2002「弥生人」『稲・金属・戦争』吉川弘文館

田中良之 2011「AMS 年代測定法の考古学への適用に関する諸問題」『AMS 年代と考古学』学生社

田中良之・小澤佳憲 2001「渡来人をめぐる諸問題」『弥生時代における九州・韓半島交流史の研究』九州大学

田中良之・溝口孝司・岩永省三 2004「弥生人骨を用いた AMS 年代測定(予察)」『日・韓交流の考古学九州考古学会・嶺南考古学会第6回合同考古学大会』

田畑直彦 2000「西日本における初期遠賀川式土器の展開」『突帯文と遠賀川』土器持ち寄り会

田畑直彦 2018 関門地域の粘土帯土器『第 187 回九州古文化研究会 第3回弥生時代研究部会「無文土器からみた日韓交流」発表資料』九州古文化研究会



地学団体研究会大阪支部 1999『大地の生い立ち』築地書館  
 都出比呂志 1970「農業共同体と首長権」『講座日本史』1 東京大学出版会  
 都出比呂志 1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店  
 都出比呂志 1998「いわゆる松菊里型住居と弥生住居」『先史日本の住居とその周辺』同成社  
 常松幹雄 1998「甕棺の変遷と終焉」『弥生人のタイムカプセル』福岡市博物館  
 常松幹雄 2003「弥生時代の治水 弥生水田と農業土木—北部九州—」『考古学ジャーナル』NO505  
 常松幹雄 2008『吉武遺跡群X X—総集編』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1018 集  
 坪根伸也 2009「大分県における弥生時代後期の社会変化」『弥生時代後期の社会変化』第 58 回埋蔵文化財研究集会  
 寺井誠 1995「古墳出現前後の堅穴住居と形態変化—漸移性と画期—」『ムラと地域社会の変貌—弥生から古墳へ—発表要旨資料』第 37 回埋蔵文化財研究集会  
 寺沢薫・寺沢知子 1981「弥生時代植物質食糧の基礎的研究」『橿原考古学研究所紀要考古学論攻』5  
 徳島大学埋蔵文化財調査室 2007『徳島市庄・蔵本遺跡平成 18 年度発掘調査概要報告書』  
 中尾篤志・福田一志 2005「総括」『原ノ辻遺跡 総集編 I』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第 30 集  
 中島達也 1985「横隈鍋倉遺跡出土の朝鮮系無文土器について」『横隈鍋倉遺跡』小郡市文化財調査報告書第 26 集  
 中島直幸 1995「末蘆国」『季刊考古学』第 51 号 雄山閣  
 中園聡 1993「折衷土器の製作者—韓国靑島遺跡における弥生土器と無文土器の折衷を事例として」『史淵 130』  
 中間研志 1987「松菊里型住居—我国稲作農耕受容期における堅穴住居の研究—」『東アジアの考古と歴史』中・岡崎敬先生退官記念事業会 同朋社出版  
 中間研志 1993「西ノ迫遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』25 福岡県教育委員会  
 中村慎一 2002「弥生文化と中国の初期稲作文化」『古代を考える 稲・金属・戦争—弥生—』吉川弘文館  
 中山誠二・外山秀一・庄田慎矢・秋山圭子・網倉邦生・石神孝子・植月 学・関間俊明・金炳燮・佐野 隆・長沢宏昌・原田 幹・西谷正 1970「結語」『津古内畑遺跡』小郡町教育委員会  
 西谷正 1971「結語」『福岡県三沢所在遺跡の予備調査概要』福岡県教育委員会  
 西谷正・柳田康雄・副島邦弘 1970『津古内畑遺跡』小郡町教育委員会  
 日本考古学協会編 1961『日本農耕社会の生成』東京堂  
 西山由美子 2009「熊本県における弥生時代後期の社会変化」『弥生時代後期の社会変化』第 58 回埋蔵文化財研究集会  
 禰宜田佳男 1990「環濠集落と環濠の規模」『季刊考古学』第 31 号 雄山閣  
 野井英明 1991「比恵遺跡群第 24・25 次調査によって得られた試料の花粉分析」『比恵遺跡 10』福岡市教育委員会  
 野井英明 1992「那珂遺跡群第 14 次調査によって得られた試料の花粉の分析」『那珂 5』福岡市教育委員会  
 野島永 2008「弥生時代における初期鉄器の舶載時期とその流通構造の解明」平成 17～19 年度科研費基盤研究(c)研究成果報告書 広島大学文学部  
 朴淳發 2004「遼寧粘土帯土器文化の朝鮮半島定着過程」『福岡大学考古学論集 小田富士雄先生退職記念』  
 橋口達也 1985「日本における稲作の開始と発展」『石崎曲田遺跡Ⅲ』福岡県教育委員会  
 橋口達也 1987「集落地の変遷と土地開発」『東アジアの考古と歴史』中・岡崎敬先生退官記念事業会 同朋社出版  
 端野晋平 2001「支石墓の系譜と伝播様態」『弥生時代における九州・韓半島交流史の研究』九州大学大学院比較社会研究  
 院基層構造講座  
 端野晋平 2009「無文土器文化からの影響—松菊里文化と弥生文化の形成—」『古代文化』61—2  
 端野晋平 2015「石崎曲田遺跡住居群の系譜」『国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室 紀要1』  
 端野晋平 2016「考古学における気候変動論の検討—日本列島・朝鮮半島の水稲農耕開始前後を対象として—」『紀要2』徳  
 島大学埋蔵文化財調査室  
 端野晋平 2018『初期稲作文化と渡来人—そのルーツを探る—』すいれん舎  
 畑中健一 1980「瑞穂遺跡の土壌の花粉分析」『瑞穂』日本住宅公団  
 畑中健一 1990「2区の花粉分析」『津古土取遺跡』小郡市文化財調査報告書第 59 集  
 畑中健一・野井英明・岩内明子 1998「九州地方の植生史」『図説 日本列島植生史』朝倉書店  
 八賀 晋 1968「古代における水田開発—その土壌的環境—」『日本史研究』96  
 浜田晋介 2002「弥生時代生業研究史」『川崎市市民ミュージアム紀要』第14集  
 濱田竜彦 2009「防塞的集落の展開と機能」『弥生社会のハードウェア』弥生時代の考古学6同成社  
 林潤也 2006「九州地方の縄文後晩期集落」『弥生集落の成立と展開 発表要旨集』第 55 回埋蔵文化財研究集会  
 林田和人 2006「考察」『八ノ坪遺跡 I』熊本市教育委員会

林田和人 2008「無文土器からみた中・南九州の渡来集団」『考古学ジャーナル』568  
 比嘉えりか 2011「鋳造鉄斧片の分布からみた弥生時代の日韓交渉」『七隈史学』第 13 号  
 浜田信也編 1974『横隈山遺跡』小郡市教育委員会  
 速水信也 1990「北松尾口遺跡Ⅱ地点の弥生時代集落」『北松尾口遺跡Ⅱ地点』小郡市文化財調査報告書 63 集  
 速水信也 1994「一ノ口遺跡Ⅰ地点の弥生時代集落」『一ノ口遺跡Ⅰ地点』小郡市教育委員会  
 原口正三 1986「濠と土塁」『弥生文化の研究7 弥生集落』雄山閣  
 原俊一・白木英敏・秋成雅博 2000「宗像地域における弥生時代前期の集落と墓制」『日本考古学』第9号 考古学協会  
 比嘉えりか 2011「鋳造鉄斧片の分布からみた弥生時代の日韓交渉」『七隈史学』第 13 号  
 日田市教育委員会 2011『史跡小迫辻原遺跡 保存管理計画書』日田市教育委員会  
 平郡達哉 2018「日韓の墓制(弥生時代前半期)」『新・日韓交渉の考古学—弥生時代—』新・日韓交渉の考古学—弥生時代—第1回共同研究会  
 兵庫県教育委員会 2003『岩屋遺跡 現地説明会資料』  
 兵庫県教育委員会 2004『岩屋遺跡 現地説明会資料』  
 広瀬和雄 1983「古代の開発」『考古学研究』30-2  
 広瀬和雄 1988「堰と水路」『弥生文化の研究2 生業』雄山閣出版  
 深澤芳樹・庄田慎矢 2009「先松菊里式・松菊里式土器と夜白式・板付式土器」『弥生文化誕生』弥生文化の考古学2 同成社  
 福岡市教育委員会 1977『板付周辺遺跡調査報告(4)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第38集  
 福岡市教育委員会 1987『野多目拈渡遺跡Ⅲ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第160集  
 福岡市教育委員会 1994『那珂遺跡 11』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 366 集  
 福岡市教育委員会 1996『吉武遺跡群Ⅶ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 461 集  
 福岡市教育委員会 2007『今宿五郎江遺跡6』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 924 集  
 福岡市教育委員会 2010『板付 10』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1069 集  
 福沢仁之 1995「天然の『時計』・『環境変動検出計』としての湖沼の粘綿堆積物」『第四紀研究』第 34 巻第3号  
 阪本太一・兪炳珠 2012「日韓内陸地域における穀物栽培起源に関する調査研究」『日本考古学協会第78 回総会研究発表要旨』  
 藤尾慎一郎 1993「生業からみた縄文から弥生」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 48 集  
 藤尾慎一郎 1999「福岡平野における弥生文化の成立過程」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 77 集 国立歴史民俗博物館  
 藤尾慎一郎 2003『弥生変革期の考古学』同成社  
 藤尾慎一郎・今村峯雄・山崎頼人 2009「弥生時代井堰の年代—福岡県小郡市力武内畑遺跡の年代学的調査—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 153 集  
 藤島志考 2008「二丈町の弥生時代遺物—特に青銅利器・農耕具を中心として—」『七隈史学』第 10 号  
 古川秀幸編 2001『石崎 曲り田遺跡—第3次調査—(中)』二丈町文化財調査報告書第 27 集  
 古澤義久 2010「老岐における韓半島系土器の様相」『日本出土の朝鮮半島系土器の再検討—弥生時代を中心に—』第 59 回埋蔵文化財研究集会  
 古澤義久 2016「大陸・半島系土器」『原の辻遺跡 総集編Ⅱ』長崎県埋文 18 集  
 埋蔵文化財研究集会 2010『日本出土の朝鮮半島系土器の再検討』第 59 回埋蔵文化財研究集会発表要旨集  
 細川金也・土屋了介 2009「佐賀県における弥生時代後期の社会変化」『弥生時代後期の社会変化』第 58 回埋蔵文化財研究集会  
 本田奈都子 1996「古墳時代の合掌型堰—久宝寺遺跡・竜華地区検出例をもとに—」『大阪文化財研究』10 号  
 本田道輝 2006「鹿児島県域における弥生時代の大溝について」『寺山遺跡』寺山遺跡民間調査会  
 本田道輝 2011「南九州で検出される弥生時代の大溝について」『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』73  
 前田達男 1994「棺体の年代的位置付け」『増田遺跡群Ⅱ』佐賀市文化財調査報告書第 50 集  
 豆谷和之 2003「弥生環濠論—唐古・鍵遺跡から見た場合—」『山口大学考古学論集』近藤喬一先生退官記念事業会  
 正岡睦夫 1982「弥生時代及び古墳時代の水利と水田—西日本を中心として—」『古代学研究』98・99 号  
 正岡睦夫編 1984『百間川原尾島遺跡2』岡山県教育委員会  
 松井 健 1987「水田土壌学の考古学への応用」『土壌学と考古学』博友社  
 松尾奈緒子 2010「玄界灘沿岸地域における朝鮮半島系土器の様相1—弥生時代前期末～中期初頭—」『日本出土の朝鮮半島系土器の再検討—弥生時代を中心に—』第 59 回埋蔵文化財研究集会  
 松木武彦 2002「新たな環壕像を求めて」『日本海をのぞむ弥生の国々—環壕から見える弥生社会とは?—』第3回妻木晩田

弥生文化シンポジウム資料

松本直子 2002「縄文・弥生変革とエスニシティ」『考古学研究』第 49 巻第 2 号 考古学研究会

三重県埋蔵文化財センター 2005『筋違遺跡―第二分冊―』三重県埋蔵文化財調査報告 115

松見裕二 2011「原の辻遺跡(一支国)」『倭人伝』国邑の考古学』考古学ジャーナル 611 ニューサイエンス社

松見裕二 2015「発掘調査からみえてきた・原の辻遺跡の全貌」『九州歴史資料館 九歴講座資料』

水ノ江和同 2002「九州の縄文集落―縄文後・晩期を中心に―」『四国とその周辺の考古学』縄文時代研究会

溝口孝司 1995「福岡県筑紫野市永岡遺跡の研究―いわゆる二列埋葬墓地の一例の社会考古学的再検討―」『古文化談叢』第 34 集 九州古文化研究会

溝口孝司 1997「二列埋葬墓地の終焉―弥生時代中期(弥生Ⅲ期)北部九州における墓地空間構成原理の変容の社会考古学的研究―」『古文化談叢』第 38 集 九州古文化研究会

溝口孝司 2008a「弥生時代中期北部九州地域の区画墓の性格―浦江遺跡第5次調査区画墓の意義を中心に―」『九州と東アジアの考古学』九州大学考古学研究室 50 周年記念論文集刊行会

溝口孝司 2008b「弥生社会の組織とカテゴリー」『集落からよむ弥生社会』弥生時代の考古学 8 同成社 pp.74-95

宮崎市教育委員会 1999『下郷遺跡』宮崎市報第 41 集

宮崎貴夫 1998「まとめ」『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所報告書第9集

宮崎貴夫 2008「埴崎・原の辻遺跡における弥生時代の渡来集団」『考古学ジャーナル』568

宮崎貴夫 2012「有明海をめぐる弥生文化研究の現状と課題―西北九州地域からの視点―」『有明海をめぐる弥生時代集落と交流』長崎県考古学会・肥後考古学会合同大会

宮崎貴夫 2015「台付甕と透かしをもつ器台の成立と消滅」『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会

宮崎敬士 1995「九州4(熊本県)」『ムラと地域社会の変貌―弥生から古墳へ―』第 37 回埋蔵文化財研究集会

宮地聡一郎 2012「縄文時代後・晩期の遺跡動態」『古代文化』64(1)

宮田浩之 1996「弥生土器の焼成遺構について」『西島遺跡6』小都市文化財調査報告書第 109 集

宮田浩之 1997「北九州における弥生土器の焼成坑について」『古代の土師器生産と焼成遺構』真陽社

三辻利一 1985「横隈鍋倉遺跡出土朝鮮系無文土器, 及び弥生土器の蛍光X線分析」『横隈鍋倉遺跡』小都市文化財調査報告書第 26 集,

三辻利一 1988「無文土器と弥生土器の胎土分析」『三国の鼻遺跡Ⅲ』小都市文化財調査報告書第 43 集,

宮本一夫 2003「朝鮮半島新石器時代の農耕化と縄文農耕」『古代文化』55-7

宮本一夫 2004「青銅器と弥生時代の実年代」『弥生時代の実年代』学生社

宮本一夫 2005「園耕と縄文農耕」『韓・日新石器時代の農耕問題』韓国新石器学会・慶南文化財研究院

宮本一夫 2009『農耕の起源を探る イネの来た道』歴史ライブラリー 276 吉川弘文館

森岡秀人 1995「初期水田の拡大と社会の変化」『弥生文化の成立』角川書店

森貴教 2011「弥生時代北部九州における両刃石斧の消費形態―今山系石斧を中心として―」『考古学研究』第 57 巻 4 号 考古学研究会

森貞次郎 1966「弥生文化の発展と地域性―九州―」『日本の考古学Ⅲ』河出書房

森貞次郎・岡崎敬 1960「福岡県板付遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会

森本六爾 1933『日本農耕文化の起源』葦牙書房

森本幹彦 2009「福岡湾沿岸の弥生時代後期環濠集落」『弥生時代後期の社会変化』第58回埋蔵文化財研究集会

森本幹彦 2010「今宿五郎江遺跡の成立とその背景」『福岡考古』22

森本幹彦 2011「集落空間の変化、集落フォーメーションの展開」『古墳時代への胎動』弥生時代の考古学 4 同成社

森本幹彦 2012「今宿五郎江・大塚遺跡」『伊都国の研究』学生社

森本幹彦 2018「福岡平野の粘土帯土器」『第 187 回九州古文化研究会 第3回弥生時代研究部会「無文土器からみた日韓交流」発表資料』九州古文化研究会

柳田康雄 1971「結語」『津古内畑遺跡 第2次』小郡町教育委員会

家根祥多 1993「遠賀川式土器の成立をめぐる一西日本における農耕社会の成立―」『論苑考古学』坪井清足さんの古稀を祝う会 天山舎

矢野健一 2001「西日本の縄文集落」『立命館大学考古論集Ⅱ』

山崎純男 1978「福岡市板付遺跡の縄文時代水田址」『月刊文化財』181 号

山崎純男 1983「西日本後・晩期の農耕」『縄文文化の研究』2 雄山閣

山崎純男 1987「北部九州における初期水田」『九州文化史研究所紀要』32 集

山崎純男 1990「環濠集落の地域性 九州地方」『季刊考古学』第 31 号 雄山閣

山崎純男編 1999「板付周辺遺跡調査報告書第 20 集」福岡市教育委員会

山崎純男 2005「西日本縄文農耕論」『韓・日新石器時代の農耕問題』韓国新石器学会・慶南文化財研究院

山崎頼人 2001「初期灌漑技術の発展過程 I ―水田稲作開始期における井堰構築技術とその集団―」『九州考古学』第 80 号

山崎頼人 2003「三国丘陵弥生時代遺跡群における石器の様相(1)―三沢北中尾遺跡1地点―」『三沢北中尾遺跡1地点 環濠編』小郡市教育委員会

山崎頼人 2004a「井堰調査における実践と課題―力武内畑遺跡弥生時代前期井堰調査における試考―」『力武内畑遺跡7』小郡市教育委員会

山崎頼人 2004b「三国丘陵弥生時代遺跡群における石器の様相(2)―三沢蓬ヶ浦遺跡―」『三沢蓬ヶ浦遺跡3』小郡市教育委員会

山崎頼人 2005a「三国丘陵弥生時代遺跡群における石器の様相(3)―三沢北中尾遺跡5地点―」『三沢北中尾遺跡5地点』小郡市教育委員会

山崎頼人 2005b「初期灌漑技術の発展過程 I ―水田稲作開始期における井関構築技術とその集団』『九州考古学』第80号

山崎頼人 2006a「筑後地域における弥生集落の成立と展開」『弥生集落の成立と展開 第 55 回埋蔵文化財研究集会発表要旨集』埋蔵文化財研究会

山崎頼人 2006b「筑後北部三国丘陵における弥生集落の成立と展開―特に環濠を持つ集落の構造について―」『弥生集落の成立と展開 第55回埋蔵文化財研究集会発表要旨集』埋蔵文化財研究会

山崎頼人 2007a「三国丘陵弥生時代遺跡群における石器の様相(4)―三沢北中尾遺跡2地点―」『三沢北中尾遺跡4地点』小郡市教育委員会

山崎頼人 2007b「三国丘陵弥生時代遺跡群における石器の様相(5)―三沢北中尾遺跡4地点―」『三沢北中尾遺跡4地点』小郡市教育委員会

山崎頼人 2010a「筑後・肥前南部地域における朝鮮半島系土器の様相―有明海沿岸地域―」『日本出土の朝鮮系土器の再検討―弥生時代を中心に―』第 59 回埋蔵文化財研究集会発表要旨集

山崎頼人 2010b「朝鮮系無文土器とその周辺―三国丘陵における土器生産と朝鮮系無文土器―」九州古文化研究会第 156 回例会発表資料

山崎頼人 2010c「環濠と集団―筑紫平野北部三国丘陵からみた弥生時代前期環濠の諸問題―」『古文化談叢』第65号

山崎頼人 2012a「弥生時代集落の変遷について」『大保横枕遺跡2』小郡市報第 260 集

山崎頼人 2012b「付編 三沢北中尾遺跡2b区 127 号土坑出土銅斧について」『三沢遺跡内容確認調査』小郡市文化財調査報告書第 266 集

山崎頼人 2012c「三沢遺跡の評価」『三沢遺跡内容確認調査』小郡市文化財調査報告書第 266 集

山崎頼人 2012d「弥生時代剥片石器石材の動向―北部九州を中心として―」『菟原Ⅱ 森岡秀人さん還暦記念論文集』菟原Ⅱ刊行会

山崎頼人 2013「弥生時代北部九州の剥片石器石材の流通」『考古学ジャーナル』638

山崎頼人 2014a「弥生時代の上岩田遺跡」『上岩田遺跡Ⅴ』小郡市文化財調査報告書第 277 集

山崎頼人 2014b「移住と社会変動の関係」『考古学研究 60 周年記念誌 考古学研究 60 の論点』考古学研究会

山崎頼人・比嘉えりか・坂井貴志・渡邊隆行・金民善・西江幸子・佐々木由香 2014「北部九州における弥生時代植物利用研究1」『古文化談叢』第 71 集

山崎頼人 2016「日韓青銅斧の比較研究―三国丘陵地域における日韓交流―」『第 12 回嶺南・九州考古学会合同学会 日韓の装身具』九州考古学会・嶺南考古学会

山崎頼人 2018a「環有明海地域における弥生時代の日韓交流～交流拠点としての環有明海地域の評価～」『第 17 回 研究助成 研究報告会資料』公益財団法人鍋島報効会

山崎頼人 2018b「三国丘陵地域における土器生産と無文土器」『新・日韓交渉の考古学―初期鉄器時代～原三国時代・弥生時代研究会― 第2回共同研究会』新・日韓交渉の考古学―初期鉄器時代～原三国時代研究会

山崎頼人 2018c「北部九州における土器からみた日韓交流」『第 30 回東アジア古代史・考古学研究会交流会研究発表資料集』

山崎頼人 2019a「環有明海地域における弥生時代の日韓交流～交流拠点としての環有明海地域の評価～」『公益財団法人鍋島報効会研究助成研究報告書』第9号

山崎頼人 2019b「無文土器系土器と集団～三国丘陵における土器生産からみた日韓交流～」『九州考古学』第 94 号

山崎頼人・井上愛子 2004「小郡市域における板付 I 式併行期前後の様相」『板付 I 式期の再検討』埋蔵文化財研究会

山崎頼人・杉本岳史・井上愛子 2005「筑後北部三国丘陵における弥生文化の受容と展開—三国丘陵南東部遺跡群をケーススタディとして—」『古文化談叢』第54号九州古文化研究会

山崎頼人・沖田正大・廣木誠・柿本慈 2008「松菊里型住居の変容過程—筑紫平野北部三国丘陵における住居動態—」『古文化談叢』第59号 古文化研究会

横山浩一 1985「型式論」『岩波講座 日本考古学1研究の方法』岩波書店

吉田広 2013「武器形青銅器の伝播と時期」『弥生時代政治社会構造論』柳田康雄古稀記念論文集 雄山閣

吉田広 2014「弥生青銅器祭祀の展開と特質」『農耕社会の成立と展開—弥生時代像の再構築—』国立歴史民俗博物館研究報告第185集

吉留秀敏1993「縄文時代後期から晩期の石器技術総体の変化とその評価—早良平野を中心に—」『古文化談叢』第30集(上)

吉留秀敏 1994「環濠集落の成立とその背景」『古文化談叢』第33集 九州古文化研究会

吉留秀敏 1995「福岡県」『ムラと地域社会の変貌—弥生から古墳へ—発表要旨資料』第37回埋蔵文化財研究集会

吉留秀敏 1997「奴国の拠点集落 那珂・比恵遺跡」『歴史講座講演記録 倭人伝のクニグニ』, 春日市教育委員会

吉留秀敏 1999「福岡平野の弥生社会」『論争 古代吉備』考古学研究会

吉留秀敏2002a「北部九州弥生時代中期の剥片石器」『究班』II 埋蔵文化財研究会

吉留秀敏2002b「北部九州の剥片石器石材の流通(縄文時代後期～弥生時代)」『Stone Sources』1 石器原産地研究会

吉留秀敏2004a「照葉樹林帯・海岸平野の水田(1)—北部九州—」『考古学ジャーナル』NO518

吉留秀敏2004b「水稻農耕導入期の灌漑技術—初期水田経営をめぐって—」『福岡大学考古学論集』小田富士雄先生退職記念事業会

吉留秀敏 2004c「弥生時代剥片石器研究ノート2—三沢北中尾遺跡における弥生時代剥片石器の相—」『石器原産地研究会会誌(Stone Sources)』4石器原産地研究会

吉留秀敏 2004d「縄文時代後・晩期の剥片石器生産について—石器・石材供給システムの様相—」『考古論集』河瀬正利先生退官記念事業会

吉留秀敏 2008「北部九州における水稻農耕受容期の様相」『南部九州における水稻農耕受容期の様相—西日本における他地域との比較を通して』平成20年度宮崎考古学会研究会資料集 宮崎考古学会県南例会実行委員会

吉留秀敏 2009「北部九州の打製石器の石材利用—石器石材の供給システム—」『環瀬戸内地域の打製石器石材利用 研究発表資料集』中四国縄文研究会

吉留秀敏 2012「筑後南部地域における弥生時代剥片石器の研究—八女地域における弥生時代剥片石器の様相」『九州考古学』第87号

李昌熙 2009「在来人と渡来人」『弥生文化誕生』弥生時代の考古学2 同成社

若林邦彦 1999「大阪平野における拠点集落の性格—河内平野遺跡群を中心として—」『みずほ』31号大和弥生文化の会

若林邦彦 2001「弥生時代大規模集落の評価—大阪平野の弥生時代中期遺跡群を中心に—」『日本考古学』12号

渡邊隆行 2011「小迫辻原遺跡の遺構の変遷と特色」『史跡小迫辻原遺跡 保存管理計画書』日田市教育委員会

渡辺誠 1975『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館 舞鶴市教育委員会

渡部芳久,能登原孝道, 米村和紘,足立達朗, 小山内康人 2011「北部九州における弥生時代後期の石庖丁生産と流通—玄武岩質安山岩製石庖丁を中心に—」『平成23年度九州史学会考古学部会発表要旨』九州史学会

(韓文)

安在皓 1996「無文土器時代の集落と変遷」『硯語尹容鎮教授停年退任記念論叢』

安在皓・徐姪男 1990「勒島住居址遺物追報」『伽耶通信』19

安承模 2008a「韓半島 青銅器時代の 作物組成—種子遺体를 中心으로」『湖南考古報』28

安承模 2008b「韓半島先史・古代遺蹟出土作物資料解題」『極東先史古代の穀物3』熊本大学ウリ文化財研究院 2010『馬山網谷里遺跡』學術調査報告第20冊

韓国考古学会 1969「大田槐亭洞一括遺物」『考古学』2

許俊亮 2011「国立慶州博物館所蔵菊隱菟集銅斧 製作 編年的位置」『新羅文物研究』4国立慶州博物館

金元龍 1952「慶州九政里出土金石併用期遺物について」『歴史学報』1

金鐘一2005「景觀考古学の理論的特徴と適用可能性」『景觀の考古学』高麗大学校考古環境研究所第1回国際学術会議

金賢植2009「嶺南地域無文土器時代～三韓時代集落研究の現状と課題」『日韓集落の研究』日韓集落研究会

金載元 1964「扶余・慶州・燕岐出土銅製遺物」『震檀学報』25・26・27 合輯

慶尚大学校博物館 2007『四川芳芝里遺跡』

慶南発展研究院 2005『泗川芳芝里遺跡 I』



慶南考古学研究所 2003『勒島貝塚 A 地区住居跡群』

慶南考古学研究所 2010『金海龜山洞遺跡IX—無文時代集落—』

慶南大学校博物館 2016『密陽琴川里遺跡』慶南大学校博物館學術調査報告書第 28 輯

慶南大学校博物館・釜山大学校博物館 2015『蔚山無去洞玉峴遺跡』慶南大学校博物館學術調査報告書第 27 輯

慶南發展研究院歴史文化研究センター 2009『馬山嶺北網谷里遺蹟 I』調査研究報告第 79 冊

江原文化財研究所 2007『高城松山見里遺跡』

高麗大学校博物館 2004『論山麻田里遺跡』

国立金海博物館2014『金海会峴里貝塚』日帝強占期資料調査報告9輯 国立金海博物館學術調査報告書第13冊

吳江原 2003「東北アジア地域扇形銅斧の型式と時空的様相」『江原考古学報』

湖南文化財研究院 2005『完州葛洞遺蹟』湖南文化財研究院學術調査報告第 46 冊

湖南文化財研究院 2009『完州葛洞遺蹟(Ⅱ)』湖南文化財研究院學術調査報告第 116

崔鍾圭 2002「住居跡の特徴と遺跡の性格」『陝川盈倉里無文時代集落』慶南考古学研究所

崔鍾圭 2010a「龜山洞遺蹟 A2-1 号 支石墓에서의 断想」『金海 龜山洞遺蹟 X 考察編』慶南考古学研究所

崔鍾圭 2010b「龜山洞集落の構造」『金海 龜山洞遺蹟 X 考察編』慶南考古学研究所

三江文化財研究院 2009『金海会峴里貝塚』

昌原大学校博物館 1997『昌原の先史・古代集落』

崇実大学校韓国基督教博物館 2011『鎔範と青銅器』

芮ジウン2011『韓半島 出土 弥生系土器의 研究』嶺南大學校大學院碩士學位論文

全羅北道長水郡・全北大学校博物館 2000『南陽里発掘調査報告書』全北大学校博物館叢書 17

全榮來 1987「錦江流域青銅器文化圏新資料」『馬韓百濟文化研究』10

宋満榮 2001「南韓地方農耕文化形成期集落の構造と変化」『韓国農耕文化と形成』第 25 回 韓国考古学全国大会発表要旨

忠清南道歴史文化研究院 2007『公州水村里遺蹟』遺蹟調査報告 40 冊

池健吉 1974「礼山東西里石棺墓青銅一括遺物」『百濟研究』9

中原文化財研究院 2007『安城盤諸里遺跡』

裴德煥 2000『嶺南地方青銅器時代環濠集落研究』東亜大学校大学院碩士學位論文

裴德煥 2012「青銅器～原三国時代環濠集落の展開様相」『日韓集落の研究』日韓集落研究会

釜山大学校博物館 1995『蔚山檢丹里마울遺跡』釜山大学校博物館研究叢書 17

密陽大学校博物館・東義大学校博物館 2001『蔚山也音洞遺跡』

尹郢映2014「金海 会峴里 甕棺의 年代」『考古廣場』15

嶺南文化財研究院 2002『蔚山川上里聚落遺蹟』嶺南文化財研究院報第 41 冊

李康承 1987「扶余九鳳里出土青銅器一括遺物」『三佛金元龍教授停年退任紀念論叢 I 考古学篇』一志社

李健茂 1994「韓国式銅劍文化の成立—成立背景について」『東アジアの青銅器文化・遺物を通じてみた社会相』文化財管理局 文化財研究所

李炅娥 2005「植物遺体에基礎한 新石器時代 農耕에 대한 觀点의 再檢討」『韓国新石器研究』10

李昌熙 2009「水石里式土器の再検討」『考古廣場』3

李秀鴻2009「蔚山地域の青銅器時代集落について」『日韓先史時代の集落研究』平成21年度 国立歴史民俗博物館国際研究集会

李秀鴻2010「蔚山青銅器文化の性格」『青銅器時代の蔚山太和江文化』蔚山文化財研究院

李盛周1998「韓国の環濠集落」『環濠集落と農耕社会の形成』九州考古学会・嶺南考古学会第3回合同考古学大会

李盛周 2007『青銅器・鉄器時代社会変動論』学研文化社

李相吉 2000『青銅器時代儀礼に関する考古学的研究』大邱暁星カトリック大学校大学院博士學位論文

李亨源 2005「松菊里類型と水石里類型の接触様相」『湖西考古学』12

李亨源 2014「韓半島の初期青銅器文化と初期弥生文化」『農耕社会の成立と展開—弥生時代像の再構築—』国立歴史民俗博物館研究報告書第 185 集

李亨源 2016「忠清西海岸地域ノ粘土帶土器文化流入と文化接變」『湖西考古学』34

李東柱 1999「韓国青銅器時代から三韓時代への集落の形成と変遷—嶺南地方を中心に—」『弥生時代の集落—中・後期を中心として—』第 45 回埋蔵文化財研究集会

李陽珠 2016「金海 会峴里D地区甕棺墓について」『考古広場』18

林炳泰 1987「壺岩出土青銅器溶范에 대하여」『三佛金元龍教授停年退任紀念論叢 I 考古学篇』—志社

(英文)

Johnson, A. W. and T. Earle 1987 The Evolution of Human Societies. From Foraging Group to Agrariann States, Stanford University Press

Murdok, G.P. 1937 'Comparative date on the division of labor by sex', social forece, 15,

## 【初出一覧】

### 第1章第2節

「北部九州における弥生時代のイエとムラ」2009年『石川県埋蔵文化財情報』第21号  
(財)石川県埋蔵文化財センター をもとに再構成

### 第1章第3節

「松菊里型住居の変容過程—筑紫平野北部三国丘陵における住居動態—」(共著)2008年『古文化談叢』  
第58号 古文化研究会 をもとに再構成

### 第2章第2節

「北部九州における弥生時代植物利用研究1—現状と課題の整理—」(共著)2014年『古文化談叢』  
第71集 九州古文化研究会 をもとに再構成

### 第2章第3節

「初期灌漑技術の発展過程—水田稲作開始期における井堰構築技術とその集団—」2005年『九州考古学』  
第80号 九州考古学会 に加筆・修正

### 第3章第1節

「三沢遺跡の評価」2012年『三沢遺跡内容確認調査』小郡市文化財調査報告書第266集に加筆修正

### 第3章第2節

「環濠と集団—筑紫平野北部三国丘陵からみた弥生前期環濠の諸問題—」2010年『古文化談叢』  
第65号(2)九州古文化研究会 に加筆・修正

### 第3章第3節

「弥生時代剥片石器石材の動向～北部九州を中心として～」2012年『菟原Ⅱ』森岡さん還暦記念論集刊  
行会

「弥生時代剥片石器石材の動向2～蛍光X線分析による産地同定からみた剥片石器石材獲得の動向～」  
2016年『考古学は科学か』田中良之先生追悼論文集編集委員会 に加筆・修正

### 第4章第2節

「環有明海地域における弥生時代の日韓交流～交流拠点としての環有明海地域の評価～」2019年  
『公益財団法人鍋島報効会研究助成研究報告書』第9号 に加筆修正

### 第4章第4節

「日韓青銅斧の研究～三沢北中尾遺跡出土銅斧片の意義」2015年『古文化談叢』第74集  
九州古文化研究会 に加筆・修正

### 第5章第1節

「無文土器系土器と集団～三国丘陵における土器生産からみた日韓交流～」2019年『九州考古学』  
第94号 九州考古学会 に加筆修正

### 第6章第2節

「九州の環濠と弥生社会」2015年『環濠論集』環濠論集刊行会 に加筆・修正

### 終 章

「移住と社会変動の関係」2014年『考古学研究60の論点』考古学研究会 をもとに再構成

## あとがき

博士論文の執筆にあたり、指導教員で論文審査の主査を務めていただいた武末純一先生には大変お世話になった。福岡大学院研究生として博士論文執筆に取り組んだ3年間の指導だけでなく、日韓の資料調査を共同で進めさせていただき、資料の見方や考え方、物事に対する姿勢や現代の日韓交流のあり方など様々なご指導を賜った。副査は、則松彰文先生、桃崎祐輔先生、溝口孝司先生に努めていただき、審査にあたって非常に有益なご助言・ご指導を賜った。

また、博士論文準備中に、幸運にも科学研究費基盤（A）「新・日韓交渉の考古学—弥生時代」（研究代表者：武末純一先生）2017～2019年度の研究協力者や島根県古代文化センターテーマ研究『山陰弥生文化の形成過程』（平成29～令和元年度）客員研究員として携わることができたことは私の論文作成において視野の広がりをもたらせた。また、博士論文には、平成28年度科学研究費助成事業奨励研究『地域の特性からみた弥生時代日韓交流モデルの新構築』（16H00026）、平成29年度公益財団法人鍋島報効会研究助成『環有明海地域における弥生時代の日韓交流—交流拠点としての環有明海地域の評価—』、平成30年度科学研究費助成事業奨励研究『発掘調査データによる地域色ある弥生環濠集落の復元画製作と学校教育への活用』（18H00021）の研究助成の成果も含まれている。

その他にも、資料調査等で多くの方のお世話になっている。お世話になった方々はあまりにも多く、すべての方のご芳名は挙げられないが、特に以下の方々には研究に対しご指導とご教示を賜った。記して感謝申し上げる。

赤澤秀則 赤司喜彦 秋山浩三 芥川太朗 朝田公年 阿南翔悟 安在皓 安星姫  
池淵俊一 石川岳彦 石黒立人 石田智子 稲田陽介 今津節生 今福拓哉 林志映  
林尚澤 林雪姫 入江由真 岩橋孝典 岩本真実 上田健太郎 宇野慎敏 江藤彰子  
江野道和 扇崎由 大塚恵治 大津諒太 大庭重信 大庭孝夫 沖田正大 小澤佳憲  
小田富士雄 柿本慈 柏原孝俊 片岡宏二 加藤和歳 亀島重則 蒲原宏行 河野一隆  
姜吉仲 姜秉學 木村鶴雄 金正完 金斗喆 金民善 金武重 金 hyuk-joong 金眩希  
金榮珉 久住愛子 久住猛雄 楠本正士 熊代昌之 隈元俊一 具門慶 栗田正治  
黒木梨絵 黄昌漢 高妻洋成 甲元眞之 高榮敏 小川原励 小林謙一 小林勇作  
後藤直 小南裕一 是田敦 坂井貴志 坂本豊治 坂元雄紀 佐久間大輔 佐々木由香  
佐田茂 佐藤浩司 志賀智史 重藤輝行 設楽博己 七田忠昭 柴尾俊介 柴田昌児  
渋谷格 薛婷 徐始男 白木守 申敬澈 菅波正人 杉本岳史 角南聡一郎 宋永鎮  
高倉洋彰 田尻義了 立石真二 田畑直彦 趙鎮先 趙晟元 長直信 張龍俊 崔恩珠  
塚本映子 鄭仁盛 鄭澄元 鄭大鳳 土井和之 鳥越俊行 中川寧 長崎浩 中島圭  
永田三男 中野充 永野仁 仲原知之 中原幹彦 永松正大 永見秀徳 中村淳磯  
西江幸子 西谷正 西田尚史 二宮満夫 丹羽野裕 任鶴鐘 能登原孝道 朴敬信  
朴辰一 朴程郁 朴方龍 端野晋平 橋本高明 波多江彩香 馬場伸一郎 馬場正弘  
濱田竜彦 林潤也 林田和人 早瀬賢 原田敏照 韓鳳奎 東徹志 比嘉えりか  
東山信治 比佐陽一郎 裴眞晟 平郡達哉 廣木誠 広瀬和雄 福田和浩 藤尾慎一郎

藤島志考 藤原哲 瀧ノ上隆介 古澤義久 古庄秀樹 細川金也 洪漣植 増田浩太  
馬田弘稔 松見裕二 宮井善郎 宮地聡一郎 村上富喜子 村松洋介 本村浩二  
森岡秀人 森村健一 森本幹彦 八木健一郎 安英樹 柳田康雄 山崎純男 山本悦世  
尹邵映 良永芳博 李健茂 李后卿 李濟賢 李尚律 李姪恩 李秀鴻 李亭源 李昌熙  
李東冠 李東憲 李漢祥 李 Hyun-tae 柳基正 梁銀景 若林邦彦 輪内遼 輪田慧  
渡邊隆行 渡辺昌宏 渡部芳久

壱岐市立歴史博物館 出雲市弥生の森ミュージアム（財）大阪府文化財センター  
大阪府立大学 小城市教育委員会 鹿島町歴史資料館 九州歴史資料館  
熊本市教育委員会 熊本博物館 久留米市埋蔵文化財センター 佐賀県教育委員会  
狭山池博物館 島根県古代出雲歴史博物館 島根県古代文化センター  
島根県埋蔵文化財センター 下関市立考古博物館 奈良大学考古学研究室  
福岡市埋蔵文化財センター 福岡大学考古学研究室 埋蔵文化財研究会 峰町歴史資料館  
弥生文化博物館 吉野ヶ里遺跡整理事務所 国立蔚山博物館 国立金海博物館  
慶尚大学校博物館 釜山大学校博物館 釜慶大学校博物館 蔚山文化財研究院